紅い月　青の太陽

もじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅い月　青の太陽

【Ｎコード】
Ｎ０９４０Ｉ

【作者名】
もじ

【あらすじ】
不思議な『力』を持つイリアス族の生き残り・リィンと、美貌の凄腕医師・ラディスの物語。それぞれに過酷な運命を背負う二人が出会い、一つの愛が生まれるまでのお話。意思を貫く強さと行動力。何の為に、この命を使うのか。「ラディスは僕が命をかけて護るよ。あんたが死ぬ時は、僕が死ぬ時だ」
※基本らぶあまです。

000：遠い記憶

「リィンよく聞いて」

幼い頃のリィンが瓦礫の片隅に立って泣いている。
向かい合って背の低いリィンに目線を合わせ、両肩に手を置いている女性。
彼女の目は真剣で、緊張感と強い意志が見てとれる。

二人の周囲には濛々たる煙が流れ、火薬の臭いが充満している。ここ一帯が元は小さな町であったが今ではその跡形もなく、たくさんの瓦礫の山とひびの入った石畳の道でかろうじて想像できる程度だ。

女性のウェーブがかった飴色の艶やかな髪は、砂煙を伴う風に乱れ、服装も泥や埃で汚れて所々破れている。
しかし息を飲む程に整った顔立ちから、隠しようのない気品が立ち上る。すらりと伸びた鼻梁に薄い唇、何よりその瞳が印象的だ。

「母様…こわい」

泣きじゃくり、いやいやを繰り返すリィンの両肩を強く揺さぶり、語気を強め叫ぶ。

「リィン！こっちを見て！母様の目を見なさい！」

肩をびくりと震わせ、涙と鼻水でめちゃくちゃな顔を上向けると、目の前の女性は優しい微笑みを向ける。
怒号と轟音、そして悲鳴が反響する中で彼女は微笑んだ。
ただ、目の前のわが子のために。

「あなたの事は全てゼストとライサに頼んであるわ。何も心配いらない」

「いやだ！母様も一緒に…」

「何があっても強くありなさい。気高い心を、忘れては駄目よ」

「かあさま！」

「そしてこれだけは、絶対に守りなさい。あなたの本当の『力』は、誰にも知られてはいけない。何があってもよ。いい？」

「う…どうして…」

リィンはしゃくりあげる嗚咽のせいで、うまく喋る事が出来ない。

「リィン泣かないで。母様はいつもあなたを見守っているわ」

「かあさま！かあさま！」

固く抱きしめ合う母子の傍らには、若き青年と初老の女性が立っている。女性は声もなく、ただただ涙を流し、青年は鋭い眼光を周囲に向けながら警戒を怠らない。その目は、紅く光っている。

「シルヴィ！もう時間がない！」

「リィン、あなたを守るわ。あなたは私の全て」

我が子を抱きしめたままシルヴィは低く呟き、顔を空へ向ける。

レッドブラウンの瞳が揺らぎはじめ、ゆらゆらと深紅の炎が瞳に宿る。

「さあ行きなさい！ゼスト、リィンとライサを頼みます！」

立ち上る砂煙、びりびりと地鳴りが始まる。

「かあさまー！」

掻き消される声。

遠ざかる記憶。始まりを告げる悲しい記憶。

001：出会い

「すまない…重いだろう」

ゼストは苦しそうに息をして肩を借りている相手を気遣う。彼は大きな体躯にマントを羽織り、膝から崩れ落ちそうになりながら必死に足を運んでいた。脇腹あたりに赤黒く染みが出来ている。どうやら怪我をしているようだ。
かなりの深手で、誰が見ても致命的であると分かる。

「黙って。もうすぐだ。大丈夫だから」

額から大粒の汗を流し前へと歩を進める少年。線の細い彼が、その二まわりもありそうな大柄なゼストを支えている。
彼のどこに、それ程の力があるというのか。

数時間前にイグルに襲われた。
どうやらこの森が縄張りであったらしく、数十匹の群れを作っていた。
守備よく倒していったが、一瞬の不意を突かれゼストがやられた。
『力』を使って倒したが間に合わなかった。

イグルは理性を失くした異形の化け物の総称であり、森や湿地帯に多く生息し好んで人の肉を食らう。元々はどこにでもいる動物であったはずが、イグルに噛まれたり傷を受けた時の毒によって細胞が破壊、または変化を遂げ、同時に脳の一部に障害を引き起こし手に負えぬ化け物と化す。最近ではヒト型のイグルが発見されたという噂もある。
二人を襲ったイグルは野犬の原型を留めぬ程、化け物と化していた。

その変形度合でも毒性が強烈なものであったと判断できる。

あともう少しでこの森を抜けられるところだった。
目的地は目前だったのだ。
少年は悔しさに歯を食いしばる。

突然、左側の緑の茂みが音を立てた。その茂みから物凄いスピードで、一匹のイグルが二人目掛けて飛び込んできた。口からは大量の涎が流れている。

「グヴガァァァ！」

小柄な少年はゼストを支えたまま、瞬時に左を向きイグルを睨みつける。
瞬間、瞳が紅く燃え、異形の怪物は何の抵抗も出来ぬまま吹っ飛んだ。声ひとつあげない。即死だ。

「あともう少しだ」

低く呟きまた一歩前へ。足元がふらつく。さすがに限界が近づいているようだ。

「死なせやしない」

悲痛な呟きも静寂を取り戻した森が、すぐに飲み込んでゆく。

◇◇◇◆

「ラディス様、一旦休憩いたしましょう」

石造りでコの字型をした家。
ここがラディスの仕事場、診療所である。二階の東側に大きな書斎、廊下を挟んで西側に寝室が二部屋。一階には書斎のちょうど下辺りに診察室と応接室があり、長い廊下には片側に長椅子が置かれている。反対側にはトイレや浴室、炊事場と居室が配置され、家の背には緑深い森が一帯を覆う。奥まった正面玄関から伸びる石畳の道は町へと通じている。

「ああ。クレイ、茶を頼む」

ラディスと呼ばれたのは背の高い青年。この家の主だ。書斎での作業に没頭し、すでに三時間が経過していた。
髪を無造作に掻きあげ、椅子に座ったまま机の上に長い足を投げ出す。

「全く、お上のやる事はいちいち意味のないものばかりだな。そのくせ手間だけはかかる。阿呆の所業だ」

ラディスの独り言には返事もせずに、クレイと呼ばれた青年は、手に持っていた書物をてきぱきと本棚にしまいはじめた。彼も歳はラディスと大して変わらない。
動作に無駄がなく、緑がかった髪は目にかからないようきちんとセットされ、服装も折目正しい。ブラウスは丁寧にプレスされており、その整頓された雰囲気が彼の持ち味だとしたら、ラディスはその反対だ。

「少々お待ちください」

クレイが部屋を後にする。
ラディスの机の上は書籍や資料で大きな山ができ、よく磨かれた床

には丸めた紙クズがいくつも落ちている。薄茶色の長めの髪は少々くせがあり、ぼさついていて、身なりには無頓着であるのがうかがえる。

しかしそれでも清潔さを失わないのは、プレスされてあるブラウスのお陰か、生まれ持った美しい容姿のお陰であろう。

品の良い鼻の形とすっきりとした顎のラインは、繊細な雰囲気を作り出し、切れ長の目は男性にしては長めのまつ毛に守られている。

彫刻のようなシンメトリィの美しさ。

積み上げられている本を取り上げ、つまらなそうにページをめくる。

長く繊細な指先でつまみあげるようにするのが彼のくせだ。

ガシャン、と階下で何かが割れる音がした。

ラディスはゆっくりと上体を起こし、机の脇に立てかけてある剣を音もなく鞘から抜きとる。ゴミや書物が散乱している部屋を素早く横切り、階下へ繋がる階段の壁際に、気配を完全に消しそっと立つ。

彼は相当な剣の使い手である。

下には今、クレイしかいない。

今日は昼からの診療はなく、客が来るにしてもあのクレイが食器を割るなんていうドジはしない。

すっと身体の芯が冷え全神経が研ぎ澄まされてゆく。切れ長の目は、鋭く尖り大気の揺らぎさえ見逃さない。

◇◇◆◆

リィンは肩で息をしながらじっと前を睨む。

右手には剣が握られ目の前にいる相手に照準をぴたりと合わせ、狙いを定めている。

足元に割れたカップの破片が散らばり、その先に剣を両手で構えたまま動かないでいる青年。否、動けないでいるようだ。
両手で支えている剣が、まるで重い鉛みたいに、やっと持ち上げているかのよう。重みに耐え兼ねて僅かに震えている。
リィンの瞳は深紅に燃え、相手に向かって『力』を発動しているのが分かる。
しかし、相手の力も驚く程強い。このままでは押さえつけている状態も数分ともたないだろう。リィン自身の疲労もあり全神経を相手に注がなければ、『力』が弾かれてしまう。

「お前が、ラディスか」

相手に問い掛ける。
青年はリィンを睨んだまま何も話さない。
睨み合い。

「こりゃあ、修羅場だなクレイ」

突然、視界の外から場違いな程緊張感のない声が聞こえた。間隔が二ナルグ（＝二メートル）もない場所にいつの間にか人が立っているのだ。近づいてくる気配さえ感じられなかった。
驚いたリィンは刹那、その人物に意識を向ける。一瞬を逃さず、剣を振り上げ『力』を跳ね返したクレイが、その勢いのままリィンに斬りかかった。

「ちっ！」

キィン、と鉄がぶつかり合う音。
間一髪、リィンはクレイの剣先を凌いだ。
剣をぶつからせたまま相手を捩伏せようと双方ともが渾身の力を加

え、ガチガチと剣が鳴く。
リィンはすでに『力』を使えぬほど体力を消耗していたが、それでもかろうじて青年と対等に渡り合っていた。

「お逃げください！」

クレイが目の前の敵を睨んだままラディスに向かって叫ぶ。

「お前がラディスだな！」

目だけをラディスに向け、リィンも声を張り上げる。
ラディスは二人の様子を見つめながら、戦う事や逃げる気すらないといった風情で剣を肩に担いだ。

「お前が、人でもイグルでも金さえ払えば治療するという闇医者だろう！？腕は確かだと聞いている！」

「神の手を持つ男前の天才名医、ぐらい言ってほしいもんだな」

「くっ。そんなことはどうだっていい！！」

ふん、と笑っていたラディスだがふと何かに気付き、端正な眉をひそめる。

「小僧、ひどい臭いだ」

ラディスがそう呟いた瞬間、クレイがはっとしてリィンから離れる。

「何！？」

リィンは肩で息をしながら怒鳴った。

「ふん、お前ではないらしいな。怪我人はどこだ」

その言葉を聞いて、リィンは冷水を浴びせられたようになり、途端に泣きそうになった。

「ゼストが、僕の連れが！」

瞬間、ラディスの表情は鋭くなり、言い放つ。

「案内しろ。クレイ、準備を」

「はい！」

００２：イリアスの涙

ラディスによって部屋に運ばれたゼストは、苦しそうに喘いでいる。
もう息をする体力すら奪われつつあるようだ。
ベッドに彼を横たえた後、ラディスは素早く身支度を整えながらゼストの状態を細かにチェックし、クレイに的確な指示を出してゆく。
リィンはゼストの土気色の顔を見て完全に混乱し、ベッドの脇にしがみつくようにして彼の名を叫び続けていた。

「ゼスト、しっかりしろ！ゼスト！」

すると、リィンの身体が徐々に青白く光り出した。
まるで内側から光を生成し発光しているようで、だんだんとその光も強さを増してゆく。
慌ただしく準備をしていたラディスとクレイは同時に動きを止め、目を見張った。

「ゼスト、死ぬな」

まだ光は強さを増してゆく。ラディスはリィンを見つめたままクレイに指示を出した。

「クレイ、こいつを部屋の外へ出すんだ。このままではまずい事になる」

「し、しかし」

クレイは躊躇する。数分前の出来事がよぎったからだ。また『力』を使われたらたまらない。

「大丈夫だ。この状態の時に『力』は出せない」

それを聞いた瞬間にクレイは動き、ベッドからリィンを引きはがした。軽々と抱え上げ部屋から立ち去る。

ラディスはそれを見届けてからため息をこぼし、呟いた。

「どうりで、イグル化が進んでいないわけだ…」

◇◇◇◆

リィンはクレイによって応接室に移動させられていた。

簡素だがよく磨かれているテーブルには一輪ざしの青い花が活けてある。少しだけ開かれた窓からは、昼下がりのうららかな陽光が差し込んでいた。

小鳥達が口々にさえずり、静かに時が流れてゆく。ここだけを切り取れば平和そのものだ。

その中にあってリィンは椅子に腰をかけるでもなく、その花をじっと見つめ微動だにしない。限界が近いほどに疲労が蓄積しているはずだが、押し寄せる不安と焦りに、神経が高ぶっている状態だった。

短髪で栗色の柔らかそうな髪は思わず触れたくなる程に艶やかで、透き通った白い肌は、まるで陶器のようだ。母親に似て美しい顔立ち。華奢な身体の線は今にも脆く崩れそうで、赤茶の瞳も悲哀の色を滲ませていた。

あの日から、ゼストはリィンにとって父であり母であり、兄弟であった。

リィンの生まれる前から、こまごまと身の回りの世話をしてくれていたライサは、あの日からだんだんと元気をなくし、病に伏してから旅立つまでにそう時間はかからなかった。すでに年老いていたラ

イサには、精神的なショックと旅を続けながら暮らす生活には耐えられなかったのだろう。
取り残されたのは五歳の子供と二十歳そこそこの青年。
ゼストの苦労は筆舌につくせぬものであった。
リィンの母であるシルヴィの、その弟であるゼストは立派に姉の子を育てあげた。ただでさえ肌の色と目の色で差別され、困難も多い道のりであったにも関わらず、だ。
それを痛い程に感じ、感謝しているリィンにとって、やっとこれからゼストに恩返しできるというところだったのだ。

あの傷は相当深かった。わかっている。
だが、助かってほしい。
自分はまだ何も返せていないのだから。
どうか奇跡が起こってほしい。自分は他に、何も望まない。だから、どうか。

このままゼストと会えなくなってしまったら…。

目を固く閉じ握り拳をつくる。

「母様、どうかゼストを守って」

◇◇◆◆

ラディスは難しい表情のまま、ふっと息を吐き桶の水で両手を洗う。
額にうっすらと汗をかいてはいるが、いつも通りの完璧な手際で処置を終えた。
ゼストの脇腹の傷口はきれいに消毒され縫合し、清潔で真新しい包帯に包まれている。今は眠っているようだ。
傍らでは明らかに疲労しているクレイが、ゆっくりとした動作で後

片付けをする。その手を休め、静かに言った。

「…ラディス様、この方は」

ラディスは懐から小型の時計を取り出し、ゼストの脈拍を計る。淡々と状態を観察し、記録をとりながら答えた。

「ああ。俺が伝えてこよう。お前はもう良いから、また呼ぶまで少し休め」

クレイは僅かだが眉間にしわを寄せ、辛そうな表情を見せた。だがそれは一瞬の事で、すぐにいつもの無表情に戻りラディスに一礼をして退室した。

長身の医師は疲労など微塵も感じていないかのように、慣れた手つきで後片付けを済ませてゆく。

外は夕闇が包み始め、駆けてゆく子供たちの足音と歓声が遠ざかる。

「ううう…。こ、ここは…」

見るとゼストが苦しさに顔を歪め、身体を起こそうとしていた。すぐにラディスが身体を支えてやる。

「そのまま寝ていろ。ここは診療所だ」

ゼストは声の聞こえる方へ必死に顔を向けるが、目の焦点は合っていない。どうやらもう目は見えていないようだ。

寝かせようとするラディスの腕を、病人とは思えぬ程の力で掴み、

「あ、あなたが、ラディス・ハイゼルか！」

と、掠れた声で叫ぶ。

「そうだ」

「わ、私はゼストと言う。イリアス族だ。北のローグスの地から…」

「分かっている。とにかく今は安静に…」

「どうか！どうか私の連れを、リィンを頼む！」

ゼストは激しく咳込み、うめき声をあげた。しかしそれでもしがみついた腕は離そうとしない。悲痛なまでの懇願。

「あの子はイリアスの中でも特別なんだ。もし悪い人間にでも見つかってしまったら、ひどい目に遭わされるだろう…。

もう、あなたにしか頼めないのだ。どうかあの子に、人として生きる道を…」

目の見えていないはずのゼストだが、その眼光からは揺るぎのない意思と、燃えるような生命の力が放たれている。まさに命を削りながらの言葉。

ラディスはゆっくりと彼を寝かせ、静かに語りかけた。

「…俺の事をどこで聞いたかは知らないが、あの子供は≪解放の女神≫の子だな。あなたは初めて会った俺をそこまで信頼するというのか？」

「あなたが…本当に、あのラディス・ハイゼルならば…。わ、わたしは全てをあなたに託す」

肩で息をしながらゼストが言葉を絞り出す。
辺りは夕闇から幼い夜の闇へと変わり、水を打ったような静寂が包んだ。ラディスは恐ろしいほど真剣な表情で答える。

「…俺は、何があろうとイリアスと共にある。その誓約の元に、あの子供を引き受けよう」

ゼストの瞳から、一筋の涙が伝う。

「…ありがとう」

そしてまた混沌の眠りについた。

００３：その先の悲しみに

隣室の診察室に続く扉が開いた。
現れたのは長身の男性。ブラウスの袖は肘まで捲り上げられ、医師にしては逞しい両腕がのぞく。黒の上等そうなズボンだが、皺だらけの上、足元はしっかりとした編み上げ靴を履いていた。リィンは瞬時に身構え、窓を背にその人物に向き直る。相手は腕を組み、テーブルを挟んだ向こうから語りかけてきた。

「お前の連れの処置は終わった。今は眠っている。だが、受けた傷はかなり深い」

リィンはラディスを睨みつけるように見つめ、両手を固く握り締めて次の言葉を待つ。

「見たところイグルにやられてから数時間は経過しているだろう。幸いにイグル化しなかったのが救いだが、もう既に、特効薬は効かない。あれが効くのは三十分以内に処方した時に限る。毒は全身に回ってしまっている」

淡々と表情を変えずに話してゆく。彼の瞳は深い海のような青色で、整った顔立ちから冷たい印象を受ける。
リィンは感情を殺し問いかけた。

「ゼストは、助かるのか？」

「次に目覚める時が、最期だ」

目の前が真っ暗になる。

目眩がして、膝から崩れ落ちそうになるのをこらえ、一歩後ずさった。
背中に窓が当たる。
瞬間、リィンは自分がどこに立っているのかさえ分からなくなり、俯いて自分の汚れた靴先を見つめた。
目がかすんで、耳の奥からゴオッという奇妙な音が聞こえる。

ゼストが、死ぬ。
いなくなる。
そんな絶望的な事が、今これから起ころうとしている。

「おい、大丈夫か」

遠くから声が聞こえる。しっかりしなくては。

「…部屋に行きたい」

それだけ告げる。

「これから連れて行くが、ひとつ、絶対に守らなければならない事がある」

リィンはゆるゆると顔をあげ、ラディスを見上げる。

「決して感情を高ぶらせるな。強く願ったりしてもいけない。『力』が相手に影響を及ぼしてしまう恐れがあるからだ。できるか？」

顎を引き頷く。
リィンは訓練を積み、すでに『力』を完璧に制御できるようになっているのだ。

しかしラディスは動かずにじっとリィンを見つめる。少しの間、二人は見つめ合う状態になった。
ラディスの青色の瞳が、心の奥底までを見透かしているような錯覚に陥る。よく見ると青の瞳の奥が黄金色に輝いており、とても珍しい目の色をしていた。まるで真っ青の海の底で揺れる琥珀のようだ。その瞳が納まっている彫像のような綺麗な顔を見つめていると、何故だか心が落ち着いてくる。表情がないせいか人間的な生臭さが感じられず、絵画を鑑賞しているような感覚に似ているのだろう。リィンはもう一度頷き、言った。

「分かった。『力』は絶対に発動させない」

「ついてこい」

◇◇◇◆

リィンを診察室に連れて行き、何かあったら呼ぶようにと言い置いてから二階に上がり、書斎の扉を開く。散らかっていたはずの床は、綺麗に掃除されていた。
ラディスの幅広の机の上は相変わらずの散らかり様だが、その向かいにある応接用のテーブルには茶の用意がされてあり、良い香りが部屋に流れている。
窓と扉以外の壁は天井まで本棚になっており、クレイが梯子を使って本を棚に戻しているところだった。
白のブラウスに黒のベストとズボンは折り目正しく、その雰囲気からも彼の几帳面な性格がうかがえる。

「お疲れ様でございます」

ラディスは頭を掻きながら応接用の椅子に腰かけた。

「後でニコルを呼んでこよう。しばらくはここにいてもらった方が良いな」

クレイが傍につき、カップに飴色の茶を注ぐ。

「私が行って参ります」

「いや、今夜はイグルが出るかもしれないから俺が行こう。しばらくしたら食事を運んでやれ」

「はい。あの…ラディス様、少々よろしいですか」

ラディスは眉を上げクレイに先を促し、長い指でカップの取っ手をとる。淹れたての温かな茶を口へ運んだ。

「あの方々はイリアス族ですね」

「そうだ」

「私は初めてイリアス族に出会いました。紅い瞳と真っ白な肌。それにあの『力』は、本当に不思議でなものでした」

クレイは至極真面目な表情のまま続ける。

「イリアス族はひどく凶暴で残忍な性格だと聞いています。イグルの次に気をつけねばならないと。絶対数は少ないですが極めて危険な種族であり、あの『力』を使って人を傷つけると。管理が必要だと帝国政府は公表していますが…」

刹那逡巡し、意を決したように再び口を開く。

「私にはそう感じられませんでした。確かにあの『力』は恐ろしいものでしたが、あの少年からは殺意を感じませんでしたし、何より理性があります。俄かには信じがたいですが…ラディス様のおっしゃる通りのような気がしてきました」

「やっと分かってきたようだな。垂れ流される情報を鵜呑みにしたらいけない。それは飼い馴らされた阿呆がする事だ。まずは己で事実を正確に捕らえ、そして風評を介さずに判断する事が大切だ」

「はい」

真剣にラディスを見つめ返事をし、視線をテーブルに落とす。

「あの深手を負ったゼストという男性は…」

ラディスは表情を変えずに告げた。

「今夜か明朝がヤマだな」

「…やはり…。しかしラディス様、イグルにあのような傷を受けた人間が、毒に侵されずにイグル化も起こさずに数時間もいられるものなのでしょうか」

「いいや、有り得ない」

「それでは、あれもイリアス族の『力』なのですか？」

「イリアス族の『力』というのは、この中空にある大気の質量を変

化させるものだ。それも感情や意志によって発動される。治癒力や持久力は通常の人間のそれと変わらない。まあ、人間と同じだから、鍛えれば鍛えた分だけ頑丈にもなるだろうが」

「はあ…」

「さあ、今夜は長いぞ。今のうちに仮眠をとっておけ」

「最後にもう一つ、あの少年の身体が光りだした現象は一体何なのですか。あんな事はどの文献にも載っていません」

「いつになく勉強熱心だなクレイよ、残念ながら俺にも分からん。イリアス族についてはただでさえ資料不足だ。今後の要研究課題だな」

そう言って席を立ち、椅子に無造作にかけてあった上着をとる。クレイは腑に落ちない様子ではあるがラディスに向き直り、

「お気をつけて」

と一礼した。

この書斎はかなり大きく、家の中でも一番の広さを占めている。壁一面の書棚にある書籍や文献は、どれも貴重なものばかりであり、その全てが現在のラディスの地盤を固めている知識となっている。いくら豊富な知識を必要とする医師という職業とはいえ、これ程広範囲を網羅する蔵書を持つ人物は、そうはいない。部屋にはラディスの作業机と応接用のテーブルの他に、あと二組のテーブルと椅子が用意されていた。ここへ書物を探しに来る医師仲間も多いからだ。そして今現在もなお、この部屋の書物は増え続けている。

だからこそ、とクレイは思う。

分からないはずはないのだ。あの時の対応はそういうものではなかった…。

それに、あの方は知っているはずだ。ここにあるどの文献よりもイリアス族の事に詳しいのだから。

クレイはそこで考えを中断しテーブルの上の茶器を片づけ始めた。

◇◇◆◆

ランプの灯が入った診察室のベッドの上に、ゼストが静かに眠っている。その傍らにリィンが小さな椅子に座ったまま、張り付くようにして付き添う。うとうととしては目を覚まし、ゼストの様子に変わりはないか確認をして、安堵の溜息をつく。

ゼストの顔色は一時よりもだいぶ良くなってはいたが、やはり青白いままだ。リィンは彼の不精ひげの伸びる顎をそっと撫でる。こんなに弱々しい彼を見るのは初めての事だった。

いつも大きな身体で悠々と前を歩いてくれていて、決して揺らいだりしない、それが彼だと思っていた。幼い頃はよくわがままを言ったり泣きべそをかいてゼストを困らせていたが、今ではそれも懐かしい。今のリィンになら、ゼストが背負ってきた苦労や辛さがどれ程大変なものなのかが分かる。前をゆく彼が、常に不安と強がりの中で、一生懸命にリィンを守り育ててくれていたのだ。

視線をずらすと、頭髪に白髪が混じっているのが見えた。ずいぶんと苦労をかけてしまった、リィンは唇を噛みしめる。

マントや荷物はベッドの脇に置かれ、今はブラウスに緑色のだぼついたベスト、麻のズボンに丈の短い編み上げ靴という格好のリィン

は、より一層小さくなってしまったように見える。
剣は数時間前に食事を運んできたクレイという青年が、安全の為といってどこかへ持って行ってしまった。食事には手をつける気にならずそのままにしていたが、次にやってきた恰幅の良い五十代後半の、気の優しそうな女性が下げてくれた。彼女はニコルといって、この診療所の近くに住んでおり、家事全般をこなす通いの使用人だという。リィンは彼女の温かい笑顔を見てライサを思い出し、ニコルの言葉には素直に返事を返した。ニコルは多くは質問せず、何か食べたいものはあるか、喉は乾いていないか、寒くないかといった類の問いかけだけをした。それに対しリィンは首を左右に振るばかりであった為、ニコルは心配そうな顔をして一度だけリィンの頭をなでた。その時によく干した布団のような、太陽の香りがしてふいに泣きそうになったが、ぐっとこらえてありがとうとだけ告げた。
定期的に背の高い医師がやってきて、ゼストの状態を観察してゆく。その横顔を睨みつけているリィンには目も向けずに、淡々と診察を済ませては部屋を出てゆく。彼がすぐ近くにいるとミントハーブの清涼感のある香りがした。

リィンは心身ともに疲れきっていたが、極度の緊張と不安のせいで、浅い眠りと覚醒の間を行き来していた。
断片的な夢ばかり見る。母の面影、ゼストと旅をしながら過ごした日々、その先々で出会った人、特に数少ない同じイリアス族の人々の事が蘇る。この世界でのイリアス族の扱われ方は相変わらずひどいものであった。化け物と呼ばれ忌み嫌われ、しかしひっそりと平和を願いながら健気に生活するイリアス族の人々…。
リィンは学問を習った事はなかったが、時折ゼストや旅先で出会った人に読み書きを習っていた。何より本を読む事が好きだった。そしてゼストからこの世界の成り立ちと、イリアス族の壮絶な歴史を教わったのだ。

００４：迫害の歴史

この世界には様々な種族が存在していて、自分達のいる大陸がルキリア族が統治するルキリア国であり、その他にザイナスとロガートという大国がある。ルキリア国の中にあるレーヌという独立国を含めると、三つの国と一つの小国から成り立っている。
その中で最も広くを支配し、最も力のある血族がルキリア族である。

イリアス族は、およそ百年前にルキリア族によって滅ぼされた種族だ。

赤茶色の瞳と陶器のような白い肌はイリアスの特長であり、その容姿と特殊な『力』を恐れ妬んだ当時の権力者であったルキリアが、イリアスの根も葉も無い悪評を流していった。そうして民衆の疑心と恐怖を煽り、やがて徐々に悪意を増大させていったのだ。
イリアスは元々争い事を好まず、理知的で温和な性格であったが、自らと仲間達を守る為に立ち上がった。
そしてイリアス対、他種族という圧倒的に不利な図式、ルキリアが画策した通りの形で戦争が始まり、イリアスは滅ぼされた。その後ルキリアが世界を統治し、現在も国王とその皇族、貴族として輝かしい地位と権力を欲しいままにしている。
一方生き残ったごく僅かなイリアスは、つい十八年前まで奴隷としての暮らしを強いられていた。ルキリアが開発した、イリアスの『力』を無効化させる特殊な鉱物で作った首輪を嵌められ、一カ所に集められ強制労働させられていたのだ。

その暗黒の時代に終止符を打ったのが、リィンの父と母を中心とした若きイリアスの青年達であった。

強く優しく明るかった母。リィンにとって一番の尊敬する人であり愛すべき人。それはまた他のイリアス族にとっても同じ事である。今なお解放の女神として語り継がれている。
そして父のティルガも偉大な人物であったと、ゼストが眩しそうに語っていたのを思い出す。二人は皆の憧れであったと。

そのゼストも、リィンの目の前で弱々しい呼吸をしながら眠っている。父のティルガはその命をもって自由への扉を開き、母シルヴィが人々をその扉の先へ導いた。しかし母はその後に帝国政府から罪人の汚名を着せられ、あの襲撃の日以来どうなったのかさえ分かっていない。
そしてこの現在でも、奴隷であった過去にこだわり、人々は心優しきイリアス族を拒絶し続けているのだ。

許せない。
レーヌ族もアルム族も、この国にいて、イリアス族の迫害に加担している者達。見て見ぬふりをする者達。

何よりも憎いのは帝国政府であり、ルキリア皇族だ。

ゼストや他のイリアス族は決して復讐は望んでいなかった。そこからは何も生まれず、更なる深い悲しみが待つだけだから、と。しかしリィンは心の奥底で、黒い憎しみの炎を燃やし続けていたのだ。
何故、種族の違いだけで、こうも迫害されなければならないのか。
一体何をしたというのか。何もしなくても罪人扱いされるイリアス族。これを許して良いはずがないのだ。
全ては帝国政府の出した警戒令が元凶である。

奴隷解放後に人権を得たはずのイリアス族であったが、帝国政府がイリアス族は凶暴で危険な種族であるという警戒令を発布し、事あ

るごとに人々を煽動してきたのだ。その帝国政府の管轄下で帝国軍が我がもの顔で横行している。そしてその全ての権力を握るのがルキリア国王と、その皇族達である。百年たった今でも図式は少しも変っていないではないか。

許さない。僕の愛する人達を死に追いやったルキリアを。

絶対に許さない。

００５：永遠の別れ

空が白み始めた頃、ゼストはうっすらと目を開けた。
傍らで見守っていたリィンが声をかける。

「ゼスト。僕が分かる？」

リィンの問いかけに僅かに顔を傾け、

「ああ。リィン、そこにいるね」

と微笑む。穏やかな笑顔だった。その笑顔を見たリィンは、不安で心が張り裂けそうになる。急いでゼストの手を握り力を込めた。

「もう大丈夫だよ。あの闇医者のとこに着いたんだ。栄養のあるものたくさん食べて寝てれば、きっと良くなる」

ゼストはリィンの頭をなでながらゆるゆると首を振った。

「リィン、私はもう旅立たなくては。君を一人残してゆくのを、どうか許してくれ」

「だめだ！そんなの、ないよ」

隣の応接室で待機していたラディスとクレイがそっと部屋の隅に立つ。

「リィン。私の願いは、君がただ、人として人の中で暮らしてゆく事だよ。それが幸せなんだ」

「ゼスト…。僕は！」

声が震え、こらえていた涙が頬を伝う。幾筋も涙が流れてゆく。

「決して、憎んではいけないよ。人を傷つけては、いけない」

リィンの頭を優しくなでるその手は、慈愛に満ちている。

「…ありがとうリィン。君のおかげで、私の人生は意味のあるものになった。父さんと母さんと同じように、私も君を愛しているよ」

「待ってよ、僕は何も、なんにもゼストに返してあげられないじゃないか！いかないでよ！」

泣きながらゼストの胸にしがみつく。

いかないで。もう誰も、失いたくないんだ。

「…リィン、子守唄をうたってくれないか…。リィンの歌が好きなんだ」

朝日が昇り始め、窓からオレンジ色の光が差し込む。目と鼻を真っ赤にしたリィンが、ゼストを見つめる。促すようにゼストは頷いた。リィンは数回震えながら深呼吸をし、掠れた声で歌い始める。

「か…ぜのこ…えを」

ゼストは微笑んだまま、聞き入るようにゆっくりと瞳を閉じた。

風の声をきいて
道しるべはこころの中に
かなたの星くず
あかね色のそら
きみへのあいを
抱いて静かに目をとじよう
内なる星にきいて
あすへのゆめはこの手に
あおい海原
とうめいな風
とおいあの子へ
このうたがきっと届くよう
きみへのあいを
抱いて静かに目をとじよう

小鳥がさえずりはじめ、朝日が柔らかく二人を包んでいる。
新しい一日の始まり。一人の命の終わり。

「…ゼスト」

まるで眠っているようにしか見えない。しかしもう二度と、その目が開かれる事はないのだ。

いってしまった。

僕は、一人になった。

もう誰も、
この世界で僕を知っていてくれる人はいない。

すっと暗黒の幕が下り、暗闇に取り残される冷たい感覚。今まで保っていた何かがぷっつりと途切れた音を、聞いたような気がした。

◇◇◇◆

リィンはベッドの脇からゆらりと立ち上がり、低く呟いた。

「…ルキリア」

瞬間、クレイははっとして身構えたが、それよりも早くリィンの『力』はラディスを壁へ突き飛ばしていた。激しく打ちつけられ、ラディスがその場へ崩れ落ちる。

「ラディス様！」

クレイが叫んでラディスの方へ振り返ろうとした時、全身に瓦礫が落ちてきたような衝撃を受ける。とてつもない重圧に片膝をついて何とか耐えようとするが、うまくいかない。

何という圧倒的な『力』の強さ。

部屋全体の重力が変化し窓ガラスが一斉に割れた。クレイは床に腹這いになったまま、苦しげにリィンを見上げる。盛大な音を立ててバラバラとガラス片が辺りに散らばり、部屋が生き物のようにわなないている。

このか細い少年から、これ程凶暴な『力』が放たれているとは思いもよらない。しかし、その目は深紅に燃え上がり、握り締めた両手の甲には、血管が浮き出ている。

窓ガラスの割れた音を聞きつけて、パタパタとニコルが近付いてくる気配をリィンは瞬時に察知した。部屋の出入り口をぐっと睨みつけ、『力』を使い、勢い良く扉を閉め鍵をかける。

「先生、どうなすったんですか！どうしたの！」

ニコルが外側から扉をどんどんと叩いている。

それを無視し、リィンは悲しみと憎しみに支配されたままゆっくりとラディスに近づく。

「…なるほど。ものすごい威力だ」

ラディスが脇にあるチェストに片腕をつき、立ち上がろうとしている。リィンは彼を睨みつけ、更に『力』を強めた。どん、と重圧がまた加わりラディスの長身が揺れるが、またゆっくりと立ち上がる。

リィンはラディスの目の前に立ちはだかり、憎々しげに言った。

「お前は、ルキリア族だ。その青い目が証拠だ。それに…。それに、その≪黄金の青い目≫はルキリア皇族の正統な血縁の者にしか現れない。お前は、ルキリア皇族だ！」

「や、やめろ。この方は…」

クレイの訴えはリィンの耳には届かない。
ラディスはリィンと対峙したまま、表情を変えずに言った。

「それがどうした」

その言葉を聞いて、リィンは憎しみに表情を歪めた。その瞬間ラディスの腕が素早く動き、正確にリィンの胸倉を掴んでそのまま締め上げた。

「ぐっ」

『力』がぱったりと止んだ。クレイは床に倒れたまま咳き込む。

「もう少し冷静になったらどうだ。もう『力』を使う体力も残っていないだろうに。命を縮めるだけだ」

「…う」

リィンは胸倉を締め上げられ、ひざまづくような格好になるが、それでもラディスを睨み続けている。
やっと咳が治まりクレイが立ち上がろうとしたその瞬間、視界の隅で銀色に光るものが見えた。全身が凍りつき、咄嗟に怒鳴り声をあ

げる。

「やめろ！」

緑のベストに隠し持っていた短剣を、ラディスに向かって突き刺した。リィンの右手に嫌な感触が広がる。柔らかいのに、ずぐり、と抵抗のある感触。人の皮膚を切り裂き肉を突き破る感触。その震え上がるような感触に、やっとリィンは我に返った。

目の前にあの、美しい顔が見える。眉間にしわが寄り、額には汗が浮かんでいる。少し長めでゆるくくせのある薄茶色の髪が鼻先を掠め、視界から消えた。

「ラディス様！」

震える右手を見ると短剣が握られ、それが赤く染まっている。足元で人が倒れて床が血で汚れて…。

呆然と立ち尽くすリィンに、クレイが背後から手刀を加え気絶させた。急いで近場にあったシーツを鷲掴み、ラディスを抱き起こす。

「…いてぇな、やっぱり」

脇腹を押えて苦笑するラディスに、クレイは本気で怒りながら言い放つ。

「何故、避けなかったんです！」

「大丈夫だ、急所は外してある」

「そういう問題じゃありませんよ！」

ラディスは苦痛の表情のまま目を閉じた。クレイは急いで傷口にシーツを押し当て止血をする。そこへニコルが合鍵を使い、部屋の扉を開けて入ってきた。

割れた窓ガラスに血だまりに、倒れたリィン、怪我をしているラディス。

一瞬で血の気が引く。

「な、な、何なの、これは！先生！クレイ！なんなのっ！」

００６：町はずれの診療所

目が覚めた時、リィンは見知らぬ部屋のベッドに寝かされていた。
上体を起こし辺りを見回す。日が高い。昼過ぎくらいだろうか。部屋の中はリィンが寝ていた大きなベッド、作り付けのテーブルに椅子が一脚、壁側には大きな本棚にチェストやクロゼット、姿鏡が並んでいた。豪華ではないが、品の良いものが置かれており、ベッドも柔らかく心地が良い。開け放たれた窓から優しい風が吹き込んできた。

リィンは声もなく泣いていた。

ゼストが死んでしまった。
自分は、人を殺した。

悲しみと憎しみに捕われ、人を刺し殺した。

いくらあの目を持った皇族だといっても、あの医者はイリアス族と知りながら治療をしてくれたのだ。
それにここへ来る事を決めたのはゼストだった。
それまではいくらリィンがせがんでも、この地、帝都ベイルナグルには近づこうともしなかったのに。

殺してしまった、人を。

あの嫌な感触が蘇る。

取り返しのつかない事をしてしまった。あれ程、ゼストに人を傷つけてはいけないと言われていたのに…。

その時、部屋の扉が開いて誰かが入ってきた。その人物を見て、リィンは大きな瞳を更に大きく見開いて絶句した。

「ゆ、ゆうれ…」

「勝手に殺すな」

ブラウスに黒のズボンに編み上げ靴、丈の長い上着を着ているが、袖は腕まで捲り上げられている。確かにリィンが腹あたりを刺したはずだが、弱々しい雰囲気を微塵も感じさせない、飄々とした態度でラディスがそこに立っていた。

「生きて…？」

「当たり前だ。あの程度じゃ人は死なない」

良かった、と胸をなで下ろし安堵するのも束の間、リィンはまた身体を硬直させた。ラディスが近付いてくる。

「く、くるな」

リィンは相手を拒絶しようと睨みつけた。しかし何も起こらない。リィンは混乱し驚愕の表情を顔に張り付け、自らの両手を見つめる。いつもと違う、しかしそれが何故だか分からない。『力』が出ない。

「どうして…」

「精神的な強いショックと極度の疲労のせいだ。一時的なものだから安心しろ」

思いのほか近くで声がして顔を上げると、すぐ傍にラディスが立っていた。リィンが状況が飲み込めず呆然としている間にも、ラディスは懐から小型の時計を取り出して、空いている手でリィンのその細い腕をとり脈を測る。顎をつかみ口を開かせ見分し、首に指を押し当ててゆく。

「まあだいたい健康だ。もう丸三日も寝っぱなしだったからなあ」

そう言いながら彼はリィンの頬に触れ、流れた涙を拭った。

「三日も…」

ラディスは上着のポケットから麻で編み上げられた小包みを取り出し、リィンの手の平に乗せた。長方形でリィンの両手と同じくらいの大きさ。それほど重さはなく、ボタンがついていて今は閉じられている。中に何かが入っているようだ。

「今の時期は一日でも置いておくと大変な事になるから。申し訳ないが、弔わせてもらった」

その言葉にリィンはどきりとする。両手に収まる程の小包みをじっと見つめる。ボタンで留められた口を開き、ゆっくり傾けると、するりと中身が姿をあらわした。銀に輝くピアスと、コルクで蓋がされてある小瓶。小瓶の中には真っ白の欠片が入っている。どちらも、ゼストのものだった。

「他の遺品はそこのクロゼットの上だ。すまなかったな」

そう言ってラディスは俯いたままのリィンの頭に手を置く。リィン

はぽとりと涙を落して首を振った。

「いいんだ。これで十分だ。ありがとう。色々、ごめん…」

ラディスはふっと短く息を吐き、歩き出す。

「あ、あの」

身体は大丈夫なのだろうか。

自分が傷つけてしまった相手に、何と声をかければ良いか逡巡している間に、長身の医師はどんどん遠ざかってゆく。

「着替えたら下の居室に行け。ニコルがいるから何か食わせてもらえるだろう」

扉を半分開いたところで思いついたように振り返り、ラディスが言った。

「それと言っておくが着替えは俺がした。気づいて暴れられたら大変だからな。安心しろよ、俺は医者だ。裸なんて見慣れてる」

そこまでぼんやりと聞いていたリィンははっとして、急いで自分の身体を見た。いつものブラウスと緑のベストではなく、見慣れないものを着せられていた。前合わせで羽織る丈の長いローブのようなもので、腰に紐がついていて、へそのあたりで結ばれている。常に上半身に巻きつけていた布もなければ、ズボンも履いていない。リィンはようやく自分の姿を確認し、同時に顔を真っ赤にして叫んだ。

「うわあっ」

ばたん、と扉が閉じられた。

◇◇◇◆

着替えを済ませ階下へ降りる。正面にある玄関は開け放たれ、人の話し声や子供の歓声でざわついていた。向かって右側の奥へ続く通路には、壁際に長椅子が並べられ、そこに様々な年齢層の、多種多様な種族の人々が座っている。労働者風の男性もいれば、小さな子をあやす母親や、身なりからして富裕層であろう女性も澄ました顔をして、しかし同じ長椅子に座っている。

廊下をパタパタと小さな子供が走ってゆく。それを注意する母親の声。誰もリィンには気づいていないようだ。

「ポラントさーん。お入りくだせえ」

北方訛りの女性の声が響く。

廊下の先に扉が一つ、その右側にも扉が見える。正面の扉が開き、そこから灰色の髪を三つ編みに結わえ、右肩に垂らした女性が顔をのぞかせた。あの扉の先には確か診察室があったはずだ。という事は、ここに溢れる人々はあの医者の診察を受けにやって来ているのだ。リィンは驚いていた。旅先で聞いた話では、闇医者といった言葉が合っているような印象であったからだ。

あらゆる人種の診察をし、時にはイグルに襲われた人間も診るという医者なんて、どこを探しても見つからない。特にイリアス族では診察を拒否される事の方が多いし、他の種族でもその人物が就く職業や身分によっても差別される事が当たり前なのだ。それ故医者と名乗る者は偉ぶって横柄で、その割には医術に長けていない者ばかりであると言って良い。だからこそどんな人間でも診ると聞いた時には、いかがわしい人物を想像したのだった。それがこの実情を見て驚いた。なんと、堂々と診療している。しかもあらゆる人種の、

身分も違う人々が皆平等に順番待ちをしているのだ。目を疑うような光景である。

イリアス族の事にも詳しいと聞いて、ゼストは会ってみたいと言っていたっけ。

リィンは皆に気づかれないように、そっと反対側の廊下を歩き、目の前の扉を開いた。すると美味しそうな匂いが部屋中に満ちており、途端に今にも倒れそうな程の空腹に襲われた。左側の台所でニコルが振り返り笑顔を向けてきた。

「まあ、よく眠ってたわねえ！まずは腹ごしらえね。さあ席についてちょうだいな。もう用意は出来てるから」

右側には大きなテーブル席に色々な料理が並んでいた。遠慮がちにリィンが一番端の席に着くと、湯気の立っている温かなスープを運んできてくれた。

「どれも消化に良いものばかりだから大丈夫だと思うけど、あんまりたくさん食べたらいけないよ。ちょっとずつね」

「ありがとう。どれも美味しそうだ」

にこにこと微笑むニコルを見て、リィンも自然と笑顔になる。こんなにしてもらって申し訳ないと思いながら、遠慮して手をつけずにいたら余計に悪いと感じ、とりあえず目の前のスープを口へ運んだ。とろみのあるスープには色とりどりの野菜が入っており、どれも柔らかく火が通っている。野菜のうま味が溶け出したそのスープの味は、今までリィンが食べてきたもののどれよりも優しく、美味しかった。

「美味しい…」

「ニコル自慢の野菜スープだからね。それに栄養満点なのよ」

次々と口へ運ぶ。身体が生き返ってくるような感じがして、同時に瞳から涙があふれた。リィンはそれでも、涙を手で拭いながらスープを口へ運ぶ。

「まあまあ、泣くほど美味しいのかい」

ニコルはそう言いながら、リィンの背中をいたわるように優しくさすった。

００７：新たな仲間

日は既に傾き、星が瞬き始めた頃にようやく最後の患者を送り出した。

「まったく、ここは病人だらけだな。いっそ少し天に召されてくれたらありがたいんだが」

言いながらラディスは深く椅子に沈み込んだ。珍しく疲労の色を滲ませている。彼の憎まれ口には意に介さず、クレイは一直線にラディスのいる机へ近づいてきて強い口調で訴えた。

「あとは私がやっておきます。どうかもうお休みください。いくら急所を外しているとはいえ、傷は浅いものではないのですから」

ラディスはじっと痛みに耐えているかのように目を閉じ、片手をひらひらと振った。

「それに、私は…。賛成しかねます。あの少年をここへ置くなど。…危険すぎます」

「そうは言ってもな。路頭に迷わすわけにもいかない。俺はイリアス族を裏切れないんでな」

尚も心配そうにラディスを見下ろすクレイ。

「その事情は重々承知しております。ですが…何もここでなくても。ここへは色々な方が出入りしますし、ただでさえ帝国政府から睨まれているのに。何より、アルスレイン殿とその妹君もいらっしゃる

のですよ」

「だからだよ」

「え…」

ラディスは静かに目を開く。形の良い鼻梁と引き締まった顎のラインには整った美しさを感じさせるが、瞳には強い意志が宿る。精悍な表情でじっと前を見据えている。

「あいつが生きていく為には避けて通らない方が良いだろう。アルスレインにとっても大事な事だ」

「し、しかし。またあの少年が取り乱したりでもしたら…」

「そうならないように俺が一肌脱いだんだ」

「は？」

クレイは驚きのあまりラディスを凝視した。目の前のラディスはクレイに視線を向け、にやりと笑う。

「あ、あなたという人は。全く、これでは命がいくつあっても足りません」

「心配性だなクレイ、最近特に老けこんだんじゃないか？」

くくく、と笑った。クレイは呆れながらも、このラディスという青年の精神力と行動力にあらためて敬服した。クレイとは年でいえば三歳しか違わないのだが、遥か先を歩き、遠い未来を見つめている

ようだ。

「さあもうひと仕事だ。チェムカを呼んできてくれ」

◇◇◇◆

ニコルに送り出され長い廊下を歩き、リィンは診察室の扉をノックした。はあい、と遠くの方で女性の声。おそるおそる扉を開け、整頓された部屋の中に入る。灯は暗く入っているが、この部屋には誰もいない。右側にベッドが二つあり、その先に応接室に通じる扉が見える。目の前の診察机の先にもう一つ扉があり、そこから光がもれていた。奥へ進み、その扉を開くと、内部は雑然とした部屋だった。様々な形のガラス瓶が置かれ、見たことのない機具が並んでいる。この部屋には天井付近に小さな明かりとり用の窓しかなく、あとは通気口だけで壁一面が棚になっており、そこにもリィンには訳の分からないものがずらりと並んでいた。長方形の大きな作業机には資料と思しき紙の束が積み上げられ、その奥の椅子にラディスが座っている。脇にはクレイが立ち、背後の棚から古ぼけた本を引き出していた。すぐ手前に灰色の髪を三つ編みにした女性がいて、リィンを見つけて驚いた声をあげる。

「うわあ、ほんとだ。あたす、イリアス族ってえの初めて見ただわ」

素直な言葉である。リィンは居心地の悪いのをこらえ、ラディスに向かって声をかけた。

「あの、大変お世話になって、ご迷惑もおかけして本当にすみませんでした。その、傷、大丈夫ですか」

ラディスはやっと顔をあげリィンを見て言った。

「風呂にも入ったようだな。あんまりにも薄汚れてみすぼらしかったからな」

「そったらことないわ。なんつう白い肌だろ。ほお」

手前にいた女性が無遠慮にリィンに近付いて見つめている。リィンよりも少し背が低く、思っていたよりも若く感じられる。白のブラウスに腰のしぼった臙脂色のスカート、底がフラットな靴を履いている。顔にはそばかすが散らばり低い鼻。洗練された雰囲気はないが、愛嬌のある顔立ちをしている。触れようと伸ばされた手に怯えて、リィンは後ずさった。

見かねたクレイが咳ばらいをして彼女を止める。

「あ！こりゃ失礼しますた。なんか、すべすべして気持ち良さそうだったもんで」

リィンは奥に座るラディスに聞こえるように声をあげた。すでに彼は机の上の紙束に視線を戻している。

「もう僕は明日にでもここを発つ。これ以上迷惑はかけられない」

「そうか。クレイ、請求書を」

「はい」

リィンはひやりとする。お金…。

たしか、ゼストの荷物の中に財布があった。多分三千フィルはあったはずだ。紙切れがクレイの手元から手前の女性へと手渡される。

「チェムカさん、金額をお願いします」

「ええと、治療費、投薬代、部屋の修理費、葬祭費もろもろで…しめて二十六万五千七十フィルだす」

「ええっ。ちょ、ちょっと高すぎるんじゃ…」

「馬鹿言うな。こっちは慈善事業でやってんじゃないんだぜ。これでも考慮してやった方だ」

リィンは呆然とラディスを見つめた。なんていう奴。

「まあその分じゃ金なんて大して持ってないだろう。足りない分は働いて返してもらうからそのつもりで。食事と寝床は確保してやる」

「そんな！僕は、ここにはもう…」

ラディスがぎろりと睨みつける。何とも言えない迫力があり、リィンは口をつぐんだ。

「本当に、これだけで済んで安いものです。本来であれば帝国軍に犯罪者として明け渡されても仕方ないんですから」

クレイがさらりととどめを刺す。

「それは、本当に、申し訳なかったと思っている。あの時は自分も混乱してつい、その目の色に反応してしまった…。その償いはするつもりだ」

リィンは半ば諦めて自分の処遇を相手にゆだねた。考えてみれば相手の意見は正しいのだから仕方がない。

「でも…」

だからこそ、ここにいてはいけないのではないか。

「だがなあ、こんなガキに何をさせるか。『力』も出せないんじゃ当分用心棒にもならん」

「そうですねえ」

リィンに構わず話は進んでいく。まあ、ガキがやれる仕事なんてたかが知れてるしなあ。

「…僕はガキじゃない。年だってもう十八だ」

「え？」

リィン以外の三人が揃って声をあげた。皆それぞれ驚きの表情。

「うわあ、あたすとおない年！」

「おいおい、十四，五の子供じゃないのか」

「ええ、私もてっきり」

リィンは顔を真っ赤にして俯く。

「と、年の事はもう良いだろ。何でもするからっ…」

それを聞いてラディスが上手に口角だけを持ち上げて微笑んだ。

「素晴らしい心がけだ。そうそう、イリアス族の資料がまだまだ足りなかったんだ」

「…え？」

「まずは採血だな」

「なに…」

「まさかこんなに良い状態の研究材料が手に入るなんてなあ、刺されてみるもんだ」

「ちょっと…」

そうしてリィンはここで当分の間、ただ働きと実験台にされる事になった。

◇◇◆◆

そのままあの研究室のような部屋で血をとられ、それから皆で賑やかに夕食を済ませた。リィンにとって数人でとる食事は、今まで滅多になかった事なので戸惑いを隠せなかったが、ニコルやチェムカが何かと世話をやいてくれた。食事中も二人はよく喋り、よく食べた。ラディスも何かと会話に入って話をするが、クレイは黙々と食事をすませ、自分の使った食器を手にすぐに席を立ってしまった。それからニコルを手伝って後片付けをしている間に、クレイがチェムカを家へ送り届けると言って二人は部屋を出た。聞くとこの家に

は通常ラディスとクレイしか住んでおらず、ニコルはここ数日間寝泊まりをしているだけで、そのうちに自宅から通うのだと言う。部屋数も必要最低限しか用意されておらず、診療所としても入院設備等がない為、入院を必要とする患者は提携している別の大きな病院へ搬送されるようになっているらしい。

「さあて、明日からは色々手伝ってもらうからねえ。ちょうど男手も欲しかったとこなのよ」

太めの身体を反らせながらニコルが言った。

「うん」

テーブルを拭いていたリィンは、ニコルを振り返って微笑む。

「まあまあ。でもこんなに細いんじゃあ、あんまり重いもの持たせるのも可哀そうだわね」

と言って、リィンの頬を両手で包み込んだ。温かい体温が伝わってくる。

「大丈夫だ。僕はこう見えても案外力持ちだよ」

「リィン、ここにいなさいな。きっとリィンにとって良い経験になる事がたっくさんあるから。それに、うちの先生はとても立派な人だから」

ニコルは柔和な表情を浮かべている。突然の事でリィンはきょとんとするが、少し複雑な心境であった。

ラディスはすでにまた診察室の奥の部屋へ引っこんでいた。

先程その部屋で言われた事を思い出す。

ここで暮している間は、復讐なんていう馬鹿な考えを持たない事、お前が解放の女神と謳われたシルヴィの子供であるのを伏せておく事。最低でもこの二つは必ず守れよ。何より、そんな事を考えている暇はないぞ。借金返済に精を出す事だ。

あの医者は、何故母様の事を知っていて、僕がその子供であるとわかったのだろう…。

何にせよ、今はここに置いてもらうしかない。この先どうするのかも決めあぐねているのだから。

００８：帝都ベイルナグル

翌日からリィンは目まぐるしい日々に追われる事となった。
ニコルの仕事は料理に洗濯や掃除といったものだが、これほどの重労働を今まで一人でこなしていたのかと思うと、リィンはニコルを尊敬せざるを得なかった。何しろ洗濯といっても、その洗い物の量も大層なものだ。朝から昼過ぎまでが忙しさのピークで、昼時は特に、他の三人がかわるがわる食事をとりに来るので、その対応だけで手一杯になるほどだ。最初にチェムカがやってきて、あれやこれや言いながら食事をとる。彼女は診療所で受付を任されていた。入れ替わりにクレイが席につき、静かに食事を済ませてすぐに席を立つ。彼は全般にわたってラディスの助手を務めているそうだが、いつも身なりや動作がきちんとしていて隙のない印象。最後にラディスが足早にやってきて、あっという間に食事を済ませ、二、三言ニコルと会話を交わして部屋を出てゆく。診療時間中はいつもこうなのだという。
だいたい三日間は終日診療をしていて、その翌日から三日間はここでの診療を昼過ぎに切り上げ、ラディスは往診などで外出したり、書斎に籠ったり研究室で仕事をしたりしている。彼は他に別の診療所でも請われて出張診療をし、薬品の開発に力を注ぐ研究施設にも席を置いているらしい。
ニコルとチェムカは昼過ぎに診療が終わった日は、それぞれの仕事を済ませて日の明るいうちに帰宅をする。その次の日に完全な休診日を迎えるわけだが、ラディスとクレイには何かしらの仕事がある状態が常だという。
この家の主でありニコルやチェムカの雇い主であるラディスは、まだ二十六歳だという。リィンは少なからず驚いた。彼の飄々とした態度からは、もっと年上の印象を受けるからだ。

今日は昼過ぎから休診になるので、そうしたら商店街へ買い出しに行こうとニコルが言った。リィンは嬉しい反面、不安もあった。これほど大きな町に滞在した事は少ないし、あったとしても今までは人目を避けて生活をしていたからだ。

ベイルナグルという都市は、ルキリア国の首都であり、この国を統治する王とその皇族が住む宮殿のある都市だ。商売や人の流れの集中する場所であり、この帝都で政治が行われ、帝国政府や帝国軍の人々も多く生活している。しかし、ルキリア国で一番栄えているこの町ならば様々な人種がいて当然だ。現にこの診療所に訪れる人も多様で、何族か分からない人だっているのだから。

この世界の大半はアルム族だが、今は混血種も数多い。近頃はそういった種族で区別する考え方は旧時代のものとなってきてはいる。ただ、ルキリア族とイリアス族のみにおいては、いまだに別の人間と見る人々も少なくない。リィンがここで働き出した初日から、診療所に訪れる人達の反応はリィンにとっては辛いものであった。リィンの白い肌と赤茶の瞳を見て、まず驚く。それから嫌悪感を顔に出し隠そうともしない貴族の女性や、無視をする人、リィンに罵声を浴びせる男性もいた。しかしリィンはニコルに言われた言いつけを守ってどんな相手にも、素直に挨拶を交わした。顔を真っ赤にして怒っても、幸か不幸か、今は『力』が使えない。ここで働くしかないのだ。昨日もそうだった。

＊

洗濯物を持って二階から降りてきた時に、階下で背の低い老人とばったり出くわしてしまった。老人は目を丸く見開いてリィンを見上げたまま、長い廊下中に響き渡る大声を上げた。

「うわあ。イリアスがおる！先生、大変だあ。イリアス族がおるぞ

お！」

廊下は一瞬で静まり返る。長椅子に座っている人々は無言で老人とリィンを見つめている。リィンは突然大声を出され、硬直してしまって動けない。その時、廊下の先の扉の向こう側から、老人の大声に負けない程の、ラディスの声が響いた。

「それがどうしたあ！」

老人はゆっくりと顔を診察室の方に向け

「それもそうだな」

と一言呟いて、ひょこひょこと歩いていってしまった。その一部始終を見ていた人々の間から笑い声が起こり、賑やかなお喋りが再開される。リィンはほっと胸をなで下ろした。

「ロムじいさんは、いつもああだな」

「まったく人騒がせなじいさんだ」

「しかし先生の言ってる事は正しいわ」

「おおい、あんた。最近先生の所で働きはじめたんだろう。先生の知り合いじゃあ、悪いイリアス族じゃないだろうさ」

リィンはぺこりと頭を下げ、その場から急いで立ち去ったのだった。

＊

「さて、行こうかね」

見るとニコルが身支度を整え終っていた。とはいっても、いつものブラウスに深緑のロングスカート、クリーム色の前掛けという格好は変わらない。まとめ上げた白髪交じりの髪をきれいに結い直したくらいだろうか。

リィンがフード付きのマントを羽織ろうとした時だった。

「ああ、そんなものはいらないわ。今日はいいお天気だしね」

「でもこれがないと、ニコルにまで迷惑がかかるよ」

このマントはリィンの瞳の色を隠す為のもので、ゼストとの生活の中でも欠かせないものだった。

しかしニコルは笑って腕を振り、リィンからマントを取り上げた。

「大丈夫よ。そんな事ぐらいでおろおろする人が、先生の所で働けますか。さ、行きましょ」

呆然とするリィンをよそに、ニコルは玄関から町の繁華街へ続く石畳の道を歩き始めた。リィンは慌ててその後ろについてゆく。

帝都ベイルナグルの町並みはリィンが訪れたどの町よりも賑やかで活気があり、素敵なものだった。様々な商店が並び、石造りの家はどれも立派なものだ。このベイルナグルの建築水準の高さも群を抜いている。室内の生活用水も、わざわざ井戸へ汲みにいかずともパイプが通され、バルブの栓をひねれば水が出るという仕組みだ。井戸が近くにない場合でも、家の屋上に貯水槽が設置され、雨水や汲み置きの水が浄化槽を通って家庭に届くようになっている。

ニコルは次々に買い物を済ませてゆく。荷物持ちのリィンはただニ

コルの後をついて歩き、珍しい野菜や色とりどりの魚など、目を輝かせながら町を見物していた。
リィンを見た人々は驚きの表情を見せたり、遠くから指を差して話をしたりと反応は様々だった。しかし気付かない人もたくさんいるし、何よりニコルの態度が自然で変わらない為、リィンもそれ程警戒せずにいる事ができた。肉屋の前でまたニコルの足が止まる。

「こんにちは。いつものお願いね」

ニコルが声をかけると、後ろを向いていた大男の主人が返事をして振り返る。

「はいよ」

それから飛び上がらんばかりに驚いた。

「ニコルさん、何連れてんだい！？そいつぁイリアス族じゃねえか！」

顔の下半分は黒々とした髭で覆われていて、熊を連想させる主人は、顔をしかめて太い両腕を組んだ。ニコルは主人の声に驚いて、胸に手を当てている。

「まあまあ、そんな大声出さないで」

「帰ってくれ。イリアス族なんて、縁起が悪ぃや」

「まあ。そんな大きな身体をしているのに、そんなちっちゃい事を言うなんて。ねえ、リィン」

「どう言われようが、今日は売れないね」

「あらどうしてかしら。お肉がないと困るのだけれど」

店の主人とニコルがやりとりしている間、リィンは荷物を両手に抱えたまま、心が冷えてゆくのを感じた。

やはり、イリアス族は今でも嫌われ者なんだ。この白い肌と紅い目のせいで悪魔とも罵られた事もあった。どこへ行っても、イリアス族にとって暮らしやすい場所なんかないんだ。

だからこそ、イリアス族の人々は一所に長く留まらずに土地を転々とする流浪の民となったのだ。

店の主人とニコルの押し問答の間に、女性の声が割って入ってきた。

「あんた、何してんだい！そこをどきな！」

奥から出てきた女性は主人の肩をどんと小突いて前へ乗り出す。彼女も主人に負けず大きな身体をしていた。

「ごめんなさいね、ニコルさん。今すぐお持ちしますからね」

「ああ、おかみさん。お願いね」

「かあちゃん、今日はもう売らねえって決めたんだ、俺は」

「何恥ずかしい事言ってんだい。馬鹿かいあんたは」

「な…」

「ラディス先生にはとってもお世話になってんだからね。あんたなんか、先生がいなかったら今頃イグルになって死んでたんだからね！」

「そ、そりゃあそうだけど」

ばつが悪そうに店の主人は隅の方でもぞもぞしている。その間にも女性はてきぱきと肉を秤にかけ、紙で手早く包んで、リィンにそれを差し出す。

「ごめんね、ぼっちゃん。うちの旦那は頭悪いんだよ。許してやっとくれ」

リィンに向かって女性は微笑んだ。主人が何か言おうとした矢先に、ニコルが代金を渡す。リィンははにかみながら女性に礼を言った。

「ありがとう」

「かわいい顔してるじゃないの。またおいで」

◇◇◇◆

たくさんの荷物を持って帰路を歩く。

リィンはニコルを見下ろし、なるべく明るい声を作って言った。

「僕は慣れてるから良いんだ。イリアス族は嫌われている種族だから。ルキリア族のせいでね。でも、ニコルやチェムカは違うね。最初から、僕を受け入れてくれていた」

「そりゃそうよ。同じ人間だもの」

「僕が怖くないの？『力』を持っているのに」

「ふふ。そうねえ。でもリィンは悪党に見えないもの。もっと悪そうな奴なんていっぱいいるでしょ」

それにね、とニコルは続けた。

「先生のとこで働いているのはごく僅かな人だけなのよ。先生は人気者だからね、下で働きたいって若者なら男女問わずたくさんいるのよ。でもね、先生が全部、門前払いしてしまうの。

人を人種や身分で差別するような人間はいらないっていってね。あの診療所ができた時は、大変な話題になったものよ。どんな身分の人でも、大金を積まずに診察して治療をしてもらえるってね」

「ふうん。じゃああの人は皆に尊敬されてるんだ」

「そりゃあね。腕も大したものだわよ。でもね、その分敵もたくさんいるのよ」

「どうして？正しい事をしているのに」

ニコルはリィンを見上げた。

「正しい事をされると困る悪党が、たくさんいるからかしらね。

先生がしてる事はとても革命的な事なのよ。だいたい医者っていう職業は誰もがなれるものではないし、人の生死に関わるから、聖職者が兼業する事も多いわ。必然的に皆から崇められる存在になるわけよ。神の使いだと言ってね」

リィンはこっくりと頷く。確かにゼストと旅をして色々な町や村へ行ったが、医者のいない所も多くあった。そしてどこでも医者は先生と呼ばれ、絶大な尊敬と財力を手にしているのだ。

「そんなんだから、医者もだんだん勘違いする。傲慢になるの。今では普通に相手の身分や職業によって態度を変えるでしょう。身分の低い人なんて、お金を出しても診察さえしてもらえない。品格が落ちるとか言ってね。それに治療費だって法外な値段をとって、その上技術料なんていう意味の分からない料金もとる。だから必然的に貴族の人や裕福な人ほど手厚い治療を受けられるの。

でも先生は違う。どの人に対しても、提示された診療内容に対する料金で治療しますっていうんだから、そんな事が一般的になれば、医者の稼ぎが減ってしまうでしょう」

「あ…」

「それにねえ、診察を受ける人の中には、そういった低い身分の人と一緒に待たされるとは何たる侮辱かって怒る人もいるのよ。だから最初はこの町の住人達にも拒絶されたわ。立ち退いて欲しいってね」

リィンは道の途中で思わず立ち止まった。

「そんな。どんな人でも治療を受けられるって、大事な事じゃないか」

少し困ったような表情でニコルが振り返る。

「でもねえ、リィン。考えてごらんよ。どんな人でもって言ったら

ね、良い人も悪い人も一緒よ。悪い犯罪者だって、目の前で苦しんでたら先生は助けるでしょうね。だけど、その犯罪者を知ってる人から見れば、何故、そんな人間を助けるんだって言うかもしれないね。皆、求めるものは一緒だけれど、自分が巻き込まれるのは嫌なのよ」

リィンは何も言えずにまた歩き始めた。目の前にコの字型の見慣れた石造りの家が見えてきた。だから、こんな町のはずれにあるのだろうか。診療所の背後に人家はなく、鬱蒼とした森が広がっているだけである。

「でも今はすっかり、なきゃ困る存在になったわけよ。先生もこの診療所もね。結局いくら嫌だといったって、このベイルナグルで、いいえ、このルキリア国で一番のお医者さんなんですもの」

にっこりと笑ってニコルはリィンを見上げた。

「先生はあの性格だからね、自分の医療の腕で、難癖つける人達を問答無用で押えこんだってわけ」

それに剣の腕だって一流なんだから、と付け足した。

◇◇◆◆

夜、大きなベッドに入って天井を見上げた。ここに来てから十日程が過ぎようとしている。リィンの『力』はまだ戻る気配がない。暗闇に包まれている天井をぐっと睨みつけてみる。いつも『力』を使う時の、熱というか圧というか、そういったものが自分の身体から感じられない。

あの医者は精神的なショックと疲労の為といった。自分はまだそのショックから立ち直れていないんだろうか。あいつは何故、ルキリア皇族なのにここで医者をしているのか。それも茨の道を切り開こうとしている。そして自分がそんな人物を殺そうとした事に、ひどく申し訳ない気持ちになる。本当に生きてくれていて良かった。

そんな事を考えながら、リィンは眠りについた。

ふと、何かの香りを嗅いだような気がして、薄目を開けた。まだ部屋は暗い。夜は明けていないようだ。また目を閉じて眠ろうとした時、自分のベッドの脇に誰かが背を向けて腰をかけているのが分かった。

驚いて勢い良く起き上がると、腰をかけている人物が顔だけを振り返らせ、リィンに言った。

「お。いい時に起きたな。少し手伝ってくれ」

ラディスが上半身裸で座っている。

「な、なんでここに！何してるんだよ」

リィンは慌ててシーツをかき集める。今はブラウスは着ておらず、上半身に布を巻きつけた状態で下は下着姿である。

「なかなか一人で包帯を替えるのがしんどくてな」

見ると、脇腹あたりにガーゼが当てられており、ちょうど包帯を巻き直しているところらしかった。リィンはそれを見て申し訳なくなり、素直に包帯を巻くのを手伝った。

「で、でも。何もここでやらなくても…」

「ああ。知らなかったか。ここは俺の寝室だ」

「ええ!?」

「ここには客間なんてないんだよ。診察室にあるベッドはお勧めできんしな。あとはクレイの部屋だが、あいつは他人と同じ部屋で寝るのを嫌がるから。今はニコルが簡易ベッドを持ってきて寝泊まりしているが。まあ仕方なくだ」

リィンは混乱する頭で何とか考えようとする。ここが、ラディスの寝室。だとすると、まさか…。

「まさか、あんた、このベッドで寝てないよな」

「何故？俺のベッドだろうが」

リィンは顔を真っ赤にし、わなわなと震え出す。

「へ、変態！おかしいだろそんなのっ」

ラディスは包帯を巻き終え、ブラウスを羽織りながら言った。

「うるさい奴だな。安心しろ。元々ここはあまり使っていない部屋だ。だからお前に使わせている。俺はたまに数時間寝に来るだけだ」

「だ、だからって、同じベッドで寝る事ないだろ！じゃあ、僕は一階で寝る」

「やめておけ。下は良くない」

「何で！」

「ここで死んでる奴も結構いるんだぜ。良い気はしないだろう」

それは怖い。そうこうしている間に、ラディスはベッドに横になりだした。

「ちょ、ちょっと」

「お前みたいなもんに、手え出すほど困っちゃいないさ。喚いてないで寝ろ」

リィンは憮然としたままベッドの端でラディスを睨みつけた。確かにこの数日の間もラディスがいつ寝にきて、いつ起きているのか分からなかった。きっとリィンが完全に寝付いた後の事なのだろう。

しかしもしそうであるとしたら、彼は毎日ほんの数時間しか寝ていない事になる。目を閉じているラディスはまるで絵画のようだ。ふとその目が開いて、顔をリィンに向けてきた。暗闇の中でも、青い瞳の中にある黄金色がよく分かる。リィンはどきりとして身体を硬直させた。

「それからな、その身体に巻きつけている布はやめた方が良い。身体に悪いぞ」

リィンははっとした。そう言えば、ラディスに裸を見られていたのだ。

「ぼ、僕は…」

「イリアス族の女性にはままある事だ。女性であると何かとリスクが大きいからな」

「その、皆には黙っておいて欲しいんだ」

「分かっている。だがなあ、男と偽れるのももう限界だろう。そういうもんは服装だけでごまかせるもんじゃない。とにかく、その布はやめる事だ」

「でもこれがないと困る」

「そんなもんつけてるから成長しないんだ。俺はもっと女性らしいラインが好きなんだよ。それに、その布がなくたってどうせぺたんこだ」

ラディスはくくくと笑う。リィンは腹を立て怒鳴った。

「余計なお世話だ！」

「…しかしお前は不思議だな。普段は男にしか見えないのに、ベッドの上じゃ女の顔をしている」

「…変な言い方しないでくれ」

それもそのはずだ。リィンは常日頃から警戒を怠らず気を抜かないようにして生活している。それは『力』を使いこなす為にも不可欠であるし、もう今では無意識にやっている事だからだ。

ラディスはふん、と笑って目を閉じる。リィンはその整った横顔を

見つめ、疑問に思っていた事を質問した。

「どうして、僕がシルヴィの子だって知っていたんだ」

薄く唇が開かれ、ラディスが呟くように答える。

「あの子守唄だ。懐かしいな…。それに、お前は母親そっくりだ」

「知ってるのか、母様の事」

「お前の父親は立派な医者だった…」

「何っ。どうして父様の事まで知ってるんだ！」

しかしその問いに返事はなかった。ラディスは静かに寝息を立てている。暗闇に取り残されたリィンはますます訳が分からなくなって、彼の綺麗な寝顔を見つめる事しか出来なかった。ブラウスのボタンが適当に止められているせいか、前が大きくはだけている。

リィンはそこで、信じられないものを目にした。

「そんな…」

広い胸板の右側に、刺青のような模様が見える。

リィンはおそるおそる彼に近づき、ブラウスの裾を掴んでそれを確かめた。焼印である。静かに肌に触れ、それが皮膚の一部で、随分昔に押されたものであると確認した。

何故これが、ラディスの胸にあるのか。有り得ない。だってこれはゼストの胸にあったのと同じ…。

イリアス族が奴隷として労働させられていた頃に、帝国政府によってつけられた烙印と同じなのだ。

リィンは愕然としたまま、しばらく動けないでいた。リィンにはこの烙印はない。シルヴィとティルガによって解放され人権を得た後に生まれた子供だからだ。

ゆっくりと枕に顔を埋めてため息をつく。

「分からない事だらけだ…」

ミントハーブの香りがする。ラディスからはいつもこの香りがする。決してきつい感じではなく、ほんのりと香るのだ。きっと医者という職業柄、消毒や薬品の匂いがついてしまうのでそれを消す為に、つけているのだろう。リィンはゆっくりと眠りの底へ落ちた。

そして不思議な夢を見た。

幼い頃にシルヴィとゼストとライサの皆で暮していた家に、リィンはいた。あたたかい日差しの入る部屋で、皆が茶を飲みながら談笑している。リィンは部屋の外の廊下から、とても穏やかな心地でそれを眺めていた。もうそろそろ父様が帰ってくるので、玄関先で待っているのだ。玄関の呼び鈴が鳴る。リィンが喜びに顔を輝かせて扉を開く。大きな身体が見え、声が聞こえた。

「ただいま、リィン」

その声はラディスのものだった。

009：ルキリア帝国軍

翌日は唯一の休診日だったが、リィンが起きた時には既に隣にラディスはいなかった。

階下へ降り、居室の扉を開けるとクレイが台所で茶の準備をして部屋を出てゆく所だった。ラディスは書斎に籠って仕事をしている為、それを持ってゆくのだとニコルが言う。そのニコルはテーブルに広げられた緑色のさやから豆を取り出している最中だった。リィンも椅子に座り、それを手伝う。

「もうそろそろ、また通いでここに来るようにするからね。あたしが留守の間は頼んだよ」

「うん。わかった」

その時、玄関の呼び鈴が鳴り響いた。

「あら。誰かしらね。リィンはここにいなさいな」

ニコルが前掛けで両手を拭いながら出てゆく。

リィンはそっと耳を澄ませた。ニコルが扉の外の人物と何やら会話を交わし、施錠を開いたようだ。くぐもった声が聞こえる。

「お休みのところ失礼する。我々はルキリア帝国軍の幹部である。この家の主、ラディス殿にお会いしたい」

リィンは思わず席を立った。

帝国軍。シルヴィと暮らしていたイリアス族の町を襲った奴らだ。

音を立てぬように静かに扉を開く。帝国軍と名乗った人物は合計で

三人いた。武装はしていないが、その姿ですぐに分かる。ベージュのマントの下、紺色で統一された軍服は、ルキリア族の青い瞳の色からとられている。階段をクレイが降りてくるのが見えた。

「何事でございましょう。ラディス様は今お取り込み中です」

「つべこべ言わず君の主を今すぐ呼んできたまえ」

そう言って一歩前に出てきた男。背は三人の中で一番低いが、態度は一番大きく、中年で鼻の下に髭をたくわえている。かなり太っていて、到底剣を振るうようには見えない。

「私はルキリア帝国軍のペイン副司令であるぞ。この私を待たせるな」

大仰に身体を反らせ、ぼってりとした人差し指をクレイの胸元に突き付けた。クレイは丁重に頭を下げる。

「は。申し訳ございません。ペイン副司令殿。しかしこの度はどのような御用件で…」

「通報があったのだ。どうやらここにあの危険極まりない、イリアス族の子供がいるらしいな」

部屋中に聞こえるような、わざとらしい大声。クレイとニコルがゆっくりと顔を見合わせる。

「隠そうとしても無駄だぞ。そのような事をすれば反逆罪でお前等を捕える事も出来るのだ」

リィンは音を立てずに扉から身体を離す。そして踵を返そうとした時、背後の気配に気がついた。

「動くな」

低い声が響く。リィンの全身に緊張が走った。

「ゆっくりと振り返りこちらを向け。『力』を発動させた場合は即刻処刑する」

リィンは言われたとおりに身体を反転させる。台所にある裏口は、普段からあまり施錠していない。きっとそこから入ってきたのだ。

すぐ目の前にあの紺色の軍服が見える。剣をリィンに突きつけている人物はラディスよりも少し背が高く、屈強な体躯で全身から殺気を放っていた。

「この帝都に入り込んで来るとは、自らの身の程を知らんらしいな。何と愚かな」

リィンは目の前の軍人を睨みつけた。顔は四角く角ばっており、固そうな黒髪は短く刈りあげられている。額からこめかみにかけて、刀傷のような古い傷痕が見え、その両眼は鋭く、猛禽類を連想させる。

「いまいましいイリアス族め。この帝都を脅かすことは許さんぞ」

「ウォルハンド！いたか！」

玄関先から先程の男が声を上げた。

「はい、ここに」

ウォルハンドと呼ばれた大柄な体躯の軍人は、返事をし剣でリィンに歩くよう指示を出す。だがリィンは彼を睨みつけたまま動こうとしない。

「お前ごときに拒否権はない。ここの住人がどうなっても良いのか」

扉を開け、廊下へ出ると皆が注目し、しんと静まり返った。ニコルが心配そうな表情で、前掛けを両手で握り締めているのが見える。リィンは顔の片側だけでニコルに微笑んだ。背の低い太った男の前へ立たされる。ウォルハンドは男に一礼し一歩後ろへ引いた。玄関のすぐ脇にいる二人の軍人はまだ若く、緊張で顔を赤くしている。男は嫌らしい笑いを顔一面に張り付かせ、生臭い息を吐き出した。

「ほう。何と気持ちの悪い容姿だ。小僧、ここで何をしている」

クレイがリィンをかばうように横に並んだ。

「これはリィンと言います。ここで正式に契約を交わし正当に雇っている使用人でございます」

「お前は黙っていろ！」

男はクレイを一喝し、脂で光っている顔をリィンに近づける。

「小僧、もう一度聞くぞ。ここで何をしている」

リィンはまっすぐにその男を睨みつけ、一言も言葉を発しない。歯

を思い切り噛み締めているせいで、こめかみにうっすらと血管が浮き出している。返答次第でリィンは捕まってしまう。のみならず、ニコルやクレイまでどうなってしまうか分からない。そして、この嫌らしい男ははじめからリィンを捕まえるつもりでここへ来ているのだ。だからこそリィンは何も言わず抵抗していた。

気持ちが悪いのはお前の方だ。その汚い顔を僕に近づけるな。ルキリアの犬め。

リィンの怒りはぐらぐらと煮えたぎる。

「これはこれは、ペイン副司令殿。わざわざこんな町はずれにまでお越しいただくとは」

張りつめた場の空気など介していないような能天気な声がして、皆がそちらへ顔を向けた。ウォルハンドだけはちらりと目をやり、すぐにリィンに視線を戻した。ラディスが階段を降りてくる。ペイン副司令はリィンから身体を離し、ラディスに向き直った。

「これは一体どういう事か、ラディス君。このように危険なイリアス族を雇うなんて、近隣の住人から苦情が出ているのだぞ」

ラディスは自然な動作でリィンを後ろへ押しやり、ペイン副司令の前に立ち両手を顔の横に上げる。ニコルがすぐにリィンの傍へ行き、その細い肩を抱いた。

「こいつは俺の護衛として雇っているだけですよ。イリアス族によくある職業でしょう。御覧の通り、この診療所の裏手に広がる森にはイグルがわんさかいますからね。ここへ来る患者さんの身の安全の為にも、そうしているのです」

「勝手な事ばかりされては困るな。そいつの素性も調べねばならん」

ペイン副司令は鼻白み、長身のラディスを憎々しげに見上げている。

「そうでしたら許可証を取っていただかない事にはね。この事はアルスレイン元帥殿はご存じかな」

その言葉を耳にして、ペイン副司令は急にそわそわとし出した。隣に控えていたウォルハンドがラディスを睨みつけて言い放つ。

「貴様、口を慎め！」

ラディスは視線を彼に向け、眉をあげて呟いた。

「ああ。元気か、ウォルハンド大佐。木偶のお守も大変そうだな」

ウォルハンドは眉間に皺を寄せる。それを聞き咎めたペイン副司令が声を荒げた。

「何だと！今何と言った！」

「それより、ペイン副司令殿。最近体調がすぐれないのではありませんか？特に朝方目覚めるのが辛く、食事をとると胸が悪くなるような」

ラディスは目を閉じたまますらすらと言った。ペイン副司令は言葉を失い、驚いたまま呟く。

「何故分かる。そうなのだ…医者にもかかっておるのだが一向に良くならん」

「それは内臓や肝臓が弱っている為になるのですよ。それにお酒が相当お好きのようだ」

「そうだそうだ。私は何はなくとも酒だけは欠かせん。お前は見ただけでそんな事も分かるのか」

「多少出来る医者なら当然の事です。少しお酒も控えられた方がよろしいでしょう」

ペイン副司令は腕組みをし、うなった。

「それは今かかっている医者にも言われたがな、酒だけはやめられん」

ラディスは口角を持ち上げて笑顔を作った。見とれてしまう程の美しい笑顔。

「私が調合した薬を出しましょう。数十日、少しだけお酒の量を減らしていただくだけで、必ず良くなりますよ。どうです？」

「本当か！」

すかさずラディスはクレイに薬を取りにいかせ、その間に薬の成分や飲み方などを事細かに説明した。ペイン副司令は当初の目的を忘れ、熱心に耳を傾けている。玄関口に立つ二人の若い軍人は、困惑の表情でお互いの顔を見合せる。たまりかねて、ウォルハンドが話に割って入った。

「ペイン副司令殿。これはこいつのやり口です。乗せられてはなり

ません」

「別に乗せらてはおらんわ。お前は下がっていろ！」

ラディスはクレイから小包を受け取り、差し出しながら言った。

「さあ、これを。ペイン副司令殿には町の治安を守っていただき感謝していますので。無料で結構ですよ」

「うむ」

ペイン副司令はその包みを懐へ収め、咳ばらいをして続ける。

「今日のところはこれで失礼する。そのイリアス族については保留にしアルスレイン元帥に指示を仰ぐ事にしよう。まあ私の見た限り、少年であるし特に問題はないと思われるがな。行くぞ」

そう言い置いて、でっぷりと太った身体を揺らし、先に立って出ていく。慌ててその後に若い軍人がついていった。最後に残ったウォルハンドはラディスを見据えて言い捨てる。

「下賤め。恥を知れ」

ラディスは美しい笑顔を崩さない。

「そんなにこの目が羨ましいかウォルハンド。取り出せるもんなら、こんなものお前にくれてやるのにな」

途端に周囲の空気が変わる程の殺気を出し、ウォルハンドは一歩、ラディスに近付いた。その場にいた皆が、その殺気で身体が硬直し

てしまって動けない。ラディスにぎりぎりまで近寄り、ウォルハンドは憎しみの表情を隠しもせず、口の端から絞り出すように言った。

「今ここで、その両目を抉り出してやろうか」

ふん、と鼻で笑い、臆する事なくラディスは答える。

「アルスレインへの土産にでもするつもりか？」

「貴様！」

「ウォルハンド、何をしている！」

石畳の上で立ち止まっているペイン副司令が大声で彼を呼びつけた。ウォルハンドはラディスを睨みつけたまま、マントを翻し踵を返した。

「あのオヤジは長生きできんだろうな」

盛大なため息をつき、ラディスが呟く。

「全体的にむくんでいるのは、肝臓の機能が低下している事によるものでしょうか」

クレイが真面目な表情でラディスに問いかけた。

「そうだ。それに胃と腸もあまりうまくないな。臭いがきつかった」

そう言いながらラディスは俯き加減のリィンの頭に手を置いた。リィンの顔は真っ青のままだ。

「心配するな。あいつらはお前じゃなく俺を嫌っているのさ」

リィンの隣でその細い肩を抱いているニコルが続ける。

「そうそう、この先生がいけないんだよ。憎まれ口ばっかりたたくからねえ」

「ふん。美しすぎる俺に皆嫉妬してるんだろう」

「…そう思っているのは当人だけかも知れませんね」

珍しくクレイが軽口を言って、二人は書斎へと階段を上がっていった。ニコルは笑って、そういうのが憎まれ口って言うのよねえ、呟く。

「さあさ、さっきの続きでもしようかね、リィン」

リィンは青い顔のままだったが、ニコルに笑顔を見せ頷いた。

０１０：連鎖する悪意

昼過ぎにニコルは約束があるといって診療所を後にした。たまに近所の主婦達に料理を教えているのだという。最後まで今日は休みにしてリィンの傍についていようかと言っていたが、当のリィンに大丈夫だから行って欲しいと言われ、しぶしぶ出て行った。ラディスはそのまま書斎での仕事にかかりきりで階下には降りて来ず、クレイは応接室でたくさんの小さな紙束を相手に何やら計算をしているようだ。リィンは家の裏庭にある井戸の傍で、洗濯物を干しながら考え込んでいた。

帝国政府。帝国軍。この国の中枢機関の要職には必ずルキリア皇族が就くようになっている。帝国軍を率いる最高位に、国王の息子アルスレインが元帥として君臨している。それはこの国の国民であれば、誰もが知る事実である。リィンが幼い頃にいたイリアス族の町を襲ったのも、ルキリア帝国軍だ。罪人の討伐という名目でリィンの母を処刑する為の襲撃だった。

それにどの町でもイリアス族は帝国軍に監視され、肩身の狭い思いをしていた。それは今でも変わらない。

百年たっても尚、何も変わっていない。ルキリアがイリアスを迫害し人権を奪ったまま、シルヴィが命がけで解放に導いた事実さえ蹂躙し嘲笑っているのだ。

先程の軍人がリィンに向けた目は、人を人とも思っていない、侮蔑の色が濃く滲み出ている何とも浅ましい人間の目であった。リィンはこれ以上にない程の屈辱を味わったのだ。心はだんだんと暗闇に沈んでゆく。その時、人の気配を感じて顔をあげた。

誰かが裏庭へ近づいてくる。見た事のない男で、その格好で素性の良くない者であるのが分かる。猫背で目つきも悪く、口が斜めに曲がっていて、年齢も定かではない。彼はリィンを見つけ口を開いた。

「なんだ、捕まってねえじゃねえか」

ひひひ、と空気を吸う音のような奇妙な笑い声をあげた。

「…どういう意味だ」

リィンはその猫背の男と対峙する。

「おっと。『力』使うんじゃねえぞ。訴えるぞ」

男はその場で立ち止まり、勢い良く唾を吐きだした。

「前からあいつが気に入らなかったんだよ。若造のくせに偉そうにしやがって。あいつの綺麗な顔をナイフで切り刻んでやりてえんだよ俺は」

どうやらラディスの事を言っているらしい。この男からぞっとするような嫉妬と憎悪を感じて、リィンは全身に鳥肌が立つのを感じた。

「あいつは狡賢い奴だ。皆騙されてんだ。何が≪黄金の青い目≫だ。いけすかねえ！皇族から追放された汚れた野郎だってのに」

小刻みに肩を揺すり、ぶつぶつと呟く。

「一体何が言いたい」

リィンは気味が悪くなり、眉間にしわを寄せた。

「あいつの味方する奴も同罪だ。俺が帝国軍に通報したんだよ。恐

ろしいイリアス族が紛れ込んでるってな。今までずっと付け入る隙を狙ってたんだ。全員処刑されちまえば良いんだよ」

口の端に泡をつけたまま男は喋り続ける。

「お前のおかげで面白くなりそうだぜ。ひひひ」

男が一歩リィンに近づく。口を曲げて笑っている。

「よく見たらずいぶんとかわいらしい顔してんじゃねえかよ。ええ？」

「…それ以上近づくな」

「あ？」

「ここの人達に何かしたら許さないぞ」

リィンは俯いたまま低く呟いた。猫背の男は身体を大きく反らせながら笑った。

「へえ。奴隷のくせに、いっぱしの口きくじゃねえか。僕ちゃんよ」

男を見据えリィンはゆっくりと発音した。

「…お前を殺す」

怒りに瞳の色が紅く揺らぐ。男はその瞳の色とリィンの殺気にたじろぎ、後ずさりながら声を荒げた。

「な、何だその目は！」

「お前を殺す事ぐらい、訳ないさ」

一歩ずつ男に近づく。

それに比例するかのように、男は後ずさる。

「いいか、『力』を使ってみろ！イリアス族なんて即刻処刑されるんだぞ！」

「そんなことにはならない。そんな暇与えない。お前はここで簡単に絶命する。死体はその森に放り込んでおけば、イグルが片づけてくれるさ。誰もお前がどうなったかなんて知る事はない」

「てめえ、何言ってやがる！いい加減にしろ！」

唾をまき散らしながら男が叫ぶ。

「僕はイリアス族だ。それがどういう意味か分かるか？触れなくてもお前を殺す事ができる。好きに騒いだら良いさ。もうあとわずかな命だ」

男は顔をこわばらせ、呆然とリィンを見つめる。

「もう一度言うぞ。ここの人達に何かしたら僕が許さない。お前を殺してやる。身体をめちゃくちゃに引き裂いてやる。どこにいても見つけ出す。どんなに逃げても追いかけて殺す。イリアス族を甘く見るな！」

男は慌ててその場から逃げ出した。

「ちくしょう！化け物め！」

リィンは肩で息をしながら、小刻みに震えていた。

様々な感情がリィンの小さな身体の中で沸騰し、今にも爆発してしまいそうなのを必死でこらえている。そして今『力』が使えない状態であった事に心から感謝をした。もし、『力』が使えていたとしたら、確実にリィンはあの男を殺してしまっていただろう。

自分はここにいたらいけない。

それだけがはっきりとリィンの頭の中で反響していた。

０１１：生きる意味

真夜中、リィンは真っ暗な部屋の中でその瞳を開けた。案の定隣にラディスはいない。まだ書斎で仕事をしているのだろう。この時間ならクレイとニコルも寝室で寝入っている。数日間同じ屋根の下で暮らして、リィンは個々の動きをしっかりと熟知していた。シーツを剥ぐとすでに身支度が整えられており、ベッドの下に置いてある剣を取り出した。それをベルトに差し、フードの付いたマントを羽織る。音を立てないように部屋を横切り窓を開けた。外は月明かりが落ち、室内よりは幾分明るい。窓枠に手をかけ身を乗り出し、ひらりと飛び降りた。この窓の下には、背の低い緑が生えていて芝生になっているのも確認済みである。飛び降りたリィンの目の前に黒い森が広がっていて、わずかに虫の音が響く。見上げるとやはり書斎からは光が洩れているが、人が動く気配はない。そのまま息を殺して表に回り、町へと続く石畳の上を走りだした。

町の中心部に近づくにつれて民家は多くなってくるがどこにも人の気配はない。真夜中のベイルナグルの町並みは、昼間のそれと全く別のものであるかのように静まり返っている。町の中心である大きな広場に辿りついて、やっと足を止めた。広場の中央には噴水があり、その縁に手をついて荒い息を整える。

この円形の広場から放射線上に幾筋も道が伸びて、ベイルナグルの町が形成されている。ラディスの診療所は町はずれの北東に位置し、この広場から西へ伸びる道がニコルと歩いた市場や商店が並ぶ通りだ。そして南へ続く道の一本に、一番広く造られていて、敷石も他のものと比べると上等なものを使用している道がある。この道こそが、ルキリア国王と皇族の住む宮殿へと続いている道である。遠くに高い石垣が見える。暗くて分からないが、出入り口には門番が立っているはずだ。リィンはその宮殿を睨みつけゆっくりと歩き出し

た。

ゼスト…。僕はこの憎しみを捨てられそうもない。
ごめん。

一歩ずつ踏みしめながら静かに考えていた。

きっと僕が死んでも、母様やゼストと同じところへは行けないだろう。

でも、こうする他ないんだ…。

前へ進んでゆくにつれ、悲壮な決意が固まってゆく。

「こんな夜中に何をしようってんだか」

低い声が響く。リィンは素早く剣に手を添えて体勢を低く構えた。
聞き覚えのある声。何故ここにいるのか。脇の道から長い影が現れ、
行く手に立ちはだかる。右手に銀色に光る剣。

「どうやって僕の先を越した。そこをどけ。ラディス」

「俺の目の前で、命を捨てにいく奴を野放しにしておけるか」

それを聞いて瞬間動揺したが、剣を抜いてラディスと対峙する。

「『力』も使えないイリアスが、たった一人であそこへ乗り込んで
何になる。お前ほどの剣では門番の一人も倒せないだろうさ」

「…お前には関係ない」

「復讐なんて愚かな考えは捨てろ。そんな事をして何になる。例え奇跡が起こってお前がルキリア国王を斬れたとして、誰が幸せになるっていうんだ」

「うるさい！僕は許さない！イリアス族の苦しみを少しでも味わわせてやるんだ！」

「阿呆かお前は」

「何だと！」

黒い空には黄色い半月が昇っている。無数の星が瞬いて、地上で生活する人々とは無関係な旋律を奏でる。辺りは青白い月明かりに包まれて物音ひとつ聞こえない。ラディスの落ち着いた低い声が響く。

「国王を殺したければ殺せよ。だがな、その後はどうするつもりだ？誰が国を動かす？ザイナスとロガートとどう対等に外交するんだ。誰がそれをやっていくんだ。イリアス族への偏見はどうやって変えていく？否、変わらないだろうな」

じりじりと間合いを詰めようとするが、踏み込めずにいる。話をしながらでもラディスには全く隙がないからだ。

「そんな事、僕には関係ない」

「だから阿呆だっていうんだ。それでお前は満足か？ならば単なる自己満足だ」

「な…」

ラディスの言葉が、容赦なくリィンの胸に突き刺さる。

「偉そうにイリアスの名を語るな。お前一人のちっぽけな問題に罪もない人々を巻き込むな」

「お前に、お前に何が分かる！僕の苦しみの、何が分かるっていうんだ！」

やり場のない怒りと憤りに、肩を震わせて叫んだ。ラディスは非情な程冷静で、瞳は冷たくリィンを見おろしている。

「…それでもその愚行を犯そうっていうんなら、俺が相手になろう。俺に髪の毛一本も触れられないだろうがな」

「馬鹿にするな！」

リィンは勢いよく斬りかかった。ぎりぎりのところでラディスが横にかわす。その彼の動きに瞬時に反応し、振り向きざまに剣を振りかぶるが剣先で弾かれる。キィン、と高い金属音が夜空に響いた。弾かれた勢いのまま、下方から振り上げるようにしてラディスを狙うが、それもかわされる。咄嗟に体勢を立て直そうとしたところへ、ラディスの蹴りがまともに脇腹に食い込んだ。

「ぐっ」

よろめいたところへ手加減なく剣が振り落とされる。がくん、と身体が沈んだ。何とか受け止めたが、その力の差は歴然だ。ラディスが腕を返し、リィンの剣を弾き飛ばす。カラカラと石畳の上を剣が滑ってゆく。リィンは急いでその剣を掴み、ラディスを睨みつける。

彼は冷たい表情のまま言い捨てた。

「どうした、もう終わりか？」

ぎりりと歯を食いしばり、もう一度斬りかかった。ラディスは右腕一本でリィンと闘っていたが、大人と子供程も差があるかのように、リィンにはまるで歯が立たない。何度斬りかかろうと、かすることさえできず蹴られ転がされて、剣を弾き落とされる。リィンは汗と泥にまみれ、かすり傷を数多に作り、ふらつきながら、また剣を構えた。ラディスは息一つ乱れずに無表情のままリィンを見据えている。

その瞳は鋭く、彫像のような美しさは残酷な冷たさを帯びている。医師である時とは全く違う雰囲気をまとっており、その迫力だけで気押されそうになってしまう。

そんな戦いの最中だというのに、リィンの脳裏には自分がまだ幼かった頃の、何の不安も抱かずに過ごしていた頃の記憶が、次々とよぎってゆく。

母様は料理がへたっぴだったけど、ライサに教えてもらいながらよくクッキーを焼いてくれた。鼻の頭を白くして、楽しそうに笑って…。ライサの作るそれよりもとびきり甘かったけど、嫌いじゃなかった。

ライサが針仕事をしている隣で、いつも絵を描いたりして遊んでいた。うまく描けた絵を得意げにライサに見せるとにっこりと笑って、リィンは絵が上手だねえ、と言って褒めてくれた。

何も、たくさんのものを欲しいなんて思ってなかった。何もいらなかった。

その穏やかな日々が続くだけで幸せだったんだ。大好きだった。僕の家族。

なのに、なのに…！

リィンは悔しさに目を潤ませながら、全魂の力を込めて斬り込んだ。
ラディスが表情を変えずに迎え撃つ。
ガギン、と鈍い音がしてリィンの剣が真っ二つに折れ、その衝撃に耐え切れず倒れ込んだ。両手にしびれが走り、身体を海老のように丸めてその痛みに耐える。あえぐように肩で息をし、もう立ち上がる体力さえ残っていない。震える唇から、絞り出すような苦しい呟きを吐き出す。

「…ど…うして」

僕は敵を取る事も出来ないのか。

「…お前にはまだやるべき事があるはずだ」

「ない。…そんなの、ない。僕には、何もない…」

夜中にリィンが眠れずに一人で泣いていると、すぐにゼストが気づいて背中をさすってくれた。
母様の、あの子守唄を歌ってくれた。けれどゼストは母様みたいに歌がうまくなくて、少し音程を外して歌うから、いつの間にか涙は収まって、二人でくすくすと笑い合った。

そのゼストも、今はもういない。
自分を支えてくれていた人は一人として、この世にはいない。その大好きな人達にはもう会えない。
自分は、何も返せないまま…。

ラディスがゆっくりとリィンの傍にひざまづき、静かに語りかける。

「いいや、ある。良く考えろ。ゼストはお前に人として生き、人を憎まず傷つけるなと言ったんだ。それがどれだけ難しく、そして誇り高い生き方か。それこそがイリアス族の生き方だろう」

リィンは小さく丸まったまま、泣いていた。

誇り高きイリアスの民。どうしてこの男がそれを言うのか。どうして自分はこんなにも弱く無力なのか。

つかえていた感情が一気に溢れ出し、涙が次々とこぼれてゆく。

「でも、ここにはいられない。僕はここにいちゃけないんだ。僕がいたら皆に迷惑が、かかるから。ゼストは死んじゃったから、僕は、僕はもう…」

この世界でたった一人。

誰にも必要とされず、嫌われたまま生きていくなんて…。

それならば死んだ方がましだと思えた。

不安で仕方なかった。心がいつも震えているようだった。イリアス族の生き残りとして、たった一人で生きていけるか分からなかった。教えてくれる人はもういない。甘すぎるクッキーを焼いてくれる人も、背中をさすってくれる人も、もういないのだ。

黙って聞いていたラディスの手が伸び、優しくリィンの頭を包む。

「…どんなに辛くても、逃げずに生きろ。お前の父と母と、ゼストが守り続けてきた命だ」

ラディスの低く澄んだ声が響く。意志のある、優しくて力強い声。

「お前は他の何にも代えがたいものを、既に持っているんだ。世界で一つしかないものだ。

お前の中で鼓動している、それは大事な命だ」

リィンは声を上げて泣き出した。まるで子供のように、顔を腕で覆い泣いている。

ラディスはリィンを軽々と抱き上げた。

「さて、帰るか」

そこへ背後から、人が駆け寄る物音が近付く。

「待て。お前達、ここで何をしている！」

振り返ると武装をしたルキリア帝国軍の軍人が仁王立ちしてラディスを睨みつけている。どうやら宮殿を守る門番の一人らしい。軍人はラディスの顔を見て驚く。

「ラディス殿、一体こんな時間にこのような場所で何をなさっておいでですか！」

ラディスは片腕で抱きかかえたままのリィンに、ちらりと目をやり答える。

「癇癪もちの患者でね、たまにあるんだよ。突然暴れ出したりな。今はもうだいぶ落ち着いたんで、入院施設のある診療所へ搬送する

ところだ」

リィンはラディスの肩にしがみつく様にして、わんわん泣いている。軍人は複雑な表情を浮かべ、関わらない方が良いと感じたのか、ラディスに一礼をしてすぐに去っていった。

月に照らされた石畳の上を歩き出す。ラディスは何も話さずリィンを泣かせるままにしている。ミントハーブの匂いが優しくリィンを包み、そのうちに泣き疲れて眠ってしまった。

◇◇◇◆

診療所まで帰ってくると、玄関に灯が入っているのが見えた。戸口にクレイとニコルが立っている。

「ラディス様」

「リィン！」

二人が同時にそれぞれの名を口にした。

「珍しいな。起きていたのか」

「いいえ、ちょうどあたしがトイレに起きたらね、外を誰かが走ってく音が聞こえたもんだから。見たらリィンじゃないの。先生を呼びに書斎に行ったら先生までいないんだもの！慌ててクレイを起こして、ずっと待ってたのよ」

そこまで話してから、ラディスに抱えられているリィンが傷だらけなのを見て、ニコルはラディスを睨みつけた。

「ちょっと先生、何もこんなにしなくっても！かわいそうじゃないの！」

「やっと寝入ったところだ。起こさないでくれよ、面倒だからな」

ニコルは腰に両手を当てて、憮然としたままラディスを見上げる。

「何があったかは知りませんけどね、リィンは先生ほど頑丈に出来ていないんですからね！まったく、何て乱暴なんでしょ」

ラディスは困った顔をしながらニコルを見下ろした。

「必死の人間を止めるにはこうする他なかったんだよ。悪かった」

それからクレイに向けて呟く。

「すっかりニコルを味方につけやがって」

クレイは苦笑し、そのようですね、と呟き返した。

０１２：再び、歩み始める

翌朝、リィンはいつものベッドの上で目覚めた。起き上がろうとして身体中に鈍い痛みが走る。見ると格好は昨日のままだが、傷口に薬が塗布されていた。窓の外から小鳥のさえずりが聞こえ、今が早朝なのだと分かる。急いで身支度を済ませ階下の居室に向かった。

「おはよう、リィン」

ニコルが穏やかな笑顔で振り返る。テーブルではクレイが茶を飲んでいた。彼がこのように休憩しているのは珍しい。リィンを見て、おはようございます、と丁寧に告げた。少し不機嫌そうに見える。ニコルは笑って言った。

「クレイはまだ寝起きでね。頭が動きだすまでもう少し時間がかかるのよ」

リィンはおはよう、と挨拶をしながらそろそろと身体を前へ運ぶ。手伝おうとすると、ニコルが手を振った。

「今日は良いよリィン。辛いんだろう？先生にはちゃんとお説教しといたからね」

どうやらニコルは昨晩の出来事を知っているようだ。きっと起こしてしまったのだろう。とすると、クレイも同じで、そのせいで寝不足なのだ。

「良いんだ、手伝うよ。僕が悪いんだから。その、また迷惑かけちゃって、ごめん」

ニコルは微笑みで返事をした。クレイは目を閉じたまま茶を啜っている。ここにいる人達は自然で、そして優しい。それに幾度となく救われている。

「…ラディスは？」

「診察室よ。今日の準備をしてるんじゃないかしら」

「僕、挨拶してくる」

そう言って部屋を後にする。清々しい空気に包まれた廊下を進み、診察室の扉を開けた。長身の医師はこちらに背を向けて薬品棚を整理しているところだった。ちらりとリィンに目をやり、手を休めずに言った。

「すっきりした顔をしてるな。悪くない」

「…ありがとう」

ラディスが振り返る。

「あんたが止めてくれなかったら、僕は一番愚かな道を選択してしまうところだった」

ゼストが自分の命を削り、守ってくれたこの命を、自ら捨てようとしていた。何て愚かな事だろうか。

リィンはまっすぐにラディスを見つめている。赤茶の瞳からは今までの暗さが消えていた。

「僕は生きなきゃいけない」

父と母と、ゼストの分も。若くして命を落していった大好きな人達の為に。

どんなにそれが苦しくて辛くても、この命を諦めてはいけない。

それを思い出させてくれた。

「この命には意味があるんだ。きっと。僕はそれを見つけなくちゃいけない。だから、ここに置いてほしい」

リィンはこのラディスという人間をもっと知りたいと思った。

≪黄金の青い目≫を持つ皇族でありながら、何故一介の町医者として生きているのか。そして町医者と言い切るには余りある実力と皆からの絶大な信頼。揺るがぬ信念を持ち、それを実現させる強さ。

いつかニコルが言っていた事は、正しかった。リィンがこれから生きていく上で勉強していかねばならない、大事な事を、この人物はきっと知っている。

ゼストが最後に導いてくれたこの場所で、今よりも強く成長していかなければ、と思う。

「これからも、迷惑をかけてしまうかもしれないけど、ここにいたいんだ」

「…そうだな。お前を追い出したりでもしたらニコルやチェムカに俺が怒られるだろうしな。それに忘れてもらっちゃ困るが、お前にはまだ山ほど借金もあるんだぜ」

ラディスの軽口にリィンは笑顔になる。

「あんた、良い人だったんだね」

「今更言うか、それを」

廊下へ出るとチェムカがちょうど玄関から入ってくるところだった。

「あ、リィンおはよう。あら！傷だらけでねえの？大丈夫けえ」

「おはようチェムカ。大丈夫だよ」

チェムカが近付いてきて、リィンの顔をのぞきこんだ。

「それなら良かっただ。実は、ちっとリィンにお願いがあんだけっど」

「何？」

「外に今あたすの友達が来てるんだわ。ちょっくら顔見せてくれねえ？診療所にかわいい男の子が来たって言ったらどうしても見てえって聞かねえもんで。断ったんだけっども、今朝わざわざ診療が始まる前にうちに来るもんだから」

眉を八の字にして困っているチェムカの、愛嬌ある顔を見てリィンは微笑んだ。

「良いよ」

玄関から朝日に包まれた外へ出ると、チェムカと同年代の女性が二人いて、リィンを見つけて顔を輝かせた。

「初めまして！私はチェムカの友達のメリエナよ」

「私はミラン。ちょっとチェムカ、すっごいかわいいじゃない！」

「だべ？リィンはあたすらと同い年だ」

チェムカの友人達はリィンに詰め寄って、黄色い声を上げた。

リィンは圧倒されて、少し後ずさる。

「ラディス先生も素敵だけど、リィンも素敵ね！」

「イリアス族の人って美しい人が多いと聞いていたけど、本当なのね」

そう言って、ほう、とため息をつく。彼女達は、イリアス族が世間で何と言われ嫌われているかなど全く興味がないようだ。そういうものには縛られず、別のルールで生きている。その逞しさにリィンは苦笑した。いつも物珍しそうにされるか、汚いものでも見るような目つきばかりをされていたリィンにとって、それは新鮮でくすぐったいものだった。

世界はこんなにも広い。知らない事ばかりだ。

僕は生きるよ、ゼスト。

その光景を診察室の窓からラディスとクレイが眺めている。ラディスがため息をついて笑った。

「いつの時代も女性は逞しい」

クレイが微笑みながら、そのようですね、と答えた。

【第一部・完】

０１２：再び、歩み始める（後書き）

はじめまして。
読んでいただき、ありがとうございます。
技術も心得もないままに情熱のみで気張っております。
感想とか、もしよければ寄せていただけると、嬉しいです。泣きながら小躍りします。むせび泣きます。涙で枕を濡らします。
紆余曲折の果てに驚くほどらぶらぶになる予定ですので、これからもお願いいたします。

０１３：剣の舞

穏やかな昼下がり、町はずれのコの字型をした診療所の裏手から断続的な金属音が響く。
裏庭でリィンとクレイが剣を構え、睨み合っている。
家の壁際にはニコルとチェムカ、それにチェムカの友人のメリエナとミランが佇んでそれを見守る。

リィンは華奢な身体の割には大きめの剣を振るってクレイに斬り込んだ。クレイがその剣を受け止めて弾き返す。リィンはすぐさま地面ぎりぎりにまで体勢を低くし、相手の足元を狙った。クレイは反射的に後ろへ跳んで、その瞬間をついてリィンがもう一度剣を振りかざす。クレイは身体を捩じり、切っ先をかわしたが左肩のブラウスが見事に切れた。

チェムカとその友人達は瞳を輝かせ、その演武を見つめている。ニコルは少々心配そうな表情。

『力』が戻り、正式にラディスとこの診療所の護衛として雇われたリィンだったが、剣の腕があまりにも軟弱であるとクレイに指摘され、時間の空いている時に稽古をつけてもらっているのだ。ここ数日の間は護衛というのは名ばかりで、ラディスの外出のお供もさせてもらえていない。
リィンは生傷をたくさんこしらえながらも、めきめきと上達していた。

俊敏な剣さばきでクレイを追い詰めてゆくリィン。しかしその全ての攻撃を凌ぎつつ、クレイは一瞬の隙を狙う。大きめの剣を振るうリィンの呼吸が僅かに乱れた。その機を逃さず、クレイは素早く身

体を反転させ、反撃に出る。あっという間に形勢は逆転し、今度はリィンが追い詰められてゆく。鉄がぶつかり合う音。次の瞬間、勝敗が決まった。クレイの剣先がリィンの喉元でぴたりと止まる。

肩で息をしながら睨み合う二人。

リィンの両目が、紅い炎を宿す。

次の瞬間クレイは後ろへ飛ばされ、尻餅をついていた。

「…反則ですよ。『力』を使うのは」

クレイはよろけながら立ち上がり、服についた汚れを払う。

「まったく。負けず嫌いですね、あなたは」

汗で額に張り付いた前髪を腕で拭いながら、リィンは笑った。

「ごめん」

「それにしても、その剣でここまでやれるとは。上達しましたね」

「リィンすごい！ずいぶんうまくなったわ！」

メリエナが歓声を上げ、チェムカとミランも手を叩き合っている。

「僕、次はラディスと手合せしたい！」

リィンが瞳を輝かせクレイを見た。しかしクレイは呆れたように首を振る。

「まだまだ。今のリィンではラディス様の相手などつとまりません」

「面白い事をしているわね、クレイ」

突然見知らぬ声が割って入った。そこにいた全員が、その声のする方へ顔を向けた。貴族風の格好をした少女が、こちらへ歩いて来る。従者と思われる身なりの女性が、恐縮するようにその後に続く。見事な金色の髪を風になびかせている少女。その髪は艶やかで手入れが行き届いており、桃色の蝶の髪飾りが陽に輝いている。見るからに上等そうな生地のブラウスに、腰の絞られた薄紫色の膝丈スカート。白のハイソックスに紺色の滑らかな革靴。

「声をかけても誰も出て来ないんですもの。どうなっているのかと思ったわ」

リィンはその少女を見て硬直していた。瞳は青く、そしてその奥にちらちらと金色が輝く。ラディスと同じ瞳。ルキリアの皇族だ。ざわざわと鳥肌が立ってゆく。

「申し訳ございません。エリナ王女」

クレイが丁重に頭を下げた。それに呼応するかのように、チェムカやニコル達も頭を下げる。リィンだけが、視線を逸らす事ができずに凍りついたまま。

つり目で少し上向きの鼻。少女は顎をわずかに上げて、全員を見渡す。リィンはそっとニコルの後ろに隠れた。

「ねえクレイ、私あなたとラディスの手合せが見てみたい」

「え…」

クレイが返事をする間もなく、エリナは大きな声で、二階の書斎にいるラディスを呼びつけた。

「ラディス！いるんでしょう！」

書斎の窓が開いてラディスが顔をのぞかせる。

「今すぐ剣を持って降りてきて！」

ラディスはわざとらしく目を見開いたまま、奥へ消えた。エリナは両手を腰に当てて、満足げに微笑んでいる。リィンは少女の勝気な態度を見て憤慨しニコルを見るが、ニコルは苦笑で応え無言のままだ。

しばらくして背の高いラディスが現れた。右手に剣を鷲掴みにして持っている。メリエナとミランが控え目に歓声をあげた。

「やあお姫様。ご機嫌麗しゅう」

「ええラディス。私、面白い事思いついたの。クレイと手合せしてちょうだい」

ラディスはじっと小さな少女を見おろす。エリナはにっこりと笑って催促をした。

「早く」

ラディスは笑顔をエリナに向け、鞘から剣を抜いた。

「仰せのままに」

そうしてラディスとクレイは剣を構え対峙する。

勝負は一瞬だった。

何度か剣がぶつかったと思った瞬間に、クレイの剣が弾き飛ばされていた。クレイは肩で息をし、汗を浮かべている。対するラディスは涼しい表情のまま。あまりの速さに、そこにいた誰もがついていけなかった。

「なあんだ、つまんないの」

「わ、私とラディス様では格が違いすぎます」

「次は私だ」

黒い影がよぎった。キィン、と高い金属音。続けて打ちつける鉄の音。

ラディスが誰かと戦っている。明らかに動作の素早さが変化した。相手はクレイと同じ背丈ほどの青年。金色の髪は短く、その出で立ちはルキリア帝国軍の軍服。青い瞳。

「兄様、来ていらしたの」

「ああ。今しがたな！」

「…あれがアルスレイン元帥様だよ」

ニコルがリィンに耳打ちした。リィンは身体の芯がぶるぶると震えて、この場所に立っているのがやっとだった。気を抜くと『力』が

暴走してしまいそうになる。憎きルキリア皇族、帝国軍の元帥が目の前にいるのだ。父と母の敵だ。

「ラディス、本気を出せ」

「出してるよ」

二人はまるで舞いでも舞っているかのように戦う。剣先が速すぎて、追っていけない程だ。しばらく攻防が続き、ラディスの剣が弾かれて、勝負がついた。

「久しぶりだな、アルス」

アルスレインはラディスを睨みつけ笑う。

「最後に力を抜いたな」

それから手を差し伸べ、二人は固い握手を交わした。

０１４：ルキリア皇族

クレイがティーセットを持って応接室へと向かう。その後ろにリィンが俯き加減でついてゆく。挨拶をしなくてはいけないと言うので、リィンの心はずしりと重い。控え目にノックし、扉を開いて中に入る。

その部屋にいるのはラディスを含め、ルキリア皇族の三人である。何とも珍しい光景だ。エリナの従者がクレイに気づき、深々とお辞儀をした。クレイは静かに準備をし、それぞれのカップに飴色の茶を注ぐ。

「エリナの奴、どうしてもすぐに行くと言ってきかないので、私はこの軍服のままだ。目立って好かないのだが」

「だって、兄様、ずっと連れてってくれないんですもの。私はラディスに会いたくて仕方なかったのに！」

「嬉しい事を言ってくれるね、エリナ姫」

エリナが瞳を輝かせ、ラディスに向かって身を乗り出す。わずかに頬も赤らんでいる。

「私ね、もう十五になるの。そのパーティーがあと十日後にあるのよ」

ラディスはにっこりと笑い、

「そうか。早いもんだな」

と呟く。クレイがテーブルにカップを置いた。エリナの手前に砂糖壺とクッキーをそっと添える。

「それはそうと、数日前にここへペインとウォルハンドが来ただろう。私はそれを事後に聞いたのだ。申し訳なかった」

「いいや、いつもの事さ。お前も大変だな。あんな古だぬきが副司令だなんて。お前の親父も相当なひねくれ者だ」

「考えあっての事だろう。父上は私に、わざとそういう人物を当ててくるのだ。軍の内部の腐った膿も出さなくては正義が保たれん」

エリナは二人の会話を興味なさそうに聞いている。
アルスレインは表情を曇らせ、続けた。

「ここにイリアス族の少年がいると聞いたが…」

「ああ。リィン、ここへ」

リィンは名前を呼ばれてびくりとする。クレイが目で行くように促す。ぎくしゃくとしながら一歩ずつ近づくと、アルスレインとエリナが息を飲むのが分かった。

「リィンと申します」

リィンは感情を抑えた声で告げ、ぺこりと頭を下げる。

そんなにイリアスが珍しいか。お前達が滅ぼしたくせに。

腹が煮えくりかえる程憎たらしいが、この皇族を前にして、衝動的

な暴走は何とか食い止められている。ラディスを刺した出来事がトラウマとなり、抑止力となっているようだ。
アルスレインは立ち上がり、リィンに向かって丁重に頭を下げた。
リィンは驚いて後ずさる。

「私の部下がとんだ無礼を働き、真に申し訳なかったと思っている」

そう言って顔を上げたアルスレインと、まともに目が合った。裏のない表情。意思の強そうな眉に、自信に満ち溢れている瞳。好青年。
日向ばかりを歩いて来た人間の顔だ、とリィンは思った。

「ルキリアが過去に何をしてきたのか、私は知っている。今でも続くその悪しき習慣を、私は断ち切りたいと思っているのだ。
そうだ、君に何か償えるのなら…」

リィンはむっとする。

「こいつはそんなもの望まないだろう」

ラディスが先回りして言った。アルスレインは脱力して、そうか、と呟きながら椅子に腰かける。

「シルヴィとティルガの子だ」

リィンは驚いてラディスを見た。言ってはいけないんじゃなかったのか。それをよりによって、帝国軍の全権力を持つ元帥に耳打ちするなんて。しかし、リィンのその驚きより、更に驚いた顔でアルスレインがリィンを凝視している。驚愕の表情。

「…そうか。私はまた重ねて無礼を働いたようだ。誇り高きイリアスの子、どうか許してくれ」

「ねえ、何ぶつぶつ言ってるのよ！そうだ、ラディス、私のパーティーへは来てくれるわよね」

クレイと共に部屋を後にする。長い廊下を歩きながら、リィンは疑問を口にした。

「あの、アルスレインという人、≪黄金の青い目≫ではなかった…」

ラディスやエリナのような、青の瞳の奥に輝く黄金色が、アルスレインの瞳にはなかった。青の瞳、貴族と同じだ。

「ええ。生まれつきだそうです。皇族だからとて、全員があの瞳を持って生まれるわけではないようです。だからこそ、ラディス様は一部の帝国政府や軍人達に煙たがられているわけです。血族の恥だと言って。許しがたい事ですが」

リィンはいつかの気味の悪い男が言っていた言葉を思い出した。

皇族に追放された、汚れた人物。

「しかし、アルスレイン殿がいらっしゃる限り、まず大丈夫でしょう。あの方はラディス様をとても慕っておられる。ラディス様の見ている将来を、一緒に作っていきたいと思っておられる。崇高なお方です」

「まだ若そうに見えたけど」

「確か今年で二十一だったと記憶しています」

その人物が、やがてこの国の王になるのだ。リィンはアルスレインの壮大な将来を考えて、呆然とする。

そして同時にラディスという人間の、底知れない力に度肝を抜かれる。次期国王の青年からも絶大な信頼を寄せられ、そして影響力を持つ。

「ラディスって、一体何なんだ」

クレイはさらりと言った。

「町のお医者様ですよ」

納得できずにクレイを見つめていると、彼は一瞬の躊躇の後にため息をついた。

あなたの疑問も、もっともですね。良いでしょう。

「ルキリア国の現国王、カイエリオス様の兄であり、前国王であられたグランハート様は、ラディス様の父君であられた方です」

リィンは言葉を失ってその場に立ち止まる。

では、あの部屋にいた三人は、従兄弟になるのか。

「しかしラディス様は、グランハート前国王の正統な子息ではありません。

…ラディス様の母君は当時宮殿内で働いていた、従者の一人です」

クレイの表情が険しくなる。

０１５：青い瞳の真実

ラディスを身篭った事を知った彼女は、すぐに仕事を辞め宮殿を後にした。
前国王と一従者との間に何があったのかは分からないが、この事を知っていたのは当事者のグランハートと側近の数名のみであった。
ラディスの母は彼をたった一人で産み育てる覚悟で、ひっそりと姿を消したのだ。
しかし前国王はその彼女の消息を探し続け、やがて辺鄙な田舎村で二人を探し当てた。産まれて来た子が、皮肉にもルキリア皇族の正統な血族である証の≪黄金の青い目≫を持っていたのだ。噂は濁流の如く乱暴で急速に広がり、宮殿内部の知る事となった。
中枢部にいる人間達から、前代未聞の不祥事ではあるが、前国王と王妃の間に子が授からなかった事もあり、後継ぎにしてはどうかという意見も出た。しかし王妃はそれを頑なに拒絶し、憎悪と憤怒の矛先をラディスとその母に向けたのだった。

ある満月の晩、赤ん坊だったラディスは母の手から強引に拉致された。幼い柔肌に地獄の痛みを伴う奴隷の証である焼印を刻みつけられ、イリアス族が収容されていた強制労働施設に放り込まれた。それは事実上の死を意味する行為であった。
ラディスの母は失意の中で心痛を募らせ、孤独のまま息を引き取る。自らが招いた悲劇に打ちのめされた前国王は、王妃の行った非道な行いを諫められずにいた。

それから八年後、グランハート前国王はイリアス族の解放を宣言し、病に倒れた。

貴族達の間では、前国王の急逝は暗殺によるものであり、その黒幕

が王妃であったと、まことしやかに囁かれている。いずれにせよ真実は闇の中で、次に国王に即位したのがグランハート前国王の実弟、カイエリオスであった。

クレイは険しい表情のまま、最後に呟いた。

「今でもなお、前王妃はラディス様のお命を狙っているのです」

アルスレインとエリナは夕闇が迫る頃、馬車で診療所を去っていった。

それからラディスは簡単に食事を済ませてから、往診に出掛けた。腰に剣を差し鞣革の大きな鞄を下げ、足元は強度の高い編み上げ靴という、一見医師には見えないような格好である。リィンも連れていってくれるよう頼んだが、今夜は治安の悪い地区へ出向くのでだめだと断られた。尚更ついて行きたかったのだが、仕方なくその背中を見送った。

食器を片付け洗濯物を畳み、風呂に入っている間中もリィンはずっと難しい表情で考え込んでいた。

あの胸の烙印、それにシルヴィとティルガを知っていた事にも合点がいく。きっとラディスはイリアス族が収容されていた施設で、イリアス族によって命を救われ、育てられたのだ。彼はその後の奴隷解放宣言によりイリアス族の人々と共に、自由の身となった。それからは元王妃から身を隠しながら医師になり、この帝都ベイルナグルに戻ってきたのだろう。

しかし…。

それ程簡単に、割り切れるものではなかった。

リィンはラディスの残り香のするベッドの上で、眠れずに何度も寝返りを打った。
ラディスの生い立ちを知り、今までの人生を想像しただけで苦しさに胸が張り裂けそうになる。

イリアス族に囲まれて育った彼は、自分が白い肌と紅い瞳を持っておらず、世間で皇族と呼ばれている人々と同じ瞳をしている事に、きっと疑問を持っていたに違いない。本当の事を知った時、何をどう思ったのだろう。そして当時も国王として覇権を手中に収めながら、その息子には何一つ救いの手を差し伸べなかった父を、憎みはしなかったのだろうか。
それに、この事をラディス自身が隠そうとはしていない、とクレイは言った。
リィンには何故、彼がそれ程に強くいられるのか分からない。今日の昼間の事を思い出す。アルスレインとエリナと、親しげに話していたラディスからは怨念や復讐といった暗い印象は欠片もなかった。
そればかりかまるで二人の兄のように接していた。
母親から引き離され、自らも奴隷として生きなければならなかった過去を既に乗り越えていて、ずっと先を見ているようだ。

自分だったら、きっとそんな事は出来ない。

ラディスの言葉が胸に響いてくる。

復讐なんて愚かな考えは捨てろ。そんな事をして何になる。例え奇跡が起こってお前がルキリア国王を斬れたとして、誰が幸せになるっていうんだ。

どんなに辛くても、逃げずに生きろ。

彼は、望まれてこの世に生を受けたわけではなかった。この世界で唯一、彼の存在を手放しで祝福してくれた母は、儚く消えた。彼はきっとその面影さえ覚えていないだろう。

リィンはシーツを頭からかぶった。自分の行いを恥じずにはいられなかった。胸がずきずきと痛んで、息が苦しい。自分は何も知らなかった。自分だけが辛い思いをして、痛めつけられているとでも思っていた。

母のシルヴィやゼストに守られていたのに、そのお陰で今こうしていられるのに、何を嘆く事があるのか。

目を閉じて、今ではおぼろげにしか思い出せない母の顔を思い浮かべた。

「かあさま…」

扉の開く音。

リィンは反射的に身体を起こしていた。

「まだ起きていたのか」

ラディスが呑気な声をかけてきた。ブラウスの前がはだけていて、胸の烙印が見える。風呂上がりのようで髪が濡れていて、ばさばさと無造作に布で滴を拭う。そんなどうでも良い仕草でも、絵になってしまうのだ。その彼には到底普通では背負いきれない程の、重く残酷な過去がある。リィンは言葉の発音の仕方を忘れてしまったように、ぼんやりと口を薄く開いたまま、ラディスを見つめていた。

「何だその顔は」

ラディスは薄暗い部屋の中で笑った。既に夜が明け始めているようだ。呆けているリィンには構わずに、ベッドに入ってくる。

「寝てないの？」

驚いてリィンは聞いた。もう朝まで二時間程しかないだろう。

「ああ。緊急の手術が入ってな。もうへとへとだ」

とても話を聞ける状態ではない。リィンも大人しくベッドにもぐり込んだ。それでも何か言葉を交わしたいと思い、彼の名を呼んだ。

「ラディス」

「ん」

面倒臭そうな返事が返ってくる。

「あんたってすごいや」

「…当り前の事を言うな」

「僕も、あんたみたいになれる？」

「無理だ」

即答されてリィンは思わず身体を起こし、眠ろうと目を閉じているラディスの顔をのぞき込んだ。

「何で！」

ラディスは目を閉じたまま、鬱陶しそうな表情で寝がえりをうち、リィンに背を向けた。

「ラディス、ねえ」

少し寂しくなり、なおもリィンは彼に話しかける。もっと話したい。もっと声を聞きたい。

「ねえってば」

もう一度ラディスは寝返りをうってリィンに向き直りながら、自分の方へ引き寄せるようにして、リィンをベッドへ無理矢理に沈めた。

「うわっ」

「今すぐ寝ないと襲うぞ」

すぐ目の前にラディスの顔がある。彼の息が顔にかかった。青い瞳がじっと睨みつけている。リィンは顔に全身の血液が集中してゆくのを感じながら、身体を硬直させて固く目をつぶった。

「ね、寝る！今すぐ！」

「…寝たか」

「うん、寝たっ」

「…よし」

すぐに彼の静かな寝息が聞こえてきた。
リィンは自分の破裂しそうな心臓の音を聞きながら、おそるおそる目を開く。ラディスの寝顔が目の前にあった。
長めのまつ毛に形の良い鼻筋、薄い唇。薄茶色の髪は乱れて顔に少しかかっている。彼の腕はリィンの背中に回ったままで、リィンはどうして良いか分からずまた目を閉じた。急に自分が薄着であった事を思い出して、一人でまた赤面する。
上はブラウスを着ているが、いつも巻きつけている布はなかった。身体に悪いと言われてから、寝る時には布を外して寝るようにしているからだ。その上、下は下着しか身につけていない。以前は警戒して昼間の格好そのままで寝ていたが、ラディスが何かをするような事は、当然なかった。そればかりか全くリィンの事など気にしていないのだ。自分だけがびくびくして気にしているのが馬鹿らしくなってからは、もうずっとこの格好だった。

こんな状態で寝られるわけないじゃないか。でも今動いたら、ラディスを起こしてしまうかも知れない。

リィンはこの状況をどうするか思案している内に、眠りに落ちていった。

016：ビーダの腕輪

瞳を閉じて深呼吸を繰り返す。

１　２　３　…

それから真っ暗な虚空にイメージを作り上げる。
瞼の裏に、無数の白い糸が乱舞している。意識を集中させて、その糸の一本を別の一本と同化させる。それを繰り返し、糸は紐状の太さになり自在に動く大蛇になり、全てが集約し龍になった。龍は猛りながら一回転し、白の珠になる。闇の中に浮かんでいる珠は、次第に色を変化させてゆく。

白　黄色　桃　…

徐々に赤みが増し、燃えるような紅に変わる。

ゆっくりと瞳を開けた。
目の前にグラスが浮かんでいる。
深紅に揺らぐ瞳で、リィンがそのグラスを見つめる。口を一文字に結び真剣な表情。

意識的に『力』を発動させて、訓練をしている最中だ。連続的に緩慢な『力』を使う事はかなりの困難で、『力』を使いこなす為には不可欠な訓練である。これをする事によって加減の仕方や、突発的に爆発的な『力』を操る事も可能になるのだ。

昼過ぎからの診療がない為、ニコルとチェムカは既に帰宅している。
リィンは一人居室で小ぶりなグラスと向き合っていた。

グラスが宙に浮いたままゆっくりと左へ移動し、リィンも身体の向きを少しずつ変える。

突然、目の前の扉が開いた。

リィンがはっとした瞬間に『力』がぷつんと途切れる。グラスが、すっと垂直に落下した。反射的に両手を前に突き出し、何とかそれを受け止める。

深いため息を落とし、扉を見やるとクレイが顔を覗かせていた。

「ラディス様が呼んでおります。診察室へ」

「…分かった」

長い廊下を足早に通りすぎ、診察室の扉をノックする。

「入れ」

ラディスの声。

しかし扉を開いてみると、目の前に立っていたのは別の男性だった。

「わお。本当にイリアス族だ」

その男性が、感嘆の声を上げてリィンに近づいてくる。高価な上着を羽織り、ブラウスに吊りズボン、茶の革靴。金色の髪はくせが強く、ふわふわとしている。紺色の瞳。その身なりからしてルキリアに連なる貴族のようだ。

リィンは壁際に追い詰められ、相手はにんまりと笑って壁に片手をついた。

背はそれ程高くはないが、小柄なリィンと比べたら頭一つ分は高い。

「君がリィンだね。初めまして。僕の名はエンポリオ」

整った顔立ちをしているが、何故だかキツネを連想させる。
リィンは警戒しながら黙って会釈を返した。
するとエンポリオは満足そうに微笑んで、顔を近づけリィンの耳元で囁いた。

「へぇ。かわいいね。男にしておくのがもったいないくらいだ」

リィンは面食らって横へ飛びのいた。
部屋の奥に視線を向け、診察台の傍の椅子に座っているラディスを見つけて叫ぶ。

「ラディス！何の用だよ！」

「あらら。真っ赤になっちゃって」

にやにやと笑うエンポリオを無視して、リィンは赤い顔でラディスを睨みつける。

「おい、からかうのはその辺にしておけよ。こいつは意外と凶暴なんだ。『力』で吹っ飛ばされるぞ」

「はは。良いね。エキセントリックだ」

ラディスはため息をつきながら手招きをした。エンポリオに警戒しながら早足でラディスの元へ行くと、流れるような動作で、瞳孔をのぞき脈を測られる。そのまま右手を掴まれ、ラディスが手に持っ

ていたブレスレットがカチリと音を立ててリィンの右腕に収まった。
深い闇のように黒い。肌ざわりからして鉱物で出来ているもののようだ。

「これはビーダという鉱石で出来ているブレスレットだ」

「ビーダ？」

「かつてイリアス族が奴隷だった頃に大活躍していた首輪さ」

エンポリオがさらりと言い、それを聞いてリィンが気色ばんだ。

「どういう事だよ！」

「落ち着け。作り方は真似ているが、全くの別物だ。当時イリアス族を拘束する為に使用されていたものは、『力』を発動させた時に人体に多大な損害をもたらすものだった。要は『力』を使った時に外へ向かわずに跳ね返って、自らの内で暴発するような仕組みだ」

じっと漆黒のブレスレットを睨みつける。

これが、母様の首に巻きついていたのか。人の権利や心を、踏みにじる為ものだ。

「しかしこれは俺が改良を加えたものだ。従来は『力』を内にため込むものだったが、これは違うぞ。『力』を安全に外へ逃がすようにする為に、また別の鉱石を混ぜて加工したものだ」

「っていう事だけどねえ。まだ試作品さ。実験段階ってやつ」

エンポリオの言葉に絶句する。

「…え？」

「ラディス、君って案外酷い奴だよねえ」

リィンが目の前のラディスを見ると、彼は美麗な笑顔を向けていた。口角だけを上げて作る神々しいまでの微笑み。

嫌な予感がする…。

「こんな所にうまい具合に若いイリアス族がいて、その若者が治験を買って出てくれるなんてなあ」

「ちょ、ちょっと」

ラディスがリィンの両肩に手を置いて続ける。

「偉いぞ、リィン。じゃあ早速『力』を発動させてみてくれないか」

「このブレスレットが失敗作だったらどうするんだよ」

もし、発動させた『力』が内側で暴走したら、リィンはひとたまりもない。

「その時も大丈夫だ」

「どうして」

「目の前に腕の良い医者がいるだろ？」

何をどう言っても、逃げられそうにない。
リィンはため息をついて二人から距離をとり、部屋の中央に立つ。
ラディスとエンポリオがリィンを見守っている。

「いくよ」

そう声をかけて、ラディスに向かって『力』を発動させた。どうせなら道連れだ。
赤茶の瞳が揺らいで深紅に変化する。確実に、『力』が発動した。
身体から熱の伴う圧が放射されている感覚がある。しかし目の前のラディスには何も起こらない。
『力』を思い切り発動させて、一旦止める。それを何度か繰り返し、五度目でリィンは肩で息をしながら、手近にあった椅子に倒れこむようにして座った。
集中的に強い『力』を使い続ける事は、精神的にも肉体的にも、大変な作業なのだ。

「もう…限界だ」

「とりあえずは、成功だな」

ラディスは詰めていた息をふっと吐き出した。リィンの細い腕をとり、懐から小型の時計を取り出して脈を測る。
傍らに立つエンポリオが小さな声で呟いた。

「紅い瞳に透けるような白い肌。素晴らしい。神秘的だ。こんなに美しい種族は他にいないね」

その時、唐突に診察室の窓ガラスが割れた。ベッドの側にある窓だ。

リィンは素早く立ち上がる。真っ白なベッドのシーツの上に、ガラス片に混じって異物が落ちているのが見えた。ごつごつとした大きな石だ。リィンは表情を固くする。投石。誰かが意図的に、この部屋の窓に石を投げ入れたのだ。

「追わなきゃ」

「放っておけ」

ラディスは席に戻り、記録をつけながら目も向けずにいる。

「でも…」

「こんなもんは可愛い方だ」

腑に落ちないまま、また椅子に座り直す。

「そうそう。ねえリィン、この診療所はね、僕が知っているだけでも四回、建て直してるんだよ」

気づくとエンポリオがすぐ傍にいて面白そうにリィンの顔をのぞきこんでいた。

「え！」

「火をつけられたりね、色々。でも決まって診療のない時なのさ。単なる嫌がらせだね。ただ、それでも大変だったよねえ、クレイ」

言いながら彼は背後を振り返った。

いつの間にか、クレイが扉の前に控えている。

「ええ。ラディス様の書斎にある膨大な蔵書の避難には、毎度骨がおれます」

「そうだった。大事な書物を燃やしやがって。けしからんな」

「ねえ、そんな事よりさ、リィン。僕と美味しいお茶でも飲まないかい？」

エンポリオがリィンの肩に手を置いて笑顔で誘ってきた。

「エンポリオ、いつまで遊んでいるつもりだ。さっさと仕事に戻れ」

「じゃあさ、僕の仕事場見学に来ないかい？」

なおも彼はリィンに顔を近づけて目を細める。やはり、キツネに似ている。

「エンポリオさん、馬車を待たせておりますのでお早めに」

二人に言われ、盛大なため息をついて肩をすくめる。

「はいはい、分かりましたよ。ラディス、君はずるいな。クレイといいリィンといい。どっちか僕にくれても良いじゃないか」

クレイに促されエンポリオはやっと部屋を後にした。

「何だか変な人だな…」

リィンは素直な感想を口にする。

「気をつけろよ、あいつは女だろうが男だろうが関係ないからな。変態だ」

「あの人の仕事って？」

「製薬会社の責任者だ。あいつは見ての通りの貴族でな、仕事は出来ないが金は腐るほどある。資金援助の見返りに、その座についている」

以前にニコルが言っていた、ラディスも席を置く研究施設の事だろう。

それより、とラディスが続ける。

「お前、自分の『力』の事は知っているか？」

リィンは質問の意味が分からず、ラディスに目を向ける。彼は机に浅く腰かけ、腕組みをしてリィンを見下ろしていた。

「そりゃあ、知ってるよ。今更そんな…」

「シルヴィやゼストは、『力』の事について何か言っていたか？」

思いがけない程真剣な眼差しが向けられている。鮮やかな青の瞳が、鋭く観察する。リィンは記憶の糸を辿り、そういえば、と言葉を紡いだ。

「母様がずっと昔に言ってた。本当の『力』は人に知られてはいけないって。でも、『力』は『力』だろ？あんまり頻繁に使うなって

意味だと思うけど…。それがどうしたの？」

ラディスが視線を外す。

「そうか。それなら良い。そのブレスレットは当分の間外さないように。『力』を使う時は、中央の窪みを強く押せば腕から外れるからな」

「え…うん」

これ以上話す事はない、とでも言うように彼は背を向けてしまう。

リィンは訝りながらも席を立った。

部屋を出て廊下を歩いていると、クレイがこちらへやって来るのが見えた。

「リィン。薬が届いたので配達するのを手伝ってもらえませんか？」

「うん」

「玄関で待っていてください。とって来ますので」

リィンは居室にかけてあったフード付きのマントを羽織り、玄関口に立った。やはり外出する時にはこれをしていた方が、何かと具合が良いのだ。自分の右腕に嵌められたビーダ石のブレスレットを見つめる。触れるとひんやりとしてすべすべしている感触が伝わってきた。漆黒の腕輪。

ラディスはこれをイリアス族の人々の為に作ったのだ。

感情や意志で『力』を発動させるイリアス族にとって、その制御の

仕方を訓練するのは当然の事だ。しかし誰しも初めから完璧に使いこなせるものではない。『力』の制御の未熟さから、故意ではないにしろ人を傷つけてしまうという事態もある。
最悪の場合、犯罪者になってしまう事もあるのだ。
イリアス族は元来争いを好まず温厚な種族なのだが、世間の風潮が変化しない理由はここにもあるのだろう。
リィンにも良く分かる。人を傷つけてしまわないように、いつも気を抜かずにいるがそれでも不安に思う。だからこそ、今までは人との関わりを極力避けて生活していたのだ。
きっとこのブレスレットが完成したなら、イリアス族の人々はもう少し伸び伸びと、暮らす事が出来るだろう。

普通の人と変わらない生活。

当たり前の事が、どれだけ幸せな事か。きっと多くの人達は、それが幸せだと気付かずに生きている。

クレイが両肩に一つずつ大きな鞄を下げて廊下を歩いて来る。丈夫で軽い麻の生地で出来ているその鞄は、少し膨れていた。いくらか軽そうな方をリィンに差し出す。ずしり、と重みが手の平から伝わった。

「リィン、馬は？」

「乗れるよ」

「よろしい。では、行きましょう」

０１７：毒と薬と

診療所の一番近くにある一軒家に立ち寄る。そこには広い小屋があり、馬が四頭薄暗い小屋の中で出番を待っていた。その小屋のすぐ前に椅子に座って本を読んでいる老人が、ちらりとクレイを見やる。

「馬を二頭お借りします」

クレイは老人に声をかけて、硬貨を差し出す。
老人は無言で手の平を突き出し、クレイから金を受け取った。立派な白ひげと白い眉毛に覆われており、老犬を連想させる風貌だ。

「奥の二頭だ」

それだけ言ってまた本に視線を落とす。それから盗み見るように、リィンを見上げた。リィンは気付かないふりでクレイの後についてゆき、馬の前に立つ。
美しい毛並みの、立派な馬。とても落ち着いていて良く慣れてもいるようだ。

「きれいだ…」

思わず感嘆する。

「良く僕にも貸してくれたね」

荷物を固定し、馬の首筋をなでる。
きっとイリアス族だと分かったはずだ。フードをかぶってはいるが、完全に隠せるわけではない。あの老人は見上げるようにリィンを見

ていたので、この白い肌に気づいたはずである。

「そうですね、あの方には種族なんて関係ないのでしょう。馬に対する敬意があるかどうかで判断しているのでは、と思いますよ」

なるほど、人は色んな物差しを持っているらしい。

何を基準に判断を下すのか。それは、人それぞれであるはずなのだ。

リィンは思う。

その判断でさえ他人任せにしている人間の、何と多い事だろう。そして僕は何を基準に、判断をしているのだろう。何が善か、誰が悪なのか…。

「さあ、急がないと日が暮れてしまいますよ」

ベイルナグルの町に点在する宿屋や集会所を回り、薬を届けてゆく。鞄の中に入っていたのは、小さな瓶に密閉された薄緑の液体状の薬品だった。全て同じもので、各所に数本渡してゆく。リィンは不思議に思い、クレイに尋ねた。

「これ、どれも同じものだね。何の薬なの?」

「イグルの毒を中和する特効薬です」

「これがそうなの!?」

「ええ」

異形の化け物イグルは肉食の野獣に近い個体であり、動物のみならず人間をも襲う天敵である。しかも猛毒を有しており、傷を受けた

だけで体内に毒が回り、一晩のうちに必ずイグル化をして化け物へと変貌してしまうのだ。その為イグルに襲われた生物は、そのイグルの毒を上回る強毒性の注射を打たれ、命を絶つ。従来はこの方法以外に傷を受けた者を救う手立てはなかった。
それがこの特効薬の開発により、イグルに傷を受けても、すぐに処方しさえすればイグルの毒を中和して、イグル化せずに一命を取り留めることができるようになったのだ。画期的な開発である。

「この薬は、ルキリア国一帯にどこでも自生しているアグデント草から作られています」

「あの青い花をつける？」

「ええ」

「本当にどこにでもある草じゃないか」

「そうです。しかしこの特効薬を作るには、その他の多くの薬品と化合物を、厳正で的確な割合で調合しなければならないのです。その割合を、多くの学者や医師達が研究に研究を重ねて、やっと導き出したのです。広大な砂漠の中にいて、たった一粒の特別な砂粒を見つけるような、奇跡なのです」

「…すごい」

「この特効薬は薬学のエキスパートであるレーヌの研究員と、ルキリアの医師による共同研究によって八年前に開発されました。今現在でも、この薬の調合は難関中の難関で、世界でも数名にしか作り出す事ができないものなのです」

それはリィンもいつだったか聞いた事があった。元々レーヌ国は小さな島国であるが、その薬学たるや世界一を誇り、ルキリア国をはじめザイナスやロガートからも一目置かれる技術力である。そしてこの世界で医師という職業に就くには、レーヌ国から認められ、契約を交わさなくてはならない。薬品の多くがレーヌ産である。

「ラディス様はその数少ない、特効薬を精製できる方なのです。ルキリア国ではたった一人のお医者様です」

リィンは唖然とするが、クレイは誇らしげな表情で続ける。

「ラディス様は現在、その特効薬の更なる開発に取り組んでおいでです。今はイグルに傷を受けてから三十分以内に処方しないと効果が出ませんが、将来はもっと有力な特効薬が出来る事でしょう。
エンポリオさんのいらっしゃる製薬会社で、学者達と日夜研究に励んでおられます」

「…ラディスって天才か何かかな」

唖然としたまま呟く。クレイは苦笑して答えた。

「いいえ。あの方はとてつもない努力の塊のような方ですよ。しかし一つ言えるのは、あの方の嗅覚は人のそれを超えているようなところがありますね」

「嗅覚？」

「ええ。診療の時も、患者の体臭、臭いの微妙なズレや分泌物の割合によって病気を割り出す事があります。…それに、お茶に混ざる毒の匂いも瞬時に嗅ぎ分けられるのです」

「…どういう事？」

「ラディス様のお命を狙う輩には、毒を盛って亡きものにしようと企てる者もおりました。ことごとく失敗に終わりましたが…。着きましたよ。ここが最後です」

目の前に大きな四角い建物。立派な病院である。ラディスの家の三倍くらいはありそうだ。たくさんの窓があり、西日に照らされている。

馬を繋いで荷物を持ち、受付の女性にクレイが声をかける。すると女性は立ち上がり、広い廊下を歩き奥の部屋へと案内した。

「ロンバート先生、クレイさんがお見えです」

「おう」

女性は一礼をして引き返していった。クレイが扉を開いて中に入る。リィンにも入るように目で合図した。

「すまんなクレイ、そこに置いといてくれ」

「お久しぶりです。ロンバート先生」

書斎のような部屋で、植木鉢に水をやる男性がいる。

彼はこちらを見ずに片手をひらひらとさせた。初老で少し腹が出ており、よれよれのブラウスにだぶだぶのズボン。足元はつっかけのようなサンダル履きだ。ラディスに輪をかけたような、だらしない格好。

クレイがリィンに指示を出し、薬品棚の所定の位置に数十本の特効

薬を並べてゆく。

「おや、新顔かい」

振り向くとロンバートがリィンを面白そうに見つめていた。少し頬が赤く、人の良さそうな顔をしている。

「リィン、フードをとってご挨拶を。ロンバート先生は、この大病院の院長であられる方です」

リィンがおもむろにフードを外した。ロンバートは息を飲む。

「リィンと申します」

初老の医師はよろよろと二、三歩後ずさりをして、机に片手をついてから大きな笑い声をあげた。

「あっはっはっはっは。…こりゃ失礼。リィンだね、私はロンバートだ。老いぼれ医者さ」

まだ笑っている。リィンには何がそんなに可笑しいのか訳が分らない。

「こりゃあ、またこの町のお偉方に何を言われるか分からんぞ。クレイ、お前んとこの先生には全く、驚かされるばかりだな！」

◇◇◇◆

帰りの道すがら、クレイが説明をしてくれた。ロンバートという医師は、ラディスの診療所と提携をしている病院の院長であり、ラデ

ィスの革新的な診療システムに賛同を示してくれている一人なのだ。旧体制に異を唱えるラディスのやり方は、今までの概念を根底から覆すものだ。医学会や聖職者からも反感を買っている。

「しかしラディス様が今まで無事でいられたのには理由があるのです。先程お話した特効薬を精製できるのも、この国ではラディス様だけなのですから」

なるほど、だからこそ殺したい程憎んでいる存在ではあるが、そう簡単には手を下せないでいるわけだ。きっと悔しいに違いない。せめてこの国から出て行って欲しいと思って嫌がらせをするのだろう。もちろん、そんなものに屈する彼ではない。リィンはあらためてラディスの抜け目のなさに感服した。

馬を小屋へ返し、夕闇が迫る石畳の道を歩いてゆく。先を歩くクレイの足が止まった。

「…リィン。あなたに言っておかなければならない事があります」

ゆっくりと振り返る。緑がかった彼の髪が、風で揺れた。感情を映さない深緑の瞳が、真っ直ぐにリィンを見つめている。

「嫉妬に狂った人々の中には、前後を考えずにラディス様のお命を奪おうとする者がいます。ルキリア皇族のトワ元王妃もその一人です。それに、医師を兼業しているルーベン司教。彼らこそ気をつけねばなりません。ラディス様の護衛としてあなたは知っておかねば」

リィンは顎を引き頷いた。より一層厳しい表情になり、クレイが質問する。

「人を斬った経験はありますか？」

「…まだ、ない」

人を刺した事ならある。過去にラディスを手にかけた嫌な感触が蘇った。それに『力』を人に向けて使う事さえ、今まででは稀な事であった。リィンは事の重大さに気づき、両手を握り締める。

そういう事か。

「…ラディス様の剣を見た事はありますか？あれは特注品の特別な剣なのです」

「え？」

あるにはある。以前に戦った時だ。でもあの時はそんな余裕はなかった。ラディスは鬼のように強い。それこそ護衛なんていらないのではと思う程だ。

しかし次にクレイから聞かされた事実に、リィンは自分の耳を疑った。

「あの剣で人は斬れません。そのように出来ているのです。怪我を負わせる事は出来ても、それは打撲程度でしょう」

「…そ、そんな！」

「ラディス様は剣の達人です。ですが決して、人を斬るなんていう真似はしない。あれはあくまで、悪い連中を寄せ付けない為のパフォーマンスであり飾りのようなものなのです」

静かに瞳を閉じて、続ける。

「私はラディス様から剣を教わりました。そしてラディス様の護衛としてお傍に仕えようとしましたが、それを許していただけなかった…」

クレイは痛みをこらえるように眉間にしわを寄せた。

「私には人が斬れないと。そんな事をしてはならないとおっしゃるのです」

リィンは喉がひりひりと干上がってゆくのを感じた。背筋に汗が伝う。

では僕に、人が斬れるのか？
ラディスを護る為にはそれが不可欠なのではないか？

「ラディス様は護衛としてあなたを雇いましたが、それは形だけです。イリアス族を雇うには、周囲の納得がいくように≪護衛≫と言った方が良かったからにすぎません。
…ラディス様は最初から、あなたに護衛としての仕事をさせようとは思っておられないのです」

リィンは言葉を失った。

「あの方は優しすぎるのです。そして強すぎる。だからこそ、私は心配でたまらない」

クレイが思いつめたような眼差しを向ける。

「私は、あなたに本当の護衛として、ラディス様に仕えていただきたいと願っているのです」

空気が凍りついて時が止まる。

「ぼ、僕は…」

クレイが静かにリィンの言葉の先を待つが、沈黙が辺りを包んだ。どうしても次の言葉が出てこない。

「…すみません。差し出がましい事を言ってしまいました。忘れてください」

背を向けて歩き出す。遠く診療所が見えた。薄暗い森を背に無言で佇む建物。二階の書斎に灯が入っているのが見える。そこでラディスが今も仕事をしているのだろう。リィンは石畳の道の上で、動けずにいた。遠くなっていくクレイの背中。脳裏にラディスの美しい寝顔が浮かんだ。胸の烙印。なんて強い。

僕は、彼を護れるのだろうか…。

０１８：孤高の強さ

その日の夜、普段よりは早い時間に寝室の扉が開いた。リィンは何となく寝たふりをして、ラディスの様子を窺う。
ガタン、と椅子を引く音。
どうやらまだ寝るつもりはないらしく椅子に腰をかけているようだ。
それきり、何の音もしなくなった。リィンは彼が椅子に座ったまま寝てしまったのかと思い、のそりと起き上がる。

月明かりが青白く室内を照らし、薄く開けた窓からゆるやかな風が入る。椅子に座るラディスは、何をするでもなく窓の外をぼんやりと眺めていた。風が彼の薄茶色の髪を僅かに揺らす。長い足を組んで、その上に両手を組んで乗せている。
青い瞳は遠くを見ており、瞳の奥の黄金色が月光に照らされ輝く。

リィンは見惚れていた。

息を飲む程に幻想的な情景。
ラディスの整った容姿が際立ち、夢の中の人物であるかのような錯覚を抱く。現実離れしている。
しかしその表情は美しいあまりに線が細く、か弱く見える。普段の彼の、堂々としていて飄々とした雰囲気は欠片もなかった。繊細でどこか悲しげにも見える。少し不安になりそっと声をかけた。

「ラディス？」

「…起こしたか」

「ううん。まだ寝てなかった。どうしたの？」

「ちょっと煮詰まってな」

そう言いながら大きく伸びをする。

「もう寝たら？あんたちょっと働きすぎなんだよ」

「まあ、そうだな…」

しかしラディスはそこを動こうとはせず、窓の桟に肘をつき頬杖をついたまま、また遠い目をする。

「何だかとても疲れてるみたいだ。老けて見える」

リィンの憎まれ口にも彼は鼻で笑うだけで、いつものように言い返してはこない。大きなベッドの上で、両膝を抱えてラディスを見守る。

「…あんたは、人を恨んだりしないの？」

「そんな暇はない」

事もなげに言う。

やっぱり分からない。

嫌がらせをする人達や、ラディスに熾烈な運命を背負わせた元王妃。

自分ならきっと恨む。復讐を考える。

だってラディスは何も悪い事をしていないのに。

「辛くなかったの？苦しくないの？どうしてそんなに強くいられる

んだよ。何もしていないのに奴隷に落とされて、母親だって殺されたようなもんじゃないか。酷い奴らをそのままにして良いのかよ。…悔しくないのかよ！そんなの、僕は納得できない！」

リィンははっとして、口を噤んだ。憤りのままに言葉を吐き出してしまった。

「…ごめん」

「クレイに聞いたか」

ラディスは視線を窓の外からリィンに向けて、落ち着いた声で言った。

「辛いし苦しいに決まってる。俺は別に何も感じないわけじゃない」

青い瞳が真っ直ぐにリィンを射抜く。それだけで、リィンの鼓動は早くなってしまう。

「だが幸いにも俺はこうして生きている。周りの人達のお陰でな。そこに全ての意味がある。

…しかしなあ、このベイルナグルに診療所を置いたのは完全に当て付けだ」

薄く笑って視線をまた窓外に向け、低く呟いた。

「この国の腐った価値観などひっくり返してやる。この命はその為に使う」

種族や身分、地位で、人の価値は判断されるものではない。

彼自身が間違った価値観の最大の被害者だ。しかしその最下層から自分の努力と実力だけで、ここまで這い上がって来た。そして更に周囲の人々の考え方さえ根底から揺るがしている。彼の理念に賛同する人々に、次期国王アルスレイン。
彼にとってこの事こそが、復讐なのかも知れない。
リィンは少しだけラディスという人間の事が、分かったような気がした。

ラディスが盛大なため息をついて、がっくりとうなだれる。

「だめだ！考えが全くまとまらん。お前が変な事を聞くから、余計ややこしくなった」

「僕のせいかよ」

少し可笑しくて、リィンは笑った。

「リィン」

「何？」

「あの子守唄歌ってくれ」

「な、何で！嫌だよ」

ラディスが上目でぎろりと睨む。いくら凄まれても、嫌なものは嫌なのだ。人前で歌うなんて恥ずかしい。リィンはぷいとそっぽを向いた。するとラディスが呟く。

「…借金」

なんていう奴。

恨めしそうにラディスを睨むが、彼は顎をしゃくって促す。リィンは両膝を抱えたまま、ゆっくりと息を吸い込んで目を閉じる。

「かぜのこえをきいて
　みちしるべはこころのなかに…」

月明かりに照らされた部屋に、囁くようなリィンの歌声がしみ込んでゆく。ラディスはまた頬杖をついて、窓の外を見つめる。

彼が幼い頃に聞いた、子守唄。
思い出の中にあるシルヴィの歌声が重なる。
優しくて美しい、そして力強い旋律。
思い返せばあの施設にいた時だけが、心の休まる時だったのかも知れない。

皮肉なものだ。

「…きみへのあいを
　だいてしずかにめをとじよう」

薄く目を開けてラディスを見ると、彼は頬杖をついたまま眠っていた。

「なんだよ。人に歌わせておいて」

リィンはむっつりとしながら、シーツを掴んでラディスにそっと近づき、ふわりとそれをかける。自分はベッドに敷いてあるシーツを

少し剥いで、それにくるまるようにして眠った。

◇◇◇◆

早朝、リィンは目覚めてすぐに勢い良く起き上がり、急いで身支度を整えて部屋を出た。診療が始まる前に、伝えたい事があった。
居室の扉を開けると、ニコルが台所で料理の仕込みをしているのが見えた。

「あら、随分早いのねえ。おはようリィン」

「おはよう」

ニコルに笑顔で答える。
テーブルを見ると、ラディスが片手にティーカップを持って立ったまま茶を啜っている。その脇には席について眠そうにしているクレイ。やはり不機嫌そうだ。

「なんだ、珍しい事をするなよ。雨が降るだろう」

ラディスの軽口にニコルが楽しそうに笑った。
リィンはテーブルを挟んだ向かい側に立ち、彼を見上げる。

「ラディス。僕をあんたの護衛にして欲しい」

「は？もうなってるだろう。契約書でも見たいのか？」

「それはそうだけど、そういう意味じゃなくって」

クレイが僅かに目を大きくしてリィンを見上げた。

リィンはどう言ったら伝わるのか分からず、とにかく言葉を続ける。

「だから、僕があんたを護る。ちゃんと護衛として僕を使って欲しいんだ。ラディスは僕が命をかけて護るよ。あんたが死ぬ時は、僕が死ぬ時だ」

部屋がしん、と静まり返った。

クレイは驚いたまま固まり、ニコルは両手を頬に当てて目を丸くしている。

ラディスは一瞬、虚をつかれた顔をして、あろうことか爆笑した。

リィンの顔がみるみる真っ赤に染まってゆく。

「な、何だよ！僕は真剣だぞ！」

ラディスは持っていたティーカップをテーブルに置いて、腹を抱えて笑っている。

「お、お前が…！何を言いだすかと思えばっ…」

「笑うなよ！」

「そうですよ、先生。リィンが可哀そうだわよ」

ニコルもリィンに加勢する。

ひとしきり笑い、息を整えてから真剣な表情を作り、ラディスはリィンに向き直った。

「断る」

途端にリィンの顔が青ざめる。

「何で！」

「今のお前ではかえって足手まといだ」

「僕が未熟だからか」

「まあ、そういう事だ。クレイ、行くぞ。…くく」

明らかに笑いを噛み殺しながら、ラディスは部屋を出てゆく。クレイはちらりとリィンに視線を向け、無言のままラディスの後に続いて退室した。

あとにはむっつりとしたリィンが残され、ニコルが心配そうに見つめる。

「僕は諦めないぞ」

リィンはぼそりと呟いて、それからニコルに笑顔を向けた。

０１９：野菜と大家族

その後チェムカもやってきて、すぐに診療が始まり慌ただしい一日がスタートした。今日も診療が昼過ぎには終える予定で、それ以降ラディスにはまた往診の予定が入っている。リィンはフル回転で洗濯や掃除を済ませ、ニコルと料理をし後片付けをこなす。
今日こそはだめだと言われても、護衛として一緒に行くつもりだ。
全ての用意を済ませ、居室で待機する。
そんなリィンの様子を見てニコルが微笑んだ。

「リィンったら、どうしたんだい急に」

「だって、僕に出来るのはそれくらいだもの。イリアス族の『力』だって、人を護る為に使うなら良いものだろ？」

それに、きっとラディスを護るのは運命ではないかとさえ思われるのだ。昨夜色々と考えて出した答えだった。
ゼストが何を考えて、この診療所を最後に目指したのかは分からない。でもそこで出会った医師は、ルキリア皇族でありながら強い信念の元、不条理な差別と戦い続ける人であったのだ。しかもリィンの父や母とも面識がある。イリアス族を守ってくれる。それにリィン自身も何度となく救われている。こんな偶然があるだろうか。

「それなのに、何でラディスは笑うんだろう」

「どうしてだろうねえ」

ニコルは首を傾げながら答える。

「でもねえ、リィン。あたしは嬉しい」

「え？」

「確かにリィンは先生から見れば、未熟かもしれない。だけど、あんな言葉を言ってくれた人は今までいなかったわ」

たいていの人は皆、あの先生に護られる側の人達だから。全ての矢面に立つ先生には、護るべき人はたくさんいても、護ってくれる人は一人もいないもの。

「未熟でも何でもリィンは格好良いわ。あたしがまだ若かったら、好きになってるわよ」

リィンは少し照れながら、ありがとうと言った。

「それにしても、すごい量の野菜だね」

テーブルの上には色とりどりの新鮮な野菜が入った、大きな籠が置かれている。ニコルの自宅には広い庭があり、そこで野菜も作っているのだ。今朝はたくさんの野菜をニコルの主人が背負って持って来たのだった。

ニコルはこの診療所より東へ下がった辺りに広がる住宅地に住んでおり、二人の息子達も既に独立し今は主人と二人暮らしをしていた。ニコルの主人は土木と家造りの職人で、年は六十を過ぎているはずだが、屈強な身体は健康的に日焼けをしており、今でも現役で仕事をこなす。この診療所の補修なども請け負っていると聞いた。二人の息子達も父の背を見て育ち、腕きき の職人として活躍している。

「こっちの分はチェムカにおすそ分け」

そこへ診療を終え片付けを済ました三人が戻って来た。

「うわあ、美味しそうな野菜だべ」

感激の声を上げるチェムカ。

彼女は七人兄弟の大家族の長女だ。

父親を病気で亡くし、母と家計を切り盛りしながら下の弟や妹達の面倒を見ていて、たまにニコルが作った野菜を持って帰ったりしている。

「ニコルんとこの野菜は新鮮でうめえから、弟達も喜んで食べんだわ。いっつもすまねぇす」

「良いんだよ。でもねぇ、ちょっと張り切って持って来すぎたかしら。これじゃあ重いわね」

「んだなあ。馬借りて一辺戻ってこようか」

「リィンに持って行かせれば良い」

ラディスが話に割って入る。リィンは少し慌てた。

「えと、でも僕ラディスのお供もしなくちゃ」

「お前はこの診療所の護衛でもある。って事は、ここで働く者の護衛だろ」

「そ、そうだけど」

ラディスはリィンが出た後に、外出する気だ。それが分かっているからリィンは粘った。

「お前、こんな重いものをチェムカに持たせる気か」

少し面白そうにラディスは言い募る。

「そったら事、あたすはへいちゃらだけども」

チェムカが眉をハの字にして困った顔をした。その姿を見て、リィンは決断する。

「分かった。僕が行く。でも僕が帰って来るまで、ラディスはここにいろよ！」

ぷっとラディスが噴き出した。ニコルも楽しそうに微笑んでいる。

「クレイ、僕が帰るまでちゃんと見張っててよ！」

クレイは、はい、と生真面目に返事を返した。
たくさんの野菜が入った籠を両手に抱えて、リィンが歩き出す。

「チェムカ、行こう」

「では皆さん、お先に失礼しますだ」

◇◇◇◆

「大丈夫けえ、重くねえだか」

「大丈夫。僕結構力持ちだから」

チェムカの家は広場を通りすぎて、西に十ナルグ程行ったところにある。石畳の道を二人で歩く。

「リィンって本当に綺麗だわなあ」

突然チェムカが呟いた。

「綺麗なんじゃないよ、珍しいだけさ。どうしたの急に」

広場に近づくにつれて人が増えてゆく。リィンはいつものマントを羽織ってこなかった事を少しだけ後悔した。すれ違う人が、リィンを見て怪訝な表情を浮かべる。

「あたすは綺麗だと思う。真っ白な肌だってすべすべだし、栗色の髪もつやつやだ」

それに比べたら、とチェムカは沈んだ声を出した。

「あたすはほら、肌だって日に焼けてるし、それにこの灰色の髪。おばあさんみてえであんまし気に入ってねんだわ」

リィンは心底驚いた。誰かに何か言われたんだろうか。いつも明るいチェムカだが、そんな風に自分の容姿を思っていたなんて。

「どうして！僕は好きだよ、チェムカの髪。銀色でとっても綺麗だ」

チェムカがリィンを見つめる。

「その肌だって健康的じゃないか。チェムカはとっても可愛いよ。僕が保証する」

うん、と頷きながら歩くリィン。呆然とその場で立ち尽くすチェムカに気づかずにどんどん先へゆく。

「い、いやだ～。リィン、そったら褒められたら恥ずかしいでねえの！」

そう叫んでチェムカが小走りに近寄り、力任せにバシン、とリィンの背中を叩いた。その拍子にリィンはよろける。

「ってて」

「あんがとね、リィン」

にっこりと笑うチェムカ。叩かれた意味は分からないが、つられてリィンも笑顔になる。

そうこうするうちに、チェムカの家がすぐ目の前に見えてきた。広場から続く通りの、そのまた脇道に階段があり、下に降りたところにも住宅地が広がっている。その一軒、黄色い屋根をした石造りの家。

「っあー！チェムカが帰ってきたあ」

家の前で砂遊びをしていた小さな子供が、チェムカを見つけて大声をあげた。一緒に遊んでいた子供も立ち上がり、叫ぶ。

「チェムカだー！」

「これ、姉ちゃんをつけろって言ってるだろが」

チェムカが大きな声でそれに答える。わらわらと家の中から子供が三人飛び出してきて、合わせて五人それぞれが一斉に走り出した。

「あー！ニコルの野菜だあ！」

「ニコルの野菜！」

「なんか変な人がいるー」

「変な人ぉー」

リィンはその迫力に気押されて、その場に立ち止まった。あっという間に子供達に取り囲まれる。年齢はそれぞればらばらで、上は十歳くらいから下は三、四歳といったところだろうか。

「あ、これ俺知ってる！イリアス族だ！」

「私だって知ってるもん。イリアス族」

「しろーい」

「あかーい」

全員が至近距離でリィンをのぞきこみ、小さな子がぺたぺたとリィンの腕を触る。まるでチェムカがたくさんいるみたいだ、とリィンは思った。物珍しそうにリィンを見つめるその反応は、素直すぎて嫌味を感じない。

「これ！おめえ達、失礼でねえか！」

チェムカが大きな声で叱る。リィンは笑いながら、

「良いよ」

と、また歩き出した。

賑やかなまま家の玄関口まで行くと、奥からチェムカの母親が顔を出す。チェムカと同じ灰色の髪を束ね、背の高い彼女はスレンダーな体型をしていた。チェムカが年をとったような顔。親子だと一目で分かる。リィンを見て目を輝かせた。

「あんたがリィンさんさね。いつも娘がお世話になって」

「い、いえ僕の方こそ」

大きな籠を、チェムカの母は軽々と片手で持ち上げる。

「わざわざこれ持ってきてくれただ」

「まあまあ、そったら申し訳ねえ」

「いえ、良いんです」

「まあお茶でも一杯。何にもねえ所ですけども」

そんなやりとりをしていたら、奥から勢いよく少年が飛び出してきた。チェムカの母を押しやり、強引に外へ出て、そのまま走り去ろうとする。

「レッジ！どこ行くだ！」

銀色の短髪を空へ向けてツンツンと立たせた少年は、ちらりと振り返り、無言のまま走っていった。

「レッジーどこ行くのー」

「ばいばーい」

小さな弟達がそれを見送っている。リィンが不思議そうにその少年の後ろ姿を見つめていると、チェムカが困った声で説明してくれた。

「あれはあたすのすぐ下の弟のレッジだ。十五で反抗期なんだべ。最近町の良くない連中と遊んでるみたいで、ちょっと心配だ」

それからリィンはお茶の誘いを丁重に断り、まとわりついて来る小さな弟や妹たちを何とか振り切り、急いで診療所へ引き返した。

０２０：王女の気まぐれ

診療所ではクレイが一人、小さな紙束を睨んで計算をしていた。どうやらニコルもすでに帰宅したらしい。

「ラディスは！」

肩で息をしながら尋ねる。クレイは無表情のまま告げた。

「お察しの通りです」

案の定、リィンの帰宅を待たずにラディスは既に外出していた。しかしリィンは諦めない。

「僕、これから町へ行くよ」

「リィン、留守番をお願いしたいのですが。ラディス様に頼まれて、エンポリオさんの所へ薬品をとりに行かねばならないのです」

リィンは焦れながら早口で言い放つ。

「じゃあ、それ僕がやるから！」

クレイは少し困った顔をした。

「…デリザーム化硝酸とアグデントの粉末に、ジェンダーの肝の…」

「…分かった。留守番するよ」

「すみません。私が護衛を頼んでおきながら。ラディス様もそう簡単には認めてくれませんね」

ため息をつく二人。

「良いんだ。僕は絶対にラディスを護ると決めたから。諦めないよ」

「…たとえ、ラディス様を護る為とはいえ、相手を傷つける事になってもですか？」

「覚悟の上だ」

間髪を入れずにリィンは答えた。それもさんざん考えた事だ。

「頼もしいですね。ありがとうございます」

クレイは丁寧にお辞儀をし、眩しそうにリィンを見る。

「少し無謀でも、あなたのような人が、あの方には必要なのかもしれませんね」

そう言い置いてクレイは出ていった。リィンは顔を赤くして、赤くなっている自分に驚く。それから何故赤面しているのか分からなくて、首を傾げた。

クレイが外出してから数分とたたないうちに、玄関口が何やら騒がしくなった。馬車が診療所の前で止まり、人の話し声が聞こえる。すぐに玄関の呼び鈴が鳴り響いた。

「ラディス！いないの？」

リィンは少し気分が落ち込んだ。あの声は、ルキリアの皇族、国王の娘、エリナ王女の声だ。

しぶしぶ扉を開くと、エリナが両手を腰に当てて、顎を上向けた格好でリィンを睨みつけた。背はリィンよりも低い。今日は金色の髪に、紫色の宝石が嵌め込まれた髪留めをつけている。薄桃色のブラウスに上品な黒の膝丈スカート、黒のタイツに真っ赤な革靴。

「いるなら早く出なさい。ラディスは？」

「往診で外出中だよ。今家には僕しかいないけど」

「貴様、エリナ王女に何という口の聞き方をするのだ！」

背後にいる大男を見上げ、リィンの身体は凍りついた。ルキリア帝国軍の大佐、ウォルハンドである。

紺色の軍服ではなくブラウスに黒のズボンといった服装であるにも関わらず、異様な殺気は以前と変わらない。額にある傷痕が、恐ろしさを一層際立たせている。

「それに、近すぎる。下がれ蛮族め。イリアス族の分際で、何という許しがたい行為だ」

ウォルハンドは猛禽類のような鋭い目つきでリィンを見下ろし、腰に差した剣の柄に手を添えた。

「もう、ウォルは黙っていて！話が進まないじゃない」

エリナが振り返りウォルハンドを見上げる。彼は一瞬困ったような顔をして、それからエリナに頭を下げた。

「ひどいわ、ラディスったら！今日は私の買い物に付き合ってくれるって言っていたのに。約束を破られたのは何度目かしら、ねえナナン」

ウォルハンドの大柄な体躯の影に隠れてしまっていた女性の従者が、背延びをしてそれに答える。

「はい、えーと、十三度目になります」

「何だと！あの下賤め、生かしてはおけん」

生真面目な軍人は本気で怒っているようだ。

「良いのよウォル。ラディスは特別」

リィンは早く帰って欲しいと心の底から願いながら、そのやりとりを見守っていた。

「それに今はクレイもいなくて、お前しかいないのね」

お前呼ばわりされてむっとするが、無表情を装う。

十五のくせに、ませた女の子だな。あ、チェムカの弟と同い年じゃないか。

エリナがぐっとリィンに近づく。ウォルハンドが背後で警戒を強めた。エリナはリィンを品定めするかのように、視線を投げ、鼻から息を吐き出しながら言った。

「いいわ。お前、私についてきなさい」

「は？」

リィンは目を丸くする。言っている意味が分からない。ウォルハンドが固い表情のまま、エリナを諭すように語りかけた。

「いけません、エリナ王女。あなたのような高貴なお方が、イリアス族のような下等な人間を連れて歩くなんて」

「…どういう意味だ」

さすがにリィンも我慢の限界である。

エリナはウォルハンドもリィンも無視して、話を進める。

「もう私は決めたの！今日のお供はお前よ。感謝しなさい、お前のような者が、この私に選ばれたのだから」

リィンは不機嫌な声のまま答える。

「僕は行かない」

「…貴様。今すぐに死にたいらしいな」

「…僕みたいな下等な人間つれちゃいけないんだろ」

「エリナ王女の、いや、ルキリア皇族の命令は絶対だ」

呆れて声も出ない。どうやらこのウォルハンドという軍人は、ルキリア皇族の熱狂的な信奉者らしい。

「そうね、この診療所を空にしておくのもいけないわ。ウォル、あなたがここで留守番していなさい」

周囲にぎらぎらと獰猛な殺気を放っていたウォルハンドが、唖然とした表情を浮かべる。

「なりません。私はエリナ王女の護衛として来ているのですから」

「護衛ならこのイリアスがいるから良いわ。あなたを連れているとゆっくり買い物ができないの。さ、行くわよ」

金色の髪をなびかせてエリナが踵を返し歩き出す。ウォルハンドはそれを呆然と見つめ、リィンは仕方なくマントを手に、後に続いた。

「…エリナ王女を、命をかけてお護りしろ！」

なんで僕が。

そうしてエリナ、リィン、従者のナナンは馬車でベイルナグルの繁華街へと出掛けていった。

◇◇◆◆

ベイルナグルの中央広場から西南に伸びる通りには、豪華な洋品店や装飾品を売る店が軒を連ねている。

エリナは一軒ごとに馬車を店の前まで乗りつけ試着を繰り返し、たくさんの買い物をしてゆく。リィンは店内には入らずに、出入り口で待機しているだけだ。

先程から大きな声で店の主人とナナンが、いかにその服がエリナに

似合っているかを褒め称えていた。リィンはちらりと窓から店内を見る。真っ白なドレス風のワンピースを身につけているエリナ。裾に小さな宝石がちりばめられており、それがきらきらと輝いている。確かに金色の艶やかな長い髪に、とても良く似合っていた。

リィンにはきっと、今までもこれからも、縁のないものだろう。女性である事を隠して生きていかなくてはならないリィンにとって、自分を着飾る事は多分この先もない。もしかしたら一生ないのかも知れない。しかしリィンだって、本当は興味がないわけではないのだ。繊細な細工を施した髪飾りや、肌ざわりの良いスカート。お洒落をする楽しさも知らず、自分の容姿に気を使う時間さえなく、十八年間を生きてきた。

窓ガラスに、暗い色のマントを纏い、目深にフードをかぶった自分が映る。

目線を先へ向けると、エリナが優雅に一回転してみせている。きらきらと光るワンピースが眩しくて、リィンは顔をそらした。俯くと、土埃で汚れた自分の靴先が見える。

この先、女性として生きていくという選択肢が、果たしてあるのだろうか。誰かを愛し、愛される日が来るのだろうか。

分からない。

どうして自分は、女として生まれてしまったのだろう。

いっそ男なら良かったのに。

「ねえ、お前。これどう思う？」

扉を開け、真っ白なワンピースを着たままのエリナが顔をのぞかせ

ている。

「僕はお前じゃなくて、リィンだってば。…よく似合ってる。綺麗だよ」

エリナは満足げににんまりと笑い、また店の中へ消えた。こうしてみると、ルキリアの皇族とはいえ普通の十五の女の子である。こうやって実際に接してみるまで、その当たり前の事がリィンには分からなかった。ルキリア帝国の政府、ルキリア軍、そしてそれを統べる皇族によって迫害され続けていたイリアス族ならば、彼らを悪魔のように思うのは当然の事だ。現にその政策や、奴隷制を作った過去の行いは、血の通っていない卑劣で非道なものなのだから。

しかし、とリィンは思う。

僕が憎むべき相手は、この少女ではないのだ。きっと。

大きな荷物を抱えてナナンが出てくる。それを追い越すようにしてエリナがリィンの傍へやって来た。

ナナンが馬車に荷物を運びながら、エリナに声をかける。

「エリナ様、そろそろお戻りにならないと。ウォルハンド大佐が心配いたしますわ」

リィンは横にいるエリナを見た。

その瞬間、エリナがリィンの腕を掴み、馬車とは反対の方向へ全速力で走りだした。

「ついて来て」

「え、ちょっ…」

引きずられるようにして、転びそうになりながらリィンも走り出す。
その足音を聞いて、ナナンが馬車から飛び降りた。

「エ、エリナ様！」

すぐ近くの曲がり角を折れ、エリナとリィンの姿は一瞬で消えてしまった。ナナンは顔を真っ青にして走り出す。

「エリナ様ぁー！」

０２１：小さな逃避行

「な、何するんだ！」

両膝に手を当てて、ぜいぜいと息をする。エリナも胸に手を当てて呼吸を整えていた。あれからエリナはずっと全力で走り続け、見失うまいとリィンも必死に追いかけた。たくさんの通りを横切り、角を曲り、今は町のどこにいるのかさえも分からなくなってしまっていた。

「早く戻らないと…」

「だめよ！」

リィンのマントを掴み、エリナが見つめてくる。

「どうして。僕が君を誘拐した容疑をかけられてしまうだろう！？」

「ちょっと町を散歩するだけよ。良いでしょ。いつもナナンと一緒だから、たまには息抜きも必要なのよ」

エリナがきょろきょろと辺りを見やる。ここは小さな広場で、こじんまりとした噴水がちろちろと水を流している。広場の周りには規模は小さいが様々な商店が並んでいた。

エリナが、あ、と言って駆け出してしまう。

「エリナ」

リィンは困り果て、仕方なくエリナの後を追った。

「ねえ、これ買って。私これが食べたいわ」

パンケーキを売っている店の前で、エリナがリィンを振り返って言った。ここでは当たり前に食べられているおやつのようなもので、トッピングを様々なフルーツから選べ、買ってその場で食べられるようになっている甘いお菓子だ。リィンもニコルの荷物持ちで市場へ行った時に買ってもらって、二人でそれを食べながら歩いたりしている。

「一つ二十フィルだよ」

女性の店員がぶっきらぼうに告げた。

リィンは泣く泣く自分の少ない所持金を出して、一つ買った。エリナは奪い取るようにしてリィンの手からそれを持っていった。

「美味しい！」

嬉しそうに頬張るエリナ。

「それ食べた事ないの？」

「こんなの、皇族が食べるものじゃないって、皆言うわ。ずっと食べてみたかったの」

すぐ傍に石垣に囲まれた水路がある。ベンチに座ってエリナは遠くを見つめた。視線の先には若い恋人同士が、肩を寄り添い合うようにして会話を楽しんでいる。

「…私は二十歳になったら、結婚しなければならないのよ」

ベンチの横に立つリィンは驚いてエリナを見下ろす。
彼女の横顔は、怒っているように見えた。

「皇族の女性はね、政略結婚をしなくちゃいけないの。私もそう。見た事もないザイナスの大富豪の息子と、結婚するのがもう決まっているのよ」

「そんな…」

「馬っ鹿みたい！」

エリナは両足を前へ投げ出す。

「お父様は私の事なんか、何とも思っていないんだわ。兄様だけがいれば良いんだもの！お母様も、いっつもお父様の言いなり。私はそんなの絶対嫌よ！」

私は素敵な恋をして、大好きな人と結婚するんだから！

リィンは複雑な心境でいた。
恵まれていて、貧困を知らずに優雅に生きている少女。差別も知らず、苦労も知らない青い瞳。なのに、決して全てが満たされているわけではないのか。
きっと相手はリィンでなくても良かったのだろう。エリナは自分と近い年代の、皇族に関係のない人間に愚痴をこぼしたかったのだ。

「…エリナだったら大丈夫だよ。きっと出来る。だって可愛いだろ」

エリナは少し顔を赤くして、睨みつけてくる。

「当り前よ！」

こんな時でも勝気なエリナが少し可笑しくて、リィンは笑った。

「お前って不思議。イリアス族は野蛮で危ないって聞いていたけど。そのイリアス族なのに、不幸な顔をしてないのね」

「何だよそれ。野蛮だって言いふらしてんのはルキリアの政府じゃないか。そんなのでたらめだ。それにイリアス族がなんで不幸顔なの」

「だってそうでしょ？この世の中で一番不幸な種族だわ。自分の還るべき土地を持たずに生きている」

リィンはフード越しから真剣な表情で、エリナを真正面から見つめた。

「な、何よ」

「イリアス族は、気高い種族だ。今までどんな迫害にも屈しなかった。怒りにまかせて、この『力』を人を傷つける為に使ったりもしない」

「私だったら、使ってやるけど」

少し前までリィンもそう思っていた。でもそれは間違いだと気づいた。それで人を傷つけても、心は晴れなかったからだ。

「人が幸か不幸かなんて、還る土地があるかどうかとか、そんなもので決まらない」

「…分からないわ。どう見ても不幸よ」

「幸せかどうかは、その人の心の強さで決まる。だって心が強かったら、どんな事が起きても負けずに立ち向かえる。どんな些細な事にでも感謝できるようになる。心が強かったら、きっと環境だって変えていけるんだ」

ラディスを見ていると、そう思える。
どんなに辛い境遇だろうと、心が折れなければ、それは乗り越えるべき壁になり人生の糧となる。
強ければ、周りの大事な人達も守っていける。
そしてそうなる為に、僕はもっと強くなりたい。

じっとエリナを見つめていると、彼女の頬が少しずつ赤く染まってゆくように見えた。

「どうしたの」

リィンが声をかけると、エリナはそっぽを向いた。

太陽が傾き、朱に色づいている。本当にもうそろそろ帰りの道を見つけなくては。
エリナを促して歩き始めた時だった。

「へえ。珍しいもん見つけちまったなあ」

目の前に、二人の若者が立ちはだかる。ごてごてとした鎖を腰に巻きつけた奇抜な格好をして、耳や鼻にぎらぎらとピアスをつけていた。
気配を探ると、後ろには三人。ゆっくりとリィン達を囲むように近づいてくる。

「おいおい、これってえ、貴族じゃねえ？」

相手が馬鹿で良かった。どうやら皇族だとは気付いていないらしい。
若者の一人が口笛を鳴らし楽しげに言った。

「誘拐とかしちゃったらさ、金稼げるんじゃねえの」

エリナが臆する事なく、両手を腰に当て、つり目の瞳を更に釣り上げて言い放った。

「無礼者！下がりなさい！」

凛とした声が響く。

「何だこいつ。自分の置かれてる状況、わかってんの？」

若者が、示し合わせたように短剣を光らせた。一人は長剣を持っている。エリナはその鋭い光を見て、後ずさった。

「わ、私を傷つけたら、大変な事になるわよ！」

一斉にげらげらと若者達が笑い声をあげた。

「やってみろよ、ガキ二人に何ができるっていうんだ」

エリナの肩が震えている。
リィンはその肩を力強く引き寄せて、囁く。

「大丈夫だ。君は僕が守る。ラディスの大事な友人だから」

エリナが怯えながらリィンのマントを掴む。リィンはゆっくりとフードをとった。五人の若者はリィンの姿を見て、一瞬たじろぐ。

「何でこんなとこにイリアス族がいんだよ！」

「化け物じゃねえか」

「こっちは五人で相手はガキだぜ！やっちまえ！」

長剣を持った一人がリィンに向かって走り出した。その相手を睨みつけると、瞳が一瞬で深紅に燃え上がる。リィンは『力』を発動させた。
…はずだった。

「あれ、『力』が出ない」

「どういう事よ！」

素早くリィンは剣を抜き相手の剣を受け止め、そのまま力任せに弾き返した。ガキン、と鈍い金属音が響く。何と一撃で相手の剣が折れてしまった。腕も悪いが、剣も相当の粗悪品だったようだ。

「畜生！」

若者達がどよめく。

「リィン、『力』が出ないってどういう事！？」

小声で詰め寄るエリナ。リィンは右腕に嵌められているブレスレットの存在を、やっと思い出した。

見ると少し亀裂が入っている。そのせいか、中央の窪みをいくら強く押しても外れる気配がない。

「…歪んでブレスレットがとれない。これ外さないと、『力』が使えないんだ」

「ちょっと！どうするのよ！」

若者二人が奇声を発しながらリィンに向かって駆け出してくる。

リィンはエリナを背後に隠し、もう一度、強く念じた。

≪吹き飛べ！≫

二人の動きがぴたりと止まった。ブレスレットに亀裂が入ったせいで、『力』が戻りはじめている。

「く、くそお」

「身体が動かねえ！何だこれは！」

横から別の一人が斬り込んで来た。リィンは目の前の二人に『力』を発動させたまま、剣を振るってその一人をなぎ倒す。

「ぎゃあああ」

大きな声をあげて転がった。リィンは一瞬、怯む。

斬った。人を。

ただ、深手ではないはずだ。

刃先に血が付着している。エリナがリィンの背にぴったりと寄り添う。リィンの全身に不安が駆け巡った。

相手の腕が弱すぎる為に、習いたての剣では加減ができず深く傷つけてしまう可能性がある。やはりここは使い慣れた『力』の方が良い。

リィンがまた深く意思を込める。漆黒のブレスレットがピシッと高い音を立て、それと同時に目の前の二人が、大きく後ろへ吹き飛ばされた。『力』が完全に戻ったようだ。

そのイリアスの『力』の威力を、間近に見た他の若者達は戦意を喪失し悪態をつきながらその場から逃げ出して行った。

ため息をつき、リィンが呟く。

「帰り道を探さなきゃ」

エリナは素直に頷いた。

０２２：冒険の終わり

その頃診療所では、玄関口にラディスとクレイ、ウォルハンドとナナンの四人がそれぞれに佇んでいた。慌てて戻って来たナナンから事の顛末を聞いて、すぐにでも軍を動かそうとしたウォルハンドだが、ラディスにそれを止められて苛々しながら二人の帰りを待っている状態だった。

「あのイリアス族め！エリナ王女をどうするつもりだ」

「待てよ。ナナンの言った事聞いてなかったのか？エリナがリィンを連れて行ったんだぜ。なあ？」

「は、はい。そのように見えました」

胸の前で両手を組んで、今にも消え入りそうな声でナナンが答えた。ウォルハンドが殺気のこもった鋭い目で彼女を睨みつける。短い悲鳴をあげて、ナナンはラディスの背後へ隠れた。

「ナナン、この愚か者め。ただで済むと思うな」

「それを言うならお前もだろう、ウォルハンド。診療所で悠長に留守番をしていたのは誰だっけ？」

面白そうにラディスがからかう。

「そ、それは！エリナ王女のご命令があったからだ！誰が好きこのんで、お前の診療所の留守番などするものか！」

ふん、と鼻で笑うラディスに剣を突き出し、ウォルハンドが低くうなった。

「エリナ王女に何かあってみろ、その時はお前をここで有無を言わさず斬り倒す」

「やれよ」

ラディスが即答する。

「リィンはうちの優秀な護衛だ。そうだろうクレイ」

「はい。ラディス様のおっしゃる通りでございます」

「…その言葉、忘れるでないぞ」

クレイは内心ひやりとした。
本当に無事なら良いのだが…。

◇◇◇◆

薄暗い石畳の上でエリナがまた立ち止まった。
日は既に落ち、一番星が輝きはじめている。

「足が痛い。もう歩けないわ」

「もう少しで診療所なんだけどな」

リィンが振り返ってエリナを見る。

「もう歩けないって言っているでしょう」
エリナはその場で腕組みをして動かない。
「仕方ないなあ。ほら」
リィンがエリナの前でしゃがんで、背を向けた。
「い、いやよ。子供じゃあるまいし」
「僕の背じゃ君をだっこ出来ないし。おんぶするから、それで勘弁してくれよ」
エリナは膨れながら、リィンの背にしがみついた。
よいしょ、とリィンがエリナを背負って歩き出す。
「お、重くない？」
「全然」
エリナは顔を赤らめながら無言でリィンの背中に身を預ける。何て華奢な肩だろう。首も細く、どこにそんな力があるのか分からなかった。頼りないように見えるのに、安心する。
「僕、どうなっちゃうんだろ」
「何よ」
「だってウォルハンドはきっと怒ってるだろ」

怒りで顔を真っ赤にさせたウォルハンドの顔を思い浮かべて、エリナは笑い声をあげた。

「そうね。きっとかんかんに怒ってるわ」

「だよね」

リィンも笑顔で答える。

やっと診療所が見えてきた。玄関前に馬車が止まっている。暗くて見えないが、人が数人立っているようだ。

「エリナ様ぁー！」

ナナンが叫びながら走ってくる。近づくと、ウォルハンドの他にラディスとクレイがいるのも見えた。

エリナを背から降ろしているところへ、ウォルハンドが地響きのような声を上げた。

「イリアス族め！許さんぞ！」

「止めなさい、ウォルハンド。リィンは悪くないわ」

エリナがすかさず制し、途端にウォルハンドは困惑する。

「し、しかし」

「今日の事はお父様には内緒よ」

リィンはようやく緊張がほぐれ、ため息をついた。

ラディスがリィンの頭にぽんと手を置いてから通り過ぎ、エリナの

前へ立つ。

「エリナ、今日は済まなかった。約束を忘れていたわけじゃないんだが」

エリナには勝気な表情が戻り、ラディスを見上げながら顎を傾ける。

「良いわ。キスで許してあげる。私は心が広いのよ」

ラディスは優しく微笑んで少女を見下ろす。

「ありがとうございます、お姫様」

彼は長身を折り曲げ、エリナの額にキスを落した。満足そうに微笑んで、少女は颯爽と踵を返す。その後に憤りを隠せないウォルハンドが続き、涙を拭いながら、ナナンが続いた。

筋金入りのお姫様は、何とも逞しい。

三人が馬車に乗り込み使い手が馬に鞭を入れ、ゆっくりと動き出した。ラディスとクレイ、リィンは去ってゆく馬車を無言で見送る。するとエリナが窓から顔を出し、大きな声で言った。

「リィン。今日は楽しかったわ！」

リィンはそれに手を振って答えた。

馬車が小さくなってゆき、リィンが手を降ろそうとした時、腕を鷲掴みにされた。ラディスがブレスレットを見つめている。ガタガタになったビーダの腕輪。

「あ…。ごめん、壊しちゃった」

「驚いたな。とんだバカ『力』だ。やはり、強度が問題だと思っていた。数回使用して簡単に壊れるようじゃ、まだ完璧とは言えんな」

それからぶつぶつと何事かを呟きながら、ラディスは部屋に戻っていく。

そうしてリィンの長い一日は終わった。

０２３：動き出す、運命

その夜、リィンはベッドに入った後もなかなか寝付けずにいた。
昼間の緊張状態からうまく抜けきれずにいる。今までもこういう時が度々あった。それは決まって、『力』を極端に発動させた後にあるものだった。
ゼストと二人でルキリアの国中を転々と旅をしながら生活していた日々を思い出す。その時の生活費は、点在する町でイグル退治を請け負い、その報酬によってだいたいが成り立っていた。あとは危険な地帯を通って行商の旅をする商人の護衛等で、イリアス族の『力』を強みにしたこの手の仕事が、皮肉にもイリアス族にとっての唯一の職業となっているのが現状だ。
その為にリィンも『力』を使う事には慣れているのだが、神経を張り巡らし集中力を決壊ぎりぎりにまで高める作業は、やはり今でも疲れるものである。
リィンは仕方なく起き上がり、ぼんやりとしたまま階下の居室へと向かった。廊下はしんと静まり返り、診察室へ続く通路の先は暗闇に消えている。ずっと見つめていると何かが見えてしまいそうに感じて、急いで居室の扉を開いた。

室内の明るさに思わず顔をしかめる。

「…何してんの」

台所にラディスが立っていた。

「そんな事だろうと思ってな」

そう言いながら振り返った彼は両手にティーカップを一つずつ持っ

ていた。リィンにテーブルにつくように顎で示し、自らも向かいの席に長い脚を組んで斜めに腰かける。
目の前に置かれたティーカップには温められたミルクが入っていた。甘い香りと、ハーブのような薬草の良い匂いがする。カップを両手で持ち、目を細めてゆっくりと口に運ぶ。温かくて甘いミルクが全身に染みてゆくように広がり、爽やかなハーブの香りが鼻から抜けていった。

「…美味しい」

全身がほわりとほぐれていくような感覚。
見るとラディスの方はミルクではなく、お茶を飲んでいるようだ。

「神経を鎮める効果のある薬草入りだ。それを飲んだらじき眠れる」

「あんたは？」

ラディスは眉をあげて答える。

「俺はまだ仕事が残ってる」

「ふうん」

「一人じゃ寂しくて眠れないか？ガキは世話が焼けるな。添い寝でもしてやろうか」

リィンはラディスを睨みつけて無言で抗議するが、彼にはちっとも効いていないようだ。

「あのさ、あんたは僕の父様と母様とは収容施設で会ったの？」

ずっと、一度は聞いてみたいと思っていた。

「そうだ」

ラディスは特に何の感慨もなくさらりと言う。それから思い出すように遠くを見つめて、また口を開いた。

「シルヴィがあの収容施設に連れてこられたのは、俺が六歳の頃だった。きっとゼストも一緒だったんだろうな」

彼はイリアス族が奴隷として強制労働させられていた場所で育った。山奥の中、金網で何重にも包囲された施設の中には、粗末な造りの縦長の小屋がいくつかあり、組分けをされて組ごとに集団で生活していたのだという。

「食事は一日に二回、少ない時は一回。からからに干からびたパンと具のないスープだった。風呂は八日に一度。そのせいで皆やせぎすで土埃で汚れて、白い肌は黒ずんでいた。

…だが、その中にいても、お前の母親の美しさは一際目立っていたな」

シルヴィはその施設に来てすぐに皆の中心的存在となっていった。泥沼の地獄のような日々の中で、彼女の美しさと明るさが、皆の支えとなった。夜にはそれぞれの小屋を回り、透き通った綺麗な声で子守唄を歌った。シルヴィのその優しさが、どれ程人々の疲れを癒し心を潤していった事だろう。

「…僕の父様は、その時に母様と出会ったんだね」

「そうだ。お前の父は、素晴らしい医者だった。当時イリアス族でありながら、その腕を買われベイルナグルで医師を勤めていた程だからな。収容施設にいるイリアス族の診察をするようになったのも、彼が政府に何度か懇願して許してもらったからだった」

ラディスがじっと遠くを見つめ黙り込んだ。リィンからは彼の横顔しか見えない。痛みに耐えているようにも見えるし、眼を細めて鋭く見据えているようにも見える。鼻梁から顎にかけて、すっきりと美しいラインが描かれている。

「…俺が八つの時にイリアス族は解放された。その少し前に、お前の父親は死んだ。だから二年間だ」

二人が惹かれ合い、愛をはぐくんだ僅かな期間。

その間にシルヴィは同年代の若者達と試行錯誤を繰り返し、イリアス族の『力』を封印させられていた首輪を破壊する手段を見つける。何度も『力』の暴発を受け、傷だらけになりながら挑んだ結果だった。

一方ティルガはルキリア政府の目を盗みながらレーヌ国へ嘆願書を書き続け、当時のレーヌ国の女帝にイリアス族の現状を伝える事に成功した。たった一人の、血の滲むような訴えが国を動かした。しかしその行為によってルキリア軍に捕えられ、反逆罪として極刑に処されたのだ。

シルヴィは二十歳の時にリィンを生んでいる。弟のゼストはその頃まだ十五歳であった。奴隷解放後にリィンは生まれ、それから北のはずれにある小さな町で穏やかな時を過ごした。しかしそれもわずか五年で終わる事になる。

リィンは落ちてきそうになる瞼を擦りながら、呟く。

「何度もゼストにせがんで聞かせてもらったんだ。母様と父様が出会った頃の事。母様はその時まだ十八だったけど、父様は二十八だった。十も年は違うけど、二人はすぐに好き同士になったって…」

明るくて優しい母を思い出す。華やかな母の笑顔。父に愛された美しい女性。激動の人生を駆け抜けた二人は、命をかけてお互いを愛した。

リィンにとってその事実が、イリアス族の悲しい過去を思い返す時の、ただひとつの希望となっていた。

残酷な迫害を受けた事には変わりない。でもその凶暴な力でさえも、打ち砕く事ができなかったものが確かに存在している。

「お前の父親は、たった一人の愛する女性を守ろうとした。自分の命と引き換えに…。

そして生まれてくるお前の為に、世界を変えた」

リィンはテーブルに伏して静かに寝息を立てていた。

―　あんたは、僕が護る。

僕の『力』はきっと、その為にあるんだ　―

◇◇◇◆

ラディスは眠っているリィンを抱きかかえて寝室へ向かう。華奢で軽い。ニコルにもっと肉料理を出してもらった方が良いかもしれない。

ベッドに寝かせシーツをかけると、リィンは一瞬目を開け、またすぐにすやすやと寝入った。

ベッドの脇に腰をかけて、リィンの白くてふっくらとした頬を手の甲で撫でる。イリアス族は元々の色素が薄い為肌は白く、瞳の色も赤みがかったブラウンをしている。リィンの長いまつげも髪と同じ栗色。その柔らかな髪を手で梳いてやると、リィンは眠ったまま微笑んだ。子供のようなあどけない寝顔。

「…ティルガ。あなたの守った命はちゃんとここにある」

リィンを初めて見た時に、ティルガとシルヴィの子供だとすぐに分かった。

母親譲りの美しい容姿。意志の強い瞳。父親と同じ髪の色。

ティルガ。どうか安心して欲しい。

この子は俺が護る。

あなたが、俺を生かしてくれたように。

◇◇◆◆

数日後、ルキリア皇族のエリナ王女生誕十五周年を祝う式典が盛大に行われた。帝都ベイルナグルではその間、祭りが催され活気に満ち満ちていた。
リィンはチェムカとニコルと連れだって宮殿まで出かけていった。

宮殿のテラスに皇族や政府の要人が並び、民衆に向かって手を振っている。その中央にエリナがいた。豪華なドレスを完璧に着こなし、金の髪は綺麗にまとめ上げられて、可憐なティアラがよく似合っている。口元を微笑ませ上品な笑顔で人々を見下ろす姿は、リィンの知っているエリナとはまるで別人のようだった。こちらのエリナはきっとよそいきの、皇族の王女としての彼女なのだろう。十五に見えぬ程に大人びている。
老若男女がそのテラスを見上げ、歓声をあげて祝福をする。隣を見るとチェムカは夢見るような表情で見つめているし、ニコルも頬を紅潮させて嬉しそうにしている。
その中にあって、リィンだけが浮かない顔をしていた。

あの栄光はイリアス族の犠牲の上に成り立っている。

あの宮殿だって、もしかしたら奴隷だった頃の母様やゼスト達が補修しているのかも知れない。

そう思うと、どうしてもこの輪の中には入れないのだ。

エリナの事は嫌いではないけれど、割り切れない思いがある。この思いはきっと、リィンが一生抱えてゆくものなのだろう。
診療所にはエリナからパーティーの招待状が届いていた。毎年必ずラディス宛てに送られてくるのだという。今年はどういうわけか、リィンの名前も横に添えられていた。けれどラディスは今まで一度

も、そのパーティーの誘いを受けた事はないのだという。一度くらい行ってあげたら良いのにね、とニコルが言っていたのを思い出す。

「リィン、そろそろ行こうか」

ニコルとチェムカが先に立ち、リィンを振り返っていた。

「早く帰らねえと、先生に怒られるべ」

診療中に抜け出して来ているので長居はできない。

「うん」

そうして三人は祭りの続く町を、人の流れに逆らって歩き出す。

リィンは複雑な思いを噛み締めながら、帰るべき場所がある事にささやかな幸せを感じていた。

【第二部・完】

０２３：動き出す、運命（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
実はファンタジーは今まで書いた事もなく、読んだりもあまりしていないジャンルでした…。がぼーん。
だからでしょうか、いまいちファンタジー風味が弱い。ううむ。
第三部ではまた新たな登場人物がどんどん出てくる予定です。

０２４：真夜中の来訪者

ゆっくりと鍵穴に針金を通す。
この針金は複雑に曲がっており、彼が幾度となく試行錯誤を繰り返した結果、今の形に収まっている代物だ。

焦るな。

右手で持っている針金で内部のシリンダーを固定し、左手でまた別の形をした針金を鍵穴へ差し入れる。
僅かに抵抗感のある感触。

いける。

徐々に手首を返すと、それに反応して内部の仕掛けがゆっくりと彼に従う。

玄関の施錠が開いた。

彼は満足げに鼻から息を吐き出して腰を伸ばす。

「さて、本番はこれからだ」

気配を断ち、診療所の内部へ滑り込んだ。深夜の診療所に一瞬だけ月明かりが入る。ここの主は油断ならない。彼はその事を重々承知していた。
足音を立てずに、しかし素早く滑るように階段を駆け上がる。壁を背にして周囲の気配を探る。
そのままの体勢でたっぷり三十を数えてからまた動き出す。目の前

に寝室の扉が見えてきた。ここからが肝心だ。右手を一度ぐっと開いてほぐしてから、扉の取っ手を慎重に掴んだ。物音ひとつ立ててはならない。中にいるあいつが起きてしまうからだ。

無音のまま扉が開く。

開いた隙間から内部の様子を伺おうと視線を巡らす。

真っ暗だ。何も見えない。

どうも様子がおかしい。彼は無意識に呟いた。

「おかしいな…」

「何がだ」

扉のすぐ前にラディスがぼさぼさの頭のまま、彼を見下ろしていた。

「うおっ！！」

「…相変わらず良い趣味をしているな、ミッドラウよ」

ミッドラウと呼ばれた男性は折り曲げていた長身を伸ばして、にんまりと笑った。背はラディスとさほど変わらない。

「何だよ、寝てなかったのか」

「寝てたさ。たった今誰かさんに起こされたがな」

言いながらラディスは室内に戻りランプの灯をともす。

「どこから気づいた」

「真夜中にあんな大きな幌馬車を、家の前に止めたところからだ」

ミッドラウは豪快に笑った。

「とんだ失態だぜ。俺もまだまだだな！」

「…静かにしろ。まだ夜中だ」

ふとベッドを見やると、誰かが寝ている気配がある。柔らかそうな栗色の髪がのぞいていた。

ミッドラウは目をむき口をあんぐりと開けて驚いた。

「…お前、変わったなあ！今までここには一度も女を連れ込んだ事なんてなかったろうが」

この医者とは今よりももっと若い頃に、一緒になって派手に遊んだ悪友の間柄である。

彼の容姿は通りを歩いただけで女性達を虜にし、夢中にさせた。喧嘩も女遊びも周囲が真似できないくらいにやらかしたものだ。今でもその当時を思い出すと、ミッドラウは胸のすく思いがする。しかしそんな無茶をしていたのも僅かの間だっただろうか。

全ての用意が整い、彼がこの場所に診療所を開いてからぱったりとその遊びを止めてしまった。それ以降はいくら誘っても乗ってこない。びっくりするくらい、はっきりとしていて豪胆な奴だ。それがこうも簡単に、ここでよろしくやっているとは。

まさか…。

「まさか、結婚でもしたか」

「いつこっちに着いた」

ラディスはミッドラウの言葉を無視して質問する。

「…今さっきだ。お前の枕元に立って脅かしてやろうと思ったのにな。つまらん。その上俺の知らないうちに結婚までしやがって、この裏切り者」

「面倒な奴だな。色々と勘違いしてるぞ。まあいい、明日出直せ」

「言われなくてもそうするさ。馬車は預かってくれ。町にいる俺の恋人に慰めてもらうとするか」

ミッドラウには様々な街ごとに、恋人がいる。

「それと、この家の鍵は軟弱すぎるな。替えた方が良いぜ」

「…そのようだ」

◇◇◇◆

「大きな馬車が診療所の前に止まってるね」

リィンは日の光に照らされた窓の外を見ながら、ニコルに話しかけた。

洗い物をしていた手を止めてニコルが楽しそうに答える。

「ああ。どうやら昨日の夜にミッドがこっちに着いたみたいだね」

「ミッド？」

「ミッドラウ。四大陸を自由に行き来するベテランの運び屋で、先生のお友達だよ」

「運び屋？」

「そう。あの幌馬車の荷台には色んなものが詰まってるんだよ。見た事もない異国のものとか、たっくさんね」

リィンの瞳が興味津々に輝く。素直な反応にニコルは微笑んだ。

「夜には来るんじゃないのかね。さあさ、今夜はごちそうを用意しなきゃね、リィン」

「うん！」

運び屋という職業が世の中にあるというのはリィンも知識として知っていた。旅を繰り返し行商をする商人との違いは、自らの売買を目的とせず、依頼主の依頼によって成り立っている点だ。様々なものを国から国へ安全に運び届ける使命を持った運び屋は、百戦錬磨の戦士のような人物と聞く。

届ける品は金銀財宝から一通の手紙、薬品や武器など多岐にわたり、原則的に成功報酬制の厳しい世界だ。

世界中を飛び回る人物なら、世界に散らばっているイリアス族の人々とも出会っているかもしれない。

リィンは急いでテーブルを片づけ、洗濯をしにぱたぱたと走っていった。

◇◇◆◆

「…すげえな！このビーダの腕輪がこんなにボロボロになるなんて」

夜になりランプの灯が入った診察室の奥の部屋で、ミッドラウが大きな声を上げた。ブレスレッドを灯にかざしたりして、まじまじとそれに見入っている。

「イリアス族の『力』ってのは想像以上だな」

「その通りだ。それでまたブレグロの原石が欲しいんだが、最短で何日かかる」

ラディスは腕を組んで聞いてくる。すぐにでも次の試作品を作りたいらしい。ビーダは簡単に手に入るのだが、ブレグロの原石となると話は別だ。

「あいつはザイナスの奥地でないと採れない貴重な鉱石だぜ。あそこは交通の便も悪いからな。この俺様が今すぐに取って返しても二十数日はかかるだろう。それに、取って返す気もないから更に三十日程かかるな」

「倍払おう」

ミッドラウは大きな胸板をのけぞらせ、わざとらしく言い放った。

「このミッド様は金では動かんのだ、友よ」
それからラディスの肩に腕を回し、囁く。
「また美女揃いのハーレムを作らないか。それなら受けてやっても良いぜ」
「あきれたな。まだそんな事をやってるのか」
「くく。まだまだ飽きないね」
そこへクレイが扉を開けて入ってきた。
「ラディス様、ミッドラウさん、皆がお待ちですよ」
「そうだった、久々にニコルのウマい料理が食えるんだな！やべ、涎がたれそうだ！行こうぜ、クレイ」
ミッドラウは今度はクレイの肩に腕を回し、彼を連れて歩き出す。
彼のその強引さは相変わらずで、クレイは苦笑を洩らした。
褐色の肌に鍛えられ引き締まった身体。肩まである黒髪はいつも一つに束ねられており、眉の太い精悍な顔立ちは、確かに女性に人気がありそうだ。今は異国の装いで胸の大きくあいたブラウスに、幾何学模様の腰巻、麻のズボンに先のとがった革靴。彼らしい奇妙な格好をしている。
廊下を途中まで行ったところでミッドラウが感慨深げに呟いた。
「それにしても驚いたぜ。久々に会った悪友が、まさかそっちの趣味に目覚めていやがったなんてなあ。…女遊びに飽きた奴は、次に女を育てたがると聞いた事があるが。まさか男で、その上イリアス

族なんてな」

クレイは沈黙する。ミッドラウは何か色々と、勘違いをしているようだ。

いやあ、やっぱあいつはタダもんじゃないぜ。すげえなクレイ、お前も苦労するだろ。

それから賑やかな夕餉が始まった。

◇◆◆◆

夜も深まり、既にラディスとミッドラウは酒を酌み交わしている。ミッドラウはあらかたの料理を豪快に片付け、興味深い話をし、愉快に笑った。チェムカとニコルは彼が土産に買ってきた鮮やかな青色のスカーフを手に、喜んで帰っていった。それを送り届ける為にクレイとリィンがそれぞれ付き添って部屋を後にした。

「どっちにしろ驚くじゃねえか。あんな可愛い顔した僕ちゃんを護衛に雇ってるなんて、どういう風の吹きまわしだ、ラディス」

度の強い酒をガブリと飲んで、ミッドラウはラディスを睨みつける。椅子に座りながら片膝をついていて、決してマナーが良い方だとは言えない。

「不本意ながらそうなった。それに案外あいつは強いんだぜ。イリアス族ってのはそんなもんだ」

「馬鹿いうな。お前程の男が。護衛なんていらねえだろ、実際」

「クレイが心配症でな」

「ふん。あいつはお前に惚れこんでやがるからな。あんまり心配してるとハゲると言ってやれ」

「何度も言ってるんだがな。最近確実に老けこんできてる」

「…何の話をなさっているんですか」

二人が振り向くと、帰って来たクレイが少しだけ眉間にしわを寄せて立っていた。

「私は先に休ませていただきます」

「ああ」

「ちょっと待て」

ミッドラウが片手をあげて制する。

「大事な伝言をことづかってるんだ。まずクレイよ、ソアがお前に会いたがっていたぞ。ほれ、手紙だ」

懐からよれよれになった手紙をクレイに手渡した。

「…レーヌに寄ったのですか」

「ああ。それから、これが重要だ。ラディス、いつまで待たせるつもりだ？」

ラディスはそれを聞いて、ため息をついた。

「まだ無理だ。当分動けそうにないと言ってくれ」

「それは直接本人に会って言うこったな。お前、殺されるぞ。そう言って何年待たせてる？」

「やっと軸が出来上がったところだ。まだこの町を出るわけにはいかない」

「そんな言い訳がシャウナに通用すれば良いがなあ」

「シャウナ様は何と？」

クレイが神妙な顔をしている。

「状況は悲惨だ。悪化する一方らしい。それに、最近ロガートの動きも怪しいしな」

ミッドラウは真剣な表情を作って、ラディスに告げた。

「そのうちお前はあちらさんからも、命を狙われるだろうな」

ラディスは涼しい表情のまま、グラスを傾ける。

「俺の命はいくつあっても足りんな。恨まれる事が多すぎる」

「分かってるんなら少しは大人しくしたらどうだ。この頑固者めが」

「残念ながら愚鈍な雑魚を恐れている暇はない」

「ラディスは僕が護る」

扉の前にいつの間にかリィンが仁王立ちしている。
凛々しい表情。

「どんな奴らが来たって、僕があんたを護る」

ミッドラウは呆気にとられてポカンと口を開いた。

「子供は寝る時間だぞ」

ラディスはリィンに見向きもしない。

「こ、子供扱いするなって言ってるだろ！」

「…クレイ」

「さあ、リィン。明日も早いですから」

クレイに肩を掴まれ、むっとしながらもリィンは従った。しかし部屋を出る寸前に、言い放った。

「僕は本気だからな。きっとずっと強くなる。そのうちあんたは僕に感謝するようになるさ！」

ばたん。
茶色の木目模様の扉を見つめるラディスとミッドラウ。一拍遅れてミッドラウの大きな笑い声が響き渡った。

「ぐっあっはっはっは！ひー！こりゃ…参るな！は、腹が痛てぇ…かっかっか！い、いてて」

ラディスはそんな彼を無視して淡々と酒を飲み続けている。
身体を折り曲げてテーブルを叩きながら笑い転げていたミッドラウは、やっと体勢を立て直した。酒の入っている瓶を鷲掴み、そのまま口をつけてごくごくと飲み干した。

「…はあ。死ぬかと思ったぜ」

「そのまま死んだら良かったのにな」

「お前なあ、それでも医者か。心臓マッサージぐらいしてくれるだろうな」

「大丈夫だ。良い葬儀屋を知ってる」

「くっく…。立派な護衛を見つけたな、ラディス」

「ああ。嬉しくて涙が出そうだ」

「なあ、明日あいつ貸してくれ。どうせお前は明日もここに張り付けだろ。俺は≪配達≫があるしな」

ラディスが横目で彼を見ると、ミッドラウはにやりと不敵な笑みを返してきた。

「…何を考えてるか知らんが、好きにしろ」

「ＯＫ。じゃ、そうさせてもらうぜ」

夜は更けてゆく。

０２５：運び屋

「せいや！行け、ゼペスよ！」

立派な躯をした茶色の艶やかな馬の背に鞭を入れる。馬がいななき、がたんと馬車が大きく揺れて動き出した。

朝早くミッドラウとリィンは配達の為に診療所を出発した。運び屋は幌の張った荷台の前の座席で、立ったまま器用に馬を操る。その隣に座っているリィンは手すりにしがみ付いているので精一杯だ。順調に速度を増し走り出すと、ミッドラウはどっかりと腰を下ろした。

「この馬、ゼペスっていうの？」

「ん。たった今雰囲気で名付けた。さーあ、今日はベイルナグルから隣町のリエズに、海沿いのシャルナンまで行くからな。ケツが三つに割れないように気をつけろよ」

リィンは笑いながら、うん、と返事を返した。

ミッドラウは昨日と同じような異国の服装をしている。少年はブラウスに緑のだぼついたベスト、麻のズボンに革の編み上げ靴という地味な服装。その上に暗い臙脂色のフードの付いたマントで身体を包んでいる。フードをかぶっているのはイリアス族特有の白い肌と紅い瞳を隠す為のものだろう。それにしたってミッドラウからして見れば、地味すぎる。

「せめてもっと明るい色のマントにしたらどうだ」

そう言うとリィンはきょとんとして彼を見上げてくる。少年は耳に銀色のピアスをしており、それがきらりと光った。

「色なんてあんまり関係ないんじゃないかな」

「馬鹿だなお前、そんなんじゃモテねえぞ」

「ミッドが派手すぎるんだよ」

得意先の客の家へ荷物を届けてゆく。そこでやっと報酬が手に入り、次の依頼も入ってくる。ズボンのポケットにねじ込んだメモとペンを取り出し、書きなぐる。リィンはその小柄な身体の倍もあるかという荷物も意外にあっさりと運んでゆく。それには彼も驚いた。道の整備された帝都ベイルナグルを出ると一変して悪路が続く。山沿いのでこぼこ道を登った先に、リエズの町がある。

「ミッド、ここへ、来るまでに、イリアス族を、見たかい？」

がたがたと馬車全体が揺れる中でリィンが話しかけてきた。

「いいや。そういや最近見ねえな。イリアスは流浪の民で、しかも警戒心が強い。いたとしても俺の前には姿を現さなかったんじゃねえかな」

「そう、なんだ」

「もう黙っといた方が良いぜ。慣れない奴は舌をかんじまう」

言ったそばから、リィンがいて、と声を上げた。

◇◇◇◆

標高の高い位置にあるリエズの町は年中気温が低い。しかしこの町からの眺めは最高だった。

澄み渡った青い空に細長く雲がなびく。遠くに青く霞んだ山々が見え、その手前から海が始まっていた。

海の傍には小さな港町がこじんまりと海沿いに張り付くように広がる。ベイルナグルの町は、この眺めからすると反対にあるようだ。

ミッドラウは馬車の見張りをリィンに言いつけ、軽々とたくさんの荷物を担ぎリエズの町に消えた。

「ミッド！久しぶりじゃない！」

リエズの恋人が彼に抱きつき、熱いキスをする。ミッドラウは荷物を落とさないようにしながら、片手で彼女の腰を抱いた。

「おっと。マリー、俺は今配達の途中だ。また来るぜ」

「そんな事言って、ちっとも来てくれないじゃない」

赤毛でスタイルの良い女性は、彼の広い胸板を指先でなぞる。

「ほら、これは土産だ。またな」

こめかみに口づけし、風のように去ってゆく。

彼女の手にはブルーの宝石が嵌め込まれた繊細な細工のネックレスが残されていた。まじまじと見つめて、興奮した面持ちで歓声を上げる。

「素敵！ミッド、愛してるわ！名前間違えてるけど許してあげる！」

配達を終えて戻ってみると、リィンは飽きることなく景色を眺めていた。

「良い眺めだろ」

「うん。…僕も色んな町へ行ったけど、こんな綺麗な景色見た事あったかな」

柔らかく微笑みながら、遠くを見つめる少年の横顔。ミッドラウはそこで初めて気がついた。

顔は小さくレッドブラウンの瞳は大きくて、線の細いその少年は美しい容姿をしていた。

「そりゃあ、景色を楽しむ余裕なんて今までなかったからだろうさ」

「そうか…」

「イリアス族が何であいつの護衛なんかしてる？」

「…どうしてそんな聞き方するんだ。イリアス族だから、悪いみたいに聞こえる」

赤茶の瞳がまっすぐに彼を見つめてくる。ミッドラウは舌をまいた。なかなか利発じゃねえか。

「知ってるだろう。あいつはイリアス族に育てられた。イリアス族はてめえらを奴隷にして好き放題してるルキリアの、しかも皇族の子供を大事に育てたんだ」

八つ裂きにしてしまう事だって出来た。現にそれを目論んで、トワ妃は赤ん坊のラディスを投げ入れたのだ。

生まれたばかりの幼い命に善も悪もない。
気高きイリアスの民。尊く偉大な心を持つ。

「…うん」

「だからだよ。あいつがそのイリアス族に、しかもお前みてえなガキに、そんな危険な事やらせるはずがねえ。そういう所はきっちり律儀なんだ」

リィンの瞳が揺れた。きっと考えもしなかった事なのだろう。

「やべ、さっさと次に行かねえと。昼飯はシャルナンでとろうぜ！あそこのシーフード料理はウマいんだ」

「…僕はガキじゃないよ」

からからと笑いながらミッドラウは馬に鞭を入れた。

「お前はまだ若い。色んな可能性がまだ十分にあるって事さ！」

「イリアス族でも？」

「そうだ！それが若さだ！」

「ミッドは、いつから、この仕事、してるの？」

「十七だ！」

「どうして、運び屋なんて、危険な仕事、しようと思ったの？」

盛大に揺れる馬車に乗りながら、必死になってリィンが話しかけてくる。懲りない奴だ。

「簡単だ、女にモテたかった！」

それを聞いてリィンは楽しそうに笑ってから、いて、と叫んだ。

◇◇◆◆

「あいつと俺が初めて会ったのは八年前で、えーと、確か俺が二十二の時だったから、ラディスは十八だ」

ボイルした大きな海老を口いっぱいに頬張りながら、ミッドラウは器用に喋った。

海沿いの港町シャルナンで荷を全て降ろし終え、遅めの昼食をとっている最中である。

「十八！？今の僕と同じ年じゃないか。さっき、会った頃ラディスは医者になりたてだったって言ってなかった？」

目をまん丸にしてリィンが聞いてくる。くるくると表情が変わる少年だ。海を見ては驚き、見た事のない海産物を見ては目を輝かせ、何かと忙しい。イリアス族にしては感情が豊かだ。きっと、愛されて育てられたのだろう。

「ああ。十二の頃にレーヌの大学校に入学して十六で全ての課程を修了したんだ。それから二年間レーヌの医者の下で働いてたらしい

ぜ」

「信じられない…」

「ちなみに、その頃にクレイとも出会ってる。あいつもレーヌ族の中では、ずば抜けて優秀だったそうだ」

「そうなの!?クレイってレーヌ族だったんだ…」

リィンは驚きすぎて疲れたのか、椅子の背もたれに身を預けた。

「あいつは年下のくせに、あの時から憎たらしい奴だったぜ。抜群のスタイルにあの顔だろ?向かうところ敵なしだ。しかも強い。俺は一発で気に入っちまった。お前、もう食わねえのか。食が細いな。そんなんじゃ強くなれねえぞ」

「もうお腹いっぱいだよ。ミッドが大食らいなんだ。その頃のラディスって、どんなだったの?」

「んー。今よりは身体の線は細かったな。一緒になって色んな遊びを豪快にやったりしてな。破天荒この上ない」

「色んな遊びって?」

「お前にゃまだ早い」

「何だよ、ラディスだって十八だったんだろ」

「お、そうか」

グラスに入った水を一気に飲み干す。

今思えば、あの頃何故あれ程派手に遊んでいたのか、その真意が分かる気がする。ラディスは当時既に運び屋として名を上げていたミッドラウに近づき、彼の心を掴む為に魅力的なイベントを次々と提示していった。そしてそこで大騒ぎをする事によって、同時にラディスの命を狙う輩をその場所に引きつけていたのだ。ルキリア皇族の正統な血族の証≪黄金の青い目≫を持つ彼は、嫌でも噂になり話題の中心となる。

そうしている間に着々と、帝都で診療所を開く準備を進めていたのだ。そして全ての用意を終え、彼は医師としてベイルナグルに開業を果たした。

食えねえ奴だ。だが、小気味好い。

「さぞかしモテたんだろうね」

おや、とミッドラウはリィンを見やる。

なるほど、そういう事か。確かにラディスは魅力的な人物だ。性別も年齢も関係なく、奴に惚れる。

だからこそ敵も半端なく多いのだが。

「そりゃあ、モテるってもんじゃないぜ。もうあそこまでいくと催眠術みたいなもんだ。女がばたばたと倒れる」

リィンが可笑しそうに笑った。

「恋人はやきもちしっぱなしだったんじゃない？」

「いいや。あの当時も奴は本気の相手は作らなかった。過去にも未

来にも、そういう相手を持つ気がないんだろうよ。近頃のあいつを見てると、仙人にでもなっちまったかと思うぜ」

「…どうしてラディスはモテるのに恋人を作らないのだろう」

「あいつは、もうそんな次元にゃいねえんだろうよ。例え愛する女が出来たとしたって、その女を幸せにしてやれねえのが分かってるのさ。だってそうだろ？あいつの時間は、一分一秒でも、無駄にはできねえ。観劇を見たり、見つめ合って楽しく会話したり、そんなフツーの事さえあいつにはする暇がない」

それはミッドラウがずっとラディスを見続けてきて出した結論だった。そして彼にはそんなラディスの生き方は理解不能である。その信念や行動は確かに立派なものだ。

だけど、女がいねえ人生なんて、何が楽しいんだ？

「女にゃ酷だ。あいつの背負ってる厳しい現実を、一緒になって背負える程の気骨のある女なんて、まずいねえよ。

どうだ、かわいそうな奴だろ？あんな男前のくせに、宝の持ち腐れってのはこういう事を言うんだぜ」

そこまで言って、ふっと彼の脳裏に一人の女性の姿がよぎった。ブラウンの柔らかな巻き毛に、理知的な瞳。優しい微笑みをたたえる、たおやかな女性。

「…ユマが、身体の丈夫な女なら、また違ってたのかも知れねえがな…」

「ユマって？」

はっとしてミッドラウは目の前のリィンを見た。興味深そうな顔をこちらへ向けている。知らず声に出してしまっていたようだ。ミッドラウは咳払いをして話題を変えた。

「それで？何でお前はあいつの護衛なんかやろうとしてるんだ。わざわざ死にに行く事もあるまいよ」

そうだ、もっとうまい具合に生きていけるはずだ。ラディスだったら、そうなるようにいくらでもこの少年にしてやれる。そうするつもりで保護したのだろうし。

「ラディスは命の恩人だから」

「…それだけ？」

「それ以外に何がある」

意志のこもった瞳。綺麗だ、と思う。

「それに僕には『力』がある。これを誰かを護る為に使いたいんだ。僕はイリアス族だ。どんなに辛く困難だろうと、誇りを持って生きていきたい。ラディスはこの世界に必要な人間だ。…だから、僕がラディスを護ると決めたのは、僕自身の為だ」

ばん、とミッドラウがテーブルを平手で叩いた。リィンはびくりと肩を震わせる。

「な、何？」

「良く言った！なかなか男気のある奴じゃねえか！」

はっきりと物を言う。潔い。豪気な運び屋は、だんだんとリィンを気に入りはじめていた。

026：その『力』、絶大

シャルナンからの帰り、右側は巨大な岩壁が続き左は鬱蒼とした森という道を幌馬車がガタガタと勢い良く走ってゆく。リィンは馬車にしがみつき、ミッドラウは座席に立ち上がり俊敏な手綱さばきで馬を操っている。その彼が前方の異変に気づき、大きな掛け声をかけて馬を止めた。

「参ったな。がけ崩れか」

大きな岩が一つ、ごろんと道いっぱいに横たわっていた。後ろを走っていた別の行商人の馬車も止まり、そこから降りてこちらへやってくる。

「どうしたー」

「でかい岩だ！ここは通れねえ！」

日は既に落ち始めている。来た道を引き返すのは大幅な時間のロスだ。それに、嫌な予感がする。

リィンが目の前の岩を見据えながら馬車から降りてミッドラウの横に並んだ。

「どかすよ」

「…頼むぜ。なるべく早くな」

そう言いながら荷台の幌から剣を引き抜く。ミッドラウの剣は芯の太い大振りのものだ。近づいて来たひげもじゃの商人が、その剣を

見てぎょっとして、身体を硬直させた。リィンの瞳も険しくなる。

「こういう手を良く使うんだよ。奴らはな」

「ま、まさか。さ、山賊か」

ひげもじゃの商人が、おろおろとし出す。

「幸運だったな、あんた。このミッド様がいるから大丈夫だ。脇に隠れていろ」

商人は何度も頷き馬車の隅に隠れる。

リィンもフードをとり、腰に差した剣を抜いた。すぐに大きな岩に向き直る。瞬時に集中力を極限にまで引き上げ、瞳が紅く燃え上がった。

ごご、と岩が声を上げる。その時、森の茂みから奇声を上げながら数人の男達が飛び出してきた。獣の皮で作られた肘当てと編み上げ靴を履いた独特の格好。

「運が悪かったなあ！お前ら、皆殺しだ！」

「その台詞そっくりそのまま返してやるぜ」

ミッドラウは商人の背をむんずと掴んで、岩と対峙しているリィンとの間に立たせる。彼自身は背後に商人とリィンを庇う形で山賊に向き直った。

「ひいい！お助けえ！」

商人が頭を抱え叫ぶ。

リィンの後ろで戦闘が始まった。じわりと汗をかく。目の前の岩に集中しろ。自分に言い聞かす。

ゆうに八ナルグはあるかと思われる巨大な岩が、ガタガタと揺れ出す。ごごご、と不気味な音が辺りを包んでゆく。

ミッドラウは大きな剣を片手で操り、次々と山賊をなぎ倒してゆく。敵二人が同時に斬りかかった。一方の攻撃をその大振りな剣で受け止め、もう一方は、切っ先を避けてその手首をがっちりと掴む。敵の剣を弾き返した瞬間、手首を掴んだ男のみぞおちに痛烈な膝蹴りを叩きこむ。その一撃で、相手は奇妙なうめき声を残しその場に崩れ落ちた。刹那怯んだ敵を逃さず、素早い動作で右腕を斬り落とす。少しも躊躇はしない。

「あのガキ！イリアス族か！」

岩が完全に持ちあがっている。リィンのすぐ横の茂みから山賊が一人飛び出してきた。咄嗟に剣で攻撃を凌ぐ。ずん、と大きな音を立てながら岩が地面にめり込んだ。リィンが目の前の山賊を睨んだ途端に、相手は吹き飛んで大木に叩きつけられた。

ミッドラウが口笛を吹く。

「こりゃあ無敵だ」

しかし多勢に無勢、いくら彼とリィンが敵をばたばたと倒していっても、森から次々と刺客が飛び出してくる。

「きりねえよ！おい、ずらかるしかねえ！」

リィンに大声で叫ぶ。するとリィンが大声で叫び返してきた。

「今片付ける！コツを掴んだ！」

ずどん、と地響きが起こり、その場にいた全員がよろける。見上げると、頭上高くに巨大な岩が浮かんでいた。ぱらぱらと小石が空から降ってくる。

「な、何だこれは！」

山賊の隊列が動揺し乱れる。ずず、と音を立てて岩が徐々に迫ってきた。ミッドラウも呆然とそれを見上げ、後ずさりながらリィンの傍へ立つ。商人は腰が抜け、その場で尻餅をついていた。

次の瞬間、巨大な岩がスピードを上げて山賊達の頭上へ落下し始めた。男達は怒号と悲鳴を上げて、ばらばらと辺りへ散らばる。耳を覆うばかりの炸裂音。ごごご、と足元を揺るがす地鳴りの後に、濛々たる砂煙が辺り一帯を覆い尽くした。しばらくして砂煙が切れ、遮られていた視界が晴れると、巨大な岩が森の木々を易々となぎ倒し横たわっているのが目に飛び込んできた。馬車はどちらも無事だが砂埃で汚れている。

山賊は倒れている者達を残し、綺麗に逃げ去っていた。

「…すげえな」

ミッドラウは小柄なリィンを見下ろす。少年はまるで全力疾走したみたいに、肩で息をしていた。

「し、下敷きにならなかったかな…」

「そいつあ自業自得ってやつだ、気にすんな」

がくり、とリィンの膝が折れる。ミッドラウは素早くリィンを抱き

かかえた。

「ん？」

おかしい。感触が…。

「お前…」

がっちりとミッドラウの太い腕に抱えられたまま、リィンは顔を真っ赤にしてその腕から逃れようと必死にもがいている。

…女か。

「ば、化け物！」

尻餅をついたまま、ひげもじゃの商人がものすごい勢いで後退してゆく。ミッドラウは呆れた。

「あんたなあ、命が助かったのは誰のお陰だと…」

「ミッド。良いんだ」

腕の中のリィンを見る。栗色の髪が砂をかぶっていた。ついさっきあれだけの強大な『力』を使ったとは思えないくらい、小さな身体。子供みたいに熱い手の平。きめの細かい白い肌。

「…それから、もう大丈夫だから、離してくれ」

◇◇◇◆

診療所の前に馬車を止める。座席から飛び降りて、荷台から解放してやる。ゼペスも相当疲れているはずだ。首筋を撫でてやると、ぶるぶると鼻を鳴らした。見ると足元に水の入ったバケツが置かれ、新鮮な野菜が小さな山を作っていた。用意が良い。

座席にはリィンが静かに眠っている。

ミッドラウは初めてイリアス族の『力』を目の当たりにした。それで分かった事がある。あの『力』をこの目で見るまでは、それが魔法のようなものだと思っていた。だが実際は、そんな簡単なものではなかった。全神経を集中させて発動させるそれは、おいそれと使えるものではない。心身ともに度重なる鍛練と修練を必要とするものであった。

座席に戻り、リィンの寝顔を見つめる。長いまつげに滑らかな頬。薄く開かれた形の良い唇は、柔らかそうな膨らみを持つ。ミッドラウは吸い込まれるように、リィンの顔に近づいてゆく。

「お前にそういう趣味があったとは思わなかった」

ぎょっとして身体を大きくのけぞらせた。玄関の明かりを背に、長身のラディスが腕を組んで立っている。

「はっはあ！ちょっとした冗談だ」

「ん…」

リィンが目を覚ます。

ミッドラウは心の中で舌打ちをして、リィンに声をかけた。

「今日は色々助かったぜ！お前は大したもんだ」

リィンはぼんやりと寝起きの顔でミッドラウを見上げ、ふにゃりと

笑った。

「ラディス、こいつをちゃんと護衛として傍に置けよ」

リィンの肩に腕を回し、なあ、とミッドラウはリィンの顔を覗き込む。

「…どうしてお前までリィンの味方するかな」

頭を掻きながらラディスはため息をついた。

「あの『力』はすげえぜ。俺様が確認した。お墨付きだ。それにこいつの意思は固い！俺は気に入ったぜ！いい加減折れたらどうだ」

「そうだよ」

リィンも力強い味方を得て、にっこりと笑う。

「とりあえず、風呂に入れ」

そう言い置いてラディスは踵を返して戻ってゆく。

「一緒に入ろうぜ、リィン」

「な…！嫌だよ」

こんな些細な冗談にも顔を真っ赤にする。堂々と物を言えるくせに擦れていない。思わず力いっぱい抱きしめてやりたくなるのをこらえて、ミッドラウはリィンに片目をつぶってみせた。

027：風のように去る

診察室の奥にある研究室で、レンズの付いた器具を覗き、記録をつけては後ろの棚から様々な薬品を選び取る。数滴加え、またレンズを覗き込む。ダイヤルを回し、拡大してピントを合わせ、それから数秒微動だにしない。器具の台座にセットされた小さくて薄いガラスの板を外し、記録をつける。難関な計算式をその脇に書き込んでゆく。

その手順を繰り返し、幅広の作業机には数十枚ものガラスの板が並んでいた。

椅子に深く沈み込むと、ぎしりと音を立てる。目を閉じて眉間を押えた。

窓の外で早起きの黒鳥が、鳴き声を上げ始めた。仲間に呼びかけている。まだ外は暗いが、既に今日という日が始まったようだ。また徹夜をしてしまった。

「もうそんなに若くねえんだから、身体を気遣ったらどうだ」

「…お前に言われたくはないな」

ミッドラウが靴音を立ててこちらへやってくる。どうやら異国風の格好が、今の彼のお気に入りらしい。

「そうずかずかと入り込むなよ。雑菌が舞って実験ができん」

ラディスの言葉を聞いていない風で、ミッドラウは両手を机について身を乗り出す。

「また会いに来るまで死ぬんじゃねえぞ」

「お互いにな」

何度となく交わした会話である。彼はもうここを発つようだ。何だかんだと言っても、依頼主の依頼には誠実である。それが運び屋のプロとしての彼だ。

束ねられた黒髪は生き生きとして、精悍な顔立ちはいつも自信満々。褐色の肌に鍛え上げられた太い両腕。ラディスは内心感心する。

こいつは年をとらないのか。

「リィンを護衛に使ってやれ。いいな」

「随分気に入ったようだな」

「あいつは良い女だ。あれ程真っ直ぐにお前を必要としてる奴が他にいるか？それを無視できるような冷たい人間だったか、お前は」

どうやら彼はリィンが女性であるという事実を知っているようだ。

「だから困っている」

「これも運命だ。逆らったってどうにもなるまい。あいつを護衛にしないんじゃ、俺との契約も解消だな」

ラディスは眉間にしわを寄せて運び屋を睨みつけた。

「何を企んでる」

「おいおい、俺はお前みてえな策略家じゃねえよ。ただ、見ものだ

な」

心底楽しそうに、ミッドラウはにやりと笑う。

「お前の理性がいつまで持つか」

「…言ってろ」

何とも馬鹿らしい奴だ。本能のみで生きているような男だとつくづく思う。楽しいか、つまらないか。好きか嫌いか。簡潔で分かりやすい。だからこそ、憎めないのも確かだか。

「じゃあな、ラディス。シャウナの伝言は伝えたからな！」

「それよりブレグロの原石を忘れるんじゃないぞ」

「俺様はプロだ！仕事は完璧にこなす！」

勢いよく扉が閉まった。

０２８：始動

運び屋ミッドラウがベイルナグルの町を去った後、彼とクレイ達に押し切られるようにして、リィンはラディスの護衛として本格的に動き始めた。

ラディスはしぶしぶ了承をし、往診には必ずリィンを連れて歩くようにした。

そうしてリィンはラディスと行動を共にする事で、彼がどのような毎日を送っているのかが分かるようになった。そしてあらためてラディスの持久力に驚く。

基本的に往診へは徒歩で行くのだが、その移動距離は半端ではない。ベイルナグルの町を出ることはしょっちゅうだし、危険な森の奥へ行くことだってある。その先で待っているのは年老いて自力で病院に通えない老人や出産間近の妊婦、貧困ゆえに病院にかかれない山村等の人々だった。彼らこそ、本当に切実に医療を欲している。

しかしラディスがその人々に出来得る事は限られているようだ。器具も薬品も十分に揃っていない出張診療の為、重症患者や処置の出来ない患者は帝国軍の医療部隊に連絡をとる。ラディスの往診では大半が患者の話を聞く事で終わる。相手の話をじっくりと聴き、その間にラディスは患者を≪診る≫。それは五感全てで相手の機微を感じ取ろうとしているような、全神経を集中させて行う真剣な作業であった。

だからこそ彼は過たず患者の状態を判断し、的確な処置を行えるのであろう。

その他に家庭で役立つような処置を教え、衛生指導もする。これが一番重要なのだとラディスは言う。

かと思えば帝都で政府の要職を務める大金持ちの診療もしたりする。この場合はその要人が町はずれにあるラディスの診療所まで、わざわざ足を運ばずに診てもらうのが目的で、倍の診察料を払ってラデ

ィスに往診を頼んでいる事が多い。
以前にニコルが言っていたようにラディスにとってはどの人々も患者である事には変わりはない、という事なのだろう。悪く言えば節操なしだ。

今日は診療を昼過ぎに終えてベイルナグル一の大病院で国に指定されている、ロンバート医師の処へ手伝いに行くという。
ニコルやチェムカ、クレイに見送られて二人は診療所を後にした。

「そろそろ音を上げる頃だと思ったがな」

先を歩くラディスが独り言のように呟く。

「僕を甘く見るな」

早歩きをしてラディスの横に並ぶ。
しかし本当は、全身筋肉痛で足を運ぶのもやっとだった。
これではもし何かがあった時に護衛としてきちんと仕事を果たせるのか心許ない。でも意地でも弱音は吐かない。やっとここまで漕ぎつけたのだから。

「おお、来たか。ラディス、回診を頼む」

ロンバート医師は診察室の仕切りから人の良さそうな顔をひょっこりと覗かせて、挨拶もそこそこにすぐにひっこんでしまった。ラディスはずかずかと部屋を横切り鞣革の大きな鞄から心音機を取り出して、それを首にかけた。腕まくりをし、消毒をかける。ふと思い出したように部屋の入り口に立っているリィンを振り返った。

「大人しく待ってろよ」

「…分かってるよ。子供扱いするなってば」

長身の彼は大股で歩き、あっという間に廊下を曲がって消えしまった。

リィンはマントのフードを目深にかぶったまま病院の外へと続く廊下を歩き出す。こういった場所では、やはり自分はいやでも目立ってしまう。それにイリアス族だと分かっただけで患者が動揺してしまう。その為いつも診療の時になると、ラディスから距離を置くようにしている。

歩きながらちらりと横へ視線を投げると同じような作りの部屋の内部が見て取れた。ベッドは向かい合って四つ。起きて本を読んでいる人や、談笑をする人。寝たままで腕に管を付けている人もいる。

リィンには縁遠い世界であるような、しかし明日にでも自分がそこにいるかも知れないような不思議な感覚に捉われる。

この大きな病院の前は敷地はさほど広くはないが、短い芝の生えた広場になっている。その芝の上に腰を降ろし、ぼんやりと空を眺めた。今日は曇り空で、どんよりと薄暗い雲が一面を覆い隠していた。連日の歩き通しで全身が悲鳴を上げている。

ラディスの身体は何で出来ているのかと不思議に思う。

このベイルナグルに住む人々は恵まれている。

これ程医療の発達した町が他にあっただろうか。レーヌには行った事がないので分からないが、帝都以外はどこも似たり寄ったりだ。

聖職者が医師を兼業し診療よりも祈祷の時間の方が長い。

彼らが信じる神は、リリーネ・シルラという伝説の女神である。これはレーヌ国が発祥の宗教で、今では全世界に広がり多くの信者を有する。女帝が統治するレーヌらしい、美しい女神。

その昔、この女神が大地に降り立ち聖なる光が全ての万民、生きる者達に降り注いだという。するといかなる病もたちどころに消失し、

貧困や戦争等も≪完治≫し、地上の人々は平和と友愛の精神で心豊かに生きたという伝説が残されている。

「リィン、行くぞ」

振り返るとラディスが鞄を肩に担いで広場を横切って来るのが見えた。
慌てて立ち上がり後を追いかける。

「ロンバート先生の病院は大きいから、他にも医者がいるんでしょう」

ラディスがわざわざ診る必要があるんだろうか。

「ああ。だが、俺が送った患者もいるからな」

「ふうん」

こういう事がミッドラウの言っていたラディスの律儀な所なのだろう。

町の繁華街を通り南東へと歩を進める。
ラディスが町をゆくと自然と人々が声をかけてくる。時には家へと引きずられ、無料で診療をする事もある。その為に時間がいくらあっても足りないように思えた。後ろを歩くリィンを訝しげに睨む人も多く、その都度ラディスは最近護衛をつけたんだと説明をして回った。するとほとんどの人が納得顔をしてすぐに警戒心をとく。それ程に庶民の人々は医師である彼を信頼しているようだった。≪黄金の青い目≫を持つ彼であるが誰もが気さくに声をかけるし、その瞳を気にする者もいない。女性には小さな子供から年寄りまで絶大

な人気がある。リィンはラディスに対した女性が顔を赤らめるのを、一日のうちに何度も見る事になった。

しかしそれだけではない視線がある事も、同時に知る事になった。凄まじい嫉妬や殺気、憎悪の塊が時折ラディスに容赦なくぶつけられるのを感じる。そのたびにリィンは身を固くし周囲を警戒するのだが、その視線の持ち主を特定するのは至難の業だった。人通りの多い町並みは、様々な年齢の様々な種族が行き来をしているからだ。

この中にラディスを殺したい程憎んでいる者がいる。

そう思っただけでリィンは緊張せざるを得ない。

当の本人はその気配に気づいているはずだが、いつもと何ら変わりなく飄々としているのだ。

きっとラディスの心臓には、ふさふさの毛が生えているに違いない。

「ラディス先生、ラディス・ハイゼル先生」

政府要人の診療を終えて石畳を歩いている時、背後から呼び止められた。

年老いた男性がこちらに向けて恭しく一礼する。

見事な白髪に深く刻まれた皺。黒のベストにプレスのきいた黒のズボン。その振る舞いからして貴族の執事といったところか。

ラディスは黙ってその老人を見つめる。長身の為少し見下ろすような格好になり、相手はラディスを見上げて口上を述べた。

「突然に失礼を致します。私はモルスディック家に仕える執事、フォダルトと申す者でございます。わが当主フェーマス様の命により、失礼ながらあなた様の事を、ここでお待ち申しておりました」

「何か御用かな」

「不躾なお願いだと重々承知致しておりますが、僅かばかりのお時間をいただきたい所存でございまして…」

「分かった、行こう」

フォダルトと名乗る執事の言葉を途中で遮り、主の元へ案内するよう促す。執事は一瞬目を大きくして、礼を言いながら腰を折り、前に立って歩き出した。

「おい、良いのか」

リィンはラディスを見上げ小声で話しかける。
どこの誰だか分からない、何だかっていう貴族の誘いをあっさりと受けるなんて。悪い奴だったらどうするんだ。

「気づかなかったか。あの執事、最近ここで良く見かけていたんだ。いつ声をかけてくるかと思っていたが」

「え…」

気づかなかった…。

ラディスは横目でリィンを見下ろし、わざとらしく眉をあげた。

「随分と頼もしいボディガードだ」

何の反論もできず、リィンは憮然と老執事の背を睨みつけて歩いた。

029：食えぬ男

「フェーマス様、ラディス先生をお連れ致しました」

声をかけられた通りから角を曲がってすぐの邸宅。

玄関を素通りし庭に通された。

隅々まで手入れの行き届いた庭には真っ白で花弁の大きな花が咲き誇っており、小さな噴水が清らかな水を湛えている。天使の彫像がその脇に鎮座し、庭の中央に配置されたテーブルには高価な茶器が並んでいた。

「御苦労、フォダルト。初めてお目にかかる。私はフェーマス・モルスディック。十二代続くルキリア貴族だ」

そう言いながら椅子から立ち上がった壮年は数歩前に出て、右手を差し出した。額が広く、背は低い。中肉中背の体躯。見るからに上等な上下揃いの礼服。角度まで整えられているかのような髭をたくわえ、黒に近い青の瞳がぎょろりとラディスを見つめる。口元は笑っているが、その瞳は油断ならない。ラディスが大股で彼の前へ行き握手を交わす。

「ラディス・ハイゼルだ。どうやらあなたは俺をご存知のようだが」

「はは。この町で君を知らない者はいない。さあこちらへ」

テーブルにつくよう勧められる。そのテーブルの上にも花瓶が置かれ真っ白の大きな花が生けられていた。フォダルトがラディスの鞣革の大きな鞄をもらい受け、その重みに少しよろける。脇には女性の従者が物音ひとつ立てずに控えていた。フェーマスがリィンに視

線を投げ声をかける。

「君も来たまえ」

リィンはその場に立ち止まったまま逡巡する。

「君の事も知っている。彼の護衛で、イリアス族の生き残りなのだろう」

「リィン、来なさい」

仕方なくリィンはフードをとってフェーマスにぺこりとお辞儀をした。

「リィンと申します」

「さあ二人とも席についてくれたまえ。君達の貴重な時間を無為に奪いたくはない」

「ならば単刀直入にお聞きしたい。わざわざ招いた理由は何だ？それにここへは最近やって来られたようだが…」

「私はザイナスで事業を興しそれに従事していた。それが順調に軌道に乗った為、後を会社の者に任せ、古くからのこのモルスディックの土地につい最近帰ってきた所なのだ」

ラディスは長い足を組んで椅子に腰かけ、上手に口角を持ち上げ笑顔を作った。

「なるほど。そこで耳にした噂の当人を見てみたいと、従順な老執

事を何日間も通りに立たせていたわけか」

フェーマスは鷹揚に笑った。

「手厳しいな。どうやら君に小細工は通用しないようだ」

リィンはこの慣れない雰囲気に飲まれそうになっていた。白い花から甘ったるい香りが止めどなく流れてくる。女性の従者が音もなく近づいて来て手前のカップに飴色の茶を注いでいった。

「率直に言おう、ラディス君。君は信用に足る人物なのか」

ラディスは美しい笑顔を崩さずに無言のまま。その目は感情を映さず、彼が診療の時にしているように相手の全てを鋭く観察する。

「私はロンバートとは旧知の間柄だ。久々に帝都に帰ってみたら、ラディスという若い医師がその業界で革命を起こしていると聞く。その一端をあのロンバートも担っているというではないか。その上彼が、私にこう言うのだ」

そこまで言って優雅にカップを持ち上げる。ゆっくりと茶で喉を潤してから続けた。

「彼こそが、停滞しているルキリアの医学界を牽引してゆく人物であると」

フェーマスはじっとラディスを見据える。

「ロンバートは人が良すぎるのだ。昔からすぐに騙される。今でも懲りずに人を信じて、困った奴だ」

ラディスは短く息を吐き、瞳を伏せた。

「…そのようだ」

「革命と言えば聞こえが良いが、それは戦争に近い。そしてそこで英雄と呼ばれる者は、得てして善と悪の両方の顔を持つ事になる。見る者の立ち位置によって、君は悪魔になり得る」

リィンはぎゅっと胸のつまる思いがした。この人は何を言っているのだろう。ラディスが悪魔のわけがないじゃないか。緊張のあまりに喉が乾いて張り付く。

「その通りだ」

悪魔と言われた彼は微笑をたたえ、恐ろしいくらいに冷静な瞳でフェーマスと向き合っている。

「だからこそ、私は君を実際に見ておきたかった。色々と調べさせてももらった。その≪黄金の青い目≫は伊達ではないな」

「もうあなたは全て知ったも同然だ。俺から何かを話す必要もない」

フェーマスはじっとラディスを数秒見つめ、そして首を振った。

「…そうか。時間をとらせて申し訳なかった。ザイナスから取り寄せた貴重な葉で淹れたお茶だ。飲んでいってくれ」

それを聞いてリィンがカップを手に取った時だった。

「リィン、よせ」

「え？」

ラディスがフェーマスを見据えたまま、ゆっくりとカップを持つ。それを真横に掲げ、そのままカップを傾けた。飴色の液体が勢いよく庭の地面に染み込んでゆく。

「ちょっ…！何してんだよ！」

びっくりしてリィンが声をあげた。彼のその行為を見てフェーマスやフォダルト、従者が凍りついたように固まってしまった。張りつめた緊張が辺りを包み込む。

「どうやらザイナスでは、猛毒を数滴たらして飲むお茶が流行っているようだ」

そう言ってラディスが席を立った。その場にいた彼以外の誰もが、静止絵のごとく硬直する。

長身の医師は愕然とするフォダルトの手から鞄を取り、何事もなかったかのように歩き出す。フェーマスも老執事も、ラディスの行為に対して怒りもしなければ笑い飛ばしたりもしない。誰も一言も声を発さずに顔をひきつらせている。その表情こそがラディスの言った事が真実であると、何よりも雄弁に物語っていた。リィンも呪縛から解かれ飛び退くようにして席を立つ。

「ラディス君」

背後からフェーマスの声が追いかけてきた。リィンは恐怖のあまり振り返れない。

「あなたは頭の良い人だ。どうするかは自分の意思で判断したら良い。俺は俺のやりたいようにやる」

ラディスはそれだけ告げ、モルスディック邸を後にした。

◇◇◇◆

「何であのお茶が猛毒入りって分かったんだ！」

そういえば、クレイが以前言っていた。人並み外れたラディスの嗅覚。

「あのフェーマスという野郎、なかなか食えんな。徹底的に俺を調べたようだ」

「匂いで分かったの？」

「いいや。全く分からなかった。あのテーブルに生けてあった白い花の匂いのせいでな」

確かにあの花の匂いは強烈だった。リィンは身震いをした。フェーマスはラディスの嗅覚が人のそれよりも鋭いという事まで、調べ上げていたのだ。

夕闇の迫る石畳を足早に歩く。今日はまだ往診が残っているのだ。

「じゃあ何で分かったんだよ」

「あいつの瞳孔の動きを見て分かった」

「は？」

「人は上手に嘘をつくが、瞳孔までは操れない」

あんぐりと口を開ける。

「じゃあ最初からあの貴族は、ラディスを殺そうとしてたって事？」

「…いや。あのザイナスの茶のくだりまでフェーマスは真実を語っていた。ロンバートと友人である事も間違いないだろう。ただあいつに声をかけたのは、ロンバートだけではない。おそらくはルーベンか、トワも接触してきただろう。

モルスディックはルキリア貴族の中では珍しく、商才に富んだ人物が出る家柄だ。邸宅は豪華ではないが、その資産は無視できない。そして当主もまた、自分の利するものが何かを見極めようとしている。どちらに転んでも、彼は不利にならないんだろうよ。だから俺を試したんだ」

リィンは呆然とラディスを見つめる。

「呆けている暇はないぞ。夜が深まる前に往診を終わらせないと面倒だ。これから行く所は治安の悪い危険地帯だ。気を抜くな」

今いた所だって十分危険地帯だったじゃないか！

リィンは心の中で叫びながら、ラディスの後をついていく。

革命は戦争で、見ようによったらラディスが悪魔。

ひどく難解な事を、あのルキリアの貴族は言った。でもそれがとて

も重要な事だとリィンには思える。だからゆっくりとそれについて考えたかったし、どういう事なのかをラディスに聞きたかった。しかしその時にそんな暇はなく、リィンの頭の中はどうやってラディスの護衛をこなすかで一杯だった為に、この事は記憶の隅に追いやられてしまった。

０３０：夜の住人ー歌姫ー

ベイルナグルの広場から北に位置する通りは夜にこそピークを迎える。怪しい色を輝かせ夜明けの鳥が鳴くまで、そこを訪れる人々を夢へと誘う。

まだ宵の口の時間ではあるが、既に酔客がうろつく通りをラディスは大股で横切ってゆく。その後ろをリィンはフードを一層目深にかぶってついてゆく。

半地下になっている一軒の店。

入り口には筋肉隆々の大男が裸の上半身に太い鎖を巻きつけて周囲を威圧していた。ラディスはその店へ続く階段を淡々と降りてゆく。リィンは一瞬躊躇した後、慌ててその後へ続いた。入り口の大男がラディスに僅かばかりに会釈し、リィンに向かって鋭い眼光を向けた。

「俺の連れだ」

ラディスがそう告げると大男は無言で重厚な扉を押し開いた。

一瞬視界が闇に閉ざされ、前後左右の感覚が鈍る。

耳にさざめきが聞こえ、そこがホールだと気づいた。

その空間を貫く、透き通った声。

真っ暗な視界の先に薄黄色に輝く舞台が浮かぶ。

リィンは棒立ちになってそれを見つめた。

真っ白の長い髪に、褐色の肌をした女性がたった一人、その舞台の中央に立つ。

銀色の布を幾重にも重ねたようなドレスが天女の羽衣のように、彼

女の動きに合わせ柔らかく弛む。きらきらと照明を反射して暗い客席に光を届ける。
舞台の上に立つ彼女は、スローテンポのバラードを唄っていた。
何という魅惑的な声だろうか。柔らかく、妖艶でいて力強い。
そしてその存在をより神秘的にしているものがあった。
彼女は目隠しをしたまま唄っている。
薄青色の光沢のある布で目を覆い後頭部で結ばれたその布を、両肩から長い髪と一緒に垂らしていた。

「リィン」

はっとして目の前に焦点を合わせると、真黒のシルエットのラディスがリィンを振り返っていた。ホールの客席には降りずに従業員用の通路へ向かう。暗く絞られた灯が点々とその通路を照らし、そこだけが現実的に存在しているかのようだ。しばらく行くと行き止まりに扉があり、その前に女性が壁を背に佇んでいた。

「ラディス！久しぶりじゃない」

その女性の格好にリィンはまた棒立ちになった。
黒の艶やかな髪を高い位置で束ね、耳に大振りのピアスが光る。申し訳程度の布でその豊満な胸を隠し下は下着と見間違える程、丈の短い黒のズボン。どちらもその妖艶な身体のラインに、ぴったりと張り付くような作りになっていた。引き締まった右の太ももに黒の布を巻きつけ丈の長い編み上げ靴を履いている。腰には剣を差しており、良く見るとその身体は完璧に鍛え上げられていた。
彼女は妖しい表情を作り、真っ赤な紅を引いた口元をほころばせた。
ラディスの首にその腕を絡ませる。

「相変わらず良い男」

「君のディーバの診察に来た。通してくれるかな」

ラディスはいつもの美しい微笑で彼女を見おろす。
彼女は必要以上にラディスに身体を寄り添わせ、ふふふと笑う。そのしなやかな肉体の美しさを彼女自身理解しているようだ。

「ネルティエはまだ舞台だよ。ねえラディス、それよりあたしと良い事しないかい」

リィンは目の前が真っ赤になるような感覚を覚えた。
胸が焼けるような、つまるような、とにかく息苦しい。
ラディスと女性が同時にリィンを振り返った。

「…あら」

「グレイア、今夜は冗談が通じない奴を連れてるんだ。素直に通してくれ」

グレイアはラディスに絡みついたままため息をつく。

「何だってこんな所へ子供を連れてきたんだい」

「…子供じゃない」

フード越しにリィンはグレイアを睨みつける。
焼けるような感情。何故だろう、息がうまくできない。

「俺の護衛だよ。リィンだ」

グレイアは黒い瞳を丸くしてリィンを見つめ、それからにっこりと笑った。
赤い唇から覗く白い八重歯は尖っていた。まるで肉食獣だ。

「あらそう」

唐突にグレイアはラディスに口づけた。
熱烈な、キス。
遠く拍手と歓声が響く。
リィンはたまらず顔を背けた。
このまま二人を見つめていたら、『力』が暴走してしまいそうだ。

何故？

分からない。

苦しい。

…痛い。

…何故…？

「はあ…。良い男。このままあんたを食べちゃいたいわ」

恍惚の表情でラディスを見上げるグレイア。

「そりゃあ痛そうだ」

「ネルティエが戻ったわ。良いわよ、通行料ももらったしね」

何事もなかったかのように二人は笑顔を交わし、ラディスは扉を開いて奥へ進む。リィンもその後へ続こうとした所へグレイアが長い足で行く手を阻む。

「あんたはダメ」

リィンは力いっぱいグレイアを睨んだ。
その彼女からただならぬ気配が漂い、相当の使い手であると分かる。
リィンは警戒を強めた。
グレイアは肉食獣のような目を細め、リィンを見つめて呟いた。

「あんたがリィンねえ。ミッドラウが気に入りそうな子」

「え？」

呆けたリィンの瞬間をついてグレイアは手を伸ばし、そのフードをとった。
リィンの白い肌と赤茶の瞳が露わになり、グレイアの動きが止まる。

「…そう。イリアス族ね」

リィンはむすっとしたまま彼女を見据える。何が何だか分からない。
何故ミッドラウの名がここで出てくるのか。それより理由もなく、彼女に腹を立てている自分がいる。
そんなリィンをそっちのけでグレイアは満足げに笑った。八重歯が怪しく光り、迫力のある美貌とその肉体を惜しげもなくひけらかす。

「あたしは世界一のディーバ、ネルティエの護衛を務めるグレイアよ。ラディスは定期的にネルティエの目の具合を見てくれているの」

グレイアは背の低いリィンを見下ろし、細い指でリィンの顎をなでる。リィンは身体を硬直させ緊張を高めた。
彼女から放たれる殺気は相変わらずで、隙がない。しかしここで『力』を使うのはまずい。ラディスは診療中だし、何よりこの場所には逃げ道がない。

「ふふ…。そう固くならないの。ミッドラウから聞いてるわ。面白い子がラディスの所に来たってね」

ミッドラウは運び屋だから、きっとこの地区にも出向いたのだろう。
でも今はそんな事どうでも良い。

リィンは見上げるようにグレイアを睨みつける。
グレイアは楽しそうに目を細め、驚く事を言った。

「ふふ。ラディスが好きなのね。可愛い子」

「なっ…！！僕は別にっ」

妖艶なグレイアの顔が、真っ赤な唇が迫る。

「…っう！？」

噛みつかれるように、キスされた。

柔らかい唇の感触。

「な、何をっっ」

グレイアに顔をがっちりとホールドされて動けない。リィンは顔を真っ赤にして彼女の怪しく輝く瞳を非難する。

「あんたもあたしの大好物よ、リィン。いらっしゃい、あたしの歌姫に会わせてあげる」

リィンはごしごしと腕で唇を拭った。袖口にグレイアの真っ赤な紅が残る。

初めての感触。柔らかくて生温かかった。

キスって、こんなもんなの…。

リィンのファーストキスは唐突に奪われてしまった。

◇◇◇◆

その光景は、まるで一服の絵画のようだった。

先程舞台に立っていた女性が、化粧台のスツールに座っていた。透き通るような白の髪は腰まであり、光を吸収しているかのように輝いている。それと対照的な褐色の肌に桃色の唇。目隠しをしていた布は取り払われ、つぶらな瞳が虚空を見つめている。それに対するように同じ作りの椅子に腰かけたラディスが、長い指で彼女の顎を支え、瞳を覗きこんでいた。薬瓶を傾け、その瞳に点眼し零れた液体を布で拭う。

「ありがとう、ラディス」

「具合は？」

「だいぶ良くなっているわ。最近痛みがないの」

「変えた薬が合っているようだな」

グレイアがリィンの耳元で囁く。

「綺麗な二人。このまま息の根を止めてやりたいわ」

物騒な事を言う。しかし、分からなくはない。

そう、お似合いだった。

またリィンの心がざわつく。動悸が早まってゆく。

綺麗な二人。大人の雰囲気。

僕は、その中には入れない。

だって、似合わないもの。

リィンはまた視線を外し俯いた。

目を閉じて気づかれないように深呼吸をする。

何故かは分からないが、自分が極度に動揺しているのが分かった。

落ち着け。

コントロールしろ、自分を。

僕には関係ない。

僕には必要ない。

そうだ、そんな感情、必要ない。いらないんだ。

邪魔なだけだ。

僕は、男だ。

もう随分昔に、誓った事だ。

再び瞼を開く。その瞳にはつい先程までにはなかった澄んだ光が宿っていた。

ネルティエがグレイアとリィンの方へ顔を向けた。黒い瞳は二人を通り越した先を見つめる。リィンはそこでようやく理解した。

盲目の歌姫、ネルティエ。

「グレイア。その方は？」

「ラディスの護衛だよ」

「…リィンと申します」

ネルティエが柔らかな笑顔を作った。何とも愛らしい笑顔。

「まあ！じゃあ、ミッドラウが言っていた子ね。ここへおいで。私に顔を見せてちょうだい」

リィンはおずおずと歌姫の前へ歩を進め、彼女は両手を伸ばしてリィンを迎えた。リィンの細い両肩に手を添え、それから首を伝って頬を包んだ。そのまま唇や鼻筋、目元にゆっくりと指先を這わせる。

「まあ、綺麗な子。お肌もつるつる」

ネルティエが楽しそうに笑った。リィンもつられて少し笑う。

「はじめまして、リィン。私は歌唄いのネルティエ。あなたの先生に診てもらってから、とっても調子がいいわ」

「とても美しい歌だった。僕、あんな綺麗な歌声を聴いたのは生まれて初めてだ」

「ありがとう、リィン」

リィンの額に唇を寄せるネルティエ。リィンはくすぐったい思いがした。

「すまんな、すぐ帰らないと」

ラディスは既に大きな鞄を肩に担いで席を立っていた。

「ええ、ラディス。気をつけてね」

そう言ってネルティエは片手をラディスへ向かって伸ばす。彼は優しい仕草でその腕をとり、手の甲に口づけをした。

「また来るよ」

薄暗い通路を引き返す。

「ラディス！」

扉が開かれたまま、そこにグレイアが仁王立ちしている。

「あんた、最近シーカーのところへ顔を出してないでしょう」

ラディスが僅かに天を仰いだ。

「…ああ。忘れてた」

グレイアはにやりと笑った。尖った八重歯が覗く。

「呆れた。この地区であいつを恐れないのはあんたくらいだわ。気をつけなさい、今夜は現れるでしょうね。おせっかいなミッドラウが、その可愛い護衛の事を言いふらしていたから」

「ご忠告、ありがとうよ」

リィンは緊張する。誰だ。敵か？

ラディスを傷つけようとする奴だろうか。

そんな事、させるもんか。

そうだ、その事だけに集中しろ。

リィンの集中力が徐々に高まってゆく。

◇◇◆◆

夜の帳が下りた通りを足早に歩く。この区画の本来の顔がもう覗き始めている。厄介な奴らに絡まれる前に、この場所を抜けなければ。

「僕、グレイアにキスされた」

その告白にラディスはリィンを見下ろした。
彼からはリィンの表情は見えない。フードをかぶった小さい頭が俯いており、少なからずショックを受けているようだ。どうやら初めての経験だったらしい。

「そうか。残念だったな」

「何が」

怒ったような顔でラディスを見上げてくる。

「あんな野獣に襲われちゃひとたまりもない。事故だと思え」

リィンはきょとんとして、それから少しだけ笑った。

「…野獣は失礼だろ。なんか、思ってたのと違った」

素直な感想である。ラディスはぷっと吹き出した。

「まあ良いさ。そのうちに、それがどれだけ素晴らしいものか分かるようになる」

彼からはリィンの表情は見えない。
リィンは誰にも聞こえないように呟いた。

そんなの、僕には必要ないんだ…。

０３１：夜の住人ー闇の男ー

大通りを左に折れ、塀がところどころ崩れた寂しい通りに差しかかる。ここを抜ければこの地区が終わる。シーカーのテリトリーから抜ける。

「ラディス！そんなに急いでどこいくんだよ」

リィンは身を低く構え、剣の柄に手を添えた。

右側の崩れた塀から一斉に数人の人間が飛び出し、行く手を遮るように立ちはだかる。ひょろ長い男達が四人、全員が手に剣を持ち不気味に光らせている。力は強くないようだが剣の腕は立ちそうで、ぎらつく殺気を放つ。リィンはラディスを背に庇うように、前へ立った。

「手厚い歓迎だな。ウィリアム」

背の高い男達の間から少年が姿を現した。赤毛の短髪、年はリィンとさほど変わらないように見える。

上等なブラウスに、黒のベストに黒のズボン。その格好だけなら貴族のようにも見えるが、瞳には尋常ではない光が宿っていた。それに腰には剣を差している。

「ミッドが言ってた護衛っての、それ？あっはは。何かの冗談だろ？ガキじゃん」

「お前だってガキだろ」

ラディスが何かを言う前にリィンは言い放った。

ウィリアムは明らかにむっとして腕を組む。

「生意気な奴だな。まあ、良いや。どんなもんかお手並み拝見だ」

「お前がいるって事は、シーカーも来ているのか」

「あんたが挨拶に来ないからさ、わざわざこっちから出向いてやったんだぜ。ラディスは手を出すなよ。これは、ここのルールだ」

そう言って少年はまたひょろ長い男達の背後へ消えた。じりり、と四人の男達が間合いを詰める。

「そういうわけだ。ここでなめられない為には、あいつらを倒す事だな」

リィンはゆっくりとフードをとりながら呟いた。

「ちょうど良いや。むしゃくしゃしてた所だ」

ざわり、と男達が揺れる。

「イ、イリアス族か」

「嘘だろ。化け物だ」

リィンはそんな男達にお構いなしに『力』を発動させた。

瞳が深紅に燃え上がる。

≪曲がれ≫

四人の男がそれぞれに持つ剣が同時にぐにゃりとひしゃげた。鍛え抜かれた鉄で出来たそれが、まるで粘土細工のように、簡単に曲がって鉄クズと化した。

「ひいっ」

一人が気味の悪いものでも手にしていたかのように慌てて剣を投げ捨てる。途端に及び腰になる男達。

その剣の腕を披露する事もないままどうして良いか分からずにじりじりと後退し始め、リィンはそれに追い打ちをかけるように意思を込めた。

≪切り裂け≫

無数の風が男達の間を通り抜けていった。尖った大気。凶暴な切っ先は男達の服を切り裂き肉をかすり、一瞬にしてその身体中に数多の傷を残した。

それはリィンがあまり人には使おうとしない『力』の形態だった。あまりにも残酷すぎる、相手を嬲るような行為だからだ。しかしリィンの瞳に躊躇は見えない。揺るぎない紅の瞳。

「うわああ！」

「いてえ！い、いつの間に！」

「化け物だ！こんな奴、倒せねえ！」

「助けてくれえ」

大した傷でもないのに男達はばらばらとその場から逃げ出してしまった。

そうだ、恐れれば良い。イリアス族は化け物だ。お前等の望みどおりそれを演じてやる。

僕は、化け物だ。

それで良い。

後には鉄の塊と化した剣と、呆然と立ち尽くすウィリアムが残された。少年は咳払いをしてその腰に差した剣を抜いた。たった今、目の前でイリアス族の『力』の脅威を見せつけられた訳だが、怯まない。

「面白い。今度は俺が相手だ、化け物」

リィンも身体の割には大きめの剣を抜いた。気に入らない、剣で黙らせてやる。二人は同時に走り出す。

キィン、と高い金属音が夜の闇に響き渡った。

リィンの一撃は重い。ウィリアムはこの一回、剣を合わせただけでそれを瞬時に感じ取り、ひらりと身軽に身体を翻らせ切っ先をかわす。リィンは間髪入れずに次々と攻撃を繰り出すがウィリアムは防御に徹し、その全ての攻撃をしなやかな動きでかわしてゆく。

「こ、の！ちょこまかと！」

リィンは剣を振りおろし、ウィリアムがそれをかわした瞬間を狙って足を突き出す。それがまともにウィリアムの腰にめり込んだ。

「だっ！」

少年は大きく飛び退いてから腰に手を当ててリィンを睨みつける。

「てめっ」

肩で息をする二人。

「ふん。逃げてばかりいるからだ」

リィンは剣を横に構え斬りかかる。すると目の前の少年が突然消えた。そう思った次の瞬間に右頬に激痛が走る。ウィリアムはリィンの攻撃を身を低くしてかわし、素早く脇へ抜けてリィンの顔を殴りつけたのだ。

「ってえ！」

「へへーんだ。ガラ空きだぜ！」

「くそっ」

もう一度、二人が剣を構えた時だった。

「そこまでだ」

低い声が響く。はっとしてその声のした方へ顔を向けた。暗闇にシルエットが浮かび、ゆっくりとこちらへ近づいてくるその人物は、禍々しいまでの気配を放っている。リィンは身を固くして前を睨んだままラディスの元まで後退し、ウィリアムは困った表情を浮かべ剣を収めた。

「なかなか腕の立つ護衛のようだ」

街灯の明かりの下に、彼は立った。深い闇から抜け出てきたような男。黒の礼服を優雅に着こなし、黒の髪は目にかからないように後ろへ流されている。その鋭い眼光は、見ただけで身震いをしそうな程恐ろしい。足元の革靴も黒だ。これ程黒が似合う男が他にいるだろうか。

「ちぇ。来るのが早いよ、シーカー」

「見たところお前の方が押されていた」

「違うよ！これから反撃するとこだったんだ！」

ウィリアムが長身の黒い男を見上げて反論している。

「…こいつが、シーカー？」

リィンがぼそりと呟き、すぐ背後に立つラディスが答えた。

「そうだ。この夜の町を支配する、裏稼業のボスだ」

男はウィリアムには目を向けずに大きな手で彼の赤毛の頭を押さえこんだ。

「ラディス。ここへ来る事があれば、俺の元へ挨拶に来いと何度も言っているだろう」

「すまんな、忘れていた」

シーカーはその鋭い瞳でラディスを見つめる。怜悧な面立ちは全体的に細く威圧的で、背はラディスと変わらない。こんな恐ろしい人物と対峙しているのにラディスはいつもと変わらず飄々とした態度で、リィンは少し心配になった。相手はこれ程凶暴な殺気を放っているのに、これじゃあ気負けしてしまうんじゃないか。

「お前に好き勝手されたら他の連中に示しがつかん」

「そうか。それは大変だな」

ラディスはちっともそう思っていないような声で返事をした。シーカーはため息をついて踵を返し、闇へと歩き出す。ウィリアムが呆けた表情で彼の背を見つめた。

「おい、良いのかよ！示しがつかないんじゃないのか」

「あのイリアス族は面倒だ。この礼服を切られたら、たまらん。これから出向く所があるからな」

ウィリアムがぎろりとリィンを睨みつけてから急いでシーカーの後を追う。

身体半分を闇に溶け込ませたまま、闇の男は振り返った。

「お前程の男が、医者をしているなんて馬鹿らしい。俺はまだ諦めた訳ではない」

そう言い置いて、音もなく深い闇に消えた。

「…どういう意味だ」

リィンが長身のラディスを見上げて呟く。

「俺がヤクザにスカウトされてるって事だ」

ラディスはリィンの顎を掴んで顔を近づけた。彫像のような整った顔が突然間近に迫り、青い瞳がまっすぐに見つめてくる。

「何だよ！」

リィンは慌てて顔をそらした。赤面しているのが自分でも分かって、それが一層恥ずかしく思える。

「大した傷ではないようだな」

「あ…」

顔を殴られた事をすっかり忘れていた。思い出した途端に、ずきずきと痛み出す。

「だ、大丈夫だから。離してくれ」

けれどラディスはじっとリィンを見つめたまま離そうとしない。リィンは仕方なくちらりと彼を見やる。

「俺はお前を化け物だなんて、思っていない。そんな風にさせるつもりもない。良いな？」

どきりとする。まるで心の中を覗かれたみたいだ。

リィンはまた胸が苦しくなる。

「わ、分かってるよ」

ラディスが真顔のままリィンを解放した。

「それにしても、今日は荒れていたな。お前にしては珍しい」

「…うるさいな。僕だってやる時はやるさ」

「ふん。頼もしい限りだ」

疲労がどっとリィンの細い両肩にのしかかってくるようだ。今日は一日で色々な事がありすぎた。緊張したり、怒ったり、感情もさんざん振り回されたせいで、へとへとだった。

こんな一日が毎回じゃなければ良いけど。

祈るような気持ちでリィンは夜空を仰いだ。

０３２：胸に秘めるもの

翌朝、目覚めたリィンは身体が鉛にでもなったかのような感覚を覚えた。ベッドから起き上がるのもやっとで、膨らんだ胸を抑えつけるように日常的に巻きつけている布を今日はどうしてもする気になれなかった。ただでさえ息苦しい感じがする。とにかく今は止めておこう。この緑のベストを着ていれば、身体のラインは隠せる。

身支度をのろのろと整え階下へと続く階段を降りてゆくと、人の話し声が聞こえてきた。玄関口にラディスとクレイ、それに珍しくエンポリオもいて、三人は立ったまま何やら話しこんでいた。

「…実際に見てみないと何とも言えんな。昼過ぎにそっちに行く。クレイ、お前も来い」

「はい」

「僕は専門的な事は分からないからね、ワドレットに直接聞いてくれ。

リィン、おはよう！今日も可愛いね」

エンポリオが目を細め、手を振ってやって来る。くせの強い金色の髪がふわふわと朝日に輝く。彼は何の冗談か分からないが、しょっちゅうリィンを口説こうとしていた。

ラディスは両手を腰に当ててリィンをじっと観察し、ずかずかとエンポリオを追い抜かしてやって来た。

「お前…。熱があるな」

そう言ってリィンの額に手を当てる。

「な、ないよ」

慌てて言い張るが、その顔は熱で赤く目も潤んでいる。

「今日は寝ていろ。昼過ぎからはエンポリオのところへ行くだけだから護衛もいらん」

「大丈夫だよ！」

「かわいそうなリィン。この人でなしに、さんざんこき使われたんだろう？ああ、こんな華奢な身体をしているのに！」

そう言いながらエンポリオが突然リィンをぎゅっと抱きしめた。

反射的に逃げようとしたが、熱のせいで動きが鈍っていた為、がっちりと彼に抱きすくめられてしまった。

しまった…。

エンポリオの紺色の両目が大きく見開かれる。

「リィン、君…。君ってば…」

エンポリオがリィンの顔を覗き込んで続けた。

「女の子だったんだね…」

リィンはどうして良いか分からずエンポリオの腕の中で俯いた。ラディスがため息をつきながら頭を掻く。

「…イリアス族の女性は、何かとリスクが高い。お前も知っているだろう、エンポリオ」

「ああ…。イリアス族は美しい種族だ。奴隷の時代から、惨たらしい運命を背負わされる女性の、何と多かった事か」

奴隷として高値で売られ、凌辱され、心と身体を切り刻まれるのだ。

「そういう事だ。この事はお前の胸の内にだけ留めておけ。それと、今まで通りリィンに接するように。良いな」

ラディスが念押しし、エンポリオはこっくりと頷いた。

「…まさか女性だったなんて」

やっとクレイが声を出した。顔面蒼白である。

「で、では、私は女性に剣を振るっていたという事に…」

生真面目なクレイには相当のショックだったようでリィンは慌てた。

「良いんだ、僕が望んだんだ。それに、下手に女扱いして欲しくない」

必死で言い募るが、クレイは弱々しい視線を投げるだけで言葉を発しない。ラディスが振り返ってクレイに言った。

「気にするな、クレイよ。この凶暴な奴を淑女と一緒に考えない方が良いぞ」

「…何だよそれ」

ラディスの物言いにむすっとして言い返す。

「ああ、リィン。僕は嬉しい！何せこれで堂々と交際を申し込めるのだからね！」

エンポリオが満面の笑みで、また強く抱きしめてくる。

「エ、エンポリオ…くるし…」

ラディスがエンポリオの頭を叩きリィンを解放してやりながら首を振った。

「まったく…。やっかいな奴にバレちまったな。とにかく、リィンは大人しく寝室で休んでいろ。エンポリオ、お前は仕事場へ戻れ」

「リィン、僕は君の味方だからね」

紺色の瞳がこちらをじっと見つめる。

「…ありがとう」

エンポリオは満足げににっこりと微笑んで帰っていった。すぐに診療所の慌ただしい朝が始まる。ラディスは颯爽と廊下を歩き、クレイがふらふらとその後に続いた。

◇◇◇◆

診療の合間、ラディスは記録をつけながらクレイに話しかけた。

「何か言いたそうだな」

クレイは次の患者を迎え入れる為に脱脂綿やガーゼ等を所定の位置へセットしながら、憮然として答えた。

「…何も私にまで秘密にしておく事はなかったのではないですか」

ラディスは苦笑をもらす。

「女性と知っていたら、あいつに護衛を頼まなかったか？」

クレイは逡巡し言葉に詰まった。

「…分かりません」

「どちらにせよ、あいつはそのうち護衛から外す」

「え…」

「ゼストと約束をしたからな。あいつには人として『力』なんか使わずに済むように、暮らせるようにしてやらないと。護衛なんていう職業はその真逆の行為だ。それにまだ若い。こっちの都合で生きる世界を狭めるような事があってはならない」

クレイはラディスを見つめた。やはり、彼はリィンの保護者のようにその将来を案じていたのだ。真っ先にその事を最優先に考える。しかし…。

「リィンはそれを望むでしょうか。私にはそうは思えません」

ラディスが眉をあげてクレイを見やる。

「望まないというのか？そんな訳ないだろう」

「しかしもし、リィンがラディス様の護衛である事を望んだら、どうなさるおつもりですか」

珍しくクレイが言い募る。

「あり得ない。意味が分からん」

クレイがまた口を開きかけた時、次の患者が入って来てその話は中断された。

彼の胸中には確信めいたものが去来する。

…ラディス様は分かっていらっしゃらないのだ。

強い精神力と揺るぎない信念を持ち、休む事もせず戦い続けるラディスという人間。その彼に魅了されたクレイにならリィンの気持ちが手に取るように分かる。クレイ自身がそうであったように、何を言われても何があろうとも、この主とともに生きていこうと決断させる程の影響力とカリスマ性を、併せ持つ人物。それがラディスという人間だ。

その傑出した人物に出会えた事こそがクレイにとっての、奇跡ともいうべき大事な出来事なのだから…。

◇◇◆◆

大きなベッドの上でリィンはうっすらと瞳を開けた。ニコルが作っ

てくれた氷嚢が、ひんやりと額を冷やしてくれている。
数時間眠っていたようで、だいぶましになったように思える。ゆっくりと身体を起こし居室へと向かう。
リィンは必死だった。熱なんか出してラディスに護衛は無理だと言われてしまいそうで、落ち着いて眠ってなんかいられなかったのだ。
ぼおっとしたまま扉を開くと、ラディスが既に外出しようとしている所だった。
クレイも席を立とうとしており、ニコルとチェムカは二人で台所に立ち後片付けをしている。室内は慌ただしく、リィンにはまだ誰も気付いていないようだった。

「あ、待って先生。さっきジェイクさんとこの従者の人が来てね」

ニコルが前掛けで手を拭いながらラディスを呼び止めた。

「ユマさんの診察日を早めて欲しいって。どうしましょ」

具合が良くないのかしら、と不安げな表情。

「そうか。明日は休診日だったな。明日出向くと伝えてくれ」

振り返ったラディスが目の前にいるリィンに気付いて、つんのめるようにして立ち止まった。

「…びっくりさすな。まだ顔が赤いな、大人しく寝ていろよ」

リィンの小さな頭に、ぽんと手を置いて出ていった。

「あらリィン、起きて大丈夫？お腹すいたでしょう。こっちへおいでな」

ニコルが声をかけてくれる。

「う、うん…。あの、ジェイクって？」

ああ、とテーブルにてきぱきと配膳をしながらニコルは説明をした。

「ジェイク・ハイゼル。先生のお養父（とう）さんで、貿易商をしている方よ」

「ラディス様の後見人とでも言いましょうか」

クレイが付け足して説明を加える。

「ジェイクさんとこには、お嬢さんが一人いてね。身体があんまり強くないんだよ」

確か今年で二十二だったかしらねえ。色白の美人で優しくって、とっても気立ての良い娘さんなんだけどねえ。

「…ていう事は、ラディスの妹、さん？」

「そういう事になるね」

「…ふぅん」

リィンはテーブルの隅の席に座りながら、何の気もなような返事を返した。

「リィン、まだ辛そうでねえの。無理しちゃだめだべ」

チェムカが心配そうにリィンの顔を覗き込む。

「平気だよ。ニコルの美味しい料理を食べたらすぐに治るさ」

にっこりとチェムカに笑顔を向けてから、リィンはもりもりと目の前の料理を食べはじめた。

「あはは。ほんと、食欲はあるみてえだ」

「これリィン。ゆっくり食べなさいな」

だって、早く治さなくちゃ。明日は絶対ついていくんだ。

以前にラディスの友人の、運び屋ミッドラウが言った言葉をリィンは記憶していた。

ラディスは愛する人を作らない。それは自分のゆく道が、あまりにも険しく過酷なものだと承知しているからだ。その道を、自分と同じ運命を、愛する女性に課す事などできないからだ。そしてそう思う彼を安心させて包み込んでやれるような女性が、今まで現れなかったという事も事実だ。

しかし≪ユマ≫は違う。

ミッドラウの言い方はそうだった。

ジェイク・ハイゼルはラディスの養父で、そのジェイクには一人娘がいる。その女性の名が≪ユマ≫だ。

単なる偶然ではない。きっとその人物こそが、ミッドラウの言って

いた≪ユマ≫なのだ。ラディスの妹。しかし血は繋がっていない。

リィンはその女性に会いたいと思った。

どんな人か見てみたい。

ラディスが好きなのかも知れない女性…。

◇◆◆◆

「おい、何してんだ」

ラディスが呆れた声でリィンを咎めた。

「僕も行く」

翌朝リィンは素早く準備を済ませ、ラディスが外出するのを待ち構えていた。

「病み上がりが何言ってる」

「もう平気だよ！」

既にマントを羽織りフードをかぶっているのは、ラディスに顔色を見られないようにする為だ。ラディスの調合した熱さましの薬はよく効いて、もう熱は下がっていた。まだ少し頭がくらくらするが、歩けない程ではない。

「…どうしてそんなに頑固なんだか。まあいい。そのうち連れて行こうとは思っていたからな」

ラディスが折れてクレイに留守を預け診療所を後にした。今日はどんよりとした曇り空で、今にも雨が降りそうな気配。空気が湿っている。

「ジェイクはお前の父親、ティルガの無二の親友だった」

「父様を知ってるの！？」

「ああ。生前のティルガの事を良く知っている。色々と聞くと良い」

リィンの胸は期待と不安で一杯になった。
父の事を知る人物に出会える喜びと、ユマという女性の存在。

リィンは考えのまとまらない頭を振って一生懸命に歩を進めた。心の奥がざわざわとしていたが、それはきっとまだ体調が万全ではないからだ、と自分に言い聞かせながら。

０３３：大事なひと

町の中央広場を中心にして、南東に位置する区画は高級住宅街だ。貴族や富裕層がこぞってそこで生活をしている。この地区で家を構える事が、ある種のステイタスにさえなっているのだ。以前に立ち寄ったモルスディック邸があるのも、この地区である。

大通りに面した大きな石造りの家。見た目は会社のようにも見え、飾り気のない外観。巨大な門扉に作りつけられた呼び鈴を鳴らすと、しばらくして婦人の従者が施錠を開けて顔をのぞかせた。

「ラディス先生、どうぞお入りください。旦那様がお待ちですわ」

「ああ。ユマの様子はどうだ？」

ラディスは家に入りながらすぐに状態を聞き出す。

「お嬢様は先程ちょうど起き上がられたところです。二日前から少しお熱があるようで、胸が苦しいとおっしゃられて。食欲もあまりないようですし…」

四十代だろうか、少し顎の尖った輪郭で、眼鏡をかけている従者はため息をつきながら続けた。

「ラディス坊っちゃんには、もっとこちらへ寄っていただくようにして欲しいですわ。お嬢様を元気づけてあげてくださいまし。

…あら、この子は？」

従者がフードをかぶったリィンの存在にようやく気付いて、ラディスを見上げた。

「俺の護衛だ」

「ラディス、待っていたぞ」

目の前の広い階段から一人の紳士が下りてくる。
ひょろりとした体躯に白のブラウス、上等な生地の茶のベストに対のズボンを身につけている。白髪混じりのブラウンの髪は綺麗にセットされ、柔らかな物腰。

「まったく、用がないとお前は顔を見せにこないな。親不孝な奴だ」

ラディスに笑みを向けて握手を交わす。柔和な笑顔は、慈愛をたたえている。
ジェイクは髪と同じブラウンの瞳をしていた。ルキリア貴族ではないようで、それはこのベイルナグルでは珍しい事だった。ルキリア族以外の種族がこの地区にこれ程大きな家を構えられるという事は、商人としての才能に恵まれているのだろう。
ジェイクが傍らにいるリィンに気づいて視線を寄こした。

「ジェイク、これがリィンだ」

ジェイクの目が大きく見開かれる。
ラディスが挨拶するように目で合図した。リィンはフードをとり、ジェイクを見上げて言った。

「リィンと申します」

「…君が…」

口元が僅かに震え出す。ジェイクはそのままじっとリィンを凝視し絶句した。それから口元がふにゃりと曲がり目じりが下がる。笑顔を作っているようだが、それは何とも不格好な表情だった。

「…綺麗な子だ…。シルヴィに、似ている。それに、その髪の色は…ティルガの…」

震える手がリィンの髪におそるおそる触れる。ジェイクの瞳に涙があふれた。

「リィン…。私はジェイクだ。ジェイク・ハイゼルだ。君のお父さんの事を良く知っている。彼は、とても偉大な、人物だったよ」

リィンは初めて、こんな大人の紳士が泣く所を見た。ジェイクは泣きながら微笑んでいる。

「ああ、よく来てくれた。よく、ここへ来てくれた。君は確かに、ティルガとシルヴィの子だ」

ありがとう、とジェイクは言った。
リィンの胸は熱くなり、そして涙ぐんだ。

彼は知っている。父様と母様の事を。
そして、リィンの中の、ティルガを見つけて泣いているのだ。

ラディスがそっとジェイクの肩を抱いた。ジェイクは何度か頷きながら鼻をすすり涙を拭う。

「はは…。すまないね、どうも年をとると涙もろくなってしまって。ラディス、ユマを見てくれないか」

「ああ」

ジェイクがリィンに振り返り、また笑顔を向ける。

「後でゆっくり話をしよう」

「はい」

ジェイクに微笑みを返した。

これが、父様の友達だった人でラディスのお父さん。

優しい人だ。

従者に剣とマントを渡して階段を上がる。

美しい木目の扉にノックをしてラディスが中へ入り、ジェイクと従者は隣の部屋へ入っていった。リィンの目の前に開かれた扉の奥に、≪ユマ≫がいるのだろう。緊張で少し息苦しくなる。

「ラディス、来ていたの」

「ああ。大丈夫か？」

「ええ。ちょっと無理をするとすぐこれだわ」

気遅れしながら部屋に足を踏み入れる。花の優しい香りが流れる室内は、綺麗に磨き上げられた家具や装飾品が並び女性の部屋らしく華やかな内装だった。大きな出窓の傍らに豪奢な作りの真っ白なベッドが置かれ、そこに身体を起こした女性がいる。

ユマは、とても綺麗な女性だった。

あまり外に出ない為に日焼けをしていない色白の肌。ブラウンの髪は柔らかい曲線を描いて、その華奢な両肩へと流れる。瞳には力があり愛らしい口元には笑窪が浮かび、微笑んでいるのが見えた。ゆったりとした白の寝間着を着ているせいか実年齢より幼く見えるようだ。

ラディスはユマと対するように傍の椅子に座っていて、彼もまた微笑んでいる。

リィンはその光景に、激しい衝撃を受けていた。

いつかネルティエとラディスを見た時のような息苦しくて胸が詰まる感覚と似ているが、まるで違う。リィンは自分があまりにもショックを受けている事に、動揺した。何故目の前の光景に、こんなにも動揺しているのかも分からないまま無意識に自制をかける。

落ち着け…。

自分に言い聞かせる。が、視界がだんだんと暗くなってきて、深呼吸をしようとしても浅く息を吸い込む事しか出来なかった。

ラディスの表情は今までに見た事のないものだった。

ユマを見つめる彼は、無防備で穏やかで、何のてらいも一切混ざらない瞳をして、その微笑みはとびきり優しく、相手を包み慈しんでいる。

そう見える。

そんな彼を初めて見た事で、予想していた事が真実だったと気づかされた。

どくん、と心臓が脈打つ。

苦しい…。

目をそらさなきゃ。早くここから去らなきゃ。

そう思うのに視線は目の前の二人に張り付いたままで、身体も凍りついたように動かない。すうっと自分の身体が二人から遠ざかってゆくような感覚。

胸がぎゅう、と潰されているかのように、痛い。

ラディスの手が、ユマの頬に触れる。

「まだ熱いな」

「もう大丈夫よ。ラディスの熱さましは、とっても良く効くもの」

リィンは両目をぎゅっと固く閉じた。

その時だった。

パリン、と窓ガラスの割れる音。

「きゃっ」

「ユマ！」

はっとして目を開く。目の前の光景が否応なしに飛び込んできた。

ユマの寝ているベッドのすぐ横にある、大きな出窓。その窓ガラスが割れて、バラバラと下に降り注いでゆく。ラディスがユマを抱き

しめるようにしてその身体で彼女をガラス片から守っていた。

愕然とした。

『力』が暴走してしまった。

そう認識した途端、全身に悪寒が走り、がたがたと口元が震えだす。

「…あ、あ」

何かを言おうとしたが喉が詰まって言葉が出ない。浅い呼吸を何度も繰り返す。

ゆっくりとラディスが身体を起こし、リィンの方へ顔を向けようとしている。

怖い…！

リィンは駆け出した。

「リィン！」

背後からラディスの声。

視界の端に隣の部屋から何事かと従者が出てきたのが見えた。

全力で広い階段を駆け下り、扉に飛びついて外へ飛び出した。そのまま石畳の上を走る。

僕は何て事を！

息が上がって苦しい。でも、走らなければ。

足を動かせ。もっと早く。早く！

遠くへ逃げなければ。怖い。怖い。

怒ったラディスが追いかけてくるかも知れない。

ベイルナグルの通りをがむしゃらに走り続ける。小さな段差に躓いて、その勢いのまま転んだ。

膝や手の平に鋭い痛みが走り口に砂利の味が広がった。

「う…」

両目から、ぼろぼろと涙がこぼれる。

「おい、大丈夫か」

目の前に手が伸びて来た。誰かがこちらに手を差し伸べようとしている。

「僕に、触るな！」

リィンは大声を出しながら立ち上がり、声をかけてくれた相手も振り返らずにまた走り出す。

『力』で傷つけてしまう。心が乱れて制御出来ない。

角を何度も曲がり、薄暗く細い道を走り続け、小さな袋小路で崩れ落ちるように膝をついた。

両手をついて喘ぐように荒い呼吸をすると喉が切れてしまったかのような痛みが走った。そこでやっと雨が降っている事に気付く。

リィンは泣いていた。

雨はリィンの小柄な身体の上にも容赦なく降り注ぐ。全身ずぶ濡れ

で四つん這いになったまま声をかみ殺して泣いた。

何てひどい事をしてしまったんだ。
僕は何てひどい事を…。
ラディスはきっと怒ってる。

だって、ラディスの大事なユマを、僕は傷つけようとした！

苦しい。

息が、思うように出来ない。

壁際に積み上げられた木箱が、がたがたと音を立てている。呆然としたままそれを見上げた。
また『力』が勝手に暴れている。
泣いているからだ。
感情を、コントロールしなければ。

泣くな。泣き止め！やめろ！

そう思うのに、後から後から涙が出てくる。

「…っう、あ…」

震えながら緑のベストに右手を入れて短剣を取り出し、鞘を乱暴に取り払う。躊躇なく銀色に光る切っ先を両手で握り締めた。雨に混じりながら赤い血が滴り落ちてゆく。固く目を閉じて、痛みに耐える。
揺れていた木箱がぴたりと動かなくなった。

両手に込めていた力を緩め、ゆっくりと目を開く。
目の前の水たまりが泥と血で濁っていた。

このままここにいたらいけない。でも、剣もマントも置いてきてしまった。このままの格好では目立ってしまう。

僕はイリアス族だから…。

立ち上がろうと足に力を入れるが、身体が思うように動かず転んでしまった。絶え間なく降り続く雨がリィンの体力を奪ってゆく。そのまま這って移動して壁に背をつける。見上げた空は灰色で、天から無数の水滴が落ちてくる。
リィンはそのまま気を失った。

０３４：想いの行方

気づくと薄暗い廊下を歩いていた。
それはネルティエがいた店の従業員通路に似ている。暗い灯が点々と先を照らす。息を吐き出すと白く曇った。何て寒い所だろうか。

「リィン」

懐かしい声が聞こえた。視線を先へ向けると、廊下のずっと先の方に立っている人影が、三つ見えた。

ああ…。どこに行ってたの、僕を置いて。

「リィン、おいで」

ゼストが、こちらに向かって手を差し伸べている。
隣にはシルヴィがいてライサも優しい笑顔をたたえている。

「リィン、こっちよ」

シルヴィの声。記憶の中の、優しい声。

良かった。僕はもう、一人ぼっちじゃない。

歩く速度を早める。なのに、歩いても歩いても三人に近づけない。
慌てて走り出した。

「リィン」

だんだんと三人が遠ざかる。黒い影になってゆく。

待って、すぐ行くから。行かないで。
母様、ゼスト、ライサ。
行かないで。

僕を置いていかないで。

もう嫌だよ。

一人ぼっちは嫌だよ。

目を開けると見慣れた天井が見えた。

「…ゼスト」

リィンは呟きながら身体を起こす。額に置かれていた冷えた布が、ぱさりと落ちた。辺りを見回す。

「ゼスト、いないの？」

そこでやっと、夢から覚めた。

そうだった。

ゼストはもう、ここにはいない。

だんだんと意識が覚醒してゆき、恐怖に身を竦める。

リィンは寝室に寝かされていた。どうやらあの後、気を失ってしまったらしい。窓の外から雨の音が聞こえる。さほど暗くはなく、まだ夜にはなっていないようだ。リィンは思うように動かない身体で必死にベッドから這い降りた。自分を見ると患者用の長いローブを着せられていて、両手には包帯が綺麗に巻かれ擦り傷にもきちんと手当が為されている。

『力』が暴走してしまった事、そのせいでユマを傷つけてしまった事。謝らなければいけないと思う。

しかしリィンの心を支配していたのは、何よりも恐怖だった。とにかくここから逃げ出したい一心で壁に手をついて歩き出す。

「おいおい、何をする気だ」

水の入った瓶を片手にラディスが戸口に立っていた。

青い瞳が、リィンの異変を瞬時に感じ取る。

「…まだ寝ていろ」

ラディスが慎重に一歩踏み出すとリィンがびくりと身体を震わせて、一歩後ずさった。

「く、来るな」

恐怖のあまり口元が震え出す。

「…大丈夫だ、何もしない」

ラディスの低い声が落ち着かせるように囁いた。

「あ、あんな事、するつもりなかった」

リィンの顔が苦痛にゆがむ。

「ご、ごめん…。僕、ぼく…」

「良いんだ、リィン。お前は悪くない」

ラディスがまた一歩、リィンに近づく。

「来ないで!!」

リィンが叫んでラディスを拒絶した。同時に、ラディスが手に持っていた瓶が内側から爆発した。バン、という破裂音とともに、水とガラス片が盛大に辺りに飛び散った。鋭い瓶の欠片がラディスの頬をかすめ、赤い血が滲み出す。

リィンの瞳が深紅に揺らいでいた。ラディスの血を見て、その両目が大きく見開かれる。

「リィン、大丈夫だ」

「は、早く、ここから出ていけ…」

リィンは口の端から絞り出すように呟いた。顔色は真っ青で、がたがたと震えている。

「リィン」

ラディスは飛び散ったガラス片や頬から流れる血にも構わずに真っ直ぐにリィンを見つめたまま、また一歩近づく。

「僕に構うなっ！早く出ていけよ！」

叫んだ瞬間、ラディスの手が伸びてリィンの腕を掴んだ。暴れるリィンをそのまま抱き締める。

「…うっ。は、離せ！」

ラディスの袖を掴んで引き離そうとするが、彼はより強くリィンを抱き締める。

リィンが喘ぐように叫んだ。

「い、いやだ…！あんたを傷つけたくないっ！」

『力』がまだ制御しきれない。自分の感情を自分がコントロールできないせいでラディスを傷つけたくなかった。だから、一人にしてほしかった。

「大丈夫だ。俺が受け止めてやる。…だから、そんな風に感情を抑え込むな」

ラディスの声が身体を伝って届いた。リィンを包み込む彼の香り。

「…う、うう…」

紅い瞳からぼろぼろと涙がこぼれ出す。ぎゅう、とラディスの服を掴んだ。

「リィン。すまなかった。俺が悪かった」

「ご、ごめっ、なさい…。ぼく、ユ、ユマを…」

しゃくり上げながらリィンは必死に言葉を吐き出した。

「ユマなら大丈夫だ、何ともない。お前の方がボロボロだ」

ラディスが呼吸を促すように、小さな背中をゆっくりと優しく撫でる。

「う…。ラディスっ。ごめっ…ん」

「大丈夫だ、誰も怒っていない。誰もお前を責めたりしない。安心しろ」

「ぼ、僕を嫌わないでっ…。ぼく、もっと頑張る、から…」

ラディスの手が止まった。

「…リィン」

リィンは泣きじゃくりながら訴える。

「ぼくを、そばに置いて…。お、おねがいだ…僕、もっと強くなるから…」

「リィン…。もう良い。分かったから」

強く、リィンを抱き締める。華奢な肩が震えている。

「ラ、ディス…」

「大丈夫だ。お前をどこへもやらない」

「う…」

全身から力が抜けた。

◇◇◇◆

リィンをゆっくりとベッドに横たえる。

眉間にしわを寄せ苦しそうに喘いでいる。高熱が出ているうえに感情が激しく乱れたのだから当然だ。汗で額に張り付いた栗色の髪を、手で梳いてやる。

リィンが薄く目を開いた。その目にはまだ涙が溜まっている。

「ラ、ラディス…」

彼はリィンにぐっと近づき額をつけて、その赤茶の瞳をのぞき込んだ。

「ここにいる。お前が眠るまで傍にいるよ」

そう言って額に口づける。リィンは弱々しく瞼を閉じた。ふっくらとした白い頬に、涙が伝う。指先でその涙を拭った。

ラディスは苦悶の表情を浮かべリィンを見つめる。

ユマの部屋を飛び出したリィンをすぐに追いかけた。小さな身体が怯えながら走り去る。

薄暗く汚れた路上で見つけた時の光景は、悲惨なものだった。容赦なく降り続く雨。傷だらけのリィンは、まるでボロきれのように横たわっていた。両手を見ると真新しい傷口から血が流れている。転がっていた短剣の意味を悟り、愕然とした。

リィンには、『力』など使わなくても済むような生活をさせてやりたかった。その為ならば何だってしてやるし用意するつもりだったのだ。大事な、娘だ。

なのに、そのリィンが求める居場所が、よりにもよって一番置いてやりたくない場所なのだ。一番危険で過酷で平穏とは正反対の場所。それをリィンは望んでいる。

自分の護衛をする事によって今後も言われもない迫害と差別を受け続ける事になるだろう。

そんな事はさせたくなかった。

自分一人なら良い。運命を共にすると誓った同士なら構わない。だが…。

リィンを、ティルガの大事な娘を、その渦中に置くなど…。

深いため息を落とす。

自分の考えが甘かったのだ。

俺のせいで、こいつを巻きこんでしまった。

自分のこの壮絶な人生に…。

035：ティルガ

「ティルガとはこのベイルナグルに来た時に知り合ってね、彼はその当時すでに腕ききの医者で評判だった。その頃の私はまだまだ、野心だけは一人前の、小さな会社の経営者にすぎなかった」

リィンは体調が戻ってからすぐに、ジェイクの邸宅へ一人で向かった。謝罪をするためだ。

しかし迎え入れてくれた婦人の従者や、主のジェイクは何事もなかったかのように温かい笑顔を向けてくれた。リィンはともすると涙腺が緩みそうになるのを必死でこらえた。ユマの具合も随分良くなり、今は使いに出していて外出中なのだと言う。応接室でジェイクと向かい合って座り、昔話をしよう、と彼が語り出した。

いまだに緊張の解けていないリィンを見てジェイクは目を細めて笑った。

「ティルガなんてもっとひどかったよ」

「え？」

「『力』の暴走というのかな？私は何度も彼に吹っ飛ばされた」

「ええっ！」

楽しそうにジェイクは声をあげて笑った。リィンは信じられないという面持ちでジェイクを見つめる。

「彼はイリアス族の中でも、強い『力』の持ち主だったんだろう。私を吹っ飛ばしてもからからと笑って、すまんすまんと謝るだけだ。

あいつはとても明るい奴だった。
　どんな非難や陰口を叩かれても気にせずに、いつだって真正面から人とぶつかった。だからこそ私も彼を信頼し親友になれたのだと思うよ。種族の違いなんて大した事ではないと思えた。アルム族の私でも、ルキリア貴族が天下を治めるこの帝都で、一旗あげてやろうと何度勇気づけられたか知れない」

ティルガは美しく聡明な青年だった。白い肌に栗色の柔らかな髪。物腰は優しく、ユーモアに富む話術。
当時他のイリアス族の人々は、捕らえられては強制労働施設に送り込まれていた。それを免れたイリアス族でも運命は似たようなものだった。奴隷として貴族に仕え、一生涯そこから抜け出せない。死してもなお、その子孫さえも生まれる前から定められている奴隷としての運命を辿るしかなかった。
明るい太陽のようなティルガであったが、自分と同じ種族の事を語る時だけは暗い影を落とした。その影には光は届かない。影は大きく膨れて彼自身を捕らえて離さず、暗黒へうずめてゆく。親友であったジェイクでさえも救う術を持ちえない程の闇だ。彼はいつも言っていた。
自分には使命があるのだ、と。

何故自分だけが、こうしていられるのか。自分は医者としての技術と経験を武器に≪人≫として生きているが、同じイリアス族の者達は今この時にも拷問のような仕打ちに命を落としている。地獄の日々を暮らしている。そう思うと心臓を抉られるような痛みを覚える。
自分に何が出来るのか、と常に自問する。

「私と変わらない同年代の青年であるはずのティルガは、あの頃から既に思索し続けていた。イリアス族の将来を自分の将来と同じよ

うに考えていたんだ。そんな事到底出来ない。自慢じゃないが、私はその頃自分がどう成り上がるかしか考えていなかったよ」

それからすぐにティルガは強制労働施設にいるイリアス族の診察を許可された。ジェイクはその時まで、彼が帝国政府と交渉している事さえ知らなかった。

その頃から互いの仕事が忙しくなり顔を合わせる機会も減っていった。ジェイクはいつでも彼に会いたがったが、ティルガはなかなか相手にしてくれない。久々に会った時に愚痴をこぼしたジェイクに、彼は一人の女性を紹介した。

「名をエルダといって、トゥームという町の出身の女性だった。ベイルナグルへは勉学の為に来ていたらしい。ティルガは私があんまりにも人恋しくしているもんだから、余計な世話を焼いてくれたのさ。私は一目で彼女に恋をしてしまった。ばっちり好みでね。まんまと彼の思い通りになったわけだ」

リィンは微笑んだ。

「じゃあその人が、ユマのお母さん？」

「そう。ただ、身体が丈夫な方ではなかったんだ」

ジェイクは遠くを見つめて口元に笑みを浮かべた。今でも愛している妻の面影を、そこに見ているのだろう。

エルダと結婚し仕事も軌道に乗って着実に会社を大きくしていった。そして二人の間に新たな命が宿る。

出産は身体の弱いエルダにとって、死を覚悟しなければならない事だった。ジェイクは身もだえる程に悩んだが、エルダの心は決まっ

ていた。ユマを身ごもった時から既に、彼女は母親としての強さを兼ね備えていたのだ。もちろん主治医はティルガが買って出てくれた。多忙だったにも関わらず彼は最善の処置を尽くしてくれた。

エルダはユマを産んでから一年足らずでこの世を去ったが、彼女は幸せだったと言ってくれた。彼女はジェイクにユマを残してくれた。エルダと出会わなければ、自分の人生は虚しいものだったに違いない。彼女の事を思い出すと、ジェイクの心に温かな光が灯る。しかし…。

「その頃の私は必死だった。仕事は多忙を極めていたし、ユマはまだ幼くて放っておけない。エルダを亡くした悲しみに沈んでいる暇もなければ、周りの事に気を使う程の余裕もなかった。

エルダが亡くなってから一年が過ぎようとしていた頃、久々にティルガがここを訪れたんだ。…私は驚いたよ。

彼は今にも倒れてしまいそうな程ぐったりとして、随分と痩せてしまっていたんだ。目だけが、力で漲っていた。今でもあの時の事は忘れられない…」

ゆっくりとティーカップに手を伸ばし、ジェイクは茶を飲み下した。苦々しい表情。まるで出がらしの茶を飲んだみたいだ。

◇◇◇◆

「ティルガ、一体どうしたんだ。何か悪い病気にでもかかっているのか？」

心配顔でジェイクは目の前の青年を問いただす。ティルガは微笑んだまま、ゆるゆると首を振った。椅子に腰をかけているのもやっと、というような状態に見えるが、目だけがやけに綺麗で澄んでいる。

赤茶の瞳はしっかりとしていて、病人の目には見えない。

「ジェイク。ずっと黙っていたんだが、実は俺にも愛する人がいる」

「え」

「同じイリアス族でシルヴィと言うんだ。とても美しくて良い女だ。もうそろそろ二年程になるかな」

ティルガがいたずら小僧のようににやりと笑った。

「何だ！水臭い奴だな。何故紹介してくれない」

「お前はエルダを亡くしたばっかりだったしな、横取りされたらたまらない」

ジェイクは彼を睨みつけてから、肩の力を抜いた。

「悪い冗談はよせよ」

「…彼女はあの施設の中にいる。紹介しようにも今は出来ない」

「何だって！？」

ジェイクは思わず椅子から腰を浮かす。目を見開いて彼を凝視するが、ティルガは長い足を組んで余裕の表情。

あの労働施設の中にいる、奴隷の女性を…。

頭が混乱してジェイクは言葉を失った。

「それでお前に頼みがあるんだが」

「ティルガ、お前…」

確かに彼はあの施設で暮らしているイリアス族の診察をしているが、しかしまさか、その中の女性と…。

そこまで考えてジェイクは首を振った。どちらにせよティルガが決めた相手だ。自分がとやかく言う筋合いはないし、彼の選んだ事に異を唱えるつもりもない。何があろうと自分は絶対的に彼の味方だ。

「私に出来る事があるなら言ってくれ。お前は大事な親友だし、恩人だからな」

真剣にティルガと向き合う。彼は目を閉じて笑った。

「ありがとう、ジェイク。お前ならそう言ってくれると思っていた。恩ってのは売っておくもんだな」

「馬鹿だな。これは貸しだぜ」

「そうか。なら大きな貸しになっちまうかも知れんな…」

ジェイクは僅かに眉をひそめる。

目を開けたティルガの瞳は、真剣そのものだった。

「数日中に、ここへ少年を連れてくる。まだ七、八歳くらいの子供で名をラディスと言う。お前に預かってもらいたい」

「何？それは一体どういう事だ、ティルガ」

「訳は言えん」

「何だと?」

「頼む」

意味も訳も分からない。ティルガは口を閉ざしたまま恐ろしい程真剣な表情でじっとこちらを見つめている。ただならぬものを感じて、ジェイクの背筋に汗が伝った。

「分かった」

「…すまない」

あまり謝らない彼が、頭を下げて言った。
ジェイクはその時にどうしようもない程の後悔を感じた。それは彼の頼み事を聞いてしまったからではなく、今まで彼を放っておいた事に対してだった。

彼は何か大変な事に巻き込まれている。

「訳は言いたくないのか?私にも言えない事か」

「俺は俺の、やるべき事をしたまでだ」

沈黙が二人を包む。
もう一度問いただそうとジェイクが口を開いた時、ノックの音がして扉が開いた。

「ぱぱ」

申し訳なさそうにしている従者に手を繋がれて、寝間着姿のユマが部屋に入ってきた。

「申し訳ありません。ユマお嬢様がどうしても旦那様にご挨拶したいと…」

「良いよ。おいでユマ」

場の空気が一変して温かいものに変わる。ユマが眠そうに目をこすりながらやって来てジェイクにしがみついた。優しく我が子を抱き上げる。

「おやしゅみなさい、ぱぱ」

「ああ。おやすみ」

ユマは眠たげな目をティルガに向けて言った。

「おじちゃん、おやしゅみ」

ティルガは目を細めて微笑む。

「おやすみ、ユマ」

ユマと従者が出ていってすぐに、ティルガはさて、と言いながら席を立った。

「お前が受けてくれて良かった。お前にしか頼めなかったからな」

「あんまり無茶はするな。何かあったら私に言ってくれよ、いくら

でも協力する」

「ああ。ありがとう」

「そこまで見送るよ」

「ユマも大きくなったな。エルダに似て美人だ」

「ああ。変な男が寄りつかないように今から目を光らせてる」

「くく。怖い親父だ」

玄関口でジェイクは呼び止めるように言った。

「おい、今度紹介してくれよ、彼女。私もお前の診察についていけば会えるだろ？」

振り返ったティルガは一瞬驚いたような顔をして、そして笑った。

「ああ。そうだな」

それから手を振り合って別れた。
それが最後だった。

次に彼を見た時、彼は処刑台の上にいた。

◇◇◆◆

「あいつは一切私に言わなかった。レーヌに嘆願書を書き続けていた事を。私も政府から疑われて家探しされたよ。会社も調べられた。

しかし関わるものが出てくるはずがない。…知らなかったんだからね」

しんと静まり返った部屋でジェイクの声だけが響く。リィンは知らないうちに両手を握り締めていた。

「ティルガは捕まってすぐに処刑された。審議なんてなかった。誰も彼を助ける事は出来なかったし、きっと本人もそれを承知の上だったんだ。

そして施設では反乱が起こった。奴隷として隷属させる為につけられていた、首輪を外したイリアス族が次々と外へ飛び出したんだ。それと同時期にレーヌ国からの使者が、女帝直々の書状を持ってやって来た」

語りだしたリィンを、驚いてジェイクは見つめた。

「僕はすべて聞いているんです」

リィンはわざと、自分の父の事を名で呼んだ。一番言いたくない場面をリィン自身が言う事によって、ジェイクの心痛を和らげたかったからだ。

「そうか…」

レーヌ国の女帝からの書状は、有無を言わさない強硬な内容であったと聞く。即刻イリアス族を解放しなければ全ての取引を停止し、ザイナスにも働きかけて制裁を加えるという趣旨のものだった。事態は急展開した。それからルキリア国王が宣言を出すまでそう長くはかからなかった。

「…私の所にラディスがやって来たのは、解放宣言の数日後だったよ。数名のイリアス族が付き添いで来ていた。それが大勢のイリアス族を率いている青年達で、その中の一人にシルヴィがいたんだ。彼の言ったとおり、とても美しい女性だった」

ジェイクはラディスを引き取った上に、行く先に困っていたシルヴィ達に手を貸して住む土地を探し提供した。それでも、彼はいまだに後悔している。自分の親友を助けられなかった事に。親友の苦悩と苦闘を知らなかったあの頃の自分に。

０３６：時は止まらずに、紡ぐ

「ラディスがここに来た時、確か彼は八歳だったと思うが、とてもそうは見えなかったよ。身体は痩せすぎていて背も低かった。栄養が足りずに成長が止まっていたんだろう。しかし内面には幼い部分がまるでなかった。

じっと私を見つめる青い瞳は、人の本質を鋭く観察しようとしているかのようなものだった」

この時既にラディスは自らの生い立ちを知っていて、それをジェイクに語って聞かせた程だった。ジェイクは愕然とし、彼に激しい同情を覚えた。当時四つだったユマと対して変わらないラディスは、ジェイクにしてみれば守るべき幼い子だ。しかし目の前の少年は全てを達観しているようでもあったし、全てを諦めているようにも見え、子供らしい所なんて一切ないように感じた。

「彼はここに来てすぐに、医者になりたいと言った。その為の勉強がしたいとね。ラディスはティルガの事を命の恩人だと言ったよ。今でも尊敬している」

リィンはどきりとする。

ラディスが医師を目指したのは、ティルガの影響だ。

「私はその通りにさせてやった。彼は次々と要求を増やしていってね、まるで遠慮がなかったよ。剣を習いたいと言ったり、今通っている学校はレベルが低いから替えて欲しいとかね」

「ラディスって、そんなちっちゃい時から偉そうなの」

リィンが呆れたように呟くと、ジェイクがああ、と笑った。

「だがユマといる時の彼には、やはり子供らしい所もあったよ。本当の妹みたいによく可愛がってくれた。ラディスは十二になった頃、レーヌに留学した。それ以前からずっとレーヌの大学校へ入りたいと言っていたんだが、私がそれを良しとしなかった。

彼は何に対しても一生懸命で、剣もすぐに覚えたし勉学も常にトップでどんどん飛び級していった。神童と噂された。でもね」

私には生き急いでいるように見えたんだ。小さな子どもなのにね…。

「今のラディスを見ていると、ティルガを思い出すよ」

リィンは無言でジェイクを見つめた。

父様はひどい事をした。

こんな優しい人に、過酷な事を頼んだ。

ジェイクの辛さは計り知れないだろう。彼は見守る事しか出来ない。茨の道をゆく彼らの人生を。黙って見守りながら支援する事にだって、とてつもない強さが必要だ。

「ジェイクさん」

ジェイクがリィンを見やる。ブラウンの瞳は慈愛に満ちている。

「ありがとう」

リィンはぺこりと頭を下げた。

「あなたがいなければ僕はここにいなかったと思います。あなたがいなければ父は孤独だったし、ラディスも一人ぼっちのままだった。あなたの優しさがなければ、全てが成立しなかったんです」

真っ直ぐにジェイクを見つめる赤茶の瞳。

綺麗だ、と思う。それに強い心を持っている。見つめていると涙が出そうになる。ティルガを思い出す。シルヴィが重なる。その子がこんな風に言ってくれる時が来るなど、想像もしていなかった事だ。

「…お礼を言うのは私の方だよ」

リィンとジェイクは静かに微笑み合った。

「リィン！」

扉を開けてユマが入って来た。白のブラウスに繊細なレースのついたロングスカート。ブラウンの巻き毛が肩で揺れる。にっこりと笑っている頬に、可愛らしい笑窪が浮かんでいる。部屋の空気が一変して華やかなものに変わった。リィンは少し身を固くして、椅子から立ち上がる。

「ユマさん、先日は、本当にごめんなさ…」

「お父様ったら、私をお使いに出してリィンを一人占めにしていたのね。ずるいわ」

「はは。お前も随分会いたがっていたからね」

「はじめまして、リィン」

ユマはリィンより少し背が高い。彼女はリィンの肩に手を置いてにっこりと笑った。リィンは会ってすぐに謝ろうと思っていたので、出鼻をくじかれておろおろした。

「私の部屋へ行きましょ」

有無を言わさずユマはリィンの腕をとって歩き出す。振り返るとジェイクは優しい笑みで手を振っていた。

「体調が良い日はね、父の仕事を手伝っているの。といっても簡単な事務仕事だけなんだけど。私も良い年なんですもの、家を出て自立したいわ」

ユマは話しながら慣れた手つきで茶を入れている。彼女の部屋に場を移し、リィンは二杯目のお茶に呼ばれていた。

「ユマさん、あの…」

「さあどうぞ！クッキーもあるのよ。私が焼いたから、形は不格好だけれど。味は保証するわ。毒見済みですもの」

にこにこと微笑みながらユマがティーカップを目の前のテーブルに置いて、リィンと向かい合わせの椅子に座った。長いまつげを伏せてゆっくりとカップを傾けるユマに、おそるおそる話しかける。

「僕、謝らなければいけないと思って今日来たんです」

「リィン、良いの。とっくに忘れたわ」

ブラウンの瞳がリィンに向けられる。その言葉は本心からのものであり、その瞳は相手をいたわるような優しさに溢れていた。彼女の愛らしい顔を見ているだけで、心がほんわりと温かくなってゆくようだった。

「ユマさん…」

「さん、はいらないわ。それに敬語もなしよ。ね？」

「ありがとう」

自然とリィンも微笑む。
優しくて柔らかい人。そんな印象を受ける。

「ねえリィン。あなたの話が聞きたいわ。今ラディスの所に居るんでしょう？しかも護衛なんて！危なくないの？」

ユマが乗り出すようにして聞いてくる。心配しているというよりは興味津々といった感じで、目がきらきらと輝いている。

「そ、そうだね。えーっと、ユマはベイルナグルの北地区には行った事ある？」

「ええっ！ないわよ！だって北の方は治安が悪いからって、父は近寄らせてもくれないのよ。ラディスだって連れ行ってはくれないわ。で、どうだったの？」

ユマが楽しそうに話を聞いてくれるので会話が弾んだ。彼女が淹れてくれたお茶も美味しかったし、少し形が奇抜だったけれどクッキーもとてもおいしかった。

「ありがとう、ユマ。君ってとても、何て言うか、良い人だ」

席を立ちながらリィンは言った。

イリアス族だからって軽蔑せず特別扱いもしないし変に心配もしない。リィンの方が年下だけれど、それさえも感じさせない。とても自然に接してくれる。

まるで昔からの友達みたいに。

「私の方こそ。何だか不思議ね。リィンと話しているととっても楽しいし、何年も一緒にいる友達みたい。あっ！ちょっと待ってて」

ユマも席を立ち、鏡台の方へ歩いてゆく。何かを探しているようだ。

それからリィンの元へ戻って来て、手に持っていたものを差し出した。

「リィン、また一緒にお茶しましょうね」

「ユ、ユマ…。これって」

リィンに差し出されたのは繊細な細工が施された髪飾りだった。金色の可愛らしい花をあしらった綺麗な髪飾り。中心には白い宝石が嵌め込まれている。

「ラディスからリィンの事、ちゃんと聞いてるわ」

ユマの優しいまなざし。

リィンはおずおずとその髪飾りに触れようと手を伸ばすが、途中で思い直して首を振った。

「こんな高価なものもらえないよ。それに…僕には必要ないものだ」

遠慮したリィンの腕を掴み、ユマは無理矢理に髪飾りをリィンの手の平に乗せた。困惑して彼女を見る。

「…髪を伸ばして、この髪飾りをつけられる日がくるわ。今は無理でも、きっとよ。それまでとっておいて。ね？」

口元は微笑んでいるが、目が真剣だった。

「ユマ…。ありがとう」

リィンの心にじんわりと温かいものが広がる。その温かみは希望と呼ぶのかもしれない。女性らしいユマの心遣いが嬉しかった。

玄関先でジェイクとユマに見送られる。

「またいつでもおいで。ラディスも引っ張ってきてくれるとありがたいな。あいつはちっともここに寄りつかないから」

ジェイクがリィンに言い、それからユマと視線を交わして笑った。

温かな親子。これがラディスの家族。

「また来ます、必ず」

言いながらユマを見つめる。素敵な人。

ラディスの大事な、ひと。

「僕、ラディスの護衛として頑張ります。ラディスを必ず護ります」

どんな危険からも、ラディスを護る。
僕の『力』はその為にある。
彼の大事なひとがユマで良かった。好きになれる。
きっと、二人を護ってゆける。
ユマは一瞬目を大きくしてから眩しそうにリィンを見て言った。
「…ありがとう。リィン」
◇◇◇◆
去ってゆく小さな背中を見送るジェイクとユマ。
「お父様、リィンってとっても可愛くて良い子なのよ。私もう好きになっちゃったわ」
「そうだね。それに強い子だ」
ラディスの事はずっと気がかりだった。彼は幼い頃からずっと、自分の信念を曲げずに一人で戦い続け、差別と偏見で歪んだ世間に大きなうねりを起こした。最近でこそ彼の味方が増え始めているが、それでもまだ危険である事には変わりない。今でも全ての攻撃をたった一人で受け止め耐え続け、その歩みを決して止めない。ジェイクの手助けも何度となく断り、それでもどうしてもと無理を言って、資金の援助だけはしている状態だ。
その彼の傍にリィンがいてくれたら心強い。今までにいなかったからだ。何の計算も打算もなく、真っ直ぐに彼を護ると言ってくれた人が。
しかしリィンにしてみたら、彼を選ぶ事こそが熾烈な運命の始まり

なのではないか。
ティルガとシルヴィの面影を宿すイリアス族の子。ティルガの意思を受け継ぐ≪黄金の青い目≫を持つ子。何かの運命を感じずにはいられない。

ティルガ、私はどうしたら良いのだろうか。

どうしたら私の息子と、君の娘を支えてやれるだろうか。

願わくば彼女が、彼と共にあらん事を…

【第三部・完】

０３６：時は止まらずに、紡ぐ（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
第四部からはストックがない状態から書き始めますので、更新ペースががくんと落ちると思います。
ああ、数少ない読者の皆様！おで頑張ります！

０３７：清廉なる織布

「これは火傷に効く薬草だ。表面を少しだけ揉んで、患部に当てて使う」

「へえ。こうやって見ると、何でもない雑草でも役割があるんだね」

昼下がりの穏やかな日差しが落ちる道をゆく。今日は良く晴れていて雲ひとつない青い空が広がり、とても心地の良い陽気だ。

リィンは手にひし形をした緑の葉を持って、まじまじとそれを見ながら歩いている。その隣にはいつもの大きな鞣革の鞄を肩に担いで歩くラディス。エンポリオの会社へ行く途中である。

リィンはラディスの往診に護衛としてついてゆく、この時間が好きになっていた。長時間の徒歩での移動にもすっかり慣れ、今では次の目的地までの道すがら、色々な事をラディスに教わったりしながら歩いてゆくのが常だ。ラディスの持つ雑学は多岐に渡り、その話を聞いているだけでも面白いものだった。それにこの時間だけは、二人きりになれる。何だか人気者の彼を一人占めにしているみたいで、ひっそりと嬉しんでいるのだ。

リィンが護衛として実際に働いたのは、今までで数える程しかない。それもベイルナグルの市場を歩いていた時に偶然遭遇したひったくりを捕らえたり、はぐれイグルの退治を頼まれたりといった類のものだった。今日も何事もなくエンポリオの仕事場へ着けそうである。診療所より少し南、点々と民家が続く石畳の道を、二十分程歩けばすぐの所だ。

向かいから小さな男の子を連れた、若い婦人が歩いて来る。ラディスを見て笑顔になり、何やら男の子に話しかける。それから婦人はラディスに向き直り、会釈をしながら言った。

「ラディス先生、お久しぶりです」

ラディスが柔和な笑みを浮かべて答える。

「ああ。元気そうだな」

「はい。この子もすっかり大きくなって。ねえ、いくつになったか先生に教えてあげて？」

手を繋いでいる息子に語りかけ、その子は無言で手の平をラディスに突き出し、それからぎこちなく親指を折り曲げた。どうやら四歳らしい。リィンも思わず笑顔になる。

「先生、どうかこの子にシルラ様の祝福を与えてくださいませんか」

婦人は幼い息子を抱きあげて、きらきらとした瞳でラディスを見上げる。

彼は無言で微笑み、男の子の頭に手を載せ、ぶつぶつと何かを呟きはじめた。そのラディスの行動と呟きを聞いて、リィンは驚きのあまり口をぽかんと開けてしまった。

古よりの聖なる光／授かりし女神リリーネ・シルラ／かの慈愛の泉より汲みいださんとす／我らの善と優良なる心を糧とし／その健全なる命を満たし／その永遠なる未来をも照らす／全ては生きとし生けるものの共生と／豊穣なる平和のために／兄弟よかくも歩まん／使徒ラディス・ハイゼルの名の元に／この者こそリリーネ・シルラの後継の者ぞ

「ありがとうございます！」

上気した頬を嬉しそうにほころばせて、若い婦人は息子を抱えたまま
まラディスに礼を述べて去っていった。

「…な、何。い、今の」

「ああ。あの子は俺が取り上げたんだ。もうあんなに大きくなっち
まって。それだけこっちも年をとったって事なんだがなあ」

「そうなの…。あ、いや違くて、その、ぶつぶつ唱えてたろ？」

「知らないのか。≪聖典≫の一説だろう」

「そんなの知ってるよ！そうじゃなくって、何であんたがそんな事
するんだ…」

ラディスが諳んじていたのは、リリーネ・シルラを神と仰ぐ信仰の
教本ともいうべき≪聖典≫の一説だ。この≪聖典≫の内容は伝説の
女神リリーネ・シルラがこの地上に降り立つ所から始まる長編の物
語のようなもので、聖職者達は≪聖典≫の一説を、様々な用途ごと
に切り取って暗唱しながら祈るのだ。
しかしそれはあくまでも聖職者がする事であって、医師がする事で
はない。ラディスがその真似をしたって、ただのペテンじゃないの
か。
腑に落ちない顔でラディスを見上げると、彼はにやりと意地悪く笑
みを作る。

「知らなかったか？俺はこう見えても聖職者だ」

「ええ！！」

大声をあげて驚くリィンを見て、ラディスは声をあげて笑った。

「レーヌの大学校で学んだ連中は、大抵は宗教学も習得する。成績上位の中から希望者がいれば聖職者試験も受けられるようになっている。ちなみにロンバートも拝み屋だぜ」

「でも、だってじゃあ、聖職者なら必ず持ってるだろ？きらきら光る真っ白の布…」

教会や講堂で見る聖職者は必ず首から細長い布を下げているものだ。とても珍しい糸で精巧に編まれており、それ自体が大変に高価なもので、この布がリリーネ・シルラの使徒である証明になっているのだ。

「≪清廉なる織布≫か？俺だって持ってるさ」

「だってそんなの見た事ないよ」

「…どこへやったかなあ」

呟きながらラディスは歩き出した。リィンは今や愕然として、背の高い後ろ姿を見つめて叫んだ。

「何だって！？そんな大事なもの、失くすやつがあるかよっ」

「ふん。あんなのはただの布だ」

「…やっぱりあんたは聖職者じゃないな。普通はそんな事言わないよ」

「祈りっていう行為は人間ならば本質的に備わっているものだ。あの布は聖職者だっていう権威を振りかざしたい奴が勝手に作った道具にすぎない。それに俺は元々無神論者だ。この世に神もへったくれもあるか」

「だったら何で聖職者の資格なんか取ったんだよ」

「必要だからだ」

少し前を歩くラディスに追いついて見上げる。彼は遠くを見つめていた。すっきりとした顎のラインが美しい。薄茶色の髪は今日もぼさついているくせに、相変わらずの美形っぷりだ。

「場合によっては治療ではなく、祈りが必要な時があるからな」

「祈り…」

医者という職業は人の生死に一番近いところにいるからこそ、聖職者が医師を兼業している事が多い。それがどういう意味なのか、考えたら分かる事だ。処置の施しようのない大怪我を負った者、不治の病の者、最終的に看取る場面に立ち会う時、そこには人智では計りようもない大きな存在が必要なのかも知れない。そういえば、とリィンは思い出す。

ゼストを弔ってくれたのもラディスだった。

「しかしそれは裏を返せば医者の怠慢でもある。履き違えている奴が多すぎる」

「え…」

「助かる命も助けようとしない。自らの力不足を顧みずに全てを相手の信心のなさで片づけて、適当に呟いて祈って金を取る。相手が死のうが知ったこっちゃないし、どうなったとしてもリリーネ・シルラの思し召しだと言って憚らない。ルーベンのような奴は犬も食わんな。イグルだって吐き出すさ」

「ちょ、ちょっと」

リィンは思わず周りを見渡す。聖職者に対して悪口を言う人間なんて、悪人かよほどの変態しかいない。…いや、彼は変態かもしれない、と変に冷静に考えてしまう。でも…。

「…でも、そうだな。僕自身もそういう存在を信じない。もし神がいたとしたら、何て無慈悲な奴なんだろうと思うよ」

「そうだろう。そんな神なんかよりよっぽど俺の方が偉大だぜ。リィン、遠慮なく俺を拝め」

口角を持ち上げて笑いながらラディスがリィンを見る。彫像のような美しい笑みは、それこそ神がかり的だ。リィンは可笑しくて笑った。

「そんな偉そうな神がいるかよ」

そんなやりとりをしている間に、目的地にたどり着いた。

０３８：恋のゲーム

エンポリオの研究施設は真四角の建物で、無機質な存在感を辺りに放っていた。窓は少なく二階建てで、隣にも似たような造りの建物があり、そちらはこの研究施設で働く者達の寝起きする場所になっていた。

玄関の呼び鈴を鳴らすと、しばらくしてがちゃがちゃと施錠を開く音がし、それからぎぎぎ、と音を立てて扉が開いた。

「やあラディス、皆がお待ちかねだ。また問題が発生したようだよ」

出迎えたのはエンポリオだった。にんまりと笑う彼は、やはりキツネに似ていると思う。ラディスは彼に雑な挨拶をして大股で室内へと入ってゆく。

研究施設の内部は通常の家のそれとだいぶ異なっていた。玄関から短い廊下を歩いて左の扉を開くと、そこは間仕切りのない大きなフロアで四方の壁にはぐるりと棚が配置され、その中にはぎっしりと様々な瓶が収まっている。長テーブルが整然と並び、リィンには分からないし見た事もないような器具が載っていて、その間を丈の長い上着を来た研究員達が行き来していた。この面積に対して従事している人の数は少ないように思うが、これ程高技術の研究施設があるのはレーヌ国以外には、この一か所だけである。

「やあリィン、今日も可愛いね」

エンポリオがすかさず迫ってきて、リィンは身構えた。この部屋の内部ではあまり物音を立ててはいけないので、何とも動きにくい。すぐに壁際に追い込まれ、リィンは壁を背に目の前のエンポリオを恨めしそうに見上げた。

「毎回、こういうのやめて欲しい」

「ふふ。そういう表情も可愛いよね」

エンポリオは壁に両手をつきリィンを逃がさないようにして、にこにことリィンを見下ろす。

「ねえリィン。今日は僕とデートしないかい」

「…しないよ」

「どうして？つれないなあ」

そう言いながらエンポリオが顔を近づけてくる。紺色の瞳が楽しそうに揺れる。リィンは身体を横にして、狭い空間の中で何とか逃れようともがいた。そこへエンポリオがリィンの耳元に息を吹きかける。身をすくめて顔から火が出そうになりながら彼を非難した。

「エンポリオ、冗談もほどほどに…」

「じゃあデートしてくれるかい？」

「い、嫌だよ。僕らは男同士なんだから、そんなのおかしいだろ」

「大丈夫だって。僕は変態で名が通ってるからね。ばれないばれない」

堂々と自分の事を変態呼ばわりして、エンポリオはにっこりと微笑む。リィンはそんな彼を横目で睨んで、ため息をついた。

その時、ラディスの低い声が部屋に響いた。意思のある、強い声。

「まだそんな事をしているのか。一体今まで何をしていた?」

エンポリオは肩をすくめて振り返る。ラディスは資料を片手に仁王立ちしていた。

「す、すみません…。こちらの薬の調合がうまくいかなくて…。それに調合の作業と並行して、研究資料をまとめていましたので時間が…」

ラディスの前には顔を真っ青にした数人の研究員達がいる。それを遠くで見つめる者達も皆、顔を硬直させて息をのむ。長身の彼が仁王立ちすると何とも言えない迫力があり、リィンはその後ろ姿を見ているだけで自分が怒られているみたいに、身を縮めてしまう。

「それは分かっている。そんな事は今聞いていない。何故今まで報告しない?何故期限を守ろうとしない。事前の報告ぐらいできるだろう。それに時間がないというのは言い訳にもならん」

「すみません!」

前に出てラディスの静かな怒りをかぶっているのは、確かワドレットという研究員だ。ラディスよりもいくぶん背が低く、黒の短髪で眼鏡をかけている。見るからに真面目そうな瞳は、必死になって打開策を模索する。

「すぐに作業に取り掛かります」

「何をどうする」

「オーガードの成分の抽出を三人がかりで、それから…研究資料の方は新人に任せます。特効薬はイゴーとムノアと…ええと私で…」

「分かった。お前は取引先へ行って事情を説明して来い。特効薬の調合には俺が入る」

「はい！」

皆一斉に作業に取り掛かった。ぴんと張りつめた緊張感が部屋を満たす。

「こりゃ、徹夜だね」

エンポリオが小さく呟いて、リィンの腕をとって部屋を出た。

◇◇◇◆

「ラディスもあんな風に言わなくたって良いのに…。あそこは少ない人数でやってるんだからさ」

エンポリオに連れられて、ベイルナグルの広場へと歩く。フード付きのマントを羽織っているが今はフードをしていない。彼と歩く時はいつもフードをとるよう言われるのだ。顔を見ながら歩きたいという、良く分からない理由からだった。リィンは余計な諍いや不躾な視線を避ける為にしたいのだが、あんまりにも彼がうるさく言うので、仕方なく言うとおりにしている。

リィンはいつも思っていた。ラディスはあの場所へ行くと、厳しくなる。彼が怒ると顔が整っているだけに、余計に恐ろしいのだ。声

を荒げて罵ったりするような怒り方はしないが、冷静に怒られるのも相当こたえるだろう。

「まあねえ。でもああいう役回りって、ラディス以外出来ないから。見ての通り、僕やクレイは人を怒るなんて出来ないだろう？心優しいからねえ」

「でもワドレットに厳しすぎない？いっつも怒られていて可哀そうだよ」

「ああそれね。仕方ないのさ。彼があの会社の、実質の責任者になるんだ。ラディスはそのうち彼に全権を任せるつもりでいるからね。それにイグルの解毒剤、特効薬ね、あれを作り出せるようになったんだよ。ワドレットとイゴーとムノアの三人がかりでね」

「そうなの！？すごいじゃないか！…だったらもっと褒めてあげたら良いのに」

あの特効薬は、世界でも数名にしか作り出す事の出来ない、調合の非常に難しい薬だと以前にクレイが言っていた。レーヌ国にも数人いるだけで、このルキリア国ではラディスたった一人が精製できるものだ。それを三人がかりであろうと精製出来るようになったというのは、とてつもない快挙である。

「うーん。まあ、ワドレットの場合はまた別の理由もあるからラディスも厳しくなるんじゃないかな」

「別の理由って？」

エンポリオが口を開きかけて途中で止め、リィンの顔を覗き込んだ。

「知りたい？」

「え…うん」

「キスしてくれたら教えてあげても良いけど？」

リィンは顔を赤くしながらむすっとして答える。

「…じゃあ止めとく」

「なんだ、残念」

「…それより、いい加減、手を離してくれないか」

会社から出る時からずっと、エンポリオは繋いだ手を離してくれない。

「どうして？手を繋ぐくらい良いんじゃないかな。僕はもっとそれ以上の事がしたいんだけど、我慢してあげてるんだからね」

「…何だよそれ。僕をからかったって、面白くないよ」

「嫌だな、本気だよ」

そう言ってリィンを見つめる。紺色の瞳は切なそうに潤んでいて、リィンは自分がとてもひどい事を言ったような気になってしまう。エンポリオはラディスよりも年上の三十三歳にもなるのだが、ふわふわとした金色の髪や童顔のせいでずっと若く見え、その上切なげに見つめてくる瞳は少し頼りなさそうにも感じる。しかしこの表情

は見た相手がそう思わずにはいられないように、計算されたものだ。分かっているのに、それでも少し赤面して視線を外しながら言った。

「エンポリオは僕を好きなんじゃないよ」

「どうしてそんな事言うんだい？そんなに僕が嫌い？」

「違うよ。エンポリオは僕じゃなくて、僕が珍しい種族だから」

すっとエンポリオを見上げた赤茶の瞳は、真っ直ぐに彼を射抜いた。

「僕がイリアス族だからだよ」

そう告げてリィンは手を離し、栗色の柔らかな髪を風になびかせて、すたすたと先へ歩いて行ってしまった。

その小さな後ろ姿を呆然と見つめてエンポリオは一人呟く。

「驚いたな…」

図星だった。

◇◇◆◆

「はい」

リィンの目の前に、パンケーキを差し出す。持ち手の部分は紙で包まれているそれは、歩きながら食べるお菓子で、リィンの好物である。しかし小さな頭はじっとそれを見つめて、手に取る気配がない。

「ここのは特別美味しいんだよ、好きだろ？」

「…ありがとう」

遠慮がちにそれを受け取り、ぱくりと一口。途端にむすっとしていたリィンの表情がゆるんだ。

エンポリオはそれを見て満足げに笑う。…リィンてば、分かりやすいな。

ベイルナグルの西の通りを北に向かって歩く。この通りは様々な商店が立ち並んでいて活気があり、たしか先には現在絵画展を催している店があったはずだ。

「ほんとに美味しいや」

「ふふ。良かった」

「エンポリオは食べないの？」

きょとんとした表情で見上げてくる。エンポリオはリィンの腕を掴み、そのままパンケーキを一口頬張った。

「うん、美味しいね」

にっこりと笑ってリィンを見ると、案の定、透き通るような白い頬がうっすらと赤く染まっている。

通りをすれ違う人がくすくすと笑って去っていった。

「…ちょ、ちょっと。そういうのはだめだって」

「どうして？」

「はたから見たら僕らは男同士だろ、気持ち悪い」

「いいじゃない。どう見られようが」

笑いながらリィンの空いている手をとって歩き出した。強引な彼にほとほと呆れたのか、リィンは大人しくされるがままになっている。それから色々な出店をひやかして歩き、絵画展で展示されているレーヌ出身の新進画家の描いた難解な絵を、首をひねりながら鑑賞した。

基本的にリィンは素直で、うぶだ。ちょっとした事にも驚いたり感動したりして、エンポリオから見ればそれが逆に新鮮でもあった。こういった男女の関係には全く慣れていないようで、それは今までの事情から推して測れば当然の事だと思われた。それだけに、彼は内心楽勝だと思っていたのだ。

しかしこの可憐で美しい容姿を男性として隠しているリィンは、人の本質を見抜く力が備わっているようだった。それはイリアス族として差別を受け、耐えながら暮らした日々の中で鍛え上げられたものかも知れない。これはなかなか、面白い事になりそうだ。

「何だか通りが騒がしいね」

「うん？」

表へ出てみると、小さな人だかりが出来ていた。その中心にいる人物を見て、ああ、とエンポリオはため息まじりに呟く。

白い法衣を身にまとった壮年。背は高くなく後退した頭髪を油でなでつけている。まるで目がなくなってしまったかのような笑顔で周囲の人々と握手を交わす。その首には、それだけで三百万フィルはくだらないと言われている程高価な≪清廉なる織布≫が下げられていた。

「このすぐ近くに講堂があるんだよ。あれはベイルナグル一の高尚な司教様さ」

「ふうん。そういやみんな、司教様って呼んでるね」

「それに、医者でもある」

「え？」

「あれがルーベンだよ。聞いてるよね？ラディスを本気で殺そうと企んでる人物さ」

リィンはそこで棒立ちになって、目の前の光景にくぎ付けになってしまった。

０３９：戦う人

リィンはそれから何かとかまってくるエンポリオを会社へ戻し、彼の言ったとおり徹夜になりそうなラディスを置いて診療所へ帰った。寝室の大きなベッドの上であぐらをかいて、じっと考え込む。昼間にエンポリオから聞いた話がリィンに重く圧し掛かってくるようだった。

ラディスの行っている改革は、診療内容に基づいた一律の料金で、どの種族のどんな職業の人々にも診療を受けられるように広く開かれた画期的なシステムの開拓だ。それにより、今まで際限なく私腹を肥やしていた怠慢な医者や聖職者達から反感を買っている。そしてあのルーベン司教は反対派のリーダー格だ。ラディスとルーベンの主張はことごとく対立する。その診療スタイルはもちろんの事、投薬の仕方や倫理観までも違う。ラディスはルキリア国の医療の発展の為に、レーヌ国の医療技術についてもっと学んでゆくべきだと提案している。それは主に解剖学の分野におけるものだという。

「レーヌ国ではね、遺族の同意を得て遺体を解剖する事を実際に行っているのさ。それは人体の内部構造を想像ではなく実際に知るという事だよ。その基本が様々な病理の解明や外科的手術にとても役に立つ。だからこそレーヌは世界一の医学と薬学を誇っているんだ。

でもそれがどういう事か分かるかい？リリーネ・シルラを信仰するこの世界にあって、死者の遺体を解剖するなんて、冒涜以外の何物でもないよ」

そう言ってエンポリオは鼻にしわを寄せていた。

確かに死者の遺体をどうかするという行為は喜べるものではないというのが事実だ。丁重に扱い火葬に伏して、天に魂を返すというの

が今の世界の常識だからだ。
けれどそこにも矛盾が生じている。何故ならリリーネ信仰の発祥はレーヌなのだから。しかし当のレーヌは、解剖学を抜きにしての医療の発展はあり得ないという結論に既に達しており、次の段階へと昇華している。元々リリーネの宗教哲学には死者の弔い方に関して、何かの制約があるわけではない。要するにリリーネ信仰はレーヌを出て、ひとり歩きしている状態にあるのだろう。

ラディスはベイルナグルの有識者達が集まる会議で恐れもせずに言い切ったという。医者や貴族、聖職者に教師。それに帝国政府の要人も参加する場所での事だ。それからラディスを排斥しようとする流れも激化したという。当時既にルーベンは絶大な権力を得ており、その彼の意に反する発言をする者は誰ひとりとして存在しなかった。そんな事をしようものなら、この町にいられないばかりか全てを失いかねない。それ程にルーベンの存在は畏怖されている。ラディスは診療所を開いてすぐに、その巨大な人物に噛みついた。無謀と言う他ないが、現在では支援者が増えてきている。
それはここに至るまでの彼の行動の成果による以外にないと言って良い。新しい診療システムは一部の富裕層以外の民衆にとっては歓迎するものであり、ラディス自身がこの国で一番の腕の良い医師だ。魅力ある人柄と美しい容姿に≪黄金の青い目≫も助けとなり、今では絶大な信頼を勝ち取るまでになった。帝都の有識者達の中からもラディスを応援する流れが生まれている。今までルーベンを恐れて言いたい事も言えず、正しいと思う事も発言できずに小さくなっていた者達が、ラディスという柱を得た事により団結し始めた為だ。ベイルナグル一の病院の院長であるロンバートもその一人だろう。だからこそ、ルーベンはまずラディスを潰したいのだ。

リィンはうーんと唸って、ベッドに倒れ込んだ。
このまま考え込んでいたら頭が変になってしまいそうだ。

要するにラディスは患者の為に何をすべきかという、この一点を重要視しているんじゃないだろうか…。

どちらにせよ難しい事はリィンには分からない。ただラディスと敵対しているルーベンという人物が、帝都の良心と言われ人々に仰がれる大司教であった事には少なからず驚いた。ぼんやりと悪人を想像していただけに余計だ。かたや慈愛の笑みをたたえ、≪清廉なる織布≫を首から下げてありがたい説法を説いたり、祈りを捧げる壮年。対するラディスは、皇族の目を持ちながら正統な位もなく変革の旗を掲げ、変化を恐れず傍若無人に突き進む若者。一見してこの構図は、ラディスにとって俄然不利なものだと分かる。想像以上に厳しく険しい道のり。ただ、全く味方がいないわけではない。しかし現状はその味方でさえも彼一人が守っている状態なのだ。むしろ今までよく無事だったと言わざるを得ない。

リィンは静かに目を閉じる。

どちらの主張が正しいのか、そんな事は僕が考えたって意味のない事だ。
僕はラディスを護ると決めた。
あらゆる攻撃から彼を護りたい。
ジェイクと、ユマと約束したんだ…。

もっと、強くならなければ。

◇◇◇◆

翌日もいつものように朝から診療が始まり、昼過ぎには最後の患者を送り出した。その後ラディスとクレイは簡単に食事を済ませ、す

ぐに居室を出て行ってしまった。リィンはまだニコルとチェムカと食事の最中である。

「二人は？」

「今日はこれから大きな会議があるんだって。たまあにやるんだわ、ベイルナグルの偉いさん方が集まって色々決めるんだって」

チェムカが口を動かしながら答えた。

「そういや最近なかったわねえ」

「大丈夫かな…」

リィンは少し心配になる。ラディスは明け方に帰ってきて、そのまま診療に入ったので寝ていないはずだ。自分もついて行きたいがきっと邪魔になるだろう。その集まりがエンポリオから聞いた会議の事だとすれば、イリアス族の自分がいればそれだけで非難にあってしまうかも知れない。もどかしい思いを、肉の欠片とともに飲み下す。

「先生は大丈夫よ」

ニコルが言い、チェムカがうんうんと頷いている。

うん、そうだけど…。と言いながらリィンは席を立った。廊下へ出ると話し合いながら階段を降りてくる二人と出くわした。

クレイは普段通りの隙のない完璧な装い。緑がかった髪は乱れなくセットされブラウスもズボンも折り目正しく、黒の革靴もきちんと手入れされていて光を反射している。今は手に茶革の鞄を持ち、資料と思われる紙束を仕舞いながら降りてくる。その隣にいる人物が、

リィンに気がついて声をかけた。

「お前は留守番だ。ついて来たって面白いもんはないからな」

「ラ、ラディス…？」

「何だ」

青い瞳が不思議そうにリィンを見つめ返してくる。呆然と立ちつくすリィン。

彼はいつものしわの寄ったブラウスを着ておらず、すらりとした長身によく似合う黒の礼服を身につけていた。足元も編み上げ靴ではなく品の良い革靴。普段ぼさついている髪も今はきちんとセットされていて、美しい顔立ちがより引き締まって見える。まるで貴族だ。それも上等の。やはり彼は≪黄金の青い目≫にふさわしい品格と威厳を備えている。見た者にそう思わせるような、美麗な容姿。

「…ラディス様、だから私はいつも言っているんです。普段から身なりに少し気を使うだけでよろしいんですから…」

クレイが苦笑しながら言った。はっと我に返りリィンは赤面する。見惚れていたのだ。

「ふん。せいぜいこの外見で相手を威圧してやろうじゃないか」

そう言いながらラディスはリィンの頭にぽんと手を置いて通り過ぎる。

「ではリィン、夜には戻りますので留守を頼みます」

「うん。いってらっしゃい…」

ラディスは普段通りの飄々とした様子だった。リィンはほっとして二人を見送る。

◇◇◆◆

「クレイ、大丈夫？」

それから二人が帰って来たのは、月が高く昇り夜もだいぶ回った頃だった。居室に来たのはクレイだけで、ラディスは書斎に上がって行ったという。

目に見えてクレイは憔悴しきっており、何だかよれよれで顔色も悪い。

「ええ…」

重そうな足を何とか動かすようにして、椅子に腰かけた。リィンは茶を淹れてクレイに差し出す。

「すみません」

心配そうに見つめているリィンに、彼は弱々しい笑顔を向けた。

「どうしたの？」

「いえ、特にいつもの会議と変わらなかったのですが…」

僅かに言い淀む。

「分かっている事なのですが、情けない限りです」

詳しい事を話すつもりはないらしく、クレイは黙ってカップに口を付けた。

会議で何があったのだろうか…。

「リィン、上手くなりましたね」

クレイがカップを見つめながら言った。茶の事を言っているのだろう。律儀な彼は、自分が疲れているにも関わらず良く気がつく。

「そりゃあクレイの直伝だから」

「申し訳ありませんが、ラディス様にもお願いできますか？」

「うん」

リィンは茶の用意をして書斎へ向かった。

薄々は想像出来る。会議ではラディスが槍玉に上げられたに違いない。

ノックをし扉を開いて書斎へ入る。ラディスはすでに礼服の上着を脱いで着崩した格好になり、幅広の机に向かっていた。

リィンは応接用のテーブルで準備をし、ラディスに声をかける。

「お茶、入ったよ」

「ああ。こっちに頼む」

ラディスは顔も上げずにいる。

「だめだ。こっちに来て飲んでよ」

そう告げると、彼はやっと手を止めて顔を上げた。

「少しは休んでよ」

「俺なら大丈夫なんだが」

「…今すぐここに来ないと、『力』を使ってでも机から引きはがすぞ」

「やれやれ。クレイより融通の聞かない奴だな」

苦笑しつつセットされた髪型を崩しながらこちらへやって来た。リィンの隣に立ち、そのままカップを手にとって茶を味わう。

「会議って何を話し合うの？クレイはとても疲れていたよ…」

「何の実もないものさ。議題はさんざん今までも話されている事で、あいつらには勝てる見込みもない。俺の理論も実証も確実なものだからな。それに今はこの町の外からも賛同者が出始めている」

「だったら…」

どうしてあんなにクレイは落ち込んでいるんだ。

リィンは隣にいる背の高いラディスを見上げる。彼は面白そうに眉

を上げて答えた。

「俺が皇族の恥ずかしい隠し子で、胸に汚らわしい奴隷の烙印があるだけだが、奴らは喜んでそれを議題にする」

「何だって!?」

リィンは思わずラディスの片腕を掴んだ。

「おっと」

腕を掴まれた彼は空いている手でカップをテーブルに戻しながら、

「言ったのは俺じゃない。そんなに睨むなよ」

とリィンを見下ろす。

「そんなの、ひどいじゃないか!」

「ひどいから、奴らはわざと言ってるんだ」

リィンは辛さに眉根を寄せて彼の青い瞳を見つめた。

澄んでいて真っ青な海を思わせる瞳。黄金の琥珀は光を含んで輝く。

「僕は、あんたをちっとも護れていないよ…。どうしたら良い。どうしたらあんたを護れる」

彼の必死の努力を、この生き方を、知ろうともしない奴らが言いたい事を言ってけなしているなんて。

…悔しい。

じっとリィンを見つめていたラディスが、柔らかく微笑んだ。リィンの心臓が、どくんと跳ね上がる。

「何を言われようが俺自身に傷はついていない」

彼はリィンの髪に触れ、長い指でその栗色の髪を優しく梳きながら続けた。

「あいつらは俺の何を知って批判をしてる？噂や表面的な、うわっつらしか見ていないさ。だから蚊や虻に刺されたようなもんで、ちっとも痛くない」

「で、でも！それでも僕は腹が立つよ。…ラディスを悪く言う奴らを、どうにもできない自分にも、腹が立つ」

リィンは耳まで真っ赤だが、その瞳は真剣だった。

「そうだな。痛くはないが、確かにうっとおしい」

ラディスの手はゆっくりとリィンの髪から頬へと伝う。そして、そのふっくらとした頬をきゅっとつねった。

「だ！」

むっとするリィンを見て、にやりと笑いながらラディスが顔を近づけてくる。お互いの額がくっつきそうな程の至近距離に、ラディスの整った顔。

リィンの心臓が、またもや跳ね上がった。

「お前はそのままで良い。難しい事は考えるな。お前はお前らしくいれば良いんだ」

そう呟いて、身体を離した。
それによくやっているしな、と言いながら幅広の作業机へと歩いてゆく。
リィンはつねられた頬に手を当てながら、腑に落ちないような表情でいた。

何だか、ごまかされた気がする。

「絵画展は良かったか？」

ラディスが視線を資料に落としたまま言った。

「よく分からなかったよ。…どうして知ってるのさ」

「エンポリオの奴が、嬉しそうに俺に報告してきた」

「エンポリオって、変だよ」

リィンは憮然としながら後片付けをして、部屋を出ようと扉を開く。

「まあそう言うな。あいつは変態だが悪人じゃない。それに、お前にはそういう時間があって良い…」

ふん！とリィンはそのまま扉を閉めて、廊下をすたすたと歩き出した。

僕はエンポリオと遊びたいんじゃないや！

有名な絵画展が見れなくったって、話題のお菓子が食べられなくたって…

ただ、ラディスの傍にいられたら、それで良いのに…。

そこまで考えて、そんな事を考えた自分が急に恥ずかしくなり、思いきり首を振った。

０４０：不穏の予感

「あんた、結局昨日もずっと仕事してて、そんなに寝てないだろ？大丈夫なの？」

「誰にものを言ってる。今日は遅くなるから先に帰っていろよ」

リィンとラディスはロンバートの病院を訪れていた。今日は若い研修医達がこの国指定の病院に来ており、ラディスはその指導と外科の手術を任されていた。彼は普段と何一つ変わらない様子だ。寝ていないのに、その体力と精神力はどこから来ているんだろうかとリィンは不思議でならない。

「ああ、リィン。そうしたらお使いを頼めるかしら」

受付の女性が話しかけてきた。リィンは空いた時間に、病院のちょっとした仕事を任されるようになっているのだった。今ではラディスの護衛というよりも、このお使いの仕事の方が大きな割合を占めている。

「この明細をレイルトンさんのところへ持っていってくれる？」

リィンが差し出された封筒を受け取り、玄関へ向かおうとした時だった。

「この人殺し！娘を返して！！」

女性の、悲鳴に似た叫び声が廊下に反響した。一瞬で空気が凍りつく。それからがたがたと物音がして、複数のなだめるような声と女

性の叫び声が聞こえ、それからばたばたと数人が固まりになって廊下へ出て来た。
丈の長い上着を着ている人物が三人。医師や助手と思われるが、一様に表情を強張らせている。その中心にいるのは、長い髪をばらばらに乱れさせたまま抱えられるようにして歩いている中年の女性。折れてしまいそうな程痩せている彼女は、まだ何事かを叫んでいる。その隣で女性の肩を抱くようにしている男性。取り乱している女性の主人のようだ。

「もう良いから、やめなさい」

男性がなだめようとする。彼もがりがりに痩せていて、身なりも貧相で表情には疲労が見て取れる。

「私の娘が殺されたのよ！ここに来れば治ると聞いていたのよ！それなのにっ…」

女性は主人の手を振りほどき、医師達に向き直った。リィンからはその背中しか見えないが、恐ろしい何かが彼女に宿っているように見え、全身に悪寒が走った。

「許さないわ！私の大事な娘を死なせたなんて…。責任者を出しなさいよ！訴えてやるわ！」

その場にいた全員が、彼女の鬼気迫る凄まじい叫びに凍りついた。病室から顔をのぞかせている人々も息をのんで動けずにいる。その中で、ラディスだけが素早く動いた。
医師達と女性の間に割って入るようにして、彼女の前に立ちはだかり、告げた。

「ここの責任者は俺だ」

驚いたリィンは咄嗟に『力』を発動させようと身構えるが、ラディスはすかさずそれを目で制した。

「そんなはずはないわ！ここの院長はあんたみたいな若いのじゃないはずよ！！」

ラディスの背後にいた医師達の中の一人、若い女性が憤然とした表情で一歩前に出ようとする。が、それも彼が片手で制する。

「この現場の責任者は俺だ」

ラディスがそう言い終える前に、発狂せんばかりの女性は彼の頬を思い切り平手で打った。乾いた音が辺りに反響する。

「人殺しっ！ひとごろし！娘を返してちょうだい！！」

なおも殴りかかろうとする女性を、主人が羽交い絞めにして止めた。その様子を無表情のまま見下ろしながら、ラディスは冷静な声音で言う。

「処置に間違いはないし記録も見せる事が出来る。それでもそうやって騒ぎたてるんなら、正当な手続きを踏んで訴えを起こす事だ。それでも、あなた方に勝ち目はない」

だんだんと彼の頬が赤く染まってゆく。リィンは棒立ちのままそれを凝視した。瞳は紅く揺らいでいるが、何とか『力』を押さえている状態だ。

「な、んですって！」

女性は怒りのあまり震えている。ラディスは背後にいる一人に紙とペンを用意させ、それにすらすらと書きつけ、男性を見ながらその紙を差し出した。

「ここに俺の診療所がある。話はそこで聞こう。今日はこのまま引き取り願いたい」

男性は紙きれを受け取り、女性を促してよろよろと歩いてゆく。

「許さないわ…覚えていなさい…。私の娘を…私の、娘を…」

女性の瞳は狂気に歪んでいる。誰も何もできぬまま、二人が去ってゆくのを見守るしかなかった。

「ラディス！」

リィンがラディスの元へ駆け寄り、服の裾を鷲掴む。

「どうしてっ…」

言い募ろうとするリィンの頭に手を置いて、彼は静かな声で言った。

「泣くな」

その言葉を聞いて、自分の瞳が涙で一杯になっている事に初めて気がついた。リィンは慌てて腕で顔をこする。

「な、泣いてないよ！」

「上出来だ」

ふん、と笑ってラディスは気の抜けたようになっている医師達を促し奥の部屋へと消えた。リィンにはその背中を見送る事しか出来ない。

何だかわからないけど、どうしてラディスが殴られなきゃならないんだ。

「ねえあなた」

その声にリィンは目の前にいる女性に視線を向けた。先程、ラディスに制された女性だ。

暗めの色の巻き髪は一つに束ねられており、丈の長い上着を着ている。どうやらここの医師か研修医のようだ。リィンと変わらない程の背丈で、尖った口元に意思の強そうな眉をしている。その目元は厳しく、リィンを睨む。

「あなたがリィンという子ね。護衛気どりの」

リィンは警戒しながらその女性に向き直った。彼女の瞳には、侮蔑の色が滲んでいる。

「一度しか言わないわ。ラディス先生のところから今すぐ出て行ってちょうだい。あなたは先生にとって邪魔なだけなのよ」

リィンが何も言わず黙っていると彼女は更に苛々を募らせ、それを隠そうともせずにリィンにぶつけた。

「聞いているの!?あなたなんか、ここには必要ないの!」

「僕はあんたを知らない。あんたは誰だよ」

「まあ!なんてひどい口の聞き方をするのかしら!…やっぱり、駄目ね。イリアス族だもの。先生も災難だわ、こんなのにつきまとわれているなんて」

リィンはぎゅっと相手を睨みつける。対する彼女も臆する事なく、睨み返しながら言った。

「私はベルシェ・レニツィ。ここの医者よ」

レニツィ…。どこかで聞いた名だ。

リィンは小さくあっ、と叫んで目を見開く。

「私の父はロンバート・レニツィ。私はここの院長の娘よ」

そう言って、ベルシェは眉間にしわを寄せながらリィンの全身を下から上へ値踏みするように睨みつけた。

何か、汚いものでも見ているようだ。

「この病院にも来てほしくないわ。すぐにこの町から出て行く事ね」

「あなたがロンバート先生の家族だというのは分かりました。でも僕はラディスの護衛として正式に雇われているんです。たとえあなたであろうと、何の理由もなしに解雇できないはずです」

リィンは真っ直ぐにベルシェを見据え、きっぱりと言い切った。今

さら少し何かを言われたところで引き下がるつもりはない。イリアス族であるというだけで、石を投げられるような仕打ちをされてきているリィンにとっては、このような事も初めてではないのだ。

「まあ！なんて図々しいのかしら！」

ベルシェは怒りに目元を赤く染めながらリィンに一歩近づく。それから一瞬驚いたような顔をして、突然リィンの胸に自らの手を押しつけた。

「なっ！」

慌てて後ずさるリィン。

「…あ、あなた女性ね！？女性のくせにそんな汚い格好をして、護衛なんていう仕事をしているというの？」

ベルシェの顔が意地悪く歪んだ。

「いい事？あなたがラディス先生のところからいなくならない限り、私はあなたを許さないわ」

そう言い捨てて、ベルシェは踵を返して消えていった。

玄関から表の広場まで様子を見に行っていた受付の女性が戻り、顔を青くしながらリィンにおそるおそる話しかける。

「大きな声が聞こえたけど、大丈夫？ベルシェさんは気の強い方だけれど、ラディス先生の事になると余計なのよ。何かあったの？リィン、平気？」

リィンは声をかけてくれた相手に笑顔を向けて頷いた。

「大丈夫、びっくりしただけだよ。…それにしても似てない親子だ」

「そうね…」

二人はそうする他ないといった様子で、弱々しく笑いをこぼした。

０４１：嫉妬の渦

それから事あるごとに、ベルシェはラディスの診療所を訪れるようになった。今も勉強の為といって診察室に詰めている。

「随分大きくなられたのねえ。ロンバート先生の娘さん。もう二十七になるのだそうよ」

ニコルが食器を拭きながら感慨深げに呟く。ベルシェは最近まで、レーヌに留学していたのだそうだ。

無事に大学校を卒業して、今は研修期間だという。通常は医師になる為の学問を修了した後、先輩医師の元で二年間の実務経験を積んで、初めて免許取得となるのだ。

「ふうん…」

リィンはニコルが拭いた食器を棚へ片付けながら気のない返事を返す。実は気が重い。あれから彼女は何かとつっかかってくるのだ。やれ掃除の仕方が悪いだの、汚れたシーツを早く洗えだのと怒鳴られてばかりである。しかしベルシェはニコルやクレイがいるところでは決してその本性をあらわさない。全く、女らしいといえば、らしいのだが。

「あら、何だか元気ないわねリィン。お昼ご飯足らなかったかしら？」

「えっ。べ、別にいつも通りだよ」

その時、ばたばたと廊下を駆けてくる足音が近づいてきた。その勢

いのまま扉が開かれ、ばたん、と大きな音を立てて閉じられた。扉にチェムカが張り付いている。

「チェムカ。どうしたの？」

「んもお！あーのベルシェっつう人、何とかならねえかなあ！」

チェムカが盛大なため息をつきながら叫んだ。リィンとニコルはぽかんとチェムカを見つめる。

「あんな狭い診察室に居られちゃ困るんだわ。助手はクレイで十分だし、それにあたすの受付の仕事もやろうとすんだわ！知らねえのに！そのたんびにクレイに注意されてっけど、ちっとも聞いてないし」

心底憤慨した、と言わんばかりにチェムカが鼻息を荒くしてまくしたてた。チェムカの愛嬌ある顔は怒っているのに何だかあまり迫力がなく、リィンとニコルは思わず笑ってしまった。

「んな！なーんで笑うだか！」

「だって、ねえ」

ニコルは口元を押さえてほほほ、と笑い、リィンも悪いと思いながらくすくすと笑ってしまった。

「う、うん…。なんか、可愛い」

「…はあ、もう」

チェムカも眉をハの字にしながら、ふふふと笑い出した。

「ああ、そうそう。リィンにお使いを頼みたくって来たんだったわ。これ、ここの住所に配達してきてくれねえ？先生が届けるの忘れてたっつってんだわ」

見ると手に小包と紙きれを持っている。リィンはうん、とそれを受け取り、マントを羽織って部屋を出た。内心とてもありがたい。ベルシェが来ている時はずっと緊張しっぱなしなので、まだこういった使いをこなしている方が気が楽だ。廊下を歩いてゆくと、長椅子に座って順番を待っている人がまだまだいる。そこから玄関を出て、少し歩いた時だった。

「待ちなさい、リィン」

リィンは心の中で舌打ちした。見つかったか…。

振り返るとやはり、ベルシェが腕組みをしたままこちらへ歩いてくる。

「何か」

「あなた、いつまでここにいるつもり？」

ベルシェは唐突に言って、またリィンに侮蔑の視線を投げる。

「…そっちこそ、いつまでそう言ってるつもりですか」

リィンは負けていない。イリアス族というだけで、軽蔑をする人間に遠慮なんかするつもりもない。それにベルシェは、ロンバートの娘である。ラディスとロンバートが始めているこれからの新しい診

療スタイルに、彼女は本当に賛成したのか。それさえも疑問に感じてしまう。
ベルシェはぐっと口元を噛みしめて、それから嗤った。

「まあ良いわ。あなたの口の聞き方を怒っても仕方ない事だものね。だってあなたはイリアス族で、まともな教育を受けていないんですもの」

リィンは押し黙ったまま両手を握りしめて屈辱に耐える。

「何か勘違いしてない？ラディス先生があなたに優しいのはね、あなたがイリアス族だからよ」

…そんなの分かってる。

「それになあに、その格好。汚いわね。それに短い髪。ほんと、男性にしか見えない」

そう言って嘲笑った。ベルシェは巻き髪を一つに束ねてはいるが、その髪は手入れが行き届いており、今日は薄い桃色のブラウスになめらかな生地のスカートを履いている。

「先生にだって女性として見られてないわ。それに野蛮よ。女性というのはね、そんな恐ろしい剣を腰に差したりしないのよ。まさか人を傷つけたりしているんじゃないの？ああ怖い」

リィンはベルシェを見つめる。
彼女はリィンを怒らそうとして、言っているのだ。それは分かっている。

「何よ。私に『力』を使うなら使いなさいよ。イリアス族はやっぱり化け物だったって皆気づくわ！」

何も言わずフードを目深にかぶり、走り出した。

今までさんざん一方的な差別を受けて来た。でもそれに負けずに、生きて来た。

イリアス族は、気高き種族だ。父様と母様を心の底から尊敬している。だから、何を言われても負けない。自分が負けたらその大事な人達まで、くだらない奴らに汚されてしまう気がするからだ。

でも…。

リィンはベイルナグルの町をずんずんと突き進んでゆく。必死に歩いていないと涙が出そうだ。

女性としての自分をけなされても平気なはずだった。もうずっと男性として生きてきたのだから、今さらその事で何か言われても平気だと思っていた。なのに、胸を抉られたように痛い。呼吸が震える。

どうしてこんなに動揺してしまうんだ。

立ち止まり、目を閉じて深呼吸をした。すぐに動揺する自分が情けなかった。

女性で、腰に剣を差しているのは僕だけじゃない。グレイアだってそうだ。

それに僕は女性じゃない。そう決めたんだ。この剣はラディスを護る為のものだ。

それから…。

ラディスの大事なひとは、ユマだ。

僕が、ラディスにどう見られていようが関係ない。女性として見られなくても、イリアス族だからでも、何でも良いんだ。

護衛として傍に居られればそれで良い…。

住所の書かれた紙を見ると、それは広場からすぐの所で迷わずに小包を渡す事が出来た。ベイルナグルの広場やその周辺では、リィンはラディスの護衛として知れ渡っており、以前ほど嫌な思いもしなくなった。優しい人ばかりではないが小包を手渡した婦人も、笑顔を向けてくれた。

何とか気持ちを持ち直したリィンだったが、ベルシェの執拗な攻撃は更なる追いうちをかける。

診療所へ戻り、裏庭で干していた洗濯物をとりこんでいる時にまたベルシェがやって来た。リィンを逃がすまいとするその表情は、恐ろしい。

「これ、洗ってちょうだい」

彼女は足元にガーゼをぽとりと落とした。リィンは無言でそのガーゼを拾う為に手を伸ばす。その白い手の上に、ベルシェの足が勢いよく落とされた。手の甲に鋭い痛みが走る。彼女は革靴を履いていて、その足でリィンの手をぎりぎりと踏みつけていた。容赦のない、真っ赤な憎しみがリィンを壊そうとしている。恐ろしい感情が爆発している。

「戻ってこなくても良かったのよ。あなたのかわりに私がここへ来るんだからね」

リィンは眉間にしわを寄せ、痛みに耐えながら言った。

「あ、あなたは勘違いをしてる…。僕はただの護衛だ。ラディスが決めたのなら、あなたがここに来たって僕は何も、文句は言わない」

ベルシェの力が僅かに緩んだ。素早く手を引き抜き、よろりと後ずさる。

「な、何よ！良い気にならないで！何様のつもり！？イリアス族だからって、ラディス先生に恩を着せているんでしょう？あなたなんか、イリアス族でなければ先生の傍にもいられないんだから！先生にふさわしいのは、あなたじゃないわっ」

あまりの辛辣さに、リィンはかっとなった。

「そんなの分かってるさ！でも僕は恩なんか着せてないっ。イリアス族を馬鹿にするな！」

「どうだか知れないわ！」

「それにラディスにふさわしいのは僕じゃないし、あんたでもないよっ。ラディスにはユマが…」

乾いた音が響く。ベルシェがリィンの頬を平手で打ったのだ。リィンは何が起きたのか分からず呆然とする。彼女は肩で息をしながら、苦しそうに言った。

「あなたなんか、嫌いよ」

革靴が芝を踏みしめる音。ベルシェが去ってゆく。

一人残されたリィンは、小さく呟いた。

「変なの…。僕に嫉妬したって、意味ないのに…」

ラディスが好きなのは、ユマなのに。

リィンの胸に、ユマのたおやかな笑顔が浮かんだ。

◇◇◇◆

一番星が輝く頃、ようやく最後の診療が終わった。ベルシェはあのまま帰ってしまったようで、ラディスとクレイが診察室で後片付けをしている。チェムカは一足先に居室へ戻っているようだ。リィンは診察室の隣にある応接室で、じっと息をこらして様子をうかがっていた。

「まったくここは死にぞこないが多くてまいるな。…ああ、そういや夕飯は魚の煮付けと言っていたな」

「それは良いですね」

扉の開く音がして、続いて足音が遠ざかってゆく。室内がしんと静まり返ったのを確認して、リィンは診察室へ続く扉を開いた。頬の赤みは何とか引いたが、手の甲は皮がむけてしまっていてこのままでは痛々しい。ニコルが見たら心配してしまうに違いないので、診療が終わって皆で夕食をとる、この僅かな時間に薬を塗って何かで隠しておきたかったのだ。

急いで薬品棚に飛びついて引き出しを開く。様々な薬品があり、何

がどれだか分からない。

「おい泥棒、何を探してる」

「うわあっ」

驚きのあまり、リィンは声をあげた。振り返るとラディスが腕組みをして仁王立ちしている。

「で、出て行ったんじゃないのかよっ」

「隣の部屋から胡散臭い気配がしたもんでな」

相手が剣の達人だと、やりづらい事この上ない。ラディスはずかずかと部屋を横切り、素早くリィンの腕をとった。手の傷をじっと見ている。

「これは？」

「転んだ」

顔はリィンの手に向けられたまま、目線だけをリィンに寄こす。青の瞳に見つめられ、居心地の悪い思いをしながらもう一度言った。

「転んだんだ」

「そうか」

ラディスは引き出しの中から小瓶を選び取り、リィンの腕を引いて椅子に座らせた。向かい合わせに彼も椅子に座り、手早く傷の手当

をする。

「これくらい、自分で出来る」

リィンはふてくされながら言った。胸が苦しいのだ。怪我をしているのは手の甲のはずなのに、ぎゅっと胸がつかえる。そんなに優しくしないで欲しい…。

僕に優しくしてくれるのは、僕がイリアス族だから？
だって、ラディスにはユマがいるもの。ユマは優しくて、女性らしくて、綺麗だ。

ユマからもらった繊細な髪飾りは、大切に保管している。

僕なんかには逆立ちしたって似合わない…。

リィンは俯いた。
そんな事を考えてしまう自分が恥ずかしかった。胸がずきずきと痛んだ。

「ベルシェだな」

手を動かしながら、突然ラディスが言った。

「あいつは少し気が強いし攻撃的だ。特に俺にひどく執着している面があるからなあ。困ったもんだ」

ため息をつきながら慣れた手つきで薄手のガーゼを巻き、固定する。
それからリィンの頬に手を伸ばし涙を拭った。

「最近、泣いてばかりだな」

リィンは歯をくいしばりながら、ぼろぼろと大粒の涙を流していた。

「…泣いて、ない」

「どれだけ負けず嫌いなんだ、お前は」

「う…」

俯いて涙を拭う。

僕は弱くなってしまったのかも知れない。

ラディスが分かってくれていたと思っただけで、ほっとしている自分がいる。

彼の両手がリィンの頬を包み、顔を上げさせた。

「大丈夫か」

「…うん」

ラディスの真剣な眼差しが、涙で潤んだ赤茶の瞳とぶつかる。

「リィン、俺を信じろ」

リィンはゆるゆると瞳を閉じて、消え入りそうな声で返事をした。

「うん…」

ラディスのその言葉は、唐突のような気がした。しかしリィンはラディスを信頼していたし、こうして彼が自分にも気を配ってくれていると分かっただけで、それだけで嬉しかった。
それだけで頑張れると思った。

リィンは多くを望まない。それは悲しい過去のせいだ。
もう失いたくなかった。シルヴィやゼストのように、いなくならないで欲しかった。

何も他に望まない。贅沢なんか言わないから。

だからずっと、ラディスの傍に…。

０４２：北の森

「いい事？絶対に私の邪魔だけはしないでちょうだい」

「…はい」

ベルシェはリィンを鋭く睨みつけて歩き出した。彼女の前には急きょ雇った護衛の男がいて、後ろからはリィンがついてきている。

「イグルの特効薬の研究には、その化け物の組織サンプルを採取する必要があるのよ。あなたは知らないでしょうがね。命にも及ぶ危険があるから、私の為にラディス先生がわざわざあなたをつけたの。いざという時はちゃんと働きなさいよ」

暗い色のマントを羽織りフードをかぶっている為、彼女からはリィンの表情は見えない。三人は北の森へと分け入った。

女のくせに、と言われるのが一番嫌いだった。プライドが高く気の強い女性の類にもれず、ベルシェはそう言って蔑まれるのが大嫌いだったし、そんな風にして相手を貶めようとする人間を軽蔑した。だからこそ誰よりも努力を惜しまずに必死になって勉強に励んだし、だからといって他の事もおろそかにはせずに、全てを全力でこなしてきた。

ベルシェは父を尊敬している。物心ついた時から、自分はいつかその父の仕事を受け継いでゆくのだと思っていた。人の命を助ける医師という職業は偉大な聖業だとさえ思っている。ベルシェには上に兄が二人いるが、兄達は医者にならなかった。それぞれがルキリア国の遠方で、家庭を作って暮らしている。

前を歩く男が、行く手を阻むかのように広がる木々の枝葉を剣で薙いでゆく。

「おかしいなあ。いつもはこの辺りに一匹ぐらい転がってるもんだが」

「もっと奥へ進んでちょうだい」

「あまり行くとまずい」

「行くのよ」

男性は舌打ちをして、森の奥へと歩を進める。

いやあね、これだから学のない男って…。

父のロンバートは愚直な程に真っ直ぐな性格で、そのせいで損な事もたくさんかぶってきていた。しかし母は、そんな父を一度も責めたりはせずに陰で支え続けた。

この帝都にラディスがやって来た時、父が笑いながら母に彼の事を話したのを覚えている。

あのルーベンに食ってかかった若造がいる。あいつは理想ばかり語っている。どこにそんな自信があるのか分からない、世間を知らなすぎるのではないか。きっとそのうち潰されるさ。

母は黙って聞いていて、そして一言、こう言ったのだ。

良かったですね、あなた。味方が来てくれて。

それからほどなくして父はラディスとともに過酷な道を歩む事を決めた。

ベルシェが初めてラディスと会ったのは、家族と彼とで食卓を囲んだ時だった。噂には聞いていたが、その眉目秀麗な容姿は帝都の中でも飛び抜けていた。だがベルシェは彼を嫌っていたし、自分と変わらない年齢の為、信用ならなかった。父を危険な所へと連れていってしまった張本人なのだから。しかしラディスは既に紳士の振る舞いを身につけており、同世代とは到底思えなかった。

彼は全てを見透かしていたのだろうか。用意された食卓へつく前に、紹介された母に心からの礼を述べたのだ。

それからベルシェが彼の事を好きになるのに、そう時間はかからなかった。

彼女自身、開かれた診療システムには手放しに賛成するが、この世の中善良な人々ばかりではない。綺麗事だけでは済まされない事を知っている。こちらがいかに手厚い治療を正規の料金で施そうとも、言いがかりをつけたり、たかりまがいの事をする者がいる。そんな輩はやはり貴族のような富裕層ではなく、山間部に生活する貧困層や所得の低い労働者といった者なのである。ラディスはこのような問題が起こる事も予想していたようで、皇族の目を武器にして政府にわたりをつけ、その要人の中にも味方を作って同時進行で法の整備にも取り掛かっていた。それでも悪意のある人々はこちらを食いつくそうと襲いかかってくる。先頭を走り続けるラディスはその問題の処理を一手に引き受けて、時には金を握らせて片づけているのだ。

彼は何をするのも厭わない。

父も、その辺は覚悟の上のようだ。しかしベルシェは違う。

何故そんな人間にまで、こちらが手を差し伸べてやらなければならないの？
私達の好意を踏みにじるなんて、許せない。

だからこそ、ベルシェには頑なな一面がある。貴族や富裕層は一定のモラルを持っていて接する時も安心できる。だけどきちんと教育を受けていない人々ときたら、最悪である。

「あったわ」

茂みに少し隠れるようにして、干からびたイグルの死体が見えた。ベルシェは斜めにかけている麻の鞄から密閉性の高い小瓶とピンセットを取り出す。傍へしゃがみ込んで、腐敗の進んだ紫色の組織をはぎ取って小瓶に入れ、きつくふたを閉めた。

「うへえ。相当な変わりもんだぜ」

護衛の男は顔をしかめながら言った。彼女は力いっぱい相手を軽蔑して言い放つ。

「あなたになんか、分からないでしょうね」

「けっ。お高くとまりやがって。さっさと帰るぞ」

リィンは終始無言で背後を警戒している。どうしてこんな子を…。ベルシェの胸にまた憎しみが滲む。

ラディスとともに走りたいと願い、レーヌへ留学して猛勉強の日々を終え、この町に帰ってみたら、彼の隣には少年のようなみすぼらしい格好をした見知らぬ女性がいた。しかもイリアス族だなんて。

今でさえ多すぎる敵を、また内外に増やすだけだと思った。その上ラディスを見つめるその顔は、恋する女性のそれだった。

自分が一番嫌っていた軽蔑すべき言葉を使ってでも、排除したかった。

許せなかった。これでもかと攻撃すれば、今までの女性達のように逃げてゆくと考えていた。だって彼女達はラディスの事なんてこれっぽっちも知らないで、彼の容姿にだけ恋しているのだから。

「イグルだ！」

男性の叫び声に、はっと我に返った。

三ナルグ程しか離れていない茂みの先に、野犬型のイグルが三匹。うなり声を上げながらこちらの様子をうかがっている。男とリィンがベルシェの前に立ち、剣を抜いて構えた。

「…おかしい。何故襲ってこない」

「うん。何か変だ」

護衛の二人は慎重にイグルを観察する。

「何をしているのよっ。早く退治しなさい！その為に雇ったんですからね」

ベルシェの言葉に、男がゆっくりと彼女に顔を向けた。

「イグルは向こうよ！」

「…やめた。こんな女、護る気もおきねえ」

「何ですって!?こっちはお金を払っているのよっ」

男は顔を歪めて懐に手を入れ、硬貨の入った小袋を取り出す。がしゃり、とベルシェの足元にそれを投げ落とした。

「じゃあな。後は好きにやってくれ」

そう言いながら身を翻して男は走り去ってしまった。

「待ちなさいよ!」

ベルシェが一歩踏み出す。

「ベルシェ!」

リィンの緊迫した声。

ベルシェの視界が暗くなった。まるで太陽が雲に隠れてしまったようだ。

背筋にぞわりと悪寒が走る。

すぐ左に、その影を作っている主がいた。ものすごく巨大なイグルが一匹。元は大熊だったのだろうか、二本足で器用に立っている。その躯を覆っている毛は体液でべとついており、目や口は大きく裂けて赤い肉がはみ出ていた。ベルシェの黒目がちの瞳が大きく見開かれる。

「ガゴオオオオ」

イグルが奇妙な吠え声をあげながら太い腕を振り下ろした。

身体が凍りついてしまったかのように動かない。殺される、そう思

った瞬間にぐらりと身体が傾いた。
リィンがベルシェの腕をとり、素早く彼女を引き寄せたのだ。
イグルの腕は宙を切り裂き、麻の鞄が無抵抗に遠くへと飛ばされた。

「か、鞄が…」

リィンが自らの背にベルシェを隠して怪物との間合いを取る。
野犬型のイグル三匹と、巨大なイグルに囲まれてしまった。間合いをとったままどちらが先にこの新鮮な獲物を奪うのか、イグル同士がいがみあっている。

「あの男！許せないわ…」

ベルシェは震えながらもそんな事を言う。

「あの人にだってプライドはあるよ。あなただけじゃない」

思いのほか冷静な声でリィンが呟いた。

「相手の態度で簡単に揺らいでしまうような信念なら、最初から持たない方が良い」

「なっ…！」

ベルシェはすぐ傍にいるリィンを睨んだ。てっきりこちらを向いて言ったのかと思っていたが、リィンは前を見据えたままだった。その瞳が深紅に揺らいでいる。息をのんだ。

白い肌に紅い瞳。不思議な『力』を使いこなす、凶暴で残忍な悪魔。
今ではその血が絶えようとしている希少な種族。

最初に動いたのは野犬型のイグルだった。三匹が一気にベルシェとリィンに向かって走り出した。その瞬間に二匹のイグルの頭が飛んだ。紫色の化け物の血が辺りに飛び散る。リィンの『力』をかわした一匹が飛びかかり、リィンは咄嗟に剣でその牙を防いだ。その瞬間、巨大なイグルが辺りの木々が震える程の咆哮を上げて襲いかかってきた。

「ガアアゴオオオオ！！」

「きゃあああ！」

「ベルシェ！しゃがんで！」

何を考える暇もなくベルシェは両膝をがっくりと折り曲げてしゃがみこんだ。

大熊のイグルの首が、前触れもなしに真横にずれる。切り口から勢いよく紫の血が噴き出し、頭が地面へぼとりと落ちた。

頭から切り離された胴体が、よろよろとベルシェに近づいてくる。

「いやあああああああ！」

ベルシェは恐怖のあまり悲鳴ではなく絶叫した。身体が動かない。すっと視界の端を横切り、リィンがその胴体に飛び込んでいった。がくん、とイグルの動きが止まる。頭を亡くしたその胴体がゆっくりと傾き、どうと真横に崩れ落ちる。そこには深々と剣が突き刺さっていた。

「ベルシェ！怪我はない！？」

リィンが荒く息をしながら振り返ってこちらを見る。イグルの血は体内に入らない限りは大丈夫だ。ベルシェはしりもちをついたまま、小刻みに頭を縦に振る。

「よかった…」

リィンはイグルの返り血を頭からかぶっていた。でも怪我をしていなければ、大丈夫…。

「リィン！」

ベルシェは悲鳴を上げた。右腕のブラウスがずたずたになっていて、その白い腕から、真っ赤な血が流れている。大熊のイグルに『力』を集中させた為に、その隙をついて野犬型に噛みつかれたのだろう。そのイグルもすでに絶命している。しかし…

「た、大変だわ！早く特効薬を…」

ベルシェは四つん這いになりながら、麻の鞄を探す。

「そんなのは後だ。イグルが仲間を呼んだ…」

「えっ」

リィンに腕を掴まれ、よろりと立ち上がる。森のずっと奥、木々の間の茂みが、ざわざわと不気味に揺れている。

「早くこの森から抜けるんだ」

そのままリィンに腕を引っ張られるようにして走り出した。ベルシ

ェは足がもつれて何度も転びそうになりながら、必死に足を動かす。恐ろしくて後ろを振り返れない。こんなに怖い思いをするのは生まれて初めてだった。どんどん息があがってゆく。苦しい。でも走り続けなければ。すぐ後ろにあの化物が迫って来ているような気がして、叫び出したい衝動に駆られる。でもそんな体力、使っていられない。

この森は永遠に続いているの？どうしてまだ森から抜けられないの？来た時より、出口がずっと遠く感じる。

「…こっちの方向に行けば、診療所の裏に、出れる」

走りに走って、もうこれ以上は無理だというところでやっと森の切れ目が見え、リィンの足が止まった。ベルシェも肩で息をする。膝ががくがくとして立っているのがやっとだし、全身が心臓にでもなったかのように、どくどくと脈打っていた。

「行って…」

「え…」

「僕はもう、走れない」

戦慄した。

嘘…。

リィンががくりとその場にひざまづいてしまった。ベルシェの頭がぐるぐると混乱する。

そうだった、この子はイグルから傷を受けていた。腕から血を流しながらベルシェの手を引いて、走り続けていたのだ。なんて小さく

て線の細い身体。この子がいなければ私は死んでいた。自分がイグルになるかも知れないっていうのに、そんな事もお構いなしに走り続けた。

私を助ける為に。

どうして…どうして。

「どうして私を助けたのよ…」

あの男みたいに、逃げれば良かったじゃない。
良い気味だって、笑えば良かったじゃない。
あなたをいじめていたのは、私なのよ。
あなたにひどい事をしていたのは、私なのよ。

なのにどうして、自分が傷ついてまで守ったりするの…。

「そ、そんなの…。僕は護衛だ。ベルシェの命を守るのが、僕の、仕事だ」

無意識に身体が動いていた。
ベルシェはリィンの細い腕をとって首に回し、身体を支えて歩き出す。

「あなたをイグルになんかさせないわ。夢見が悪くなるじゃない」

助けなければ。私は一生後悔する。

０４３：大切な事

「誰かっ。誰かいないの！？」

やっとの思いで診療所にたどり着き、崩れるようにして玄関に飛び込む。

「先生！クレイ！」

誰もいないはずはないのだが、診療所はしんと静まり返っていた。

どうして誰も出てこないのよ！

ベルシェはリィンを長椅子に座らせ、診察室へと駆ける。傷を受けてからもう十分は経過している。早く特効薬を打たなければ。特効薬には注射用と服用するものと二種類ある。どちらもこの診察室には置かれているはずだ。

扉に飛びついて、取っ手を掴む。すっと血の気が引いた。鍵がかかっている。

乱暴にがちゃがちゃと回すが、開く感触はしない。ベルシェは髪を振り乱して扉に体当たりをした。

「何で鍵なんか、かかってるのよ！先生、いないのっ！？」

何度も何度も、扉にぶつかるが、ぴくりともしない。

あきらめるわけにはいかない。早くしないと。早く！

扉をばんばんと叩く。叩き続ける。手の平の痛みも、体当たりをした肩の痛みも感じない。

自分の背後ではリィンが震えながら苦しそうに呼吸をしている。そ

う思うだけで、息がつまりそうになる。

長い廊下に、扉を力任せに叩く音とベルシェの叫び声が反響した。

「開いて！お願いよ、特効薬が必要なのよっ！あの子が、あの子が死んじゃう！」

死なせるわけにはいかない。

死なせない！

もう一度扉を叩こうとした時だった。

びくともしなかった扉の施錠がガチャリと音を立て、すうっと扉が開いた。

丈の長い上着を羽織った、長身のラディスが無言で立っている。

髪を振り乱したまま呆然と立ちすくむベルシェの横を通り過ぎて、長椅子に座るリィンの傍へ行き慣れた手つきで注射をした。

リィンは僅かに口を開き何かを言おうとしたが、そのまま気を失ってしまった。彼は立ち上がり、ベルシェに向き直って言った。

「リィンは助かるよ。大丈夫だ」

あんぐりと口をあけてラディスを凝視する。

「い、いたのにどうして、出てくれなかったの。私を騙したの…」

「騙してなんかいない。ただ思い出して欲しかったんだよ」

青い瞳がベルシェを見つめる。

「自分が医者だって事を」

彼女の瞳から、一筋の涙がこぼれた。

「ひ、ひどいわ…」

彼は弱々しく笑った。

ああ、綺麗な顔。場違いな思いがベルシェの胸に浮かぶ。

それに、泣いたのは何年ぶりかしら…。

「ベルシェ。俺はお前がロンバートの娘だという理由だけで、強要したり縛るつもりはないよ」

ラディスが目の前に立った。彼から良い香りが漂う。ベルシェはこのミントハーブの匂いが好きだった。

「それにお前にも、自分がロンバートの娘だからという理由に頼って生きて欲しくない。自分で考えて、自分の好きな道を行けば良いんだ。理由を言い訳にせずに、自分の足で立って歩く。それが自立というもんだぜ」

胸が詰まる。私はこんなに頑張っているのに、ひどい人ね。…見抜いていたのね、厳しい人だわ。

でも、優しい人。

「…私を泣かせたなんて。父に言いつけてやるんだから」

「悪かった」

ぽんぽんとラディスが頭をなでる。ベルシェは泣きながら笑顔を彼に向けた。

でも、おかげで大切な事を思い出したわ。忘れちゃいけなかった、大切な事を。

幼い頃から見ている父の背中。医師である父に、泣きながら感謝を述べる婦人。父に感謝する人々を何度となく見て来た。それでこの仕事がとても大事なもので、人の命を助けるという事が、どれほど尊いものなのかを知った。そうなのだ。皆、医者というだけでありがたがってくれる。丈の長いこの上着を羽織っていると、まだ研修中のベルシェにさえ、先生、と言って患者は話しかけてくる。何の疑いもなく、屈託なく向けられる信頼のまなざし。こんな私達にまで、治療してくれるなんて、と言って目に涙をためる女性。こんな汚い格好じゃ、申し訳ないと言って恐縮する老人。無防備でけなげな人々。

私は何がしたかったの？ねえ、ベルシェ…。

◇◇◇◆

頭に靄がかかったみたいにどんよりとして、身体が重い。リィンは何とか首を動かして辺りを見渡した。寝室のベッドに寝ているようで、すぐ傍にベルシェが立っていて記録をつけている。リィンと目が合い、ふてくされたような顔になった。

「目が覚めたようね」

「僕…助かったんだ」

「あなたってどうかしてるわ」

「…そう、かな」

ベルシェがため息をついて、むすっとした表情で言った。

「…あなたにひどい事したのは謝るわ、ごめんなさい。もうしないから安心して。でも助けてもらったお礼は言わない。おあいこだものね」

リィンは薄く笑った。気の強い彼女らしい言い方だ。あの表情は怒っているんではなくて、照れているのだと分かると、心に温かいものが広がった。

「うん」

ベルシェが部屋を出て、入れ違いにニコルとチェムカがやって来た。

「大丈夫けえ、リィン」

「イグルに襲われたって聞いてね、もうあたしはびっくりして、心臓止まるかと思ったわ」

クレイが後から来て、リィンの枕を高くしてくれた。

「今日って…診療は？」

「診療は続いていますよ。ラディス様が下におります。昨日から半日は眠りっぱなしでしたね」

「んもう！先生がついていながら、何でこんな事になるんでしょ！」

ニコルはぷりぷりしている。リィンは笑った。

「僕の方が護衛なんだよ、ニコル。それにこんな事になったのも僕がへまをしちゃったからで…」

そういう事じゃないの、と言いながらニコルは納得しない。

「それはそうと、ちょっと待っててね、リィン。今スープを持ってきたげるから」

そう言い置いてニコルは慌ただしげに去っていった。

「リィン、そのお、女の子だったんだべな…」

「えっ」

チェムカが眉をこれ以上下げられないほどに下げて、ごにょごにょと呟いた。

熱を出していたリィンの身体を拭こうとして、分かったのだと言った。その時にはニコルも傍にいたので診療所の人々全員が本当の事を知った事になる。

「黙ってて、ごめんね」

赤茶の瞳が真っ直ぐにチェムカを見つめる。少し寂しそうに揺れた。

「そったら事、全然良いだよ。リィンはリィンだもの」

「…ありがとう」

「ただ、ニコルが先生を怒ってねえ、大変だったんだ」

「ええ。女性に危険な仕事や重労働をさせて、何たる事かと。それはすごい剣幕でしたよ。そのあと何とか納得してもらえましたが」

チェムカとクレイが笑っている。ちっと先生が気の毒だったべなあ、とチェムカ。

ここの人達はいつも優しい。リィンは少しだけ泣きそうになった。

◇◇◆◆

次に目覚めた時辺りは真っ暗で、薄くランプの灯が入っていた。ばきばきと節々が鳴りそうな身体をゆっくりと起こす。ずっと寝っぱなしで全身がだるかった。

「気分は？」

ラディスの声。

窓の近くの椅子に座っていた彼はベッドの傍へやって来て、瓶に入った水をグラスに注いでリィンに手渡した。それからベッドの脇に腰をかけて、顔をリィンへ向ける。

「あんまり…」

水はよく冷えていて美味しかった。

「だろうな」

「ごめん。ラディスのベッド占領しちゃってるね」

「気にするな。俺はクレイと寝てる」

「ええっ！！」

くく、とラディスの笑い声が闇に溶ける。冗談に決まってるだろう。

「あれは、どこまであんたが仕組んだ事？」

ラディスは無言でリィンを見つめる。リィンはただ何となく、そう感じていた。彼が現れてリィンに注射をした時に、ふとよぎったのだ。知ってたの？あの時そう言おうとした。

「俺を信じろってそういう事かよ。なんて奴だ」

「いくら俺でもイグルまで操れるわけがないだろう」

「ほんとかな」

「ま、結果オーライってやつだ。良く頑張ったな」

「…僕がイグルになったら、真っ先にあんたを食べるよ」

ラディスが暗闇で微笑んだ。どきりとする。この表情は、心臓に悪い。

彼の腕が伸びて、長い指でリィンの頬をなでた。

「良いよ。お前にやる」

リィンは気絶しそうになった。こんな単純な言葉なのに、何故こんなにも恥ずかしくなるのか分からなかった。熱のせいだ。そう思う事にした。

０４４：決裂

それから数日が過ぎて、右腕の傷もふさがり体調もだいぶ回復してきた。しかしまだ本調子には戻っておらず、休みながら家の仕事を片づける状態だった。この日は休診日であったが、ラディスとクレイ、リィンは朝から書斎にこもっていた。資料を国の機関に提出しなければならないとかで、膨大な蔵書を元にその資料をまとめる作業を続けているのだ。

「リィン。これじゃない。同じ題名だが作者がリナルドの方を持ってこい」

高く積み上げられた書物の奥から、ラディスの声だけが聞こえた。リィンはため息をついて梯子を降り、本を掴む。クレイも反対側の書棚に張り付くようにして目当ての本を探していた。ラディスが書いたメモを元に、この広大な図書館ともいうべき書斎の本棚から、本を引き抜いては彼の机へ持っていくという作業は、地味に疲れる。

「ちょっと休憩しない？」

「しない」

リィンが仕方なく梯子を昇ろうとした時、ばたばたと階段を駆け上がる音がした。クレイも気づいて扉を見ている。

「リィン！」

勢いよく扉が開いて、現れたのはエンポリオだった。外出用の外套を羽織ったまま、ずかずかと部屋を横切って来る。

「エンポリオ、どうしたの」

がしりとリィンの両肩を掴んで顔を覗き込んでくる。紺色の瞳が心配そうにリィンを見つめた。

「イグルに襲われたって聞いてね。驚いたよ…」

ほっと息を吐き出す。

「どこか行ってたの？」

「…ロンバートと別の町の病院へね。提携する為さ。うまくいったよ。ラディスは人使いが荒いよ」

むっつりとしながらエンポリオが答え、そこでやっとラディスが椅子を横へずらして姿を現した。

「良くやった。さすがだな。お前の口先も時には役に立つ」

「そうだろ？僕って案外賢いからね。それでさ、ご褒美をくれない？」

「何だ」

エンポリオがリィンを引き寄せて言った。

「リィンをしばらく僕の護衛にして」

「は？」

リィンは意味が分からずにエンポリオを見上げた。何でそんな事する必要があるんだ。ラディスは表情を変えずにぼりぼりと顎を掻きながら答えた。

「良いだろう」

「なっ…」

「やった！じゃ、リィン。僕、馬車で待っているからね。用意しておいで」

エンポリオは満面の笑みを向けて、上機嫌で部屋を去っていった。

「い、嫌だよ僕。物みたいにそんな…」

「ラディス様…」

クレイも困惑している様子だ。

「たまには気分転換も良いだろう。あいつの所の方が、身体もゆっくり休める事が出来る」

「僕は平気だよ！」

「お前は少し休んだ方が良い」

歯牙にもかけない。クレイが口を開こうとした時、部屋の変化に気付いた。

ぐらぐらと本棚の中にある書物が揺れている。はっとしてリィンを

見ると、瞳が紅く揺らいでいた。

「…何だよそれ」

怒りを含んだリィンの声。それに対し、いたって冷静なラディスが言う。

「おいおい、別に永遠に向こうに行けっていうわけじゃないだろう」

「あんたはいつも冷静で、いつも正しい…」

クレイは慌てて本棚を両手で押さえながら言った。

「リィン。少し落ち着いて…」

「あんたは良いよな！強くてさ！いつも自信満々でっ…」

ラディスは無表情のままリィンを見ている。リィンの苛々が募る。

「あんたには、わかんないんだ。あんたみたいに強くなりたいけど、そうなれない人の気持ちなんか！」

「何の話だ」

「知らないよ！馬鹿！」

ラディスの目の前、うずたかく積み上げられた書物が、どっと彼の方へ崩れ落ちていった。

「うおっ」

「ラディス様！」

ラディスは膨大な書物の下敷きになり、リィンは怒って部屋を出て行ってしまった。

階段を駆け降りて、そのまま玄関を飛び出し馬車に乗り込んだ。奥に座っていたエンポリオが驚いている。

「早く、行こう」

リィンが低く呟いて、エンポリオは不思議そうな顔をしながら従者に声をかけて馬車は動き出した。

◇◇◇◆

エンポリオの住居は、ワドレット達研究員が寝泊まりする建物と同じだった。彼はその一室を使っている。簡単に皆に挨拶をして、リィンはエンポリオに連れられるまま部屋にいた。

「ここで僕、何をしたら良いんだ」

「ん？特に何も。僕の傍にいてくれるだけで良いんだよ」

にっこりと笑顔を向けてくる。この笑顔がキツネに似ているんだなと、リィンはぼんやり思った。

「やっぱりちょっと体調が良くないみたいだね。顔色が悪いよ。少し寝た方が良いね」

「うん…」

リィンは俯いて黙り込んだ。リィンの様子にエンポリオが気づいて、その手を取って優しくなでる。白い肌はきめが細かく、肌触りが良い。

「ラディスは、僕の事嫌いになったんだ…」

「どうして？」

「僕の事、面倒になったんだよ」

ぽとりと涙が落ちた。

「ああ、リィン。可哀そうに。ラディスってば、本当にひどい奴だな」

こんなにこじれてしまう原因を作ったのは彼自身なのだが、そう言ってリィンの華奢な肩を包んで抱き締めた。

リィンは弱ってる。

エンポリオは内心ほくそ笑んだ。

それから少し部屋で休み、リィンはこの建物の中を歩いて回った。

二階には扉がいくつかあり、それぞれの部屋になっているようだ。

エンポリオの部屋は一番奥で、他の部屋よりも少しだけ大きい。一階には共有の居室と風呂やトイレ、炊事場がある。ここでは研究員達が交代制で食事を作っているというので、リィンはその食事作りを請け負った。エンポリオの言うとおりに彼の傍にいるだけなんて、リィンには耐えられるはずもない。

「わあ、美味しい。こんな美味しい食事はいつ以来だろう」

エンポリオが感激の声をあげた。横長のテーブルに全員が座って夕食をとっている。研究員達は全部で八人、それぞれ楽な格好に着替えており、こうしてみると皆若い。それでも中にはラディスより年上の人もいるという。

「大げさだよ」

リィンはオーブンで焼いた肉を切り分けて皿に盛りながら答える。ニコルの料理を手伝っているので、簡単なものなら苦もなく作れるようになっていた。

「いえいえ、ほんと、美味しいです」

話しているのはワドレットだ。黒の短髪に銀縁の眼鏡で、牧歌的に穏やかな表情。他の者達も頷いている。イゴーは少し太り気味の青年で、ムノアはひょろりとした女性。目元が神経質そうだ。しかしエンポリオとワドレット以外はあまり声を発しない。少し不思議な光景だった。

「ここの皆は、はにかみ屋が多くてね。気にしなくて良いよ」

エンポリオがグラスに口をつけて微笑む。

全ての料理が行き渡った事を確認して、リィンも席についた。今頃ラディス達も夕食をとっているだろうか…。でもあの様子じゃ、きっとまだ仕事にかかりきりだろう。

「リィンさんて、ラディス先生の護衛をしているんですよね」

ワドレットが聞いてくる。

「うん。あの、僕に敬語なんか使わなくって良いよ」

あはは、と頭を掻いて彼は続ける。

「先生には敵が多いから大変でしょう。何とかならないかといつも思うんですが…」

「自業自得さ」

リィンはあっさりと告げて食事を口に運ぶ。それを見ながらエンポリオがにやりと笑った。

「それより、みんなの方が大変だろ?ラディスが無理な事ばっかり言って、ワドレットなんかいつも怒られてる」

いやあ、といってまた頭を掻く。

「あれは、私がいけないんです。お恥ずかしい」

彼の敬語は口癖のようだ。クレイと似ている。

「この会社にいるのは全員医師の勉強を修了していてね、志願して研究員になっているんだよ。ラディスとレーヌ国が進めている研究の、ルキリア国支部みたいなものさ」

「ラディス先生の発想は面白い」

「そうだ、あのレンドルムとの相関関係は実に興味深い…」

皆が急に饒舌になり話し出した。しかしリィンには全く意味が分からない。ちんぷんかんぷんの内容だった。

「もう…。この人達、いつもこれさ」

「この会社に入って来た人達は、いずれ辞めていきます。残るのも自由ですが。次にはまた新しく医者になった人が入ってくるんです。一種の学校に似ているかもしれませんね」

エンポリオとワドレットがリィンの相手をしてくれている。ここで様々な理論や技術を学び、巣立ってゆくのだという。医師になる者や、薬品の調合を専門に行う調合士になって、レーヌ国に渡る者もいる。

「だから私がしっかりしないといけないんですが」

「ラディスはちょっと厳しすぎるよ」

ワドレットが眉を下げて笑った。

「でも、あれだけ私達の事を見てくれる人もいません。何か失敗した時も、必ず力になってくれます。私達の意見も最大限に尊重してくれるんです」

「そうかなあ」

「ここは彼の信者の集まりだよ、リィン。何を言っても無駄さ」

「…私がもっとしっかりして、ラディス先生を安心させてあげなくては」

そう言ったワドレットの瞳はきらきらと輝いていた。リィンはおや、と思う。彼は意外と打たれ強いのだろうか。

何だか場違いな程、希望に満ち溢れている瞳だった。

０４５：恋のゲーム、再開

「こんなの、着れるわけないだろ…」

思わず呟く。リィンは風呂上がりで、脱衣場で布を身体に巻いたまま立ち尽くしていた。

何の支度もせずラディスの診療所を飛び出してしまったので、着替えはエンポリオが用意してくれた。彼はやっぱり貴族だ。簡単にこんな高そうな服を買ってきてしまった。

それにしても、何でこんなのなんだ。

下着は女性用のもので心許ないほど薄っぺらい生地だ。服は二種類用意されていたが、どちらも着たくないものだった。一着はひらひらとして肩と背中がざっくりと開いている青色のワンピースで、もう一着はブラウスとズボンなのだが、それが子供が履くような半ズボンなのだ。

絶対わざとに違いない…。

しかしどちらかを着ないと外に出られない。リィンのいつもの服はエンポリオが洗濯屋に出してしまった。ラディスが彼の事を変態だと言っていたのを思い出す。本当に、その通りだ。

「ああ、くそっ！」

リィンはむんずと服を掴んだ。

◇◇◇◆

「あ、そっちにしたんだ。ふふ。可愛いね」

扉の前に顔を真っ赤にしたリィンが立っている。すらりとした細く

白い足がのぞいていた。

「こうして見ると、やっぱり男の子に見えるね」

エンポリオは椅子に座って優雅な仕草でカップを口に運ぶ。テーブルには茶器が並んでいた。

リィンは結局、ブラウスと半ズボンを選んだようだ。

無言でずんずんとエンポリオに真っ直ぐに向かってきて、ばん、と両手をテーブルについた。赤茶の綺麗な瞳が彼を睨みつける。

「僕の服は！」

「まだ戻ってこないよ。出したばっかりだもん」

がっくりとうなだれると栗色の髪が柔らかそうに揺れた。エンポリオは満足の笑みを浮かべる。

ブラウスとズボンを履いた上に無理矢理にワンピースを着る事だって出来たのだが、真っ直ぐなリィンにはそんな事は思いつかなかったのだろう。

うん、綺麗な足だ。そっと腕を伸ばして、リィンの太ももをなでる。

「ぬああ！」

リィンが奇妙な叫び声をあげながら全力でエンポリオから遠ざかって、ベッドに飛び上がった。

「ぼ、僕に何かしようとか、考えるなよっ。『力』で吹っ飛ばすぞ！」

「あはは。怖いね」

まだベッドが二つあっただけ良かった。リィンは肩で息をしながらそんな事を考えていた。

◇◇◆◆

真っ暗な部屋の中で、ため息をこぼす。エンポリオはすぐに寝入って、今は隣のベッドで気持よさそうな寝息を立てている。

あの後ベルシェは自分の父の病院へと帰ってゆき、もう診療所へ来る事はなかった。彼女はリィンに嫌がらせをしていたが、それも済んだ事で、リィン自身は特に彼女を嫌う理由はない。いずれ普通に会話が出来る日が来れば良いと思う。

ごろりと横を向いた。ミントハーブではなく、太陽の匂いがするシーツがリィンを包む。

八つ当たりだった。別にラディスが悪い事なんてなかったように思う。ただ、エンポリオがリィンを自分の護衛にしたいなんて無茶な事を言った時に、駄目だと言って欲しかった。それをあっさりラディスが承諾してしまったので、ショックだったのだ。

「はあ…」

どうしてあんな事を言ってしまったのだろう。僕はラディスの護衛なんだから、彼の言うとおりにしたら良いだけだ。僕が何かを意見するのは違う気がする。何を思い上がってるんだか…。

リィンは眠れそうもなかったが、仕方なく目を閉じた。

それから数日間リィンはしょっちゅうエンポリオに色々な所へ連れて行かれた。彼はちっとも仕事をしている風ではなくて、一日の大

半をリィンと過ごす。リィンの半ズボン姿はあの日の夜だけで、それから服が戻ってくるまで、ムノアのズボンを借りて裾を折って着ていた。

「エンポリオ…毎日こんな生活してるの？」

「うん？たまには仕事もするさ」

観劇の帰り、会社へと続く石畳の道を歩く。夕日が赤く、辺りを染めている。

「お金、どうしてるのさ」

「嫌だなリィン。僕は貴族だよ？オールゲイトって言ったら由緒あるルキリア貴族さ。お金だけは腐るほど持ってる」

聞いた事もない名だ。それぱかりか、リィンにはあまり興味がなかった。

「ふうん」

「僕はその子息。一人息子。だけどね、僕は父が嫌いだった。もう死んだけど」

初めて聞く話だ。リィンがエンポリオを見上げる。ふわふわした彼の金の髪は夕日に照らされて、とても綺麗な色をしていた。

「まるで金の亡者さ。土地や金を貸して、利子をとるっていう仕事をしていたんだけどね。弱い者ばかりを狙って、骨までしゃぶり尽くして全てを奪って捨てる。父に追い詰められて、自殺を選んだ人

もいた程さ」

エンポリオは辛そうに眉根を寄せている。彼がこのような真面目な話をするのは初めてだった。

「家庭を顧みる事も一切なくて、愛人を何人も作ってはとっかえひっかえ。母はいつも泣いていた。それで僕に言うんだ。まるで呪いみたいに、僕に何度も言い聞かせたよ。

お父様はそれはそれは立派な人よ、あなたは誇りに思いなさい。オールゲイトの名に恥じないような紳士になりなさいってね。ふん。馬鹿みたいだ。だってその名を背負っている僕の父は、人間的には最低の奴だよ。それだったら、オールゲイトの名に恥じないようにするには、僕もあんな奴にならなきゃならないじゃないか」

「そんな…」

「あんな奴死んで正解だったよ。僕はオールゲイトの名なんか継がない。父がこつこつ貯め込んできた金なんて、全て使い果たしてやるのさ」

「エンポリオ…」

リィンが赤茶の瞳で、彼を見つめている。エンポリオは切なそうな笑顔を向けた。

「僕を嫌うかい？リィン」

リィンの小さな手を取って、その紺色の瞳で見つめ返す。

「そんな事…」

あとひと押し…。エンポリオは内心で全く別の事を考えていた。これは彼の常套手段。この話をしてこの表情をすれば、女性は簡単にオチる。

「子供じゃないんだから、他にやりようあるだろ」

「…は？」

リィンは真剣な表情のまま、続ける。

「そうやってお金を全部使うのは別に良いけど。それで、それが終わったらエンポリオはどうするの？何にも残らないじゃないか。それこそ、その貴族の名しか残らない」

呆けているエンポリオを置いて、至極真っ当な意見を述べるリィン。

「エンポリオ、あんたは本当は、何がしたいの？」

帰ろう、と言ってリィンが彼の手を引いて歩き出した。リィンの温かな体温が繋いだ手から伝わってくる。小さな手。小柄なリィンがエンポリオを導くように前を歩く。

「…リィン、君ってば…」

彼は静かに苦笑した。その表情は今までにはないような、年相応のものだった。

◇◇◆◆

「ああ、良かった。リィンさん、お使いを頼めますか」

会社の手前でワドレットが二人の帰りを待っていた。何だか急いでいるようだ。

「うん。どうしたの」

リィンはすんなりエンポリオの手を解いてしまった。名残惜しい…。

「これをラディス先生の診療所へ届けてもらえませんか？今すぐ見てもらいたいのです。これが本当なら、大発見ですよ」

頬を上気させたワドレットが手に持っているのは、書類の入っている包みだった。

「ええ？これからかい？もう夜になるよ」

と、エンポリオ。

「ですが、すぐに見てもらいたいもので…」

「うん、分かった」

リィンがその包みを手にとると、ワドレットが慌てて声をかける。

「あ！それこっちを下にして持ってくださいね。小瓶にサンプルも入っていますから」

「了解」

「リィン、危ないよ。僕も行く」

「大丈夫。エンポリオより僕のが強いよ」

言いながらその背中がすぐに小さくなっていった。

両手をすり合わせて瞳を輝かせているワドレットを、じろりとエンポリオが睨む。

「全く、ひどい奴だな君は」

「えっ!?」

「これから良いとこだったのに…」

「す、すみません」

訳も分からず謝るワドレットを置いて、エンポリオは部屋へ去っていった。

０４６：亡くすという事

数日しか経っていないのに、とても懐かしく感じる玄関をそっと開いて様子をうかがう。今日は既に診療を終えているようだ。珍しい。いつもは星が輝く頃まで開いているのに、廊下は静かで薄暗い。居室の扉を遠慮がちに開くと、診療が早めに切り上げられたのだと知った。

ひどくやつれた男性が、テーブル席に座っていた。その向かいにラディスが座り、クレイは壁を背にして控えている。ニコルとチェムカは台所にいて、リィンに気づいて声を出さずに手招きをした。

「ついさっき来たとこなのよ。亡くなった娘さんの、ご家族みたいなんだけど…」

ニコルがリィンに耳打ちする。

「あれは…」

ロンバートの病院で暴れていた女性の、主人だ。リィンは少し緊張する。

「どうかあいつがした事を許してやってくれませんか。本当に、どうもすみませんでした」

ゆるゆると頭を垂れ、そのまま小さな声で話しはじめた。

「私達はここからずっと遠くにある村からやってきました。村から四日間、交互にあの子を背負って歩いて来たんです。この帝都には、私達のような貧しい者でも治療を受けられる病院があると聞いてい

ましたので…」

彼はずっと俯いたままで、目の前にいるラディスには視線を向けようとはしない。

「ご主人、食事はちゃんと取れているんですか?」

「え?え、ええ…」

やっと顔を上げて男性がラディスを見た。しかしすぐに視線をはずしてしまう。

ニコルが無言で台所に立った。

「今はどこで寝泊まりを?」

「広場近くの安宿です。…私はあいつの兄です。あいつは、パウラには主人はいないんです。女手一つで娘を育てて来たんです。あの娘は、パウラにとったら自分の命より大事な娘でした…」

最後は消え入るような声で、パウラの兄は手で顔を覆った。骨ばった指から、啜り泣く声が漏れる。

「せ、先生を恨むつもりはありません。分かっているんです、あいつだって本当は…」

「パウラさんは今は?」

「眠っています。泣き疲れたんでしょう。パウラはあれからずっと部屋にこもりきりで、泣き続けているんです。もう私も、どうしたら良いか…。私も村に家族を残して来ているので、いつまでもここ

に居る訳にもいかないし」

静かに話を聞いていたラディスがゆっくりと息を吐き出した。

「…分かりました。どんな理由にせよ、あなた方の娘さんを助けられなかった事は事実です。それは本当に申し訳なく思っています。どうでしょう。パウラさんをしばらく預からせてもらえませんか」

「え？」

「このままでいたら彼女の心はもっと病んでしまう。後を追いかねない。今は医師達に向けられる憎しみでかろうじて保っている状態だ。彼女の心を治療するには時間が必要です」

「し、しかし…。もうお金が…」

「大丈夫です。俺を信じていただけませんか」

ラディスは不安げな表情を浮かべる相手をいたわるように微笑んで、ひとつ頷いた。

パウラの兄は慌てて席から立ち上がり、それから身体を折り曲げて言った。

「あ…ありがとうございます、ありがとうございます！」

そう言いながらその場に泣き崩れた。チェムカがそっと、彼の痩せた肩を抱く。

きっとずっと悩んでいたのだろう。

娘を亡くした妹の悲しみは重く、計り知れない。何とかしてやりたいが、もう金も底をついてしまった。八方ふさがりだ。この町には

知り合いがいるわけではなく、どこに何を言って誰を頼ったら良いのかも分からない。もう村へ帰らなければならないけれど、あの道を引き返すのも容易ではない。それに帰ったところで、弱り切った妹と自分の家族とを養っていける程の、蓄えも稼ぎもない。いっそ二人で首をくくった方が、楽なのかもしれない…。そこまで思いつめていた時、ふと、病院で出会った彼の事を思い出したのだろう。

「先生。そったらパウラさんをあたすの家の近所にしてくれねえだか」

「いや…」

ラディスは立ち上がりながら僅かに言い淀んだ。

「母さんにも事情説明します。何だか、他人事だとは思えねえもの」

「ラディス様、私もそれが良いと思います。チェムカさんの家は家族も多く、人手があっても良いかと」

クレイがチェムカを助ける。

「…そうか」

「す、すみません」

よろりとパウラの兄が立ち上がった。ラディスが手を貸して椅子に座らせる。今日はもう遅いので馬車を呼ぼうと言ったが、彼はそれを固辞して首を横に振り続けた。クレイがついて行く事で話がまとまり、玄関まで送る。

「明日には宿に馬車を用意します。馬の足なら一日走り続けたら村へ着くでしょう」

「あ、あ、ありがとうございます。あなたは、何という崇高なお方なんでしょうか…」

ラディスの顔に陰りが差した。一瞬の事で、その表情には誰も気づかない。

「ああ、間にあって良かった。これ少ないですけど、二人で食べてちょうだいな」

ニコルが大きめの身体を揺らしてやって来て、紙包みを渡す。

「残り物で申し訳ないけど、お芋をふかしたものよ」

パウラの兄は何度も頭を下げながら、クレイと石畳の道を去っていった。

◇◇◇◆

「あたすも、北の村からこの町に家族で来たんだわ…」

病気の父さんの為に。噂で聞いた病院を目指して。

リィンとチェムカは彼女の家へ向かっていた。あの後リィンはラディスにワドレットからの包みを渡して、ニコルとチェムカを送る為にまたすぐ診療所を後にした。何だか気まずくてラディスの顔が見れなかったし、彼も何も言わなかった。

先にニコルを家まで送り、そこからチェムカの家へと向かう。

「とっても良くしてもらったんだけども、父さんを苦しめてる病気は難しいものだったんだべ」

このベイルナグルに来て半年後、チェムカの父は旅立った。たくさんの愛する家族を残して。

「それからも、先生にはお世話になりっぱなしだ。あたすの働き口も用意してくれて、今でも時々様子を見に家に来てくれるだ」

リィン、早く帰っておいでな。そう言ってチェムカは家に帰っていった。見上げると夜空には無数の星が瞬いている。

あの女性(ひと)は、人殺しと叫んでラディスを殴った。僕はあの時、どうしてラディスが殴られなくちゃいけないんだと思った。でも…。きっと、そうしなければ心を保っていられなかったんだ。あの女性(ひと)の心は、殴られる痛みよりもずっと辛くて深い痛みを感じていた。

「ラディス。あんたはそこまで、分かってたの…？」

人はいずれ死ぬ。必ず一度はそうなる。それが、とても苦しくて悲しい事なんだ。

生きていく残された者達は、それぞれにその悲しみを乗り越えていかねばならない。

◇◇◆◆

翌日もリィンは研究員達やエンポリオが出かけた後に朝食の後片付けや掃除をしていた。ちょうど玄関先を掃き掃除していた時、ふと顔を上げると隣の会社の玄関に見知った人物がいるのが見えた。

「ユマ！」

黒の上着に藍色のスカート、真っ白でつばの大きな帽子をかぶったユマが、こちらを振り返って笑顔になった。ブラウンの巻き髪がふわりと肩で揺れる。

「まあリィン！珍しい所で会ったわね」

可愛らしい笑窪を見せて手を振りながらやってくる。

「ユマは？お使い？」

少し背の高いユマを見上げてリィンも笑顔を向けた。

「まあそんなところね。リィンもお使いか何か？」

「あ、ああ。うん」

正直なリィンは途端に言い淀んでしまった。勘の良いユマは、それだけで何かあったのだと分かった。

「どうしたの？お使いじゃあなさそうね」

「いや、その…」

「このユマさんにお話しなさい。さ、座って」

ユマはそのまま玄関先の階段にちょこんと座ってしまった。

「ユマ。綺麗な服が汚れちゃうよ」

「良いのよ。私はこういうのが好きなの。父にははしたないって叱られるけどね」

にっこりとユマが笑ってリィンを見上げた。やっぱり、ユマって良いな。リィンはそう思いながら隣に座る。

「…ふうん。なるほどねえ。ラディスがそんな風に言ったの」

「うん。…きっと、僕が面倒になったんだよ」

「そうかしら」

「そうだよ」

しゅんとしたリィンを横目で見て、ユマは、よし！と一声かけて立ち上がった。

「こういう時はね、リィン。美味しいお菓子を食べてお茶を飲みながら、悪口を言うに限るわ！」

「悪口？」

「そう。ラディスのね！ここの事はエンポリオに任せて、私の家に来ない？昨日はケーキを焼いたの。ちょうど良いからリィンに毒見係になってもらうわ」

リィンは自然と笑顔になる。会社にいるエンポリオに一言断って、二人はユマの家へと出掛けていった。

０４７：涙と星空

「昨日リィンがラディスに持って行ってくれたサンプルね、やっぱりはずれだったって。大発見にはならなかったみたいよ」

町の広場近くの石畳の道を歩く。左右には商店が並び、この先がユマの家のある高級住宅地区だ。昼前の今の時間帯は行商の馬車や行き来する人々も多いので、リィンはいつものマントでフードをかぶっていた。

「そうなの」

リィンはワドレットの眼鏡顔ときらきら輝く瞳を思い出した。

「ワドレットも皆も残念がっていたわ」

その時、背後の方から何やら騒がしい物音が聞こえた。人の悲鳴と、がたがたと車輪が回る音。リィンとユマは同時に振り返って遠くを見つめた。

「どいたどいたー！さっさとどかないと引いちまうぞお！」

荷車を手で引きながら、ものすごいスピードで走ってくる若者が見えた。坊主頭に前掛け。どこかの店の従業員らしきその人物は、歩く人々を無理矢理に脇へどけて、我が物顔で道をゆく。

「ユマ。こっち」

リィンがユマの手を引いて彼女を壁際に避難させ、荷車がガタガタ

と音を立ててリィンの背後を通り過ぎようとした。その時、車輪が大きな石にぶつかり、スピードのついていた荷車は簡単にひっくり返ってしまった。荷を止めていた紐がほどけて、辺りに様々な種類の野菜がごろごろと転がってゆく。引いていた若い男も一緒になって転がった。

「いってぇ！ちくしょう！」

悪態をつきながら男が立ち上がった。周りに人だかりができ、人々は自業自得だと言わんばかりに迷惑そうな顔をしてその男を見つめている。男は何を思ったか、リィンに目をつけ怒鳴り散らした。

「てめえのせいだぞ！早く荷を片づけろっ」

言いがかりである。ユマが憤慨して何かを言い返そうとするのを止めて、リィンはその場を離れようとした。

「待てよ！てめえイリアス族だろ。俺の荷車を転がしたのはてめえだろう」

しん、と辺りが静まり返る。男がずかずかと歩み寄って来て、また口を開こうとした時だった。

「ちょっと待ちなさいよ。私達は何もしていないわ。言いがかりはよしてちょうだい」

男とリィンの間に立ちふさがるようにして、ユマが両手を腰に当てた格好で言い放った。

「いいや。そいつが『力』を使ったんだ！イリアス族だからな！」

「まあ。どこにそんな証拠があるっていうの？」

「ユマ。良いから、もう行こう」

リィンは冷や汗をかきながらユマの腕を引く。しかしユマは頑として動こうとしない。

「駄目よ。だってこの人が言っているのは嘘だもの。第一こんな人通りの多い道で、あんなスピードを出して荷車を引く方が悪いんじゃない」

「何だと！」

男が怒鳴ってユマに近づく。ユマは動じなかったが、リィンが彼女を庇うように前へ出た。

「てめえ！早く荷を積み直せよ！奴隷のくせに！」

リィンの胸倉を乱暴に掴み上げて、男が怒鳴った。あまりの横暴さにユマが怒って叫ぶ。

「何するのよ！」

そして彼女が男の腕を掴もうとした時、異変が起こった。

ユマの動きがぴたりと止まる。異変を感じてリィンは瞬間に男を突き飛ばし、ユマの腕を掴み顔を覗き込んだ。身体がゆっくりと前のめりになり、ブラウンの巻き髪が前へ垂れる。その額からじわりと汗が流れ、苦痛に顔が歪んでいた。

「…っつ」

「ユマ！」

ユマの全身から力が抜け、帽子が地面に落ちる。リィンは小さな身体でユマを抱きとめた。

「ユマ！」

ざわりと人垣が揺れる。遠くで若い男が顔を青くして棒立ちになっていた。

「ユマ！だ、誰か！」

◇◇◇◆

「リィン…。ご、ごめんなさいね。びっくり、させちゃって…」

「ユマ。良いんだ。もう喋らないで」

その後町の人達に手を貸してもらい、ユマを自宅のベッドへと運んだ。出迎えた婦人の従者は血相を変えて、リィンに留守を任せてラディスを呼びに出て行った。ユマはベッドの上で、苦しそうに喘ぎながら必死に話しかけてくる。熱が出ているようで顔が赤く、息も熱い。リィンはそのすぐ傍でユマの手を握り締めた。

「こんなの、いつもの事なの…。平気よ、大丈夫」

自分が苦しいのにも関わらず、ユマは心配をかけまいとリィンに笑顔を向けた。

「ユマ…」

「ごめんね、リィン。あなたは悪く、ないのよ…」

リィンは泣きそうになるのをこらえてユマを見つめた。
泣いたらいけない。だって、ユマの方が苦しいし、辛い。

「ケーキ、今度一緒に、食べましょ…」

「うん。今度一緒に食べよう。一緒に作ろう」

ユマは苦しそうに眉根を寄せて瞳を閉じた。

「リィン…ここに、いてね…」

「うん。ユマが起きるまでここにいるよ」

それから苦しそうな表情のままユマは眠りはじめた。先程飲んだ薬が効いて来たのだろう。心臓の痛みを和らげる鎮痛剤のようなものだと言っていた。

「ユマ…。ごめんね…」

リィンはユマの熱い手を握り締めたまま呟いた。

あの男は、きっと以前からリィンの事を見知っていたのだろう。だからこそあの場に居たリィンに目をつけて絡んで来たのだ。フードをかぶっていたのに、イリアス族だと分かっていた。
自分のせいだ。

固く目を閉じる。

ユマはこんなに優しい。そして強い。熱が出て苦しい思いをしているのに、僕の事をずっと気遣っていた。僕が自分を責めないように、笑顔を向けてくれた。

こんな僕なんかの為に。

「ユマ…」

リィンの頬に涙が伝う。

ユマはラディスの大事なひとなのに、また傷つけてしまった。

僕は何も出来ない。何も護れていない。

「君に、僕の命をあげたい」

それが出来たら、どんなに良いだろう。

階段を上がる足音が聞こえてきて、リィンは両手で涙を拭って深呼吸をした。部屋の扉が開き、ラディスと従者がやってくる。

「リィン。話は聞いた。あの後町の住人達がお前は悪くないと証言して、あの男の方が引っ張られていったようだ」

リィンはこっくりと頷きながら場所をラディスに譲った。

「僕は大丈夫だ。それよりユマを…」

一瞬ラディスはリィンを見つめ、ああ、と言ってユマの容体を診察し始めた。ラディスは真剣な表情で心音機を取り出し、胸に当て、脈を測る。それから緊張を解いて息を吐き出し、ユマの頬に触れた。

「一時的なものだから大丈夫だ。心臓の方も安定している。この熱が下がればじき良くなる」

「ああ…。良かった」

ほっと胸をなでおろす婦人の従者。彼女は眼鏡を外して目頭を押さえた。少し泣いていたようだ。ラディスは鞄の中から薬を取り出して、従者に説明をしながらそれを手渡す。

「お前は少し騒ぎすぎだな」

「だって、坊っちゃん。私はお医者様ではありませんもの。そりゃあ心配でたまりませんわ」

ラディスは診療中に出て来たのですぐに帰ると言った。

「お前は？」

リィンは首を横に振り、

「僕はユマが起きるまで、看病したい」

と言って、俯いたままベッドの脇の椅子に座った。あまり顔を見られたくなかった。

それからラディスが去り、従者はリィンに礼を言ってこまごまとした用事を片づけると階下に降りて行った。リィンは冷水で冷やした

布を何度となく取り替えて、じっと傍についていた。しばらくしてジェイクが帰宅し、挨拶を交わしていたところでユマが目を覚ました。だいぶ顔色も戻り、リィンに気付いて笑顔を向けた。夕食を一緒にと言われたが、エンポリオも心配しているだろうからと頭を下げて家を出た時には、もう空には星が輝いていた。

誰もリィンを責めたりしない。

リィンは星空を見上げて、真っ暗な石畳の道を歩いて行った。

◇◆◆◆

「ラディス様。ユマさんは大丈夫でしょうか」

診察室の後片付けをしながら、クレイがラディスに話しかけた。

「ああ。いつもの軽い発作だ。心配ない」

昼頃、ジェイクのところの従者がラディスを呼びに来て、一時は騒然となった。結局は何事もなくてほっとしたクレイだったが、ラディスから事の顛末を聞き、また心配になってしまった。それに昼過ぎから診察を受けに来た患者達が、どこで聞いたのか口々にその事件の事を言ってはリィンを心配するのだった。

＊

「あ、あのよ先生。あいつどうした」

腕を骨折して通院していた土建業の男性が、おずおずとラディスに声をかけた。

「ん？」

「ほら、あいつだよ。イリアス族の小僧」

「リィンの事ですか」

クレイが助け舟を出す。男性はわざとらしく膝を打って、ああ、そうそう、そういう名前だったなと言った。

「最近見ねえなと思って、さ」

ラディスは視線を手元に向けたままさらりと告げた。

「今は少し使いに出している」

男性は一瞬じっとして、また照れたように大声を上げる。

「ああ！なあんだ！そうだよな。いや、別にどうっていうんじゃなんだ。…その、俺、前にあいつに気味悪いとか何とか、色々言っちまったからよ。その、出て行ったのかと思ってよ」

ぽかんとするラディスとクレイをよそに、男性はそうかそうかと、一人で頷きつつ部屋を出て行った。皆似たような感じで、リィンを心配して聞いてくる。最後に現れたロムじいさんに至っては、何故リィンが居ないのだと怒鳴って帰っていった。いつの間にかすっかり仲良くなっていたようである。

＊

「ラディス様、聞いてもよろしいですか？」

クレイは物思いから戻ってラディスに声をかけた。彼は机に向かって記録をつけている。

「何だ」

「どうしてリィンをエンポリオさんの所へ預けたんです？」

確かにリィンの体調は戻っていなかったが、何の相談もなしに決めてしまった事で、ニコルも怒っていた。

聡明な彼はニコルを怒らすような事は決してしない為、今回はクレイにもその真意がつかめずにいた。ニコルが怒ると食事が貧相なものに変わってしまう。その食事をとる毎日がもう十日以上は続いているだろうか。

「何か理由があるのなら、ニコルさんにはちゃんと説明をした方が…」

「理由なんてない」

「え？それでは…」

「お前も変わったな、クレイよ。あいつがここに来た時は、ここに置く事を反対していただろう」

「それはそうですが…。リィンが不憫でなりません。私はラディス様が、リィンの事を憎からず思っておられるのかと考えていました。今さら追い出すのですか」

クレイが珍しく詰問口調になっている。ラディスは苦笑を洩らした。

「どうやら俺が聖人か仙人だとでも思っているようだな。まいったもんだ…」

「は？」

意味が分からずクレイはラディスを見つめる。彼は天井をぼんやりと見上げていた。すっきりとした顎のラインに繊細さが滲んでいる。

「憎からずなんてもんじゃないさ。…あやうく手を出しそうになる」

クレイは絶句して、それから一瞬で理解した。自らの思いの至らなさを恥じた。

「も、申し訳ありません。私は何て無神経な事を…」

リィンはイリアス族だ。それも彼の大恩人である人の娘だという。そんな大事な娘を、護衛という形で雇っているうえに、彼の歩む茨の道をともに歩かせようなどと考えるはずもない。

「良いさ。俺の芝居は完璧だ」

「ですが、しかし、それでは…」

リィンにとっても彼にとっても、辛い事にしかならないのではないか。

クレイは目を伏せた。

何という事だ…。ラディス様は身を引くおつもりだろう。しかしリィンは、そのラディス様のお心を知らずに傷ついているに違いない。リィンはどうするだろうか。

そのうちラディス様の事を、諦めるのではないだろうか…。

０４８：事件

その日もいつもと何も変わらない一日だった。リィンは朝早く起きて朝食を作り皆にふるまう。後片付けをしている頃にエンポリオが大あくびをしながら起き出して来て、のろのろと支度をする彼をせかして会社へと追い出し、掃除をして昼食の準備に取り掛かる。ラディスの診療所に居た時と基本的には変わらない。もう体調はすっかり良くなっていた。だけど、まだ自分はここにいる。

もう僕は、あそこに帰る事はないのかも知れない。

あまり考えないようにしているのに、つい頭をもたげてくる思い。

「リィン、町へ行こうよ」

エンポリオがにこにこしながら戻ってきた。もうそろそろ昼時だ。

「こっちの事は誰かに頼んで、お昼を食べに行こう」

リィンの腕をとってずんずん歩き出す。彼は強引である。その柔らかな雰囲気のおかげであまり気にならないが。

「僕は良いよ」

「とっても美味しいお店を見つけたんだ。リィンと行きたい」

反論しようとリィンが顔を上げた時だった。エンポリオの顔がものすごく近くにあると思った瞬間に、唇が重なった。

「ぎゃっ！」

「ふふ。隙あり」

エンポリオは片目をつぶって見せ、リィンは顔を真っ赤にしてごしごしと腕で唇を拭う。

「リィンてば。そんな事されたら僕、傷つくよ」

「もう。やめろって言ってるだろっ」

こんな調子でリィンは彼に何度もキスされていた。だんだんと彼のペースに慣らされつつある。

「さ、行こう」

いつもと変わらない一日。そうだと信じて疑わなかった。

「ああ、美味しかった！」

「うん」

エンポリオの言った事は本当だった。その店はベイルナグルの西のはずれに一戸建てで店を構えていた。コース料理を出すところで、値段が高いのじゃないかとリィンは内心ひやひやしながら料理を味わった。どれも繊細な味付けでメインの魚料理も良かったし、デザートもフルーツがふんだんに盛られ、上にかかっていた冷たくて甘いクリームがとても美味しかった。

「また来ようね、リィン」

「今度はワドレット達も連れてこよう。その方が、お金使えるだろ？」

「ふふ。言うねえ」

突然、どくん、と心臓が鳴った。肌が異変を感じ取る。びしりと鋭い殺気を感じて、瞬時に身構えた。剣を持って出なかった事を今更ながらに後悔する。

「リィン？」

「誰かが…」

リィンが何かを言う前に、奇妙な格好をした男達が飛び出してきてエンポリオを殴りつけた。彼が倒れて、男達がそれに追い打ちをかける。

「エンポリオ！」

瞳が瞬時に深紅に燃え上がり、彼に覆いかぶさっていた二人の男が吹っ飛んだ。

「いてて…」

エンポリオが頭を押さえながら起き上がる。リィンは目の前にばかり気をとられていた。背後に何かの気配を感じたと思ったが、一瞬動きが遅れた。がん、と後頭部に鈍い痛みが走り、目に火花が散った。

油断した。こんな昼日中に襲われるとは思っていなかった。

ぐらりと視界が歪んで気持ちが悪くなり、その後思考は暗闇に閉ざされた。

◇◇◇◆

昼下がりの診療所では、普段と変わらない時間が流れる。ラディスは診察室の奥の部屋にこもっており、クレイは応接室で紙束を睨みながら計算をしていた。ふと、クレイは顔を上げる。何だろう。がたがた、と激しい物音が玄関から聞こえた。緊張して紙束を手にしたまま席を立つ。廊下へ続く扉を開くと、先にラディスが廊下へ出ているのが見えた。

「エンポリオだ」

彼は低く呟いて走り出す。玄関口に目をやると、確かにエンポリオが壁に手をついてこちらを見上げていた。肩で息をしている。尋常ではない空気を察して、クレイも慌てて部屋から飛び出した。

「す、すまない。リィンが連れていかれてしまった」

長椅子にエンポリオを座らせて、その場で事情を聞く。彼もしたたか殴られたようで、金の髪は乱れているし口の端が切れて血が滲んでいた。

「相手は」

「わ…分からない。でも最初から僕じゃなくて、リィンを狙ってたみたいだ。僕はわざと逃がされた。この住所にリィンはいるって、ラディスが一人で来いと言っていた…」

左手に握られていた紙きれを差し出す。ラディスがそれを見つめて言った。

「これは最近力をつけ始めているチンピラの溜まり場があるところだ。阿呆すぎてシーカーも手を焼いている連中だ」

エンポリオはクレイの持って来たグラスを傾け、ごくごくと水を飲み干した。

「た、大変だ。軍に知らせよう」

「駄目だ。見張りがいる」

「え…」

「この建物の裏に二人。饐えた臭いをさせていやがる。通報したら、奴らの一人が仲間の元へ走る」

「じゃあどうしたらっ」

ラディスが低く呟いた。

「この俺に、喧嘩を売るとは良い度胸だ」

ぞわりと背筋に寒気が走る。クレイとエンポリオが、じっと息を殺した。身体の芯から震えあがるような、恐ろしい殺気で身動きがとれない。ラディスの顔さえ見る事が出来ずに、クレイの背中に汗が伝う。この感覚は随分と久しぶりだった。

「阿呆共が。話に乗ってやろうじゃないか。俺が行って一時間後に

軍とウィリアムに連絡をしろ」

そう言い置いて、彼は剣も持たずに行ってしまった。

「だ、大丈夫かな…」

エンポリオがぼそりと呟く。

「相手がさ」

クレイは神妙な表情でこくりと頷いた。

◇◇◆◆

後頭部に鈍い痛みが走り、うっすらと目を開いた。左の頬がひんやりと冷たい。視界は薄暗く、頼りない灯りが点々と灯っている。手前に男が四人。ずっと先に、三人。靴音が響いており、どうやらここは倉庫か何かで、そこに左を下にして横たわっているようだ。どうも身体の感覚がおかしいし思考もぼんやりとしか働かない。何か薬を使われたのかも知れない。

「お。起きたぜ」

靴音が近づき、リィンのすぐ傍で男がしゃがみ込んだ。

「うっわあ。本当に紅い目をしていやがる」

「おい、そんなに近づいて大丈夫か」

「平気だろ。薬が効いてる」

やっぱり。意思が定まらない。『力』を使うのは、今のままでは困難だ。どうする…。

「お前は餌だ。あの男をおびき出す為のな」

下品な笑い声を立てて、奇妙な格好をした男がリィンの胸倉を掴んだ。過剰なアクセサリーをごてごてと身につけている。ここにいる全員が似たような格好をしていた。嫌な臭いをさせて、無精ひげの伸びた顔を近づけてくる。

「それまでは、何もしないでおいてやるぜ」

「何だってシーカーはあんな男に執着していやがるんだ?」

別の男が言った。

シーカー?あんな男…?まさか、ラディスの事か。

「ふん。知るか。とにかくあいつを潰せば、シーカーも俺達を認めるはずだ!ほえ面かかせてやる」

リィンの背後にも一人いるようだ。ここから見えるだけでも敵は九人。

「…ラディスは、来ない」

声を振り絞って呟いた。

「ああ?」

「来る訳ないだろ…」

もう僕はラディスの護衛じゃない。

「そいつはどうだか。…お前良く見ると良い顔してんじゃねえか。けけ、どうやってあの男に取り入ったんだ？夜な夜なご奉仕ってわけか。良いねえ。少年、俺にもしてくれよ」

「…やっぱり、下品な奴は考える事も粗末で下品だ」

「何だと！」

無精ひげの男は立ち上がって、リィンの腹を蹴りつけた。抉られるような痛みに身体を丸めて耐える。

そうだ、僕を殴れ。

この痛みのおかげで、だんだんと意識が覚醒してゆく。

あともう少しだ…。

「来ます！奴です！」

「ほら来た」

倉庫内が俄かに慌ただしくなる。リィンは背中から引っ張られ、乱暴に椅子に座らされた。ががが、と大きな音がして遠くに見える鉄の扉が開いた。入ってきたその人物を見て、リィンは驚く。

何で来たんだよ…ラディス。

脇に男三人がついて、念入りに身体をチェックされてから、どんと

肩をつかれてラディスがこちらに歩いてくる。しわの寄ったブラウスを肘まで捲り、黒のズボンに編み上げ靴。久々に見る彼はいつもの格好で、いつものように飄々としていた。

「へえ、お前がラディス？随分と色男じゃねえか」

「お前がここの頭か」

「そうだ。ハッザムだ。自分を倒す男の名くらい、知っておきたいだろ？」

ラディスと男の周りを、十一人の男達が囲む。十二対一。いくら彼でも敵が多すぎる。

「お前達はこれで全員か？随分と少ないな」

「驚いたか？少数精鋭って奴さ。このチームで俺達は天下をとる」

くくく。ラディスが笑った。こんな絶体絶命の窮地にいても、彼は普段と何ら変わらない。

「すまん。あまりにも馬鹿らしくて笑っちまった」

「な、何？」

男の声音が変化した。

「そう近づくな。臭くてかなわん」

辺りに鈍い音が反響した。男がラディスを殴りつけ、ラディスがぐ

らりと一歩よろける。

「ラディス」

リィンは何とか身体を動かそうとする。腕がぴくりと動いた。あと、もう少しなのに…。

どうするつもりだよ、相手をそんなに挑発して。

「下手な口利くんじゃねえ！楽にはやらねえぜ、なぶり倒してやる」

「面白い。出来るもんならやってみろ」

「ちっ。かかれ！」

男達がぞろりと剣を引き抜いて、丸腰のラディスに一斉に襲いかかった。

「ラディス！」

身体を無理に動かそうとして、椅子から落ちて地面に転がった。腕をついて身体を起こす。薬が切れてきたようだ。目を細めて前方を睨む。そこで、信じられない光景を目の当たりにした。

すでに三人の男が倒れており、ゆらりと長身のラディスが立ち上がった。思わず叫び出したくなる程の、恐ろしい殺気。極悪に冷えた青の瞳。怒鳴り声を上げながら三人の男達が同時に斬りかかった。切っ先を避けて相手の腕を鷲掴み、そのまま引き寄せる。そこへ敵の剣が振り下ろされ、ラディスに掴まれていた男が叫び声を上げて倒れた。味方同士で斬り合ってしまい僅かに動揺した瞬間を逃さずに、ラディスは素早く二人に突きを食らわせて倒す。床に転がって

いた剣ではなく、角材を取り上げてラディスは笑った。
ぞくりと背筋が凍りつくような、微笑。

「弱い」

残った男達はもうそうするしかないといった状態でラディスに斬りかかった。強さのレベルが違うとは、こういう事を言うのだ。北の町を仕切る夜の帝王、シーカーが欲しているのは、このラディスだ。

まるで鬼そのものだ。

「な、んだ！こいつはっ…」

ばたばたと倒れてゆく仲間達。あっという間に頭の男一人だけになってしまった。男は慌ててリィンを振り返り、走り出す。リィンは紅い瞳で男を睨みつけた。

「へっ」

男は奇妙な声を残して後方へ吹っ飛んだ。壁に打ちつけられ、その場にずるりと崩れ落ちる。
不穏な集団が僅かな時間で全滅した。

０４９：揺れる想いの先

ラディスが肩で息をしながらリィンの元へやって来て、抱きかかえるようにリィンを立たせた。

「何で、来たんだ。これくらい僕一人で片づけられた！」

リィンは心とは反対の事を口にした。本当は涙が出る程嬉しかった。すぐ傍にラディスがいて、自分を助けに来てくれた。そう思っただけで、心が震えた。

「こんなにぼろぼろのくせに、良く言う」

「は、離せ！」

乱暴にラディスの手を払って、よろめきながら一人で立った。久々に嗅いだ彼の匂い。心から安心するミントハーブの香り。

「あ、あんたは大変だな。助けたくもないのに、こうやって来なきゃいけない…」

「…何だと？」

ラディスの端正な眉が僅かに歪んだ。

リィンはあれからずっと考えていた。ベルシェに言われた言葉が、刺さったままのトゲのように痛んだ。

イリアス族だからって、ラディス先生に恩を着せているんでしょう？

あの時はそんな事はしていないと思っていた。だけど、本当にそうではないと言い切れるだろうか…。

僕はユマにもラディスにも、迷惑ばかりかけてる。何も返せていないのに、傍にいる資格なんて、ない。

「僕がイリアス族だから。…僕が、ティルガの子だから、嫌でも面倒見なくちゃいけないもんな！」

ラディスは目を見開いて、凍りついたようにリィンを凝視している。

「それに僕だって迷惑してるんだ！こうやってあんたのごたごたに巻き込まれて！」

リィンは必死になって大声を張り上げた。肩で喘ぐように息をする。ラディスは優しい。そんなのもう分かっている事だ。こういう事になれば、きっとリィンを見捨てるなんて、出来るわけがない。それくらい分かる。

だったら、嫌われれば良い。ラディスに嫌われれば良い。こんな奴知るかと思わせれば良い。

恩人の子だからって、責任をとらなくて良いんだ。

「もうたくさんなんだよ！あ、あんたの顔なんかもう見たくない！あんたなんか、き、嫌いだっ！もう僕を放っておいてくれ！！」

素早くラディスの手が伸びてリィンの腕を掴み、そのまま壁に打ちつけられた。

「って…」

リィンの細い腕を掴んでいる彼の手に、力がこもる。リィンは痛みに目を閉じた。

怒らせた。せっかく助けに来てくれたのに、あんな事を言ったのだから当たり前だ。

苦しい…。

自分で仕向けた事なのに、心がばらばらに千切れてしまいそうな程苦しかった。泣きそうになる。

泣いちゃだめだ…。

「まったく…お前は…」

低く、小さくて吐息とともにこぼれ出した言葉。リィンがおそるおそる目を開くと、すぐ目の前にラディスの美しい顔があった。彼はリィンの腕を掴んでいた手を解いて、両手を壁について俯いている。長いまつげが、かすかに震えていた。

「下手くそな芝居だ」

「…え」

ラディスが真っ直ぐにリィンを睨みつけた。息が止まる。ゆっくりと彼が近づく。

その時、ががが、と鉄の扉が開いて大勢の人間が押し寄せてきた。

「リィン！無事かい！？」

「エンポリオ…」

軍の保安部隊とエンポリオ、それにシーカーの手下のウィリアムまでいる。

「ここからならロンバートの病院が近い。行って手当をしてもらえ」

ラディスが背を向けて去っていく。リィンは呆然とその背中を見つめる。

「ラディス…」

「うっわ。これ、全部あんたがやったの？もう全滅じゃん」

ウィリアムが倒れている男達を見下ろしながら言った。

「正当防衛だ。シーカーに言っておけよ、これは貸しだ」

ラディスは大股で歩き、すぐに姿が見えなくなった。エンポリオが駆け寄ってきてリィンを抱き締める。

「ああ、こんなにされて！怖かっただろう？もう大丈夫だよ」

「い、いてて。エンポリオ、痛いよ…」

◇◇◇◆

ロンバートの病院で手当てを受けて部屋に戻った。エンポリオが心配していて今日はもう部屋にいろと言う。リィンは素直にそれに従

った。もっと強くならなければ、と自戒を込めて部屋で反省する。
偉そうな事を言っていても、結局今回もラディスに助けてもらった。
それに…。
つい先程ロンバートの病院で、聞いてしまったことを思い出す。若い医師達が廊下で声をひそめて話していた。

帝都の有識者達が集まる会議で、ラディスの出生や過去の事で批判を受けているのは知っていた。しかし本当は、リィンの事でも非難されていたのだ。
イリアス族は元々は奴隷だった。それほど低い身分の者を、雇うのはいかがなものか。たしかに解放宣言が出されて久しいが、帝国政府はいまだに警戒令を解いていない。イリアス族が危険な種族であるのは変わりはないのだ。それを神聖な医師という職業に従事する者が雇い、多くの患者が訪れる場所で働かせているのは、配慮が足りない。狂気の沙汰だ。

若い医師達は、先生は何も恐れないのだろうか、と囁き合っていた。

リィンはぼんやりと窓の外を眺める。下の通りを小さな子供達が駆けてゆく。

どうしてラディスはあんなに強くて、揺るがずにいられるのだろう。

会議のあった夜、ラディスは僕に、自分らしくいれば良いのだと言ってくれた…。

心が震える。
このままここにいた方が良い。その方が良いに決まってる。僕がいなくたって、ラディスは十分強いし、味方だっている。イリアス族の僕がいたら、きっと迷惑がかかる。

僕は、弱い。とても…。

リィンがラディスの護衛になると言った時に笑われた事を思い出す。
未熟だからと断られた。

玄関の呼び鈴が鳴った。
リィンは慌てて瞳に溜まった涙を拭い、玄関へ向かう。扉を開くと
ベルシェがそこに立っていた。

「あらあなた、まだここにいるの!?」

ベルシェは頼まれていたと言って、書類の束を手渡した。
これワドレットに渡してちょうだい。

「全く、何をのんびりしているのよ。早く診療所に戻りなさい!あ
なたはラディス先生の護衛でしょ」

彼女は腕組みをしてリィンを睨みつける。僕は、やっぱり怒られて
る…。

「…でも、僕はここに居た方が良いんだ」

「それは何の冗談?私に反抗していたあなたはどこいっちゃったわ
け?」

リィンは歯切れが悪く、口の中でもごもごと言い訳を言う。ベルシ
ェはわざとらしく大きなため息をついて続けた。

「あのねえ、自分の事ばっかり考えてんじゃないわよ」

「べ、別にそんなつもりは」

「先生はね、あのあと二つも手術をこなしたのよ。それがどれだけ大変な事か分かってるの？」

「そりゃ、大変だろうけど…」

意味が掴めず、困り果ててベルシェを見る。彼女の顔は口調とは裏腹に怒ってなどいなかった。

「知っているでしょう。先生の嗅覚は人より優れているのよ。本当の専門は薬品の調合なのだけど、先生より腕の良い医者がいないから、外科の手術もしているの」

「…あ」

リィンは急に胸騒ぎを覚えた。

ラディスはいつも相手の事を優先させる。愚痴も泣き事も、一切口にしない。でも、何も感じていないわけじゃないと言った。彼だって疲れる。そういう時は決まってリィンに子守唄を歌ってくれと言うのだった。幼い時に聞いた、優しい旋律。

リィンの胸中に様々な事が思い浮かんでくる。急にラディスの事が心配になった。

僕があんなにひどい事を言ったのに、彼は怒りもせず全てを見抜いていた。

でも僕は、ラディスの事を何か分かっていたのだろうか…？

そう言えば少し様子がおかしかった気がする。彼のまつげが震えていたのを思い出した。

「きっと疲れているはずよ。あなた、心配じゃないの？恩知らずな子ね」

ざわざわと胸が騒ぐ。どうしよう。すぐにでもラディスの所へ行きたい。心配で仕方ない。でも…。

「リィン！」

ベルシェが叱咤するようにリィンの名を叫ぶ。

ラディス。僕は…。

「僕、ちょっと様子を見てくる！ベルシェ、ありがとう！」

リィンはそのまま夕闇の迫る石畳の上を駆けていった。その後ろ姿を眺め、ベルシェはゆっくりと息を吐き出す。

「ベルシェ、君まで僕の敵なの？」

隣の建物からエンポリオがにこにこと笑いながら歩いてくる。

「あなたもいい加減、真剣に生きたらどう？」

ベルシェは鋭く彼を睨んで言った。

「そろそろ名を継ぎなさい。良い年して、自分の母親を泣かせるんじゃないわよ」

「…嫌だな。君ってはっきりすぎる位、ものを言う」

「言われる内が華よ」

エンポリオがうーん、と唸って、それもそうだねと笑った。

◇◇◇◆

「クレイ、ラディスは！」

ランプの灯が入った診療所にたどり着いて、居室に駆け込むとクレイが驚いた顔をリィンに向けた。

「ああ、リィン。もう大丈夫なのですか？」

「うん、平気！」

「ラディス様でしたら、まだ戻られておりません。北地区へ行かれましたよ」

「分かった！」

すぐにリィンは踵を返して走ってゆく。クレイが呆然とそれを見送った。

何だか嫌な予感がする。

リィンは町へと駆けながら、ざわざわとこみ上げる胸騒ぎに緊張していた。

ベルシェの言うとおりだ。僕は自分の事しか考えていなかった。

あれほど律儀な彼が、人殺しと罵られて平気なはずがない。
茶に混ざった微量な毒の臭いを嗅ぎ分けられる程の、鋭い嗅覚をもった彼が、いくつも手術をこなして平気なわけがない。
ずっと、休まずに突き進んでゆく。向かい風をその身一つで受け止めながら、後ろに守るべき人々を抱えて走り続ける。自分が倒れてしまえば、それで全てが終わってしまう事を知っている。彼が負けてしまえば、全てが駄目になる。だからこそラディスは強い。だからこそ、皆が信頼し、愛している。

「ラディス…」

ああ僕は、こんなにも、彼の事が好きだ。

０５０：茨の道に咲く花

ざわざわと人の話し声がさざ波のように耳に届く。ステージは淡く輝いていて、今は一人の男性が弦の張った楽器を爪弾いていた。暗がりのカウンターで酒の入ったグラスを傾ける。正直、まだ動けそうにない。敏感な彼の嗅覚は完全に麻痺しており、その他の五感もそのせいでうまく働いていない。無理に動こうとすると目眩を起こして倒れるだろう。

「随分久しぶりじゃない。あんたがここで休んでるなんて。今夜はあの可愛い護衛は連れてないの？」

すぐ傍で妖艶な声が聞こえた。声の主は腕をするりと彼の首に絡めて、隣の席につく。

「ふふ。ネルティエの歌はこの後よ。ラディス」

グレイアがラディスの顎に長い指を這わせる。彼はグレイアを見て薄く笑った。

ここまで自分が参るとは計算外だった。
これ以上傍に置いておく事はできない。ただでさえ危険の多い自分の傍にいたら、あれはすぐに壊れてしまうだろう。そんな事は、絶対にあってはならない事だ。
ティルガとシルヴィの娘。何とかしてあるべき場所へ戻さないと。
そう思っていた。
いけないと分かっていたのに、ずるずると傍に置いてしまった。そのせいで嫌がらせを受け、やっかいな事に巻き込まれて怪我をした。
それなのにあいつは、他人の事ばかり心配している。

ずっと変わらずに、真っ直ぐに俺を見つめてくる。

愛おしい。

…限界だ。

「ラディス・ハイゼル様」

給仕の若い男がラディスとグレイアの背後に立って一礼する。グレイアがラディスに寄り添ったまま、その迫力のある黒い瞳で相手を睨みつけた。相手はびくついて、小さな声で要件を告げる。

「支配人が呼んでおります。お越し願えませんか」

ため息をつきながらゆっくりと席を立つ。隣のグレイアが名残惜しそうな表情を向けて言った。

「弱ってるあんたって、色っぽい」

給仕の男について歩き、一番奥まった場所にあるボックス席に通された。他の客席より高い位置にあり、正面のステージが良く見える。革張りの豪華なソファに黒い男が長い足を組んで座っていた。相変わらずの禍々しい気配。ラディスはそれだけで気持ちが悪くなった。

「おい、その殺気を何とかしろ」

どっかりと向かいの席に腰を下ろす。右側にステージがあり、黒い男は闇の中でにやりと笑った。ゆっくりと姿勢を起こし、鋭く尖った面立ちが灯の中に浮かび上がる。

「ラディス。お前に借りが出来たようだ。その強さは相変わらずのようだな」

「お前の教育がなっていないからこうなる」

「あれは雑魚だ。放っておいてもすぐに消える」

現にお前が消してくれただろう、と言ってこちらを見る。ラディスはこの男がどちらかと言えば苦手だった。シーカーは自分と似ている部分があるだけに、やりづらい。

「もうすぐネルティエのステージだ。ここで聞いていけ」

「まだ付きまとっているようだな。案外諦めが悪い奴だ」

「あれは俺のものにする」

「…ネルティエが困っていたぞ。お前がたくさんの花やら何やら勝手に送りつけてくるとな」

「そのうち俺を愛すようになる」

シーカーはすっと目を細めて笑った。この男は徹頭徹尾、不遜で俺様な態度である。自分の間違いに気付かない。

「シーカーよ、人を慈しむのと囲うのとは全くの別物だぞ」

「どういう意味だ」

「そのままの意味だ。俺は失礼する。こんなもんで借りを返されたくはないからな」

何とか普通に歩けるまでに回復した。ネルティエの歌が聞けないのは残念だが、こんな面倒な奴の相手をしたくはない。店を出て夜の喧騒の中を歩き出した。

人気のない石畳の道を歩いている時に気付いた。彼にしては反応が遅かった。もう少し手前で気づいていれば、わざわざこんな暗い道を通らなかったのだが…。ラディスは心の中で舌打ちした。

一日に二度もこんな目に遭うとは。今日はとことんついてない。

ぴたりと足を止めて、重たい鞄をどさりと降ろし、腰に差した剣を引き抜く。

「早くしてくれ。俺はもう家に帰りたいんだよ」

暗闇に向かって声を投げた。すると途切れた塀の向こうから、ぞろぞろと男達があらわれる。全員目から下を、布で覆って顔を隠していた。十人以上はいるだろうか。

「ラディス・ハイゼルだな。お前は穢れている。危険な思想で民衆を洗脳するなど許しがたい。穢れは粛清されなければいけない。よって、お前に天誅を下す」

おかしいと思っていた。リィンに使われた薬は、一般人には手に入らないものだった。あの阿呆共に入れ知恵をした奴らがいるのだ。医者ならば、薬は簡単に手に入る。

「随分と暇なんだな。大人しく祈りだけ捧げてりゃ良いだろうに」

「神の天罰を受けろ！」

叫びながらわらわらと襲いかかって来る。ラディスは無神論者だったが、心の中で神に祈った。

リリーネ・シルラよ。頼むから、俺の邪魔をしてくれるな。

◇◇◇◆

膝に手をついて荒い息を整える。もうすぐ北地区だ。リィンは手の甲で汗を拭って、また走り出そうとした。ちりり、と首筋に緊張が走る。何だ。耳を澄ますと、鉄がぶつかり合う時の高い金属音がしているのに気づいた。全身に鳥肌が立つ。嫌な予感がする。顔を上げて辺りを見回し、その音が目の前から続いている塀の曲がり角の先から聞こえている事を確かめて走り出した。

塀の切れ間が見え、角を曲がる。道の先に男達がいて、それぞれ手に剣を持っているのが見えた。誰かを囲んで寄ってたかって攻撃している。リィンの瞳が深紅に揺らぎ始め、人垣の先にいる人物を確認して、その名を叫んだ。

「ラディス！」

すぐ手前にいた男を吹き飛ばして駆け寄る。ラディスの足元には三人の男がうめき声を上げてうずくまっていたが、彼の身体は傷だらけで、こめかみから真っ赤な血が流れていた。リィンの全身から血の気が引いた。氷のような冷たい感覚が襲う。ラディスの前に立ち、布で顔を隠した男達を睨みつけた。彼らが反応を起こす前に、リィンの『力』が爆発する。

「ぐう…」

気味の悪い声を上げて、男達が耐えきれないといった様子で地面にひれ伏してゆく。石畳の敷石がびしりと音を立て、盛大に亀裂が走る。想像を絶する程の強い『力』が発動している。全員が地面に張り付いて、指先一本も動かせないでいるようだ。口から泡を吹いている者もおり、皆とっくに気絶していた。

「リィン、もうよせ。死ぬぞ」

ラディスがふらつきながら声をかける。リィンは肩を激しく上下させ、目の前を凝視したまま固まっていた。怒りに我を忘れている。

「リィン！」

細い腕をとり揺さぶると、リィンはやっと『力』をおさめてラディスに向き直った。

「ラディス！」

ぐらりと長身の身体が傾いて、慌ててその身体を抱きとめ、ゆっくりとその場に座りこんだ。ラディスを壁にもたれさせる。彼は目をつぶったまま苦しそうに呼吸をしていた。

「ラディス、ラディス…」

おろおろと彼の名を呼ぶ。こんなに傷ついて苦しむ彼を見たのは初めてで、どうしたら良いかわからなかった。

「ごめん…ごめんね。僕、あんたの護衛なのに」

彼の身体はぐったりとして熱い。熱があるのかも知れない。泣きながらラディスを抱き締めた。

何て、脆い。

「ひどい事言って、ごめん…」

リィンは鼻をすすり、抱き締めている腕に力を込めた。

「あんたを護ると言ったのに、僕はあんたに甘えてばっかりだった…」

「…リィン」

彼のくぐもった声が聞こえた。

「何？」

「少し力を緩めてくれ…痛い」

「ご、ごめん」

慌てて腕を離し、ラディスの顔をのぞきこむ。額に薄茶色の髪が張り付いて、そこらじゅうが泥で汚れていたが、綺麗な鼻筋と薄い唇は普段通りに美しい。青い瞳がじっとリィンを見つめている。

ああ、もうどうでも良いや。

迷惑でも何でも色んな事すっ飛ばして、僕はラディスといたいだけなんだ。

リィンの瞳からまた新しい涙が流れた。

「僕、もう離れてるのは嫌だ。あんたが駄目だと言ったって、傍にいる…」

ラディスの両肩に置かれた小さな手が、ぎゅっと服を掴む。声が震えている。ラディスは痛む腕を動かして、リィンの頬に触れた。温かい。

「ラディス…。僕…ずっと、ラディスといたい」

ゆっくりと彼の顔が近づき、唇が重なった。

その温もりを確かめるように、何度も優しく口づけられる。リィンの全身は雷に打たれたように痺れてゆく。

柔らかい…。頭の片隅で、ぼんやりと思った。

「…ラディ…っん」

彼の名を呼ぼうと口を開いた時、一層深く口づけられた。頭の中が真っ白になり、身体の芯がかあっと熱くなってゆく。

息が…。

「…ン、」

倒れそうになる寸前に、やっと唇が離れた。二人の震える呼吸が重なる。リィンが伏せていた瞳を上げると、ラディスの視線とぶつかった。一瞬の微笑みの後、彼は気を失ってしまった。

その後心配したクレイが呼んでいた保安部隊がやって来て、ラディスを襲った男達は連行された。
彼らはルーベンの信者であったが、その事で司教にまで追求の手が及ぶ事はなかった。取り調べが始まる前に、ルーベン司教は書簡で今回の事件は一部の暴徒化した信者の暴走によるものであり、それによって一市民が傷ついてしまった事は誠に遺憾であると通達して来たのだ。リィンは憤慨したが、これが向こうのやり口なのだとラディスもクレイも冷静だった。実際にルーベンの知らない所で起こった事かもしれないし、どちらにせよ何か決定的な証拠がない限りはどうにもならないのが現状だ。闇は深くて、存外に、賢い。
それからリィンは診療所に戻り、ラディスは二日間だけ寝込んだ。溜まりに溜まった疲労と寝不足の上、熱も下がらなかった為だ。その間診療所はクレイが代診して休みにしないで済んだ。リィンは知らなかったが、クレイ自身も医師の資格を持っていたのだった。

◇◇◆◆

「ラディス」

「ん」

研究室で彼は複数の秤を使って薬品の調合をしていた。病み上がりだというのに、すぐに仕事を始めてしまった。最初にクレイが行って説得したが、がっくりとうなだれて帰ってきた。次にリィンがラディスの説得に試みる。

「もう寝たら？」

「クレイに言われて来たな。あいつは心配性なんだ。自分の体調ぐらい分かってる。俺は医者だからな」

顔も上げずにさらりと言う。リィンはため息をついて彼を見据える。瞳が深紅に揺らいだ。
ラディスの身体は否応なしに、椅子に貼り付けられるような格好になった。リィンは『力』を発動させたまま、ゆっくりと彼に近づく。

「あんたを説得なんて出来ないからね。力づくで従ってもらう。…もう寝たら？」

ラディスは押さえつけられた身体を何とか動かして、顎を引いて頷いた。『力』から解放される。

「…お前は横暴すぎるぞ。それにしても『力』の使い方も上手くなったな」

「横暴なのはお互い様だろ。ちょっと、何また始めようとしてるのさ」

机に両手をついて、ラディスを睨みつける。すると彼は片腕で頬杖をついてリィンを見つめ返してきた。う、とリィンが怯む。彫像のような美しい顔は、ずるい。

「お前が添い寝してくれるんなら、考えてやっても良い」

一瞬でリィンの顔が真っ赤に染まった。ラディスは目を細めてにやりと笑う。

「か、からかうなよっ！もう知らないよ！」

慌てて部屋を出てきてしまった。ずんずんと廊下を歩く。

リィンはあの日の出来事は夢だったのではないかと思っている。そうでなければおかしい。彼がリィンにキスをするなんて、意味が分からない。それからラディスの態度が変わったわけではないし、寝室も今まで通り同じにしているが変わった事は何一つない。彼は大人だ。今はそれを実感として感じている。

それにラディスにはユマがいるんだから、僕のはからかっているだけだ。

そう思うと少し気持ちが沈むが、もうそんな事はどっちでも良かった。あれこれ考えたって意味はない。

ユマもラディスも優しくて、強い。きっと何があろうと理不尽な差別には屈しないだろう。だからこそリィンも逃げてはいけないのだと思う。ラディスの元から、この町から、逃げずにいるのだ。だって二人はイリアス族の自分を、迫害の嵐から守ろうとしてくれているのだから。

僕は、もっともっと強くなる。約束した事を命をかけて守ると誓う。もう迷わない。後悔したくない。

この感情をリィンは大事にしたいと思った。楽しくて幸せな事ばかりではないが、辛くても知らないよりはずっと良い。これからもきっと悩んだり泣いたりするだろう。でももう、覚悟は出来た。それに何より…

僕は、ラディスが好きだ。とても…。

これが、全ての真実。

【第四部・完】

０５０：茨の道に咲く花（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
やっとこ、ここまで進展出来ました。
こんなに長く続いてんのにやっとキス一つですか！回りくどい！と、我ながら思います。
しかしだからこそ、重みがある。
唇を重ねるだけではなく、心が重なる必要があったのです。
次回は小休止でらぶーであまーな話を一つ挟みたいなと。そしてＲ１５って、どの範囲！？と思いつつ。
いつも立ち寄ってくださる皆さまに、感謝を。

０５１：≪番外編≫酔いの月

「はあ…」

盛大なため息。

診療所の居室で、エンポリオがテーブル席の端に座って頬杖をついて落ち込んでいる。テーブルの中央あたりの席にクレイが座り、小さな紙束と格闘しつつ計算をしながら、彼の様子をちらりとうかがう。

この日は休診日であったが、ここの主がその面目どおりに休む事は今まで一度もなく、今日も朝から書斎にこもり仕事を片づけ昼過ぎからは往診へ出かけてゆく。

「どうしたの？」

外出の準備をしていたリィンがエンポリオの傍へ行き声をかけた。

「こんな事なら、強引にでも奪ってしまえば良かったよ」

「何を？」

エンポリオが椅子に座ったまま身体ごとリィンに向き直り、がしりとその細い両腕を掴む。

「何って！君の処…」

「わあー！！」

咄嗟にクレイは大声を出していた。

「び、びっくりした…。どうしたの、クレイ」

振り返ってクレイを見るリィンは赤茶の大きな瞳を更に大きくして驚いていた。クレイは赤面しながらごまかすように咳払いをして、

「いえ。計算を間違えてしまいまして…。それよりリィン、往診についてゆくのでしょう？ラディス様がお待ちではないですか？」

と告げる。するとリィンはそうだった、と言ってすがりつくエンポリオを宥めて部屋を出て行った。ほっと安堵のため息。

「クレイ。君ってそんな大声出せたわけ？」

「…緊急事態でしたので」

全く、何を言うつもりなのだろうか、この人は。

当の本人は悪びれもせずにクレイの淹れた美味しいお茶が飲みたいな、とにっこりと笑った。ひっそりとため息をついて席を立つ。やっと計算が合いそうだったのだが、一からやり直しである。

◇◇◇◆

リィンはさっきから気分が悪い。ラディスの往診についてゆくのは護衛として当然だが、ここがあまり好きではないのだ。ベイルナグルの北地区にある家の二階。いくつかある部屋の一室を診察室にして、ラディスは先程からいつも通り診察を続けていた。その部屋の隅に佇むリィンはマントのフードをかぶって、苛々しながらその様子を見守る。

彼の向かいに座って診察を受ける女性。金色に脱色された髪は無造

作に束ねられており、口元には赤の紅、その瞳はうっとりとラディスを見つめている。胸の広く開いた寝間着はぴったりと彼女の肢体に張り付いていて、しかも透けているのだ。こんなものを着る意味が分からない。

「ねえ先生。あたし、何だか胸が苦しくって。心臓が悪いんじゃないかしら?触ってみて?」

女性が身体をくねらせてラディスの太ももに手を置いた。

「残念ながら健康だ。良かったな。次を呼べ」

ここの患者は全て女性で、その上全員がこんな調子である。ここは夜の町、北地区にある娼館。ラディスは娼婦達の診察をしている最中なのだ。今はまだ昼過ぎで妖しい町は本当の姿を隠してひっそりと眠っている。

彼女達のこの手の冗談を鮮やかに無視して、ラディスは次々と診察を終わらせてゆく。が、リィンはどうしても慣れない。次にやって来た女性の脈をとりながら振り返らずにラディスが言った。

「リィン。患者に向かって殺気を放つな。下に降りて大人しく待ってろ」

「うふふ。可愛い坊やには、ちょっと刺激が強すぎるんじゃなあい?」

「そんなんじゃない!」

「…リィン」

「わ、分かったよ！」

ばたん、と扉を閉めて仕方なく階下へ降りる。一階は酒場になっているがこの時間客は入っておらず、女性達が点々と席に座って昼間から酒を飲んでいた。カウンターの奥にいる女店主がリィンの姿を見つけて笑い声を上げる。

「まーた追い出されたのかい！最初っからここで待ってりゃ良いだろ」

大木のような身体を揺すって可笑しそうに笑い、艶やかな女性達もきゃらきゃらと声を上げて笑った。リィンはむっとしながらフードをとってカウンターの端の席に腰を下ろす。女店主は夜に出す料理の仕込みの為に奥へと消え、すぐに彼女達のうちの一人が隣へやってきた。

「リィン。先生のお仕事が終わるまで、お姉さんが相手してあげるわ」

テーブルに肘をついて、リィンの方へ身を乗り出してくる。大きく前のあいたブラウスから胸の谷間をのぞかせて、これまた金髪に脱色した巻き髪を手でかきあげた。顔にはそばかすが散らばっているが茶の瞳は澄んでいて、整った顔立ちをしている。まだ二十代前半だろう。何故、こんな場所でこんな仕事をしているのだろうか。リィンは無言で彼女を無視した。

「…坊やはラッキーだったわね。先生に拾われて」

「え？」

「先生は私達の救世主よ」

リィンが顔を向けると、彼女はにっこりと笑って酒の入った瓶をどんとテーブルに置いた。

「まあ一杯やりなさいよ。お姉さんがおごってあげる」

「…これ、お酒だろ？」

すると女性達がまた一斉に笑い始めた。

「いやーん。可愛い！リィン！あたしが男にしてあげるわ」

「駄目よお。リィンの最初は私よう」

「一度はイリアス族に抱かれてみたいわあ」

「ちょっと！何言ってんだよ！」

リィンは耳まで真っ赤にしながら彼女達を振り返って叫び、隣に座っている女性がまた顔を近づけて、楽しそうに囁いた。

「坊やの事、からかってんのさ。子供みたいな事言うから」

「ぼ、僕は別に！」

彼女は妖艶な笑みでリィンを見つめたまま瓶を傾け、グラスにこんこんと琥珀色の酒を注ぎ、それを目の前に差し出した。

「さあ、男を見せな。リィン」

う、と酒の入ったグラスを睨む。

「あっはは！無茶よサンドラ。坊やにはまだ早いわ」

「お母さんのおっぱいのが良いものねえ！」

隣に座るサンドラが追いうちをかけるように耳元で囁く。

「先生にだって、子供扱いされたくないんでしょ？」

リィンは向かっ腹を立て、グラスを鷲掴みにして一気に琥珀色の液体を喉の奥へ流し込んだ。女性達から歓声が上がる。酒が喉を通って胃に落ち込んでゆき、かっと燃えるような熱さが広がった。最後まで飲み干して、激しく咳き込む。どっと笑い声が起こった。

「何だ、これ。ま、まず…」

たまらずに水を飲もうと席を立った。足が床についたはずだが、ぐにゃりと心許ない。

「あ、あれ」

ぐわんと世界が一回転した。まるで宙に投げられた気分だ。すると今度はむにゃりと柔らかい感触に包まれ、見上げるとそばかすの散った顔が見えた。サンドラが妖しく笑っている。どうして笑っているのだろう。そう思っていたら何故だかリィンも可笑しくなってきた。

「大丈夫よ、お姉さんが優しく教えてあげる…」

何を?

リィンはサンドラによってずるずると二階に連れ込まれてしまった。

◇◇◆◆

「あはは。く、くすぐったいよ」

ベッドに仰向けに寝かせて、慣れた手つきで靴を脱がしマントも外してゆく。サンドラがリィンに覆いかぶさり、彼女の金の巻き髪が顔にかかっているせいでリィンがくすぐったそうに笑っていた。

「ねえ、何してるの」

リィンがへらへら笑ってサンドラにたずねる。彼女はリィンの緑のベストを開いて、すでにブラウスのボタンを外しにかかっていた。

「暑いでしょう、リィン。脱がせてあげるわ」

「んん、熱い…。あは、よく分かるね」

白い肌が酒のせいでうっすらと赤く染まっている。まあ、何て綺麗な肌かしら。

「サンドラ。悪戯がすぎるぞ」

振り返ると戸口にラディスが立っていた。鞣革の大きな鞄を肩に担ぎ、呆れたような表情でこちらを見つめている。サンドラは悪戯っ子のように舌を出して、酔っ払っているリィンをベッドに置いて彼

に近づく。

「あらぁ先生。もう診察が終わったの？ちょっと早すぎるわ」

「子供に酒なんか飲ませるなよ」

「だってさ、あんまりにも透明で綺麗なんだもん。汚してやりたいじゃない？」

意地悪な笑みを浮かべて背の高いラディスを見上げる。彼はサンドラを見おろして無言で微笑んだ。

「サンドラ！どこにいるんだい！？酒場の掃除はあんたの当番だよ！！」

女店主の胴の入った声が階下から響いてきた。サンドラは眉をひそめ、しまった、と言って慌てて部屋を出てゆく。

「あ、先生！その坊や連れて帰ってね！続きはまた今度ってちゃんと言っておいて！」

リィンはまだ笑いながらベッドに大の字になっていた。ラディスは仕方なく傍に行き、リィンを起こしにかかった。簡単に想像がつく。女達の安い挑発に乗せられたに違いない。既に綺麗な鎖骨が露わになっており、胸を隠している布まで見えてしまっていた。

…危なっかしい。未遂で良かった。

「リィン。起きろ、帰るぞ」

声をかけてブラウスのボタンを留めてゆく。リィンはベッドにだらしなく寝そべって、されるがままだ。

「んー。うん？ラディス？ふふ、何してんのさ」

そう言って、あははと笑った。ラディスは苦笑交じりに呟く。

「随分楽しそうだな」

力なく伸びていたリィンの両手が、急に動いてラディスの胸倉をむんずと掴んだ。リィンの怪力につんのめるようにして引き寄せられる。何とか肘をついてリィンとの距離を保った。至近距離で、赤茶の瞳がラディスを睨んでいる。リィンが酔っていなければ、赤面してすぐに離れてしまうような距離だ。

「ラディス！」

「お前、相当酔ってるな」

「僕は、こどもじゃ、ない！」

「分かってる」

「分かってない！」

「…絡むなよ」

「絡んでない！」

「お前なあ…」

「はあ。綺麗だ…」

透き通るような白い頬がほのかに桃色に色づいている。口元に笑みを浮かべ、こちらを見つめる瞳はどこか夢見心地のようだ。柔らかな栗色の髪を梳いてやると、リィンは満足そうに目を細めた。

「ラディス」

「ん？」

「好きだ…」

リィンがふにゃりと笑う。

「僕ね、ラディスが好きだよ…」

ラディスはリィンを見つめて微笑んだ。

「…知ってる」

それからリィンの形の良い柔らかな唇に、自分のそれを重ねた。ゆっくりと確かめるように優しく口づける。

「…ラディ…ス…」

薄く開いた隙間から舌を差し入れると、何の抵抗もなくリィンは彼を受け入れた。

「ん…う」

サンドラの気持ちは分からなくはない。
リィンはいつも誰に対しても真っ直ぐにぶつかってゆく。何があっても汚れずに気高い。
時折、強引にでも自分のものにしたいという激しい欲望に負けそうになる。

口づけが徐々に深く、熱を帯びてゆく。
リィンがたまらずに吐息を漏らす。

「…ン…っん」

…まずい。これ以上は。

ゆっくりと顔を離すと、リィンは切なそうに眉を寄せて潤んだ瞳で見つめてくる。色づいた滑らかな頬を優しく撫でると目を閉じて子供のように微笑んだ。

「ふう…。気持ち良い…」

自らの自制心は鉄壁であるとの自負を持つ彼ではある。が、ここまで無防備にされると正直参る。

ラディスは瞳を伏せてため息をこぼした。

「…リィン。俺を殺す気か」

◇◆◆◆

「ど、どうしました？」

診療所の玄関からラディスの呼ぶ声がして行ってみると、彼は片腕でリィンを抱きかかえており、反対の手でいつもの大きな診療鞄とリィンの靴を持っていた。

「クレイ、こいつを頼む」

そう告げてリィンをクレイに預けてくる。クレイは慌ててその華奢な身体を両手で抱えた。リィンはうっすらと目を開けて、にへらと笑った。

「あ。クレイだ」

「リィン!?どうしたんです?」

「女達に酒を飲まされたようだ。俺はまだ往診が残っている。後は頼むぞ」

「ラ、ラディス様」

彼は振り返らずに、すたすたと石畳の道を歩いて行ってしまった。クレイはリィンを抱きかかえたまま、呆然と立ち尽くす。

「…う」

「え?」

「気持ちわる…」

「ええ!?」

◆◆◆◆

瞳を開けると見慣れた天井が見えた。あれ…北の町に居たはずじゃなかっただろうか。どうして診療所の寝室で寝ているのだろう。あたりは薄暗い。寝がえりを打つと、胸がむかむかとして気持ちが悪くなる。そこではっとした。そうだ、サンドラに言われるまま酒を一気飲みした…。それから…。

覚えて、ない。

慌ててベッドから飛び降りて、よろめきながら暗い階段を下りて居室の扉を開いた。室内の灯りに一瞬目がくらむ。

「リィン。大丈夫ですか？」

クレイの声。彼はテーブルの向こう側に座っており、腰を浮かせてリィンを見つめている。テーブルには茶器が並んでいて夕食後の一服をしていたようだ。こちらに背を向けてラディスが手前に座っている。

「う、うん。ちょっと気持ち悪いけど…。僕、どうしてた？」

クレイが胃薬を飲んだ方が良いですね、と言って席を立った。リィンはどうして良いか分からずにその場に棒立ちになる。

「そんなところ突っ立ってないで座ったらどうだ」

ラディスが背を向けたままリィンに声をかけた。リィンは遠慮がちにその隣に腰を下ろす。

「…僕、寝ちゃった…？」

彼はちらりとリィンを見やり、カップを傾けながら答えた。

「ひとしきりやらかした後な」

「ええっ」

「気にするな。クレイがゲロまみれになっただけで、俺は平気だ」

リィンは顔を真っ青にして、口をぱくぱくさせる。

「ラディス様、そう苛めては可哀そうです」

クレイが苦笑しつつグラスに入った水と胃薬をテーブルに置いた。

「ク、クレイ！ごめん！！僕…」

「それからなあ、お前は…」

「わああ！も、もう良いよっ！分かったよ！僕が悪いんだっ」

青くなった次は顔を真っ赤にさせて、リィンは両手で耳を塞いだ。

それをラディスが笑いながら見つめている。

その光景を見てクレイは心の底から、ほっとした。

本当はずっと自責の念にさいなまれていた。ラディスの護衛を、とリィンに頼んだのは自分だ。あの時は先の事まで考えずに、とにか

く彼の事が心配だった為にそうしてしまった。しかしよく考えてみれば分かる事だった。ラディスにとって、自分の命を救ったイリアス族に、しかもその恩人の娘に、危険な仕事をさせるという事がどれ程心を痛める事なのか。自分は何という事をしてしまったのだろうかと頭を抱えた。けれど…。

リィンはラディス様や私が思っていた以上に強かった。
気高く美しい、イリアスの民。
やっと彼の隣に並ぶ女性が現れたのだ。

今では自分のしでかした事を、ひそかに良くやったと褒めている。

この先の将来が劇的に好転したわけではない。彼の敵は相変わらず手強く、あらゆる戦いはこれからも間断なく続けられるだろう。彼は全てを百も承知で、悠々と先を見据えている。
今なら想像できる。
その隣には、いつもリィンがいるのだろう、と…。

【番外編・完】

０５１：≪番外編≫酔いの月（後書き）

…ああ、甘い。

第５部の始まりはリィン、ラディス、クレイをそれぞれ動かしてゆきます。徐々に終わりに向かって走り出します。

きちんと書き切れるか、それが今後の課題。

いつも読んでくださる皆様へ、最大の感謝とお礼を。

０５２：走り出す、運命

「オルグさーん。お入りくだせえ」

町はずれの診療所には、今日も様々な種族の老若男女が訪れている。受付のチェムカは灰色の髪を三つ編みに結わえ、右肩に垂らしたいつものスタイル。白のブラウスに萌黄色のスカート、足元は底がフラットになっていて歩きやすそうな靴。名を呼ばれた男性が足を引きずりながら診察室に入ってゆく。チェムカは扉を開いて支え、そばかすの散った愛嬌のある顔で患者に笑顔を向ける。

「ああ、オルグさん。足の具合はいかかですか？」

その部屋にいたのは身なりに無頓着な長身の医師ではなく、寸分の隙もない程に整頓された雰囲気を醸し出す青年だった。緑がかった髪はきちんとセットされており、プレスの効いたブラウスに黒のベストと黒のズボン。丈の長い上着を、ぱりっと着こなしている。瞳は髪と同じ深緑。

「あれ、先生はどうしたんだい？」

「ラディス様は所用で数日間外出中ですので、私が代診しております。すみません」

「いやあ、良いんだよ。クレイさんなら間違いねえ」

男性は訳を聞いて納得顔。クレイはてきぱきと診察を進めてゆく。

「だいぶ良くなりましたね。あと四日程で、添え木も外せます」

「本当かい!?ああ、良かった!これでやっとまた仕事ができる!ありがとよ!」

クレイはぎこちない笑顔を作って患者を送り出した。

「…クレイ。もうちっと自然な笑顔ができんのけぇ?」

チェムカが言った。

「診察は完璧なんだけっども、愛想が足らんわ」

「…私はそれが苦手なのです」

クレイは感情をそのまま表に出したり、愛想笑いをする事が出来ない。

「まあ、んだな。人間出来不出来があるもんだべ」

何となく慰められてクレイは苦笑した。このまま、ここの主が帰るまで何事もなく数日が過ぎる事を祈るのみだ。

現在、この町はずれの診療所にはクレイとチェムカ、ニコルの三人しかいない。主のラディスは、つい先日港町シャルナンへ出張診療に出掛けていった。護衛のリィンはというと、その一日前にロガートとの国境沿いの村へ定期視察に向かう帝国軍と行動を共にしている。話の始まりは三日前に遡る。

◇◇◇◆

夜も深まり、リィンとクレイは既にそれぞれの寝室に入って就寝準

備にかかっていた時だった。玄関の呼び鈴が夜の闇に響く。

「…誰かな」

リィンが怪訝そうな顔をして廊下へ出る。クレイもそれに続き、書斎の方からラディスが歩いてくるのが見えた。

「俺が出よう。お前達はもう休め」

しかし来訪者は、何か余程の緊急事態がない限り、このような時間に訪れる事のない人物だった。

「こんな時間にすまない。ラディス、折り入って相談があるのだが」

堅苦しい挨拶を抜いて、相手は砕けた口調でラディスに話しかけた。急いでやって来たのだろう、その格好は物々しい。ベージュのマントの下は鮮やかな紺色の軍服。ルキリアの青い瞳、金の短髪。現れたのはルキリア帝国軍の元帥であり現国王の子息、アルスレインと、彼の腹心の部下であるウォルハンド大佐の二人だった。

「居室で良いか」

「ああ」

ラディスが先に立って居室へと向かう。リィンとクレイは緊張の面持ちで顔を見合わせた。

「そうだな、クレイとリィンにも同席してもらいたい」

アルスレインは二人に視線を投げて言った。

彼が持ち込んだ相談とは、明朝出立する定期視察にリィンを同行させたい、という内容だった。
居室のテーブル席にラディス、アルスレインが座り、クレイは茶を淹れて青い瞳の二人に出してから壁に控えた。ウォルハンドはというと、部屋の中には入らずに扉の外で待機している。

「何で、僕？」

ラディスの脇に立つリィンが、あからさまに眉根を寄せて呟いた。

「この定期視察は毎年行っているものだ。ロガートはいまだにどの国とも平和条約を結んでいない。レーヌ国に対してだけは、不可侵協定を結んでいるが…。あの国との国境沿いにあるゲムの村は、今もって重要な拠点であるのだ」

アルスレインは真っ直ぐにリィンを見据えて説明する。

「この視察は私が全責任を担い、少数の部下を連れてゆくのが決まりだ」

「…元帥が直々にする仕事かな」

リィンがもっともな疑問を口にした。

「私には敵が多い。宮殿内部にも、この私が帝国軍の元帥という地位にいるのを良く思っていない者達がいる。この仕事は私が元帥として君臨する為にも必要なものなのだ」

「どういう事？」

ラディスが引き継いで説明を続ける。

「ルキリア皇族は案外腐る程いるもんだ。カイエリオスの直系の跡継ぎはアルスレインだが、当然の事ながら親戚親族の類は多い。第二から第十五まで王子はいる。宮殿に充満するのは、権力に執着した奴らが吐き出す悪臭だ。血の繋がった者達の権力争い程醜いものはないな。

毎年、アルスレインとその配下の者達をまとめて、危険な視察へ送り出す。あわよくばそこで殺してやろうと企んでな」

「…父はそれも承知している。しかし父の権限を行使して中止にするのは逆効果だ。それにこれくらいの事で潰れるようなら、それまでの事。これを逆手に取って、私は力をつけていかねば」

斜めに腰をかけて足を組んでいるラディスが、こめかみを押さえて言った。

「誰の提案だ？」

「…ガズナイル長官だ。護衛としてのリィンの存在は、我々皇族の者達の間でも有名だ。今回、視察に護衛としてリィンを同行させてはどうかと提案してきたのだ。イリアス族のお手並み拝見といったところだろう。何かの思惑があるのは分かっている。しかし私は敢えてその提案に乗ろうと思う。うまくいけば、その後の道が開けるはずだ」

「博打だ」

「分かっている」

「ケイロスは？」

「賛成している」

「人数は？」

「八名前後」

「足りないな。増やした方が良い」

「分かった」

二人は真剣な面持ちで短い言葉を交わしてゆく。何も差し挟めないような緊張感。

「僕、行くよ」

リィンの凛とした声が響いた。

「本当かい？いやあ、良かった！」

アルスレインが立ち上がって、リィンに笑顔を向けて握手を求めた。
リィンは素直に右手を差し出す。

「安心してくれ。君の安全は保障する」

「…リィン」

ラディスが長い指でこめかみを押さえたまま、低く呟いた。

「僕の事は僕が決める。良いだろ？」

リィンが屈託なくラディスを見下ろして言った。

「お前なあ、分かっているのか？それがどういう事か…」

「もう決めた。僕は行く」

「ラディス、頼む」

リィンとアルスレインが二人して輝く瞳をラディスに向けた。彼は目を閉じて腕を組み、黙している。

「ラディス」

ゆるりとラディスがリィンを見上げる。リィンが朗らかに笑って、言った。

「僕を信じろ」

◇◇◆◆

荒涼とした平野を一列で走る。帝都ベイルナグルを出て一日中走り続け、ようやくこの平野に辿り着いた。目的地に到着するまでは、町や村には一切立ち寄らずに野営で過ごす為、皆それぞれ馬に荷を積んでいる。

「お前って本当、物好きだな」

前を走るウィリアムが、馬の手綱を緩めてリィンの隣に並んだ。赤

毛の短髪が風に揺れている。

「普通、こんなの志願して同行するか？化け物って変わってるんだな」

「あんたはどうなんだよ」

先頭はアルスレインの白馬、次に政府要人のケイロスという男性とその部下二名に続き、リィンとウィリアム、後続に若い軍人が十数名、殿がウォルハンドという隊列で荒野を走る。

リィンはいつもの暗い臙脂色のマントでフードをかぶり、その下にはニコルに仕立ててもらった服に身を包んでいた。

これはニコルが、リィンが女性だと知ってすぐに、もっと動きやすくて機能性の高い服にした方が良いと仕立屋と相談してこしらえてくれたものだ。緑のベストは生地が丈夫なものに変わり、ブラウスの下に布を巻き付けなくとも女性用の下着で何の不安もなくなった。黒のズボンはリィンの細い足に合う、伸縮性のある素材で細身に出来ている。足元は乗馬用の拍車がつけられた、脛まである茶革の長靴。これで随分と動きやすくなった。

隣を走るウィリアムはベージュのマントに帝国軍の軍服を身につけている。視察という名目なので、皆軽装備で武装はしていない。リィンも着るように言われたが断った。それはそうと、何故シーカーの手下であるウィリアムが、この視察に同行しているのか不思議でならない。

「どうしてシーカーが違法まがいの事をしても取り締まりに引っかからずに、北の町を仕切っていられるか分かるか？」

リィンは興味もなかったが、無言で先を促した。ウィリアムは得意そうに胸を反らせて続ける。

「力と知恵があるからだ」

「要するに、こういう時に部下を送り込んで次期国王のアルスレインに取り入ってるって事？」

「…けっ。生意気な奴だな」

「あんたも大変だね」

「俺は強いからな！シーカーの第一の部下として同行してる。お前は？化け物」

「…いちいち化け物って言うな」

決まっている。ラディスを護る為だ。

まさかこの自分が、ルキリア皇族に手を貸す事になるとは。イリアス族を迫害していたルキリア族を護るとは想像もしていなかった。

しかし全てはラディスにとって、どうかというだけの事。

ルキリア帝国軍の元帥、アルスレインはいずれ国王になる人物だ。

そしてラディスの見据える将来を、我が将来として動いている。彼が存在する事によって、トワ妃のラディスに対する執拗な攻撃も和らいでいると以前にクレイが言っていた。アルスレインはラディスの味方であり、そのアルスレインの仲間である者達もこの先を考えれば絶対に失ってはならない存在なのだ。

「ラディスを護るのは、この僕だからだ」

「ふん。まあそんなこったろうとは思ったけどな」

頭上高く、鳥が鳴いた。見上げると大きな翼を広げた黒鳥が大空を旋回している。二ナルグ（＝二メートル）はあるかと思われる大きな鳥だ。

「おっと。来た来た」

ウィリアムは片手で懐を探り、銀色の鳥笛を取り出して口にくわえた。人間には聞き取れない音が大きな黒鳥を呼び寄せる。鳥は急降下し、あっという間にウィリアムの肩に止まった。馬上で不安定な為、何度か羽をばたつかせる。

「てて。顔に当たるっつうの」

足に括られていた紙片を外すと、黒鳥はすぐに大きな翼を広げて空へと戻っていった。すかさずにウォルハンドがウィリアムの隣に馬をつけ注意をする。

「貴様、勝手な事はするなとあれ程言っただろう」

「うるひゃいな」

口で紙片の端を押さえ、片手で器用に広げてゆく。どれどれ、と言ってウィリアムはその紙きれを眺めた。

「それ、何だよ」

「これは俺専用の≪早馬≫みたいなもんだ。毎年ゲムの村には行くからな、鳥に覚えさせたんだ」

ウィリアムはまた自慢げにぺらぺらと解説をする。

≪早馬≫とはルキリア国中に点在する連絡拠点の事だ。周辺の村や町で異変が起これば、要所で駐在している軍へ伝達係が走る。選りすぐりの足の速い馬を使っている為にその名がついた。

「俺はシーカーの後を継ぐ男だぜ。例え自分がその場を離れていても、北の町の動向は逐一知れるようにしているのさ。…ふ～ん。ほほう。こりゃあ」

にやにや笑いながらリィンを見やるウィリアム。

「何だよ。気持ち悪いな」

「ルキリア一の歌姫ネルティエが、毎年恒例のシャルナンでのコンサートに出かけた」

「ふうん？」

「当たり前だが一人じゃないぞ。三人の従者と護衛のグレイアが同行してるそうだ」

それが何故ウィリアムのにやにや笑いに繋がるのか分からない。

「それに今回はラディスも一緒だ」

「は！？」

「どうやらちょうど出立する日が同じだったみたいだな。まあ腕の立つ護衛は多くいる程安心だ」

ぽかんと口を開けて、リィンは少年の面差しを残したウィリアムの

顔を凝視した。

何で、よりによって僕のいない時に。

しかもグレイアと！

「ラディスの奴！僕に何も言ってなかった！」

ぶはは、とウィリアムが声を上げて笑った。お前ってホントにラディスの護衛かよ？

リィンの耳には彼のからかいの言葉も入ってこない。あのグレイアと一緒だって！？

こんな視察、さっさと終わらせて帰らなければ。

０５３：旅の目的、覚悟の剣

「何だか楽しいわね。ラディスも一緒なんて嬉しいわ。ねえグレイア？」

「ほんとねえ。今度っから毎回一緒にしたら良いんじゃないの？ねえラディス？」

「そうだな。これでネルティエの歌が聞ければ言う事なしだ」

揺れる馬車の中に三人はいた。ネルティエは身ごろのゆったりとした青色の服を身にまとい、愛らしい笑顔を向けている。その隣に座るグレイアは藍色のマントを羽織り、申し訳程度の布でその豊満な胸を隠し、下着のような短い黒のズボンに丈の長い編み上げ靴。耳には大振りのピアスが揺れてにっこりと笑った口元から、真っ白な八重歯がのぞいていた。二人の向かいに座るラディスは黒のマントの下にブラウスと黒のベスト、伸縮性のある素材で出来た黒のスリムなズボン。乗馬用の拍車のついた茶革の長靴という、医師らしからぬ格好で腕を組んでいる。傍らにはいつもの大きな診療鞄の他に、巨大な麻袋など荷物も多い。

港町シャルナンへの定期コンサートはネルティエが歌姫として成功する前からずっと、定例行事として行われているものだ。シャルナンは彼女の生まれ故郷であり、グレイアの故郷でもある。盲目の歌姫は自分がどれだけ成功しようとも、自分を育ててくれた者達への感謝を決して忘れない。

「コンサートは明後日の夜よ。それまでにお仕事が終われば聞きに来てくれる？」

「ああ。そうしよう」

ネルティエは褐色の頬を少しだけ赤らめて、つぶらな黒の瞳をグレイアに向けた。

「うふふ。良かった！」

「そうだねえ」

グレイアは、彼女の長くて美しい白の髪を優しく梳いた。

可愛い子。男の趣味も悪くないわ。

シャルナンの宿へは夕刻に到着した。荷物を運び込んで、ネルティエはすぐに舞台のある店の下見に出かけてゆく。勝手知ったるいつもの店の主人と挨拶を交わして、従業員の一人ずつとも握手を交わしてゆく。グレイアは歌姫の背後に立ち、じっと相手を観察する。そこに不穏な影はないか、脅威はないか。隙のない眼光はその艶やかな容姿に似つかわしくない程に鋭い。グレイアに対する相手は、彼女の露出の多い格好に油断をするが、腕の立つ者なら彼女が只者ではない事にすぐ気付くだろう。

「そのう、控室の方にお荷物が届いているのですが…」

背後からグレイアに控えめな声がかけられた。

「案内して。調べるわ」

従者に声をかけ、控室へと向かう。

「送り主は、…ええと、シーカー・ラグズウェル様です」

「…はあ。懲りない男ね」

部屋中を埋めつくさんばかりの色とりどりの花束。良い香りが漂っている。

「グレイア？」

振り返るとネルティエが杖をついてこちらへやってくるのが見えた。

「良い匂いね。何のお花かしら？どなたから？」

「シーカーよ」

ネルティエの表情が途端に曇った。

「…片づけて」

「そういうわけ。この花束、全て部屋から出してくれるかしら」

はい、と従業員たちが総出でその作業に取り掛かった。ネルティエが壁を背に少し俯いて佇んでいる。

グレイアがその小さな頭を引き寄せて、抱き締めた。

「私、ひどいかしら…」

「ひどいのはあの男の方さ」

あたしの歌姫を悩ませるなんて、罪深い男。許せないわ。

ネルティエに言い寄ってくる男達は数多い。大金持ちの貴族や政府要人。皆、彼女の愛らしい容姿と美しい歌声に惚れ込んで、何としても手に入れようと躍起になって金を積み上げる。ネルティエはその全ての誘いを、角が立たないように断り続けていた。一生金に困らないような生活ができ、歌を思う存分歌う事ができる、と夢のような話。けれどネルティエは見抜いているのだ。言い寄ってくる男達は、彼女が歌唄いという不安定な職業で盲目であるが故に、簡単に手に入ると思っている。誰一人として知らないだろう。この可憐な歌姫が、本当は芯が強く、人一倍負けず嫌いなのを。

幼い時からネルティエを見続けてきたグレイアは、世界で一番彼女の事を理解していて、そして愛している。

この世でただ一人、自らの命を捧げると誓った。あたしの歌姫。

夜の帝王シーカーはそんなネルティエに図々しく、強引に、求愛し続けている。普段ならやんわりと断り続けるネルティエだったが、その執拗なアタックに苛々を募らせていた。

あの男。今度会ったら、どうしてくれようかしら。

◇◇◇◆

馬の背から荷を下ろし念入りにブラシをかけてやると、喜んでぶるぶると鼻を鳴らした。今夜はこの岩場の影で夜をやり過ごす。軍人たちは手際よく周囲を偵察し陣営を張った。彼らの上官であるアルスレインは軍人数名を連れて、この近くの村に駐在しているルキリア軍の保安部隊の激励をしに出掛けていった。焚き火が夜の荒野を照らす。リィンはため息をつきながらその近くへ腰を下ろした。どうも居心地が悪い。それはずっとこの旅の始まりから、ウォルハンドがリィンに向かって恐ろしい殺気を放ち続けているからだ。そのウォルハンドはというと、リィンの背を睨みつけるように一人暗闇

の中で腕を組んで仁王立ちしていた。

「おい、あいつ何とかならないの？」

ウィリアムがこそこそとケイロスに耳うちする。皆、火を囲んでささやかな夕食を楽しんでいる最中である。ケイロスは一番の年長者で、彫の深い顔立ちに白いものが混じる金色の髪を後ろに流して、軍服とは少しだけ形容の違う紺色の服に身を包んでいた。顎に髭を蓄え、≪黄金の青い目≫の目尻には深いしわが刻まれている。ルキリア皇族で中枢機関に属する政府要人である。ウィリアムは何度か視察に同行している為か、この人物に対しても敬語を一切使おうとしない。

「こっちまで具合が悪くなりそうだぜ」

「はは。あいつは根っからの軍人だからな。融通がきかないのだろう。リィンといったね。君、すまないが我慢しておくれ」

ウィリアムが迷惑そうな視線を投げて寄こし、その隣に座るケイロスは少し困ったような表情でリィンに視線を向けている。リィンは肩をすくめ、平気です、と告げた。

「今回の視察では、きっと何かが起こる」

ケイロスは夜の闇を焦がす炎を眺めながら、誰にともなく呟いた。

「イリアス族の君をこの視察に同行させよと提案したのは、アルスレイン王子と敵対している第六王子の息がかかったガズナイルだ。必ず何かを仕掛けてくるに違いない。だからこそ、ウォルハンドはあれ程に警戒をしているのだよ。アルスレイン王子は二十一という

若さと、あの瞳の事で敵が多い。≪黄金の青い目≫など、何の意味もないものなのにな…」

リィンは緊張しながらケイロスの横顔を見ていた。瞳の奥の金色が、きらきらと輝いている。そうだ、あのアルスレインにはその黄金の輝きがない。ケイロスはリィンに顔を向けて静かに語り出した。

「我が国王カイエリオス陛下は、聡明なお方だ。未来に渡って、賢帝として語り継がれてゆくであろう。君にも分かるはずだ。帝都にイリアス族がいるという報告は当初から聞いていた。それもあのラディスの所にいると言う。陛下は全てご存知だ。その上で黙認している」

ウィリアムはつまらなそうな顔をして、席を立って一番若い軍人の所へ行ってしまった。

「もしこの視察で何かが起こり失敗をするようなら、君は帝都から追放される」

「追放…」

「それだけで済めば良いが…。最悪は責任を問われてラディスが連行され、同行を認めたアルスレイン王子の立場も危うくなるだろう。イリアス族を毛嫌いしている皇族は今でも多いのだよ」

リィンは目眩を起こしそうになった。浅はかだった。正直、そこまで考えていなかった。

「しかし逆にこの視察が成功に終われば、事態は急激に好転する事になる。王子らしい、大胆な作戦だ。

…ラディスが君を素直に寄こすとは思っていなかったがね。やはりというか、かなり難しい交換条件を私は突きつけられてしまった」

「…え？」

「ケイロス殿。そのような下賤に、内情をお話になられる必要はありません」

ウォルハンドがすぐ背後に立って、恐ろしい形相でリィンを睨みつけている。猛禽類のような鋭い眼光に、背の高い大柄な体躯からは凄まじい殺気が放たれていた。

「ウォルハンド。君の気持ちも分かるが、リィンは既に私たちの仲間だ。これから何が起こるか分からんのだから結束は固い程良いのだよ」

リィンは真っ直ぐにウォルハンドを見上げた。ルキリア皇族を、アルスレイン王子をこよなく愛する彼にとって、リィンは本当に忌むべき存在なのだろう。しかも今回の視察にイリアス族を同行させる事によって危険が倍に増すわけだから、憎しみも増す。

だけど僕だって人間だ。それに話を聞いた以上、どうあっても失敗なんて出来ない。

ラディスの為に、僕の為に、アルスレインの為に。目的は同じであるはずだ。

「僕が憎いのは分かる。でも、この視察を成功させたいのはあんただって同じだろ？」

「…何だと？」

腹の底から響いてくるような低い声で返事をするウォルハンドに対して、しっかりと彼を見据えてリィンは言葉を続ける。こんな事でびびっている場合じゃない。仲間割れをしている場合じゃないんだ。

「どうすれば、あんたは僕を認めてくれるんだ?」

リィンの思いもかけない提案に、周囲の皆が息を飲んだ。
焚き木が、ぱちり、とはぜる音が響いて、ウォルハンドが大きく息を吸い込む音がそれに続く。

「良いだろう。剣を抜け」

「ウォルハンド」

ケイロスが制する。ウォルハンドはリィンを睨みつけたまま、静かに言った。

「ケイロス殿は下がっていてください。この事は私が全て責任を負いますゆえ」

「ひえええ。やっぱ化け物って、普通の思考してないんじゃないの?あのウォルハンドに喧嘩売るってか!?」

ウィリアムは言いながら、面白そうに身を乗り出した。
暗闇の荒野で、二人は対峙して剣を引き抜く。火を背にして、ウィリアムとケイロス、軍人たちが固唾を飲んでそれを見守る。

「この私から、一本取って見せろ」

無謀な戦いだ。その体格差からしてリィンに勝ち目がないのは明白である。しかも彼からは並々ならぬ殺気が漂っており、誤ってリィンを刺し殺しでもしかねない勢いだ。四角ばった顔に短く刈り上げた黒髪。鋭い眼光に額からこめかみにかけての古い刀傷が、その恐ろしさを倍加させている。

リィンの背筋に嫌な汗が伝う。

でも、退かない。絶対に。

赤茶の瞳に深紅の炎が揺らぎ始める。『力』を相手に放つのではなく、両手と自らの剣に込める。一撃の質量と、速度を増す為だ。静かに息を吐き出す。

「勝負！」

星の瞬く夜空に高い金属音が響いた。

０５４：二人の戦い１

「…事が起こる前に、そんなにぼろくそになってどうすんだよ」

ウィリアムが呆れた声を出した。傍らで寝袋の上に伸びているリィンは、身体中に打撲と切り傷を負っていた。ウォルハンドもさすがにこのイリアス族を斬り倒すような事はしなかったが、容赦はなかった為、ひどい有様だ。一応傷の手当はしたが気休めにしかならない。

「…身体中が、痛い」

「当たり前だろ！？馬鹿すぎる！」

苛々してリィンの頭をはたく。

「って…」

リィンを傷だらけにした厳つい軍人は、村から帰って来たアルスレインにこっぴどく叱られた。しかしそれも承知の上だったようで、彼は終始無言で頭を垂れていた。

「でもこれで、あの人も僕を認めざるを得ない」

「…化け物」

「化け物って言うな」

驚いた事に、この小柄なリィンがウォルハンドから一本取ったのだ。

実際には『力』を使って風を起こし、砂が吹きあがった瞬間をついて相手に一撃を叩き込んだのだから、ずるをしたと言えるだろう。

それにしたって、すげえや。

ウィリアムは多少ならずともリィンの事を見直していた。

何だってそこまで出来るのか。怖いもの知らずも度を超えている。

イリアス族ってみんなこうなわけ？

ウィリアムは両親に捨てられた孤児だ。顔や声さえ覚えていないし、物心ついた時には同じ年代の少年少女達と盗みを繰り返して毎日を生き抜いていた。誰も信用してはならないし、弱みを見せてはならない。誰よりも先に出し抜かなければならないし、相手を蹴落としてでも上へ這い上がっていきたかった。だって、死にたくなかった。死ぬのが怖かった。死がどういうものかは分からなかったけれど、とにかく恐ろしかったのだ。

生きたい。何でも良いから生きていたい。

その為には何だってしてきたし、当時はそれしか考える事が出来なかった。今なら冷静にあの頃を思い返す事が出来る。あの時の自分は人間ではなかった。畜生と同じだ。しかしシーカーに拾われてから、全てが一変した。きっと、シーカーは自分の生への悲壮なまでの執着心を見抜いていたのだろう。

人としての命を吹き込んでくれたシーカーに、忠誠を誓った。

いずれ、この俺がシーカーの右腕になるのだ。

ウィリアムは隣で唸り声を上げているリィンを盗み見る。こいつがウォルハンドと勝負をした事で、周囲とのわだかまりも一気に溶けていった。他の軍人達もこの視察に初めて参加して、しかも危険を

持ち込んで来たリィンを良く思っていなかったのだが、リィンの捨て身の覚悟を目の当たりにして、誰が文句を言えるだろう。
良く見ると女みたいに整った顔立ちをしている。手足も細く、どこにそんな力があるのか分からない。
…変な奴。

「お前ってさ、そんなにラディスが好きなわけ？」

何の気なしにそう言うと、たちまちリィンの顔が赤く染まっていった。

「べ、別にっ！」

「あーあ。分っかりやすい奴！知ってんの？ラディスって男だぜ」

「知ってるよ！」

ウィリアムは少し面白くなった。あんな恐ろしい軍人にも物怖じしないくせに、急に隙だらけになる。からかってやりたくなる。

「ふーん。じゃあ男同士でヤる時ってどうするか知ってるわけ？」

「は！？」

「ケツのあ…」

ウィリアムは何の前触れもなしに、ごろんと後ろへ転がった。身体が痛くて動かせないリィンが、『力』を使って彼を転がしたのだった。

「もう寝ろよ！うるさい奴だな！」

彼は転がったまま、夜空に向かってかかかと笑ってから、真面目な顔に戻って呟いた。

「なあ、ラディスの出した交換条件て何だよ？あいつは何をケイロスに要求したんだ？」

「…何も聞いてない」

情けなさそうな声が隣から聞こえた。ウィリアムは鼻から息を吐き出し、こいつに聞いたのが間違いだったと思い直す。

交換条件という事は、この視察が成功したらという条件で、ラディスはケイロスに何かを約束させたのだ。それはルキリア皇族で帝国政府の中枢にいる彼をもってしても、なかなかの難題だという。しかしその条件を飲んだという事は、今回のこの遠征がどれだけ重要で危険なものであるのかを裏付けていると言える。

「ふん…。面白いじゃんか」

ウィリアムは星空を見上げてにやりと笑った。

◇◇◇◆

昼下がりの診療所では、居室でクレイとニコル、チェムカが昼食をとっていた。

「はあ。リィン、大丈夫かしら…」

ニコルがぼんやりと宙に視線を漂わせたまま呟いた。

「んだなあ。先生もよくまあ許したもんだべ。リィン、本当は女の子なのに可哀そうだ…」

「そうよ！全く！あたしは心配で心配で、食事も喉を通りゃしないったら」

そう言う割にはニコルの皿は綺麗になっている。が、そこを突っ込むような事をクレイがするはずもなく、無言で茶をすすった。最近は事あるごとに、二人はラディスを責める。

「…ラディス様は護衛としてのリィンの腕を認めているのですよ。心から信頼しているからこそ、うるさく言わずに送り出したのでしょう」

じろり、とニコルとチェムカが彼を睨みつけた。クレイは内心びくつく。

ラディス様は、この二人の相手をよくしていられるものだ…。私には荷が重い。

その時だった。玄関口から、緊迫した人の叫び声が聞こえた。

「た、助けて下さい！誰かいませんか！助けて！」

驚いた三人は顔を見合わせて、慌てて玄関へと走る。見ると戸板に身体を横たえる婦人と、二人の男性が肩で息をしながら切迫した表情で目を泳がせていた。一人は白い髭をたくわえた老人、もう一人はずんぐりとした身体の顔の四角い男性。戸板の上にいる婦人は顔を歪めて苦しんでおり、うめき声を上げていた。ゆったりとしたワ

ンピースを着ている彼女のお腹が、大きく膨れている。妊婦だ。クレイはすっと冷たいものを感じながら緊張を高めた。

「どうしました！？」

「つ、妻が突然苦しみ出して…。ルーベン様の所へ行く途中だったんですが、もうそれどころでは…」

「奥さんは妊娠しておられますね」

「え、ええ」

「ううう…ああ！」

婦人が悲鳴を上げた。クレイが大きな腹に手を当てて触診する。おかしい。随分と膨れている。背筋に冷たい汗が流れ、全身が総毛だった。

これは…。過期。出産が随分と遅れてしまっている。

「何故、こうなるまで放っておいたんです！」

無意識のうちに叫んでいた。びくり、と主人がその大きな身体をびくつかせる。

「ル、ルーベン様のところで、診てもらっていたんです！しかしこいつのお腹の中には良くない気が溜まっていると…。そのせいで出産が遅れていると言って、祈祷をしてもらっていたんです！別に放っておいた訳じゃっ」

顔面を蒼白にさせておろおろと主人も叫んだ。

何とむごい事を…。

「あなたは自分の奥さんと子供を殺す気ですか！」

クレイは声を荒げて主人を叱りつけた。主人は目に涙をためて、口をわななかせる。婦人の傍にすがりつく老人も今にも泣き崩れそうだ。

「クレイ」

ニコルが彼に判断を促すように名を呼んだ。今、この診療所の医師はクレイだ。ラディスはいない。

「は、早くロンバート先生の所へ…」

しかしもう既に産気づいており、産道が開いている。移動している時間はない。どうする、どうしたら助けられる。

こんな時、彼ならどうするだろうか…。

ラディス様。

クレイは覚悟を決めて、全員に指示を出した。

「もう時間がありません、診察室に運びます。ニコルさん、お湯を沸かしてシーツを用意して下さい。チェムカさん、今すぐあなたのお母様を呼んできて下さい」

チェムカが慌てて石畳の道を駆けてゆき、ニコルが家中のシーツをかき集め、湯を沸かす為に居室へと消えた。クレイは二人の男性と

力を合わせて、婦人を診察室へ担ぎ込んでベッドに寝かせる。

「せ、先生…。あ、赤ちゃんを…。どうか、どうかっ！」

婦人がうめきながらクレイの腕を掴んで懇願した。恐ろしい程に鬼気迫る瞳。必死のあまり、腕がぎりぎりと締め上げられる。彼は額から汗を流しながらそれに答えた。

「大丈夫です！気を確かに、私の指示に従ってください」

婦人は何度も小刻みに頷く。部屋の片隅で呆然と立ち尽くす二人の男性を振り返って、声をかけた。

「ご主人、こちらに来て奥さんの手を取ってあげて下さい」

この状況に完全に飲み込まれてしまった主人は、すぐには動けない。

「早く！」

「は、はいいっ」

素早く両手に消毒をかけながら、目を閉じて深呼吸を繰り返す。落ち着け。この診療所の留守を預かっているのは私だ。ラディス様が不在の時に、その名に傷をつけるような事があってはならない。何より、婦人とお腹の中の子の命を救わなければ。

私は、医師だ。

クレイの脳裏にラディスの端麗な横顔が浮かんだ。診療中の彼の表情は、はっとする程に美しく、いつも澄んでいる。

必ず、助ける。

ゆっくりと深緑の瞳が開かれる。冷静さを取り戻した真摯な瞳がそこにあった。

０５５：二人の戦い２

「あー！やっと見えてきた！」

ウィリアムが大きな声を上げた。

太陽が照りつける荒野を延々と走り続けて、遠くにぽつんと集落が見えて来た。あれがゲムの村だとすれば、その向こうがロガートとの国境になるのだろう。しかし、見渡す限りの地平線。青い空に黄土色の大地。人の影すら見えず、視界を遮るものは一切ないような荒野だった。

「これが国境？」

ぼそりと呟いたリィンにウィリアムが答えた。

「何もないように見えるけどさ、あの村の先に少し盛り上がった山があるだろ？」

リィンは目を細めて先を見つめるが、どこにもそんなものは見当たらない。確かに地面はでこぼことしているが。

「ロガートの奴らは穴を掘って、その下で息を殺してこの国境を守ってんだよ。ルキリア側はあの村を、国境警備の為に作った」

「…全然見えないけど」

「ふふん。俺ってものすごく目が良いわけよ」

「その目を生かして、周囲を見てくれないか」

背筋を伸ばして優雅に馬にまたがるアルスレインが、ウィリアムに声をかける。

「…うーん。特に動きはないな。あの様子じゃ、ロガート側の警備もいつも通りの五人ってとこか」

「そうか。これから私達はゲムの村へゆく。リィンとウィリアムはここで待機していてくれ」

だだっ広い荒野に二人だけを残して、全員が村へと馬を走らせて遠ざかってゆく。

「けっ。これだから皇族って嫌いだ」

「何で？」

ウィリアムが心底嫌そうな顔を作って吐き捨てるように言った。

「あの村はルキリア国の要所だ。俺達みたいな一般人が踏み行っちゃいけないんだろ。ここまでお供させといてさ、良く言うぜ」

リィンは、ああそういう事か、と呟いた。

しかしここまで何事もなく無事に来れて良かった。まだ油断はできないが、あともう少しだ。身体はまだ痛むが何とかなるだろう。

「俺、皇族も貴族も大っ嫌いなんだよ。本当はぶっ殺してやりたいくらいさ。シーカーの命令だから大人しくしてるけど」

物騒な事を言う。彼は怒っているような表情で前を睨みつけていた。

リィンは複雑な心境でウィリアムを見つめた。自分と対して年の変わらないであろう赤毛の少年は、きっとただならぬ今までを生きて来た。顔は小さく身体も男性にしてはほっそりとしていて、その容姿が少年のように見える。しかしその瞳に宿る光は鋭く研がれた剣のようだ。

リィンはこの視察に同行する事によって、ルキリア皇族の本当の姿をまた見せられたような気がした。

アルスレインはあの若さで、帝国軍を統括する元帥の地位に収まっている。何という覚悟と重責だろうか。そして孤独な戦いを延々と続けてゆく。支持する者も批判する者も、暗殺を企てる者も全てをひっくるめて、手中に収めて統治していかねばならない。同時に国の外の脅威にも対応していかなければならない。何年も何十年も、この先もずっと。それこそ、力と知恵がなくては為し得ない事だ。一国の王となるのは、これ程に厳しいものなのだろうか…。

「…ん？あ、あーあ。こりゃあ、ひでえや」

不意にウィリアムが謎の言葉を発した。

「何？」

「見てみろ。村から煙が上がってら」

びっくりしてリィンは遠くの集落を見つめた。よく目を凝らしても、はっきりとは判別できない。しかし確かに、青い空にうっすらと一筋の煙が上がっているように見える。すっと身体の芯が冷えてゆく。

村が襲われている。

「どうして。誰も近づいてなかったじゃないか」

呆然と呟くと、ウィリアムが馬上で器用に両手を頭の後ろで組んで、さらりと言った。

「裏切ったのさ、村の奴らが」

「何…」

「そうとしか考えられないだろ?村の中に敵を潜めて隠していた。相手はロガートの軍人か、はたまたどっかの王子様が放った刺客か。金でも積まれたんじゃないの?」

「行こう!」

「嫌だね」

「何でだよ!?」

「良い気味さ。力もないのに自信だけたっぷりの王子様には良い薬だろ」

「…あきれた」

リィンがぎろりとウィリアムを睨んだ。

「僕はラディスの敵に、『力』を使う事を躊躇しない。相手も人間で家族がいる。だけど迷わない。僕は知っているからだ。人は、時に残酷に、悪魔のように人を踏みにじる」

迫害を受け続けているイリアス族であるからこそ、真に迫る言葉。

「人は結局、どんな状況においてもその本人の意思によってしか動かない。…僕は、以前にどうして人が人を憎むのか、妬んで相手を傷つけようとするのか、ラディスに聞いた事がある」

ウィリアムは姿勢を戻して、興味深そうにリィンの言葉に耳を傾けた。

「へえ。ラディスは何と言った？」

彼の答えは明快だった。

「それが一番簡単だからだ」

一番手っ取り早く、自分を保てる。他に理由を探さなくて済む。

リィンはそれだけ言い置いて、馬を走らせて村へと向かった。

ウィリアムはくすりと笑い、違いない、と呟きその後に続いた。

◇◇◇◆

「皆さん、どうか私に力を貸して下さい」

ベッドの脇にはニコルにチェムカの母、それにパウラもいる。チェムカの母が、出産を経験した女性が一人でも多い方が良いと言って、チェムカに家の留守を任せて彼女も連れて来たのだ。全員緊張で浅い呼吸を繰り返しているが、その瞳には力強い光が宿っていた。母は、強いものだ。この間も大きな腹を抱えた婦人が、悲鳴を上げ続けている。ニコルが必死になって婦人に声をかける。

さあ、しっかりしなさい。あなたはこの子のお母さんになるのよ。

「クレイ、どうすれば良いんだべ!?」

銀色の髪を一つに結い上げたチェムカの母が尋ねる。

「タイミングが大事です。私が声をかけますから、それと同時にいきむように言ってください」

婦人は痛みのあまり、力任せにいきもうとする。しかしそれではいけない。冷静に、そのタイミングを計るのだ。幸いに赤ん坊の位置は悪くない。一生懸命に生まれようとする子に、息を合わせるのだ。

「クレイ、赤ん坊をとりあげた事あるんだか?」

チェムカの母が婦人に呼吸を促しながら、クレイに言った。

「あります」

クレイは嘘をついた。馬の出産なら経験した事がある。しかし、人のそれはまだ実際には経験がなかった。ラディスが担当した出産に立ち会おうとしたが、あまりの壮絶さに卒倒してしまったのだ。

「はいっ! いきんで!」

クレイの掛け声とともに、女性達が一丸となって力を合わせた。

◇◇◆◆

濛々と煙が流れて視界が閉ざされる。剣がぶつかる金属音と怒号が辺りに反響して、一瞬どこにいるのか分からなくなった。馬が暴れ

て、手綱を掴んで大人しくさせるのがやっとだ。

「やべえ！イグルまでいやがるぞ！」

ウィリアムの怒鳴り声にリィンは目を凝らした。風が吹いて視界が開ける。ルキリアの青い軍服を着た軍人を襲っていたのは、山賊の格好に似た服装をした者達。リィンにはそれがロガートの軍人か山賊なのか区別はつかない。村人が辺りをわらわらと逃げまどっている。奇妙な形のイグルが数匹。あれは何だ。何の動物だ。全身は黒々としてべとついているが、毛はなく赤黒い皮膚がむき出しになっている。四つん這いになった四本の足は異様に長く、背が変に盛り上がっていた。

ぞっとした。

「ヒト型だ…」

「あ、ケイロス！」

ウィリアムが叫んで、馬の向きを変えて走ってゆく。ケイロスは山賊と戦っていた。ウィリアムはゆらりと剣を抜いて山賊が振り向こうとした瞬間に、一瞬も怯まずに相手を斬り倒した。それから手綱を引いてケイロスの傍まで戻り、飛び降りながら彼に怒鳴った。

「馬に乗ってここから離れろ！」

リィンは馬を走らせて、辺りを見渡す。倒れている村人。血を流している軍人。

どこだ！

「アルスレイン！ウォルハンド！」

突然バランスが傾き、馬がいななきながら崩れた。リィンは素早く受け身をとって着地する。腰に差した剣を引き抜いた所へ、相手の切っ先が襲いかかる。瞬間に瞳が深紅に燃え上がり、敵の姿を確認する暇もなく相手を吹き飛ばした。ぞわり、と背筋に只ならぬ悪寒。

「ゴアアアア」

奇妙な吠え声を上げて、ひょろ長い四肢を動かしてイグルが突進してくる。速い。

≪切り裂け！≫

無数の風が起こり、イグルの足と胴体がすっぱりと切れて紫色の血が飛び散った。そのまま肉の塊と化して、ごとりと地面に落ちる。立ち上がろうとした瞬間に、また敵の剣が振り下ろされた。リィンは反射的に剣でそれを弾き、相手がよろけた隙を逃さず足を狙って振り抜いた。

「うあああ！」

敵が叫びながら転がる。肩で息をしながら立ち上がって辺りを見渡した。惨状だ。視界の端にウォルハンドの大きな身体が見えた。彼は鬼人のように、敵をばたばたと倒している。背後に横たわっている紺色の軍服を着た人物。アルスレインが肩から血を流し、顔を歪めてうずくまっていた。

とにかく、まずはイグルを片づけなくては。これは『力』を使える自分にしか出来ない。視線をめぐらす。合計で六匹。それにこの村の規模も小さく、人間の数も多すぎるという程ではない。

やれるか?…否、やるしかない。

リィンは意識を集中させる。

ふと脳裏に、この場に似つかわしくない程の、端正で涼やかなラディスの顔が浮かんだ。

ラディス。

僕はやっと、あんたの力になれそうだ。

紅い瞳が、敵を捕らえた。

０５６：二人の戦い３

診療所の長椅子に、頭を垂れて座る白髭の老人と、長い廊下を大きな身体を揺すって行ったり来たりしている男性。結局男二人は女性達に邪魔だと言われ診察室から追い出されてしまっていた。

「慈愛の女神、リリーネ・シルラ様。どうか、我が娘と孫をお守りください…」

お願いします、お願いします。
老人は腰を折って祈り続けている。

その時、診療所に赤ん坊の泣き声が響いた。

身体を固くして顔を上げる老人と男性。何て元気な声だろうか。何て、生き生きとした、産声だろうか。

扉が開いて女性が顔を覗かせた。額に汗をかいているその女性は、がりがりに痩せていたが瞳はきらきらと輝いていて、二人に笑顔を向けて言った。

「元気な男の子です。お母様も無事ですよ」

「お、おお…」

「神様…！」

その後の処置を手際良く終え、クレイはふらつきながらチェムカの母に言った。

「すぐに、ロンバート先生の病院へ…手厚い看護が必要です」

「分かった！」

「ニ、ニコルさん…」

「何だい先生」

ニコルはクレイの事を、名ではなく先生と呼んだ。この大仕事をしっかりとやり遂げた青年に、敬意を表したのだ。

「後は、頼みます…」

そのままゆるやかに、クレイの身体が真横に傾いた。

「クレイッ！！」

意識が遠ざかってゆく。ああ、やり遂げた…。ラディスの顔が浮かんで、それから思いがけず、懐かしい顔が浮かんだ。ストレートの綺麗な黒髪。前髪は眉の上できちんと切り揃えられており、いつも一つに束ねた髪型は清潔感に溢れている。じっとこちらを見つめる緑の瞳。彼女の凛々しい表情が、とても好きだった事を思い出す。

ソア…。

「…ソア」

「うんにゃ。俺様はミッドラウだ」

驚いて、勢い良く身体を起こそうとした。が、身体が動かない。

「えっ！？」

がたがたと身体が振動を感じている。何が何やら分からない。つい先程まで、診療所にいたはずだ。なのに今どう言うわけか揺れる馬車の座席にいる。顔に夕日が当たる。しかも自分を見ると身体をシーツでぐるぐる巻きにされて座席に縛り付けられているのだ。

「ちょっ？な…、なっ！？」

あまりの出来事に思考がついてゆかない。何とか顔を動かして声のした方へ視線を向ける。隣で立派な躯の馬を慣れた手つきで操るミッドラウは、肩まである黒髪を一つに束ね、また不思議な格好に身を包んでいた。てらてらと光る浅葱色の珍しい布地の服を頭からすっぽりとかぶって、銀色のベルトで止めている。スカートのようにその布地は膝まで垂らされ、その下に黒のタイツを掃いて足元はサンダルのような靴。袖のない服から逞しい腕が伸びていた。運び屋は声を上げて笑った。

「お前の驚きは無理もないな。安心しろ。あの母親と赤ん坊は無事にロンバートの所へ運んだぜ」

ああ、ではあれは夢ではなかったのだ。

「そ、それで私は、どうしてこのような拷問を受けているのですか…」

「はっはあ！お前は俺に≪運ばれて≫る最中だ。幌にはまだ荷がたくさん積んでるからな、それを降ろしながらお前を依頼主の元まで

≪配達≫する。お前の置き場がなかったから、仕方なく座席に置いたまでだ。気を失っている間に転げ落ちたら困るから括りつけた！」

クレイはぽかんと呆けてしまった。この現状の説明を聞いたところで、やはり訳が分からない。

ぼんやりと頭の片隅で思う。それでは診療所がしばらく休みになってしまう。ニコルとチェムカが患者達にロンバートの病院を紹介してくれるだろうが、悪い事をした…。

律儀な彼は、自分が縛り付けられているのにも関わらず、診療所の心配をしていた。

◇◇◇◆

イグルの頭が作り物のように、ばつん、と音を立てて弾け飛んだ。ウィリアムがぎょっとして崩れ落ちる化け物の胴体を凝視した。顔を上げると、リィンが前方を右へ向かってゆっくりと歩いているのが見えた。口を一文字に結んで、固く握り締められた手の甲には血管が浮き出ている。

ばつん、ばつん、とあらゆる方向から音が聞こえた。気色の悪いイグルが長い手足を伸ばして、ばたばたと横たわってゆく。全て頭が破裂して原型を留めていない。

恐ろしい。イグルではなく、リィンの事を恐ろしいと思った。

イリアス族の『力』というのは、これ程までに計り知れないものだったのか。そりゃあ白い悪魔と言って恐れられるはずだ。

敵も味方も、心臓を鷲掴みにされているかのように息を詰めて小柄なリィンに見入っている。戦いの音が止んだ。一人の山賊が、じりりとリィンに詰め寄る。その気配を即座に察してリィンが声を上げ

た。

「動くな！…頭を吹き飛ばすぞ」

山賊はそれ以上動く事が出来なくなってしまった。ぼんやりとそれを見ていたウィリアムが、はっとして軍人達に言い放った。

「何してんだ！今のうちに敵を制圧しろ！」

それで我に返った全員が、ばらばらと一斉に動き出す。山賊が数人でリィンに襲いかかろうとした。

「動くなと言っただろう！」

リィンが叫んだ瞬間に、大地が揺れた。人間達はその場で皆一様によろける。びしり、がりがり。聞いた事もないような不気味な音が耳に届いた。ずずず、と地響きが続く。

「こんなのアリかよっ！」

ウィリアムが怒鳴った。荒涼とした大地に亀裂が走り地盤が歪み、リィンの隣にある石造りの家がまるで生きているみたいにぐらぐらと揺れ出した。それから耳を覆いたくなるような轟音と全ての視界を遮る砂煙が上がって、その場にいる全員が、耳と目を塞ぎ身体を低くして、衝撃に耐えた。次に瞼を開いた時には、頑丈な石造りの家は膨大な瓦礫の山と化していた。ウィリアムは口をあんぐりと開けたまま棒立ちになる。今度こそ、数少ない軍人達が素早く動いて、敵と村人を拘束した。敵は毒気に当てられたように戦意を喪失しており、べったりと地面に座りこんでしまっている。

「リィン！もうやめろ！」

ウィリアムが大声をあげながらリィンに近づく。リィンは肩を激しく上下させて、こちらに背を向けて仁王立ちしていた。反対側からウォルハンドと肩から血を流したアルスレインがやって来る。唐突にリィンは膝から崩れ落ちて、両手を地面について動かなくなった。ウィリアムがリィンの元へ駆け寄って、その細い肩を掴む。全身が熱を持ったように熱く、汗が顎から滴り落ちている。身体が小刻みに震えていた。

「おい！大丈夫かよ！？」

「…へ、平気だ…。ここで気を失うわけには、いかない…」

絞り出すようにリィンが呟く。すぐ傍までやって来たウォルハンドが、躊躇なく剣を振り上げた。その行為にウィリアムが目を剥いて声を荒げる。

「てめっ！何のつもりだっ」

「…イリアス族は、やはり危険な種族だ。このまま生かしてはおけん」

ウィリアムがリィンを背後に庇うように立ち上がり、ウォルハンドに向かって剣を突き出した。

「…お前みたいなのを、化け物っていうんだ。人の心がないのかよ！このくそ軍人がっ」

「やめろウォルハンド。リィンを傷つける事は、この私が許さない」

アルスレインが怒気を含んだ声でウォルハンドを制した。リィンはまだ立ち上がれずに目を固く閉じて呼吸を整えている。アルスレインはふらつきながら、リィンの傍にひざまずいた。

「アルスレイン様…」

ウォルハンドが情けない声を出す。

「リィンよ。誇り高きイリアスの子。私達は勝ったのだ。君のおかげだ、感謝する」

それから立ち上がり、部下達にきびきびと指示を出してゆく。ウォルハンドの手がリィンに伸びる。

「おいっ」

屈強な体躯の軍人は、小柄なリィンを軽々と抱きかかえた。ぽかんとウィリアムがそれを見上げる。

「お前もさっさとついて来い、ウィリアム」

「…けっ！この鉄仮面め」

ウォルハンドは一瞬混乱した。驚愕、と言った方が近い。何故なら腕の中にいる忌々しいイリアス族が、見た目どおりの少年ではなく、今にも脆く崩れてしまいそうな程に線の細い女性である事を知ったからだ。

まさか、そんな事が…。

「お前は…」

「…こ、こんな風に『力』を使えば、怖がられる事は分かってる…。でも、それが何だ。この『力』は、ラディスの為にある…」

何という強さだ。その固い信念と、決意。

腕の中で苦しそうに呼吸をしているリィンの容姿をあらためて観察する。白い肌は透き通るようで、栗色の髪は埃をかぶってはいるが艶やかだ。どこにその強さが秘められているのだろうか。ウォルハンドは生まれてから二度目に、ルキリア皇族以外の者に興味と尊敬の念を抱いた。生まれて初めて皇族以外に興味を持ったのは、ラディスという町の医師だった。しかし彼は、口が裂けてもこの事は死ぬまで口外しないだろう。

０５７：次なる戦いへ

それから程なくしてケイロスが呼んだ援軍が到着し事態の収拾に当たった。最初の報告では、ゲムの村人達が山賊に脅されて、彼らを村に引き入れてしまったという筋書きだった。それはあの場にいた誰もが嘘だと分かるような安い言い訳だ。どんな物好きが、国境沿いの何もない村をわざわざ襲うというのか。本当の筋書きはこうだ。アルスレインを亡きものにしようとする皇族が山賊を雇い、村人達に金をばらまいて協力するように指示したのだ。しかしその事実をいくら村人や山賊が証言したところで、≪黄金の青い目≫を持つ皇族を捕らえる事は出来ない。それ程に手厚く保護されているからだ。悪事を企んで意地汚く笑っているその現場を、現行犯で押さえない限りは皇族を法で裁く事は不可能であろう。その法を作る側の人物なのだから自分達の都合で簡単にその秩序を捻じ曲げる事が出来る。そのうえヒト型のイグルの件だが、あれは非常に恐ろしい可能性を孕んでいる。ロガートの極秘の研究が、もしかしたら前進したのかもしれない。今回の出来事がきっと、ロガートにとっては良い研究材料になるだろう。以前から噂があった。ロガートはイグルを操作しようとしており、あの怪物を武力に育てあげようとしているのだと。そうなるとルキリア皇族の中にも、ロガートに通じている者がいるのかもしれなかった。どうやってこの襲撃にイグルをねじ込んできたのか。これは今後も継続して調べ上げなくてはならない課題だ。

そして今回の最大の功績は、実行犯達を生きたまま捕らえられたという点だ。これで誰が黒幕で誰が一枚噛んでいるのか、存分に聞き出す事が出来る。敵味方双方とも極端に犠牲者が少なかったというのも幸いだ。これは視察に同行したイリアス族の存在が大きい。敵はイリアス族であるリィンの事を甘く見ていたのだ。それが大きな誤算となり、奴らは負けた。アルスレインがリィンに言った通り、

この作戦は成功し、謀略に勝ったのだ。
そこまで考えを巡らせてから、まあそんなの俺の知ったこっちゃないけど、とウィリアムは鼻白んだ。

何にせよ無事に帝都に帰る事が出来る。シーカーに報告したら彼は何と言うだろうか。
ウィリアムはその事をまた思索しながら笑みをこぼした。

きっと、リィンも欲しいと言うに違いない。

◇◇◇◆

一行はその後の対応を別の部隊に任せ、ゲムの村から近い小さな町で休息をとる事にした。皆、多かれ少なかれ怪我を負っている。この町には診療所等の医療機関がない為、軍の医療部隊がその治療に当たった。
ウィリアムはあの激戦の中にいて肘を少し擦り剥いただけで済んだ。彼の身の軽さは伊達ではない。
リィンはと言うと、大きな怪我こそないものの疲弊し切っており、今も酒場のカウンターにうなだれるように腰をかけていた。風呂に入って汗を流し、こざっぱりとしていたが身体が重く感じられる。

「あの…リィンさん」

控えめな声がしてリィンは気だるそうに背後を振り返った。ブラウスに黒のズボンというくだけた格好の若い軍人がそこに立っていた。

「良かったらこっちで一緒に食事をとりませんか？」

リィンは彼を見たまま動けなかった。

「おい化け物！こっち来いよ。みんなお前の話が聞きたいんだとよ」

テーブル席に座っているウィリアムが気安い声をかけた。そこにも数人の若い軍人達がいて、皆笑顔を向けている。

「僕は…」

リィンは戸惑いを隠せなかった。ルキリア帝国軍の軍人達と、食事を共にする事があるなんて思ってもみなかった事だ。イリアス族の自分の、何の話が聞きたいというのだろうか。その好意を素直に受け取りたいと思う気持ちと、迫害され続けた歴史でも聞かせてやろうかと罵りたくなる気持ちがぶつかり混乱してしまう。それと同時に頭の片隅で、全く別の事を考えている自分がいた。

ラディスに、会いたくて仕方ない。

その時、酒場の扉が開いて懐かしい人物が目に飛び込んできた。健康的な褐色の肌に、眉の太い精悍な顔立ち。生き生きとした黒髪を一つに束ね、浅葱色の不思議な服に逞しい身を包んだ人物は、リィンを見つけて大きな笑顔になった。

「よおリィン！お前すげえ武勲を上げたらしいな」

「…ミッドラウ？」

酒場にいる者達が彼の大声に振り返り注目している。ミッドラウの隣にはケイロスがいて、彼は軍人達の座るテーブルに足を向けた。運び屋は靴音を立ててずかずかと近寄り、がしりとリィンを抱き締めた。

「大したもんだぜ。お前って奴は！」

「ミッド！？どうしてここにいるんだ」

「お前を≪運び≫に来た」

「え？」

ミッドラウは華奢なリィンをひょいと抱き上げ、軍人達に向かって言った。

「そういう訳だ。邪魔したな！」

そしてずんずんと酒場を出てゆく。背後からウィリアムの声が聞こえた。

「どうなってんだ！？」

ミッドラウの愛馬ゼペスは暗闇の中、町の入り口に大人しく佇んでいた。幌馬車の荷台に、問答無用で荷物と一緒に放り込まれる。

「ってえ！」

リィンが声を上げて、馬車はすぐに動き出した。がたがたと振動が伝わってくる。

「リィン。無事で何よりです」

「クレイ！？」

暗闇に目を凝らすと様々な荷物の間に窮屈そうに座るクレイが見えた。穏やかな表情を浮かべているが、普段の彼らしくない。髪は乱れているし、その服装はよれよれだった。

「これ、一体何？」

リィンは状況が飲み込めずに声を上げる。

「ようし。あとはラディスだな！少し急ぐぞ」

外からミッドラウの大声が響いた。

◇◇◆◆

話の時間軸は、少しだけ巻き戻る。昨日ネルティエとグレイアは、これも恒例となっている孤児院の慰問へと出向き、その後は知り合いの家を回って歩いた。一方ラディスはシャルナンの小さな診療所に詰めて終日診察にかかりきりになり、三人は夕食だけを共にした。今日は夜にコンサートを控えている為、歌姫達は宿屋の部屋で静かに時を過ごしていた。グレイアはネルティエの美しい白の髪に念入りに櫛を通す。

「今夜は真っ赤なドレスが良いわ。それに目を隠す布は薄紫で決まりね」

とグレイア。ネルティエの舞台衣装は全て彼女が決める。盲目のネルティエに変わって、彼女の魅力を十分に熟知しているグレイアが、小物に至るまでの組み合わせを決めているのだった。

「ふふ。赤を着るのは久しぶりだわ」

不意にネルティエの髪を梳いていた手が止まった。

「…どうしたの？」

「階下の食堂が騒がしいわね。何かあったのかしら。見に行きましょう」

そう言ってネルティエの手をとって二人で部屋を出る。いざという時、傍にいた方が守りやすい為に二人は常に行動を共にしていた。階下へ降りると店の主人と常連の客達が玄関先で固まっているのが見えた。壁際にネルティエを立たせ、グレイアは大股でそちらへ向かう。

「そんな村の名前、聞いた事がねえな」

「ううむ」

「あ、あの。ここに有名なお医者様がいるって、聞いて来たんですが…」

十二、三歳くらいの黒髪の少年が店の主人を見上げている。その隣に立つ十代後半の少年が続けて口を開いた。

「どうしても会いたいんです。いませんか？」

兄弟だろうか。小動物を思わせる目元がそっくりで、今は少し怯えているような様子だ。二人とも痩せていて、身なりも随分とみすぼらしい。顔も泥ですすけており、とても貧しい村の出身であるのが

うかがえる。

「うーん。ラディス先生の事かな」

店の主人は彼らにラディスの居場所を教えて良いものかどうか迷っているようだった。

「待ってな。あたしが呼んできたげる」

グレイアの声にそこにいた大人達が振り返った。

「グレイア…。良いのかい」

少年達は、グレイアの下着姿のような格好を見て顔を真っ赤にして固まっている。グレイアは店の主人の問いかけには片手を上げただけで、すぐに外へ歩き出した。

良いも悪いも、身なりだけで人を判断して、何になるっていうんだか。

今ラディスは診療所の医師の家にいるはずだ。空にある太陽は昼間の輝きから西日へと変わろうとしている。四角い石造りの家の玄関を素通りし、裏に回って窓をのぞきこんだ。中では全身を布で覆ったような奇妙な格好をしたラディスとシャルナンの老医師が、大きな鍋と大きな杓子で何かを煮込んでいる最中らしかった。窓ガラスを叩くとラディスが気づいて窓を開けた。白い布の間から青い目だけを出している。薬草を煮て薬を作っている途中らしく、辺りに苦い臭いが充満した。

「あんたに小さいお客さんだよ」

グレイアは鼻にしわを寄せながら告げた。

０５８：地図にない村１

二人の少年は兄弟で、兄がヒアカ、弟がノエルと言った。このシャルナンの港町まで徒歩で丸半日かけてやって来たのだという。彼らは聞いた事のない村の名を告げて、ラディスにその村まで一緒に来てほしいと懇願した。

「お願いします！僕達のおじいちゃんを助けてください」

「様子がおかしくなったのはいつからだ」

「ええと…多分一年くらい前になります。朝起きた時に、目眩がすると言ってました。それからだんだんと身体が弱っていったように見えて、話す言葉もよく分からなくなって、今ではずっと寝たきりです。起きてもぼんやりと天井を見上げて僕らの声にも返事をしてくれない…」

宿屋の食堂の一角で、ラディスとグレイア、ネルティエが二人の話を聞いている。長身の医師は弱り切っている二人の少年を前にして、無表情のまま鋭く相手を観察していた。全てを見抜く、青い瞳。

「お、お金ならあります…」

おずおずと兄のヒアカが先程から手に握り締めていた小袋をテーブルの上に置いた。グレイアがそれを取って中身を確認すると、中にはパンケーキ一つが買えるか買えないかくらいの小銭しか入っていなかった。グレイアの表情を盗み見たヒアカが慌てて言った。

「村に帰れば、まだあるんです」

「お医者様、お願いします！」

ノエルがテーブルに突っ伏すようにして頭を下げる。

「…行って診てみない限りは何とも言えんな。もう手遅れの可能性がある。お前達、馬は乗れるか」

そう言いながらラディスが席を立った。二人の少年ははっとして、がたがたと椅子を鳴らして立ち上がる。

「僕は乗れるけど、ノエルはまだ…。あの、ありがとうございます！」

「礼を言うのはまだ早いぞ」

ラディスは店の主人に馬を二頭用意するように言って、手早く支度を済ませ馬の背に大きな鞄を括りつけた。グレイアとネルティエも宿屋の外の道まで出て、彼を見送る。

「ラディス。あんたその剣で行くつもり？」

グレイアが呆れたような声を出す。彼の剣は特別なもので、人を斬るようには出来ていない。万が一事件に遭遇した時にやりづらいのではないか。

「これは少々扱いが難しい剣でな、本当は斬れないわけじゃない。ぎりぎりまで近付いて、叩きつけるようにするんだ」

ラディスがグレイアを見下ろし、口角を持ち上げて笑顔を作った。

グレイアはぷっと吹き出す。

「原始的すぎるわね。そりゃあラディスにしか使えない剣だわ。あたしも一緒に行けたら良いんだけどねえ」

「お前はネルティエの傍にいてやれ」

「…ラディス、危険な事はしないでね」

ネルティエが虚空を見つめながら心配そうな声をかけ、彼のいる方へ右手を差し伸べる。

「ああ。ステージが始まる前には戻ってくるよ」

ネルティエの手をとり、その甲に優しく口づけた。しかし彼自身もグレイアも、簡単には済まないだろうと分かっていた。この二人の少年からは陰気で不幸な臭いがする。嫌な予感、というものだ。ラディスは弟のノエルを自分の前に乗せ、兄のヒアカを連れてシャルナンの町を後にした。

◇◇◇◆

全力で馬を駆って草原の道をひた走る。日がゆっくりと朱に色づき始めていて、東の空から幼い闇が現れている。ノエルが何とか首を曲げて後ろを見ると、兄のヒアカが必死になってついて来ているのが見えた。ノエル自身も振り落とされないようにしがみついているのがやっとだった。ちらりと見上げると、長身の医師の綺麗な顎が見える。まるで役者か何かみたいにスタイルが良く綺麗な顔だったので、ノエルは驚いていた。それに彼と一緒に話を聞いてくれていた女の人達もとても美人だった。帝都に住んでいる人達はみんな美

しいんだろうか…。
あっという間に草原の切れ間が見え、林が見えて来たところで馬のスピードが落ちて止まった。

「僕らの村はこの林の先にあります。すごいなあ、あっという間に着いちゃうよ」

ノエルは弾んだ声を出してラディスを見上げ、それから急に不安になった。

「…お医者様？」

彼は眉間にしわを寄せて、前方を鋭く睨んでいる。

「ひどい臭いだ…。村がイグルに襲われているかも知れん」

「えっ！！」

ノエルとヒアカが同時に声を上げた。

「そ、そんなはずは…。どうしてうちばっかり…」

「まさか、また！？」

「ヒアカ。≪早馬≫に知らせに行け」

ラディスが振り返ってヒアカに告げる。≪早馬≫とはルキリア国に点在する連絡拠点の事であり、要所の町に駐在している軍に連絡をとる手段の事だ。軍に応援を頼むという事は、村は一体どうなってしまっているんだろうとノエルは恐怖に身を竦める。しかしヒアカ

はもじもじとしてその場を離れようとはしなかった。

「どうした？」

「この近所には≪早馬≫がいる村が少ないんです…」

「兄ちゃん、隣の村には≪早馬≫がいるじゃんか」

「ばかっ！あそこは随分昔に喧嘩した村じゃないか！」

「…ヒアカ、そんな事は良いから今すぐその村に行け」

「だ、だけど、もう何年も行き来がない村なんです。大人達からも行くなって言われてるし…」

「くだらない事を言っている場合か？良く考えろ。死ぬぞ」

「で、でも…」

ヒアカが俯きながらぼそぼそと言って決断できずにいる。すると突然、ラディスが腰に差していた剣を抜いた。

「お、お医者様？」

ノエルが驚いてラディスを見上げる。びくり、と背筋が凍りついた。怖い。ぞっとするような殺気があたりを包んでいる。殺される。ゆっくりと剣がヒアカに突き付けられた。

「行って≪早馬≫に知らせるか、今この場で俺に斬られるか、選べ」

「ひっ！い、い、行きます！！」

ヒアカが口をわななかせ、慌てて馬を操り走ってゆく。ラディスは息を吐き出しながら剣を収め、馬の手綱を手繰り村へと進む。ノエルは恐ろしくて彼を見る事が出来なくなってしまった。この人は、本当に医者だろうか…。もしかしたらとんでもない勘違いをしていて、医者ではない人を連れてきてしまっているんじゃなかろうか。どうしよう。僕も後ろからばっさりと斬られる…。

「ノエル」

「うわあああ！ごめんなさい！！殺さないで！」

「…悪かった。ああでもしないとあいつを動かせなかった。村が襲われる事は以前にもあったのか？」

「あ、ありました。三日前です…」

ノエルはがたがた震えながら何とかそれに答える。答えないと殺されてしまうような気がした。

林の中はすっかり闇に溶けていて、空を見上げると一番星が輝き始めていた。前方に村の灯が見える。おかしい。灯がやけに明るい。近づくにつれて、小さな村の様子が見えて来た。

「あっ！燃えてる！」

一軒の家からごうごうと炎が上がり、濃い煙が立ち昇っていた。十数棟の点在する家屋で村は形成されていて、道の整備もされておらず土埃もひどい。人の姿は見えず炎に照らされている道に、何か不穏な形の生き物がうろついているのが見えた。野犬型のイグルが数

匹。

「うああ！イグルだっ」

ノエルが恐怖に引きつりながら叫ぶ。馬の速度が上がり、ラディスが片手で馬を操りながら剣を引き抜く。

「振り落とされないようにしっかりしがみついてろ」

ノエルはぎゅっと馬の首に掴まった。村の人達は無事なのだろうか。父さんや母さんは、おじいちゃんは無事なのだろうか…！

イグルがこちらに気づいて走り出す。口の端が裂けた割れ目から、真っ黒の牙を見せて高く飛び上がり、襲いかかってきた。

「わあああ！」

ノエルは恐怖のあまり叫んで目をつぶろうとした。しかし瞼が張り付いてしまったみたいに、目を見開いたまま閉じる事が出来ない。

ラディスの剣が風を切り、イグルの胴体を真っ二つに斬り裂いた。背後からも数匹のイグルが追いかけてくる。馬も必死で駆ける。飛び上がってくる瞬間に容赦なく頭に切っ先を突き立て、イグルが突き刺さったままの剣を振るって別のイグルに叩きつけた。ごぼん、と奇妙な音がして紫色の化け物の血が飛び散る。

ノエルは大地を駆ける馬の足元だけを凝視していた。顔を上げる事も出来ないし、目を閉じる事もできない。馬の首にしがみついている手が痺れてきてしまった。ああ、どうしよう。ここから落ちたら死んでしまう！そう思っていた時、馬のスピードが徐々に落ちてきて、それから止まった。

「ノエル、大丈夫か」

ラディスの声。炎が家屋を燃やしている音だけが辺りに響く。ノエルはやっと身体を起こして背後を振り返った。朱色に照り返る道の上に、点々と盛り上がった塊が見える。

「…ぜ、ぜんぶ、やったの？」

「ああ」

「ノエル！」

向かいの家から、ノエルの母親が走り出て来た。

「母さん！」

ラディスが馬から降りてノエルを降ろしてやると、母親はしっかりと息子を抱き締めた。点在する家から人々が姿を現す。

「ノエル、ああ…。無事で良かった！どこ行ってたのよ！お母さんは心配で心配で…」

「僕、お医者様を連れて来たよっ。おじいちゃんを治してくれるよ！兄ちゃんは軍を連れてきてくれるんだ！」

村人達がぞろぞろと集まってくる。ノエルと母が炎を背にして立つ人物を見上げた。

すらりとした長身に目を見張るような美しい容姿。青い瞳の奥が金色に輝いていた。

０５９：地図にない村２

「これを全てあなたが…？」

ノエルの父がおそるおそる話しかけた。痩せているせいで顎が尖り、頬もげっそりとこけているが、年は若い。

「怪我人はいるか？村人はこれで全員か？」

ラディスはそれに答えずに化け物の血がついた剣を振るいながら質問した。

肩を寄り添い合わせる老夫婦に小さな子供を背負った父親、泣いている娘の肩を抱く母親。村人達は遠巻きにラディスを囲んで集まっており、皆一様に暗い顔をしていた。お互いの視線を交わし、仲間の安否を確認する。その中の誰かが声を上げた。

「あ…。トレマがいない。トレマのとこの家族がいないぞ」

「俺が行こう。案内してくれ。他の皆は村で一番大きい家に集まるように。またイグルが出る可能性がある。どうやらここは狙われているようだな。軍が来るまで油断出来ない。ここの長はいるか？」

「僕のおじいちゃんだよ」

ノエルが背の高いラディスを見上げて言った。

「…お前のじいさんは病気じゃなかったか？」

「サザイー様は病気じゃない。少し体調がすぐれないだけだ！」

厳つい顔をした村人が前に出て来て怒鳴った。

「ノエル！勝手な事をするんじゃない！」

「だって！」

言い返そうとしたノエルを、母がその身でかばう。

「すみません。この子には後で言って聞かせますから…」

「とにかく、今はこの先生の言うとおりにした方が良い」

「そんな得体の知れない余所者の言う事なんか…」

「きゃあああああ！」

女性の悲鳴が響いた。村人達が身体を固くして振り返る。目の前の古ぼけた家から、子供を抱えた婦人が飛び出してきた。

「どうした！」

ノエルの父がそちらへ向かおうとする。

「逃げてー！」

婦人の走り出て来た家の扉が、ばきばきと音を上げた。別の村人が婦人を抱きとめ、皆がじりじりとラディスのいる方へ後ずさる。家の中に、何かがいる。

「あ…あが…がが、が…」

ぐらりと大きな影が揺れて、そこから声が漏れた。べしゃり、と気味の悪い音と共に足が出る。靴を履いている。

「ま、まさか。トレマが…？」

「何てこった…トレマがやられた」

服を着たイグル。

背は異様に盛り上がっていて既に骨格が歪んでいるのが分かる。目と口は何とか判別できるが、鼻があるべきところにぽっかりと穴が空いていた。赤黒い皮膚は血とイグルの体液で不気味に光っている。ふらふらと歩き、僅かな理性が見え隠れしていた。

「…何故こうなるまで放っておいた」

ラディスが低く呟く。

「こ、この村には特効薬も毒もありません。お金がなくて買えないのです…」

ノエルの父が顔を真っ青にしながらそれに答えた。村人達は変わり果てたトレマを呆然と見つめる事しか出来ない。ノエルが目に涙をためて、ラディスにしがみついた。

「お医者様、トレマを助けて下さい！」

「ああなってしまったら、もう助ける術はない。皆後ろに下がっていてくれ」

「そ、そんな…」

その場にマントを落とし、ラディスが前に歩き出す。子供を抱えた婦人の前で立ち止まり、告げた。

「あなたのご主人を弔います。よろしいですか？」

青い瞳が真っ直ぐに婦人を見つめている。揺るぎないその瞳はこの状況においてもひどく冷静だった。

婦人は滂沱の涙を流しながら、一つ頷く。

ノエルと村人達はいまだに燃え続ける家を背にして、息を詰めてラディスの背中を見つめていた。彼は迷う事なく真っ直ぐにトレマに近づいてゆく。トレマが彼に気付き、崩れかけた顔を向けて、口を開いた。

「ご、ごが…」

突然、不気味な身体が伸びあがり、ラディスの左肩に噛みついた。村人達から悲鳴が上がる。ラディスが一歩よろけて、ゆっくりとトレマの身体から力が抜けてゆく。いつの間にかラディスの剣が彼を貫いていた。

「お医者様！」

ノエルが叫ぶ。ラディスはトレマの亡きがらを抱きかかえるようにして、その場にひざまずいた。

「た、大変だ…。あの人までイグルになってしまうぞ」

「特効薬を持っているはずだ。早く渡さないと…」

「きっとこれだ」

ノエルの父が馬の背に括りつけられた彼の診療鞄に気付いて、慌ててそれを手に取った。ずしりと非常に重く、両手で抱えてふらつきながらラディスの元へ歩いてゆく。ノエルが駆け寄って、鞄に手を添えて父を助け、他の村人達もよろよろとその後ろに連なった。

「せ、先生…」

ラディスはトレマに視線を向けたまま、何かを呟いていた。

「あ…」

清らかな風／かの偉大なる魂は／大いなる泉へと還る／安住の地へ勇敢なる兄弟を送る／その足跡は光を満たし／その息吹は黎明な未来をも照らす／一時の揺らぎに巡る／光芒の道を歩め／されば来世も使徒として／リリーネ・シルラの意思を継がん／使徒ラディス・ハイゼルの名の元に／この者の前途を荘厳せん

イグルの体液と血でべとついたトレマの額に、静かに口づけを落とした。

それは、弔いの祈りだった。

「ああ…。あなたぁー！」

婦人が泣き崩れ、村人達から嗚咽が漏れる。ラディスは肩で息をしながら鞄に手を入れて、自分の腕にぶすりと注射を突き刺した。あまりの壮絶な光景に、皆震えて涙を流している。ノエルの父が、今

にも消え入りそうな声で言った。

「私の家が一番広いので、皆をそこへ集めます。父もそこに寝ていますから…」

「お医者様…大丈夫なの?」

ノエルが目を真っ赤にしながらラディスの顔をのぞきこむ。彼はすっくと立ち上がって、ノエルの頭に手を置いた。

「大丈夫だ。俺は強いからな」

◇◇◇◆

「サザイー様は、とても賢くて立派な長だったんです」

大きな広間に村人達がそれぞれ持ち込んだ椅子にぐったりと座りこんでいる。壁際にはベッドがあり、そこにノエルの祖父、サザイーがぼんやりと天井に視線を向けながら身体を横たえていた。ラディスはノエルの父に借りたブラウスとズボンに履き替えて、無言のままサザイーを診察している。脈を測り心音機を胸に当て、瞼を裏返したり口を開いて見分する。次にシーツをはいで足や腕を触診してゆく。研ぎ澄まされた視線は鋭い。気分の悪い者や怪我をしていた者達も既に彼の診察を受けていた。

「…それで。何故今まで軍に連絡をしなかった?そのせいでイグルに目をつけられたんだぞ。一度襲われた時点で対処していれば済んだ事だ」

ゆっくりと長身の身体を伸ばし、村の男達に向き直った。服の丈が

合っていない為にブラウスのボタンが留められなかったようだ。肩は彼自身が手当をして、今は包帯が巻かれている。

「それは…≪早馬≫のいる村と絶縁状態になっていて…」

「だったらどうして、このじいさんの治療をしなかった?」

「この村にはそんなお金はないんだ。仕方なかった」

「何故今も病気の老いぼれがこの村の長をしてる?何故次の長を立てなかった。大人の男共がこれだけいながら、今まで何をしていた」

ラディスは容赦なく村の男達を攻め立てた。青い瞳にすっとした鼻筋、薄い唇。彫像のような美しい顔は無表情で冷たい印象を受ける。

「…今日来たばかりの若いあんたには、分かるわけがない」

俯いたまま白髪頭の男がぼそりと呟いた。

「その通りだ。俺達だって、何とかしようとはしたんだ。努力したんだ」

「サザイー様だって病気じゃないかも知れない。明日になれば良くなってるかも知れないじゃないか」

黒い、粘着質の闇のような渦が男達をうずめてゆく。

どうしようもなかった。仕方なかった。頑張ったけれど、駄目だったんだ。

「そうだ!余所者のあんたに何が分かる!偉そうな事を言いやがっ

て…」

大柄な男が立ち上がってラディスに掴みかかろうとする。彼は素早く身をかわして、思い切り男を殴りつけた。がたた、と椅子が鳴ってその場に崩れ落ちる。男達は呆然として顔を青くし、女達はじっと息を殺して怯える。ノエルは母にぎゅうと抱き締められ、ノエルの父が中腰のままどうして良いか分からずにいた。

「全て言い訳だ。本当に、仕方なかったと思っているのか？本当にどうにも出来なかったのか？お前達には頭がないのか！どうして子供が、助けを求めに行ったか分かっているのか！」

ノエルの幼い頬に、涙が伝う。

殴られた男が床に突っ伏したまま声を上げて泣き出した。

今までずっと、目を背けて見ないようにして来た現実を否応なしに叩きつけられる。首を掴まれて、無理矢理にこの悲惨な現実と対峙させられる。部屋に啜り泣く音が満ちる。村人達はがっくりとうなだれて涙を流していた。一人の婦人が震える声で話し始める。

「…分かっていたんです。このままじゃいけないって。でも誰も、現実を見たくなかった…。怖かったんです。サザイー様がいつも全てを決めてくれていたから…明日には良くなるかもしれないって。明日こそはって…」

ラディスは無言で鞄の中からあるだけの特効薬を置いてゆく。近くにいた婦人達に様々な薬品の用途を伝え、次々と手渡していった。それからサザイーの介護の仕方を教え、婦人達は真剣な表情でその言葉に耳を傾けた。彼はすっかり軽くなった鞣革の大きな鞄を担ぎ、そのまま扉を開いて部屋を出て行ってしまった。

「先生…」

ノエルと、その父と母、数人の村人達がラディスの後を追って薄暗い外へ出た。

「私達はこれからどうすれば…」

いくつもの縋るような視線が向けられる。村人達は無意識の内に、ラディスという強い存在に拠り所を求めようとしていた。

家を燃やしていた炎は全てを焼きつくし、ちろちろと赤い火が煤けた瓦礫をなめるように燃やしている。東の空が黒い闇から藍色に変わり、既に夜が明け始めていた。

「お医者様…」

「ノエル。お前のじいさんはすでに末期だ。脳に血の塊が出来ているようだ…お前の力になってやれずに、申し訳ない」

ラディスを見上げているノエルに、真剣な表情のまま告げた。少年は俯いて、その幼い肩を母が包んだ。ノエルの父が彼に近づく。

「先生、これからどうすれば…」

「あなたが、ここの長になるんだ」

ラディスが真っ直ぐにノエルの父を見据えた。

「そんな…。私に出来るでしょうか。私には父のような判断力もないし…」

「あなたの父も、あなたも同じだ。判断力も数をこなしていけばおのずと身につく」

それでも不安そうにノエルの父は弱々しい視線を向けている。

「そうだな…。ひとつだけ違う点がある」

「…それは、何ですか」

ノエルの父と村人達がじっとラディスの言葉を待つ。

「覚悟だ」

サザイーにはあって、ノエルの父にはなかったもの。サザイーにはあって、村人達にはなかったもの。それはこの村を守っていこうとする覚悟だ。全ての責任は自分にあるのだという心で生きる。誰かがやるのを待つのではなく、自分がやるのだという、その覚悟。

「あなた方はまだ何もしていない。頭が割れる程悩んで、血反吐を吐くまで動くんだ。何度失敗しても、立ち上がらなければならない。それが本当の努力というもんだ。

イグルに襲われたのはトレマだけじゃない。あなた方も、一度命を落としている。この日が昇ったなら、生まれ変われるだろう。これ以上ない程辛い経験をしたんだ。他に何を恐れる必要がある」

意思のある、力強い声が響く。村人達は真摯な瞳で、目の前の青年を見つめていた。

ラディスはもう一度、ノエルの父と視線を合わせて言った。

「この村の事はあなたに任せる。必ず、支援を届けよう」

遠くの林から灯りが近づいてきた。激しい馬の足音が聞こえ、あっという間に軍の保安部隊が小さな村になだれ込んできた。

「ノエル！」

ヒアカが一群から抜け出て、馬から飛び降りた。そのままつんのめるようにして前へ転んでしまった。慣れない馬にずっとまたがり、必死で走り続けたのだから当たり前だ。

「兄ちゃん！」

「ヒアカ！」

ノエルと母がヒアカに駆け寄る。

「イグルに襲われている村というのはここか！この村の長はいるか！」

武装をした軍人が馬上からラディス達に声をかけた。ノエルの父が意を決したように一歩前に出る。

「この村の長は、私です」

ラディスは静かに村を後にした。結局はノエルの祖父を助ける事は出来なかった。彼は肩の痛みを感じながら、馬をシャルナンへと走らせていった。

◇◇◆◆

小さな村に警備網が敷かれ、支援物資が届き村の住人達はやっと眠りにつこうとしていた。ノエルの父と村の男達は頭を突き合わせて、これからどうするかを真剣な表情で話し合っている。数人の女性達と子供達がテーブル席についてスープをすすっていた時だった。ふとヒアカが顔を上げてノエルに声をかける。ヒアカの表情も、この数時間で随分と大人びていた。

「あの綺麗なお医者様は？」

「あ…」

聞かれるまで忘れていた。皆顔を見合わせる。

「もう行ってしまわれたわ…」

ノエルは窓の外を見やった。空が白み始めている。

「僕、お礼も言ってなかった」

おじいちゃんは助けられなかったけれど、あのお医者様はこの村を助けてくれた。イグルになったトレマをきちんと弔ってくれた。そういえば、お金も払っていない…。

また会える時があるだろうか。強くて役者みたいに格好良いお医者様。不思議な目の色をした人。

名前も聞いていなかった事に、ノエルは心から残念に思った。

０６０：再会

小さな物音がして、グレイアはベッドの中で静かに目を開いた。夜が明けて朝日が昇り始めている。身体を起こして隣を見やると、ネルティエが愛らしい表情で安らかに眠っていた。昨日はコンサートを終えた後も随分と遅くまでラディスを心配して起きていたので、まだまだ深い眠りの中だ。じっと耳を澄ましてから、気配を殺して部屋を出る。グレイアは黒の髪を胸元まで垂らし下着姿だったが、普段の服装とたいして変わらない。気配を絶ったまま隣の部屋の扉を音を立てずに薄く開き、素早く室内に侵入する。

暗くランプの灯が照らすベッドの上に、ラディスが仰向けになって眠っていた。疲れきっているようで風呂から出た後にズボンだけを履いて、ベッドに倒れ込んだようだ。上半身は裸で、薄茶色の髪はまだ濡れている。美しい筋肉が隆起した引き締まった身体。男の中ではダントツで彼の事を気に入っている。

あらゆる意味で、強い男。

グレイアはそっと近づきラディスの上に馬乗りになって、形の良い薄い唇に自分の唇を重ねた。彼は相当疲れているようだ。無反応な彼の舌に自分の舌を絡ませて、深く口づけてゆく。ぴくりと反応を示してラディスがグレイアの腕を掴んだ。

「…グレイア。見ての通り俺は疲れてる。頼むから寝かせてくれ」

冷静な声がグレイアに向かってかけられた。グレイアは自分の身体を押し付けて、その首筋にキスを落とす。

このあたしが迫ってるっていうのに、まだそんな冷静な声が出せるなんて。憎たらしい男。

「嫌よ。こんなチャンスめったにないもの…」

吐息と共に言葉を吐き出し、ゆっくりと右胸の烙印に舌を這わせる。

「お楽しみのところ邪魔してわりぃな！」

底抜けに明るい声が響いた。グレイアはラディスに覆いかぶさったまま振り返る。

「…あら。どうしたのミッドラウ」

戸口に不思議な格好をしたミッドラウが腕を組んで突っ立っていた。精悍な顔立ちに笑顔が浮かんでいる。視線を横にずらすと、扉に張り付くようにしている小さい影が見えた。

「…リィン」

ラディスが呟く。小さな影はびくりと肩を震わせて、こちらを見ないまま慌てた声を出した。

「ぼ、ぼく、先に馬車に帰ってるね」

ばたばたと階段を駆け降りる音。ラディスが頭を掻きながらゆっくりと身体を起こした。深いため息。

「おい、すぐ支度をしろ。出発するぞ」

運び屋はずかずかと室内に入り、椅子にかけてあったブラウスを投げて寄こした。グレイアが立ち上がって睨みながら彼に近づく。

「ほんとよ、おじゃま虫。やっと手に入れられるところだったのに。それともあんたが相手をしてくれるの？」

妖しく笑って、彼の逞しい首に腕を絡める。ミッドラウはにやりと笑ってグレイアの腰を抱いた。

「そいつは良い提案だが、俺は今≪配達≫の途中だ。また今度頼むぜ」

「グレイア。ネルティエによろしく言っておいてくれ」

そう言い置いて二人の男は慌ただしく部屋を後にし、グレイアは気だるそうに片手を上げてそれを見送った。

大股で朝日の落ちる石畳の上を歩く。シャルナンの町はたった今起き出したところで、早起きの老人が履き掃除している。ラディスは前を向いたままミッドラウに話しかけた。

「お前なあ、どうしてリィンまで連れて来たんだ。馬車で待たせておけば良かっただろう」

「あいつが一緒に行きたいと言ったんだぜ。分からんのか？お前に早く会いたかったんだろうよ。女心とはそういうもんだ」

「…こんな野蛮人に、女心を教えられるとは思わなかった」

「何を言う。俺様は女心が分かる野蛮人だぞ」

幌馬車が見えてきた。座席の端にこちらに背を向けて座っているリィンの小さな背中。

「これからどこへ行く?」

「お前が何度言ってもきかないもんだから、シャウナが痺れを切らしたんだ。強制召集だぜ、俺の元に書簡が届いた。レーヌへ行く。クレイもいるぞ」

幌のついた荷台からクレイが降りてきてこちらに向かって一礼をした。その姿を見て、ラディスが隣を歩くミッドラウを睨みつける。

「まさかここまで宿をとらずに来たのか?」

「ん?そうだが?」

「…阿呆」

「はあ?」

「ラディス様。ご無事で何よりです」

クレイがラディスに笑顔を向けた。

「顔色が悪いな。全然寝てないだろう」

「え、ええ…」

長身の医師はすぐに相手の状態を見抜く。背後でミッドラウが自分の額をぺしりと叩いた。

「そういやクレイちゃんはとってもデリケートな奴だったな!すま

んすまん！」

ちっとも悪いと思っていない口調で告げて、ひらりと座席に飛び乗る。リィンが心配そうな顔をクレイに向けた。

「クレイ…大丈夫？」

「ええ。すみません」

ラディスがリィンを見ると、慌てて身体を引っ込めてしまった。

「さあ乗った乗った！ここからならレーヌまではあと少しだ。海を渡らにゃならんから、この先の港で宿をとってやる！」

勢いよく幌馬車が走り出した。

◇◇◇◆

「おいリィン。そんなに気にするこたぁねえぞ」

ミッドラウが隣に座っているリィンに声をかけた。レーヌ国に渡るのは明日の朝になりそうだ。レーヌは島国で、定期便の船が運航している港に着くのは夕刻になるだろう。

「…べ、別に！」

「なら良いんだがな」

リィンは不機嫌な声で続ける。

「グレイアはスタイルが良いもんね…。胸が大きくって、大人の女って感じだ。…ラディスが前に言ってたもん。女性らしいスタイルの人が好きだって」

「そりゃあ男なら誰だってそうだろうよ」

そう言うとリィンが黙り込んでしまった。

ミッドラウはぎょとして、器用に馬を操りながらリィンを見下ろした。てっきりこの二人は既にそういう関係になっているのかと思っていたのだ。

「なんてこった…。お前ら病気か!?同じベッドに寝ていやがるのに何もしてねえってのか!?」

女心が分かると豪語したミッドラウだったが、この言葉でリィンが激しく傷ついた事を知るはずもなく、そのまま唸って考え込んだ。

あいつの理性は自分の知らない所でむくむくと巨大に成長してしまっていたらしい。それとも恩人の娘ってのが引っかかってるのか。どっちにしろまるで良い年こいた爺さんじゃねえか。これじゃあちっとも面白くない。

「あの野郎…自分を律するにも程があるぜ」

リィンはショックのあまり呆然としたまま彼を見上げた。ミッドラウは自信満々でリィンに笑顔を向ける。

「ようし!見てろ、俺様があいつの化けの皮をはがしてやる!」

リィンは意味が分からずに首を傾げた。

◇◇◆◆

夕暮れ時に大きな港に着いた。巨大な帆船が停泊している海の傍には、食堂や宿屋が軒を連ね、通りにはたくさんの荷物や馬車が行き来をしている。ルキリアの国中に散らばって仕事をしている運び屋達が集まる所でもあり、屈強な男達や逞しい二の腕の港の男達が大きな声で会話を交わしていて活気に満ち溢れていた。ここで今晩は一泊して明朝にレーヌ国へ渡る船に乗る。

「今回の荷物は人間だからな。ここで知り合いに馬車を預けていく。じゃあな、ゆっくり休めよ」

皆で夕食を済ませた後、ミッドラウは一行を宿屋まで連れてゆくと、自分はさっさと出て行ってしまった。

「ミッドってどこにでも知り合いがいるんだね」

「おおかた女の所だろう。今夜はもう帰ってこなそうだ」

「…すみません。私も先に休ませていただきます」

クレイが小さく呟いてよろよろと部屋へ入っていった。彼はもう数日間まともに睡眠をとっていないだろう。同じ部屋に他人がいるだけで眠れない程の神経質な面がある彼には、この旅は相当苦痛だったはずだ。

リィンとラディスの二人だけになると、急に気まずい空気が流れる。どうしよう…、とリィンが思っていた時だった。

「おお！ラディス！さっきそこでミッドラウに会ってな、お前が来

てるって聞いたもんだから…」

髭をたくわえて眼鏡をかけた壮年が笑顔で近づいてくる。リィンは静かにマントのフードをかぶった。旅先では自分がイリアス族であるというのを極力知られたくなかった。そのせいで余計なごたごたを引き起こしたくないからだ。

「デルネか。元気そうだな」

ラディスも笑顔でそれに答え、二人は固い握手を交わした。

「あんたが来たら診てもらいたい症例があったんだよ。それに薬の調合の事でも分からん事がある。明日には発つそうだから、今から来てもらえんか」

どうやらこの港で働く医師か何かのようだ。ラディスがリィンを振り返って言った。

「お前は先に部屋で休んでいろよ」

リィンはラディスの護衛であったが、素直に頷いて二人を見送った。心のどこかでほっとしている。

あれ以降、どうしてもラディスの顔を見る事が出来ない。それに彼はどこにいても忙しそうだし人気者だ。自分なんかの相手をする暇なんてない、と言い聞かせる。本当は色々話したいし、視察が成功した事を褒めてもらいたかったのだが素直になれなかった。

会いたくて会いたくて、仕方がなかったのに…。

０６１：優しい光

それから部屋に行き、日課である『力』の鍛錬に集中しようとするが思うようにいかない。諦めて風呂に入っている間もずっと、リィンの気持ちは沈みっぱなしだった。
それによりによって、どうしてラディスと同じ部屋なのだろうか。クレイでさえ何の疑問もなくリィンとラディスを同室にしてしまった。部屋にはベッドが一つしかない。診療所では確かに一つのベッドで寝ているし、今更意識する必要もないのだろうけど…。

「ふん…」

だんだん腹が立ってきた。風呂から上がり、脱衣場で腹立ちまぎれにごしごしと頭を拭う。
どうせこんな風に意識してんのは自分だけだ。ラディスは大人だから、ああいう事も平気だし初めてじゃないんだろう。
ミッドも何であんな事を言うんだ！どうせ僕は子供だよ！胸だってないよ！
いや違う、僕は男として生きていくんだから、そんなのどっちだって良いんだ！ラディスにはユマがいるんだから！
リィンはどうにもならないジレンマに苛々を募らせる。
…もう、知るか！

素肌にブラウスを羽織り、細身のズボンを穿いてぶつぶつ文句を言いながら部屋に戻る。
と、部屋のベッドの上に片足をかける格好で座っているラディスがいた。リィンはびっくりして口を開け目を見開く。

「何だその顔は」

「…い、いると思わなかったから」

さっきまでむかむかしていたはずだったが、途端にびくついて彼に背を向けてしまう。

「リィン」

「…何だよ」

「こっちに来い」

「嫌だ」

「診てやるから…」

そう言われて、おずおずと背後を振り返る。ラディスが穏やかな表情でこちらを見つめていた。リィンは自分が一方的に苛々していたのを恥ずかしく思い、俯いたままベッドの上にちょこんと座った。

やっぱりラディスはいつも冷静で、優しい…。

ラディスが細い腕をとり、普段と変わらずに診察を始める。リィンは彼の伏し目がちな顔に見入っていた。どうしてだかこれだけで、胸がどきどきしてしまう。

出し抜けに、腕を掴まれてブラウスを二の腕までめくられた。その白い腕には打撲の跡と切り傷があり、痛々しい。ラディスが上目でリィンを睨みつける。

「やっぱりな。どうも歩き方がおかしいと思っていた」

「えっ…」

乱暴にブラウスの裾を捲り上げられ、上半身が露わになる。その透き通るような白い素肌にも青黒い打撲の跡がところどころについていた。

「うあ！何すんだよっ」

顔を真っ赤にして、ブラウスを押さえ込んだ。ラディスがリィンの細い腰を掴んで、ズボンまで脱がそうとする。

「ちょっと！やめろって！！こ、こんなの！視察に行った時に村が襲われてて、戦ったんだから当たり前だろ！」

「…俺は医者だぞ。この傷がどうやってついたかくらい見れば分かる。そんな戦闘の時に、なぶられたような傷がつくと思うか？」

ぐ、と言葉に詰まった。ラディスはため息をこぼし、リィンの腰から腕を回して、その華奢な身体を優しく抱き締めた。リィンはびくりと身体を硬直させる。

「っちょ…」

細い背中を包んでいる腕に、少しだけ力がこもる。ラディスはリィンの肩に顔をうずめて動かなくなった。リィンは恥ずかしさのあまり、くらくらして気を失ってしまいそうになる。彼の薄茶色の髪が頬に当たっている。身体が密着しているのを感じるだけで、心臓がばくばくと飛び出してしまいそうな程に高鳴っていった。

「くく…。すごいな。お前の心臓」

「うう、うるさいな！」

「…行かせるんじゃなかった」

ラディスの低くて心地の良い声が、身体を伝って届く。

「…でも、僕、視察を成功させたよ？」

「ああ。良くやった」

嬉しい…。リィンは顔をほころばせた。僕はやっと、ラディスの役に立てた。たった一言だけで、全ての迷いや疲れが吹っ飛んでいくようだ。

ああ、会いたかった。

「あんたが、僕を信じて送り出してくれたからだ」

「お前をこんな風に使うつもりはなかった。…それにこれからもっと動きが大きくなるだろう」

「良いんだ。分かってる。僕、大丈夫だよ」

「もう無茶はさせない」

「ラディス…」

リィンを抱き締めている腕に、また力がこめられた。ぎゅうと胸が

締め付けられてゆく。二人の身体がぴったりと重なって、まるで一つに溶け合ってしまったかのようだ。

「…お前が死んだら、意味がない」

きゅう、と胸が詰まる。赤茶の瞳に涙が浮かんだ。

ラディスが自分の事を心の底から心配しているのが伝わってきて、それがとても温かく愛おしく思える。リィンの手がためらいがちにラディスの背中を包んだ。彼の匂いがリィンを包み込む。ミントハーブの優しい香り。そこでふと異変に気付いた。いつもの匂いに、少しだけ汗の匂いが混じっている。

「ラディス？」

そう言えば身体が熱い。リィンは彼の服を掴んで引っ張った。

「ねえ」

ラディスが顔を上げて見つめてくる。息が止まる程すぐ近くに彼の青い瞳があった。どきりとする。瞳の奥の琥珀色が綺麗に輝いているのがよく分かる。鼻先がかすりそうだ。いや、既に額と鼻先が触れ合っている。

「ちょっと…ち、近いよ…」

呟くようにラディスに抗議した。二人の距離が近すぎて、大きな声も出せない。掴んでいる服を引っ張って身体を離そうとするが、びくともしない。

「そうか？」

囁くような彼の声。息がかかる。リィンはぎゅっと目を閉じた。鼓動が早くなる。熱い…。
リィンを抱き締めている腕にまた力がこもる。どくん、と身体が脈打つ。

「あ…。は、離して…」

声が震えてしまう。呼吸が浅くなる。

「駄目だ…」

耳元で囁かれて、身体がびくりと震える。何も考えられなくなりそうだ…。
リィンは薄く目を開けた。そこで、はっとした。肩に包帯を巻いている。

「ラディス!?」

彼の身体から力が抜け、ずるりと寄りかかってきた。肩に触れると燃えるように熱い。

「これ、怪我してんじゃないか!」

ラディスは苦しそうに荒い息をしながら言った。

「俺の鞄の中に、痛み止めの薬がある…」

「分かった」

グラスに水を注いで薬を飲ませる。彼は壁に背をもたれて深く息をついた。驚いた事に、シャルナンを発つ時には既にイグルから傷を受けていたのだと言う。以前にリィンにも経験があるので分かる。特効薬のお陰でイグル化はしないで済むが、その毒はしぶとく身体を蝕むのだ。熱が数日出続けるし、リィンも完全に体調が戻るまで何日もかかったのだから。

「馬鹿じゃないの！？」

心配しすぎてリィンは怒っていた。あんなに強い彼が怪我をするなんて、余程の事があったのだ。そのうえ傷を負って熱まで出ていたくせに、ここでも人の世話を焼いて…。

「人の心配ばっかりしてっ。少しは自分の身体を気遣えよ！」

「大げさな奴だな。こんな程度じゃ人は死なない…」

ラディスが瞳を伏せたまま弱々しく笑う。リィンは泣きそうになった。

そうやって、ずっと一人でやってきたの？

自分の都合なんかいつも後回しにして…。クレイが随分前に言っていた言葉がよみがえる。

あの方は優しすぎるのです。そして強すぎる。だからこそ、私は心配でたまらない。

「そんなの…」

僕だって同じだよ、ラディス。あんたが死んだら意味がない。あんたがいなきゃ、意味がない。

ラディス…。死なないで。ずっと生きていて。もう絶対に、失いたくない。

「ラディス…」

ベッドの脇の椅子に座っているリィンの身体が、内側から青白く光り出した。徐々に光が強さを増してゆく。部屋の中が青白く温かな光に包まれてゆく…。

「え…」

自分の身体を見下ろす。ぼんやりと青白く光る両手を見つめて絶句した。これは何だ?『力』とは違う。『力』を使う時の、圧が感じられない。それにそんな意思を込めていないのに。これは自分の『力』か?暴走しているのか?分からない…。自分が分からない。混乱しそうになる。

「リィン」

ラディスが強い声音でその名を呼ぶ。腕を伸ばしリィンをベッドへ引き上げて、固く抱き締めた。リィンの全身から光が消える。

「ご、ごめん…僕、何か変だ…」

ラディスは何も言わず栗色の髪に口づけて背中をなでている。リィンは呆然としたまま、小さく呟いた。

「今の、なに…」

「心配するな。大丈夫だ」

彼の言葉は魔法のようだ。その一言だけで、本当に安心してしまう。リィンは目を閉じて深く息を吐き出した。そのまま寄り添うようにして、二人は眠りについた。

◇◇◇◆

朝日が差し込む部屋の中で、風呂上がりのラディスは頭を布で拭いながらベッドに近づいてゆく。リィンが子供のような安らかな表情ですやすやと寝入っていた。脇に腰を降ろし、優しく栗色の髪を梳く。

「リィン。俺を選んだのか…」

もしかしたら、それは必然の事だったのかも知れない。抗いようのない運命とはこういうものなのだろうか。彼は運命という言葉が好きではない。嫌いでもないが、それがどうした、と思う程度だ。運命ってもんがどうあろうが、知った事ではない。要は、自分がどう生きるかだ。

リィンがうっすらと瞳を開けた。ラディスを見つけて透き通った頬を赤く染める。

「…何だよ」

「何にも？」

寝顔を見られていたのが恥ずかしいのか、少しだけ口を尖らせている。ラディスは微笑んで、その柔らかな唇に口づけを落とした。

「んなっ…あんたおかしいよっ。き、昨日から…」

「昨日？何かあったか？」

意地悪く問うと、リィンは今度こそ顔を真っ赤にしてベッドから起き上がり、そっぽを向いた。

「僕が子供だと思って、からかってるんだろ。あんたにはユマがいるのに…」

「…は？」

突然出て来た名前にラディスは驚いた。

「もう良いよ！」

彼がまた口を開こうとした時、勢いよく扉が開いてミッドラウが姿を現した。

「よう！起きてるな。行くぞ！いざ、レーヌへ！」

０６２：記憶は海を渡る

大きな帆に風を受けて走る。リィンは甲板から小さくなってゆくルキリアの大地を無言で見つめていた。すがすがしい朝の空気が頬をかすめる。レーヌ国へ渡る定期船には様々な荷物が運び込まれ、その合間を縫うようにして人間達が佇んでいた。朝一番の便の為、これでも空いている方だという。大きな帆船は海を切り裂き白い飛沫を上げながら進む。朝日がきらきらと水面に反射している。

「よくまあ、飽きずに見ていられるもんだ。ほらよ」

ミッドラウが隣にやって来て、パンケーキを差し出した。このパンケーキにはフルーツや甘いクリームの代わりに照り焼きの肉と野菜が挟まれていた。これは船上で売っているもので、商人達はこの移動時間にこうした簡単なもので朝食を済ませているようだ。礼を言って一口かじりつく。

「海を渡るのは初めてだ。…すごい」

「酔わないように気をつけろよ」

「…診療所は大丈夫かな」

リィンは気になっていた事を口にした。

「大丈夫ですよ。ラディス様と私が揃って外出する時は休診になります。ニコルさんとチェムカさんは自宅におりますし、診療所には護衛が立つようにあらかじめ手配されているのです」

クレイが言いながら隣に立った。リィンは少し笑う。用意周到。

「そっか。あのラディスが放ったらかしにするわけないもんね。…ラディスは？」

「あいつは年寄りだからな、客室をとらせてやった。今頃ぐーぐー寝てやがるだろ」

ミッドラウがパンケーキの最後の欠片を口に放り込みながら言った。定期船の料金は甲板だと百五十フィルだが、客室を使うと倍の値段がする。レーヌ国に着いてからも、彼はきっと忙しいに違いない。この移動時間を休息に当てて少しでも体調を戻しておきたいのだろう。今朝もまだ熱は下がっていなかった。

三人はぼんやりと海原を眺める。

「そういやさ、どうしてレーヌ国に行くわけ？」

リィンが前を向いたまま質問した。

「かー！そこら辺は色々ややこしいんだ。クレイ、説明してやれ」

そう言ってミッドラウは後ろへ下がり、通路に積み上げられた荷物を背もたれにしてどっかりと腰をおろした。リィンは隣に立つクレイを見上げる。彼は少しだけ視線を上に向けて、考えつつ言葉を紡ぎ出した。

「…そうですね。レーヌの大学校はリィンも知っていますね。人々は世界から、一流の医学と薬学、それに地学や天文学といった万般の学問を学ぶ為にレーヌにやって来ます。この学校はレーヌ国の女帝直結の中枢機関が運営する公的なもので、五年間をかけて全課程

を修めるようになっているのです。他国からの留学の場合入学資格は十四歳からになります。
私はレーヌ国の出身ですので、その一年早い十三歳の時に入学しました」

「ふうん…」

何か引っかかるものを感じた。目を閉じて記憶を掘り起こす。

「あれ…。ラディスが留学したのって十二の時って聞いた気がしたんだけどな…」

十二歳から十六歳の間を大学校で過ごし、その後の二年間はレーヌ国の医師の元で働いていたと聞いた。そうなると実質四年間しか大学校に在籍していなかった事になるのだが…。

「ええ。ラディス様は特例で十二の時に入学を許可され、通常五年間で修了する課程の全てを、四年間で修めてしまったのです。
後にも先にも、レーヌの女帝が特例を認めたのはその時だけです」

「…え?」

「んん、まあ要するにだ!ラディスの奴が女帝のお気に入りなんだ」

ミッドラウが背後から大きな声で乱暴な解説をした。リィンは振り返って眉根を寄せる。

「何?」

「まあ、行きゃあ分かるって!」

リィンは憮然として、クレイを見上げた。

「…ラディスが女帝のお気に入りで、どうして僕やクレイまで呼ばれる訳？」

「それも、実際にあの方にお会いになれば分かりますよ」

クレイが苦笑してリィンを見おろした。リィンは少しだけ不機嫌になる。

お気に入りってどういう事だよ。

「どっちにしろ随分と久しぶりなんじゃねえか？クレイ」

「ええ。国に帰るのは数年ぶりになります」

「お前、ラディスに入れ上げるのも良いがな、他に入れ上げにゃならん奴がいるだろ」

クレイが突然げほげほと咳き込んだ。心なしか顔が少し赤いような気がする。

「クレイ？」

「くっく。リィン、こいつにはな、許嫁がいるんだぜ」

ミッドラウが心底楽しそうに言った。

「ソアっていってな、これがまた良い女で…」

「ミ、ミッドラウさん。そのような言い方をされては困りますっ。リィンが誤解するでしょう！い、許嫁などと…」

いつも整頓された雰囲気でかっちりとしているクレイが、顔を赤らめ必死になってまくしたてている。リィンはぷっと吹き出した。

「僕、楽しみだな。レーヌはクレイが生まれ育った所だもんね」

げらげら笑っているミッドラウを無視して、クレイは肩を落としてため息をつく。

「レーヌ国は大変に豊かな国です。人々の心も…。リィンもあの国でなら、そのマントを羽織る必要もないでしょう」

世界一の医学と薬学を誇り、その英知を全世界に知らしめているレーヌ国。形式上はルキリア国の中の独立国家として存在しているが、実際にはどの国に対しても中立の立場を崩さない、確固たる信念の元にこの世界で唯一の女帝が統治する国だ。リリーネ・シルラの聖地であり大聖堂がある事でも有名である。そしてレーヌが認めない限りはこの世界で医師になる事は叶わない。絶対的な権限も有している。レーヌ国を治める女帝は代々指名制で、レーヌ族の女性がその座に就くという。その政治手腕は特筆すべきものがあるだろう。予知や先読みといった不思議な能力を備えているという噂も耳にした事がある程だ。

リィンは甲板から通路を歩き、奥まったところにある客室の扉をそっと開いた。その中にいる人物は予想に反して、眠ってなどいなかった。机に向かい書き物をしているようだ。

「寝てなかったの？」

「ああ。レーヌに着くまでに資料をまとめておく必要があってな。急だから大した準備は出来んが…」

「まだ熱があるのに…」

「俺の調合した熱さましの薬は良く効くんだぜ。我ながら惚れ惚れする程だ」

ラディスは手元に視線を落したまま言った。

確かに目の前の彼からは、弱々しい雰囲気など微塵も感じない。普段の飄々とした彼だ。

「もうすぐレーヌに着くよ。…あんたって女帝のお気に入りなんだって？」

「俺だけじゃないぞ。クレイもミッドラウもあいつのお気に入りだ。お前もコレクションの中に入るだろうな」

「…何だよそれ。訳わかんない」

リィンがむっつりとしたままラディスを睨みつけると、彼はリィンに顔を向けて少しだけ目を細めた。

「妬くなよ」

「ち、違うよっ！それに！レーヌの大学校って十四歳からなんだろ！？」

「そうらしい」

「なんでラディスは十二の時に入学出来たの？しかも四年間しかいなかった…」

リィンが問うと、彼は口角を持ち上げて笑顔を作った。相変わらずの美しい微笑。

「俺が天才だからだ」

「…あっそう」

「まあ、一番の要因は他にあるがな」

青い瞳が真っ直ぐにリィンを射抜く。迷いなくラディスは次に続く言葉を口にした。

「俺が、ティルガが命を救った子供であるからだ」

「父様…」

「イリアス族の奴隷解放に多大な影響を与えたレーヌ国だ。十八年前、お前の父はレーヌの女帝に嘆願書を書き続けて、その扉を開いた。今は代替わりをして、その当時の女帝は病死して既にこの世にはいないがな」

ティルガは医者だった。と言う事は、レーヌ国に認定を受けているのだ。レーヌの大学校で勉強をしたのだろうか。顔も見た事のない父。イリアス族を救う為に、母様を救う為に、処刑された青年。

ラディスは席を立ち、おもむろにリィンの小さな頭を片手で抱き寄せた。彼の優しい匂いがリィンを包み込む。

「リィン。もしかしたらお前にとって辛い話を聞く事があるかも知れない。だが、逃げるな。目を背けずに正面から受け止めるんだ。お前にならそれが出来る。お前は強い」

「うん…。僕は大丈夫だ」

不思議だった。ラディスがそう言ってくれると、本当に自分が強くなった気がするのだ。

ラディスがいてくれるなら、僕はきっと大丈夫だ。何があっても強くいれる。

「ラディス」

「ん？」

「僕の『力』の事、何か知ってるんじゃないのか？」

彼の腕の中から顔を上げて質問した。ラディスは無言でリィンを見おろす。

昨夜の出来事がずっと引っかかっていた。自分の身体が青白く光っていた、あの現象。よく考えてみればあの時が初めてではない気がするのだ。ずっと前に『力』について彼に質問された事があったのを思い出した。その時一回きりであったが、ラディスはリィンに自分の『力』の事を知っているか、と質問したのだ。

「…疲労が蓄積するとああいう事が起きる」

ラディスがさらりと言った。

「…本当に、それだけ？」

「ああ」

何だか腑に落ちない。

リィンがじっとラディスを見つめていると、唐突にその彫像のような綺麗な顔が迫ってきた。

慌てて両手で彼の肩を押し返す。

「ちょっ！何だよっ」

なおもラディスはリィンを抑え込んで迫ってくる。リィンは顔を真っ赤にしながら、ばたばたと彼の腕の中で必死にもがいた。その時、船が大きな汽笛を鳴らした。速度がゆるやかに落ちてゆき、ごとりと何度か船体が揺れて、それから止まった。

「つ、着いた。レーヌに着いたよっ！離せっ」

ラディスが舌打ちをしてリィンを解放した。

063：レーヌの大学校

レーヌ国の首都は緑深い森と、遺跡のような巨大な建造物がそびえる美しい所だった。リィン達は港での検閲を済ませレーヌの首都に無事入国した。石畳の道は綺麗に整備され、民家等の建物は屋根が赤色に統一された美しい町並み。坂道の多い町には小川のような用水路が澄んだ水を湛えて流れ、小さな橋が点々と渡されている。茶色の石造りの大学校は想像以上に大きく、立派な造りで遠くからでもすぐにそれと分かる程だ。その敷地も広く、一見愛想のない宮殿のようにも見える。それと対を為すように配置されている大聖堂は真っ白の外観で、どのような材質で建てられているのか見当もつかないような美しい壁面。ゆるやかにカーブを描く円天井に金の装飾が日に輝いている。

「リィン。行くぞ」

リィンは大学校の巨大な門扉の前で呆然と立ち尽くしていた。十ナルグでもきかない程の、大きな入り口。足元はピカピカに磨き上げられているかのような石の廊下。何だかこの上を歩いて汚してしまうのが悪い気がして、慎重に足を運ぶ。先頭のミッドラウはそんな事はお構いなしに高い靴音を響かせて、ずかずかと建物内に突き進んでゆく。校舎内は木目の美しい扉がいくつも並び、ランプの灯が柔らかくそれを照らしていた。廊下の脇には本棚がずらりと並んでいたり、年代物の甲冑が置かれていたり、リィンにとったら珍しいものばかりが陳列されていた。きょろきょろと辺りを見渡しながら歩くのでまた皆から少し遅れてしまい、小走りでラディスの隣へ並んだ。大きな広間のような場所に出ると、向かい側に三人の人間が立っているのが見えた。出迎えだろうか。

「遅い！」

中央に立つ女性が突然叱り飛ばした。リィンは驚いてラディスの背後に隠れる。

「もう昼前だ。今朝着くように、と書簡で通達したはずだ。約束が違うではないか、ミッドラウよ」

「しゃあねえだろ。こいつらばらばらにいやがって、拾うのに手間取ったんだ」

ミッドラウを冷ややかな表情で眺めている人物は、女性にしてはすらりとした長身で背筋をぴんと伸ばして立っていた。ストレートの黒髪を一つに結わえ、前髪は眉の辺りで綺麗に切り揃えられている。緑の瞳に意思の強そうな口元。その服装は独特で、左右に立つ女性達も同じ服を着ていた。首までボタンがついた立襟の深緑の上衣に、対のズボン。足元は底がフラットな柔らかな革の靴。町を歩いている時にも見かけたが、どうやらこの服が大学校の制服らしかった。

「…ここで立ち話をしている時間もないのだ。ラディス殿、このまますぐに講堂にお越し願いたい」

「待て待て。挨拶も抜きで何をそんなに急いでいるんだ」

ラディスは眉を上げながら答え、クレイが一歩前に出て固い口調で話す女性を咎める。

「たった今着いたばかりで、一体何事ですか」

「…これも書簡で知らせているはずだが？どういう事だ、ミッドラ

ウ」

「ん？なんか書いてあったか？」

ミッドラウはとぼけた顔をして顎をぼりぼりと掻いた。背の高い女性の表情がますます険しくなってゆき、左右に控えている女性達もおろおろとし出した。女性がまた口を開こうとした時にクレイが先んじて言った。

「ソア、説明をしなさい」

「…本日この大学校で学生達への講義を、ラディス殿に要請していた。もう既に学生達は講堂に集合している。有名な人物の講義が聞けるとあって、たくさんの聴衆が集まっているのだ。今更中止には出来ない」

ラディスとクレイが同時にミッドラウを睨みつけた。運び屋は両手を上げて、

「すまん。忘れてた」

と素直に謝った。

「とにかくすぐに講堂へ」

「分かった」

「けれどソア様、そのままの格好ではさすがに…」

控えていた女性がラディスを見ながら遠慮がちに言った。黒のマン

トの下はブラウスに黒のベスト、スリムな黒のズボンに茶革の長靴。スタイルの良い彼に似合ってはいるが、確かにこの大学校には似つかわしくない旅人の格好だ。間違っても医師にだけは見えない。ラディスはやれやれ、と言いながらマントをとり腰の剣を外して女性に手渡してゆく。それから両手でばたばたと服の埃を払った。ソアは顎に手を当てて、ふむ、と頷いて続ける。

「致し方ない。ラディス殿、≪清廉なる織布≫はいかがされた？」

「おいおい、そんなもの用意してないぞ」

「おおっとぉ！そいつは俺が用意しといたぜ。診療所でニコルに出してもらっといたんだ」

ミッドラウが肩に担いでいた麻袋をどさりと足元に下ろし、中をごそごそと物色して白く輝く長布を引っ張り出した。

「ほらよ」

リリーネ・シルラの使徒の証であり、聖職者が命の次に大切にして丁重に扱うべき≪清廉なる織布≫が、しわだらけになっていた。ラディスはそれを掴んで無造作に首にかける。彼とミッドラウ以外の全員が愕然とした。希少な糸で精巧に編み上げられた、とても高価な布の端が、茶色に焼けてしまっていたのだ。皆の視線を感じて、ラディスが布の裾をつまみ上げた。

「こりゃあ、見事だな」

「ニコルが鍋つかみに使ったらしいぞ」

ががは、とミッドラウが笑う。ソアは片手で頭を抱えて呟いた。

「何という事を…。それには名が織り込まれていて、世界で一つと同じものがないのだぞ」

「い、今はそんな事を言っている場合ではありません。来賓用の長布で代用しなさい」

クレイがそう告げて、ラディスは控えていた女性と広間から伸びる左の通路へ歩いて行った。リィンは呆然とそれを見送る。

「大丈夫なのかな…講義なんて」

「何とかなるだろ。あいつはペテン師みてえに口先が回る」

「挨拶が遅れて申し訳ない。私はこの大学校の役員を務めるソアと言う者だ」

リィンははっとしてソアを見つめた。この人が、クレイの許嫁…。美人な人だ。ソアもリィンを見つめていて、少しだけ目を細めて微笑んだ。リィンはぺこりと頭を下げる。

「リィンと申します」

「あたなにも、会いたいと思っていた」

「…僕に？」

「それよりソアちゃんよ、俺は腹が減ってんだけどな」

「…ミッドラウよ、お前をもてなすのは不本意だが、客人は客人だ。レーヌは礼儀を重んじる。お前とリィンはそちらの部屋へ。準備は出来ている」

「相変わらずのその冷たい態度。たまらんね」

ソアはミッドラウを鮮やかに無視して、次にクレイに視線を向ける。

「クレイ、あなたは私と共に学長室へ」

「分かりました」

リィンとミッドラウは控えの女性と右の通路へ、ソアとクレイは正面の奥の通路へと分かれていった。

「ソアっていつもああいう口調なの？」

「少し変わってるだろ？あいつは昔っからああらしい。無愛想だしな。にっこり笑うなんて、年に数回あるかないかじゃねえか？」

「ふうん」

確かに冷たい印象は受けたが、彼女には嫌味な部分がまるでなかった。きっと心根は真っ直ぐで優しいに違いない。ミッドラウがリィンの肩に腕を回して声をひそめる。

「まあ、クレイの前じゃあ女なんじゃねえか？あいつはクレイにベタ惚れだからな」

「そうなの？」

「しかしかたぶつ同士じゃ進むもんも進まねえだろうなあ。お前とラディスよりひでえかもな」

「っな…」

前を歩く女性がごほん、と大きく咳払いをした。

「…クレイ様もソア様もとても優秀な方です。この大学校の者達ならば、皆が憧れる存在なのですよ」

そう言ってぎろりとミッドラウを睨む。暗にその二人をして下世話な話をするなと咎めているのだ。ミッドラウは女性に愛想笑いをして、片手をひらひらと振ってみせた。女性はため息をつきながら目の前の扉を押し開く。リィンの肩に腕を回したままの彼が、またぼそりと呟いた。

「ここの制服って禁欲的でな、そそるんだよなあ」

リィンが呆れ顔でミッドラウを見上げると、彼は楽しそうな笑顔を返してきた。

◇◇◇◆

前を歩いているソアが足を止めて振り返った。薄暗い廊下の先に学長室の重厚な扉が見えている。

「久しぶりだな、クレイ。…少し顔色が悪いようだが？」

クレイと同じ程の背丈のソアは、少しだけ眉根を寄せてクレイを見

やった。

「私なら大丈夫です。それより、学長殿をお待たせするわけには…」

「あなたはいつもそれだ。私が手紙を書いてもちっとも返事をくれないくせに、シャウナルーズ様には律儀に手紙を書いていた」

「…ソア」

緑の瞳がクレイを真っ直ぐに睨みつけている。口調は静かだが、彼女は怒っていた。

「何だか論点がずれているように思いますが…」

クレイが呟くように言って、ソアは冷ややかにクレイを一瞥してからまた歩き出した。クレイは内心ひやりとする。これは、相当怒っている…。だからといってどうすれば良いのやら分からない。

数年ぶりに見た彼女はまた一層女性らしく、美しく成長したように思える。幼い時から知っているはずなのだが、全く知らない人物のようにも感じ、その初めての感覚がクレイには不思議でならなかった。

０６４：女帝に宣戦布告

従者の女性に荷物やマント、剣を預けてテーブルに着くと、すぐに昼食が開始された。ここはホールのような大きな広間で長テーブルが整然と並べられており、学生達も使用する食堂のようだ。豪華ではないが様々な料理が運ばれて来て、ミッドラウは遠慮なく豪快に食事を楽しんだ。彼は今日も浅葱色の不思議な服に身を包んでいるが、何故だかそれが良く似合っていた。

「お前、ほんとに食が細いな。もう少し食え。それじゃあ胸も育たんぞ」

「う、うるさいなっ。ミッドが食べ過ぎなんだってば」

リィンはティーカップを手に取り、ぼんやりと考え込んでいた。レーヌに来たは良いが、果たして何の為に呼ばれたのだろう。ラディスやクレイには何かと用事がありそうだけれど、僕はどうすれば良いのだろうか…。

「この後臨時の会議が始まる。それにはあなた方もご出席願いたい」

声のした方へ顔を向けると、ソアとクレイがやって来るのが見えた。クレイはレーヌの制服に着替えている。リィンの隣へソアが座り、向かいのミッドラウの横の席へクレイが着いた。するとまた二人分の料理が運ばれてくる。

「…僕も出て良いの？」

遠慮がちにソアに問いかけた。

「もちろんだ。あなたの同席はシャウナルーズ様たってのご要望だからな」

ソアは静かな動作で食事を口に運びながら言った。リィンはきょとんとする。

「シャウナルーズ様？」

「この国の女王陛下です」

クレイが告げた。

◇◇◇◆

場所を会議室に移し、木目が美しい立派な円卓に八人の人間が座っている。リィンは慣れない雰囲気にごくりと唾を飲み込んだ。リィンの見知っている人間は、ミッドラウにクレイ、ソアにラディスの四人だ。席に着く前に簡単な自己紹介を済ませた。他の三人はこの大学校の役員であり、レーヌ国においても重要な人物達であるらしい。白髪の交じる黒の短髪に鋭い切れ長の目をした壮年。その隣には黒の髪を結い上げた深緑の瞳の婦人。この二人はクレイの両親だ。彼はどちらかと言えば母親似になるだろうか。あとの一人は、背が低く真っ白な髭を蓄えたモドという老人。彼は大学校の名誉教授であり、研究員であり医師である。そしてラディスの師に当たる。ラディスは彼の元で二年間の研修期間を過ごし医師になった。リィンとラディス、ミッドラウの三人以外は皆それぞれの丈に合ったレーヌの制服を着ている。円卓には二つの空席。

「お前はあれだけの講義を何の用意もせずにやったというのか？」

モドが愉快そうに隣のラディスに話しかけた。リィンのちょうど向かい辺りにラディスが座っていて、その右隣にはクレイ、クレイの両親、ソアが並んでいる。ソアの隣にはリィンが座り、続いてミッドラウ、空席二つの先にモドという並びだ。

「モド先生に教わったとおりにしたまでですよ。案外ごまかせるもんだ」

「そうじゃろう。あんな講義なんてな、それらしい事を言っていればそれらしく聞こえるもんじゃ」

立派な髭を揺らしてモドが笑っているところに、扉が開き大柄な男性が入って来た。皆が席を立とうとするのを片手で制して告げる。

「堅苦しい挨拶は割愛する。ここにいるのは限られた人間で既に周知の間柄だ。…イリアス族のリィン」

「は、はい」

名を呼ばれ、硬直して席を立つ。男性はリィンに身体を向けて深々とお辞儀をした。

「ようこそおいで下さいました。私はレーヌ国枢機議会の議長、テンペイジと申します」

顔を上げた男性は、眼鏡ごしの目元を少しだけ緩ませて微笑んだ。顔に刻まれたしわを見ると五十代のようだが、彫の深い顔立ちと鍛え上げられた逞しい体躯の為、もっと若く感じられる。大学校の制服と作りは同じだが、色は深緑ではなく黒に金の線が入った服に身

を包んでいた。リィンはぺこりとお辞儀を返す。

「全員集まっておるようだな。では、始めよう」

そう言いながら入って来た女性に対し、リィンとテンペイジ以外の皆が席に座ったまま頭を垂れた。

リィンはその場で彼女に釘付けになってしまった。白のドレスに≪清廉なる織布≫を首から下げ、胸元には漆黒の宝石が嵌め込まれたペンダントをしている。鮮やかな緑の瞳に、緑の髪。そのストレートの髪は肩のあたりで真っ直ぐにばっさりと揃えられており、前髪も眉のあたりで一直線に切り揃えられていた。迫力のある美しい顔立ちで、年齢がさっぱり分からない。落ち着いた雰囲気は四十代かそれ以上にも思えるが、容姿だけを見ると二十代のようにも思える。少し細めの瞳には鋭い眼光が宿り確固たる意思を感じ、その全身から威厳と気品が立ちのぼる。リィンは手の平に汗をかいていた。一国の主の気迫に、完全に呑まれてしまった状態だった。

「誇り高きイリアス族、高潔なる英雄ティルガの子、リィンよ。お初にお目にかかる。我はレーヌ王国の統治者、シャウナルーズ・ルメンディアナだ」

リィンは緊張のあまり呆然としたままがっくりと腰を折って、何とかお辞儀をした。

「ふふ…。そう固くならずともよい。席につけ」

室内の空気が一変し、全員がびしりと背筋を伸ばした。

「多忙な皆を召集しているので、早速本題に入りたい」

テンペイジがこの場を仕切り、一瞬だけ視線を全員に巡らす。

「ラディス・ハイゼル。報告を」

「…報告も何も。突然呼び付けられたのはこっちの方なんだが」

彼はこの緊張感の漂う場所でも、いつもと変わらない飄々とした態度で言った。

「久しいな、ラディス。お主を見るのは数年ぶりだ。アルスレインやカイエリオスは息災か」

「俺に聞くなよ。アルスレインは何とか生きてる」

「何ゆえ正式な書簡で通達し、ミッドラウをつけてまで呼び寄せたか…」

シャウナルーズは斜め向かいに座るラディスに顔を向けて続けた。

「我との約束を違えるつもりか?幾度となくミッドラウを通じてお主に告げておったはずだが?」

「知らん」

ラディスはしれっと言い放った。それに慌てたのはミッドラウだ。

「おい、俺は伝言はちゃんとその都度伝えただろうが!人のせいにするな」

「そうだったか?」

「…ほう。俺様に喧嘩売る気か」

「ラディス殿、既に八年もの歳月が流れているのだぞ」

テンペイジが脱線しそうになる話を元に戻した。

「昨今ではロガート国の動きにも変化が見られた。この国にも密偵が入っているという情報もあるくらいだ」

クレイの父も静かに話し出す。

「そうだ。それにレーヌやルキリア、ザイナスでも山村等では悲惨な現状が続いている。早急に手を打たねばならない」

「しかしなあ。俺一人に何が出来る。たかが知れてるだろうに」

「ラディス。見え透いた芝居は止めよ。何の為に我のクレイをお主に譲ったと思うておるのだ」

シャウナルーズとラディスが見つめ合う。無言の攻防。

「お言葉でございますが、シャウナ様。ベイルナグルでの基礎を盤石にする為には必要な年月であったと思います。この私はラディス様の労苦を間近に見ておりましたので…」

「クレイ、そのような事は我も百も承知であるぞ」

リィンは唖然としてそのやりとりを見守っていた。全然、話が見えない。何の話をしているのがさっぱり分からない。どうやら自分だ

けが知らされていないらしい。不安と疎外感を募らせて向かいに座るラディスを睨みつけた。彼は話に集中していて、こちらには目も向けない。

「今更逃れられると思うておるのか？全てお主の望み通りにしてやったつもりだ。今度はお主が我の願いを叶える番であろう。ラディス、お主は我のものだ」

レーヌの女帝は口元に笑みを浮かべてラディスを見据えている。リィンはあからさまにむっとした。

「分かっている。…それで今回はソアも一緒に連れて帰りたいんだが」

分かってる!?どういう事だよ！

リィンの苛立ちをよそに話は着々と進んでゆく。ラディスのその言葉を聞いて、ソアが身を乗り出した。

「では、ラディス殿」

「ああ。時は熟した。診療所の事はクレイに任せようと思う」

おお、とモドやクレイの両親が声を上げ、ソアはきらきらと瞳を輝かせた。クレイが驚いた様子でラディスを見ている。

「…な、に。診療所って、あのベイルナグルの…？」

リィンは無意識に呟いていた。皆が一斉にリィンに顔を向け、リィンは真っ直ぐにラディスを見つめていた。彼は目を閉じて腕を組んでいる。シャウナルーズが視線をリィンに向けたまま呟いた。

「ラディス。お主、話しておらんのか。リィンは確かお主の護衛となど…」

「時間がなくてな」

「ほう。これはいかなる事ぞ…」

女帝が面白そうに目を細めて笑った。リィンはじっとラディスを睨みつけているが、彼は目を上げようとしない。わざと目を合わせないようにしている。

「ラディス！」

ついに痺れを切らして叫んだ。どうして僕だけ知らないんだ。沈黙したままのミッドラウが声を殺して笑っている。

「リィン。お主には我が後でゆっくり説明してやろう。我とあやつとの固い誓いの話を…」

女帝が意味深な笑みを向けてきた。リィンは鋭く女帝を睨みつける。

「シャウナルーズ様、僕はラディスに聞いているんです。それにラディスはあなたのものじゃない。人の事をもの扱いするのは、良くありません」

緑の瞳が大きく見開かれた。

「ほう…面白い」

シャウナルーズはリィンに向き直り、じっと見据えた。

「確かに人をもの扱いするのは、良くはない。しかしそれは言葉遊びの範囲を出ないものであろう？現にあやつ自身はそう言われた事を気にしている風でもないぞ。あやつは誰のものでもない。我が勝手に言うておるに過ぎぬのだ。何をそれ程に咎める必要があろうか。それはお主が感情的に、我があやつの事をそう言うのが気に食わぬだけなのではないか？」

リィンは言葉に詰まる。冷や汗が背筋を伝った。気押されている。

「シャウナ、からかうのはよせ。こいつにその手の冗談は通じないぞ」

ラディスは指でこめかみの辺りを押さえて呆れ顔、モドとソアは興味津々で傍観している。

「ち…違う…」

リィンにも分かっている。この女帝は自分をからかって挑発しているのだ。分かっているが、何故だか無性に腹が立つ。

僕だけ知らない事実がある。僕はラディスの護衛なのに…。この女帝は、僕の知らないラディスを知っている。僕が出会う前の彼だ。

この感情は何だ。不安と苛立ち、焦り。

「ん？何が違うというのだ？」

「ラ、ラディスは…」

女帝は余裕の笑みでこちらを見ている。

瞬間、表現のしようもない自分の感情に混乱し、思考が停止した。

「ラディスは僕のものだっ」

沈黙。

「ぐわっはっはっはっは!!い、いいぞリィン!くくっ…良く言った!…かっかっか!」

ミッドラウが腹を抱えて笑い出した。シャウナルーズも口元に細い指を添えて上品に笑っている。ラディスは深いため息をつき、モドは立派な髭を手でしごき肩を揺らして笑う。他の皆も少し困惑しつつ穏やかな笑みを浮かべていた。咄嗟に出た言葉とはいえ、とんでもない事を口走ってしまったリィンは顔を真っ赤にしてわなわなしている。

「何と豪気な娘だ。美しいイリアスの子。…気に入ったぞ」

リィンの赤茶の瞳に羞恥の涙が滲んだ。完全に笑いものにされてしまった…。

065：世界

その後も会議は続けられたが、リィンには難しい話の上に、恥をかいてしまったという事実にうろたえている間に終了してしまった。ラディスとクレイはモドに引きずられるように研究棟へと去ってゆき、女王陛下とその部下テンペイジ、クレイの両親も慌ただしく部屋を後にした。ミッドラウは配達があると言ってレーヌの町へ消え、ソアがリィンを連れて部屋へ案内すると告げ歩き出した。

「…僕、ここにいなくても良い気がしてきた」

ソアの後をよろよろと歩いて呟く。何だか一気に疲れてしまった。

「確かにあなたがそう思うのも無理はないな。ラディス殿は何かとお忙しい。私から説明をしよう。

彼がレーヌの大学校に入学したのは十四年前だ。その経緯は知っているか？」

「ラディスは十二の時に留学したって聞いたけど、本当は十四歳からじゃないと入学できないって。でもそれを許可されて、それはラディスが、ティルガが助けた子供だからって…。それで本当は五年間のところを四年間で全部終わらせて…レーヌの女帝が特例を認めて…。はあ、言っててこんがらがりそうだ」

「そうだな…。あなたの父君と我が国の前女王との話は、直接シャウナルーズ様がお話しされるであろう。私からはラディス殿と現在の統治者、シャウナルーズ女王陛下との経緯を話す。

…彼は己がティルガの弟子であると宣言し、この大学校へ単身で乗り込んで来たのだ。当時十二であった彼は、正規の手続きでは入

学資格がなく除外される事を知っていて密入国をした」

「なっ…」

リィンは長い廊下に立ちつくした。少し前を歩いていたソアが振り返って、神妙な顔で頷く。

「保安部隊に掴まった彼は事情を話し、彼自身が≪黄金の青い目≫を持っている事もあって心優しきシャウナルーズ様との謁見を許可された。その場で彼は言ったのだ。自分には時間がないのだと。自分が為そうとしている事にはたくさんの時間が必要な為、すぐにでも大学校に入学し医師にならなければいけないと。

幼い子供が、ルキリア国の皇族上位指向で凝り固まった、腐った価値観を覆すと言い切った。自らが医師になり、どんな種族の人間達も救ってみせると宣言した。その為に力を貸せと、一国の王に偉そうにのたまったのだ」

「じゅ、十二でそんな事を…」

「その場にいた全員が、この子供は気がふれていると訝しんだ。嗤う者もいた。しかしシャウナルーズ様だけが、幼いラディス殿と真剣に対していた。その謁見の一瞬で、全てを見抜かれたのだ。彼が本当にティルガと深い関わりがあり、非現実的な大それた夢を、本気で実現しようとしている並々ならぬ覚悟を有している事を。

…その場でシャウナルーズ様は、幼い子供と契約を交わした」

廊下の片側は中庭に面しており、暖かな日の光が緑の芝に降り注いでいた。背の低い木に小鳥が止まってさえずっている。ソアは視線をその緑に向け、目を細めて続けた。

「シャウナルーズ様はラディス殿に全面的に協力する事を申し出た。入学を許可し、尚且つ医学や薬学、剣術に至るまでの万般の教えを、一流の者につかせて習得出来るように用意すると言った。もちろん金銭面でも糸目はつけない。全てを約束したのだ」

「どうかしてるよ。小さな子供にそこまで…」

リィンの素直な言葉にソアは一つ頷いた。

「もっともだ。シャウナルーズ様は少し変わっておられる。気に入った人間には、その者がどんな種族でどんな出生であろうと、とことん肩入れなさるのだ。…だからこそレーヌには優秀な人材が多くいるのも事実。テンペイジ議長や私等もそういった人間の一人だ。

そうして全てを約束された彼は大学校に入学を果たした。その勉学の日々は想像を絶するような過酷なものだったに違いない。何せ全てを、一流のレベルで習うのだからな。ここでは飛び級も珍しくない。しかしラディス殿のように、一年間という単位で卒業を短縮した者はそうはいないであろう」

途方もない話だ。到底一人の人間が為し得る事が出来るとは信じられないような話。しかし、とリィンは思う。

他の誰でもなく、あのラディスならば分からなくはない。

「シャウナルーズ様は一度信頼した人間は、最後まで裏切らない。しかし陛下は一国を預かる身のお方である。何の根拠も見返りなく、そういった事はしない。必ず相手を選び、そして条件をつける」

ソアの鮮やかな緑の瞳が、こちらを見つめている。綺麗だ。濁りのない、澄んだ瞳。

「彼に課せられた条件は、その覚悟のままに命を捧げる事。世界の医療の発展と平和の為に、レーヌ国女帝の、手となり足となって働く事だ。

私は当時のラディス殿の入学の経緯を、この大学校の役員に選ばれてから聞かされた。しかしそれは彼に限ってだけの話ではないのだ。シャウナルーズ様の腹心の部下として生きる者達は皆、その契約を交わしている。シャウナルーズ様によって生かされ、その偉大な思想と構想実現の為に身を粉にして働く。これは当然の事であろう」

シャウナルーズ・ルメンディアナは、まさに生きるリリーネ・シルラだ。この世界に自らの両足で立ち、この世界の平和と調和の為に、その両手で現実的な一手を次々と繰り出してゆく。レーヌ国の女帝はリリーネ・シルラの第一の使徒として、全世界を平和へと導いてゆく重責を担っている。その自覚のある女性だけが、代々受け継いできたものだ。深淵なる知恵と勇気。

「ラディス殿は今後、世界に散っているリリーネ・シルラの使徒達の現在を、調査する任につく」

「え…」

「この世界ではレーヌ国の認可がないと医師にはなれない。そして今、医師になった者達の現在を知る必要があるのだ。それは何故か。医師という職業に従事している者達の腐敗が進んでいる為だ。リィン、あなたもルキリアの国を旅してきたから私の言っている意味が分かると思う」

「そうだ…。小さな村や町の医者は皆先生と呼ばれて尊敬されて、

大金持ちだ。だけどイリアス族や身分の低い人達の診察は絶対にしない…」

「それに聖職者を兼業している者も多い。その権力を振りかざして、か弱き人々を虐げている者共が実際に存在するのだ。このおぞましい現状を、レーヌ国が黙って見過ごすはずがあろうか。

ラディス殿はシャウナルーズ様の命のままに旅をし、出会い、選別し、時には相手から医師や聖職者の免許を没収しレーヌに返還するという任務につくのだ。この計画はのちに専門の部隊を作り、従事する人員を増やす予定である」

「そうか。あの会議でシャウナルーズ様や皆が言っていたのはその事だったんだね。…何て大変な事だろう」

「その他にも懸念がある。ロガート国の不穏な動向が、現実的なものとなって影を落とし始めているのだ。あの国はイグルを兵隊に使う為に恐ろしい研究を進めているという、不吉な噂が以前からあった。幾度となく質問状を出してはいるが素直に答えるような輩ではない。それに最近ではヒト型のイグルが出現したとの情報も入ってきている。

イグルの毒を中和する特効薬の精製を習得した医師達は、このレーヌの首都に数名とラディス殿がいるだけだが、ロガートはその者達を喉から手が出る程に欲しているに違いない。特効薬の研究に携わっていた当時の研究員達を躍起になって探していると聞く。それにそういった者らが拉致されたという噂もある程だ。優秀な医師や研究員達の安否の確認も、急を要する課題であるのだ」

「僕も見た。ヒト型のイグル…」

「何!?それは本当かっ」

「うん。ルキリアとロガートとの国境にあるゲムの村が襲われた」

ソアが片手で頭を押さえて首を振った。

「何という事だ…。テンペイジ議長に報告せねば。後で報告書を作成するので手伝ってほしい」

「分かった」

「一刻を争う事態にまできている。ラディス殿には重要な任務が課せられているのだ」

「それでラディスがその任についたら、診療所はクレイとソアが継ぐ事になるんだね」

「あ、ああ…。それにはまた色々と事情があるのだが、まあそんな所だ。しかし…。ラディス殿がリィンに何も話していないとは思わなかった」

リィンは顔を中庭に向けて、呟く。

「ラディスは僕を置いてく気なんだ。僕の事をまだ信頼してないのかも知れない」

「い、いや。時間がなくて説明が出来なかったのだろう。彼もそう言っていた」

「時間がないなんて、ラディスがそんなの理由にするはずがない」

ごほん、と一つ咳払いをして、ソアは来客用の部屋へリィンを通した。

「今夜は夜会が催される予定だ。しばらくはゆっくりと旅の疲れを癒すと良い。また従者が呼びにくる」

そう言い置いて、彼女は逃げるように部屋を後にした。

通された部屋には繊細な彫刻が施された調度品が並び、居心地の良い空間になっていた。豪奢なベッドが二組。丸テーブルに椅子が二脚あり、壁際にあるチェストの傍に見慣れた大きな診療鞄が置かれていた。その隣にはリィンの荷物もある。どうしてだかここでもラディスと同じ部屋のようだ。それは自分が彼の護衛だからなのか、リィンにも良く分からなかった。

今すぐにでもラディスと話をしたかった。どうして何も話してくれなかったのだろう。それにリィン自身はルキリア国の、その帝都ベイルナグルの診療所とその周辺くらいまでの視野しか持っていなかったのだ。突然その範囲が世界に大きく広がってしまった気分だ。頭が混乱する。

自分は彼の生きる道の途上で、ふらりと現れた人間に過ぎないのだと痛感させられた。ラディスの見つめている先はベイルナグルでありルキリア国であり、そしてそれさえも単なる通過点にすぎなかったのだ。彼が救おうとしているのは、世界だった。

気の遠くなるような、果てのない話だ。

ばったりとベッドに倒れ込んで深く息を吸い込む。

「ラディス…」

僕を、そこへは連れて行ってくれないの…。

０６６：宴の始まり

大きな扉の前で、ラディスとミッドラウ、クレイが佇んでいる。
彼らはそれぞれ正式なレーヌ国の礼服に着替えていた。ラディスが深く息を吐き出してクレイを見やる。

「おい、まだか。俺は腹が減って死にそうなんだが」

彼はレーヌに着いてから一時も休まずに動き続けており、昼食をとる時間もなかったようだ。
薄茶色の髪は綺麗にセットされ、美しい顔立ちがより印象的に映る。黒の立襟の礼服もとても似合っていた。彼はこういった服装をするのを面倒に思っているようだが、普段何もない時にも、たまに正装をして欲しいとクレイは思っている。その≪黄金の青い目≫にふさわしい、美麗な面立ちと容姿。誰もが見惚れてしまうだろう。

「ソアが連れてくると言っていたのですが…」

「昼間さんざん恥かかされたからなあ、嫌がってんじゃねえか？お前があいつに何にも言ってなかったのが悪い」

ミッドラウが笑って言った。彼は白の礼服を身につけている。いつも一つに結わえている黒髪を今は下ろしていて、眉の太い精悍な顔立ちに良く似合っていた。男性ながら色香を感じさせる。

「大声で笑っていたのはお前だろう」

「くっくっく。健気だよなあ、あいつ」

「待たせて申し訳ない」

そこへ、ソアとリィンがやっと姿を現した。ソアはすらりとした長身に美しいストレートの黒髪を垂らし、銀のドレスを華麗に着こなしている。胸元に赤い宝石のブローチ、二の腕まである白の手袋。美しい…。

クレイは誰にも気づかれないようにため息をもらした。その後ろをぎこちない足取りでやって来たリィンを見て、ミッドラウが口笛を吹いた。彼にはあまり紳士のマナーという概念がない。

「これはこれは。見目麗しい女性達じゃねえか。良いねえ！」

クレイが感動して口を開く。

「リィン…」

「何も言うなよっ。似合ってないのは分かってるんだから」

リィンが真っ赤な顔をして早口で言った。

「そんな事はありませんよ。とても良く似合っています。素晴らしい」

リィンはほっそりとした身体を深紫のドレスで着飾っていた。もちろん女性用で、白く美しい肌が良く映える。栗色の髪はすっきりとセットされていて、耳にしている銀色のピアスが光っていた。その耳の横あたりに白の髪飾り。

おずおずとリィンがラディスを見上げた。彼はにっこりと笑って、緊張しているリィンを安心させるように言った。

「クレイの言うとおりだ。良く似合ってる」

「ほ、ほんと？」

「ああ」

クレイは思わず微笑んだ。ラディスのその言葉にリィンの表情が華やいだからだ。

「色々と涙ぐましい改ざんの跡が見られるがな」

そう言って彼はひょいとドレスの胸元を覗いた。

「どわッ」

リィンが慌てて後ずさろうとして、自分でドレスの端を踏んづけてしまった。身体が大きくよろけ転びそうになる。素早くラディスがリィンの細い腰を抱いた。

「おっと。…お前、そんなに踵の高い靴を履くのは初めてだろう。あまり歩き回らん方が良いな」

彼はにやりと笑い、リィンは顔を真っ赤にしたまま硬直する。

「さあ行こうぜ。ラディスじゃねえが、俺も腹が減って死にそうだ！」

ミッドラウが重厚な扉を押し開くと、中から華やかな音楽が聞こえて来た。夜会は既に始まっているのだ。ソアがリィンの手を取ってゆっくりと歩き出す。リィンがぼそりと呟いた。

「ラ、ラディスの奴…。僕を殺す気か」

◇◇◇◆

「このレーヌの首都では、イリアス族の人々も暮らしているんですよ。二年程前からになるかな」

レーヌ国政府の一員だという壮年が、リィンに穏やかな笑顔を向けて言った。

リィンは大きな広間の片隅にある、テーブルの脇に佇んでいた。というより、動けないでいた。つい先程まではソアが傍にいてくれていたのだが、今は要人達と挨拶を交わしている。広間にはたくさんの着飾った人間達がいて、豪華な料理と会話を楽しんでいた。立食の形式で、大きな窓の傍で音楽隊が控えめながら美しい旋律を奏でる。広間の奥、一段高くなった場所にテーブル席があり、女帝と枢機議会の面々がずらりと並び、優雅に時を過ごしていた。その中にモドやクレイの両親の姿も見える。ミッドラウもクレイも人々の輪の中にいて、ラディスに至っては周囲に大きな人だかりができ、その姿を確認するのさえ難しい程だ。

「そうなんですね」

だから、イリアス族の自分を見ても大した反応がなかったのだろう。その事はソアからも聞かされた。ここではイリアス族の女性でも、安心して暮らせるのだと。しかし現状はイリアス族自体の絶対数が少なく、その中でも女性は男性よりも極端に数が少ない。奴隷としての過酷な歴史の中で、イリアス族の女性がどれだけ悲惨な運命を辿った事であろうか。

「いやあ、しかし、私もまさか会えるとは思いませんでした。あの解放の女神と謳われた女性と、高潔なる英雄ティルガ様のご息女とは…」

驚いて相手を見上げると、壮年は興味深そうにこちらを見つめていた。

まさかそんな言い方をされるとは思っていなかった。リィンの母、シルヴィを解放の女神と呼ぶのはイリアス族の人々だけだと思っていたし、父のティルガは今でも罪人として扱われている。英雄などと言われると、自分の父親ではないような気がしてくる上に、自分はそれ程上等な人間ではないのだ。

リィンは慣れない格好をして場違いな雰囲気の中にいるせいで居心地が悪く、ため息をついた。

この広間に入った時から、何故だか周囲の人々に見られているような気がしてならない。何度も人と目が合う。この目と肌の色が、こんなにも露出するような格好をしたのは初めてだし、しかも女性用のドレスだ。

やっぱり似合っていないんだ。変なんだ、きっと。

「どうしましたか？どこかお加減でも悪いのですか？」

「いや、その。ぼ…わ、わたし、どこかおかしいですよね。こんなドレス着慣れてないし…」

壮年が目を大きく見開き、リィンの小さな手を取ってずいと身体を近づけてきた。

「あ、あの…」

「何をおっしゃいます！聞きしに勝る美しさだ…」

うっとりと微笑む壮年に、ひくつきながら笑顔を返す。

「リィン！ちゃんと食ってるかあ」

ミッドラウがずかずかと広間を横切って来ると、壮年がゆっくりと手を解いてリィンから離れていった。ほっと胸をなでおろす。

「こんな格好じゃあ、料理の味も分かんないよ。もうこの服脱ぎたい。変なんだよ、どっか」

「くくっ。もったいない事を言うな。良い女だぜ、リィン」

「ふん。ミッドも良く似合ってるよ」

正装をして髪を下ろしているせいか、いつもの彼よりも大人で落ち着いた雰囲気の為、少し緊張してしまう。確かに彼は女性にモテるだろう。

「どうやらお前は自分の事を下に評価するふしがあるな。まあ今までを考えたら無理もねえか」

「…子供の僕が、こんなドレス着たって笑いものになるだけだ」

「はあ？子供じゃねえだろ」

「子供だよ。少なくともラディスはそう思ってる。胸だって、詰め物入れてるし。グレイアみたいにスタイル良くない」

ぶはっ！とミッドラウが噴き出して笑った。

「まだ気にしてたのか！」

「そ、そんなんじゃないけど…」

「あいつはお前の事を、子供だなんて思っちゃいねえよ」

言いながら彼は給仕からグラスを二つ取り、一つをリィンに差し出した。赤い葡萄酒のようで、とても美味しそうな色をしている。リィンがそれに口をつけようとした時、背後から手が伸びてグラスを取り上げられた。つられるように後ろを振り返ると、そこに長身のラディスが立っていた。

「これは酒だぞ。お前はこっち」

茶の入ったグラスをリィンに手渡して、すぐにまた人の渦に消えて行った。リィンはぼんやりとその後ろ姿を見送り、憮然とした表情でミッドラウを見上げる。

「ほら見ろ！子供扱いしてるじゃないかっ！それに、僕に何の説明もしてくれない」

ミッドラウは笑いを噛み殺し小さく呟いた。

「…良く見てるこった」

「は？」

「まあ大目に見てやれ。あいつはこっちに来てから、馬車馬みてえに働かされてる。どうせ今もろくに食えちゃいねえだろ。
そろそろこの場はお開きになるが、それからが本番だぜ。気心の知れた奴らだけで酒を飲むのがシャウナは好きなんだ。見てろ、リィン」

彼は楽しそうににやりと笑って、長身を折り曲げてリィンのこめかみにキスをした。

それから間もなく彼の言っていたとおり、場が解散となった。緑の髪で赤いドレスに身を包んだ女帝が挨拶をして枢機議会の人間達を引きつれて奥に消え、着飾った人々はそれぞれに挨拶を交わして去っていった。広間にはリィン達が残り、従者がテーブルと料理をひととところに集めて椅子を置いてゆく。扉が開いて、ぞろぞろとまた人が入ってきた。レーヌの制服を着ている者や、丈の長い上着を羽織っている者。年齢や性別もまちまちで、どうやらこの大学校で働いている役員や従業員、研究員達のようだ。その後から奥に消えていた枢機議会の面々も現れた。

「さあ、やっと思う存分酒が飲めるわい」

モドが若い研究員の肩を叩きながら言った。

「皆の者、今夜は我々の旧友、ラディスとクレイ、ミッドラウもおる。有意義な時を過ごすがよい」

最後に現れた女帝に皆が一礼を返す。顔を上げたリィンは驚いた。シャウナルーズは先程と同じ赤いドレスだったが、髪の色が違っていた。黒の巻き毛を肩まで垂らしている。あの鮮やかな緑の髪はかつらだったようで、女帝としての正装があのようなものなのだろう。

シャウナルーズはリィンに手を差し向けて皆に紹介した。

「この娘は、イリアス族のリィン。英雄ティルガと解放の女神の娘だ。今はラディスの護衛をしておる。最大の敬意と尊敬を持って拍手を送ろう」

その場にいる全員が笑顔を向け手を叩いてリィンを讃嘆した。身に余る事で、リィンはひどく恐縮してお辞儀を返した。その場で土下座をしたいくらいだった。自分は何もしていないし、むしろ誰も助けられなかったのだから。既にシルヴィもティルガも、この世にはいない。

それからすぐに場は砕けた雰囲気に包まれた。皆、思い思いのくつろいだ状態で楽しく酒を酌み交わしている。リィンは代わる代わる挨拶にくる人々と会話を交わす為に、やけに忙しくなった。クレイとソアが両隣にいて、リィンの世話人のような役割をしている。ちらりと先に視線を向けるとラディスが食事をしているのが見えた。傍の席にはミッドラウにシャウナルーズ、テンペイジがいて酒を飲んでいる。リィンはじりじりしながら思う。

僕もそこに行きたいのに…。

「なあシャウナ、これだけの面子が揃うのも久しぶりだ。昔を思い出して一つゲームをしないか」

ミッドラウは椅子に斜めに腰かけ、片肘をテーブルについた格好でシャウナルーズに視線を向けた。女帝はグラスを傾け、笑う。

「ほう…それは面白い。一体どのような余興だ。お主に任せよう」

その言葉を待ってましたとばかりに、彼はすぐさまテーブルを叩いて

立ち上がった。

「おおい、野郎ども！ミッド様と勝負をしようぜ！」

その大声に皆が顔を向けた。ミッドラウは素早く髪を束ね椅子の上に乗り、片足をテーブルにかけて全員を見渡す。

「どんな勝負だ」

「殴り合いならごめんだぞ！あんたに勝てる奴なんかいないさ」

どっと笑い声が起こり、楽しそうな野次が次々とかけられる。

「この俺様と飲み比べ勝負だ！」

「勝ったら何がもらえる！？」

「そうだ！賞品がないと盛り上がらないぞ」

やいやいとどよめく場を悠然と見下ろし、ミッドラウは一直線に指差した。その人差し指が、ぴたりとリィンに向けられる。

「あの美しいイリアス族の娘をかけて勝負だ！」

「はあっ！？」

リィンが素っ頓狂な声を上げた。

「何て不謹慎なっ」

クレイが大声で叫んだが、周囲の騒ぎにかき消されてしまった。

「おいっ。何勝手な事言って…」

リィンの声も届かない。女帝は楽しそうに部下と顔を見合わせて笑っているし、他の者達も興味深そうな顔をして誰も止めようとはしない。酒の席での余興には持ってこいのものなのだろう。リィンが呆れて隣のソアを見ると、彼女は苦笑を返した。

「ただの遊びと思って諦めるしかなさそうだ」

「さあ男ならこぞって参加しろ！女王陛下も公認だ！こんなチャンスはもう二度とないぞ」

ミッドラウは椅子から飛び降りて、テーブルに肘をつきラディスの顔をのぞきこんだ。

「お前はどうする？乗るか？」

ラディスは綺麗な笑顔を作り彼を見据える。

「前から思っていたんだがな、俺はお前が大嫌いだよ」

「奇遇だな、俺もだ！」

067：クレイとソア

一つの長テーブルの上が片づけられ、酒の入った瓶がずらりと並べられる。次々と用意された席が埋まった。中には女性もいて、皆ミッドラウとの飲み比べの勝負に意気揚々と挑もうとしている。その賞品はリィンだが面白半分に参加している者達が大半で、それを見物する人々も片手にグラスを持って談笑しながらその周りに集まって来ていた。長テーブルの端と端、向かい合うようにしてラディスとミッドラウが席に着き、一番最後にクレイがミッドラウの隣の席に座った。

「おいおい、お前確か下戸じゃあなかったか！？」

面白そうに目をむくミッドラウをぎろりと睨み、クレイが言った。

「このような不謹慎な事は許されません。それにリィンはラディス様の…」

「かー！くそ真面目もここまで来れば立派なもんだ！」

人垣が割れ、赤いドレス姿のシャウナルーズが姿を現して片手に持っているグラスを掲げる。従者がそれぞれのグラスに真っ赤な酒を注いでいった。

「勇猛果敢な者達よ。この無敗の豪傑、ミッドラウを倒す者がこの夜を制す。その褒美は伝説の者が遺した麗しき娘。今宵の宴にふさわしい戦いを見せるがよい」

テーブルにずらりと並んだ人々の中にはリィンに手を振る者や熱い

視線を投げて寄こす者もいるが、遠くでそれを見つめるリィンには完全に悪乗りしているようにしか見えない。女帝の隣に控えるテンペイジが凛とした声を上げる。

「いざ、勝負！」

全員が一斉にグラスを傾け、飲み干してからテーブルに戻す。一拍の間を置いて、派手な音を立と共にクレイが椅子ごと倒れ込んだ。

◇◇◇◆

「ミッドの奴、何であんな事！シャウナルーズ様もどうかしてるよ」

リィンはぷりぷりと怒りながらクレイをベッドに寝かせた。彼は真っ赤な顔で苦しそうに目を閉じて、ふうふうと呼吸をしている。倒れたクレイをリィンとソアが二人がかりで部屋に連れて帰ったのだ。ソアが彼の靴を脱がせ、ふむ、と頷く。

「シャウナルーズ様はああいったお祭り騒ぎがお好きな方なのだ。一国の女王でありながら、身分も何も関係なくレーヌの民と肩を並べて酒を飲む。素晴らしいお方だと思わないか」

至極真面目な答えに、リィンは苦笑した。

「それはそうだけど。ソアとクレイって、似てるね」

ソアがきょとんとした顔を向ける。

「そうか。そうかも知れんな。リィン、手伝ってもらい礼を言う。茶を入れよう」

唸っているクレイを置いて、部屋のテーブル席に場を移した。

「ミッドから聞いたんだけどさ、ソアってクレイの許嫁なんだって？」

リィンは屈託なくソアに質問をした。彼女は目を細めてそれに答える。

「そうだ。まあ、私が勝手に言いだした事に過ぎないのだが…。ゆくゆくは嫁にしてもらうつもりだ」

その言い方が可笑しくてリィンは少しだけ笑った。

「何だか格好良いね」

「ふ。そうだろう」

ソアは目を伏せて茶を一口飲んでから、語り出した。

「私はみなしごで、六つの時まで孤児院で暮らしていた。その当時女帝になったばかりのシャウナルーズ様に見出され、それからクレイの父母に育ててもらったのだ。クレイとは同い年だ」

リィンが真剣な表情で耳を傾けている。

「この口調は変わっているとたまに言われるが、おそらくクレイの父の影響が大きい。彼の家柄は、代々女帝を支える役割を担っている格式の高い名家だ。その両親の教育も厳格なものだった」

「そうか。だから二人は似ているんだね。でもそうしたら、本当はクレイもこの大学校で役員をするはずじゃなかったのかな」

現在の彼は、ルキリア国のベイルナグルでラディスの助手として暮らしている。そんな名家の生まれであるのにそれが許されるのであろうか。

「その通りだ。彼は生まれながらに、義務付けられた使命を持っていたのだ。十三の時に大学校に入るまでにもずっと勉強づくめの毎日であったし、それに彼自身とても賢かった。周囲の誰も彼に一目置いていた。私も彼に負けじと勉学に励み、良きライバル同士であり、ずっと憧れの存在だった。

あの当時のクレイはひどく覚めていて冷たい人間だったと思う。それが大学校に入学してからがらりと変わってしまった」

ソアが遠くを見つめて微笑んだ。リィンはその表情に思わず見惚れてしまう。

もちろんソアも大学校に入学をしていた。しかし組み分けで二人は同じ組にはならず、広い校舎内ではあまり顔を合わす機会もなかった。家に帰ってもタイミングが合わず会話も挨拶程度だけという日々が長く続いた。そんなある日、大事件が起こったのだ。

クレイ少年が、突然、家を継がないと言いだした。

古来より連綿と受け継がれてきた名家の一大事である。両親が怒鳴っても宥めすかしても、頑としてその方針を曲げようとしない。ほとほと嘆いて、彼らの主であるシャウナルーズに相談を持ちかけた。すると女帝は既に全ての事情を知っていて、クレイの父母に告げたのだ。今大学校に面白い少年がおり、直々に訓練をしている最中な

のだという。女帝はその少年に大きな期待を寄せていた。そしてクレイを変えてしまったのは、何を隠そうその少年なのだという。女帝は彼らに言った。

面白いではないか。我が目をかけている者を、クレイも認めたようだぞ。あやつは子供ながらにして自分の主を決めたのだ。好きにさせてやるが良い。

父母は愕然とした。何と無礼な事を自分達の子はしでかしてしまったのだろうかと。主はこの世でたった一人、レーヌ国の女帝シャウナルーズ様だけのはず。しかし当の主がそれを認めよというのだ。前代未聞である。噂の少年とは一体どのような人物であるのか。

名をラディス・ハイゼルという。

≪黄金の青い目≫を持つ正統なルキリア皇族でありながらその位を持たず、数年前までかの国で奴隷として虐げられていたイリアス族とともに暮らしていた。右胸に奴隷の烙印を刻まれた数奇な運命を生きる、容姿端麗な少年。

クレイの両親はラディスと会い、彼と話し、変わってしまった我が子と真剣に向き合って結論を出した。何よりクレイ少年の成長ぶりが目覚ましく、その瞳は今までにない程に生き生きとしており、使命に燃えているようだった。

「私は驚いた。クレイにあのような、命の燃え立つような情熱が隠されていたとは、その時まで気付かなかったのだ。そして私は自分の気持ちに気付いてしまった…」

夢を語る彼の横顔。普段物静かな彼が、静かに信念を語った。

自分がずっと探し求めていた答えを、ラディスが教えてくれた。彼は全てにおいて自分を超越していて、力強く導いてくれる。彼の思い描く未来が、自分の求めていた未来だ。

私は、ラディス様のお力になりたい。その為ならば、どんな苦労もいとわない。

ソアはその横顔を見つめて思った。

ああ、この人はあっと言う間に私の遥か先へ行ってしまった。いつも追いかけていた背中がぐんと大きくなったようだ。

私はきっとこの人の力になろう。ずっとこの人の背を見つめて、生きてゆこう。

ソアが物思いから覚め、気まずそうな咳払いをして頭を掻いた。

「私も少し酔っ払っているようだ。このようなくだらない話を…」

「そんな事ない。ソアは素敵だ」

リィンの力強い視線が、ソアに真っ直ぐに向けられている。

「リィン…。ありがとう」

「うー…ん。うう。」

クレイがベッドの上で唸り声をあげた。リィンとソアは静かに視線を交わして笑った。

◇◇◇◆

ミッドラウは音を立ててグラスをテーブルに置いた。隣に座るシャウナルーズが頬杖をつき、片手で瓶を傾けて空いたグラスに酒を注ぐ。

「まさかラディス殿がこのような挑発に乗るとは思いませんでしたな」

テンペイジが隣に座っているラディスに言った。彼のグラスにも、斜向かいにいるシャウナルーズがこんこんと酒を注いでゆく。ラディスとミッドラウは同時にグラスを掴み、一気に酒を飲み干した。

「テンペイジ、こいつは阿呆だ。こんな馬鹿らしい勝負でもいつだって本気なんだよ」

ラディスは呆れ顔で運び屋を睨みながら答えた。
既に何時間もこうして酒を飲み続けている。ミッドラウに飲み比べを挑んだ者達はばたばたと倒れてゆき、その残骸が広間に点々と転がっていた。テーブルに突っ伏して眠っている者、地べたに伸びている者。先程までは別のテーブルで飲んでいた者達もいたが挨拶をして帰っていった。現在広間にいて、きちんと目を開けて会話をしているのはたったの四人。

「さすがは親友、俺様の事を良く分かってるぜ」

「お前の単細胞にはさんざん振り回されてきたからな」

「お前は昔っから、色んな事を難しく考えすぎなんだよ」

「お前は昔から、下半身でものを考えすぎる」

「それのどこが悪い？」

「…そうきたか」

「ふふ。それにしてもあの娘、初（うい）な。お主が大事にしたくなる気持ちも分かる」

ラディスがグラスを空けて深いため息をつく。

「どうして皆余計なおせっかいを焼いてくれるかな。優しい奴らばかりで俺は本当に嬉しいよ」

「そりゃあだって、なあ！」

ミッドラウは身を乗り出して、シャウナルーズとにやりと笑い合った。

「ああ。お主が選んだ娘だ。興味がないわけなかろう。それにその娘が、ただの女ではない…」

「シャウナ様、そろそろ行きましょう。この者達に付き合っていては、朝になってしまう」

テンペイジが声をかけると、女帝はそうだな、と呟いて席を立った。

「ラディスよ。明朝は研究員達との会議が入っておる。遅れるでないぞ」

「ああ」

女帝は腹心の部下を連れ悠然と歩き出す。広間の中央あたりで、ふと思い出したように振り返った。

「…ラディス」

切れ長の緑の瞳が、ラディスを見据えている。口元には微笑、黒の巻き髪がふくよかな胸元に垂れる。細身の赤のドレスが彼女の均整のとれた容姿を一層際立たせていた。慈愛を湛える美しさ。

「あの娘を手放すでないぞ。リィンに見限られれば、この先一生、お主は孤独のままであろう」

不吉な予言を言い置いて、女帝は去って行った。

ミッドラウの豪快な笑い声が広間に響き渡る。ラディスは無表情のまま、しゃれにならん、と呟いた。

０６８：溢れる夜

真夜中、リィンは肌寒さにうっすらと目を開けた。一瞬で眠気が吹っ飛ぶ。

「おい、向こうにベッドがあるだろっ！うわっ。酒くさっ！」

自分のベッドに入って来ようとしているラディスを両手で押し返した。そんなリィンにお構いなしに彼は片手でシーツを持って、覆いかぶさるように迫ってくる。

「何を今更。いつも同じベッドで寝ているだろう」

「だったら隣で寝ろよっ」

両手を突っ張ってラディスの肩を押さえ、思い切り睨みつけながら言い放った。

部屋には暗くランプの灯が入っていて周囲は温かな木の色をしている。

「それに！僕は怒ってんだからな！どうして何も教えてくれなかったんだよっ」

ラディスは無言でリィンを見下ろした。青い瞳が潤んでいて、その奥の黄金色が滲んで見える。僅かに頬も赤く、どうやら相当飲んでいるようだ。普段とは違う雰囲気に鼓動が早まってゆく。

くそっ…静まれ、僕の心臓。

ラディスはおもむろに手を伸ばし、リィンの栗色の髪を梳いた。

「俺にも迷いや恐れっていう感情はあるんだぜ、人間だからな…」

「…え」

「あんな面倒な話をして、お前に逃げられたら困る」

言葉の意味が掴めず、呆けたまま彼を見上げた。ラディスはゆっくりと距離を縮め片肘をついて、もう一方の手でリィンの小さな手を掴み、その白い指先に口づける。リィンは瞬間に硬直した。

「それになあ、あれは人生最大の大失敗だ。あの契約を交わした時、俺は世間知らずのガキだった。ここの女帝は年端も行かない子供を言いくるめて言質をとって脅してくる。恐ろしいな」

「…年端も行かない子供が、密入国なんかするかよ」

リィンが真っ赤な顔で反論した。ラディスは笑いながら、掴んだままのリィンの指に自分の長い指を絡めて、静かにベッドへ沈める。彼の美しい顔が、すぐ目の前に迫る。じっと何も言わず見つめ合う。

「ラ、ラディス…。あの…何か、おかしくないか…こ、これ」

リィンはしどろもどろになりつつ口を開いた。しかし彼は言葉を発さず真っ直ぐにこちらを見つめている。鼓動が高鳴る。彼から視線を外す事も出来ずに見入ってしまう。絡めている指先に汗をかいてしまいそうだ。恥ずかしい。リィンはゆるゆると目を閉じる。

何か変な雰囲気だ。何か話さなければ。ええと…。

「の、飲み比べって、誰が勝ったの…」

しまった。一番気にしていた事を、真っ先に言ってしまった。
自分の馬鹿正直さに泣きそうになる。

「俺が負けると思うか？」

ラディスの囁くような声に、おそるおそる瞳を開けた。彼の視線とぶつかり呼吸が止まりそうになる。リィンは掠れた声で呟いた。

「じゃあ…」

「お前は…俺のものだ」

ラディスが、柔らかく微笑んだ。
だめだ。これ以上見つめていたら…僕は。

リィンは固く目を閉じて顔をそらした。

「リィン」

「ずるいよ、こんなの…」

顔が熱い。きっとまた赤面している。リィンは必死で言葉を紡ぎ出す。

「あんたにとったら、こんなのどうでもない事だろうけど…。ぼ、僕は…」

本気で怒れるわけがないのだ。全てを許してしまう。それにこんな

風にされたら、自分が女性である事を思い出してしまう。リィンの全身の細胞が、ラディスが好きだと叫び出す。普段抑え込んでいる気持ちがあふれて、口に出してしまいそうになる。そんなの、辛い。彼は自分をからかっているだけなのだから。

「ユマが、いるのに…」

ユマがいるくせに。

「…くっ…」

はっとして目を開く。あろう事か、ラディスは俯いて声を出さずに笑っていた。肩が震えている。ひどすぎる。

「ひ、ひどっ…」

「どうもおかしいと思っていた。…お前、何か勘違いしてないか？」

次に続くであろう残酷な言葉に身構えた。お前をからかっているだけなのに、本気にするな。

「ユマは俺の妹だぞ。どうしてそんな事になるんだ？」

くくく、とまた笑った。リィンは訳が分からないまま、むっとした声で言い放つ。

「でも血は繋がってない！」

「ユマも俺も、お互いをそんな対象に見た事なんて一度もない。俺は常識的な道徳心を持っているつもりだがな。…いや、そうとも言

えんな。恩人の娘に手を出すくらいだ」

「だ…だって、でも…」

「誰に吹き込まれたのか知らないが、言っておいてやろう。妹には婚約者がいる」

リィンはがっくりと口を開いて固まった。

「ワドレットという研究員だ。お前も知っているだろう?」

「え…えええっ!!」

一度に様々な記憶が脳裏をよぎってゆく。ワドレットの牧歌的な眼鏡顔。ラディスを安心させてあげなくては、と語ったきらきら輝く瞳。あれにはそんな意味があったという事なのか。そう言えばエンポリオが、ラディスが彼に厳しくなるのには理由があると言っていた。その理由を聞きそびれていたのを今やっと思い出した。ユマと会社の前で会った事も…。

最初から最後まで、勝手な勘違いだったというのか。

「うう、嘘だろ」

「こんな事で嘘をついてどうする」

「そんな…」

ラディスが面白そうに顔をのぞきこんでくる。リィンはあんぐりと口を開けたまま顔を赤く染めてゆく。

「でも、じゃあ、グレイアは…」

「言ったろう、あいつは野獣だ。弱った獲物が目の前にいたから、食らおうとしただけだ」

「な、何だよそれ…。何が、何だか…」

リィンの赤茶の瞳から、透明な涙がこぼれ落ちた。

「あ、れ…」

次々と涙がこぼれてゆく。どうして自分が泣いているのか分からなかった。悲しいのとも違うし、嬉しいのとも違う。心が震える。

「リィン」

ラディスが落ち着いた声で名を呼んだ。リィンの白い頬を包み込むように両手を添えて、額に口づける。頬に流れる涙を唇ですくい、その柔らかな唇に優しいキスを落とした。

「う…っく」

ぼろぼろと泣いているリィンに、ラディスは何度も優しく触れるようなキスをする。リィンはぎゅっと目を閉じて浅い呼吸を繰り返す。身体が熱い。もう、このままでは…。

「ラディ…ス…」

涙目のまま彼を見つめた。至近距離で青い瞳が見つめ返してくる。

彼の薄茶色の髪が顔にかかる。どくん、と心臓が跳ねた。瞳を伏せた彼がゆっくりと近づき、また唇が重なる。

「ん…うっ」

焦がれるような深い口づけ。リィンの身体がびくりと反応する。愛おしさが胸に込み上げ、今まで抑え込んでいた気持ちが溢れて決壊する。唇が離れた瞬間、リィンは震える声で心を叫んだ。

「あ、す…好きだっ。僕、ぼく…ラディスが、すき…」

「リィン…」

呼吸をするのももどかしく、引き寄せられるように二人は唇を重ねる。情熱的な大人のキスがリィンを翻弄してゆく。

好きだ、好きだ、すきだ…

「ンッ…」

頭の中が真っ白になり、身体の芯から燃えるような熱が生まれる。リィンはぎゅっと眉根を寄せ、ラディスの服を掴んで空気を求めて身じろぐ。彼はそんなリィンを逃さず、角度を変えて深く口付けてくる。彼の舌がリィンのそれを絡め取り、リィンの理性を奪ってゆく。びくん、と身体が震えた。ラディスの手がリィンのブラウスの中へ伸びる。

「あっ…や、やめ…」

肩で息をしながら訴えた。触れられている部分が、熱い。

「ちょ、待って…っぅ」

塞がれるように口付けられ、またそのキスに夢中になってしまいそうになる。

リィンは何とか理性にしがみついて、ラディスの腕を掴んだ。自分が変になりそうだ。感情がコントロールできない。こんな感覚は初めてで、どうしたら良いのか分からなかった。『力』が暴走しそうになっているのだ。

いつの間にかリィンの瞳は深紅に揺らいでいた。

「あ…だ、だめだって…。『力』が…」

ラディスがリィンの細い首筋に唇を押し当てる。全身にびりりと痺れが走った。

「っ…」

次の瞬間、どん、と鈍い音が部屋に響いた。はっとして慌てて身体を起こす。

「ラディス！」

彼はベッドの下に転がっていた。

『力』で彼を吹っ飛ばしてしまった。

「ご、ごめんっ」

ベッドの上から、ラディスを見下ろす。傍へ行きたかったが思うように身体に力が入らないのだ。ラディスは仰向けで大の字に寝そべ

ったまま笑い出した。

「お前を抱くのも命がけだな」

「だっ…」

リィンは顔を真っ赤にして言葉を失う。

「ああ…俺とした事が…。リィン、悪かった。まさか自分にここまで余裕がないとは…な…」

ラディスは独り言のように呟きを落として、そのまま眠ってしまった。

彫像のような整った寝顔に視線を向けぼんやりとする。すっかり気抜けてしまった。我に返ったおかげで、倒れてしまいそうな程恥ずかしくなってきた。

僕は、何か恥ずかしい事を口走ってなかったか!?

それに、ラディスと…。

「ぐあ…」

リィンは奇妙な声を出してベッドの上でぶるぶると首を振った。

069：恋

翌日からソアはレーヌを離れラディスの診療所へ行く為の準備や引き継ぎ等の作業で、途端に慌ただしくなった。ゲムの村を襲ったヒト型のイグルの件をリィンから聴取し、報告書を書き上げ、二人で校舎内の長い廊下を歩く。

「診療所には通いで働く二人の女性がいると聞いているが」

「うん。チェムカとニコルっていうんだ。とっても優しくて、強いよ。そういやラディスの周りにいる女の人達って、みんな強いな…」

「私はうまくやれるだろうか」

ソアにはその辺りが少し心配だった。自分は俗に言う女の世界には、疎いし鈍感である。そう自覚はしているのだが、どう頑張ってもなじめない。
隣を歩くリィンがこちらを見上げて微笑んだ。

「大丈夫だよ。ソアってとても素直な人だから」

「…照れるな。そのように言われるのは初めてだ」

リィンは感情の豊かな女性だ。イリアス族にしてはとても珍しい。彼らは特殊な『力』を持っている為に、感情をコントロールする術に長けている。常に平常心を忘れず冷静で、物静かな印象だ。
解放の女神と謳われた女性と、人権を勝ち取る為に命を落とした英雄との子。クレイからの手紙を読んで皆驚いたものだった。あの、ラディスの診療所にその子供が姿を現したと知った時には、何らか

の運命を感じずにはいられなかった。その頃からずっと会ってみたいと思っていたのだ。

リィンは飾らず真っ直ぐな性格で好感が持てる。イリアス族として迫害と差別が渦巻く壮絶な日々を生き抜いて来ているのに、少しも捻じれた部分がない。その赤茶の瞳で、正確に人の本質を見定める。ドレスを着た時は美しく洗練された女性にしか見えなかったが、普段の格好だと線の細い少年にしか見えない。

「ニコルの野菜スープは最高に美味しいんだ。…あ、」

中庭を挟んで向かいの廊下に面した部屋から、ラディスとクレイが数人の研究員とともに出てくるのが見えた。彼はビーダの腕輪の研究も、更に前進した結果を持ち込んで来てくれた。実用されるまであともう少しだろう。今後はここでその研究も引き継ぐ予定である。

リィンが向かいの廊下に向かって、大声を上げた。

「ラディス！」

その声に手元の資料に視線を落としていたラディスが顔を上げた。クレイや研究員達も何事かとこちらに視線を向けている。

「僕はあんたの護衛だっ。あんたを護るのはこの僕だ！地獄の果てまでついてってやるからな！覚悟しろ！」

その場の全員が、一瞬呆気にとられて固まった。それから声をかみ殺すように研究員達が笑い出し、ラディスがしかめっ面をして片手をひらひらと振った。向こうに行けと言っているようだ。

「ふん。僕を甘く見てるからだ」

そう言うリィンの顔は真っ赤である。ソアは笑った。こんなにストレートな表現の仕方があったのか。

何て、強い。

◇◇◇◆

「まったく…。酒でも飲んでいるのか、あいつは」

クレイは笑った。研究員達と分かれ、次にモドの部屋へ向かう途中である。

「…ラディス様、本当にソアを連れて帰るのですか？」

目の前を大股で歩く長身に向かって声をかける。

「ああ」

聞かなければと思っていた。彼が診療所を自分に任せるという事は、彼がルキリアの帝都ベイルナグルを離れるという事だ。クレイには時期尚早のような気がしてならない。まだ様々な問題がそのまま残っているのだ。彼の提案する新しい診療システムに賛同し、提携する診療所や病院は確かに増えてきている。貴族や皇族の中にも味方が生まれ、何より共に歩む人々も力をつけ始めているのだ。今までラディスに守られてばかりだった人々が自ら考え、自発的に動くまでに成長している。しかし…。

ルーベン司教とその信者による弾圧も、皇族トワ妃による脅威も以前のままだ。

ラディスという大きな柱を、今この時点で失っても良いものだろう

か？

ラディスが立ち止まり、振り返って言った。

「もう全ての布石は打ち終わっている。会社はエンポリオとワドレットがいれば十分だし、診療所にはお前がいる。往診で診ている患者達の事もロンバートの病院にいる若い医師達に頼んでおいた。あそこもベルシェがいれば大丈夫だろう。

…おそらくはこの先の道筋が決定するような出来事が、これから起こる。お前の不安も無理はないがな、時は待っちゃくれないんだぜ。迷ったり躊躇していたら機会を逃す。ここからが正念場だ」

≪黄金の青い目≫が、静かにクレイを見据えている。クレイは緊張を高めた。

これから、何か重大な出来事が起こるという事なのだろうか。

「それより、クレイよ。お前はソアをどうする気だ」

突然話の矛先を向けられ、どぎまぎする。

「ど、どうと申されましても…」

クレイは冷や汗をかきつつ必死で言葉を探す。

「私は…ソアはこのレーヌに置いていた方が良いかと思います。あれは優秀な人材です。シャウナルーズ様のお傍にお仕えさせるのが一番良いかと…」

「あいつはお前と暮らしたがっているんだぞ？」

「し、しかしソアはレーヌ国にとって必要な人間です。自分ごときの傍にいるよりも、もっと意味のある生き方が…」

「…言い方が悪かったか。お前はソアをどう思っているんだ」

「はあ…。とても素晴らしい女性だと思います。テンペイジ議長にも太鼓判を押された聡明さで…」

ラディスがゆっくりと息を吐き出しながら首を振った。

「そうじゃない。お前は、どう思っているかと聞いている」

クレイは言葉に詰まった。ずっと思っていた。

ソアは聡明で賢く、剣術にも長けている文武両道の女性で、女帝も信を置く程の人材である。それに数年ぶりに見た彼女は、とても美しい女性に成長していた。そんな彼女を自分の助手として使うのはどうかと思うのだ。

「私にはもったいない女性です。他にふさわしい相手がいるかと思うのですが…」

クレイは僅かに俯き、小さな声で呟いた。どうもこういう話は苦手である。

「俺には、お前にはあいつしかいないと思うがな」

「え…」

「お前のように神経質で面倒くさい男を相手に出来るのはソアしかいない」

ラディスはクレイを射るように見つめ、きっぱりと言い切った。

「お前が心を許している女はあいつだけだろう。ソア以外に同じ部屋で眠れる相手が他にいるか？」

「そ、それは…」

クレイはみるみる顔を赤く染めてゆく。

「お前の謙虚さは時に残酷だ。お前がそれ程言うんなら、あいつはここに置いていくぞ。良いんだな？」

「し、失礼しますっ」

ラディスの問いに答えず、逃げるように踵を返して廊下を引き返してゆく。

昔から苦手だった。欲しいと思ったものに、後先を考えずに手を伸ばす事が自分には出来ない。前後の事を考え、周りに支障をきたさないようにするにはどうすれば良いかと無意識に考えてしまうのだ。それは幼い頃から、レーヌの女帝に仕える為に施された教育によるものだろう。生まれて初めて自分の求めるままに動いたのが、ラディスを自らの主と定め、彼の傍に仕えると決めた事だ。

私は…。ソアをどうしたいのだろうか。

◇◇◆◆

「リィン、あなたに来客があったようだ。呼んでくるのでここで待っていてくれ」

そう言い置いてソアが校舎の中へと消えていった。自分に来客なんて何かの間違いじゃなかろうか。レーヌ国に知り合いはいない。大学校の巨大な玄関口で佇んでいると、遠くからミッドラウが片手を上げてやって来るのが見えた。

「何であんたがここの制服着てるんだ」

彼はどこで調達したのか大学校の制服を着ている。深緑の立襟が、凛々しい面立ちに良く似合っていた。

「これか？レーヌの恋人が俺にプレゼントしてくれたんだ」

得意そうに胸を反らせる彼を見上げて、リィンは呆れた。

「…何人恋人がいるんだよ」

ミッドラウが無遠慮にリィンの肩に腕を回して声をひそめる。

「んな事より、どうだ、ヤったか！？」

瞬間にリィンの顔が真っ赤になり、慌てて彼の身体を押し返して怒鳴った。

「何言ってんだよっ！ミッドじゃあるまいし、ラディスがそんな事するわけないだろっ！」

彼は唖然としてリィンを見下ろし、それから面白そうに顔をゆがめた。笑うのを我慢している。

「…それに、そういう関係じゃない」

リィンは少し俯いた。何せ昨日は自分が勢い余って告白してしまっただけなのだ。ラディスの大事なひとがユマだと勝手に思い込んでいて、それが勘違いだったという事実が分かった他には何もない。彼が誰を好きなのか分からないし、自分をどう思っているのかも分からないままなのだ。

ラディスが自分なんかにキスをしたのも酔っ払っていたせいだからで、きっと覚えていないに違いない。

そう思うと少し気分が落ち込んでしまう。今朝だって彼は普段と何一つ変わらない態度だった。

「こりゃあ、世話が焼ける…。どうやら問題はこっちにもあったみてえだな」

ミッドラウがリィンの細い両肩に手を置いて、背の低いリィンと同じ目線になるように屈んだ。

「すまんなリィン、どうやら俺の早とちりだったようだぜ！」

「何？」

訝しげに睨むリィンに、にんまりと笑顔を向けて運び屋は陽気に言い放った。

「お前はまだまだ子供だ！ガキだ！おこちゃまだ！」

「何だとっ」

素早くリィンの白い頬にキスをしてミッドラウはからからと笑いな

がらその場を去っていった。何故だか思い切り馬鹿にされたようで、むっとしてその後ろ姿を見送る。

「リィン」

ソアが一人の青年を連れてやって来る。リィンは息を飲んだ。

「紹介しよう。こちらはイリアス族のルセロ。このレーヌの首都で暮らしている」

ブラウンの短髪に白い肌。赤茶の瞳がリィンを見つめている。白のブラウスに黒のズボンで、背はソアよりも少しだけ低い。

「初めまして。あなたにお会いする事が出来て、とても嬉しい」

ルセロが穏やかな笑顔を向けて片手を差し出した。久々に同族の人間に出会えた喜びで、リィンは嬉しさで声が詰まった。固い握手を交わす。

「ソア様、リィンを他の皆にも会わせてあげたいのですが、町へ行っても？」

ソアがリィンに視線を向けた。

「僕も、イリアス族の人が他にいるなら、会いに行きたい」

「よろしい。では馬車を用意しよう。ここからなら馬車で行けばすぐだ」

「良かった」

ルセロがまたリィンを見下ろす。
やっと会えた…。自分と同じ瞳の色。懐かしく優しい温もりがリィンの胸を満たしていった。

０７０：不器用な人

「これはシャウナの頭痛の薬で、こっちはテンペイジに渡してやってください」

ラディスが次々と小包を机の上へ置いてゆく。椅子に座ったままモドは眼鏡ごしに彼を見上げた。

「お前の調合の腕はピカ一じゃからのう。このわしでもここまで出来ん。相手によって薬品の配合の割合を変えるやり方は今もってお前にしかやれんからな。…で、テンペイジはどこか悪いのか？」

「相当胃痛に悩まされているはずだ。女帝にさんざん振り回されているんだろう」

モドは立派な白髭を揺らして笑う。

「お前は何でもお見通しじゃな！全然変わっとらんで安心したぞ！」

ラディスは苦笑をもらし部屋を片付け始めた。ここは研究室も兼ねているのだが、ひどい散らかりようだった。

「モド先生もお変わりないようだ。少しは片づけた方が良い」

「部屋が散らかっていても人は死なんぞ。どうだ、お前も料理の腕は少しは上がったか？鼻が良いくせにお前はちっとも料理が出来ん」

この青年がまだ彼の診療所で働いていた頃、一度だけ料理を作らせた事があった。ラディスは何でも難なくこなせてしまう多才な人物

だったが、何故だか料理だけは驚く程下手だった。その時も長時間悪戦苦闘して彼が拵えたものは、人が口に出来るような代物ではなかった。殺人的な味で、返って芸術的と言える程の異様なものだった。

「人は料理が出来なくても生きていけるものですよ。それにうちには腕の良い料理人がいましてね」

「ふん。まあ人間一つくらい不得手がある方が、愛嬌があって良い。聞いたぞ、ルキリア国の研究員が、あの特効薬の精製を習得したそうじゃないか」

「ええ。三人がかりですが」

「なんの！素晴らしい快挙じゃ。元より調合という作業には研ぎ澄まされた集中力と繊細な感性がなければ出来んのだ。その時の天候、気温、季節。全てを鑑み、極小の単位で刻みながら適正な割合を弾き出し、配合してゆかねばならん。このレーヌの者達も、とりわけ手を焼いているのが特効薬の精製じゃ。あれはいまだに安定した割合を算出出来ておらんからの。

…ラディスよ、お前はどうやって部下を育てた」

たくさんの書物を書棚に戻しながらラディスが答える。

「簡単です。寿命を縮める程の厳しい教育だ。何人も辞めていきましたよ」

モドが豪快に笑った。

「先生、診療所はどうされたんです？」

「娘婿に譲った。もうわしは隠居の身じゃ。ここで好きな研究をしながらゆっくり余生を楽しもうと思っておる。…で、ここの研究員達をどう思う？」

「良いですね。良い意味でも悪い意味でも、小さくまとまっている」

「最近骨のある若造が減ってつまらん」

モドはため息をついて眼鏡をはずし、首を左右に振った。

「…そうですかね。そうは思えないな」

「そう思うか？」

「ええ。人材というのはどこにでも転がっているものです。それを見出せないでいるのは、見つける側の人間に問題がある」

さらりと言う。ラディスには分かっていた。モドは自分の思考をよく知っている。このような質問をすれば、自分がどう言うかくらい想像が出来るはずだ。それをあえて言わせる事によって再確認をしているのだろう。彼も年を取ったようだ。

「ラディスよ、お前は神にでもなるつもりか」

「畏れ多い。俺は自分の器を知っていますよ。俺は俺の、為すべき事をするまでです」

「人の命をどう思う」

「そこに全ての可能性があります。善も悪も、幸も不幸も、その中に収まる」

「宇宙じゃな」

「ええ」

「人の死とは」

「永遠のうねりの中の一時です。長い瞬きみたいなものだ」

「哀しいな」

「ええ」

「ならば、わしらがやっている事は何だ」

ラディスはようやく見えてきた床を拭きつつ、笑った。

「人を、苦しめているだけでしょう。…モド先生、便秘ですか」

「もう五日も出とらん」

「あなたがこんな自嘲的な質問をする時は、たいがいが便秘の時だ」

二人は穏やかに笑い合った。

「お前が選んだ娘を見て安心したわい。小さな尻というのも、なかなか良いもんじゃ」

モドの弟子は両手に紙束やゴミを抱え、肩を落とす。

「ここの連中は勉強のしすぎで刺激が足りていないようだ。昨日からそればかりで困る」

部屋から出てゆこうとする彼に、モドは声をかけた。

「のう、ラディスよ」

美しい顔は年数を経て精悍さを増したようだ。身体つきもがっしりとしていて力強い。しかしその瞳は少年の時から変わらずに、時には冷酷に感じる程に冷静で、あまり感情を映さない。

「頼むから、わしより先に死んでくれるな」

青年は口元を上げて微笑んだ。

「先生も知っているでしょう。憎まれる者程、細く長く生きるもんです」

◇◇◇◆

ソアは廊下でテンペイジと数名の役員達と話をしている最中、モドの部屋から出て来たラディスを見つけ片手を上げて呼び止めた。

「ラディス殿、良い所に。今ちょうど引き継ぎの話をしていた所なのだが」

彼は両手いっぱいにゴミを抱えていたが、その場で立ち話の輪に加わった。ソアはレーヌ国の中枢で重要な役割を果たしている。無事

に旅立つ為には全てをきちんと後継の人間に引き継いでゆかねばならない。大変ではあるが、やってやれない事はないのだ。そんな事は大した問題ではなく、ソアもそこは不安に思っていない。ただ、あの鈍感な生真面目人間が、ちっとも分かってくれていないのだ。ふと視線を感じて顔を向けると、そこに当の本人がぼうっと突っ立っていた。

「ああ、クレイ。ちょうど良かった、君にも意見を…」

役員の一人がクレイに声をかけた時だった。クレイが慌てた様子で踵を返し、駈け出して行ってしまった。

「…廊下を走るとは、けしからん」

ソアはむっとした表情でぼそりと呟く。

「彼があの様に慌てるとは。何事ですかな」

テンペイジも不思議そうに顎に手を当てて遠くなってゆくクレイを眺めた。

「しまったな…。ソア、あいつを追いかけろ」

「は？」

ラディスの言葉にソアは目を丸くした。彼はうーん、と唸って続ける。

「あんまりにも煮え切らんから、少し苛めた」

「何っ」

ソアはぎろりとラディスを睨みつけて、急いでクレイの後を追いかけた。

「クレイッ」

大声で彼の名を呼んだ。クレイは振り返りもせずに走ってゆく。全く、この年でどうしてここまで全力疾走せねばならんのだ…。彼の背中を見つめて走りながらぼんやりと思う。

私はいつまで、この背中を追いかけ続けねばならんのだ。

廊下の角を折れて空いている教室に彼が飛び込んで扉を閉めた。肩で息をしながら、ためらいがちに扉を開いて中をのぞくと、クレイが机に手をついて荒い息を整えていた。

「一体、どうしたと言うのだ…」

普段びしりと身なりを崩さないクレイだが、全力で走ったせいで髪型が少し崩れていた。こうして見ると昔とちっとも変っていない。背が伸びただけで、自分の知っている彼だ。

俯いているクレイの頬に涙が伝った。彼が泣いている。ソアはぎょっとして慌てた。

「な、何だ。ラディス殿に何を言われた!?」

「…ち、違うんです…。わ、私が、悪いのです」

「クレイ…」

「あなたはレーヌにとって必要な人間なのです。ここにいた方が良いのです。なのに、私は…」

クレイは固く目を閉じたままぽろぽろと泣いている。

「わ、私は、あなたがっ…」

「泣きたいのはこっちだ」

ソアは鮮やかな緑の瞳で彼を睨みつけた。その瞳からも涙がこぼれる。

「ソア…」

「どこでどうやって生きるかは自分で決める…！」

ずかずかと近づいて、泣いているクレイを力任せに抱き締めた。

「どうしてクレイが泣くんだ！泣きたいのは私の方だぞっ」

「す、すみません…」

何て繊細な人なのだろう。ソアの胸に愛おしさが込み上げる。彼をずっと支えてゆきたいと思う。

なのに…どうしてそれが伝わらないのか。

「い、いい加減諦めたらどうだっ。私を嫁にしろ！それで全てが丸く収まる！」

「ソア…」

彼が震える声で自分の名を呼んだ。ソアはぎゅうと一層力を込めてクレイを抱き締め、鼻を啜りながら小さく呟いた。

「わ…私の幸せは、あなたの傍に、いる事だ…」

「ソア」

クレイの腕が遠慮がちにソアの背を抱き締めた。彼女の長い髪から良い香りが漂う。

温かい…。人の温もりがこれ程温かいものだとは思わなかった。

彼の瞳にまた涙が溢れる。

「…ありがとう…」

071：シルヴィ

「リィンというのね…。良い名だわ」

目の前の女性が微笑んだ。色素の薄い茶の巻き髪に白い肌。イリアス族特有の容姿。その隣に座っている老人も赤茶の瞳をしている。ルセロが茶器を持ってこちらへやって来た。

ここは町のはずれにある赤い屋根の民家の一室。レーヌ国の首都の片隅で、イリアス族がひっそりと暮らしていた。

「ここには私達を含めて六人のイリアス族が暮らしているのよ。他の二人はまだ小さな子供で、一人は壮年。今三人はお使いに出ているわ。皆ばらばらに、それぞれ国中を放浪していたの。血は繋がっていないけど、私達は家族よ」

あなたもよ、リィン。

リィンは胸が熱くなり、ぐっと口元を結んだ。彼女はレドナと言い、この家族をまとめている家長だ。ふっくらとした輪郭で、白のブラウスにふんわりとした薄青のスカートが柔らかな印象を与えてくれる。イリアス族の女性と出会ったのはいつ以来だろうか。それに彼女は母様と同じ年だ。もし母様が生きていたら、きっと彼女のような女性なのではないだろうか…。

感極まるリィンの肩に手を載せて、ルセロが隣の席に腰を下ろした。向かいに座るレドナも優しいまなざしを向けている。そのレドナの隣にいる老人も黙って目を伏せていた。同じイリアス族なら言わずとも分かる。どれだけの迫害の中を今まで生きて来たのか。温かな沈黙が部屋を満たした。

「しかし…そうか。シルヴィも、ゼストも逝ってしもうたか…」

老人が静かな口調で呟いた。

「ええ。けれど、私達にリィンを残してくれました」

「僕は、誰も護れなかった…」

「リィン。それは違うわ。人にはそれぞれ時があるのよ。あなたの時は、いずれ訪れる。

さあお茶が入ったわ、いただきましょう」

それから色々な事を語り合った。今までどうやって過ごしてきたのか、何があって現在に至るのか。このレーヌではイリアス族に対しての差別や偏見も皆無に等しいと聞いてリィンは驚いた。旅を続ける同族の人々も、数名ここを訪れて去っていったという。

「ここに残るのも去るのも、その本人の意思によるもの。私達は気高き自由の民よ」

「うん…」

「イリアス族は、いずれ静かに滅んでゆく種族だ」

老人が訥々と語り出した。

「イリアス族の女性は少ない。それに元来、子を為す事が困難であるのだ。ここまで数を減らした今、自然と他の種族と交わり溶け込んで、やがてこの紅い瞳も、この『力』も全てが跡形もなく消えて亡くなるだろう。イリアス族の最後の生き残りとして、その終焉を

見届けてゆきたいと思っている」

リィンはじっと老人を見つめた。彼もリィンを見つめ返す。何て冷静な瞳だろうか。皺だらけの顔に、悲壮なまでの決意が見て取れる。たくさんの同族の死を、時には自分よりも若い者達の死を、見つめ続けた結果なのだろうか。超越している。生の喜びも、死の恐怖も…。

「嫌だなあ、オーディル爺は。いつも暗いんだから」

ルセロが軽やかに笑った。

「ティルガもゼストも、僕にとったら英雄だ。格好良いもの」

「ねえリィン、あなたさえ良ければここに居て良いのよ」

「…ぼ、僕」

「そうだ、リィン。ここにいて？ここにいれば、もう大丈夫だよ」

ルセロが明るい表情でリィンの顔をのぞきこんでくる。リィンは彼に微笑んでからレドナに顔を向けた。

「僕は、ここには居られません」

「何故？」

「ラディスを護ると決めたから…」

「それは、ルキリア族の、彼の事ね？」

「あの少年がまだ生きていたとはな…」

老人が感慨深げに呟いた。

「リィン、どうしてだい？ここにいれば危険はないんだよ。僕らもいる。人として安心して暮らせるんだ。きっと君の家族もそれを一番に望んでいたはずだ」

ルセロがリィンの小さな手を取って、身を乗り出して語りかけてくる。

「ルセロ、よしなさい。あなたの気持ちも分かるけれど、リィンの心が大事なの」

やんわりとレドナが制した。

「でも…」

リィンはしっかりとした声音で続ける。

「僕は、ラディスを護ると決めた。あの人と一緒に生きてゆくと決めたんです。それがどんなに辛くて困難であっても構わない。そこから逃げてしまうよりは、ずっと良い。ラディスが、今の僕の居場所をくれた。僕に新しい家族をくれた。僕に生きる意味をくれた。ラディスが、僕の全てだから」

レドナはゆったりと微笑んだ。

「やっぱり…。あなたはシルヴィの子だわ。だってそっくりですも

の、その強情なところ…」

「え？母様を知ってるの！？」

リィンは身を乗り出してレドナを凝視した。その時、微笑んでいる彼女の瞳が深紅に揺らいだ。

「…え…」

ぐらりとリィンの身体が傾いて、テーブルに突っ伏すように倒れ込んだ。ルセロが気を失ったリィンを優しく抱きかかえ苦笑する。

「乱暴だな、レドナは」

「こうでもしないとこの子は去ってしまうわ」

「さて、後は王子様が助けに来るのを待つばかり…」

ルセロが軽々とリィンを抱き上げ、その柔らかな栗色の髪に口付けた。

「どうも損な役回りだ」

「仕方ないわ。これもリィンの為」

シルヴィの娘の為よ。

レドナは静かに窓の外へ視線を投げた。美しい私の親友。幾度となく、私を救ってくれた彼女。あなたの娘の為ですもの。ねえ、シルヴィ…。

レドナの脳裏に鮮やかに浮かび上がる記憶。彼女やイリアス族が、いまだ奴隷としてあの忌まわしい施設で暮らしていた日々の事。虐げられた毎日の中で、生き生きと輝くシルヴィの笑顔…。

◇◇◇◆

「もう、どうしてこんなになるまで『力』を使ったりしたの！」

シルヴィはレドナの腕の中で、弱々しく笑っている。

「ち、違うの。お姉ちゃんは私を助ける為に『力』を使ったの…」

シルヴィに縋りつくように泣いている少女が叫んだ。少女の服はところどころ破れていて、その白い肌が露わになっていた。身震いするような恐ろしい想像が容易に頭に浮かぶ。傍にいた婦人が少女にシーツを被せてやり、震えている肩を抱いた。

「ひどすぎる…。私達は一体いつまでこうやって、ここで地獄のような毎日を送らなければならないんだ。死んだ方がましだ…」

男性が部屋の片隅で頭を抱えて俯いた。もう涙を流す体力さえ残っていない。薄暗い小屋のような部屋の中で、皆漆黒の首輪を嵌められて震えていた。

イリアス族の『力』を抑え込む為だけに作られた、漆黒の首輪。これをつけたまま『力』を発動すると自らの体内にも甚大な被害が出る。この施設で働かされているイリアス族を隷属させる為、ここに収容される前に奴隷の焼印を押され、さんざん痛めつけられた後に嵌められるのだった。

「あんな奴らに負けてたまるもんですか…私は絶対に屈しないわ」

ゆらりとシルヴィが身体を起こした。彼女だけが、この首輪を恐れずに『力』を発動させる。この強制労働施設の中でも、彼女の存在は大きかった。はっとする程に美しい容姿の為にすぐに目をつけられたが、そのどす黒い横暴な触手を『力』で跳ね返してきた。ルキリア族も恐れて手を出さない。レドナも何度となく彼女に助けられている。しかし、そのせいでシルヴィの身体はいつだってぼろぼろだった。

「さあ、夕食にしましょう」

「こんなもの、人間の食べるものじゃない」

薄汚れた床に無造作に転がる干からびたパンと、ぼろぼろの皿にうっすらと注がれた具のないスープ。忌々しげにそれを睨みつける仲間達をよそにシルヴィは笑った。

「ないよりましよ」

レドナは心配で仕方なかった。シルヴィは強い。だけれども、あんな華奢な身体で何度も『力』を発動させては命が持たない…。皆に食事を勧め、子守唄を歌って寝かしつけてからシルヴィは静かに小屋を出て行った。レドナがその後に続く。

「シルヴィ待って。あなた…本当に、この首輪が外せると思ってるの？私聞いたのよ…。あなたが数人の仲間達とその事を相談し合ってるって」

シルヴィが月明かりの落ちる荒野で微笑んだ。レドナは一瞬見惚れ

てしまう。
まるで月光の化身のような瑞々しく儚い、美しい彼女。

「出来るわ。きっとこの毎日にも終わりが来る。信じていて、レドナ」

「ねえ、あの医者に何か言われたんでしょう?彼を信頼しすぎるのは良くないわ。だってあの人は、イリアス族のくせにルキリア族の味方をしているのよ」

きょとんとした表情でシルヴィがこちらを見つめている。

「でも私達の診察をしてくれるわ。それに彼のお陰で新しいシーツや服が届くようになったのよ」

「そうだけど…」

「それに私、彼が好きなの。初めてだわこんな気持ち。愛おしくて仕方ないの。辛くても生きていれば、良い事もあるものね…」

真っ直ぐな彼女の心が、レドナには眩しかった。

「シルヴィ」

遠くの影が、その名を呼んだ。すらりとした長身。

「今行くわ」

「待って。あんまり無理はしないで。お願いよ…」

「ありがとう。私は大丈夫。ねえ待っていて、絶対にその日が来るから。決して諦めないで」

彼女の飴色の髪が夜風になびいた。二つの影がレドナから遠ざかってゆく。

ある日、突然に歴史が動いた。

「レドナ、行くわよ」

皆が小屋の中で静かに息を殺してレドナとシルヴィを見守っていた。レドナは固く目を閉じて、ゆっくりと頷く。緊張で震えてしまう。シルヴィが白く細い指を黒い首輪にかざし、その瞳を深紅に染め上げた。ギィン、と高い金属音が鳴り、イリアス族の人々を苦しめていた漆黒の首輪が、真っ二つに割れて床に転がった。

「…は、外れた…」

レドナが掠れ声で囁き、震える手で自分の喉元を触った。ああ…本当に、こんな日が来るなんて…！

シルヴィの瞳がレドナを真っ直ぐに見つめ、それから微笑んだ。

周囲からどよめきが上がる。

「どう？何ともないでしょう？この首輪にも脆い部分があるの。そこを見定めて、鋭く『力』を放つのよ。さあどんどんいらっしゃい！」

別の小屋でも若いイリアス族がシルヴィと同じようにして皆の首輪を外している。自由を手に入れた人々は監視員の制止も聞かず、歓喜の涙を流しながら走り出す。その時、少年が小屋に駆け込んで来

てシルヴィに向かって叫んだ。両目からぼろぼろと涙を流している。

「シルヴィ！もう間に合わないよ！ティルガが、ティルガが処刑されるっ！！」

少年はその場に泣き崩れた。あれは確か、シルヴィの弟…。

「うわあああ！！ティルガあああー！…」

壮絶な叫び。レドナは息を飲んだ。ティルガ…。それは確かあの青年医師の名だ。はっとしてシルヴィを見やった。

「駄目よゼスト！しっかりしなさい！このまま皆の首輪を外すのっ！！」

弟を叱咤する彼女の瞳は、涙で濡れていた…。

「そ、そんな…」

「レドナ、お願い、皆を外へ導いて！」

それから全ての顛末を知るまでの間の記憶が、レドナには途切れ途切れにしか残っていなかった。シルヴィの声に導かれるように必死に駆けた。それは皆同じだった。ともすれば行き先に迷ってしまいそうな程の激しい感情と動揺に混乱しつつ、理性を保っていられたのは、シルヴィが力強くその先を指し示してくれていたお陰だった。数日後に奴隷解放宣言があり、それからしばらくしてイリアス族の人々は世界に散っていった。北の町を目指す人々も多くいた。その旅の途中でシルヴィが教えてくれたのだ。あの青年医師がイリアス族を救う為に何を行い、何故処刑されなければならなかったのかを。

そして彼がいなければ、彼のあの特別な『力』と、シルヴィがいなければ、首輪を外す事も出来なかったのだ。二人の覚悟がなければ、イリアス族の未来はなかった。レドナは愕然として、涙を流した。

どうして愛する人を亡くしてまで、私達は自由を求めなくてはならなかったのかしら。他の人達は何の苦労もしなくても手にしているものなのに。私達が何をしたのかしら。同じ人間なのに、どうしてこんなに、命の重さが違うのかしら。

この世界はとても不公平ね…。

シルヴィは愛情深い女性だ。彼女もまた泣きながら、しかしにっこりと微笑んだ。レドナが今まで見て来た中で、一番美しい微笑みだった。ねえレドナ…私の中には新しい命が宿っているの。

人って不思議ね。生まれては死んでゆくのよ。そしてまた、新しい命を紡ぐ。

０７２：勇敢なる瞳

日が落ちて辺りはすっかり暗くなっていた。待ちくたびれて、ルセロが椅子に座ったままうたた寝をしている。その肩にそっと手を置いて囁いた。

「さあ、王子様のお出ましよ。ルセロ」

「ふあ…。随分と忙しい王子様みたいだね。こんなにお姫様を待たせるなんて」

玄関口まで迎えに出ていた子供達が勢い良く部屋の扉を開いて走り込んで来た。その後ろからすらりとした長身の彼が現れる。白のブラウスは肘まで捲り上げられ逞しい両腕がのぞく。黒のベストに黒のスリムなズボン、茶革の長靴。確か医者をしていると聞いていたが、その体躯は細身ながら軍人のように鍛え上げられていた。薄茶色のぼさついた髪に、青い瞳。その奥が金色に輝いている。

「初めまして、ラディス。私はイリアス族のレドナ。こちらはルセロよ」

「よろしく」

ルセロが彼に微笑む。ラディスは優雅な笑みを浮かべて一礼を返した。

「どうやらお待たせしてしまったようだ。申し訳ない」

「まあ…。勘の良い方ね、話が早いわ。子供達、二階に上がってい

なさい」

はあい、と可愛い返事をして子供達が部屋を去って行った。ルセロがゆっくりと扉を閉めて席を勧める。彼はレドナと向かい合うように席についた。

「はっきり言うわ。リィンは返しません。あの子は私達と一緒にここで暮らします」

「リィンはシルヴィとティルガの子だ。僕らイリアス族にとっても、大事な娘だ」

「…なるほど。リィンを拉致した理由はそこですか」

「人聞きの悪い。あなたの傍は危険すぎます。私達が何も知らないとでも？」

「ならば知っているはずだ」

「そうだね。だからリィンを拉致したんだ」

レドナの後ろに控えているルセロが言った。

「ルセロ」

「レドナ、この人の言うとおりだよ。リィンを説得出来なかったから、あなたに頼みたいんだ。リィンにここに残るように言ってくれないか？あの子はここに居た方が幸せだ」

ルセロが睨みつけるように、ラディスに鋭い視線を投げた。対する

彼は上手に口角を持ち上げて笑顔を作る。思わず見惚れてしまう程の、美しい青年。

「俺はイリアス族を決して裏切らないと誓約を立てた身です。…しかしなあ、それは飲めない頼み事だ」

「何故？簡単な事でしょう？」

レドナが首を傾げて微笑んだ。茶の巻き髪が肩で揺れる。

「あれはやっと見つけた女だ。簡単に手放す訳にはいかない」

青い瞳が、射抜くような視線を寄こす。ルセロが乾いた笑い声を上げた。

「交渉決裂、だね」

二人のイリアス族の瞳が、深紅に揺らぎ始める。みしり、と床が鳴った瞬間に、ラディスの身体は背後に吹き飛ばされた。壁に打ちつけられ、そのままずるりと崩れ落ちる。彼は盛大に咳き込みながら身体を折り曲げて苦笑を洩らした。

「…イリアス族は温厚な民だと思っていたがな…」

「時と場合によります。ラディス、リィンから手を引くと言いなさい」

片手を床についてラディスが二人を見上げる。

「断る」

ずん、と彼の両肩にまた重圧を加える。ラディスは音を立てて両手を床についた。その腕ががくがくと震えている。『力』をこれだけ加えているのに、まだ耐えるというのか…。彼は心も身体も、強靭なものを持っているようだ。

「さあ、あなたはもう気を失いますよ。あなた一人のエゴにあの子の人生を巻き込まないでください。お願いです、あの子を私達に返して。リィンはあなたの恩人の、ティルガの娘なのですよ？」

「それが、どうした…」

みしみしと彼の両手が床にめり込んでゆく。手加減はしていないはずなのに、まだ耐え続けている。
ラディスが咳き込んで血を吐き出した。

「あなた方の、覚悟も分かるが…こっちだって、相当の覚悟であいつに、手を出したんだぜ…」

口の端から血を流し、青い瞳の青年はレドナを睨みつける。薄茶色の髪が乱れて顔にかかり、その揺るぎない眼光に怯んでしまいそうになる。

「あいつは、俺が…命をかけて護る。心にもない事を言うくらいならば…、ここで死ぬ方が、本望だ」

レドナが深く息を吐き出して『力』を収めた。ルセロが彼女に顔を向ける。

「レドナ…良いの？」

「これ以上しては、本当に彼を殺してしまうわ。…何て頑固な人なのかしら」

ラディスは激しく咳き込み、ふらりと立ち上がった。

「…イリアス族が話の分かる優しい種族で、本当に良かった。そうじゃなかったら、俺は何度も死んでる」

彼の軽口に二人のイリアス族は顔を見合わせて笑った。

「乱暴な事をしてごめんなさい。ラディス。あなたを信じます。私達の大事な娘を、お願いね」

レドナが立ち上がって長身のラディスを見上げて右手を差し出した。二人は握手を交わす。

「驚いたよ。伝説って言われるような人って、やっぱり変わってる。ごめんね、痛かったろう？」

ルセロがおどけたような笑顔を向け、ラディスも荒い息を整えつつ笑顔を返した。

「それから…リィンはあの『力』の事を知っているのですか？あの子にも父親のような『力』が？」

「…まだ、告げていない。しかしリィンは俺を選んだ。あいつにもあの『力』がある」

言葉を失うレドナとルセロ。数秒の沈黙の後、レドナが震える声で

呟いた。

「そう…。何故それを先に言わなかったの？ラディス」

「言う前に吹っ飛ばされた」

彼の答えに、自然と笑みがこぼれる。

シルヴィ。あなたの娘が選んだ男性は、とても強い人だわ。全く、呆れちゃう…。

あなたたち親子って、ほんとにそっくりだわ。

◇◇◇◆

肩で息をしながら、眠っているリィンを抱えてやっと大学校まで帰って来た。さすがに馬車を断ったのはやせ我慢だった。彼らは本当に本気で、自分に向かって『力』を放っていたようだ。どうやら肋骨が折れている。もしかしたら数本…。

「…ん。あ、あれ！ラディス？」

リィンが目を覚まして声を上げた。自分が抱えられているのを知って驚いたようで、腕の中でじたばたとする。途端に激痛が走った。

「ま…待て待て、暴れるな。今下ろすから…」

リィンを部屋の壁際にあるチェストの上に下ろして息を整える。

「…何で棚の上なんだよ。人を荷物みたいに」

むっとした声が降ってきた。ラディスは壁に両手をついて俯いて言葉を絞り出す。

「お前は背が低いからな…この方が話しやすい」

「あんた、汗かいてる。まさかまた怪我してるの？どうしたの？」

心配そうな瞳を向けて、リィンが顔をのぞき込んできた。

「参ったな…かなり痛い」

「おい、大丈夫かよっ」

ラディスは笑った。

「リィン、お前は不幸な女だな。もっと苦労せずに、幸せに生きていけただろうに…」

「…何だよそれ。僕に喧嘩売ってんのか」

リィンのドレス姿を見て、心底そう思った。こいつは自分の傍にいなければ、こうやって女性として着飾る事が出来るだろう。その美しい容姿で男達を魅了させてやるのだ。楽しく会話をしてプレゼントをもらい、話題の劇を観てその感想を語り合う。旨いものを食べて真っ白なベッドで眠りにつく。このレーヌでなら、それが出来る。それで良いじゃないか…。それが幸せというものだ。

その全てを奪って良い権利が、この俺にあるのか。

「ラディス、どうしたの…」

同じ目線にある赤茶の瞳を正面からじっと見つめる。徐々にリィンの頬が赤く染まってゆく。ラディスは静かに顔を寄せてリィンに口付けた。

愛おしい。

自分にこんな感情がまだ残っているとは思わなかった。自分は気付かなくても良いところにまで、気付いてしまう。

たとえば、モドの目はもうすぐ見えなくなるだろう。それは彼自身も気付いている。

暴かなくても良い嘘まで見破ってしまう。知りたくもない人の本音が見えてしまう。だからこそ恋愛になどは興味もなかったし、それは全て幻想だと思っていた。今でもそう思う。大抵はうぬぼれと自己愛と傷のなめ合いだ。

「…ん、や、やめろってばっ」

リィンが両手でラディスの頬を挟んで顔を離した。浅く息をしながら睨んでくる。

「そ、そうやって毎回ごまかしやがって…！」

「…何だその言いがかりは」

「あんた、間違ってるよ」

真っ直ぐにこちらを見つめる力強い視線。赤茶の瞳。綺麗だ、と思う。

「言っただろ!?僕は地獄の果てでもついていくからな!あんたが何と言ったって、絶対に!!
…苦労とか幸せとか、僕には分かんないよ…。そんなのどっちだって良いんだから」

耳まで真っ赤にしながら、リィンは必死になって言葉を紡ぐ。

「ラディス、…あんたを護るのは、僕だろ?」

ラディスは穏やかに微笑んだ。

「…随分と頼もしいボディガードだ」

「それにしてもおかしいな…。どうして眠っちゃったんだろう。せっかく同じイリアス族の人達と会えたのに」

「ふん。またレーヌに来たら良いだろう」

「ちゃんとお別れの挨拶もしてない」

「俺が代わりにしといてやった。ビーダの腕輪もすぐに実用化されそうだ」

「そうなの?」

もう一度キスをしようと顔を寄せた時だった。豪快にリィンの腹の虫が鳴いた。一瞬呆気にとられ、じわりと笑いが込み上げてくる。

「わ、笑うなよっ!仕方ないだろ!お昼もちょっとしか食べてなか

ったし…」

なるべく静かに笑おうとするが、どうやっても肋骨に激痛が走る。

「くっ…てて。お前、俺を殺す気か」

そうだな。このまま死ぬのも悪くない。

リィンが不機嫌な声で呟いた。

「あんたっていじわるだな…。知らなかった」

０７３：手紙

「お主には三つ詫びる事があり、一つ、伝えておく事がある」

レーヌを発つ朝、リィンは大学校と対で建つ荘厳な大聖堂の中にいた。純白の壁面、その内部には歴史的にも価値の高い彫像が整然と並び、様々な着色の施されたガラスが複雑に組み合わさって窓を作っていた。遥か上空に丸い円天井があり、そこから繊細な細工の巨大な室内灯が吊り下げられている。このレーヌの技術力は驚嘆に値する。床も完璧に磨き上げられていて、リィンはここへ入る時に靴を脱ぐのかと疑った程だ。

「まず一つ、初日の無礼をお許し願いたい」

大聖堂に並べられている長椅子に座るリィンは、目の前にいる女帝に視線を向けた。シャウナルーズは今日も正装をしている。緑のかつらに漆黒のペンダント、白のドレスに≪清廉なる織布≫を首から下げ、大聖堂の正面にある台座の椅子に座っている。その背後には巨大なリリーネ・シルラの聖像があるのだろう。今は布がかけられており、その姿を見る事は出来ない。

「お主をからかった事だ。悪く思うな、我はお主のような若者が好きなのだ。実を申すとな、レーヌ国の女帝は生涯独身を貫かなければならぬ掟がある」

「え…」

「あのように賢くて美しい者達を集めて侍らすのが、我のささやかな楽しみなのだ」

女帝は口元を横へ引き上げてにやりと笑い、リィンは頭を垂れて恐縮する。

「…ぼ、僕の方こそ、申し訳ありませんでした。シャウナルーズ様にあんな生意気な事を…」

「ふふ。リィン、そう固くなるな。ここには我とお主しかおらぬ。…このレーヌの印象はどうだ？」

「とても素敵な所です。本当に人々の心も豊かで、とても美しい。町並みも全て。それに、シャウナルーズ様の事、僕は好きです」

女帝は細い両目を少し見開いて、たおやかに笑った。

この女性の素晴らしさを、あえて語る事はしなくても良いのだろう。このレーヌ国が、何故長い歴史の中で揺るがずに、どの国に対しても中立でいる立場を貫き、世界一の医学や学問と優秀な人々を持ち得る事が出来るのか。ひとえに一国を預かる指導者の思慮深さと先見の明、それから中心で働く者達の覚悟の深さによるものだろう。そしてシャウナルーズの人柄こそが、全ての土台となっているのだ。リィンは彼女の垣根のない人との対し方に心を打たれていた。

「礼を言うぞ、リィン。…しかしお主にはまだ謝らなければならぬ事があるのだ。もう一つ、それは永い歴史の中で行われた残虐なる裏切り。

…およそ百年前、我々レーヌ族はイリアス族を裏切り、かの者達を地獄の底へ突き落した。イリアス族を悪魔に仕立てる事によって、我々レーヌ族は生き延びて来たと言って良い」

室内が一瞬暗くなったかと錯覚するような重苦しい空気が辺りを包み込んだ。
女帝は一時息を止め、目を伏せる。

「シャウナルーズ様」

リィンの声。

「僕はイリアス族です。けれど、あなたを非難する権利はないし、あなたに謝らせようとも思わない。それはあなたが一国の王だからじゃないんです…」

リィンは話していて何故だか泣きそうになる。真剣な心を受け止める事は、とても、重いのだ。

「シャウナルーズ様もラディスも、みんな、ずっと戦ってる。自分の事なんかそっちのけで、平気で人を踏みにじる人達も大勢いるっていうのに…。実際に歯を食いしばって両手を伸ばして戦っている人に、僕は偉そうな事を言うつもりはありません」

そこまで言って、リィンはごしごしと腕で涙を拭った。

「…そうか。お主がそのように思うていてくれるならば、我は決してそれを裏切らぬ。信じよ。我の命のある限り、この戦いは止めぬと誓おう。どんな脅威や誘惑にも屈せぬと宣言しよう。
リリーネ・シルラの第一の使徒、シャウナルーズ・ルメンディアナは、その生涯を既に捧げておるのだからな」

シャウナルーズは毅然と告げ、また目を閉じて静かに語り出した。

「最後に一つ。それはリィン、お主の父、ティルガの事だ。十八年前の奴隷解放宣言の経緯はお主も知っておろう。お主の父母の話だ。その当時レーヌ国の女帝を務めていたのは我の先代、トゥーラ・ザグナンドという女性であった。

お主の父、ティルガに医師の認定を渡したのはこのトゥーラだ。しかし彼はレーヌの大学校でその医学を学んだ訳ではないようだ。当時の記録を見ても、そのような学生の名が残っておらぬ。あの当時はレーヌを持ってしても、奴隷であったイリアス族の入学を認めてはいなかった。彼に医師の認定を渡す事さえ前例のない一大事であっただろう。おそらくは別の土地で、飛び抜けて優秀な一級の名医の元で薫陶を受けたに違いないと推測する」

トゥーラ・ザグナンドは賢明な女帝であった。代々続くレーヌ国の女帝として恥じぬような偉業を数々打ち立てていった程だ。しかし、晩年になるとその手腕に陰りが見え始める。

不治の病に冒されたのだ。

その頃から少しずつ何かが崩れ始めていった。一国の王とはいえ、所詮は弱き人の子である。金を積まれるままに医師の認定を渡し、正しく進言する者は遠ざけられ、媚びへつらう狡賢い者達を傍へ集めるようになった。トゥーラは死の恐怖に心を食われてしまったのだ。

当時シャウナルーズも大学校の役員として仕えていたが、ある日突然に解雇を言い渡された。

このレーヌの女帝に届いたティルガからの嘆願書は、残っているものだけでも全部で九百六十四通にまでに達する。何という膨大な、命の叫びであろうか。トゥーラは我が身の可愛さ故に、それを全て無視し続けた。今もってなお絶大な権力を有しているルキリア族の脅威を恐れ、血の滲むようなイリアス族の訴えを、黙殺する事を決めたのだ。

「おそらくは…。もっと早い段階でトゥーラが正しい決断を下していたならば、お主の父は死なずに済んだであろう。前女帝はルキリア国王へ書状を出した後、すぐに以前の枢機議会の面々を招集し次の女帝を指名した。そしてその夜に自ら命を絶ったのだ」

「…そ、そんな…」

「外へは病死としておる。…リィンよ」

ゆっくりと瞼が開かれ、緑に輝く瞳がリィンを射抜いた。

「トゥーラを最期に救ったのは、お主の父、ティルガだ」

静まり返った大聖堂の中に、凛とした女帝の声が響いて染み込んでゆく。

「このレーヌにいた我々ではなく、嘆願書の一筆一筆が、トゥーラの心を生き返らせたのだ。狂った心に直接訴え、響かせ、その命までをも変えた」

シャウナルーズは深く息を吸い込んで円天井を見上げた。

「その後の自殺を止められなかったのは、我らの過失である。リィンよ、だからこそ我は、お主に謝らなければならぬと思うておったのだ。だからこそティルガは、レーヌ国では英雄と呼ばれておる」

「…僕は、その事について語る言葉を持っていません…」

リィンは僅かに俯いて、力無く首を振った。

昼夜を問わずに筆を走らせ続けた青年。その赤茶の瞳には悲痛なまでの力強い光が宿る。何度でも、何度でも筆を取り書き続ける。薄暗いランプの灯の下で。夜明けの鳥が鳴く頃まで。腕が動かなくなるまで懸命に書き続ける。どれだけ届かなくとも、どれだけ破り捨てられようとも、命を削る思いで綴り続けた。この世界で唯一の、揺るがぬ良心と信じているあの国の主へと。

その手紙を受け取った年老いた女性。

長い年月をたった一人で戦い続け、国を支え続けた女性。その死の恐怖に心が折れてしまった彼女の指先が、わなわなと震え出す。幾度破っても、幾度燃やしても、自分の名宛てで届く手紙。

寝台を照らす小さな灯りの元で手紙を掴んでいる指が震えている。しわの寄った手の中で、ぐしゃりと紙きれが無抵抗に潰された。ベッドのシーツの上に、次々と涙が落ちてゆく。

慟哭。

彼女はそのまま前のめりに泣き崩れる。その丸まった背が、全てを物語る。

「僕が言えるのは…ティルガは、英雄なんかじゃないんです。罪人でもない。僕の、父です」

「リィン」

「僕はずっと覚えていようと思うんです。父様や母様、僕を支えてくれた人達の事を。僕は弱いけれど、でも生きていこうと思うんです。それが後に残された僕が為す事であるから。

それに…そうやって僕の父と母と、当時のイリアス族の人達が、死にもの狂いで戦って手に入れた人権は、結局は幻みたいなものだったんだ…。現実はそんなに甘くない。だけど、生き残ったイリアス族として、僕は負けずに生きていきたい」

そう告げて、リィンは真剣な表情でシャウナルーズを見つめる。

「…リィンよ。誇り高きイリアスの子。やはり我は間違っていなかったようだ…。お主にこの話をするのを最後までためらっておった。お主にいらぬ枷を嵌めてしまうのではないかと逡巡した。何と強い子だ」

「ぼ、僕、そんな上等な人間じゃないんです…」

「構わぬ。お主は人として、ただ愚直であれ。それがお主の父母の願いだ」

女帝はにこやかな笑みをリィンに向け、二人はこの時初めて笑い合った。

「して、ここからが本題だ。リィン、お主は自分の『力』の事を知っているか？」

どきりとする。

リィンは瞬時に察した。女帝はイリアス族の持つ特殊な『力』の事を指して言っているのではなく、あの『力』の事を言っているのだ。自分の身体が青白く光り出したあの現象。まさかこのレーヌの女帝が、その答えをくれるというのだろうか。

「…詳しくは知りません。でも、何か、僕には特別な『力』があるみたいだ」

「やはり…。あやつは話しておらぬようだな。お主の母も伝えなかった事だ。おそらくは生涯伝えぬつもりでおるのかも知れぬ」

驚いて女帝を見上げる。やっぱり…。

「ラディスは知ってるんですね…」

「ああ。お主のあの『力』は何より、その父、ティルガから受け継いだものである。イリアス族の中でも、あの『力』を有している者が他にいるか定かではない。類い稀な、驚くべき『力』。それを持つお主自身が知らぬというのは、我は違う気がするのだ。だからこそ、お主の家族、そしてラディスが隠している事でもあえて伝えようと思うておる」

リィンは背筋を伸ばし、シャウナルーズの言葉に耳を傾ける。

「我の話を聞き、考え、今後どうしてゆくかはお主自身が決めるとよい」

０７４：禁忌の『力』

片手に荷物を抱え、もう一方の手に先程調達してきた馬の手綱を引いて、町から大学校の巨大な校舎へと引き返す。朝日に輝く瑞々しい緑、茶けた校舎の壁面。大学校の庭園は隅々まで手入れが行き届き、噴水には満々たる水が流れている。なかなか良い眺めじゃねえか。ミッドラウは独り言ちた。朝のすがすがしいその風景に見知った形を発見する。向こうもこちらに気付いてちらりと視線を寄こした。運び屋は相手を指差して思い切り笑ってやった。

「…気でも狂ったか」

ラディスがじろりとこちらに一瞥を向ける。彼は黒のマントを羽織り腰に剣を差して、準備万端で突っ立っていた。

「よおじじい！くっくっく…俺は笑いが止まらん！お前の禁欲生活はまだまだ続きそうだな。…ぷっ」

「お前の呑気な笑い顔を見ていると安心するよ。こんな阿呆でも世界は優しく受け入れてくれるんだってな」

「今は何を言われてもちっとも効かんな！愛しい女を抱けない哀れな男のひがみってところか。くくっ。苦しめ苦しめ。今までさんざん遊んでいやがった罰だぜ」

「俺に罰が当たるとしたら、お前はとっくに呪い殺されているはずだろうが」

「何を言う。俺様のは遊びじゃねえ。全ての女達を平等に愛してい

る！」

ミッドラウがふんぞり返って宣言し、ラディスがふん、と鼻で笑った。

「どうしてお前がここの制服を着ているんだ。さっさと脱げ。品格が落ちる」

「うるせえよ。俺様程似合う男はいねえ！それより他の連中は？まだ挨拶でもしてんのか」

「そのようだ」

「俺はこのまま≪配達≫へ行く。ザイナス経由だ。帰りはどっかで馬車を拾って勝手に帰れよ。じゃあな、他の連中に宜しく言っといてくれ」

言いながら慣れた手つきで荷を立派な茶の馬の背に括りつけてゆく。

「ミッド」

彼の背にラディスが声をかけた。

「あん？」

作業の手を止めずに返事を返す。

「俺がもしもの時は、リィンを頼む」

はたと手が止まる。ミッドラウはゆっくりと長身を伸ばし、振り返

った。
腕を組んで佇んでいるラディスは柔らかく微笑んでいた。ゆるやかな風が、薄茶色の髪を揺らす。
ミッドラウは刹那、殺気が立ちのぼる程の鋭い視線を親友に向け、それからにんまりと笑った。
「任せろ」
大股でラディスに近寄り肩に腕を回して、力づくで彼を引き寄せた。お互いの頭を突き合わせる。彼のミントハーブの良い香りがミッドラウを包んだ。
「また会いに来るまで、死ぬんじゃねえぞ！」
ラディスがミッドラウの背を、宥めるようにぽんぽんと叩いた。
「…お互いにな」
◇◇◇◆
リィンは大聖堂を後にし、校舎内の長い廊下をゆっくりと歩いていた。
シャウナルーズ様の緑の瞳。冷静で全てを見通しているかのようなその視線は、どこかで見た事があるような気がする。
＊
大聖堂の高い円天井にシャウナルーズの声が響く。

「お主の特別な『力』。それは自らの命を削り、他者に命を分け与える事の出来る『命の力』だ。しかしその『力』を発動させるには制限がある。それはおそらく本人の命を落としかねない禁忌の『力』であるからだろう」

『命の力』を発動させる事が出来る相手は世界にただ一人。自らが選んだ、たった一人にのみ限られる。
そして、たとえそれを発動させて命を分け与えても、全てを救える訳ではない。

「…実を申せば、この『命の力』の事は実際には良く分かっておらぬ事が多い。何せ症例がない。お主の父、ティルガの事しか分からぬからな。…その点においては我よりもラディスの方が詳しく知っておるやもしれぬ。
相手を救いたいと、嘘偽りなく心の底から念じた時、体内から青白い光が発光し、相手の体力・治癒力を倍に引き上げるという効果が現れる。しかしその行為は自らの命を削って与えるものであるから、『力』の加減によっては本人が死に至るものである、と推測されている」

リィンはじっとりと汗をかいていた。
僕は、ゼストにその『命の力』を使った事がある。…多分。だけど、なのに…。

「ゼストは助からなかった。僕が『命の力』を使っても、死んでしまった…」

「…そうか。リィンよ。あの『力』は魔法のような、万能なものとは違うのだ。相手が怪我を負っている場合、その現実的な外傷が跡

形もなく消えてなくなる、という類いのものではない。身体の負担を軽減させたり、奪われた体力を回復させるようなものだと思えば良いだろう」

だからゼストは死んでしまった…。僕のたった一人は、今はラディスだ。

「何が、『命の力』だ」

リィンの瞳が怒りに潤んだ。

「そんな中途半端な『力』なんて、いらない…」

では自分は常に、この世界でたった一人救う事が出来れば良いと思っているようなものだ。何て卑屈で矮小な、命だ。しかもそれでさえも救えないのなら、一体何の為の『力』だと言うのか。

「リィン」

凛としたシャウナルーズの声。

「何故イリアス族でもない我が、この事実を知り得たか。それはかの嘆願書の中で、ティルガが告白しているのだ」

「父様が…？」

「彼は愛する女性、シルヴィと出会い、この『命の力』の存在を初めて知る事になる。医師であった彼は自らの起こした現象を冷静に分析し論理的にまとめていった。そして本来はたった一人にのみ有効であるべき『命の力』を、その他の何人にも施す手段を編み出し

たのだ」

ゆらりと女帝が身体を起こしてリィンを見つめた。僅かに眉根を寄せて。

「…何故、当時の若いイリアス族達が首輪を外す術を見つける事が出来たのか」

どくん、とリィンの心臓が鳴った。まさか。父様。

「『命の力』はたった一人にしか発動されない。しかしその一人を媒体にすれば第三者にも有効になるのだ。言うている意味が分かるか？ティルガはシルヴィの身体を通して自らの命を削り、仲間のイリアス族達にも生命力を分け与えていたのだ」

だからこそあの忌まわしき漆黒の首輪を、破壊する事が出来た。『力』を発動させると体内に深刻な被害を及ぼすその首輪に、一体どれだけのイリアス族の人々が傷つき死んでいった事であろうか。数十年と続いてきた奴隷の歴史の中で、数え切れない程たくさんのイリアス族が、その首輪の犠牲になって来たのだ。

シルヴィや若いイリアス族達は首輪を壊す手段を見つける為に幾度となく『力』を発動させ、ぼろぼろに傷ついていったに違いない。そしてその度にティルガはシルヴィを癒し、シルヴィを解して仲間達を癒して立ち上がらせていた。自分の命を削りながら。

シルヴィはティルガが段々と弱ってゆくのを感じていたが、しかしその手を止める事はしなかった。

何故か。

そんな事、分かりきっている。

「ティルガはその嘆願書の最後に、イリアス族解放の願いを聞き入れられるならば、自分の身は研究の為に捧げても構わない、と綴った。

…結果的に処刑され命を落としたが元よりお前の父はどう転んでも、命を賭す覚悟でいたのかも知れぬ」

「とうさま…」

呼吸をするだけでも胸が苦しい。締め付けられる。

ティルガとシルヴィの覚悟が、その心が、痛いくらいに打ち込まれてゆく。何故それ程まで…。

けれど、命をかけた父と母がいたからこそ、今自分はここにいて生きている。

「…リィンよ、これで分かったであろう。何故お主の家族が『命の力』の事を告げずにいたのかを。何故ラディスがこの事を話さずにいるのかを…。この『力』を持つ当人にとって、何一つ利点がないのだ」

リィンの細い肩がぴくりと動いた。

そうだ…。たった一人を解して、第三者にも『命の力』を与える事が出来るなら。

自分の思いついた事に、鼓動が早まってゆくのを感じた。呼吸が浅くなる。

ラディスを媒体とすれば、ユマにそれが出来るという事だ。ユマの体力と治癒力を引き上げる事が出来たら、もしかしたら…。

「それはならん。決してラディスに言うでない」

リィンは驚いてシャウナルーズを凝視する。僕の考えている事を見通した…？

「ラディス以外の誰かに、この『命の力』を使おうと考えておるのであろう？その様な事、お主の性格を知って考えそうな事だとは思うておったわ」

女帝はため息をついて弱々しく微笑んだ。彼女もとても疲れているように見える。

「あの男はこの『命の力』を恐れておる。残酷な『力』であるのは間違いないからな。もしかしたらティルガが仲間達に『命の力』を発動させていた場面を見ていたのかも知れぬ。研究さえしようともしない所を見ると、極端に恐れておるようだ。あやつ程の男を、そこまで怯えさせる『力』なのだ。

お主に使わせるはずがあろうか、リィンよ。お主の命を削ってまで自らが助かりたいと、他の誰かを助けたいと、あの男が欲すると思うか？」

ラディス…。

鼻の奥がつんと痛んだ。泣きそうになる。

「我があえて伝えたのにも、思いがある。リィン、お主はこれを心に留めておくがよい。いずれその特別な『力』を使いたいと思うような時が訪れるまで。じっと一人で見つめ続けてゆくのだ。誰の手を借りてもならぬ。…耐えられるか？」

リィンは真剣な瞳をシャウナルーズに向けて、こっくりと頷いた。

「シャウナルーズ様、ありがとうございます。僕なら大丈夫。この『命の力』も、父様がくれたものだと思うと、とても大事なものだ…」

そう告げて、ゆるゆると微笑む。

このレーヌの女帝と、こうやって話す事が出来て本当に良かった。ティルガの事、『力』の事を教えてくれたのがシャウナルーズで良かったと感じる。そしてその話を聞いたのが今の自分で良かったと、心の底から、そう思う。もしこれがラディスと出会って間もない頃の自分ならば、父の話を聞いてシャウナルーズを敵と罵り、『力』の話を聞いて混乱し、心を閉ざしてしまったかも知れない。

あの診療所での日々がなければ、この場に耐えられる事も出来ない小さな自分のままだっただろう。

そもそもラディスがいなければ、自分がレーヌの女帝と言葉を交わす機会すらなかったのだ。

「…ラディスの力になりたいと願うならば、リィンよ」

シャウナルーズは切れ長の瞳を細めて優しい声音で呟いた。大きくて力強い、母のような声。その声を聞いただけで心の闇が消え安心して眠たくなってしまいそうな、慈愛に満ちた声。

「あやつより先に、死んではならぬぞ」

＊

廊下の先に朝日に輝く庭園が見えて来た。爽やかな緑が胸の中に清々しい風を運んで来てくれる。大きな噴水が見え、そこにソアにクレイ、ラディスが佇んでいるのが見えた。
やって来るリィンに気がついて、ソアが片手を上げた。緑のマントの下はブラウスに茶のベスト、黒のロングスカート。足元は強度の高い編み上げ靴で腰に剣を差している。彼女の荷物は大きな鞄が一つだけのようだ。まるで旅支度のような身軽さだが、それが彼女らしくて格好良かった。
リィンは笑顔になり皆の元へ駆けていった。

０７５：運命の子１

「何だか懐かしいな…」

ベイルナグルの広場付近で馬車を降りて、放射線状に伸びる石畳の道を町はずれの診療所へ向かって歩く。レーヌ国を出発してから三日をかけて、やっとここまで帰って来た。

「ルキリアの帝都は素晴らしいな。この建築の水準の高さは驚嘆ものだ」

ソアが町並みを眺め、ほう、と息をついて歩いている。

「朝の市場が開いている時間はもっと活気があって、人も大勢いるよ」

今はちょうどその朝市の時間が終わった頃だ。通りを歩く人々はまばらで、まだ昼頃の活気もない。普段通りの時間が流れている。ソアとリィンの手前をクレイが歩いていて、その前をラディスが大きな診療鞄を肩に担いで大股で歩いている。彼は疲れも見せずにずんずんと先へ行ってしまう。

「ラディス、もっとゆっくり歩いてよ」

リィンが声をかけた。

「ここで町の奴らに見つかって診察でも頼まれたらやっかいだからな、俺は先に行くぞ」

彼はそう言って片手を上げ、振り返らずに歩いてゆく。

「おや…診療所に人が集まっていますね」

クレイが遠くに見えて来たコの字型の診療所を見つめて呟いた。リィンも目を凝らして先を睨む。確かに玄関口に人々が固まっている。十人以上はいるだろうか。まさか自分達の出迎えでもないだろう。じわりと緊張する。

「本当だ。何だろう…」

一足先に着いたラディスに気付いた人々が、一斉に長身の彼を取り囲む。何事か会話を交わし、ラディスがこちらを指差した。人だかりの中から見知った女性が姿を現す。ニコルとチェムカだ。こちらに手を振っている。その雰囲気からして、どうやら良くない事件が起きている訳ではなさそうだが、何とも言えない緊張感が辺りを包んでいた。不思議に思いつつ手を振り返した時だった。

「リィン！」

二人が同時にリィンの名を叫んだ。

「…え、僕？」

人だかりが一気にこちらに向かって押し寄せて来て、あっという間に取り囲まれてしまった。気押されて呆然とする。集まっていた人々は皆町の住人で、見知った顔も何人か混ざっていた。

「リィン、聞いたかい！？」

ニコルが挨拶も抜きでリィンの細い両腕を取って揺さぶってくる。白髪混じりのひっつめ髪が少しだけ乱れている。その隣にいるチェムカもそばかすの散った愛嬌のある顔をずいと近づけて、リィンを見つめていた。二人とも興奮した面持ちで、その瞳は真剣そのもの。リィンは揺さぶられてがくがくとしながらマントのフードをとって答える。

「な、何を？一体どうしたの。何かあったの？」

「昨日の朝、≪早馬≫が走ったんだべ。帝国政府が新しく決定した通達が、ルキリアの国中に向けて発令されたんだ。たくさんの≪早馬≫が、書簡を持って出て行ったんだべ、リィン」

チェムカが勢い込んで語りかけてくる。帝国政府、という単語を聞いてリィンはまた緊張した。目の前にいるニコルに視線を向けると、彼女の頬は興奮で赤らんでいた。

「ニコル。ねえ、どうしたの！？」

「取り下げられたんだよ、解除されたの。イリアス族に対して出されていた警戒令が、取り消されたんだよ！」

「……え？」

「リィン、イリアス族は本当の本当に、自由になったんだよ。もう何の制約もないんだよ、監視なんかされない。全部、皆と同じだよ」

ニコルがリィンの華奢な肩を抱き締めた。彼女の太めの身体から優しい太陽の匂いがする。

警戒令が、取り下げられた？

「良かったわねえリィン」

「小僧、良くやったな！」

「大したもんだよこの子は…」

皆が笑顔で、口々に賛辞を向けてくる。これはきっと何かの間違いだ。冗談かも知れない。みんなしてたちの悪い冗談で自分を騙そうとしているのだろうか。そうとしか考えられない。

だってあの帝国政府が、イリアス族の警戒令を解く訳がない。今までずっと、僕らを踏みにじって嘲笑っていたのだから。ティルガとシルヴィ、当時のイリアス族達が命がけで勝ち取った人権に唾を吐きかけ砂をかけて、十八年間ずっと嗤い続けていたのだから。

「ね、ねえ…。何言ってるの？よく分かんないよ」

リィンはやっとの思いで言葉を吐き出し、乾いた笑顔を作った。

「みんな嫌だな。僕がそんな冗談に騙される訳ないじゃないか…」

ニコルが涙をこらえ、微笑む。

「イリアス族のリィンが、アルスレイン元帥様を敵から守ったんですもの。ルキリア皇族の、次期国王のアルスレイン様の命を救ったんですもの！これが冗談な訳がありますか！」

「…え」

どういう事だ。アルスレイン、ルキリア皇族。…そうか。

ロガートとの国境にあるゲムの村。その村へ毎年定期視察へ向かうルキリア帝国軍元帥のアルスレイン王子。今回はその視察へイリアス族を同行させた。それは彼を失脚させ、亡きものにしようと企む第六王子の息のかかったガズナイル長官の提案であった。アルスレインは全てを承知で、この先の未来を切り開く為に、勇敢に勝負を挑んだ。案の定、村ではイグルと山賊が待ち構えていて命がけの戦闘になった。しかしその戦いに勝利し、彼は黒い謀略を見事に打ち砕いた。

「そ、それじゃあ…本当に…」

本当に？

「そうだよリィン！」

身体から力が抜けて、その場に崩れ落ちそうになる。ニコルとチェムカに抱えられ、そのまま診療所の応接室へ引きずられるようにして連れて行かれた。

それから一日中、その部屋に張り付けになってしまった。町の人々が挨拶や祝福をしにひっきりなしにやって来る。リィンは完全に思考の停止した頭をかくんと垂れて、何とかお辞儀をして笑顔を作って、当たり障りのない返事を返した。今日一日の出来事が突風のように通り過ぎてゆき、自分が何をどう受け答えしたのかも覚えていない状態だった。その一日を締めくくる最後の訪問客は、ルキリア皇族のエリナ王女と政府要人、ケイロスであった。

リィンはよろりと席を立ってルキリア皇族の二人に一礼をした。そ

の場にいたニコルとチェムカも腰を折って深々と頭を垂れる。

「リィン、よくやったわ」

エリナが勝気な表情を向けて、リィンの手を両手できゅっと握り締めた。つり目に少し上向きの鼻、手入れの行き届いた金の髪。今日はブルーの宝石が嵌め込まれた髪留めをしていて、紫のワンピースに身を包んでいた。

「ありがとう、エリナ」

リィンよりも少しだけ背の低い彼女を見おろして笑顔を返す。するとエリナはリィンの頬に素早くキスをして、にっこりと微笑んだ。

「兄様を助けてくれたお礼よ」

扉が開いてクレイとソアが茶器を持ってやって来た。二人が人数分のティーカップに飴色の茶を注ぎ、それぞれの前へ音もなく置いてから、静かに席に着いた。応接室にはラディス以外の診療所の面々とルキリア皇族の二人が顔を並べている。この診療所の主は留守中に溜まりに溜まった事務仕事の片づけや製薬会社の決済処理と、悪戦苦闘の最中である。

「きっとさぞや驚いた事だろう。君には何も話していなかったからね。すぐに説明に行こうと思ったのだが仕事が立て込んでいてね、申し訳なかった」

白髪混じりの金髪に彫の深い顔。≪黄金の青い目≫の目尻にはしわが刻まれている。紺色の軍服に良く似た帝国政府の制服。ケイロスはリィンに視線を向けて続けた。

「アルスレイン王子も最後までここへ来ようとしていたが、執務が忙しく抜け出せなかったのだ」

「だから私が代わりに来たのよ。リィンにも会いたかったしね」

エリナが澄ました顔でティーカップを傾ける。

「リィン。これが君の成し遂げた結果だ。誇りを持ちたまえ」

リィンはケイロスに向き直り小さく声を発した。

「…これが、ラディスの出した交換条件ですか」

一瞬ケイロスは目を見張り、それから笑った。

「そうだ。彼は今回の視察が成功したら、イリアス族に対して発令されているあの警戒令を取り下げよと私に条件を突きつけた。それを約束しなければ君を寄こさないと言ったのだ。しかし振り返ればそれは必然的な流れであったと思う。何故なら実際に君が、アルスレイン王子の窮地を救ったという事実があるのだからね。警戒令の取り下げに反対をしていた皇族達を黙らせるだけの大きな力となったのだ。

　要するに君の起こした行動の結果が最大限良い方向へと転じるように、ラディスや私が手引きをしたに過ぎない。何せ全ての前提において、あの視察が成功する事が必須であったからだ。そして君はそれを見事にやり遂げた。イリアス族として、その『力』を行使し、恐ろしい脅威から私達を救ってくれたのだ」

リィンは視線をそらして俯いた。皆が誇らしげな表情でリィンを見

つめている。

「それから…君にはまだ伝えるべき事がある。ルキリア帝国政府の中枢機関が議会で決定した事がもう一つあるのだ。それは、君に貴族の位を授与するというものだ。騎士(ナイト)の称号になる」

「ええっ！！」

チェムカが思わず叫んだ。

「そ、そんな…すごいわ…リィン。あ、あたしゃ感激しすぎて気を失いそうだよ…」

ニコルが片手で頭を押さえ、椅子の背に深々ともたれた。

「リィン、素晴らしい。何という快挙でしょうか…」

クレイも感嘆の呟きを洩らし、隣に座るソアは無言で頷いている。元来貴族とは世襲制のもので、ルキリア族のみがその地位を独占している状態である。その他にルキリア国に対して、有益で多大な貢献をした功労者に対し、その功績を讃えて授与される貴族の位がある。それが騎士(ナイト)と男爵の位だ。

ケイロスが咳払いをして浮き立つ皆の注目を集め、後を続けた。

「ぬか喜びをさせるようで申し訳ないが、この称号は受け取らず返上する事に決まっている。この事もラディスと事前に話してあった事なのだ」

「ええっ！？」

チェムカが身を乗り出すようにして叫び、ニコルは憤慨した様子で口を開く。

「なっ…何ですって!?どういう事でございますか、ケイロス様。当の本人を差し置いて、へ、返上するだなんて!」

ケイロスが慌てふためくニコルとチェムカに片手を上げて、ゆっくりと説明を始めた。

「貴族の位を戴いた者は、ルキリア貴族と同等の権利を得る事が出来る。しかし同時に義務も発生するのだよ。ルキリア国の騎士(ナイト)となるのだからね、ルキリア国に忠誠を誓わねばならない。そして今回の場合、リィンにとって好意的な感情で授与の可決があった訳ではなかった」

「え…?ど、どういう事だべ?だって称号の授与は、栄誉あるものだ…」

チェムカが眉をハの字にして困った顔をした。

「…なるほど。そういう事ですか」

クレイが無表情で前を見据えたまま呟く。隣にいるソアが顎に手を当てて、ふむ、と頷いて口を開いた。

０７６：運命の子２

「イリアス族を嫌っているルキリア皇族達は、リィンの活躍を妬んでいる。しかし今回ばかりは認めざるを得ない。確かにイリアス族の協力がなければ、その視察は惨憺たる結果に終わっていたであろうからな。そして改めて、イリアス族の『力』の威力を思い知ったのだ。…次にこう考える。ならばいっその事、そのイリアス族を抱き込んでしまえば良い。イリアス族の『力』を国を護る為に、ルキリア皇族の都合の良いように行使する為には、騎士（ナイト）の称号を与えるのが都合がよろしい」

「…あなたの言うとおりだ」

ケイロスがソアを見やり、腕を組んだ。

「皇族達は口ではリィンの功績を讃嘆し祝福するふりをして、内実、リィンをルキリア帝国軍に引き入れる算段をしているのだ。その足がかりとしての貴族の位なのだよ。それを受けてしまえば、君はルキリア国に忠誠を誓わされ、戦争や遠征への出動要請に従わざるを得なくなる。向こうはどこまでも狡猾だ」

「そ、そんな…」

ニコルが真っ青な顔をして絶句した。

「だからこそ、騎士（ナイト）の称号は受け取らずに返上するのですね。一度授与すると議会で決定した栄誉を辞退するのですから、プライドの高いルキリア皇族達は、この先イリアス族に称号を与えようなどとは考えないでしょう。外からの目もある」

と、クレイ。

「その通りだ。これで今後、イリアス族が戦争の兵器にされるような事態は防げるだろう。皇族達は今頃悔しさに身悶えているに違いない。

…ここまでが、彼の描いた筋書きだ。私は彼の筋書き通りに事を運んだに過ぎない」

ケイロスがいたわるような視線をリィンに向けて続けた。

「今回称号を返上する事によって、今後もう二度と、君とイリアス族にこういった機会が訪れる事はないだろう。しかし君を護る為にはこうするより他なかった。ラディスは何をおいても、君の身の安全を優先させたのだよ。リィン、察してくれたまえ」

リィンは一言も声を発さずに皆の言葉に耳を傾けていた。

「…僕は、貴族の位なんていりません。そんなの、この先もずっといらないんです。僕らイリアス族は、肩書きや地位を欲しません。ありがとうございます」

そのまま深くお辞儀をする。皆が無言で、頭を垂れるリィンを見つめた。

「でも、そうよ。イリアス族の警戒令が取り下げられたって事実はちゃあんとあるんですものねえ！」

と、ニコル。

「そうだ。永きにわたる迫害の歴史が、今日のこの日にとうとう終結を迎えた。その偉大な功績は後世に語り継がれてゆくものだ…」

それから話題はレーヌ国からやって来たソアの話に移り、ケイロスは様々な議論をソアと語り合い、とても満足した様子だった。診療所を後にする時、エリナがリィンの耳元で声をひそめて言った。

「近いうちにね、私ザイナスへ行くのよ。結婚相手との顔合わせ」

リィンが驚いてエリナを見ると、彼女はふん、と鼻から息を吐き出して続ける。

「見てなさい。気に入らない奴だったら、ぶん殴って帰って来てやるんだから。私だって負けないわよ、リィン」

エリナはつんと顎を上げて笑ってみせた。リィンも笑顔になる。

「私、リィンみたいな人が旦那様だったら文句言わないのにな…」

ルキリア皇族の王女と要人は専用の馬車で宮殿へと帰っていった。空には既に大きな月が昇っている。ニコルとチェムカを家へ送り届ける為、クレイとソアが診療所を後にした。リィンが行くと言うと、今日一日大変だったろうから部屋で休めと言われてしまった。リィンの知らない間にニコルとチェムカはソアと挨拶を済ませていたようで、気さくに言葉を交わしていた。悪くない雰囲気だ。

◇◇◇◆

リィンは書斎の扉の前に立っていた。すっと息を吸い込みノックをし、返事を待たずに扉を開く。自分の足元に視線を落としたまま、

ずんずんと部屋を横切り幅広の作業机の傍に来て止まった。沈黙。

「大丈夫か」

ラディスの声。リィンはちらりと目の前のラディスを見やった。彼は椅子に座って書き物をしていた手を休め、押し黙っているリィンを静かに見守っている。

リィンは自分の靴先を見つめながら、消え入りそうな声で本音を吐き出した。

「…僕、こんなつもりじゃなかった…」

「分かってる。俺が巻き込んだんだ。お前を使うような事をしたのは、俺だ」

「ち、違う…。そういう意味じゃなくって」

リィンの声が震え始める。

「だって、こんなに、あっけないなんて…」

心の底から喜べないのは何故なんだろう。十八年間も続いてきた、イリアス族に対する警戒令が解除されたのに…。

イリアス族は凶暴で残忍な種族であり管理が必要であるという警戒令の元、イリアス族の人々は人権を得た後も行動を制限され続けていた。リィンはずっとこの警戒令とルキリア皇族を恨み続けてきた。それが取り下げられたのだ。

もう監視されなくて良い。どこへ行くのも自由で、どこにいても、届けや身元調査をされずに済む。どんな職業にも就けるし、通常の

教育も受ける事が出来る。他の種族と同じ権利を得たのだ。
ずっとこんな日が来る事を待ち望んでいた。
なのにいざその日が来てみたら、色んな気持ちがないまぜになって、
どう喜べば良いか分からなかった。

「だって、おかしいよ…。僕らがずっと苦しめられていた警戒令が、
そんな簡単に…」

たった一回、ルキリア皇族を危険から護っただけなのに。
そんな簡単な事だったというのか。
イリアス族の十八年間は、一体何だったというのか。

「ぼく、分からないよ…」

リィンの頬に透明な涙が伝った。

警戒令が取り下げられた事実は嬉しい事に違いないのに、どうしても素直に喜べない。怒りが込み上げる。矛盾した気持ちが心をかき乱す。

「リィン」

ラディスがリィンの両手を取って握った。

「リィン、しっかりしろ」

意思のある、力強い声。両手から彼の体温が伝わってくる。

「俯くな、前を向け」

リィンは涙で濡れたままの顔を上げて、ラディスを見つめた。彼の真剣な瞳が、リィンをじっと見上げている。

「胸を張れ。何を泣く必要がある」

「だ、だって…」

リィンは肩を震わせてぼたぼたと涙を落とした。

「お前のした事は、お前が思っている以上に意味のある事なんだぜ。歴史が変わると言ってもな、そこには大それた神がいるわけじゃない。人だよ。人のちっぽけな行動が、きっかけを作り、大きな流れを生む」

「う…っ…」

「今日町の人間が、お前の元へやって来ただろう。皆、お前が心を通わせた奴らだ。お前がこの診療所に来て、どれだけの悪口を言われてきたか。それに負けずに今日までここで働いている。来たばかりの頃はお前の事を悪く言う奴らが大半だったが、今は違う。イリアス族でも、それがお前だからこそ、皆がお前を祝福しに足を運んだんだ」

ラディスはリィンの小さな手を握り締め、静かに語りかける。

「分かるか？それがお前のして来た事だ。お前の今までの行動が、町の奴らのイリアス族に対する偏見を、少しずつ変えていったんだ。そこに価値がある」

「…っ…く」

嗚咽をもらし肩で息をして、彼の言葉に必死に耳を傾けるリィン。

「それでもお前を妬んだり嫌ったりする奴も多くいるし、お前を英雄に担ぎ上げる奴も出てくるだろう。いくら≪早馬≫が駆けたとしたって、現状はすぐには変わらんしな。それが甘くない現実というもんだ。しかし、それらは全て、雑音に過ぎない」

ラディスが腕を伸ばし、リィンの頬に触れた。長い指先で優しく涙を拭う。

「言いたい奴らには言わせておけ。そんなもんに左右される必要はない。そうだろう、リィン。今まで通り、お前はお前らしく真っ直ぐに生きれば良い」

「ラディス…ッ」

リィンは泣きながらラディスに抱きついた。彼は震えている小さな身体をしっかりと抱き締める。

「警戒令の事はおまけみたいなもんだ。馬鹿みたいに真剣に頑張っていたら、人生こういう時もある。リィン、素直に喜べ」

「…ん、うん。うん…」

胸のつかえがとれたように、すんなりと心が落ち着いてくる。

そうか。僕は今まで通り、イリアス族として恥じぬように生きてゆこう。真っ直ぐに立っているか確認しながら、ただひたむきに歩いてゆくのだ。それで良かったんだ。

リィンを優しく包み込むミントハーブの香り。リィンは彼の肩に顔をうずめて、その香りを胸の奥へと吸い込んだ。ぎゅうと服を掴むと、力強く抱き締め返してくれる。

「う…っ。うえぇ…」

リィンが声を上げて泣き出した。

「…おい。どうしてまた泣くんだ」

ラディスが苦笑交じりに呟く。

「だっでっ…うえっ…えぇ」

彼の強さが、その優しさが、痛い程胸に響いてくるのだ。僕は護られてる。この大きな存在に。
もうずっと、護られてばかりだ…。

「あ、ありがど…う。ラ、ディス、ありがどっ…うぅう…」

「分かった分かった」

色々な事があった。知らなかった事を知り、たくさんの本当の事に気付いた。
父様と母様の事。イリアス族の事。僕の『力』の事。女性として着飾る事も、人を好きになる事も。ずっと諦めていた、この先一生自分にはないだろうと思っていた事でさえ…。

ラディスは僕にたくさんのものをくれる。

ラディス。僕はずっとあんたを護りたくて、強くなりたくて、無我夢中で走り続けて来た。でもいつだってあんたは悠然と全てを見据えて、見守ってくれている。

ラディス。僕はあんたの隣に並びたい。同じ先を見つめて、ずっと一緒に歩いてゆきたい。
それが叶うのならば、どんな苦労をしたって構わない。ラディスの傍で、あんたを護ってゆけるなら、他に何も望まない。

父様、母様、ゼスト。どうか僕に力を貸して。
この人を護ってゆけるように。

もう二度と、悲しい思いをしなくて済むように…。

【第5部・完】

０７６：運命の子２（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
長かった第五部がやっと完結いたしました。少し視点切り替えが多すぎたかなと憂慮ありですが、作者的にこの第五部、気に入っている部分でもあります。
来年からは後半の手直しをしつつ、らぶーであまーな番外編をまた一つ挟む予定です。その後、いよいよ最終部に。まさか年越しするとは思いませんでした。
私事で恐縮ですが、引越しをしまして当分ネットに繋がらない状況です。
更新遅れそうですが、必ず完結させます。
いつも読んでくださる皆様、本年中は大変お世話になりました。ありがとうございます。そして来年も物語共々、宜しくお願いいたします。

０７７：≪番外編≫愛しの月

夕暮れ時の診療所。最後の患者を送り出し、診察室の片付けを終えたラディスとチェムカが居室の扉を開く。夕餉の美味しそうな香りが鼻先をかすめ、チェムカはほうと息をついた。

「はああ。今日もよく働いたべ！それにしても、やっぱりクレイとソアがいないとちっと大変だべなあ。忙しくて参っちまう」

「今頃二人はメークラインの美味しい料理でも食べているのかしらねえ」

てきぱきと配膳を続けていたニコルが前掛けで手を拭いながら、うっとりと遠くを見つめて呟いた。

「あそこはルキリアで一番人気の観光地だかんなあ。何でも夜になると湖のほとりに点々と灯がついて、とっても素敵なんだってよ。あたすも一回は行ってみてえなあ！」

「ほんとよねえ。あたしも行きたいわあ。死ぬまでには一度…」

ニコルとチェムカが口々に言い合い、じとっとした視線をラディスに向ける。

「…おいおい。もうそんな金は残ってないぞ。あの二人は特別だ」

そうなのだ。この診療所の主であるラディスを、影ながら常に支え続けていたクレイの婚約者がレーヌ国からやって来て、仲間が一人増えたのだ。チェムカは最初にソアと対した時、何だかクレイの分

身と話しているような錯覚を覚えて、初めて会った気がしなかった。受け答えに無駄がなく、聡明な雰囲気の彼女は背の高いすらりとした美人なのに、さっぱりとしていて男らしい。チェムカもニコルも、あっという間にソアを気に入ってしまった。

そして今、クレイとソアは婚前旅行に出掛けている。この場所に診療所を開いてから、一日も休まずに動き続けている主と行動を共にするクレイ自身も、今までにこのような長期の休暇をとった事はなかっただろう。

「先生も奮発したわねえ。メークラインなんて、いっちばんお金がかかる観光地じゃないの。あたしが若かった頃から、ずっと人気のある場所ですもの」

ニコルの言葉にラディスが笑って答える。

「休みがとれるのは今のうちだからな。これから先は嫌でも働いてもらわなきゃならん。あいつの為というよりは、ソアの為に用意したんだ」

「なるほどなあ。クレイって下手すると式も挙げないって言い出しかねねえもんなあ。…で、先生。あたす達も勿論そのうち連れてってくれんだべなあ。ねえ？」

チェムカが同意を求めるようにニコルを見やると、ニコルも大きく頷いてそれに続け、

「そうよ。あたし達だって、先生に随分尽くしてると思うんだけどねえ！」

と言って、二人はラディスに満面の笑顔を向けた。彼は二人と視線

を合わせないようにしながら聞こえないふりをしつつ、呟いた。

「それはそうと、リィンはどうした？まだ使いから戻ってないのか？」

「あら。そういや遅いわね。もう戻って来ても良いはずなんだけど…」

その時、居室の扉が開いて金色のふわふわとした髪がのぞいた。

「わお。良い匂い。ちょうど良かった」

ルキリア貴族らしく上等な服に身を包んだエンポリオが、にこにこ顔でやってきた。彼の笑顔を見ていると、チェムカはいつもキツネを連想してしまう。その彼の後ろにリィンもいた。

「ああおかえり。今ちょうど話をしてたところなのよ」

ニコルが台所に立って皿にスープを注ぎ、リィンがそれをテーブルへと運ぶ。

「ごめんごめん。僕がリィンを足止めしちゃってたんだ。それより、ねえ聞いてよ…」

エンポリオが席につきながら嬉しそうな表情を浮かべて、ラディスに話しかけた。どうやら彼もここで夕食をとる気のようだ。

「会社からここへ来る途中にね、チェムカの友達の、ええと何て言ったかな。あの二人組…」

「メリエナとミランけ？」

「ああ、そうそう。その二人と女の子達数人に囲まれちゃってさ」

「何だ。いつもの事だろう」

ラディスが興味なさげな相槌をうつ。そこへリィンが慌てた様子で言葉を挟んだ。

「エンポリオ！そんなくだらない事言わなくても良いだろっ」

「彼女達、何て言ったと思う？」

「よせったら！」

リィンの慌てっぷりにラディスもチェムカもぽかんとしたまま、エンポリオの言葉を待つ。

「僕とリィンって付き合ってるのかって聞かれちゃった！」

「ええっ！？」

チェムカは驚いて声を上げた。そんな…。あの二人にはリィンが女の子だって話してないはずだべ…。

「私達、エンポリオさんとリィンを応援しますってさ」

リィンはむすっとしたまま席につき、ラディスはこの話のどこが面白いのか？というような顔で、楽しそうに話すエンポリオを見ている。

「リィンが女の子だって分かってるって事かい？」

言いながらニコルも席につき、夕食が始まった。

「それがさ、違うんだよ。彼女達は僕らが男同士だと思ってる。だけどそれが返って楽しいみたいだ。僕とリィンだったら綺麗だから許せるんだって。ふふ。手を繋いで歩いているところを見られちゃってたようだよ」

チェムカは頭を抱えたい気分だった。メリエナもミランも良い子なのだが、可愛い男の子や綺麗な男性が大好物なのだ。この診療所は彼女達から目をつけられていて、チェムカが何度断っても遊びにやって来る。

「僕、俄然やる気出るなあ！彼女達の期待に答える為にも、やっぱり付き合った方が良いよね？」

エンポリオは優雅にグラスを傾け隣に座っているリィンに語りかけた。

「…何でそうなるんだよ」

むっつりとした表情のまま口いっぱいに料理を頬張るリィン。チェムカはちらりとラディスを盗み見るが、彼はこの話には全く興味がないようで、ニコルと明日の予定を話し合っていた。

何だかなあ…。

チェムカは一人、ひっそりとため息をついた。

リィンが好きなのはどう見たってラディス先生だべ。そんなの普段のリィンを見てたら誰だって分かっちまう。だけんども先生はリィンの事、どう思ってんのかなあ。わっかんないなあ…。

◇◇◇◆

「ねえラディス。聞きたい事があるの」

「何だ」

目の前の椅子に腰かけたユマがこちらを見つめている。ラディスは心音機を鞄にしまいながら、内心聞かれたくないと思いつつ返事をした。彼女はにっこりと笑っており、可愛らしい笑窪も普段どおりなのだが、何故だかその笑顔から非難めいたものを感じる。昼下がりの穏やかな日差しにブラウンの巻き髪が輝いて見える。ここのところだいぶ状態が良い。もう何の心配もなく通常の生活が送れるまでに心臓の具合も安定している。が、この事を本人に告げるとすぐ調子に乗って無理をするので、とりあえずは黙っておく事にする。

「どうしてリィンの気持ちを知っているのに、何も言ってあげないの？」

やはり…。聞かれたくなかった。

「どうしてちゃんと気持ちを伝えないの？ラディス。リィンが可哀そうよ」

何も言わずユマを見ると彼女もこちらを見つめていて、何かしらの答えを聞くまでは許さないわよ、という雰囲気が伝わってくる。ラ

ディスが苦笑いをして重い口を開いた。

「あいつの好きっていう感情は、家族愛に毛が生えたような程度だ」

「そうかしら…」

「もう少し時間をくれ」

彼の答えを聞いてユマが小首を傾げて困ったような笑顔を作った。

「もう…ラディスの悪い癖ね」

「ん？」

「思ってる事を半分も口にしない」

ユマが僅かに身を乗り出し、ラディスをぎゅっと睨みつけた。

「私には何でも全部話してって言ったでしょう？昔に約束したじゃない。兄さん」

遠い昔。まだ二人が幼い兄妹であった頃。

「一度にたくさんの事を考えて思案してる。思いや主張も一旦飲み込んでから綺麗に整理して、相手に分かりやすいように言葉にする。不要な事は言わない。昔からそうね。それって素晴らしい事だけれど、短所だわ」

「…お前にはかなわないな」

ラディスが穏やかな笑顔を向け、二人は微笑み合う。

「俺は自覚しているつもりだ。俺の言葉や行動は、相手に大きな影響を与える。良くも悪くもな。だからこそ、あいつは俺を拒めないだろう」

「何か不都合でもあるのかしら?想い合っている二人なのだから構わないでしょう?」

「リィンは…。あいつは、俺がどんな事をしたいと思っているのか分かっちゃいないさ。これっぽっちも疑わない。…何度寝込みを襲ってやろうと思った事か」

ユマが目を丸くして可憐な指先を口元に当て、そういう事ね、と小さく呟いた。

「あいつの気持ちが俺に追いつくまで、猶予を与えているところだ。無理強いして嫌われたら目も当てられない。あまり急かさないでくれ…。俺にだって我慢の限界がある」

「あら。随分と紳士なのね?お兄様」

「その通り。お前の兄は理性が服を着て歩いているような紳士なんだぜ、妹よ。
そういえばジェイクから聞いたぞ。シャルナンの花祭りにワドレットと行くらしいな」

「ええ。いけない?最近体調も良いし、ずっと二人で行くのを楽しみにしていたのよ」

ユマがラディスの言おうとしている事を予測して、一度にそこまで言った。

「二人きりというのがいただけない」

腕を組んでそんな事を言うラディスを、ユマは苦笑しながら眺める。

「お父様もラディスも少し過保護すぎるわ。私、もう二十三になるのよ？」

「まだ二十三だ」

ユマはゆったりとした微笑みを向けてため息をついた。

ラディス自身も分かってはいるのだが、ジェイクが彼女をとても大事に想っているのも知っている為、つい余計に心配してしまう。しかしそんな彼女はいつだって、ジェイクとラディスを大きな愛で包んでいる。女性とは偉大なものだ。

大きな出窓から外を見下ろすと広い庭を掃除しているジェイクとリィンが見える。二人とも腕捲りをしてズボンも膝まで捲りあげて、青々とした芝に水を捲いて楽しそうに笑っていた。穏やかな昼下がり。

「ふふ。可愛い。ああ…何だかラディスが腹黒く見えるわ…」

ユマの独り言は、聞こえないふりをした。

◇◇◆◆

書斎で仕事に没頭して、気付いたら真夜中だった。凝り固まった肩を揉みほぐし茶を淹れようと階下へと向かう。やはりクレイがいな

い為に仕事は山積みで、ここ数日の睡眠時間は二時間あれば良い方だった。事務処理や経理。膨大な資料や報告書や手紙に目を通し、必要に応じて様々な対応策を立ててゆく。その他にも諸々の雑務があり、通常は二人で分担して片付けている。それを診療を終えた後にこなすのは骨の折れる作業で、猛スピードで処理をしているが時間がいくらあっても足りない。必然的にこの数日間は寝室で寝ていないのだが、これも返って好都合だった。

何せ今、リィンの無防備な寝姿でも見ようもんなら間違いなく襲う自信がある。

暗い廊下を歩き居室の扉を開くと中は煌々と灯が入ったままで、リィンがテーブルに伏して眠っていた。ラディスはため息を一つこぼし、茶を淹れてから隣の椅子にそっと座った。すやすやと気持ち良さそうに寝入っているリィンの寝顔を眺める。ふっくらとして透き通った頬を手の甲でなでて、柔らかな栗色の髪を梳いた。

温かい。呼吸をしている。生きている…。

その温もりが指先から伝わってくる。柔らかな膨らみのある形の良い唇が薄く開かれ、息をしている。

「んん…」

リィンが目を覚まして、すぐ傍にいる彼に驚いて目を丸くした。

「…何だよ」

「何にも？」

ゆっくりと身体を起こし頬を僅かに染めて、リィンが不機嫌な声で続ける。

「人の寝顔見ながらお茶飲んで、優雅なもんだな」

「寝起きで突っかかってくるなんて、お前も元気だな。こんなところに寝てないでちゃんとベッドで寝ろ」

「ふん…」

隣に座るリィンは俯いたまま、ぼそりと呟きを落とした。

「ラディスは、僕がどこの誰と何しようが別に気にならない」

「…何の話だ」

その華奢な細い首に視線を落とす。簡単に折れてしまいそうだ。

「最近、知らない女の子が僕に話しかけてくるんだ」

リィンがぼそぼそと話し始めた。きっと話がしたくて、ここで待っていたのだろう。

「今や有名人だからな。知ってるか?町の奴らはお前の事を、イリアス族を真の解放に導いた英雄だと言ってる。…お前を男だと思っているからなあ」

「僕は、男だ」

そう断言するリィンに少し驚いた。

「…そうか？」

「そうだ」

リィンは俯いたままで一度もこちらを見ない。

「リィン」

ラディスが静かに名を呼ぶと、リィンは慌てたように一気にまくしたてた。

「僕は男だっ。それで良いんだ！今までそうやって生きて来たんだから！どうせ胸だってないし、今更女のように生きるなんて出来ないしっ…」

ああ、そうか…。

こいつは決して媚びるような真似はしない。自分の態度を見て何かしらの決断をしたのだろう。恋とか愛とか、捉えどころのないその淡い感情をきっぱりと切り捨てるつもりでいる。…何ともいじらしい。

「だからっ！前に言った事、あ、あれは忘れてくれ！あ…いや、覚えてないんだったら良いんだっ」

膝の上にある両手がぎゅっと握り締められている。耳まで真っ赤だ。

「ぼ、僕は男なんだから…。僕は男で、ラディスの護衛なんだからっ…す、好きとか嫌いとか、そんな感情…必要ないんだ」

独り言のようにぶつぶつと呟く。まるで自分に言い聞かせているようだ。

「…リィン。あいにくだが俺は男にキスをするような趣味は持ってないんだ」

びくりと細い肩が震えて、リィンがやっと顔を上げてラディスを見た。怯えたような困惑の表情。彼は椅子ごとリィンを包み込むように身体を寄せて、その赤茶の瞳を真っ直ぐに見つめた。

「リィン、好きだ」

リィンの大きな瞳が更に大きく見開かれる。

「う、嘘だっ！信じない！」

「…おい」

「だってあんたは人気者で、大人で、僕じゃなくっても相手はたくさんいる…」

ラディスはゆっくりと瞳を伏せて息を吐き出す。

一番愛しい女に、何故伝わらないのか。

こんなにも欲しい女が目の前にいて、俺がどれだけ自分を抑え込むのに必死になっているか…。

「そんなのは関係ない。俺はお前が好きだ」

リィンの背中に腕を回し顎に手をかけ上向かせる。

「ラディ…ッ」

強引にその唇を奪った。

今まで抑えていた感情を、愛おしさを隠さず熱を込めて口付ける。

「…ん、う…っ」

腕の中にある華奢な身体が強張り、両手で必死にラディスを押し返そうとしている。

逃がすものか。

強く抱き締めて逃げ惑う舌を絡め取り、激しい感情のままリィンを求める。

リィンの理性も感情も、全てを奪ってしまいたい。その艶やかな髪も紅い瞳も、白く滑らかな肌も細い手足も、全てだ。その全てが、欲しい。

「…ンっ…ッ」

息もさせぬ程何度も深く口付ける。リィンの全身から力が抜けてゆき、縋るように身体を預ける状態に変わった。ゆっくりと顔を離して見つめると、リィンは真っ赤な顔で苦しそうに息をついてこちらを見上げた。涙の溜まった瞳が深紅に揺らいでいる。彼はリィンの薄く開かれた口元を指先で拭い、静かに囁いた。

「…伝わったか？」

微笑みながらリィンの赤く染まった頬を撫で、ラディスは席を立っ

た。

◇◆◆◆

「っあー！らでぃすだ！」

「らでぃすだあー」

表で遊んでいた弟達がラディスに気がついて大声を上げた。長身の彼が大きな診療鞄を肩に担いでこちらへ歩いてくるのが見える。

「これっ！先生をつけろって言ってるだろが」

扉を開いて表に出たチェムカは小さな弟達をたしなめた。

「先生、いつもすんません。今日なんかせっかくの休診日だってのに…」

そう言うと、ラディスは抱きついてくる子をかかえ上げて笑った。

「ちょうど往診の帰りだから気にするな。…随分重くなったな」

「ラディス、僕の宿題見てよ」

「あたしも抱っこしてー！」

わらわらと子供達がラディスを取り囲み、チェムカの母が前掛けで手を拭いながらぺこりとお辞儀をして、子供達に声をかける。

「ほれほれ、みんな部屋に入って一列に並ぶだ！先生は忙しんだか

ら、手間かけさせちゃなんねえぞ」

ラディスは定期的にチェムカの家族の元を訪れ、子供達の健康診断を行っていた。これはチェムカの父が亡くなった後から今まで、ずっと変わらずに続けられている事だった。時間のある時は宿題を見てくれたり剣の稽古をつけたりしてくれる。そのせいなのかチェムカは周囲の友人達や皆が言う程、ラディスに憧れたりもしないのだった。どういうわけか彼に対して異性の男性だという意識が持てない。

今も小さな弟達を診察しているラディスを見ていると、全く別の感情が湧き上がってくるのだ。

何だか、父さんみてえだ…。

そんな年ではないし、ましてやこんなに綺麗な父親もいないだろうと分かっているのだが、ついそう思ってしまう。チェムカは苦笑する。

「パウラは最近どうだ？」

診察を終えたラディスは、チェムカの母が淹れた茶を立ったまま啜って言った。

「もうすっかり良くなってきてるだ。子供達の面倒もよーく見てくれるしな。今は近所の食堂にお手伝いに行ってんだわ、昼の忙しい時間帯だけ。そこでも働き者で重宝がられてんだ」

「そうか…。色々と助かった」

「それを言うのはこっちの方だべ」

それから様々な話題でひとしきり会話をし、子供達と挨拶を交わしてラディスは診療所へと帰ってゆく。

「先生っ」

その背中を追いかけてチェムカが押し殺した声で呼び止めた。青い瞳が彼女を見下ろす。

「どうした？」

「先生はリィンの事、どう思ってんだ？」

あまりの突然の問いに、がくっとラディスがつんのめった。

「…お前まで何だっていうんだ」

「だってよお、あたす心配なんだもの。リィンって真っ直ぐだろ？傷ついたりでもしたら可哀そうだ」

「全く…。あいつの周りにおせっかいな奴が集まってるのか、あいつが皆をそうさせるのか…」

思いつめた目で見上げているチェムカに、彼はにっこりと微笑んだ。

「リィンなら大丈夫だ。俺がついてる」

どうとでも捉えられるようなその言葉に、チェムカは首を傾げる。

「人の心配より自分の方はどうなんだ？」

「あたすは…今んとこ好きな人とかいねえもの」

「もし良い奴がいたら連れて来いよ。俺が見てやる」

彼の物言いにぷっと吹き出して笑ってしまった。ほんと、父さんみてえだ。彼はチェムカの銀髪の頭にぽんと手を置いて遠ざかってゆく。

「いつもあんがとね、先生」

◆◆◆◆

重苦しい空気が診療所を満たしている。幸か不幸か今日は休診日で終日二人きりだった為に、何とも言えない気まずい重みは夜になるにつれ、その容積を増しているようだ。ラディスは怒涛の如く仕事を片付け、普段よりも長めに風呂に浸かった。珍しく疲弊している。夜も更け、ぱらぱらと雨が窓を叩く音が聞こえて来た。寝室に向かうか逡巡しつつ濡れた髪を布で拭いながら、二階へと続く階段を昇ろうとした時だった。驚きのあまり心臓が飛び出しそうになる。

「…幽霊かと思うだろうが」

薄暗い階段にちょこんと座ったまま寝入っているリィン。どうも昨日からこいつは変な場所で眠りたがる。仕方なくリィンを抱き上げ、心の中で起きないでくれと祈りつつ寝室へ向かう。そのまま静かにベッドへ横たえ、息を止めてそろりと身体を離そうとした時、彼の髪から水滴がこぼれてリィンの頬の上に落ちた。ぎゅっとリィンの眉根が寄り、ゆっくりと瞳が開かれる。

「あ…ラディス」

「ベッドで寝ろと言ったろう」

ラディスは長身の身体を伸ばし、ごしごしと布で髪を拭った。リィンが目をこすりながら半身を起こす。

「まだ夜中だ、寝てて良いぞ」

そう言い置いてそそくさとベッドから離れようとした彼の服を、リィンが慌ててむんずと掴んだ。

「ラディス。待って」

「…何だ」

「あ、あの…」

薄暗い部屋に雨の音が響く。ラディスは頭から布をかぶったままベッドの脇に腰を下ろした。全神経を全く別の事に向けようと努力する。そうでもしないと気が狂いそうだ。

「僕…あんたの事が好きだ」

「ああ」

「…昨日言った事、ほんとなの？」

「ああ」

「あんたは、僕のもの？」

ラディスは苦笑を洩らした。

「ああ。そうだ」

リィンが小さな声で、嬉しい、と呟いた。雨の音に鼻を啜る音が混ざる。リィンが泣いている。ラディスは腕を伸ばし、リィンの頬に触れて涙を拭った。濡れて光を含んだ赤茶の瞳が真っ直ぐにこちらを見つめている。顔を近づけ、触れるだけのキスをした。リィンは目を閉じたまま離れてゆく彼を追いかけるように顔を寄せ、それに応えるようにもう一度リィンに口付けた。一度目よりも長く、深く…。

心地の良い痺れが思考を止める。熱い息を吐き出しラディスが囁いた。

「…リィン、駄目だ。止められなくなる」

リィンはおもむろに彼の顔を隠している布を取り、柔らかく微笑んだ。

「情けない顔してる」

「ああ。死にそうだ。…お前に触れたくて仕方ない」

「…僕なんかで良いの？胸だってないのに…」

ラディスは笑ってリィンを優しく抱き締めた。

「あんまり可愛い事を言うな。それがお前のだってだけで興奮する」

「ほ、ほんと？」

「こんな情けない嘘は言わない」

ラディスの腕の中で、リィンは嬉しい、と呟いた。

参った…。骨抜きにされそうだ。

「それに、あんたをまた『力』で吹っ飛ばしちゃうかも…」

「ふん。望むところだ」

くすりと笑い合う。

ティルガ。すまない。俺はあなたの娘をもらう。

全力で愛す。俺の全てをかけて。

【番外編・完】

０７７：≪番外編≫愛しの月（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
やっとこんなシーンに辿りつけた事で喜び勇んで書いた結果、長くなってしまいました。すみません。
これから最終部の執筆に取り組みます。きちんと書きたいと思っています。なので更新がまた遅れるかも知れません。。。
。一国のとある町で、ちっぽけな彼がたった一人で起こした革命の終着点。彼を愛するリィンはどのような選択をするのか。極限の状態の中において、本当に大事なものとは何か。本当の強さとは、必要な力とは何か。それを描きたいと思います。
では、いつも読んでくださる方々、本当にありがとうございます。
あと少しだけ、お付き合いくださいませ。

０７８：≪番外編≫焦がれる太陽

「…やり直し。計算が間違ってる」

彼は無造作に紙束を机の上に投げて寄こし、また別の資料を手に取る。

「それから決算の報告書は？研究成果をまとめた資料は？…これもやり直しだ。綴りが間違ってる」

エンポリオの机の上にどさどさと紙束の山が出来上がってゆく。恨めしそうに見上げると、彫像のような整った顔でこちらを見下ろしているラディスと目が合った。

「ちょっと待ってよ。僕今までそんな事一切しないで遊んで暮らしてたんだからさ、急に言われてもいっぺんに出来るわけないでしょ？」

「おかしな奴だな。出来る出来ないの話なんてしていないぞ。次に来るまでに終わらせておけよ、良いな？」

そう言い置いて彼は部屋を出て行った。

鬼だ、鬼がいる…。

エンポリオは途方に暮れてぼんやりと窓の外を眺めた。

現在、彼の診療所はクレイとソアが取り仕切っており、ラディスは彼自身が携わっている様々な場所に後継の人間を置いて、ベイルナ

グルの内外を問わず駆け回り、最後の総仕上げに取りかかっていた。エンポリオは製薬会社の経営者として、その仕事を彼から教わっている最中である。こんな事は予想もしていなかった。あの会社はラディスが立ち上げたもので、特効薬やその他の薬品の精製を行って商売をするかたわら、新薬等の開発を研究する施設の役割も担っている。ルキリア国とレーヌ国からの援助もあり国指定の機関でもある。エンポリオはその場所で自らのルキリア貴族としての資産を大いに利用し資金の援助をする見返りに、名ばかりの経営者の座について悠々自適の毎日を送っていた。あの会社の責任者はワドレットのはずである。なのにラディスは数日前からエンポリオにつきっきりで、猛特訓を開始したのだ。エンポリオ自身の意向も聞かず、何の断りもなく、有無を言わせずに、である。軟禁状態で彼の叱責を受ける日々が既に十日程が経過していた。

もうずっと、女の子とデートも出来てない…。

それぱかりが服を着替える気力もなく数日同じものを着ている為に、常に外見に気を使いこぎれいにしている彼にしては珍しく、ブラウスにはしわが寄りズボンの折り目もよれよれであった。

エンポリオはふらふらと席を立ち、高価な茶器を取り出して茶を淹れ始めた。

ラディスが態度を変えたのには確かに心当たりがある。それはエンポリオが今まで渋っていた、オールゲイトという由緒あるルキリア貴族の名を継ぐ事を決めたのに起因する。当主となる事を決めた翌日から、ラディスは自分に経営者に必要な万般の知識やノウハウを叩き込み始めたのだった。

「はあ…。こんなの、ありがた迷惑だよ…」

僕は君みたいに、がむしゃらに生きるなんてしたくない。これからだってゆるーく生きていたいんだ。

◇◇◇◆

昼過ぎに診察の業務を終えた診療所の応接室では、ソアがクレイから事務仕事を教わっていた。

「それにしてもすごい量の郵便物だな。まるで一国の執務官になった気分だ」

両手を腰に当てて机上にある手紙の山を睨むソア。クレイは苦笑しつつ、手紙を仕分けながら口を開いた。

「レーヌで役員をしていたのだから慣れているでしょう。ああ、それはロンバート先生へ」

「…この華やかな手紙の一群は？」

ソアがつまみ上げるようにして手にした便箋は繊細な押し花が施された淡い桃色をしていて、それと似たような手紙の束が机の端に出来上がっていた。

「はあ。それは…」

クレイが説明をしようとした矢先に、ソアが便箋の口を開いて中を確かめ始めた。

「…ソア。勝手に開封するのはいけませんよ」

「ほう。これらは恋文か…。ラディス殿は罪なお人だ」

ソアが緑の瞳を少しだけ大きくして手の中の紙片を眺めている。今日も普段と変わらずストレートの黒髪を一つに束ねており、前髪は眉のあたりできちんと切りそろえられていて清潔感溢れる外見。白のブラウスに黒のロングスカート、足元は剣の使い手でもある為に、強度の高い編み上げ靴を履いている。そのシンプルな服装はすらりとした長身の彼女に良く似合っていた。

クレイは凛としたソアの美しさに見惚れそうになり、咳払いをして視線を手元に落とす。

「それに、ここで働きたいという人が直接手紙を送ってくるのです」

「ふうん」

その声にクレイとソアが同時に背後を振り返ると、そこにリィンが佇んでいた。

「お昼だよ。ニコルが呼んでる。僕、これからロンバート先生の所へお使いに行くから…これかい？」

「ええ。お願いします」

机の上にある大きな封筒を手にリィンは笑顔を残して部屋を去っていった。木目模様の扉に顔を向けたまま、ソアがぼそりと呟く。

「最近、リィンの雰囲気が変わったと思わないか？」

「そうですか？私には以前と変わらないように思えますが…」

「確かに以前と変わらず少年のように見える。しかし、何というのかな、あれは…綺麗になった。前から美しい容姿をしていたが、一段と輝きが増したようだ」

うむ、と頷くソア。

「さあ、お昼を済ませたら仕分けの続きです。…これで一通りは教えた事になりますね。あなたはすぐに覚えてしまった。賢い人だ」

クレイが素直にそう告げると、ソアは少しだけ顔を傾けて嬉しそうに微笑んだ。

◇◇◆◆

高い空を見上げて石畳の道を歩く。最近はラディスの護衛としてではなく、配達や使いをこなす仕事が続いている。このベイルナグルの町でリィンはすっかり有名人になってしまい、外出する時にフードの付いたマントを羽織る事もなくなった。挨拶をしてくれる人や知り合いが増え、同時に面と向かってリィンを罵倒する人もぐんと減った。ただ全てが万事うまくいく事はなく、いまだにつっかかってくる人々もいる。それは当然の事でリィン自身はあまり気にもしていない事柄だった。

ロンバートの病院に辿りつき、顔見知りの受付の女性に封筒を渡してそこでまた使いを頼まれる。挨拶を交わして、次にエンポリオの会社へと向かう。そこには今ラディスもいるはずで少しだけ早足になってしまう。リィンはここ数日間、彼とまともに会話を交わしていない。それ程にラディスは多忙で捕まえるのもやっとなくらいだ。ただ毎日診療所には帰ってきているようなのだが、帰宅はいつも深夜か明け方の為にリィンが目覚めた時には既に彼の姿はない。

あれから…。

あの夜から、何度となく二人は肌を重ねていた。今まで同じ寝室の一つのベッド寝ていて、何もなかったのが嘘のような気がする程、ごく自然に愛し合う。リィン自身はいつまでたっても恥ずかしくて仕方がないのだが、それでも言葉では言い表す事の出来ない幸福感に満たされる。その時のラディスは普段の彼とは違う表情を見せる。熱を帯びた青い瞳に見つめられただけで、息が止まりそうになる。低くて心地の良い声で名を呼ばれるだけで、震えてしまう。リィンは何より素肌で抱き合う事が好きになった。より近くに彼を感じる事が出来て、その肌から伝わる温もりと鼓動がとても愛おしいのだ。多忙を極めるここ数日はそれがなくて少し寂しい。しかしそういった夜にもラディスはリィンを腕の中に抱いて眠るようになった。一度真夜中に寝苦しさを感じて目を覚ました時、彼はリィンを抱き締めたまますやすやと眠っていたのだ。その窮屈さに苦笑をしたが、もちろん嫌ではなかった。そんなラディスはいつもの彼らしくなく、何だか子供みたいに甘えているように思えて、それがまたリィンにとったら嬉しい事の一つなのだった。

ただ、一つだけ引っかかる事がある。
仕方のない事だと分かっているのだが、どうしても気になってしまう。気になったところでどうする事も出来ないと分かっているのに、何だかもやもやと心の隅っこに靄がかかる。

手慣れている。確実に…。

全く経験のなかったリィンにだって、そんな事くらいは分かる。ラディスは女性の扱いに慣れているのだ。そりゃそうだ。だって彼はモテる。話に聞いたらそれはもう十代の頃からモテ続けている。今だってあんなにラブレターをもらうくらい、皆が彼に夢中になる。

すらりとした長身の、引き締まったスタイルに美しく繊細な顔。見惚れてしまう程の容姿に気さくな性格。それに強い…。

リィンはそこまで考えて、はたと道の上で立ち止まる。

何だか良く言いすぎじゃないか!?褒めすぎだろ…。

やめろ、僕!恥ずかしい事ばっかり考えるな!

「ぬあぁー」

奇妙な声を上げつつ頭を振って駈け出した。道行く人が、走り去るリィンの背中を怯えながら見送っていた。

◇◆◆◆

「リィン!たすけてっ」

エンポリオが半泣きでリィンに抱きついた。金色のふわふわとした髪が頬に当たる。

「何、どうしたの」

エンポリオの会社の、研究員の宿舎となっている建物の居室。リィンがその扉を開いた途端に彼が飛びついてきた。部屋の奥ではテーブル席でワドレットと研究員数名が優雅にお茶の時間を楽しんでおり、リィンはエンポリオを引きずってそちらへ足を向け声をかける。

「ワドレット、これロンバート先生から。今月分の明細。…エンポリオはどうしちゃったの?」

ワドレットがリィンに礼を言い、笑って簡単な説明をした。

「ラディス先生の個人授業を受けているんです。…うらやましい」

「何言ってんのさ！僕は頼んでないのに、毎日毎日、毎日毎日っ！！外に遊びにも行かせてくれないでさ、気が狂いそうだよっ」

リィンをぎゅうぎゅう抱き締めたままエンポリオはワドレットに向かって吠えている。リィンはちらりとエンポリオを見やった。確かにこんなに疲れ切っている彼を見るのは初めてだ。目の下にはくまが出来ているし服もよれよれで、それに何と、うっすらだがひげが生えている。童顔の彼が三十代の年相応に見える。

「ねえリィン、僕を助けてくれるよね？ラディスに言ってよ、少し休ませてあげてってさ」

切なそうにリィンを見つめる紺色の瞳。見た相手が可哀そうだと手を差し伸べてやりたくなるような、そんな瞳。しかしそれはいつも彼が得意としている演技ではなく、本気で切羽詰まっている瞳だった。

その時、ぎいい、と不吉な音を立てて奥の扉が開き、大きな影がぬうと現れた。

「エンポリオ…。何度も言っただろう。わざと間違えてるのか？そんなに俺と二人きりでいたいのか？」

紙束を右手に握り締めたラディスが仁王立ちしている。彼の放つ背筋が凍りつくような殺気に、その場の全員が固まった。

「うわあ！出たっ」

エンポリオが小柄なリィンの背後に隠れ、リィンは仕方なく口を開いた。

「…ラディス。エンポリオが可哀そうだろ？みんなあんたみたいな怪物じゃないんだから、ちょっとは休ませてあげなよ」

「人を怪物扱いするな」

ラディスは大股でずかずかと近づき、リィンの背に隠れているエンポリオの首根っこをがしりと捕まえてにっこりと微笑んだ。

「人間、たいがいの事は死ぬ気になれば出来るもんだぜ。なあ、エンポリオ。…まだ死にたくないだろう」

一拍の沈黙の後、エンポリオは悲鳴を残してラディスに連行されていった。

「あ…はは。面白いなあ、先生の冗談は。リィンさんもお茶いかがですか？」

凍りついた場の空気を変えようとワドレットがリィンに席を勧めた。

「災難だね、エンポリオの奴」

「ええ。ですがあれを乗り越える事が出来れば、ちょっとやそっとでは挫けなくなります」

「…それってどんだけ大変なんだよ」

誇らしげに言うワドレットの眼鏡顔を見て笑ってしまった。ラディスはずっと働きずめなのに元気そうだった。ほんと、怪物みたいだ。彼が近づいて来た時、あの優しい香りを嗅いだ。ミントハーブの匂い。ラディスの匂いだ。

リィンはティーカップを傾け、二人が消えて行った扉を見つめる。

…もっと近くで、その匂いを吸い込みたい。あの腕に抱き締められたい。長い指で、髪を梳いて欲しい。触れたい。彼の右胸にある古い刻印に…。

ラディスに、触れたい。

「リィンさん？」

はっとして一気に赤面する。自分の感情に動揺して、瞬間に自制をかけようとした。まずい、と感じた時には既に遅く、リィンの手にあったティーカップが音を立てて粉々に砕け散った。『力』が暴走してしまった。茶は入っていなかったので濡らさずに済んだが、研究員達が呆然とリィンに注目している。ワドレットが慌てて席を立った。

「大丈夫ですか！？」

「っご、ごめん！！」

リィンが深紅に揺らぐ瞳のまま砕けたカップの欠片を片付けようと立ち上がると、ワドレットが更に慌てて言った。

「そんなのはいいですからっ。手、リィンさん、手が…」

そこでやっと自分に目を向け、驚く。右手が血で真っ赤に染まっていた。

「ラディス先生を呼んできますから、そのままでいて下さいねっ」

リィンは申し訳ない気持ちでいっぱいになり、しょんぼりとうなだれた。情けない…。

◆◆◆◆

「ティーカップを握り潰すなんて、どんな馬鹿力だ」

「う、うるさいなっ」

空いている部屋を借りてリィンは手当を受けていた。ラディスがリィンの手の平を見つめ、欠片が刺さっていないか確認して消毒しガーゼを当てて、慣れた手つきで包帯を巻いてゆく。

「痛い…」

「我慢しろ。出血の割には大した事はなさそうだ」

リィンは目の前のラディスをぼうっと見つめていた。薄茶色のぼさついた髪。品の良い鼻筋にすっきりとした顎のライン、薄い唇。長いまつげ…。

「おい、聞いてるか」

唐突に青い瞳と目が合う。

「えっ！？な、何」

「…帰る時に、この資料をクレイに持って行ってくれ」

ラディスがため息をついて後ろの机にある封筒を指差した。リィンはまた情けなくなって、分かった、と口の中で小さく返事をする。顔が熱い。

どうかしてる。ラディスに見惚れたりなんかして…。それにさっきのは完全に、あれだ。彼のミントハーブの香りを嗅いで、興奮したのだ。

変態か、僕は。

リィンは視線を手元に落として力無く言った。

「あんたは良いよな、いつも冷静でさ」

「何の話だ」

「独り言だから気にしないでくれ。僕、もう帰るよ。ワドレットに謝らなきゃ…」

「俺の芝居は完璧だからな。そう見えるだけだ」

彼の言葉の意味が掴めず呆けたまま顔を上げた。ふわりと腕の中に抱き寄せられ、その温もりと香りにリィンの心臓がどくんと飛び跳ねる。

「ラディス？」

数秒見つめ合い、引き寄せられるように二人は唇を重ねた。優しくて深い口付け。リィンの頭の中は真っ白になり、彼のキスに翻弄され僅かに応える事しかできない。身体の奥が熱くざわついて、ぎゅうとラディスの服を掴んで身じろいだ。

「…っぁ」

熱い吐息が漏れる。そのまま抱きつく抱き締められ、リィンは目を閉じて彼の背に腕を回した。胸に温かな感情が広がってゆく。

良い匂い。あったかい。気持ち良い。嬉しい。…好きだ。

ラディスは、僕のものだ。
彼の過去に嫉妬していた事さえ吹っ飛んでしまう。それ程にラディスは全身で僕に伝えてくれる。
リィンはふわふわとする心地良さに漂いながら、ぼんやりと思った。

ああ、服が邪魔だ。

「ラディス…。あんたのせいで僕は変態になった」

リィンがそう告げると、彼は低く笑った。身体を伝って振動が届く。ぎしりと椅子が鳴った。

「ちょ…っと、どこ触ってんだよ」

ラディスの手がいつの間にかリィンのブラウスの中に入り込んでいる。非難するように青い瞳を睨みつけると、彼は困ったような表情で見つめ返してきた。

「キスだけで止めようと思ったが、うまくいかない」

軽々と抱き上げられベッドの上へ。慌てて起き上がろうとすると手首を掴まれ動きを封じられる。リィンの頬がみるみる真っ赤に染まってゆく。

「ちょっと待ってよっ。ワドレット達が…」

「あいつらの休憩時間は終わってる。もう会社へ戻った」

そう言ってラディスはまたリィンに口付けた。

「んっ…」

情熱的で丁寧なキスが、リィンの理性をぐらつかせる。我慢しないと声が漏れてしまいそうになる。

「っ…ちょっ、エ、エンポリオが仕事してるだろっ。こんなの駄目だよ…」

リィンがくらくらしながら必死になって抵抗すると、彼は鼻先が触れ合う程の至近距離でこちらを睨みつけてきた。どきりとする。青い瞳の奥にある金色が潤んでいるように見える。

「俺だって四六時中仕事してるぞ。たまには褒美の一つも欲しくなる」

少し拗ねたようなその言い方に、リィンの胸はまた高鳴ってしまう。

馬鹿だな、僕…。

「リィン」

熱のこもった彼の表情は、それだけで色気が漂う。そんな風に見つめないで欲しい。リィンが最後の抵抗で、ぎゅっと目をつぶって顔を横にそらせる。ラディスはそんなリィンの耳朶に唇を寄せて、吐息まじりに囁いた。

「…欲しい」

ああ…。もう駄目だ。

リィンが彼に、勝てるわけがないのだ。

◆◆◆◇

「…完璧だ。やれば出来るじゃないか」

「だろ？じゃあもう良いよね？」

「まだ報告書が出来上がってないぞ。頑張れ」

椅子に腰かけたラディスが、口角を持ち上げて微笑む。エンポリオは背筋が空寒くなる思いがした。

こんなに恐ろしい微笑みは見た事がない。

がっくりとうなだれてしぶしぶ自分の机へと帰ってゆき、どさりと椅子に腰を下ろして頬杖をついた。

「ラディス、君ってば嫌味な奴だ」

彼は向かいの机に座って分厚い書物を読みふけっている。時刻はもう深夜だというのに一切疲れを見せない。多分、人間ではないのだ、きっと。

「何だ」

「リィンから君の香りがした」

「それがどうした」

「わざとでしょ」

「虫よけだ」

「はああ！もう僕はショックで立ち直れない！君ってば色んなものを持ってるのにずるいよ！僕の欲しいものまで奪って楽しいかい！？年下のくせに生意気だよっ」

ラディスは書物に視線を落したまま笑った。

「俺には何もしないで得たものなんて一つもないぞ。欲しいと思ったものは全力で取りにいくまでだ。お前はいつも中途半端で、必死さに欠ける。本当に欲しいものは何だ？」

エンポリオは遠くを見つめてため息をこぼす。

「それが分かれば苦労しないよ。…何かを変えたくて、僕は名を継ぐ事を決めたんだ」

ラディスがゆっくりとエンポリオに顔を向ける。ランプの灯が入った部屋に静寂が満ちていて、その空間に意思のある声が響いた。

「俺はずっと待ってたんだぜ。お前がその気になるのを」

「…え？」

「エンポリオ、お前は賢いくせに阿呆のふりをしたがる。俺も嫌いじゃないが、それじゃあつまらんだろう」

エンポリオは真顔でラディスを見つめている。

「お前をあの会社の責任者にしたのは、ルキリア貴族の金を目当てにしたからってわけじゃない」

「え…どういう事…」

「資金なら国からの援助もあるしジェイクだって手を貸してくれる。…ワドレットもクレイも人が良すぎるんだ。お前のように少しひねくれた切れ者がいないと困る。このベイルナグルの要は、エンポリオ…お前だ」

ラディスの≪黄金の青い目≫が、エンポリオを射抜いた。知らず背筋に汗が伝ってゆく。

「…褒め殺しかい？やめてよ…。僕が世間で何と言われてるか知ってるでしょ。オールゲイトの面汚し、放蕩息子の厄介者…」

そうだ。誰も自分に期待なんて持っていなかった。期待されない分、責任もなかった。自分もそれで良いと思っていたし、それが自分の

性に合っていると思っていた。面倒で煩わしい事はしたくない。

「変態なのは確かに認めるがな、俺がそんな噂を真に受けると思うか？」

「じゃあ君は…」

最初から、僕にそんな過大な評価をしていたっていうのか？皆が口をそろえて、呆れた金持ちのボンボンだと噂している僕に？そんな僕を信じたというのか？

そんな馬鹿な…。自分自身でさえ、こんな自分に期待なんてしていなかったというのに…。

ラディスはにやりと意地悪く笑った。

「お前には随分時間を投資した。これからはしっかり働いてもらうぞ」

エンポリオは絶句して彼を凝視し、それから笑い出した。何故だかとても可笑しくて、腹を抱えて笑い続けた。息をするのもやっとのくらいに後から後から、心の底から笑いが込み上げてくる。

「はあ、あはは。き、君ってほんと、意外とうっとうしいくらい、熱い…」

「教えといてやろう。エンポリオ、人の心を動かすのは策じゃない」

笑いすぎて目尻に溜まった涙を拭い、ラディスを見やった。

「心だ。生きた熱だ」

「ぷっ…。くさいよ…」

「それが事実だから仕方ない」

そう言って彼は静かに笑い、書物に視線を戻した。笑い続けて疲れた身体を椅子に深く凭れさせて、エンポリオが口を開く。

「ねえラディス。どうして君はそんなに必死になって、手を抜かずに生きるんだい？」

彼は長い指先でつまみあげるように書物の頁をめくりながら、さらりと言った。

「その方が面白いからだ」

「…本当かい？」

「ああ。嘘じゃない。騙されたと思ってやってみろ」

エンポリオは口元に笑みを浮かべて天井を見上げた。

「なるほどね…」

ゆっくりと息を吐き出す。何て清々しい深夜。

「悠長におしゃべりなんてしてる暇はないぞ。いい加減俺も早く帰りたいんだ」

「分かったよ。ふふん。僕の本当の実力を知って恐れ入るが良いよ」

「頼もしい限りだ」

エンポリオはよし、と呟いて机に向かう。ずっと休まずに仕事をし続けているので疲労困憊のはずなのだが、何故だか身体の底からむくむくと力が漲る。頭が冴え渡っている。そういえば、ここまで追い詰められた事は今まで一度もなかったかも知れない…。

僕はいつも少しだけ、手を抜いて生きていた。君には全てお見通しだったってわけかい。

くすりと苦笑をこぼす。

きっと徹夜明けの朝日は美しいに違いない。まるで生まれて初めて見る太陽みたいに…。

【番外編・完】

０７８：≪番外編≫焦がれる太陽（後書き）

意外にも番外編二話目。うぶなリィンが虜にされちゃったお話。
またもや長くなってしまってすみません。

これで最終部に向けての準備は完了です。

二人は最後の試練に立ち向かいます。

いつも読んで下さる皆様に、心よりの御礼を。

079：発端（診療所）

「姉ちゃん…ごめんよ、俺…。俺、こんな事になるなんてっ…」

「大丈夫だ。後は姉ちゃんに任せとけ」

「で、でも…」

「あちらさんもこれで許してくれるってんだから、大丈夫だ。な？」

薄暗い家畜小屋の中でひっそりと言葉が交わされた。丸々と太った豚は二人の緊迫した空気をよそに、鼻を鳴らしている。少女は目の前で泣いている弟の頭をがしがしとなでた。

「何も心配すんな。この事は誰にも言っちゃなんねえぞ。レッジ、おめえはもうこの事は忘れろ。良いな？」

少年はぼろぼろと泣きながら、何度も何度も頷いた。

事件の起こる、数時間前。

◇◇◇◆

診療所の裏庭から、剣がぶつかりあう時の高い金属音が響く。何度か打ち合い、勝負がついた。

「参った！」

リィンは引き締まった表情で相手を見下ろしていた。喉元に差し向

けていた剣をゆっくりと収め、深く息をつく。

「いやあ、ほんと強えなあんた。その細っこい身体のどこに、そんな力があるってんだ」

相手は笑いながら立ち上がって、汗の噴き出している坊主頭を腕で拭った。ずんぐりとした熊のような大柄な男で、顎には無精ひげが伸びている。白のブラウスの上に獣の皮でしつらえた胸当て。茶のズボンの足元は毛皮の編み上げ靴。彼はつい最近、この診療所の主が新しく雇った護衛のバーツという名の男性だ。ザイナス出身の二十九歳。

「僕も驚いた。そんなおっきな身体なのに機敏で、すごく速い」

リィンも笑って汗を拭った。

町はずれにある診療所とその周辺では、刻々と様々な事が変化し続けていた。

診療所は正式にクレイとソアに譲渡が決まり、ニコルやチェムカとの連携も万事うまくいっている。エンポリオの会社ではワドレットと彼が中心に立って、経営も順調に軌道に乗り始めていた。往診で診ていた患者達はロンバートの病院に勤める若い医師達が分担して担当が決まり、ベルシェも父の仕事をサポートしているという。しかし今でもラディスに直接診てもらいたいと訴える患者は数多い。ベイルナグルが世界に誇る歌姫ネルティエもそのうちの一人だ。こういったこまごまとした問題は後を絶たないが、それでも引き継ぎの作業はスムーズに進んでいる。

この全てを今までたった一人でこなし、雛型を作り上げてきたラディスはというと、帝都の有識者達との会議に出席したり皆の相談役として働き、第一線を退いていた。

そしてつい最近、ルキリア国内においても大きな動きがあった。

ルキリア国の統治者であり、ルキリア皇族の頂点に君臨するカイエリオス国王とその妃、そしてアルスレイン王子にエリナ王女、絢爛たる皇族一行がザイナス国へ向けて出立したのだ。これは五年後に控えている第一王女エリナの婚姻の儀に関連するもので、今回当事者達が初めて面会をする。そのパーティがザイナスで開かれるのだ。通常は王女側が出向く事はないのだが、エリナ王女たっての希望で今回のような形になったという。少しでも早い段階で相手の現状を知っておきたいのだろう。そして気に入らなければ即刻縁談を断るつもりでいる。勝気な彼女らしい作戦だ。

ルキリア帝国軍や帝国政府の多くも同行しており、アルスレインの腹心の部下であるウォルハンド大佐や政府要人のケイロスもその同行者の一人だ。必然的に帝都ベイルナグルの宮殿には、これに同行しない皇族達や軍人が残り、留守を守っている状態である。

そしてこの動きに合わせて、ラディスは様々な場所に護衛を増やした。診療所はもちろんの事、ロンバートの病院やエンポリオの会社、そして従業員の自宅に至るまで、人員を割いて護衛を立たせている。彼がこれ程までに警戒するのも無理はない。ラディスと敵対するルーベン司教や皇族トワ妃に加担する者達がこぞってこの帝都に残り、アルスレインを筆頭にしたラディス派ともいうべき者達がごっそりと抜け落ちた状態にあるのだ。相手が何かを仕掛けてくるとしたら、この機会を逃しはしないだろう。

護衛が増えた事によって皆も一様に緊張していたのだが、それも数日経てばいつも通りの慌ただしい日常に戻っていった。いちいち気にしていられる程暇ではなく、当のラディスが常と変わらずに飄々としている為に皆が安心を取り戻したからだった。

しかしリィンとクレイだけは彼の変化に気付いていた。一時も気を緩めずに周囲の全てに視線を巡らし、気を張っている。ぴりぴりと

した緊張感が全身を纏い、その眼光をより鋭くさせているのだ。

＊

「…変な顔」

薄くランプの灯が照らしているラディスの引き締まった横顔を見つめて、リィンが呟いた。
彼は前を見据えたまま眉を上げる。

「これだけの美形を捕まえて、良く言う」

それから隣にいるリィンを片腕でぎゅっと抱き寄せる。

「だってずっと難しい顔してるよ」

リィンは彼の広い胸板に頬を寄せて、ゆっくりと目を伏せた。

「ラディス…あんたって人に憎まれてばっかりだ」

ルーベン司教はラディスを恨んでいる。それはラディスがこのベイルナグルで医療改革を推し進めたからだ。それによってどんな身分の人々も平等に治療が受けられるシステムが構築され、それに賛同する人々が手に手を取り合って団結し始めた。その流れを受けて徐々に医師という職業の固定概念が崩れはじめている。神聖で偉大、絶大な権限を有し、選ばれた者にしか許されない領域。崇高なる女神のしもべとも崇められる存在だった。今現在、その威光が失われつつある。保守派の人々はそれを秩序の乱れといって恐れた。ラディスを指して、世界を混乱させる諸悪の根源だといった。

皇族トワ妃の一派は、ラディスを皇族の気高い血筋を汚す存在だといった。ルキリア皇族の絶対的支配が続くルキリア国において、彼は正統な血族の証である≪黄金の青い目≫を持ちながらそれに異を唱え、種族間差別の軽減にも尽力している。まるで全能の神の如くに、民衆の頭上に君臨し続けるルキリア皇族。その輝かしい仮面が、今まさに剥がれ落ちようとしている。

ラディスはその人々を、人智のかけ離れた特別な存在から、人間へと戻そうとしている。

「ふん。憎まれるのは覚悟の上だ。…お前は味方でいてくれるだろう？」

彼はからかうようにリィンの顔をのぞきこんだ。リィンは透き通った頬を赤く染めながらふてくされる。僕が何て言うか分かってるくせに、わざと聞いてる…。

「知らないよ」

「俺を護ってくれるんだろう？」

「さあね！」

「こら」

ベッドの中で二人はくすくすと笑った。この二人きりの時間がとても素敵で大切だと、お互いにそう思っている。両腕で力いっぱい抱きしめたくなる程の、愛おしいひととき。

幸せだ、と思う。

リィン自身、≪幸せ≫という確固たる定義を持っているわけではない。今までに自分が置かれている状況に対して、それが幸せだとか不幸せだとか、そういった考え方をした事がないのだ。この十八年間、生きるだけで精いっぱいだった。
ゼストと旅をしながら生活していた日々の事を思い返してみても、辛かったという事はない。確かに大変な毎日であったかもしれないが、それが不幸せだったとはどうしても思えない。白い悪魔と言われ、石を投げつけられたり罵られたり、さんざんな目には遭って来た。しかし一日の終わりに、屋根のある壁に囲われた部屋で、ベッドの上で寝られるだけで≪幸せ≫だった。次の日に、ゼストと食事をとれるだけで≪幸せ≫だった。
今はそれが、ニコルの作った美味しい料理をみんなで食べられるのが≪幸せ≫だし、使いに出た先で、ありがとう、リィン。と言ってもらえるのが≪幸せ≫なのだ。
そしてラディスの腕の中で心地良い温もりを感じながら眠りにつけるのを、≪幸せ≫と言わず何というのだろうか…。

恥ずかしくて絶対口に出しては言えないけれど、リィンは思うのだった。

僕、女で良かった…。

＊

裏庭にある井戸の水で顔を洗い、リィンとバーツは診療所へ戻った。
今日は休診日の為、普段診察を受けにくる人々で賑わっている廊下もしんと静まり返っていた。ラディスとクレイ、ソアは提携する他の診療所の医師達と応接室で会議をしている最中だ。

「僕お昼の準備するよ」

「俺も手伝うぜ。今日は肉にしないか？」

「バーツに任せると肉ばっかりになるからなあ」

「リィンはもう少し肉を食った方が良い」

「あんたは少しダイエットした方が良い」

言い合いながら居室へ帰り、リィンは茶の用意をして応接室へ向かった。控えめにノックをし扉を開いて中へ入る。聡明そうな紳士三人にラディス達、六人分の茶を用意して議論の邪魔にならないよう静かにテーブルへ置いてゆく。紳士達は熱心に何事かを質問し、それにクレイとソアが対応している。

「…なるほど。それならばまるで絵空事でもない訳だ」

「しかしレーヌ国ではそのような解剖学も行われているとは…。信じられん」

「オルーガ殿、これは今後の医療発展の為には必要不可欠のものになるでしょう」

「今まさに投資すべき事柄です」

リィンはちらりとラディスを見やった。彼は腕を組んで、じっとテーブルを凝視したまま微動だにしない。しかし全神経がびりびりと張り詰めており、おそらくこの場にいる全員の顔を見ずとも、その気配だけでどんな表情をしているかが分かっているだろう。繊細な

美しい顔立ちは相変わらずだが、目元が厳しすぎる。先程から一言も声を発さないラディスの存在に、紳士達はちらちらと視線を送り意見を聞きたそうにしているのだが、声をかけられないでいるようだ。

ラディス…。

ふと彼が顔を上げてリィンに目を向けた。突然視線が合い、どきりとする。彼はリィンを安心させるように柔らかに微笑んでから議論の輪に加わって話し始めた。紳士達は熱心に耳を傾け自分達の意見を熱く語った。ラディスを見つめる瞳には光が宿り頬まで僅かに赤らんでいて、彼らは既にラディスに魅了されているようだった。ラディスは人の心を掴むのが上手い。それこそ詐欺師にでもなったら負け知らずなんじゃないか。リィンはこっそりと苦笑をこぼし、部屋を後にしようと扉に手をかけた。

その時、びしりと全身に緊張が走った。扉の取っ手を掴もうとしていた手が強張る。咄嗟に背後を振り返ると、全員が固まったままラディスを見つめていた。彼は席を立って窓の外に顔を向けている。その全身から、研ぎ澄まされた殺気が放たれていた。

只ならぬ彼の様子にクレイが中腰になり声をかけようとした時だった。

「た、大変だ！先生！！」

階下からバーツの叫び声。リィンは素早く扉を開いて階段へ走り出た。玄関口にバーツの大きな身体がしゃがみ込んでいて、その腕の中に男が寄りかかっているのが見えた。腕から血を流し、苦しそうに呼吸をしている。あれは…護衛の一人。

「ラディス先生！やられたっ。ロンバート先生の自宅だっ！イグル

に襲われてるっ！！」

リィンの全身がぞわりと総毛立ち、心臓が強く鼓動し始める。リィンを追い越しラディスがいち早くバーツと怪我を負った男の元へ駆けつけ、鋭く視線を巡らした後、即座に指示を飛ばした。既に身体は診察室へと向かっている。

「クレイ、手当をして特効薬を彼に。ソア、来客に事情を説明して馬車を呼べ。バーツ、ここを頼む。連絡するまで皆ここを動くな」

「はいっ」

全員が素早く反応する。リィンは居室に戻り、剣を鷲掴みにして急いで玄関へ取って返す。大きな診療鞄と剣を持って外へ出てゆくラディスの後ろ姿を追いかけて、声を張り上げた。

「ラディス！」

「リィン、来い」

彼は止まらずに大股で歩きながら指笛を鳴らした。診療所のすぐ近くの馬小屋から一頭の立派な馬が躍り出て、こちらへ駆けてくる。小屋の前の椅子に座っている白ひげの老人が僅かに腰を浮かせた。

「馬を借りるぞ！」

老人は片手を上げてそれに応じる。ラディスは素早く馬の背に荷を括りひらりと飛び乗って、追いついたリィンを引き上げすぐさま全力で馬を駆った。リィンは態勢を低くして振り落とされないようにして、大地を駆ける馬の力強い足音を聞いた。どくどくと脈打つ心

臓の音が、それに重なる。

ロンバート先生が襲われた…。ベイルナグルの南西のはずれ、大きくて庭もついている立派な家だった。今日先生は家にいたはずで、そこにはベルシェもお母さんもいる。それに下宿している若い研修医が、数名。

狙われたのはラディスではなくロンバートだった。
彼の人の良さそうな笑い顔が脳裏に浮かぶ。いつも少し頬が赤らんでいて、大きめの腹を揺すって歩く、その柔和な姿。

リィンは固く目を閉じて大きく空気を吸い込み、息をとめた。重くのしかかってくる不安に負けたくない。負けちゃだめだ。

無事でいて…。

息を細く吐き出して目を開ける。馬の手綱を操るラディスの逞しい腕。リィンの心がしんと静まってゆく。

あんたを護る。
あんたが護りたいと思うものも全て、全力で僕が護る。

リィンの瞳に、強い決意のこもった深紅の炎が宿る。

０８０：発端（ロンバート邸）

「下がって！下がりなさい！」

辺りは騒然となり悲鳴が反響している。馬車では傍まで近づく事が出来ず、フェーマスは執事を置いて現場へ駆け付けた。周囲は異様な臭いが充満している。獣の血肉の臭いに胸が悪くなるような腐敗臭。軍の保安部隊が垣根を作ってロンバートの家を包囲していた。人でごった返す中を強引に分け入って最前列に飛び出すと、すかさず軍人に押し返された。

「これ以上はいけません！下がってくださいっ」

目の前の凄惨な光景にフェーマスの膝が震え始める。

「これは…」

手入れの行き届いていた庭から、ごうごうと炎が上がっていた。被害の拡大を防ぐ為に、保安部隊が庭を囲うように放った火だ。ロンバートが好んで植えていた背の低い木々が煙を上げている。その炎に照らされた青色の屋根の家。二階建ての家の窓が無残にも割れているのが見え、野犬型のイグルがわらわらと庭を徘徊していた。フェーマスは心の底から戦慄し、近くにいた軍人の胸倉を掴み上げて怒鳴った。

「何をしている！早く退治をしないかっ。ロンバートは、家の人間は無事なのか！」

「は、離しなさい！動揺せずに軍に任せなさい！」

軍人が慌ててフェーマスを引きはがす。

「無礼な！私はルキリア貴族のフェーマス・モルスディックだ！ロンバートは無事なのかと聞いているんだ！答えたまえ！」

「モ、モルスディック様…。どうか冷静にっ。今指揮官の到着を待っているところです。すぐに事態の収拾に当たりますゆえ…」

相手の言葉を聞いて愕然とし、怒りに目眩を起こしそうになった。

「この緊急時に何を…！」

「せ…先生はまだ中に、います。ご家族も…。僕らを避難させる為に逃げ遅れたんです」

きれぎれの声にフェーマスは足元に目を向けた。手当を受けている青年が三名。視線を宙に漂わせ恐怖に身体を震わせてうずくまっていた。

「何だとっ」

「急にイグルが家の中に走り込んで来たんですっ。それもあんなにたくさん…。護衛の人が倒されて、それからハンスがやられてっ…。は、早く助けて下さい！先生やベルシェさんがっ…僕らを逃がす為に取り残されたんですっ！」

フェーマスの広い額に青筋が浮かび、握り締めた拳がぶるぶると小刻みに震えている。

「モルスディック様、どうかお下がりください。上官からの命がない限り私達は動けません」

「何の為の保安部隊だ！それでも誇り高きルキリア帝国軍の軍人か！」

背後で人垣がざわりとひときわ騒がしくなった。

「うわあ」

「何だっ！こりゃあ」

その声に振り返ると、人で埋めつくされていた通りの石畳が見えた。人々が目に見えない壁に阻まれているかのように両側に押しのけられ、一頭の馬がこちらに向かって駆けて来る。馬上から青年がフェーマスを捉え、叫んだ。

「中に人は！」

「ロンバートの家族がまだ中にいる！ラディス君、頼む！」

「待て！そこの者、これ以上は近づくな！」

軍人の制止を無視して躊躇なく馬が跳んだ。フェーマスはそこに、あのイリアス族の少年も乗っているのを目撃する。

「待ちなさいっ！無茶だ！」

広い庭を馬が真っ直ぐに駆けてゆく。その背にイグルが一斉に飛びかかっていった。見守っている人々から悲鳴が上がる。しかし次の

瞬間、イグルの頭が一気に吹き飛んだ。紫色の血しぶきを上げてぼとぼとと異形の化物が地面に叩きつけられた。無残な死骸を乗り越えるようにして飛びかかる別のイグルを、今度はラディスの剣が容赦なくなぎ倒してゆく。すぐに馬の姿は家の門扉の中へ消えた。

あれはあの少年の『力』か。…あれは人の為せる業か？

フェーマスはまた別の恐怖におののいた。

「ロンバート…無事でいてくれ」

◇◇◇◆

真正面から飛びかかってきたイグルに『力』を放つ。ぐむ、という奇妙な音を残し、その躯が真っ二つに割れた。室内を馬に跨ったまま奥へと突き進む。家の中は壮絶だった。リィンは室内を満たす強烈な異臭とおぞましい光景に額から汗を流していた。二階へ続く階段に倒れ込むようにして転がっている人間の身体。すでに絶命していると分かる。何故ならその死体には、腹の部分がなかった。あれはここに護衛として雇われていた者だ。ラディスが弔いの祈りを口の中で暗唱している。

他人事ではない。僅かでも隙を作れば、自分もその死体と同じように腹をなくして横たわる事になるのだ。

二階の廊下に出たところで、奥にある扉にイグルが群がっているのが目に飛び込んできた。木目の扉をその腐った前足でがりがりと引っ掻いている。リィンは鋭く息を吸い込み、集中力を瞬時に極限まで引き上げた。ぎりりと奥歯を噛み締め、強く、念じる。

≪爆ぜろ！！≫

激しい炸裂音とともに、イグルの腐った躯が細かい肉片となって辺りに飛び散った。一瞬で全てのイグルがその原型を留めない程に砕けて消し飛ぶ。ラディスは馬から降りて鞄を手にとり、肩で喘ぐように息をしているリィンを片腕で担ぎ上げ、扉に向かって大股で歩き出した。

「あまり無茶はするな」

「だ、大丈夫だ…」

ラディスの額にも汗が滲んでいた。このひどい悪臭に、彼の敏感な嗅覚はとっくに許容範囲を超えているはずだ。

「ロンバート！いるか！」

ラディスが大声を上げると、扉の中から声が聞こえた。

「…ラディス先生！？」

ベルシェの声だ。がちゃりと薄く開いた扉をラディスが掴んで開く。背後で馬がいななき、蹄を鳴らして遠ざかってゆく音がした。不穏な気配が迫っている。

「イグルだ…まだいる」

リィンが小さく呟く。素早く室内に入り施錠をかけると同時に、どん、と何かが扉に体当たりをした衝撃。不気味な唸り声が扉の外から響いてくる。

「ベルシェ、怪我はないか」

ラディスがリィンを下ろしながら目の前に立つベルシェに顔を向け、室内に視線を巡らす。

「わ、私も、母も大丈夫よ…」

ここは寝室のようで、部屋の中央壁際に大きなベッドが一組。傍には夫人が真っ青な顔で佇んでいる。結い上げた髪が乱れ、服はところどころ赤黒い血で汚れているが、その瞳はしっかりとラディスに向けられていた。鎧戸の降りた窓の傍に長椅子が置かれ、そこに横になっていた青年が身体を起こして口を開いた。頭から血を流している。

「ラディス先生っ。ロンバート先生が…」

リィンは不吉な胸騒ぎを覚えてベッドに駆け寄った。

「ロンバート先生っ」

瞬間、肌が粟立つ。ぎゅっとベッドのシーツを握り締めて、そこに横たわっているロンバートの姿を息を詰めて凝視した。

いつも血色の良いロンバートの頬が、真っ青だ。瞳は固く閉じられ、浅く短く呼吸をしている。まだ息はある。視線を下へ向けると、彼の右腿のあたりのズボンが大きく裂けていて、夥しい血液が流れているのが見えた。足の付け根には止血の為の布が、きつく縛られている。そこでやっと室内に生々しい血の臭いが満ちているのに気付く。リィンの呼吸が浅くなり、口元がわなないた。

「ロンバート先生…」

ラディスがリィンをベッドから引きはがし、ロンバートの状態を観察する。きりきりと目元が険しくなってゆく。

「特効薬は打ったわ…せ、先生…。父は…」

ベルシェが震える声で呟いた。頬に涙の跡があり、今にも倒れそうな程にその身体から力が抜け落ちている。

「すぐに傷の縫合手術をする。まだ間に合う」

短く告げ、ラディスはテーブルに向き直り診療鞄を開く。手早く準備をしながら、唸るような低い声を出した。

「…ただ、血を流しすぎている。ロンバートの体力が問題だ」

室内が静寂の闇に包まれる。ベルシェが両手で顔を覆った。夫人が震えている娘の肩を抱いて、ラディスに強い視線を向ける。

「…お願い。ラディス、あなたの思うとおりにして」

扉の外からイグルの唸り声が間断なく聞こえてくる。ラディスが厳しい表情のまま手元に視線を落として動かなくなった。目まぐるしくあらゆる可能性を思索する。奥歯を強く噛み締めているせいで、汗の滲む彼の額には血管が浮かんでいた。リィンは深呼吸を繰り返し、ゆっくりと瞳を閉じる。

死んじゃ、だめだ…。

死なせるもんか。

「ラディス」

リィンはラディスの傍へ行き、彼の腕を掴んだ。

「あの『力』を使う」

ぐいと力任せに腕をとり、ベッドへと向かう。

「…何？」

「僕の、『命の力』を使う。そうすればロンバート先生は助かる」

リィンの言葉を聞いた彼の動揺が、掴んだ腕から伝わってくるようだった。

「…待て。何を、言ってる」

ラディスが強い力でリィンの腕を掴み返し、強引に立ち止まらせた。

リィンは彼を睨みつけて怒鳴った。

「迷ってる暇なんかないんだっ！」

力づくで彼を引きずってベッドへ向かおうとする。そのリィンの細い両腕を掴んでラディスが怒鳴り返してきた。

「何故その事を知ってる！」

「そんなの今はどうだって良い！ロンバート先生を助ける！」

「駄目だ！」

「どうしてっ！？今使わなきゃいつ使うんだよっ！何の為の『力』だ！」

ぜいぜいと肩で息をして睨み合う。

リィンの胸がずきりと痛んだ。何て顔してるんだ…。ラディス。

彼は激痛に耐えているような苦悶の表情を隠さずに、縋るような瞳をリィンに向けていた。

こんな表情は今まで一度も見た事はない。胸がぎゅっと苦しくなる。

ラディスを傷つけた。

リィンは何故だかそう感じた。

ラディス。ラディス。そんな顔しないで…。僕なら大丈夫だから。

ごめん。

リィンは自らを鼓舞してまた口を開いた。

「ラディス、お願いだっ。僕はロンバート先生を助けたい！ここで助けられなかったら、僕はッ…。僕は一生後悔する！」

ラディスの鋭い視線が、リィンを貫く。しかしリィンは怯まずに真正面からその青い瞳を睨みつけた。彼の形の良い薄い唇から、細く長く息が吐き出される。ラディスは目を閉じて声にならない声で、分かった、と小さく呟いた。

「…ベルシェ」

名を呼ばれたベルシェがびくりと震える。

「これからリィンの『力』を使ってロンバートの体力を回復させる。その後すぐ手術に入る。助手を頼む」

ベルシェは父を助けたい一心で、震えながらも顎を引いて頷いた。

用意を整え、リィン、ラディス、ベルシェの三人がベッドの脇に立つ。

「リィン…何をするの？」

ベルシェが怯えた表情でリィンを見やった。

「大丈夫だ。僕を信じて」

リィンはベルシェを安心させるように微笑んでから俯いて目をつぶった。その華奢な肩をラディスが抱き、横たわっているロンバートの胸にそっと手を載せる。リィンが口の中で囁いた。

「父様。僕に力を貸して」

次の瞬間、リィンの身体が青白く光り出した。

０８１：発端（レニツィ病院）

保安部隊の軍人達がロンバート邸に突入した。先頭には帝国軍のペイン副指令。でっぷりと太った腹を揺らし、興奮に頬を上気させてがなり声を上げた。

「二手に分かれて生存者を救助しろっ！」

軍人達に混ざってフェーマスも二階へ続く階段を駆け上がる。ペイン副指令が慌ててそれに続いた。

「フェーマス殿！危険ですぞ！」

その時、廊下の一番奥にある扉が開いて夫人が姿を現した。

「こちらです！早く来てっ」

部屋のベッドにロンバートが寝かされており、脇に娘のベルシェが佇んでいた。窓の傍にある長椅子には研修医と思われる青年。頭から血を流している。イリアス族の少年がぐったりと椅子に腰をかけて俯いており、横にいたラディスがフェーマスを見つけて立ち上がった。フェーマスは彼に歩み寄る。

「ラディス君、ロンバートは…」

「命に別状はない。すぐに病院へ搬送してくれ」

「ラディス君、これは一体どういう事だっ」

部屋の内部にたくさんの人間が押し寄せ、騒然となる中でペイン副指令が長身のラディスに詰め寄っていった。フェーマスが軍人達に指示を出しロンバートが担架に乗せられて部屋を出てゆく。それと入れ違いに、ものすごい勢いで誰かが駆け込んできた。フェーマスは視界の隅に、閃く鋭利な光を見て咄嗟に声を上げた。

「危ない！」

突如飛び込んできたその人物には、たった一人しか見えていないようだった。放たれた矢の如く的に向かって一直線に走ってゆく。一瞬の事で、その場にいた誰もが反応出来なかった。全ての時が静止してしまったかのような不吉な静寂を切り裂き、ベルシェの悲鳴が上がった。

「いやあぁー！先生っ！！」

ラディスが眉間にしわを寄せ、長身を折り曲げて右腕を抑え込んだ。咄嗟に身体をよじった彼の右腕、肘の下辺りに、深々と根元まで短剣が突き刺さっている。ラディスの目の前にいたペイン副指令がよろよろと数歩後ずさった。

「ラディスッ」

イリアス族の少年が駆け寄り、彼の腕を見て身体を強張らせる。既に軍人達によって取り押さえられている犯人は中年の男で、腕を振り回して暴れ、目も異様に血走っていた。

「天誅だ！これは神の怒りの鉄鎚だっ！！」

「何て事だ…」

フェーマスが呆然としたままラディスに近づこうとした時、ぐわん、と部屋全体がたわんだように揺れた。全員が一斉によろける。

「な…なんで…」

少年が低く呟いた。地鳴りのような恐ろしい音が鳴り響き、完全に部屋の内部は混乱の只中にあった。

「な、なんだこれは…。どうなってる!?」

「早く怪我人を運べ!」

「避難しろ!家が崩れるぞっ」

「リィン!やめろ!」

「許さないっ!!」

「聞け!」

ラディスが左腕で少年の胸倉を掴み上げ、小柄な身体ががくんと揺れた。喉元を締め上げられる格好になり、少年は息苦しさに顔を歪めてラディスの腕を両手で掴んだ。彼は少年にぐっと顔を近づける。

「リィン、落ち着け。俺は大丈夫だ。クレイとソアをロンバートの病院に連れて来い。…良いな?」

少年は震えながら僅かに頷いた。解放された途端、まろびながら外へ駈け出して行く。

「ラディス君！大丈夫なのか！？」

フェーマスは近づいてラディスの肩を掴んだ。彼の右腕に突き刺さった短剣の柄。どういうわけかその傷口からは血があまり流れていない。それが返って不気味に思える。

「この場を頼む」

彼の青い瞳は驚く程に冷静だった。フェーマスは自分が震えている事に、その時初めて気がついた。

◇◇◇◆

「こ、これは…ひどい」

緊張で喉が張り付き、掠れた声でクレイが呟いた。病院の処置室で、ラディスの右腕の状態を確認して愕然とした。隣にいるソアも絶句している。

「幸い神経はやられていないようだ」

ラディスが肩で荒い息をしつつ冷静な声で告げた。彼の右腕にはまだ短剣が深々と突き刺さったままである。不用意にその剣を抜こうものなら、大量の血が噴き出し、あっという間に死に至るだろう。一目で分かる。これは処置の難しい手術になるだろう。しかし躊躇している暇もない。肉が締まっていってしまうからだ。手早く、一分の狂いもなく正確に処置を施さなくては…。しかしそのような難度の高い手術が、誰に出来るというのだろうか。クレイの額に汗が滲む。

成功させる可能性のある医師はただ一人、ここにいるラディス様だけだというのに…。

「クレイ、お前に頼みたい」

「そ、そんな…。出来ませんっ。私には無理です…」

クレイが縋るような表情でラディスに訴えた。

「大丈夫だ。お前なら出来る」

ラディスはクレイの深緑の瞳を真っ直ぐに見つめている。

「ラディス様！」

「本来であればお前はとっくに独立してる。一人前の医師としてやっていける腕があるんだ」

「ラディス様、お願いです！わ、私には…」

クレイは首を振り、苦痛に眉根を寄せながら叫んだ。

私には、出来ない。成功する自信もない手術など…。ましてやラディス様の命を危ぶませる事など。

「すぐに準備をする」

そう告げて、ソアが動き出した。

「ソア！？」

クレイが振り返ってソアを見つめる。彼女は恐ろしい程真剣な表情で手元に視線を向けたまま、低く呟いた。

「クレイ、あなたも覚悟を決めるのだ。…あなたはラディス殿を助けたくはないのか」

「し、しかし…」

「クレイ」

落ち着いた声音でラディスが名を呼んだ。クレイはゆるゆるとラディスを見やる。

「俺はお前に頼みたい。この俺が命を預けるとしたら、お前以外に誰がいるというんだ？」

肩で浅く呼吸をしながら額に大粒の汗を浮かべて、彼はおおらかに笑っていた。心臓を鷲掴みにされたような衝撃が、クレイの全身を駆け抜ける。

何という美しい表情だろうか…。誰かを思いやり、全てを包み込むような笑顔だ。想像を絶する激痛を伴いながらも、この主はここまで人に添おうするのか…。

この臆病な私を奮い立たせる為に。

「ラディス様…」

「私も手伝うわ」

ベルシェが腕を捲りながらこちらへ歩いてくる。その表情は凛々しく、頼もしい。

「助かる」

ソアが短く告げ、二人は視線を合わせ頷いた。クレイは彼女達をじっと見つめ、それからゆっくりとラディスに向き直った。

「ラディス様…。私を信じていただけますか」

彼は瞳を閉じてベッドに身体を沈め、ふん、と笑った。

「今更だ」

その言葉を聞いて、クレイの両肩から力が抜ける。くしゃりと笑った。

「はい…」

ラディス様。やはり私の主はあなただけです。

あなたと出会った十三の時から、私は心に決めたのです。あなたと共に生きると。

あなたの意思を、自らの意思として。

どんな事があろうとも私はきっと乗り越えてゆきます。

僅かでもあなたの助けになれる自分になる為に…。

◇◇◆◆

日は朱に染まり、東の空に幼い闇が生まれる。リィンは窓越しにその空を睨みつけるように見つめていた。身体の芯がだるい。日頃『力』を発動させた後にはないような疲労感が、全身に薄い膜を作っているかのようだ。命を削る、という行為がどういったものかは分からないが、この疲れは独特のものだった。

あの後ラディスはリィンが何も言わずともすぐに事情を察して、シャウナの奴は油断ならん、と首を振った。リィンが『命の力』を使った事はあの場にいた者達の胸の内にしまわれた。ベルシェがしっかりとリィンを抱き締めて、ありがとうと言ってくれた。彼女は泣いていた。涙を流して、あなたってやっぱりどうかしてるわ、と怒った声で言ったので、リィンはほっと安堵したのだった。

椅子に腰をかけるでもなくこの数時間ずっと、リィンは窓際に立ったままだった。身体は疲れ切っているのだが、神経が高ぶってぎしぎしと心を締めつけるのだ。この感覚は以前にも味わった事がある。

ラディスの診療所に辿りついて、ゼストが手当を受けていた時だ。

ぞわりと悪寒が走る。リィンは唇を噛み締めた。

大丈夫だ、ラディスは腕を怪我しただけだったんだから…。大丈夫だと言ってたじゃないか。

それにもう、混乱してはいけない。あの時、ラディスが刺された時、完全に気が動転してしまったのだ。男が持つ短剣の閃光。ラディスに向かって突進してゆく光景を見て、心臓が止まってしまうかと思った。ラディスの腕を見て心が凍りつき、我を忘れた。あの家を丸ごと破壊出来る程の『力』を、暴走させてしまうところだった。ラディスに止められなければそうしていた。もっと冷静でいなければならない。

イリアス族の『力』は…僕の『力』は、一歩間違えれば恐ろしい凶器なのだから…。

処置室の扉が開いて、クレイが姿を現した。リィンは息を止めてじっと彼を見つめる。

「…何とか成功しました。ラディス様は無事ですよ」

言い終えぬうちにふらりと傾いたクレイの身体を抱きとめて、そのままぎゅっと力を込めた。

「クレイ…ありがとう…」

クレイはすみません、と呟いて身体を起こしながら続けた。

「ですが、傷はかなり深く腕を貫通していました。神経を痛めていなかったのは奇跡ですが…。ラディス様の利き腕は左ですので、傷が癒えた後は日常生活や簡単な手術の執刀なら問題はありません。しかし剣は右腕で習得されているのです。…もう以前のようには剣は振るえないでしょう」

彼の深緑の瞳は真っ直ぐにリィンに向けられている。その瞳には、今までにはなかったような力強い意思が宿っていた。リィンは口元を横に引いて、笑顔を作って答えた。

「良いんだ。ラディスの剣は、僕だから」

「リィン…。ありがとうございます」

ソアとベルシェも部屋から出て来た。皆ひどく憔悴していたが、そ

の表情は晴れやかだった。

「リィン、ラディス殿はまだ眠っておられる。申し訳ないが、部屋に入れるなと事前に言われているのだ」

ソアの言葉を聞いてリィンは苦笑を洩らした。僕が『命の力』を使うかもしれないと思って、先回りしたな…。

「分かった。みんな少し休んだ方が良いよ。お茶を淹れるよ、エンポリオも来てるんだ」

横を歩くソアが、リィンにだけ聞こえるような小声で話しかけて来た。

「…リィン。私はラディス殿を恨むぞ」

驚いてソアを見上げた。彼女は先を歩くクレイの背中を見つめている。凛とした横顔。

「クレイの心に、楔を打ち込んでしまわれた。彼はもう何があろうと迷わないだろう。この先がいかに困難であろうと、彼はその主と同じく、過酷な道を歩んでゆこうとするだろう。それがどれ程辛く為し難い事か…」

長い廊下をしっかりとした足取りで進むクレイ。黒のベストに折り目正しい黒のズボン、プレスの効いた白のブラウス。普段と変わらずに完璧な身なりだった。ラディスより少しだけ、線の細い背中。

「大丈夫だよ」

リィンの言葉にソアが顔を向けた。鮮やかな緑の瞳を真っ直ぐに見つめて、リィンは言った。

「だってクレイにはソアがついてる」

ソアは一瞬目を丸くして、それからゆるやかに微笑む。

「そうだな…それに私はまたクレイに惚れ直してしまったぞ、リィン」

「僕も。そんな風に言うソアに惚れちゃいそうだよ」

二人は顔を見合わせて笑った。

０８２：忍び寄る憎悪

「ロンバートの家にイグルを誘い入れた犯人は既に捕まっているそうだ」

フェーマスが思案顔で口髭に指を当てたまま口火を切った。

病院内の応接室にはリィン、クレイにソア、そしてエンポリオがいる。ここで休息をとっている時に、ルキリア貴族でロンバートの友人であるフェーマス・モルスディックが事件の事後を報せにやって来たのだった。ベルシェは横になりたいと言ってロンバートが寝かされている個室へと帰っていった。

外は藍色の闇が降りて、一番星が輝き始めている。

「町の住人達に複数目撃されていたらしいですね。そりゃそうだ。白昼堂々、家畜の死骸を掲げてわんさかイグルを連れて、馬で往来を突っ切っていったそうですから」

ティーカップを傾けてエンポリオが言った。

しかも丁寧な事に、ロンバート邸の庭にも直前にイグルの好む腐った肉片をばらまいていたのだという。犯人は家畜の死骸でイグルをおびき寄せ、ロンバート邸にその死骸を放り投げて走り去った。

「…実行犯はどこにでもいるごろつきらしい。何でもロンバートの病院で仲間が治療を受けたが、満足のいくものではなかったという、逆恨みの理由だ。仲間も合わせて三人が連行されたそうだ。…これは一体どういう事だと思うかね？」

「まあこれだけじゃ済まないでしょうね。そんな理由は後付けにす

ぎません。そのごろつき達は確実に金を掴まされてます。裏で手引きしているのは、ルーベン司教だ」

「しかし賢い作戦とは言えないな。何故直接ラディス君の診療所を狙わなかった？ロンバートは貴族ではないが、国指定の大病院の院長だ。その功績を讃えて国から≪男爵≫の称号も受けているのだぞ。そんな人物を襲ってどうする。襲った方もただでは済まんぞ。それに同志が襲われたとしても、ラディス君の意思がそれぐらいの事で揺らぐとも思わん。その上奇襲にも失敗して、ロンバートは助かっている。…直接ラディス君の命を狙った方が良かったのではないか？」

フェーマスの意見にエンポリオが視線を宙に浮かせ呟く。

「まだ何かあるんですよ、きっと」

そこまで黙って話を聞いていたクレイが慎重に口を開いた。

「今回の事は、ルキリア皇族も加担しているはずです」

「…それって、トワ妃の事？」

「ええ。ロンバート先生の家が襲われていた時、帝国軍の対応が極端に後手に回っていたと聞きました。上官の到着が遅れていたからだそうで…。そしてその上官があのペイン副指令です。何か言い含められているに違いありません。連行された実行犯達にもおそらく重い懲罰が課せられる事はないはずです。だからこそ、彼らは大人しく捕まったのでしょう」

難しい顔をしたソアが後を続ける。

「向こうはゲムの村の視察の件でも失敗したからな…相当に焦っているはずだ。もうなりふり構っていられないのではないだろうか。少し強引で悪質な手を使ってでも、ラディス殿を仕留めたいのだ」

何よりイリアス族に対して発令されていた警戒令が取り下げられるという、歴史的にも大きな決定があった事が、一部の皇族達を焦らせている第一の要因だ。ルキリア族以外の種族を認めようとしない、選民意識に頭からどっぷりと浸かって生きる皇族達。その地位と立場が揺らぐ事を何よりも恐れている。その全ての原因を作ったラディスが憎くて仕方ないに違いない。

エンポリオがテーブルに頬杖をつき、大きく息を吐き出した。

「なるほどねえ…。でもそれじゃあますますおっかない。それってルーベン司教とトワ妃が結託したって事だろう?その上ラディスはまだ右腕一本やられただけだ」

「嫌な言い方をする奴だ」

その声に全員が部屋の扉に顔を向ける。ラディスがしっかりとした足取りで部屋に入ってきた。

「ラディスっ」

「ラディス様…」

右腕には真新しい包帯が巻かれ、首から布を下げて固定をしている状態だが、弱々しい雰囲気はまるでなかった。ラディスは微笑さえ浮かべており、長身の身体から活力が漲っているのが分かる。

「ラディス。君って不死身なわけ？」

エンポリオが紺色の瞳を丸くして、傍らに立つラディスを見上げている。彼はにやりと笑った。

「最近俺自身も、そうかも知れんと思い始めているところだ」

彼の軽口に皆の緊張が解かれ、場の空気が和らいだものに変わった。リィンはほうと息を吐き出し、椅子の背もたれに深く身を沈める。彼の普段と変わらない飄々とした姿を見た途端、安心してしまった。すると今度は何だかやきもきしてくる。

ラディスの奴、人の気も知らないで…。

「ラディス君」

フェーマスが席を立ちラディスの前に歩み出た。黒に近い青の瞳が少しだけ細められ、うっすらと微笑が作られる。

「ロンバートの命を救ってもらい、礼を言う。君はどうやら本物だったようだ」

差し出された左手。

ラディスは美しい笑顔でそれに答え、二人は固い握手を交わした。

リィンはその時、ラディスの僅かな表情の変化に気付いた。フェーマスの言葉を聞いてラディスの表情に一瞬だけ翳りがよぎったのだ。しかしそれは本当に刹那の事で、もしかしたら見間違いかもしれないと思う程の些細なものだった。きっとリィン以外誰も気付きもし

なかっただろう。

束の間、穏やかな時が流れる。しかしその和らいだ空気も長くは続かなかった。次にやって来た人物の言葉によって、地獄の底に叩き落とされる事になる。

廊下が何やら騒がしい。その物音に気がついてラディスの表情が厳しくなり、皆の表情も固いものに変わる。慌ただしく部屋の扉を開けて、ラディスの養父であるジェイク・ハイゼルが姿を現した。セットされた髪型が僅かに乱れ、ブラウンの瞳は切迫した光を帯びている。

「ラディス、大変な事になった…」

ジェイクがラディスに詰め寄るように近づいてゆく。

「たった今、チェムカが帝国軍の保安部隊に連行されていった」

部屋の空気が凍りついた。

「チェムカが、ロンバート邸の襲撃事件の実行犯の一人として捕まってしまった」

リィンの小さな身体に衝撃が走った。後頭部を思い切り殴りつけられたような、嘔吐感を伴う衝撃。

「…ど…どうして…」

何故？なんで？

何かの間違いだ…。チェムカがどうしてそんな事するんだ。

…罠だ。

完全に思考が停止する。

「既に軍本部に拘束されていて面会も出来なかった。目撃証言があったそうだ。今日の朝早くに、犯人達にチェムカが何かを手渡す場面を町の者が見ていたんだ…。

それは…家畜の死骸だったそうだ」

◇◇◇◆

「先生！俺のせいなんですっ！俺のせいで…こ、こんな大変な事にっ…姉ちゃんがっ！！」

チェムカのすぐ下の弟、レッジが泣きじゃくり、必死に声を張り上げた。その隣に座っているチェムカの母が、彼の銀髪の頭を片手でぐっと抑えつける。

「こんな取り返しのつかねえ事！どうしてさっさと相談しなかったんだべっ！」

母の顔はこれ以上ない程に蒼白で、目は充血して真っ赤だった。

「うっ…ごめんなさいっ…ごめんなさい！！」

「セティナ」

向かいの席に座るラディスが穏やかな声でチェムカの母の名を呼ん

だ。

それからすぐにフェーマスとジェイク、エンポリオは情報を収集しに病院を後にした。リィン達も慌ただしく診療所へと戻り、そこでこの二人がラディスの帰りを震えながら待っていたのを知ったのだ。レッジはしゃくりあげて泣き続け、セティナは泣きこそしないものの、その表情は焦燥と不安の入り混じった悲痛なものだった。診療所の居室へと場を移し、とにかく話を聞こうと席についた。

「ここに来るまでにも勇気がいったろう。…まずはその事に礼を言いたい」

ラディスは二人を安心させるように微笑んで、ありがとう、と頭を下げた。セティナが俯いて涙を拭う。

「レッジ。教えてくれるか？ゆっくりで良い。覚えている事を全て話してくれ」

少年は口元を震わせ、ラディスを見つめた。ラディスは視線をそらさずに柔らかな声で続ける。

「チェムカは必ず助ける。大丈夫だ。手はいくらでもある。その中で最善の手を打ちたいんだ。協力してくれるか？」

レッジの瞳からまた涙がこぼれる。

「は、い…」

そして少年は時折涙で声を詰まらせつつ、一生懸命に語りはじめた。

０８２：忍び寄る憎悪（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
途中ですが少しばかり。
今後もシリアスの上に可哀そうな感じで物語は進んでゆきます。
読んでくださってる方々に申し訳なくなるくらい、話は小難しくなる一方です。。。
今なら間に合います、引き返してください（笑）
晴れやかなる大団円を目指して頑張ります。
目指すはらぶらぶ、これなんです！！

０８３：別離

既に時刻は深夜を回った。灯の落ちた診療所は水を打ったような静寂に包まれている。

レッジから話を聞いた後、すぐに行動を起こした。

チェムカの家族はジェイクの知り合いがいるリエズの町へ一時避難する事が決まり、既にレッジと小さな弟妹達はベイルナグルの帝都を離れた。母のセティナとパウラはチェムカが戻るまで帝都に残り、その後チェムカを連れてリエズに行く事で話がまとまった。

リィンは寝室のベッドの中で闇に溶ける天井をじっと見つめていた。ラディスやクレイに休めと言われて風呂に入らされ寝室に無理矢理押し込まれた。今朝の出来事がずいぶん昔の事のように感じられる。

目を閉じると、レッジの泣き顔が浮かぶ。そしてチェムカの笑顔…。

銀色の髪を三つ編みにして右肩にたらし、にっこりと笑う彼女。そばかすの散った頬と低い鼻。愛嬌のあるチェムカの表情は、皆を安心させて和ませるような不思議な力がある。

その顔を大人にしたような母のセティナは、しかしずっと沈痛の面持ちでいた。きっと胸が張り裂けそうな程、娘の身を案じているに違いない。

なのに彼女は一度も、娘を助けてくれとは言わなかったのだ。

「先生には主人が亡くなる前から、今までもずっと、本当に良くしてもらっただ…。こんな事になっちまって申し訳ねえ。先生、何べん謝っても謝りきれねえ。本当に、申し訳ねえ…」

レッジは以前から町の不良グループ達の仲間に入り、やんちゃな遊

びを繰り返していた。しかしそれは凶悪な犯罪の類いではなく、思春期の少年達が大人につっかかるような、その程度のものでしかなかった。母やチェムカが諌めるのも聞かず、毎日集まっては悪戯をして喜んでいた。それがつい最近、別の不良グループと交流するようになり不穏なものに変わっていったという。

商店街にある店の窓ガラスを割ったり、道行く人の荷物を奪って強盗をしろと脅された事もあった。レッジと他数名の少年達は恐ろしくなりグループから抜ける事をリーダー格の少年に申し出た。すると背後から大人が姿を現したのだ。一見して素性の良くない人物であるのが分かった。顔が腫れるまで殴られた後、その人物が凄みを利かせ言ったのだという。

今更簡単に抜けられると思うな。世間知らずのガキ共め。お前達を行方不明にしてやる事なんか容易い。どうしても抜けたいと言うのなら、それなりの代価を払ってもらおう。

三日後、指定した場所に豚を一匹持ってこい。ちゃんと絞めてから持ってこいよ。そうだな、おい、お前。代表してお前がやれ。良いな？そうすれば抜ける事を許してやる。誰かに言ってみろ、お前の仲間が死ぬぞ。

レッジは姉のチェムカに相談した。少年の心では抱えきれない程の恐ろしい問題だったが、親には心配をかけたくない、という思いから母のセティナにはどうしても言えなかった。それに誰かに知らせた事が分かれば、友達が殺されてしまう…。

何故豚の死骸なのか皆目見当もつかなかったが、それさえ渡せば許してもらえる。

卑怯で卑屈で、最低の手口だ。

レッジを脅した人物は、きっとルーベン司教と皇族トワ妃の手先だ。

今頃チェムカが真実を訴えているだろうが、果たしてそれで容疑が晴れるとは思えなかった。何故なら相手の本当の狙いはレッジでもチェムカでもなく、ラディスなのだ。ロンバート邸襲撃事件の黒幕をラディスに仕立て上げるつもりだ。だからこそこの診療所で働く姉がいる、レッジが狙われたのだ…。

ラディスを捕らえるまで、チェムカは解放されないだろう。

彼はチェムカを助ける手はいくらでもあると言った。

それは、嘘だ。

…そうなんだろ？

深い闇が明けようとしている。窓の外が白み始めた頃、音もなく寝室の扉が開いた。

リィンは仰向けで目をつぶっていた。誰かが近づいてくる気配がしてベッドがぎしりと音を立てた。髪を優しく撫でられる。

ミントハーブの香り。

リィンは瞳を開けて相手に言葉をぶつけた。

「…行くな」

ラディスがベッドの脇に腰をかけており、リィンを見下ろして少しだけ目を丸くした。

「起きてたのか」

右腕のブラウスは二の腕まで捲られ包帯が巻かれている。たった数

時間前だ。まだその傷口だって、ふさがっていない。
リィンは素早く起き上がり、彼の胸倉を掴んでベッドへ押し倒した。
その上に馬乗りになって青い瞳を睨みつける。リィンはブラウスだけを羽織り、下は下着だけしか身につけていなかったが、身なりを気にしている場合ではなかった。必死だった。

「行かせない」

ラディスはうっすらと笑った。

「僕が行って、チェムカを助ける。僕の『力』があれば、それが出来る」

「牢破りか？それは犯罪だぞ」

「逃げれば良い。そうだ、ラディス、逃げよう」

「くく…。お前は時々突拍子もない事を言う。それじゃあ何の解決にもならんだろう」

リィンの両手に力がこもり、瞳がゆらゆらと深紅にゆらぐ。

「…『力』で俺をここに、はりつけにするか？長くはもたんぞ」

「行かせない！」

ラディスにぶつかってゆくように、リィンは彼の薄い唇に自分のそれを重ねた。華奢な身体を押しつけて強引に口付ける。震えながら舌をからめ、深く、口付けてゆく。ラディスが左手でリィンの細い腰を抱いて、拙いキスに応えた。呼吸が思うように出来ず苦しくな

る。リィンは顔を僅かに離して、吐息混じりに言葉を吐き出した。

「…っラ、ラディス…行っちゃ、だめだ…」

「色仕掛けとは考えたな。お前にこんなに情熱的に迫られるなんて夢のようだ」

もう一度、唇を重ねる。リィンは全身でラディスにぶつかる。彼をここに引き止める為に。

行ったらだめだ。相手の思うつぼじゃないか。捕まったら…

ラディスはどうなるか分からない。

彼の指がリィンの太腿を撫でた。びくりと身体が震え、すかさずラディスは態勢を逆転させた。唇が離れ二人の荒い息がからまる。

「リィン…やめよう。俺はお前を抱く時は、幸せな気持ちで抱きたいんだ」

リィンを見つめる彼の瞳は、静かな海のような静寂さをたたえていた。薄茶色の髪がかかる美しい顔。綺麗な鼻筋、微笑む口元。覚悟を決めた人間の顔。何て凛々しい…。

「ああ…ラディスッ…い、いやだ…行くなっ！」

リィンの紅い瞳から、涙がこぼれ落ちる。

「行かないでっ…いかないでよ！！」

ラディスの首にしがみついて手放しで泣き出した。

「リィン」

ラディスは身体を起こして、痛む右腕に構わずに両腕でしっかりとリィンを抱き締める。

「そんなに泣くな。…お前に泣かれると、さすがに辛いぞ」

「いやだっ…な、泣く…うぅ」

泣きながら、リィンは彼を抱き締める腕に力をこめた。ぎゅうと二人の身体が重なる。

「リィン、大丈夫だ。お前を残して死んだりしない。俺を信じろ」

「いかないで…お願いだっ…ラディス、いかないで…」

怖い。怖い…。

ラディスが自分の手の届かないところへ行ってしまう。

『力』を使っても救い出せないようなところへ行ってしまう。

リィンは死の恐怖に怯えていた。また大事な人がいなくなってしまうかも知れない恐怖に、抗う術のない現状に、ただ恐ろしくて震えていた。また失ってしまう…。

シルヴィやゼストのように、ラディスまでいなくなってしまったら…ぞっとして考える事も出来ない。苦しくて辛くて、呼吸が思うように出来ない。

他に何も望まないのに、唯一である彼がもしいなくなってしまったら、もう生きていけない。

もう失うのは、嫌だ。

耐えられない。

「…リィン。俺の周りには人が良すぎる奴が多いと思わないか」

ラディスが、泣きじゃくるリィンの背中をさすり静かに語り出した。

「皆、俺のする事に巻き込まれてひどい目に遭っているくせに、俺に礼を言おうとする。…俺は時々何と言ったら良いか分からない時がある」

リィンは震えながら彼の顔を見つめた。ラディスはリィンの栗色の髪を梳いて、微笑んでいる。しかしその瞳は真剣だった。

「護りたいんだ、リィン。俺はそんな健気な奴らを、護りたいんだよ」

「う…」

痛い。胸が苦しい…。

「じゃ、じゃあ僕も、行くっ…僕も一緒に行くっ！」

ゆるりとラディスが首を振った。

「向こうを喜ばせてどうする。お前はここに残って、皆の支えになってくれ。その目でしっかりと、全てを見ていて欲しい。真っ直ぐに目をそらさずに…」

「そ、そんなの…！」

「お前は強い。お前なら出来る」

リィンの顔が苦痛に歪んだ。

「僕は強くなんかないっ！あ、あんたがいなきゃ…強く、なれないよ…」

口が震えてうまく言葉が出てこない。リィンの頬に涙が止めどなく流れてゆく。ラディスが指先でリィンの涙を優しく拭った。

「俺は死なない。決して諦めるな。クレイや皆を、俺を信じろ。良いな？」

「ラディス…い…やだ…」

「リィン。チェムカを護ってくれ、頼む…」

ラディスが瞳を閉じてリィンに口付けた。切ない程に、優しい口付け。

涙の味がする。

彼はそのままリィンをベッドに沈めて、頬や瞼にも口付けを落とした。リィンは悲しくて悲しくて、目を開ける事が出来ない。

止められない。行ってしまう。自分は何も出来ない。また、何も出来ない。

「リィン」

ラディスが低く澄んだ声で、告げた。

「愛してる」

遠ざかってゆく。寝室の扉がぱたん、と閉じられた。

「う…」

ラディス。

「……も」

ぼくも、愛してる。

０８４：その想いの名を

早朝、その知らせはベイルナグルの町を稲妻の如く駆け巡った。
広場より北東のはずれに位置する場所に診療所を構え、医療改革の先頭を走り続けていたルキリア国一の名医と称されるラディス・ハイゼルが、ルキリア帝国軍によって拘束された。
ロンバート邸襲撃事件に関与の疑いがかかる、チェムカ・トルメの雇い主でありロンバート・レニツィとも深い関係にある彼が、重要参考人・第一被疑者として、自ら出頭してきたのであった。
現在その身柄は帝国軍本部に送致されており、今後審議と審問が行われる予定である。ただ国王及び帝国軍元帥不在の帝都における現在の最高権力者は、ルキリア帝国軍内部ではペイン副指令、ルキリア皇族内部では前国王の王妃であり、正統な皇族の血筋であるトワ元王妃の両名であった。
ザイナス国滞在中の国王及び元帥に向けての伝令≪早馬≫は既に飛ばされている。しかしどれ程緊急で全力をもってしても、≪早馬≫がザイナス国へ到着するまでに要する日数は、二日。その後国王達が帰国するまでにも、早く見積もっても三日はかかる。
この空白の五日間に、全てが決しようとしていた。

◇◇◇◆

ベイルナグル・北地区≪書斎≫

ペンを走らせていた手を休め、深く息をついた。おもむろに席を立ち、壁にかかるお気に入りの絵画をじっと見つめる。世間が思う自らのイメージとは似ても似つかないような、カラフルな色彩で描かれた絵画。本当は、黒という色が好きではない。しかしどういう訳

か自分に似合う色が黒以外になく、そして対外的にもこの色を纏う方が、何かと都合が良かった。ただそれだけの理由だ。

世間では闇の男と呼ばれている。

扉がせわしなくノックされる。このやり方はウィリアムだ。もう少し落ち着けといつも言っているのだが…。返事もしない間に扉が開いて赤毛の頭がひょっこりと現れた。

「シーカー、お客さんだぜ」

「…誰も通すなと言っただろう。俺は今機嫌が悪い。お前でも容赦せんぞ」

ウィリアムは少年ぽさを残した顔で、にやりと笑った。

「びっくり仰天して腰ぬかすなよ。唯一、あんたが欲しくても手に入れられなかったもんだぜ」

ウィリアムが場を譲ると、ゆっくりとその人物が姿を現した。まるでまばゆい光を含んでいるかのような、美しい白の髪。それと対照的な褐色の肌。桃色に色づく、ふっくらとした唇。つぶらな黒の瞳。シーカーは呼吸するのを忘れ、その女性を見つめていた。ふわりとした身ごろの白い服を身につけ、右手に杖をついてこちらに歩いてくる。盲目の歌姫、ネルティエ。

「んじゃ、ごゆっくり」

ウィリアムがくつくつと笑って扉を閉めていった。シーカーはやっとの思いで息を吐き出し、ネルティエに近づいてゆく。

「これは驚いたな。世界一のディーバが、こんなむさ苦しい場所へわざわざお越しくださるとは…」

そっと華奢な肩に手を置くと、びくりと震えた。恐怖で顔が引きつっている。どうやら今日は彼女の愛らしい笑顔は見られそうにない。とはいっても、いつも見ている訳でもない。影からそっと見つめる事しか出来ない。人々から恐れられ畏怖される存在。それが夜の帝王、シーカー・ラグズウェルだ。

「怯えなくて良いですよ。私は野蛮人ではないのでね、あなたを襲うつもりはありません」

極力優しく聞こえるような声音で告げ、椅子の傍まで導いてやる。しかし全身から立ちのぼる気配や鋭い空気はどうにもならない。長身に鋭い面差しは盲目の彼女には見えていないはずだが、ネルティエは完全に怯えきっているようだった。シーカーは内心で舌打ちする。

だったら何で、のこのこ来やがったんだ。

「すみません…。シーカー様…今日はお話があって、こちらへ寄らせていただきました」

長い睫毛を伏せて、蚊の鳴くような声で言う。その声も魅惑的に震えていた。

「聞きましょう」

ネルティエが席に着いたのを見届けて、シーカーは窓際の机に浅く

腰をかけ腕を組んだ。本当はもっと間近で彼女を見ていたいのだが、視覚を持たない分、物音や気配に敏感で不用意には近づけない。

「あ、あの…。シーカー様、今までの私の無礼をどうかお許しください。あなたのお心のこもった贈り物の数々、本当にありがとうございました。今までお礼を言わずにここまで来てしまった事、とても心苦しく思っております」

シーカーは細い両目をますます細めてネルティエを睨みつけた。更に不機嫌になる。

「はは。そんな事は気にしていませんよ。あなたを想えばこそだ。私の方こそ、強引に求愛してしまって申し訳なく思っています」

「そんな…」

ネルティエは一瞬はっとしたような表情をしてから、辛そうに眉根を寄せてまた俯いてしまった。

「あの…今日ここへ来たのもその事でお話があって…」

膝の上に置かれた小さな手が固く握り締められている。

極度の緊張状態。

シーカーが大きくため息をつくと、その音にすら彼女はびくついた。さながら獰猛な狼を目の前にした可哀そうな子羊。重たい沈黙。それから意を決したように彼女は顔を上げて、つぶらな瞳を真っ直ぐに向けてきた。シーカーは息をのんだ。濡れて輝く黒の瞳は、まるで見えているかのようにシーカーを射抜いていたのだ。

「私…シーカー様のプロポーズを受けようと思っています」

「ほう…」

「今でも私の事を僅かでも想っていてくださるのなら、どうぞこの盲目の哀れな女を救ってくださいませ」

そう言ってネルティエは切なげに微笑んだ。

美しい…。この場で押し倒してやりたい。

しかし、気に食わん。

「どういう心境の変化でしょう?今までどんな人物の誘いにも袖を振らなかったあなたが、突然私の求愛を受けてくださると言うのですか?どうも化かされているようにしか思えませんね」

「そんな…シーカー様、これは私の本心です」

「…ラディス・ハイゼル」

シーカーの言葉に凍りついたように愕然とする。

「あの男の為でしょう」

「あ…」

ネルティエの艶やかな桃色の唇が震え始める。シーカーはそれをじっと見つめてまた口を開いた。

「そうまでしてあの男を救いたいという事ですか。あの男の為なら、

プライドの高いあなたでさえ娼婦の様な真似をするというのですか」

「ち、違いますっ」

「私もなめられたものだ」

「シーカー様！」

「勘違いなさるな、歌姫よ。確かに私はあなたが欲しい。魅惑的な歌声も美しい白の髪も、誘うような唇も全てを私のものにしたい。あなたをこの腕で抱きつぶしてやりたい。今すぐにでも」

ネルティエは瞬間に耳まで真っ赤になってゆく。

「しかし、それには心が伴わなければ意味がない。私はあなたの、全てが欲しいのだ。あの男を想うあまりのあなたの行動は、全くもって気に入らん。腹が立つ」

「そ…そんなっ！お願いですっ！シーカー様、どうかラディスを、助けてください！」

褐色の滑らかな頬に、涙が伝った。

「…あの男には借りがありましてね、それを返さねばならん。ロンバート邸襲撃事件の実行犯の残党と脳味噌の足りないガキ共は必ず捕らえます。そこからおそらくはルーベン司教にまでは辿る事が出来るでしょう。しかし、私が出来るのはそれまでです」

目の前で無防備にぽろぽろと泣いているネルティエから視線を外し、目を閉じて続ける。

「あいつを捕らえているのは皇族です。この帝都で、ひいてはルキリア国であの皇族に太刀打ち出来る手などありませんよ。≪黄金の青い目≫を持つ奴らはその存在自体がこの国の秩序であり、絶対的な権限を有する神だ。奴らが黒だと言えば、どんなに真っ白だろうが黒になる。それがこの世界です」

「ああ…そんな…」

ネルティエはゆるゆると首を振って両手で顔を覆った。

「…私は出来得る限りの事はするつもりです。お約束しましょう」

「シーカー様…」

震える声で弱々しく呟いて、可憐な歌姫は涙で濡れた瞳をこちらに向けてくる。

くそ…。

シーカーはわざと靴音を立ててネルティエに近づき、その手を取って立ち上がらせた。

「さあもうお帰りなさい。あなたはここにいてはいけない。…あの優秀な護衛が、よくあなた一人でここへ来る事を許しましたね」

ネルティエは少しはにかみながら答えた。

「お茶に眠り薬を少し…」

シーカーは驚いてネルティエの顔を見つめる。全く…何て女だ。
苦笑しながら彼女の頬に流れる涙を拭った。

「あ…ごめんないさい。私ったら…」

「もうここへは来ない方がいい。良いですね？」

そう告げるとネルティエは困惑したような表情でこちらを見上げた。
シーカーは極力彼女を見ないようにして、扉の外に声をかけて部下を呼んだ。

「家までお送りします」

「あの、シーカー様…」

「ここでの事は聞かなかった事にします」

「え…」

「また舞台を観に行きますよ。ではこれで」

振り返ろうとするネルティエを少し強引に外へ押しやり、背を向けた。遠ざかってゆく足音を聞きながら思い切り舌打ちする。気分は最悪だった。どっかりと椅子に腰をかけてあらん限りの悪態をつく。するとそこへウィリアムが呆れ顔で部屋にやって来た。

「あーあ。荒れてんなあ。なんで帰しちゃったの？」

「あの男のどこが良いんだ！？さっぱり分からん！俺よりも下衆な男だぞ！？くそっ！」

「あんまり大声出すなって。世間では恐ろしく冷徹で冷静沈着な闇の男で通ってんだから。…そうだなあ、あんたよりラディスの方が、物腰が柔らかい」

「くだらん」

「…あんたでもどうにもならないわけ？」

「二度も言わすな。阿呆は好かん」

「わあったよ」

出て行こうとするウィリアムの背中に、おい、と声をかける。

「茶を持ってこい」

「了解。とびきり甘いやつな」

闇の男は顔に似合わず甘党だった。

俺だって何とかしたいとは思うが、今回ばかりは難しい。それはあの男自身が一番良く分かっているはずなのだ。だからこそ常に用意周到で、一切隙を見せなかった。申し分なく賢く、鬼のように強い。それがラディスという男のはずだった。それがあのざまだ。何故あんなへまをした!?情けない！

シーカーはそのせいで朝からむかむかしていた。

「死ぬ気か…阿呆がっ！」

◇◇◆◆

ベイルナグル・南東地区≪ジェイク・ハイゼル邸≫

「ロンバートは今朝方目を覚ましてね、体調もまずまずのようだったよ。ラディスの件を聞いてショックを受けていたようだったがすぐに言ったよ。いよいよ決着をつける時が来たかと…。

彼はとても強いね、正直驚いてしまった。自らもあれだけの大怪我をしたというのに、もう若い医師や部下達にベッドの上から指示を飛ばしていてね、もう少し寝ていろと夫人に注意されていた。夫人もベルシェも、病院を守っていこうと一生懸命頑張っている」

ジェイクは笑みを浮かべて首を振った。その向かいの席に座っているエンポリオが、紺色の瞳を細めて大きく息を吐き出す。

「そうですか。それを聞いて安心しましたよ。確かにこの帝都で最初からラディスと行動を共にしている方々だ。さすがと言うべきでしょうね。…それで意見書はどうなりました？」

「ああ。私とロンバートとの連名で提出したよ」

「僕の方もフェーマスさんとあと二名の方との連名で、審議要請を正式な書簡で軍に通達しました。これでもルキリア貴族ですからね、無視は出来ないでしょう。はあ…僕、貴族の名を継いどいて本当に良かったと心の底から思いますよ…。まさかラディスがこんな事になるなんて思っていなかったから…」

そう言いながら頭をかくエンポリオを、ジェイクは黙って見つめていた。

「じゃ、僕先に診療所へ行きますね」

「ああ…。エンポリオ君」

声をかけると、彼はきょとんとした表情でこちらを見下ろす。ジェイクは微笑んだ。

「ありがとう。息子の為に動いてくれて…。本当に心強い」

「嫌だな、そんな。当然の事でしょう?あいつは僕の数少ない友人ですから」

それから思い出したように付け足した。

「…僕を認めてくれていた、たった一人の友人ですから」

照れたような笑顔を残し、彼は部屋を後にした。

ジェイク自身も身支度を整え玄関に出たところで、ユマと従者がやって来た。

「お父様。気をつけてね」

ユマはこのところ体調も安定して随分良くなっており、今もとても血色の良い顔をしている。ジェイクは彼女を見ただけで、ほっと安心して心がほんわりと温かくなるのだった。

二人の後ろから大きな身体をした護衛のバーツも姿を現した。彼は診療所の護衛をしていたが、あの場所には自分の身は自分で護れる人間しかいない為、騒動が起こってからはこちらへ来てもらう事にしたのだ。家の外にも護衛が一人、近辺を見回っている。

「ユマ。お前もリエズに行った方が良かったんじゃないか？」

本当は、心痛で体調を崩しはしないかと少し心配している。

ユマは右手で拳を作り、胸をとんと叩いて笑顔になった。

「何の！私は案外図太いのよ？それに私よりお父様の方が倒れちゃいそうだわ。ちゃんと食べてる？」

娘の力強い笑顔に癒されジェイクの口元も緩む。

「はは。確かに、お前の方が元気そうだ」

ふわりと包み込むようにユマがジェイクに抱きついた。

「ラディスが帰って来た時、私もちゃんと迎えたいもの」

「…ああ。そうだね」

「ワドレットはね、会社を通常通り行うそうよ。薬を待つ人がいるんですもの。休んだりなんかしたら、ラディスに叱られるって言ってたわ。彼ってうんと強いのよ、お父様」

ユマがジェイクを見上げてにっと笑った。ジェイクは苦笑でそれに答える。

「分かってるよ。彼は良い男だ。癪だけど認めよう」

微笑み合う柔らかな親子を見つめ、婦人の従者は眼鏡を外して涙をそっと拭った。

「リィンが心配だわ。お父様、お願いね」

「ああ。分かった」

ジェイクは娘のブラウンの髪をなでながら、身体の底から力が湧いてくるような感覚を覚えた。どんな暴風の中にいても、じっと揺るがずに立っていられるような、芯から強く燃え上がるような、力だ。

そうだ…。もう二度と、あんな思いはごめんだ。

親友と同じ運命を、息子に辿らせてなるものか。

これは私の戦いなのだ。

０８５：共存する光と闇１

ベイルナグル・南地区≪宮殿内　鳳凰の間≫

「ここからが肝心ですぞ皆様方。時が勝負です、ぐずぐずしていてはやっと捕らえた獲物を逃す事になる」

眼鏡をかけた白髪の老人がそこに居並ぶ者達に視線を巡らせた。白銀の貴重な一枚岩で造られた縦長のテーブルには目にも鮮やかな料理が並び、金銀の美しい食器が華を添えている。繊細な細工の施されたグラスに真っ赤な葡萄酒が揺れ、集う者達もきらびやかで上等な衣服を身に纏う。
優雅な昼の会食。
全員が≪黄金の青い目≫の持ち主であった。

「しかし今回は少し強引すぎやしませんか？ロンバートに手を出した事で、今まで中立の立場を崩さなかったフェーマスが向こうに回ってしまった。それにエンポリオ・オールゲイトと手を組んで審議要請の書簡も出してきているらしい」

金色のウェーブがかった長髪の青年が思案げに語ると、その隣に座る太った男性が彼を睨みつけて言い放った。

「それがどうしたというんだ、レイベンロウ。お前も王子の一人ならばもう少し堂々としていたらどうだ。貴族がどれだけ何をわめこうとも取り合う必要などない。私達は皇族なのだから」

「はあ。今の世の中、そのような独裁国家では通用しませんよ。それに気付いているからこそカイエリオス陛下は…」

「お前はどちらの味方だ！これを機にアルスレインを失脚させるところまで持ち込まねばならんのだ！臆病者は去るが良い！」

蛇のような細い外見をした別の壮年が声を荒げてレイベンロウの言葉を制した。

「そういう事じゃありませんよ、ワイゼフ閣下。ただ今回の策はそれ程賢いものではないと言いたいんです」

「もうここまで来ているのだ、今更引き返す事など出来んだろうが！それにいざとなればルーベンとペインに罪を着せてしまえば良いではないかっ」

興奮した面持ちのワイゼフの言葉に頷き、髭の壮年が静かに口を開いた。

「いずれにしろあの男の処刑は今すぐにでも執行してしまわねば。あれを消してしまった後ならば、どうとでも言い訳は作れる。≪早馬≫もノランド大尉が全て片付けた。ザイナス国へ伝令は届かない」

「よくやった、ガズナイルよ。ようやくあの男を捕らえる事が出来たのだ。この機会を逃さずに息の根を止めねばならぬ」

そう言って不敵に微笑む女性。金の髪を結い上げて白のドレスに身を包む。ぴんと背筋を伸ばしたその姿からは威厳さえも漂わせている。大きな瞳と顎にほくろのある顔立ちは実年齢よりもだいぶ若く見えるが、目尻と口元のしわにその年輪を感じさせる。

「トワ妃殿下、それでは審議も審問もせずに極刑を確定させて執行

するというのですか？少し乱暴すぎませんかね…。私達の狙いが彼であると公言しているようなものです」

「良いではないか。実際にそうなのだから。あの男…ラディス・ハイゼルさえ殺してしまえば後は烏合の衆だ。国王不在の今、全ての権限はこの私にある事を忘れるな」

トワは華やかな笑みを浮かべ上品な仕草でグラスを傾けた。

「あのイリアス族の少年も何とか引っ張れないだろうか」

太った男性が油で光る顔を緩ませて独り言のように呟く。

「英雄などどもてはやされているようだが、所詮は奴隷だ。あの白い肌と紅い瞳のおぞましい事、身震いがする。何でもその少年は女のように整った容姿をしているとか…。捕らえて鞭を入れてみたい」

「欲は出さぬ方が懸命ですぞ、ドムクス王子。ラディス・ハイゼルの一人でさえ捕らえるのには苦労したのですからな。それにあの男と同様、その少年もレーヌ国とは深い繋がりがあるようだ。下手な事をすればレーヌ国を敵に回しかねない。そうなれば我ら皇族だとて国王は黙っていないでしょう」

白髪の老人がドムクスを諭し、それを聞いていたトワが高い笑い声を上げた。

「笑止、ウィト・ネールよ。レーヌ国だとて、このルキリアの支配下にあるのだ。ルキリア皇族の権限よりも上をゆくものがこの世界にあろうか！≪黄金の青い目≫を持つ私達皇族こそが、この世界を統べる唯一の選ばれた種族であるのだ！」

トワの言葉に老人ウィト・ネールは黙って頭を垂れ、ガズナイルが片手を挙げて口を開く。

「だがウィト・ネールの言葉にも一理ある。今はあの男の事に集中した方が宜しい」

「全く忌々しい！あの男のせいでこのベイルナグルの秩序が乱れてしまった！下賤の民らがまるで我が物顔で生意気にも意見を述べるなど許してはいかんのだ。ここは偉大なるルキリア族の土地なのだぞ！？それを忘れ我らの寛大な慈悲によって、この場所に住んでいる事すら、あの阿呆共は忘れ去っているのだ！」

「速やかな処刑の執行には賛成ですな。しかしあまりにも強引に事を運ぶと後々面倒な事になるのは目に見えておりますぞ。ペインとルーベンが寝返らないとも言い切れますまい。慎重かつ迅速に、事を進めなくては…」

「臆するな、勝利はこの手の中にある。愚民共に何が出来よう」

トワは高らかに葡萄酒を掲げ、場の全員がそれに続く。

「全ての命は偉大なるルキリア皇族の前にひれ伏し」

「我ら高貴なるルキリア皇族によって統べられる」

ぞわりと全身を駆け巡る優越感に、トワは心の底から歓喜した。

とうとう捕らえたのだ。あの薄汚い女の血を宿す子供を…。

この私を長年苦しめてきた罪は重い。決して逃さぬ。生きたまま四

肢を切り刻んでくれようぞ。

◇◇◇◆

ベイルナグル・北東地区≪診療所　応接室≫

診察はしばらくの間休診になった為に主を失くした石造りの建物は、不気味な程に沈黙していた。エンポリオが応接室の扉を開こうとした時、内側から勢いよく開いて大きな声とざわめきが飛び出して来た。

「やはり司教と皇族を相手にして勝ち目などあるわけがなかった！私達は愚かだったのだ…。迷惑な話だ。命まで狙われるなんて聞いていない」

「その通りだ。俺はもう手を引かせてもらうぞ」

「お待ちください。どうか冷静に…。これは紛れもない冤罪なのです。真実はすぐにでも明らかになるでしょう」

「とにかく、真実がどうあろうが既に無意味な事。私も降りる！」

扉の取っ手を掴んだままの壮年は室内に向かって言い捨て、踵を返して目の前にいるエンポリオとぶつかりそうになる。壮年はあからさまに顔をしかめ、憮然とした態度で長い廊下を去ってゆく。

「失礼」

次々と室内にいた者達がエンポリオを押しやって去って行った。エンポリオは唖然としてそれを見送り、ゆっくりと室内に足を運ぶ。

中には乱れた椅子と、淀んだ空気。クレイとフェーマスが席についており、クレイの傍らにソア、窓際にはリィンが佇んでいた。エンポリオは苦笑し、ため息をこぼす。

「…まあね。うすうすは想像していた事だけど。味方はこれだけ？」

「やはり…柱であるラディス様がいなければ全てが成り立ちません」

しょんぼりとするクレイの肩にソアがそっと手を添えた。

「これで良いんだ」

迷いのない声に皆がリィンに視線を向ける。赤茶の瞳は真っ直ぐにクレイに向けられていた。

「臆病者は足手まといになるだけだ。本物の味方が僅かでも残れば良い。その方が何倍も動きやすく団結もしやすいだろ？…って、ラディスだったらきっとそう言う」

「リィン…」

「なるほど…その通りだ。気落ちしている暇はないな、次の対応策を考えねば。…エンポリオ君、あの男の方はどうだ？こちらに懐柔出来そうか？」

フェーマスが口髭に手を当てながら部屋の入り口に立つエンポリオを見上げて聞いた。

「ふふ。あともうひと押しってところです。必ずこちらの側につけさせますよ」

エンポリオはフェーマスに微笑んでからリィンにそっと視線を向ける。白のブラウスに緑のベスト、細身の黒のズボンという普段通りの格好で窓外を見つめている。透き通った濁りのない白の肌に色素の薄い栗色の髪。その容姿は全体的に線が細く繊細なガラス細工のようだ。しかし凛とした横顔からは全く心細さを感じない。瞳には強い光が宿り、勇ましい青年のような雰囲気が漂っていた。今のリィンを見て、誰もが男性である事を疑わないだろう。

リィン、君は…。

「…もう昼過ぎだな。何か作ろう。食事をとらねば力も出ない」

ソアが静かに呟いて、皆がのろのろと応接室を後にした。長い廊下を居室に向かって歩いていると、玄関口にわらわらと人が入って来るのに出くわした。

「ニコルさん!?皆さんまで…どうしました?ここはしばらく休診ですよ」

人々の先頭にはニコルとニコルの主人がいる。その後ろに連なっているのは皆町の住人達だった。クレイが困惑しながら皆の前へ出ると、ニコルは彼を見上げてにっこりと笑った。

「そろそろお腹をすかせてる頃だと思ってね。今すぐ美味しい料理をたっくさん作ったげるからちょっと待っててね。リィンにソア、手伝っとくれ!」

ニコルは太めの身体を揺らして颯爽と廊下を歩いてゆき、顔を見合わせて笑いながらリィンとソアがその後をついて居室へと消えた。

クレイは呆然とそれを見送り、ニコルの主人にゆっくりと顔を向けた。

「ここはまだ危険です…。どうかお戻りください。皆さん方も…」

健康的に日焼けをしてがっしりとした身体の主人が、クレイに一歩詰め寄る。

「クレイ先生よ、俺達に何か出来る事はないのかい?家にいても気が気じゃないし、居ても立ってもいられなくってよ…。ラディス先生にはとってもお世話になってんだ。ここに集まったみーんな、気持ちはおんなじなんだよ」

語る主人の瞳は真剣そのものだった。

「そうだよ!どうして先生が捕まんなきゃなんないんだい。どうしてロンバート先生を襲った犯人にされなきゃいけないんだ」

「もし本当にラディス先生が犯人だとしたら、何でわざわざチェムカや弟まで巻き込む必要があるんだよ。そんなの矛盾してるじゃないか」

「全部でたらめに決まってる!ルーベンの野郎の仕業に決まってるんだ!」

集まった人々から怒りの声が上がる。町の人々の後ろに帝国軍の軍服を来た青年達もいる事にエンポリオは驚いた。

「私達も今回の件はどうにも腑に落ちない。…彼は最下層の重罪犯が投獄される牢に入っており、上官以外誰もそこへは近づけないの

だ。アルスレイン元帥様が戻られるまで、私達は上官の命に従うつもりはない」

「そうだ！こんな事をして国王様が黙っちゃいないさ」

「俺達で真犯人をとっ捕まえて、引き出しゃあ良いんだ！」

「皆さん、落ち着いてください」

口々に声を荒げ詰め寄る人々に、クレイは腰を折って深々と頭を下げた。じっと頭を下げ続ける彼を見て皆が言葉を飲み込み、辺りがしんと静まる。クレイはその態勢のまま語り始めた。

「…ありがとうございます。私達にはこんなにたくさんの味方がいたのですね…本当に、心強い。本当に…何倍もの力をいただいた思いです。ありがとうございます」

「クレイ先生…」

「ですが皆さんのそのお気持ちだけ、いただいておきます。どうか今はこらえてください。保安部隊の方々もどうか…。このままでは反乱や暴動が起きてしまいます。それこそが相手の企んでいるところでもあるのです。私達はそれに負けるわけにはいきません。賢明に、この場を乗り越えてゆくのです」

姿勢を戻し、クレイは一人一人に真剣なまなざしを向けて続ける。

「ラディス様は必ず、救い出します。どうかこの私を信じていただけませんか」

エンポリオは目の前に立つ、完璧な身なりのクレイを呆然と見つめていた。
その場で話し合い、住人達の代表として数名が診療所に残る事で何とか落ち着き、他の人々はそれぞれ来た道を引き返して行った。フェーマスがクレイの肩を叩いて居室へと歩き出し、クレイはほっと息をつく。

「クレイ…君ってば、そんなに逞しかったっけ?何だかラディスの分身を見ているようだったよ…」

エンポリオが紺色の瞳を丸く見開いてクレイを見やった。彼は苦笑をして頭をかく。

「身に余るお言葉です…。本当はふらふらで倒れてしまいそうですよ」

ラディスとはまた異なるやり方だったが、クレイは確かに人々の心を掴んでいたように思えた。

０８６：共存する光と闇２

その後、皆で昼食をとっていた時にジェイクがやって来て、チェムカの釈放を知らせてくれた。
知り合いの軍人から詳細を聞くと、拘束されている実行犯達はラディスが出頭した後で供述を一変させたのだという。
全てはあのラディスという男に脅迫されてやった事で、自分達にはロンバートを襲う理由はない、今までに言った証言も全てでたらめだと言うのだ。そしてチェムカという少女も家族を人質に取られて脅されているせいで真実が言えないのだと、あの男が捕まって本当に良かった、あの男こそが事件を画策した真犯人なのだ、どうかきちんと取り調べをして欲しい、とまで語ったという。
驚くべき事に帝国軍保安部隊はこの矛盾だらけであやしげな供述を信じ、実行犯達には減刑を、チェムカは被害者として立場を変えて釈放に至った。
要は事件の顛末や詳細など最初からあってないようなもので、ラディスを罪人に仕立て捕らえさえすれば、後は用済みでどうでも良いという事なのだ。いかにも皇族達が考えそうな、ずさんな策略である。

チェムカは自宅でリエズの町へゆく準備をしているという。それを聞いてリィンが会いに行くというので、エンポリオもついてゆく事にした。

◇◇◇◆

町の中央広場には十名前後の人々が集っていた。服装からして集まっている者達が富裕層であるのが分かる。エンポリオは遠くからそれに気付き、嫌な予感がしてリィンの小さな手を取った。

「こっちの道を行こう」

踵を返し迂回の道を歩き出した時、背後から大きな怒号が上がった。

「背徳者には極刑を！！」

「邪心の者に正義の制裁を下せ！！」

手の中にあるリィンの指先が強張る。ここを一時でも早く立ち去ろうと、エンポリオは早足になった。

「今こそ傲慢なる悪魔、ラディス・ハイゼルに死を！！」

どくん、と心臓が鳴った。額にじわりと汗をかいてリィンを見下ろす。

「…リィン」

「エンポリオ、僕は大丈夫だ」

リィンはエンポリオを見上げていた。うっすらと笑って、続ける。

「顔が真っ青だよ。僕よりあんたの方が参ってる」

「リィン…」

「おお、これはこれは。イリアス族を解放に導いた偉大なる英雄殿ではないですか。それに隣にいるのは貴族のエンポリオ殿…」

その声に振り返り、エンポリオは最悪の気分になる。そこにいたのはルーベン司教とその側近だった。薄い頭髪を油で撫でつけて、一点の汚れもない白の法衣に高価な≪清廉なる織布≫を首から下げ、聖職者然とした背の低い壮年が両手を広げて近づいてくる。

「今回はラディス先生があのような事になってしまって、本当に残念だ」

エンポリオがリィンをかばうように前に立ち、右手を差し出して来たルーベン司教と素早く握手を交わす。

「どちらへ行かれるのです?」

「…この先に用事がありましてね。ルーベン司教、あなたは?」

「私は広場で集会を行っている信者達を諫めに向かう途中です。困ったものです…。人は愚かな故に過ちを犯す時があります。それを赦す寛容さもリリーネ・シルラ様は教えてくださっている。彼らは罪人を赦す慈愛の心を学ばねばなりません。憎しみでは何も生まれない」

司教は大きなため息をつき、ぺらぺらと喋り続ける。

「まさかラディス先生があのような事件を起こすとは、私も本当に驚きました。彼とは様々な事で意見を交わしてきました。とても聡明な青年でしたが、少しばかり道徳心に欠ける部分があった。私はその事をもっと注意してやるべきでした。彼がこんな事件を起こす前に、私がもっと正しい道へと導いてやる事が出来ていれば…」

この狸め…。エンポリオは笑顔を浮かべて心の中で毒づいた。

「今は厳かに彼が自らの犯した罪を認めて、罰を受け入れてくれる事を願っています」

「…では僕らは失礼します」

「はい。ああ…イリアス族の英雄殿と是非とも握手をしたいのですが、よろしいですかな」

ルーベン司教が微笑みながらリィンに向かって右手を差し出す。エンポリオが口を開こうとしたが、リィンがするりと前に立って司教と握手を交わした。

「あなたも早く立ち直ってくれるよう祈っております。彼に騙されていた人々を救うのが私の使命とも思っていますから…」

「…ルーベン様」

リィンは真っ直ぐに相手を見つめている。司教はますます目を細めて笑顔を作った。

「あなたは本当に、ラディスがあの事件の犯人だと思っているのですか？」

「ええ…嘆かわしい事です」

司教は俯き加減で首をふり、心底辛そうな表情で言った。

「だとしたら、どうしてラディスがロンバート先生を襲うよう仕向けたと思うのですか？」

「さあ…そこまでは。私のような神に仕える人間には到底想像もつきません」

「あなたは嘘をついてる」

リィンは冷静な口調で続けた。

「あなたの言葉はまるで氷のようです。僕の心には響かない。その瞳も、その笑顔も作りものです。大勢の人々を騙せたとしても、本物にはかなわない。あなたの本質は、あまりにも現実とかけ離れている」

「なっ…！何と無礼な！司教様に向かってそのような口をっ！！」

リィンの言葉に、ルーベン司教の隣にいる側近が声を荒げた。司教はやんわりとそれを片手で制して、微笑を浮かべて呟く。

「可哀そうに…。あなたにもリリーネ・シルラ様の祝福が訪れる事を願います」

去ってゆく二人を無言で見送るリィンの小さな頭を、エンポリオはじっと見つめていた。

「ねえリィン…」

振り返ってこちらを見上げるリィン。その細い両腕を掴んで、顔を近づける。

「今、無理矢理にでもラディスを助け出す事も出来るんだよ？君の

『力』を使って牢を破ってさ、それで国王様やアルスレイン元帥が戻って来るまで、どこかに身を隠しておけば良いんだ」

ねえ君、分かってる?その強さはとても脆い…。少しでも風が吹けば、君は倒れてしまうよ。そんな君を見るのは耐えられない。

しかしリィンはゆるゆると首を横に振った。

「そんなの駄目だよ。意味がない。向こうはラディスを殺したくって、それればかりに夢中で隙だらけだ。今が向こうを叩くチャンスなんだって、僕にも分かってる」

「だけど…」

「僕は信じてる」

エンポリオは眉根を寄せてリィンをぎゅうと抱き締めた。折れてしまいそうな程、細い身体。柔らかな栗色の髪から僅かに残るミントハーブの香り。その髪に口付けて呟く。

「ああリィン…。ラディスは本当にひどい奴だ。どうして君にこんな思いをさせるんだろう。分かっていたのに、君を自由にさせずに捕まえてしまった…ひどすぎるよ…。僕なら愛する人をこんな目に遭わせる事なんて出来ない。こんな事ならばいっそ、気持ちを伝えずにいた方が良かったんだ…」

「…エンポリオ。あんたって優しいね」

腕の中でリィンは笑った。

「でもそれは違うんだ」

見下ろすと、すぐ近くにリィンの整った顔があった。意思のある赤茶の瞳。綺麗だ、と思う。

「辛い事があったら、何もなかった方が良かったと思うなんて間違ってる。僕は後悔してない。この先に何があったって、絶対後悔しない」

ああリィン…。君ってば、何て綺麗なんだ。…素敵だ。

「リィン…キスしても良い？」

リィンの頬がぷっとふくれた。

「…何で。いやだよ」

「はあ。残念」

０８７：共存する光と闇３

二人がチェムカの家に辿りつくと、母のセティナが出迎えてくれた。
居室に通されるとそこにパウラもいて、無言で会釈をする。

「チェムカは？」

「部屋にいるだ。荷物をまとめてるとこだと思うんだけど…」

「僕、見てきて良いかな？」

「ああ。馬車を待たせてるから呼んで来てくれっと助かるわ」

リエズの町に行った後の事を話し合うセティナとエンポリオ、パウラを置いて、リィンは部屋を出た。突き当たりにある木目の扉が薄く開いている。そこが確かチェムカの部屋だったはずだ。

チェムカを護ってくれ。

ラディスは最後にそう言った。
リィンはしっかりとその言葉を記憶していた。

「…チェムカ、いるの？」

薄く開いた扉を遠慮がちに押し開いて部屋をのぞいた。瞬間、時が止まった。
リィンの目に飛び込んできた光景は、心臓の動きを止めてしまう程に恐ろしいものだった。
チェムカの小さな背中が見えた。

白のブラウスに腰のしぼられた臙脂色のスカート。彼女の銀色の髪は今は三つ編みに編まれておらず、腰まで垂らされていた。チェムカの背はリィンとたいして変わらないはずなのに、リィンは彼女を見上げている。

チェムカはゆっくりと、先が輪になった縄に頭を通そうとしている…。

その縄は部屋の天井に渡されている柱から伸びていた。

彼女は、首を吊ろうとしている。

リィンの喉が息を吸い込み鋭く鳴った。

「チェムカッ！！」

叫んで走り込み、飛びつくようにしてチェムカの身体を両手で抱えた。そのまま二人はどうと部屋の床に転がる。

「チェムカ！？何でっ…どうして！！」

リィンは押し倒したチェムカの両腕を掴み、身体を起こした。手の中にある彼女の身体はぐにゃりとしていて力がない。チェムカはぼろぼろと泣いていた。眉が歪み瞳から涙が流れ、口元がわなないている。肩で息をしながら、チェムカは泣いていた。いつも愛嬌のある笑顔を作っていた顔は、これ以上にない程に辛い表情をしてリィンに向けられている。

「うう…ああ…。リ、リィン…ご、ごめんよお…ごめんっごめんよお…！

あ、あたすのせいで…先生が！ラディスせんせいがぁあ…」

リィンは頭から冷水を浴びせられたような衝撃に呼吸を忘れた。目を固く閉じて泣いているチェムカの腕を強く揺さぶる。

「違う！チェムカのせいじゃないっ」

「あたすのせいだもの…あたすがなんも、考えねえで、あんな事…！そのせいでロンバート先生だって大怪我したって！」

チェムカ…。

「何べんも何べんも、言ったんだあ…せんせいは関係ねえって…な、なのに…なのに、ちっとも聞いてくれなかった！！」

いつも明るいチェムカが泣いている。本当に辛そうな顔をして…。

「せ、せんせいになんかあったら…申し訳ねえ！！あたす…生きていかれねえっ！！うあぁぁ…」

小さな弟妹達の面倒を、嫌がらずに一生懸命に見ていたチェムカ。父を亡くして、だけれども精いっぱい毎日を生きていた。母と力を合わせて、いつも元気に笑って…。

その彼女が自ら死を選ぼうとする程傷つき絶望して、声を上げて泣いている…。

どうして。

どうしてこんな事が許されるのだろうか。この世界は一体、誰の為にあるんだ。

「…いやだ…」

リィンが低く呟く。

「いやだいやだいやだっ！！」

チェムカの力の抜けた身体を思い切り抱き締めて、叫んだ。

「死んじゃいやだよっ！チェムカ！！」

「ううう…う」

「チェムカ！」

泣かないで。

「僕が護るからっ…ぼくが、まもるから！」

リィンの頬に涙が伝う。

「お願いだっ！チェムカ…僕が護るから、戦うと言って…一緒に戦うと言って…。い、生きると…

生きると言って！！」

チェムカを固く抱き締めて、リィンは泣いた。

大好きな人が、また傷ついてしまった。

ああ…何故なんだろう。

僕はあの頃よりもずっと強くなったのに…。

剣も使えるようになったし、『力』を使うのだってうんと上手くなったのに…。

僕はまた…何も出来ずにいる。
まだ足りないんだ。

僕がもっと強ければ。僕にもっと力があれば…。

「お、お願いだ…生きると、いって…ぼく、ぼくが…まもる…もっと、強くなるからっ…」

両手からぽろぽろとすり抜けて、大事な人が消えてゆこうとする。
どうしたら良いの…。
どうしたら僕は、大事な人を護れるの…。

待って。いかないで。お願い。
もっと強くなるから。もっともっと頑張るから。だから…。

「リィ…ン…」

「ぼ、ぼくを置いていかないで…もういやだよ…いやだ、ああ…」

ああ、こんなに温かいのに。

「ううう…チェムカが、死ぬんなら…ぼくも、死ぬ…う、うあああ…」

チェムカは薄く目を開き、震えているリィンの背に腕を回した。また新たな涙がこぼれる。

「リィン…ああ…ごめんな…リィン…」

泣きながら抱き合う二人を、力強い温もりが包んだ。セティナが二人を抱き締めて揺すりながら声を上げる。

「馬鹿っ！！こ、こんな馬鹿な事っ！ラディス先生がもっと苦しむだろうが！」

「かあさん…」

「大丈夫だっ！ぜぇーったい大丈夫だべ！何とかなる！！何とかなっから！な！」

泣いている二人の少女を固く抱き締めて、セティナも目に涙を浮かべていた。戸口にはパウラがへたり込んで口元に手を当てて涙を流している。

エンポリオはその光景を、拳を固く握り締めながら見つめていた。

◇◇◇◆

リエズに向かう馬車の中でリィンは子守唄を歌っていた。隣にはチェムカがいて、繋いでいる手から優しい温もりが伝わる。

「リィンの歌…初めて聞いただ。優しいな…すっごくうまい」

「…僕も歌姫になれるかな」

「ふふ…なれるなれる」

二人でくすりと笑う。向かいに座るセティナも目を閉じたまま笑顔になった。

「リィン…」

チェムカが小さな声で呼んだ。

「うん？」

「ありがとうな…」

繋がれた手にきゅっと力がこもる。

「あたす…もうあんな事しねえから。あたす、もう大丈夫だから。…先生を、ラディス先生を…」

「…うん。分かった」

リィンがチェムカの手を力強く握り返した。

「チェムカ。少し寝た方が良いよ」

「うん…もう一度歌ってくれるけ？」

「うん」

リィンはゆっくりと息を吸い込み、また歌い始めた。

「風の声をきいて　道しるべはこころの中に…」

チェムカがリィンに甘えるように頭を寄せて目を閉じる。規則的に揺れる馬車の振動が心地良く柔らかな夢へといざなう。

「…あおい海原　とうめいな風　とおいあの子へ　このうたがきっ

と届くよう…」

きみへのあいを　抱いて静かに目をとじよう。

夜遅くチェムカと母のセティナはリエズの町に到着した。パウラも一緒に来るはずだったのだが、通いで働きに行っていた食堂に忘れ物をしてしまったと言い、一日遅れでリエズに向かう事になった。リィンは二人が無事に家族と再会したのを見届けてから、月明かりを頼りに馬を駆って帝都へと引き返した。

◇◇◆◆

「これはかなり危険な駆けだよ。だけど、これが一番有効だ。この作戦が成功すればルーベンを捕らえる事が出来るし、皇族のトワ妃だって追い詰める事が出来る」

金色のくせの強いふわふわとした髪が夕日を受けて輝く。ラディスが拘束されて二度目の日没。

エンポリオは人差し指を立てて皆の注目を集め、続けた。

「一度始めてしまったら引き返す事は出来ない。…良いね？」

居並ぶ全員が無言のままこっくりと頷く。

診療所の玄関口に佇む六人。ジェイクが隣に立つパウラに視線を向けて口を開いた。

「パウラさん、本当に良いのですね？」

痩せて尖った顎に暗い色の髪を一つに結わえたパウラが、緊張の面

持ちで頷く。

「私にやらせてください。だってこの役は私にしか出来ませんわ。その為に私はここに残ったのです」

「パウラさん…」

クレイが僅かに眉根を寄せてパウラを見つめると、彼女は少し笑って言った。

「そんな顔なさらないで。失礼なようですが…これは別にあの先生の為にするのではないのです。チェムカちゃんやレッジ君、セティナさん達家族の為にするのです。あんなに優しくて明るい家族、他に知りませんわ。あんなに心根の優しい人達が傷ついて涙を流すなんて…私は少しでもあの方達に恩返しがしたいのです。きっとうまくやってみせます」

「エンポリオ殿、あの男の方は…」

ソアの言葉にエンポリオは片目をつぶってみせた。

「ばっちりさ。ああいう性根の人間の方が、懐柔しやすい。説き伏せてお金を積めばイチコロだ」

「リィン、君も大丈夫かい？」

ジェイクがリィンに優しいまなざしを向けて聞いた。リィンはジェイクを見上げて、はい、と答え、パウラに顔を向ける。

「パウラさん。僕が必ずあなたを護ります」

パウラは目を細めて薄く微笑んだ。

「お願いします」

この日の朝、ロンバートの家を襲撃した犯人グループの残党が、北地区を支配する帝王シーカーによって捕らえられたという一報が入った。更に彼らはルーベン司教と親密な関係である事も自白しているという。一体どんな手を使って真実を自白させたかは分からないが、今現在彼らは帝国軍ではなくシーカーの手で拘束されている。帝国軍に渡してしまうと口を封じられる可能性があるからだ。しかし、これでも証拠としてはまだ甘い。この証言だけではルーベン司教もトワ妃も追い詰める事は出来ない。

それから丸一日かけて策を練り、話し合いを重ねて何度も確認の手順を踏んで、準備をした。大丈夫だ、きっと成功する。させてみせる。

ぴりりとした緊張感の中、皆が一言も声を発さずに深呼吸をする。目を閉じてジェイクが静かに言った。

「証明しよう。庶民である私達にも、絶望的な窮地を覆せる事が出来ると。知恵と勇気を持って、折れぬ心を見せつけよう」

それこそが、ラディスが僕に教えてくれた事。

諦めない。…絶対に。

０８８：憎しみ（前書き）

ご注意願います。
本文中、残酷な描写が含まれております。
御承知の上、お進みください。

０８８：憎しみ

薄暗く湿った通路を歩く。この場所は昼間でも日の光が一切入らない。前を歩く宮殿付きの軍人が慎重に足元をランプの灯で照らし、告げた。

「足元が滑りやすくなっておりますので、お気をつけて」

「分かっておる」

この地下牢には何度も足を運んでいる。時には一人で降りた事もある程だ。ルキリア帝国軍本部の建物は宮殿と隣り合わせに建てられており、地下の通路で双方が繋がっている。最下層に位置する地下牢はカイエリオスが国王の座についてからはあまり使われていない。その昔は随分と活躍したものだった。この牢獄はビーダ石で出来た特別なもので、数十年前には汚らわしい罪人のイリアス族共が入っていた事もある場所である。

トワは部屋着の上から厚手のストールを肩にかけ、込み上げる喜びに笑いを噛み殺した。何度この時を夢見た事だろうか…。通路の先に光が広がり始め、同時に生々しい音が耳に届いた。人間の身体を蹴り上げる重量感を伴う鈍い音。それに皮膚を鋭く切り裂くしなやかな鞭の音。

ああ…心地の良い音。何度聞いても心が震えてしまう。

煌々とランプの灯に照らされた最下層にある監獄。ビーダ石で造られた牢の中にいる男の姿を見て、高らかに笑い声を上げた。軍人達が拷問をしていた手を止め、トワに向き直り敬礼する。

「良い様だ。お前にはそのような姿がふさわしいぞ、ラディス」

硬質な鎖の音が響く。ラディスは両手を鎖で繋がれ、力無くむき出しの岩の地べたに横たわっていた。大きく咳き込みながら身体を起こし、壁を背にして荒い呼吸を繰り返す。鞭がブラウスを切り裂き、鍛え上げられた体躯には無数に鋭い切り傷がついて血が滲んでいる。右腕の傷口から真っ赤な血が流れており、彼の左目の辺りには大きな青痣が出来ていた。トワはラディスの顔を見て不機嫌になり声を荒げる。

「顔は傷つけるなと言ったであろう！お前達、下がっていろ！牢に私とラディスの二人だけに」

「は…。しかしトワ妃殿下、それは危険では…」

「ふん。これ程痛めつけたのだ。この男とて既に虫の息ではないか」

言いながら牢の門をくぐり、ラディスの前に立った。軍人から鞭を受け取る。

「どうだ？この鞭の味は…。施設にいた昔を思い出すであろう」

鞭の柄を持ち、彼の露わになった右胸にある烙印にぐいと押しつけた。目の前のボロ布のような男が低く呻く。

「くっ…ふふふ…。ああ、何とも言われぬ気分だ。何と無力な男…。ラディス、お前の人生の全てを私は奪ってやった。ふふっ…お前の母も、お前の皇族としての人生も。その幸せも！今まで築き上げて来たものも全て、たった今崩れ去ったぞ！この私にかなうとでも思っていたのか！この皇族の私に！？ああ…何と愚かな！お前は死ぬ

まで、私に全てを奪われる運命なのだっ！」

トワの甲高い笑い声が牢獄に響き渡る。狂気を含んだ彼女の声は、心からの歓喜に満ちている。

「憎いか、ラディス。この私が憎いであろう！？」

声を発しない彼の髪を掴んで顔を上げさせ、笑顔のままラディスの顔をのぞきこんだ。ラディスは薄く目を開いてトワを見つめる。その男の顔を見た途端、どす黒い憎悪の感情が一気に吹きこぼれ、トワの表情が醜く歪む。身体を離し、思い切り鞭を振り下ろした。

「その顔！あの薄汚い女狐そっくりだ！あの売女！恥を知らぬ毒虫のようなおんなっ！！汚らわしい！」

何度も鞭を振り下ろし、ラディスが地べたに両手をついてうつ伏せに倒れ込んだ。トワは肩で息をし、乱れた髪を片手で押さえつけてまた口元をほころばせる。

「お前の顔には後でじっくり仕置きをしてやる。焼きごてで醜い跡をつけてやろうか、それとも皮膚を剥いでやろうか…ふふふ…」

ゆっくりと身体を起こしラディスがトワを見上げる。その男の無残な姿を見て、またこらえ切れぬ程の喜悦が全身を駆け巡った。

まだだ…。もっともっと、この男を痛めつけたい。

絶望して涙を流し、立ち上がれなくなるまでに打ちのめしたい。

「革命だと？馬鹿馬鹿しい。お前が英雄！？冗談にも程がある。お前は薄汚い罪人の子、その皇族の≪黄金の青い目≫を盗んだ卑しい

下賤の子供だ！お前が今までして来た事など全て無意味だ！全てお前のせいなのだ、ラディス。この悪魔め…。
お前がこの帝都に来なければ、何事もなく平穏な生活を皆が送ってこれたのだ。そうだろう？お前に関わったばかりに、あの町娘は罪人にされたのだぞ？」

にっこりと笑いながらラディスを見下ろす。その目は冷ややかで冷酷な炎を宿している。

「それにあの信心深い男…。ルーベンをあそこまで追い詰めて地獄に落としたのは他でもない、ラディス、お前だ。くっくくく…。あの男はお前を殺す事が出来れば何でも協力すると言ったぞ？あの帝都の良心と言われた大司教が！あやつをそこまで狂わせたのはお前なのだ！」

目の前で切れ切れに息をする男が苦痛の表情を浮かべた。

さあ、苦しめ。もっと。
私の受けた苦しみはそれよりも遥かに重い。まだまだだ…。

「…トワよ…あなたの、言うとおりだ」

ラディスが掠れた声で言葉を発した。

「あなたはいつでも俺の全てを、何の躊躇もなく簡単に…奪ってゆく…大事なものも人も、全て…」

「あっははは！良い気味だ！！」

「だが…俺は、あなたを憎んではいない」

ぴくりとこめかみが脈打つ。ぼろぼろに傷ついて血だらけの男は、真っ直ぐにこちらを見上げている。

「あなたは、誰にも愛されなかった哀れな女性だ…」

胸の中に重く醜い何かが生まれ、蠢いた。

「な…に…」

「俺は何一つ、後悔していない。たとえ万人に憎まれたとしても、同じ事をして来ただろう…」

滅多打ちに叩きのめして全てを奪ったはずなのに、目の前の男の瞳にゆらゆらと力が戻ってきている。

何故だ…。

「トワよ…あなたが俺を憎み続けてきた間、俺の時はとっくに先へ行った。成長したんだよ。…もう何の力もない子供ではない。あなたの時は、いまだに止まったまま今を生きていない。あの頃に魂を置いてきたままだ…。

俺の母親は死んで二十年以上も経ってるんだぜ…グランハートだって、もう既にこの世にいない。あなたが殺したんだろう？しかしあなたは、先に進めずにいる。…これが哀れでなくて何と言うんだ」

「黙れ！負け惜しみを言いおって！」

びしりと鞭を振り下ろす。

言い知れぬ恐怖が、ひたひたと背後に迫ってきている。胸の中で生まれた醜い何かが、泣き声を上げている…。

もう一度鞭を振り上げようとした時、鎖で繋がれたままのラディスの両手が動き、その先端を地面に押さえ動きを封じられた。トワは驚き、柄を手放してしまった。よろりと一歩後ずさる。

「…俺を殺したところでもうどうにもならんぞ。既に流れは本流になった。俺を消しても、また同じように志を持った青年が立ち上がるだろう。もうあなたの時代は終わったんだ、ルキリア皇族の時代は終わる。今更あがいたところで、どうにもならない」

「な…何を…」

ラディスの目が、ぎらぎらと力に満ちてゆく。

ぞっとした。

鎖で繋がれ血を流し、息も絶え絶えの男が口元を上げて笑ったのだ。

トワは恐怖に震え上がった。

ああ…この目はどこかで見た事がある。その時も、戦慄した事を覚えている。

これでもかと打ちのめして手足を折っても、その目から光を奪えなかった。命乞いをしろと命令しても、その男は屈しなかった。ルキリア族に歯向かい奴隷解放を叫び続けた、紅い目をしたイリアス族の男だった。

何故だ。何故、同じ目をしている…。

「民衆はそれ程愚かではないんだよ、トワ。時代は変わる」

「だ…黙れ…」

「これからはルキリア皇族だという理由だけで権力を持つ事は許されない。本当に力のある者が政治の中心に立って国を動かしていく

事になる。そこに種族の隔たりなどあり得ない」

「黙れ黙れ黙れッ！！この下賤がッ！」

「今までどんなに優秀でも、ルキリア族でないというだけで見向きもされなかった者達に光が当てられるだろう。アルム族でも混血種でも、実力が正しく認められる世界になる。今はそうでなかったとしても、その子供の世代では必ず、実現する」

「うるさいッッ！！」

トワは片足でラディスの右腕を蹴飛ばした。生々しい傷口を抉るように踏みつけると、彼は激痛に声を上げて身体をのけぞらせた。肩で息をしながら素早く足を戻して背後を振り返る。軍人達が凍りついたようにその場に突っ立っている。その中で一番若い軍人に目を向けて、言い放った。

「お前、この男の足を折れ」

あまりの突然の事に軍人は間抜けな顔でトワを凝視している。

「早くしないか！」

苛々して叱りつけると、びくりと肩を震わせて軍人の顔に恐怖が浮かんだ。だんだんと顔色を失ってゆく。

「あ、足を…ですか」

トワは牢を出て、壁に立てかけてある鞘に入った剣を軍人の胸元にどんと押し付ける。それだけで若い軍人はよろりと足元をふらつか

せた。軍服にはそれなりに地位のある勲章が付いている。苛々が募る。

「この私の命令が聞けぬというのか！？お前もこの男のようになりたいかっ」

「ええい、この臆病者が！トワ妃殿下、私がやります」

声に振り返ると、大きな腹をして鼻の下に短い髭を生やしたペインが憮然とした表情でこちらにやってくるのが見えた。彼は若い軍人からひったくるようにして剣を奪うと、トワに向き直って敬礼する。

「おお…ペインよ、今までどこに居た？」

「は。町を巡回に行っておりまして…不在をお詫び申し上げます」

ペインはそのまま牢の門をくぐり、横たわっているラディスの前に仁王立ちする。

「ラディス、お前もとうとうこれで終わりだ！」

「…ペイン副指令。あなたの判断は、間違っていない…」

ラディスが小さく呟いた。

ペインは無言で、一度大きく息を吸った。両手で鞘に入った剣を振り上げ、彼の脛めがけて躊躇せず思い切り振り下ろした。

トワの狂気じみた甲高い笑い声が、地下牢の壁に無数に跳ね返り響き渡った。

０８９：尊大なる自尊心（前書き）

ご注意願います。
本文中、残酷な描写が含まれております。
御承知の上、お進みください。

０８９：尊大なる自尊心

いまだに自らが決断した答えに迷っていた。本当にこれで良いのだろうか…。

ペインには自信がなかった。

とても室内にいる気分ではない。近くにいた部下に巡回に行くと言い置いて本部を後にした。

太陽は西に傾いている。本部の表には相変わらず北地区の女達が座り込みを続けていた。ペインはそれを横目に見て顔を歪める。あの医者の釈放を訴えて、ここへ送致された日からいくら追い払っても水を頭からかぶせようとも、女達は頑として動こうとしない。もう二日目になる。そろそろ軍を動かして全員連行せねばならんだろう。全く、面倒な事だ。

座り込みを続ける娼婦達を目にした途端、また気持ちが一層沈んだ。国王陛下も元帥も居ない今、自分が帝国軍の全権を担っている。しかしそれはまやかしのような力だ。どうせ数日後にはまた二番目の地位に下がらねばならない。その上皇族で元王妃のトワ妃が何かと自分に指図をしてくる。狙いはラディスであるというのは軍内部では周知の事実だ。あの男にそれ程に執着するのは、あれが元国王の外腹の子だからだ。全く、面倒な話だ。

そんな私怨に何故自分が協力せねばならんのか。皇族の命令は絶対だ。逆らえば首が飛ぶ。それは比喩ではなく、実際に首が飛ばされる可能性も含んでいる。

ペインは皇族を嫌っていた。

地道に努力を重ねて出世の道を歩んできた前途を、アルスレインという青二才が永遠に閉ざしてしまったのだ。

何の努力もせず苦労も挫折も知らず、自分の半分もまだ生きていない程の若い青年が、突然に元帥として君臨したのだ。ただ一つ、単

に国王の子供だという理由だけで。皇族だという理由だけで、自分はあの若造に頭を垂れねばならない。これ程の屈辱が他にあろうか！能なしの皇族達には嫌気が差す。あんな者達よりも数倍も自分の方が優れているのだ。

しかし…。

やはりこの国では、この世界では、どうあがこうがルキリア皇族には勝てないのだ。

そして自分は、その皇族に良いように使われて捨てられる駒にすぎない。

ラディスは阿呆だ。いずれこうなるだろうとは思っていた。あの絶対的な権力に勝つ術などない。自分はそれを利用してすり寄って生きているのだ。しかし、こんな立場にいつまでも甘んじているつもりもない。何とかして足元をすくい、のし上がってやるつもりだ。自分にはそれだけの器がある。

だからこそ、あの貴族の提案に乗ってやったのだ。

町を歩いていても気持ちが晴れず、本部へと引き返した。額に噴き出た汗を拭いて、部屋に入ろうとしたところで部下が声をかけてきた。

「ペイン副指令殿。先程、トワ妃殿下がお出ましになり最下層の監獄へ向かわれたようです」

「…全く。また勝手な事を」

毒づいて地下へと足を向ける。

先が闇に溶ける階段を降りてゆくと、声が聞こえて来た。

「黙れ！負け惜しみを言いおって！」

トワ妃の興奮した声が響き、鞭の音がそれに続く。ペインは壁を背にしてその場に立ち止まった。

「…俺を殺したところでもうどうにもならんぞ。既に流れは本流になった。俺を消しても、また同じように志を持った青年が立ち上がるだろう。もうあなたの時代は終わったんだ、ルキリア皇族の時代は終わる。今更あがいたところで、どうにもならない」

ラディスの思いのほか冷静な声がしてペインは驚いた。あの男…まだ戦うつもりか。

「な…何を…」

「民衆はそれ程愚かではないんだよ、トワ。時代は変わる」

「だ…黙れ…」

「これからはルキリア皇族だという理由だけで権力を持つ事は許されない。本当に力のある者が政治の中心に立って国を動かしていく事になる。そこに種族の隔たりなどあり得ない」

ペインは息を殺して聞き入りながら、じっとりと手に汗をかいていた。

「黙れ黙れッ！！この下賤がッ！」

「今までどんなに優秀でも、ルキリア族でないというだけで見向きもされなかった者達に光が当てられるだろう。アルム族でも混血種

でも、実力が正しく認められる世界になる。今はそうでなかったとしても、その子供の世代では必ず、実現する」

「うるさいッッ！！」

実力が正しく認められる世界。自信に満ち溢れた声がそう言った。

…子供の世代では必ず実現する。

「お前、この男の足を折れ」

ペインははっとして壁から顔だけを出し、先に目を凝らした。

「早くしないか！」

「あ、足を…ですか」

牢の前にトワ妃が佇んでおり、そのすぐ傍に若い軍人がいる。その青年を見て、息をのんだ。

「この私の命令が聞けぬというのか！？お前もこの男のようになりたいかっ」

「ええい、この臆病者が！トワ妃殿下、私がやります」

咄嗟に声を上げてずんずんと突き進んでいった。若い軍人はペインの姿を見て、安堵したような申し訳ないような表情になる。ペインは込み上げる怒りを抑え剣を奪ってトワ妃に敬礼した。

お前などに手折られてなるものか。この男は、私よりも優秀だ。あ

のアルスレインよりもずっと！

「おお…ペインよ、今までどこに居た？」

お前はきっとこの軍人の名すら知らないだろう。お前にとったら駒の一つにすぎぬだろう。
しかし、これは私の全て。

「は。町を巡回に行っておりまして…不在をお詫び申し上げます」

これは私の息子。これは私のたった一つの希望なのだ。
トワ妃よ…お前には分かるまい。

ペインの全身から、燃え上がるような怒りが噴出する。その勢いのまま牢の門をくぐり、瀕死で横たわるラディスの前に立った。
何と無様な…。何故こんな所で横たわっているのだ！？
実力が正しく認められる世界を、お前が作るのではないのか！

「ラディス、お前もとうとうこれで終わりだ！」

彼はゆっくりと視線をこちらに向けて、呟いた。

「…ペイン副指令。あなたの判断は、間違っていない…」

心臓を貫かれたような衝撃が走った。
この男が知るはずもない。しかしその言葉は、今一番自分が欲していたものだった。

心が、定まった。

一度大きく息を吸い込み、剣を振り上げた。

０９０：駆け引き

深呼吸を数回繰り返し、扉にある呼び鈴を鳴らした。外には半分に欠けた月がかかっている。講堂の正面入り口ではなく、その横に建つ四角い建物。その玄関に明かりが灯った。

大丈夫、うまくやれるわ…。

パウラは脳裏に愛しい娘の姿を思い浮かべて薄く微笑んだ。たった四年でこの世を去った、何よりも大事な娘。ソフィ…。力を貸してね。

扉が開いて従者が姿を現す。

「遅くに失礼致します。私…どうしてもルーベン司教様に会ってお話ししたい事があるのです…。パウラ・ビレントとお伝えしたら分かると思います」

玄関口で少し待たされてから室内に通された。ランプの灯に照らされた細長い通路を歩き、突き当たりの部屋に案内される。

「これはこれは…。パウラさん、どうしました?」

書斎らしきその部屋の中央にある机の前に、ルーベン司教は書物を手にこちらを振り返っていた。目がなくなってしまったかのような笑みを湛えた司教はいつもの法衣を着ておらず、白のブラウスに茶のズボンという楽な格好だった。パウラは深々とお辞儀をして口を開く。

「夜分に失礼致します。ルーベン司教様、いつぞやは大変にお世話になりました」

司教は一つ頷いて両手を広げる。

「私は何も。リリーネ様の思し召しです。あなたが娘さんを亡くされた深い悲しみから立ち直ってくれて本当に良かった。さあどうぞ、おかけ下さい」

応接用の椅子に腰をかけると、司教も目の前にある椅子に腰を下ろした。

パウラは以前、講堂を訪れ彼の説法を聞いていた。それは娘を亡くし、セティナの家の近所へ越したばかりの頃だ。何度か高い料金を払ってルーベン司教に教えを請うた事もある。その頃から司教はパウラの境遇に興味を持っていたようで、茶会に誘われた事もあった程だ。それはあのロンバートの病院で娘を亡くしたという事実があるからだろう。一度誘われるままその茶会に出たが、集っていたのはロンバート医師やラディスを批判する者達ばかりだった。それからは子供達の面倒を見るようになり、そうなると忙しくてだんだんと足が遠のいていった。

「…ルーベン司教様、今回のレニツィ病院での事件の事で、ご相談があるのですが」

パウラは緊張で震えそうになる唇を舌で濡らして続ける。

「私のお世話になっているトルメさんのお嬢さんが、大変な事になって…」

「ああ、その事は聞いています。何とも痛ましい事件でしたね…。そのお嬢さんも、ラディス先生に脅されていたとか…本当に恐ろしい事だ」

司教は眉根を寄せて、辛そうな表情で首を振った。

「はい…。それで、あの、私…見てしまったんです」

ぎゅっと両手を握り締める。ここから、司教を追い詰めねば。パウラは意を決して顔を上げ、ルーベン司教を真正面から見つめて言った。

「チェムカちゃんは、レッジ君…弟を助ける為にあんな事をしたんです。私、聞いたんです…。小さな姉弟が話し合っていたのを…」

司教は細い目を大きく見開いて身を乗り出す。

「ほう。それは一体どういう事でしょう」

パウラはじっと彼の両目を見つめ、小さな声で語り出した。

「どうやらレッジ君は、町の良くない人達に脅されていたらしいんです。その人達に家畜を絞めて持ってこいと言われていたんです。私、それから心配でチェムカちゃんの後を追いかけました」

司教は心の底から心配しているような顔で頷いて、先を促す。

「そうしたら、チェムカちゃんが男に家畜の死骸を手渡すところを見てしまったんです」

「その犯人達も既に捕まっていますよ、パウラさん。あれもラディス先生が脅して使っていた者達だとか…。しかしもう大丈夫です。安心してください」

パウラは首を強く横に振って俯いたまま言葉を絞り出す。

「ち、違うんですっ。私、そこで男の顔を見ていました」

「…ほう」

「ど、どこかで見たような気がして、何だかもやもやとして…。でもそんながらの悪い人と関わりがあるわけじゃないし…。ずっとどこで見たのだろうと思っていたんです。それでつい最近、その男を前にどこで見たのか、思い出したんです…」

下からすくい上げるように、おそるおそるルーベン司教に目を向けた。

お願い…うまくいって。

「前にルーベン司教様に誘っていただいた、あのお茶会で見かけたんですっ。

…ルーベン司教様、あの男とどこでお知り合いになったのですか！」

ルーベン司教は口を開いて驚愕し、片手を自らの胸に添えて声を上げた。

「な、何と言う事だ…。では私も狙われていたという事でしょうか」

パウラの口ががくん、と開いた。

「…え？」

「犯人の男が茶会に紛れ込んでいたという事でしょう！？ああ、何と恐ろしい。私はリリーネ様に護られたのでしょうか…」

「あ、あの、ルーベン司教様。ですがあのお茶会は、司教様に直接お誘いいただいた方しか出席できないものだとお聞きしました…」

「ええ、ええ。そうですとも。しかし…そんな恐ろしい男が入り込んでいようとは私も気付きませんでした。パウラさん、その事も帝国軍に是非とも証言していただきたい。彼が以前から恐ろしい計画を練っていたという証拠になります」

パウラは愕然として目の前の壮年を凝視した。相手はいたわるようなまなざしを向けている。

失敗した…。

司教は、何一つ動揺さえしていない。こんな言葉では彼を狼狽させる事すら出来なかったのだ。自分が提案したこの作戦が、こうもあっさりと失敗してしまうとは。相手の方が数段上手で、抜け目なく、厚顔だ。

駄目だ。

何か考えて…。一つでも良い。この仮面が剥がれ落ちるような言葉を…。

「あまり遅くなると危険です、もうお帰りになった方がよろしいでしょう。この事は私からも軍に通報しておきます。何も心配いりま

せんよ、パウラさん」

言いながらルーベン司教が席を立ってしまった。パウラは何とかこの場を引き延ばそうと必死に考えて口を開いた。

「で、でもどうしてチェムカちゃんに家畜の死骸なんてものをわざわざ持って来させるように仕向けたのでしょうか。彼女が誰かに知らせる可能性もあったっていうのに…。あのラディスという医者が犯人達を脅していたなら、全てを犯人達にさせれば良かったと思うんです。わざわざチェムカちゃんを、弟を使ってまで巻き込む必要があったのでしょうか!?」

司教は背を向けて書棚に本を戻して首を振る。

「さあ…私にはさっぱり…。もしかしたら、単にそのお嬢さんを苦しめたかっただけなのではないですか?豚を絞める、なんていう作業はあの年頃の娘さんには酷な事でしょう」

どきりとひと際大きく鼓動が鳴った。口元が震え息が止まりそうになりながら、ゆっくりと椅子から立ち上がる。

「あ…」

ルーベン司教がパウラの異変に気付き彼女に近寄ってゆく。

「どうしました?どこかお加減が良くないのですか?」

「…司教様」

パウラの痩せた肩にそっと手を乗せて、司教は目を細めて慈愛の笑

顔を作る。

「どうして、豚だと…？」

「…はい？」

パウラは真っ直ぐに彼の顔を見上げる。

「どうして豚だとおっしゃったのですか？チェムカちゃんが犯人に渡したのは…鶏です」

すっと司教の顔から表情が消えた。

「確かに犯人の指定は豚の死骸でした。でもやっぱりチェムカちゃんには豚を絞める事は出来なかったんです。一度も経験がなかったから…。だから鶏を絞めて持って行ったんです。家畜を豚だと指定された事実は、弟のレッジ君とチェムカちゃんと、犯人達しか知らないはず…。世間では家畜の死骸としか発表されなかったんですもの…。

…だからその当事者から直接話を聞かなければその事は分からないんです。チェムカちゃんは軍に捕まった後誰とも面会を許されなかった。弟のレッジ君もすぐにこの帝都を離れているから、二人からは話が聞けないはず…」

「…ああ、はは。その事ですか。私は知り合いの保安部隊の方から聞いたのですよ。もちろん本当は鶏の死骸だって事も知っていました。どうしてだろうな、つい豚と言ってしまった。家畜というと、真っ先にそれを思い出すからでしょうね」

そう語る司教の表情は既に普段の柔和な笑顔に戻っていた。パウラ

はそれを見てまた落胆する。
ああ、あともう少しだったのに…。

「おお、そうだ。すみません、まだお茶もお出ししていなかった。申し訳ない。今すぐご用意しますよ」

「い、いえ。私はもう…」

パウラの肩に置かれている手に力がこもる。はっとして目を上げた。ルーベン司教はにゅうと恐ろしいくらいに、笑っている。パウラの心は震え上がり、同時にほっと安堵した。

うまく、いった…。

「そうおっしゃらずに…さあお座りになって。…おおい！お茶をお持ちして！いつものではなくて、特別に取り寄せたお茶だ！」

ルーベン司教は扉の外に向かって大声を上げて、有無を言わさずにパウラを椅子に座らせる。

「あの…」

彼は普段通りの笑顔のまま。その口が細く横に開いて声がもれた。

「私はリリーネ・シルラの使徒。お前のような貧しい女が、この私を脅かせると思うな」

どかどかと荒々しい靴音が響いて、乱暴に扉が開かれる。目を血走らせた男が三人、それぞれに剣を持って部屋に入って来た。パウラは恐怖に顔を引きつらせて悲鳴を上げる。

「この女を片付けろ」

ルーベン司教は低くそれだけ告げると、書棚からまた新たな一冊を取り出す。

「ル、ルーベン司教様！」

パウラは両脇からがしりと掴まれて動きを封じられ、また悲鳴を上げた。目の前に男が立ちはだかる。

「パウラさん、あなたは穢れている。穢れは粛清されなければならない。愛しい娘さんの元へ送ってあげましょう。ああ、お前達。血はあまり流れないようにしてくれよ、書斎を汚い血で汚したくはない」

「いやああ！」

「殺せ」

男が銀色に光る切っ先をパウラに向かって振り上げる。そこで、時が止まった。

「何をしている！早く殺せっ」

ルーベン司教は顔を上げてその光景を見つめた。目の前の男三人が、まるで魔法をかけられたみたいに動かない。一人は剣を振り上げたままで、他の二人もパウラの腕を掴んだまま目を大きく見開いて微動だにしない。

「う、動かな、い…」

「何っ」

「そこまでだ！ルーベン！」

がなり声が響き、帝国軍の軍人達が室内へどっとなだれ込んできた。抵抗する間もなく、男達が軍人によって拘束される。

「現行犯だ。言い逃れはできまい」

こちらにゆっくりと足を運ぶ、紺色の軍服に身を包んだ中年の男。でっぷりと太った腹がせり出しているその男をものすごい形相で睨みつけ、ルーベン司教は地獄の底から湧き上がるような声を張り上げた。

「お、おのれ…！ペインッ！！裏切ったな！」

ペイン副指令の背後から見知った人間達が姿を現す。ルーベン司教は縋る思いで叫んだ。

「こ、これは罠だっ！私は嵌められたんだ！！この私を拘束するつもりか！？」

「ルーベン司教…あなたには既に味方はいませんよ」

ルキリア貴族のエンポリオが静かに告げた。

「皇族達は決してあなたを庇いはしないでしょう。そればかりか、今回の事は全てあなたが企んで皆を騙したのだと正式な書簡で通達

してきますよ?だってあなたは司教とはいえ一介の町人。ルキリア族ではないのですから」

ルーベン司教は愕然とし、わなわなと身体を震わせて絶句した。普段の神々しいまでの落ち着いた雰囲気は、欠片も残っていない。

「審議が開かれるまで、あなたの身柄はこちらで保護させていただきます。…正直に真実を述べる事です。ルキリア皇族はあなたを助けたりはしませんからね…」

放心したままのルーベン司教の両腕を軍人達が押さえ、ゆっくりと歩き出す。リィンはパウラの肩を抱いて道を譲った。その時、司教の狂気に歪んだ目がリィンを捕らえ唸り声を上げた。

「許さんっ…許さんぞ!!この化物めっ!神に仇なす者!私は神聖なる神の使徒だっ!この私にこのような屈辱を与えて無事で済むと思うな!あの男…ラディスとてもう死んでいるぞ!!

そうだ、もうとっくに死んでいる!ひどい拷問を受けて既に事切れているわっ!!」

リィンの耳に、ルーベン司教の狂った怒声がいつまでも響いていた。

０９１：闇夜

「ルーベン司教も保身の為に真実を述べるはずだ。そうすればトワ妃の企みも世に暴かれる。うまくいけばアルスレイン元帥を失脚させようとしている皇族達にも追求の手を伸ばせるかもね」

「ええ…。しかし審議が開かれるまでのこの時間の方が危険ですね…。追い詰められたトワ妃が何をしでかすか分かりません」

「そこはペイン副指令が本部に詰めていてくれるから大丈夫じゃないかなあ…」

「ですが相手は皇族ですから…」

ソアは神妙な面持ちで語り合うクレイとエンポリオに茶を出してから居室を静かに退出した。

その後パウラは審議が開かれるまで安全な場所に身を隠す事になり、請け負ったジェイクと共に、診療所を後にした。もう既に真夜中だ。この夜が明ければルキリア国の法に則って審議が開かれる予定である。審議要請の書簡が提出されてから三日以内に審議を開かなければならないという法律がある。しかしそれさえも不安の要素が十分に残っているのだ。何故なら相手は皇族、その法を統べる者達だ。簡単に世界の秩序さえ覆せる力を持っている。

それに明日になれば、ラディスが拘束されてから既に三日が経過する事になる。≪早馬≫もザイナス国に到着している頃だろう。もしかしたら国王達は自国へ向けての帰途についているかも知れない。

やっと黒幕であるルーベン司教の尻尾を捕らえ、こちら側の勝利が決まったというのに心は晴れないままだ。これによって彼の信者や

支持者達にも何かしらの判決が下るだろう。そうなればラディスとロンバートが進めて来た新しい診療システムの構築と医療改革に、大きな障害がなくなる。とても晴れやかな前途になるわけなのだ。しかしクレイもエンポリオも、長年敵対してきたあの司教を捕らえる事が出来たというのに少しも浮かれる事もなく、ずっと難しい顔をしたままだった。

皆恐ろしくて口には出さない。

けれどその可能性は打ち消しても打ち消しても、黒い靄のように心を覆ってゆくのだ。

ラディスが既にこの世にはいないのではないか、という可能性…。

ソアはため息をついて二階へ続く階段を昇り、リィンが眠っている寝室の扉をそっと開いた。ランプの灯が落ちている室内は予想に反して青白く光っていた。見ると窓が大きく開いていて月明かりが室内を照らしている。

「…リィン？」

ゆっくりとベッドに近づいてゆく。そこに、リィンの姿はなかった。

◇◇◇◆

ウィト・ネールが眼鏡を外し、眉間を押さえて唸る。

「まさかこんな事になるとは…。あの権力に弱い男が寝返るとは思わなかった…ペインめ」

「そんな悠長な事を言っている場合ではないぞっ！我々が絡んでいた事が世に出れば、我々とて追放だけでは済まされんッ」

ワイゼフが唾を飛ばし身を乗り出して、テーブルを囲む者達の顔に視線を巡らせる。

「速やかに事後の処理をしなくては…。罪人か労働者の中から何人かを引っ張ってこさせよう」

ガズナイルが苦虫を噛み潰したような顔で呟き、それに首を振ってレイベンロウが口を開いた。

「審議でルーベンが自白をすれば終わりです。工作は無意味ですよ…」

「ああ！何だってこんな事にっ。これも元はと言えばトワ妃殿下、あなたの提案に乗ってしまったからだ！！私だって今回の策には疑問があったのだっ！それをあなたが強引に押し進めたのですよ！」

太った指先をトワに突きつけてドムクスが声を張り上げた。その場の全員が無言でトワを見つめる。重苦しい沈黙を破るかのように、トワが顔をひきつらせて怒鳴った。

「ドムクスっ。言葉を慎め！私を誰だと思っている！お前とて乗り気だったではないかっ！」

「…いかがなされるおつもりか、トワ妃殿下」

「怖気づきおって！やっとあの男を捕らえたのだぞ！？今を逃せばもう奴を捕らえる事はできぬ！殺すしかないのだ、そうであろう！？」

まくしたてるトワを冷ややかに一瞥して、レイベンロウが席を立った。

「もうゲームオーバーです。私は降りますよ…今回の事はなかなか勉強になった」

それを合図にがたがたと椅子を鳴らして、ワイゼフとドムクスの二人が去って行った。トワは呆然とその後ろ姿を見送る。

「…トワ妃殿下、あの男に執着するのもそろそろおやめになった方がよろしいでしょう」

ガズナイルが低く呟き、立ち上がった。

「な…んだと…？」

トワのこめかみには青筋が浮かび、力が入りすぎた両手が小刻みに震えている。

「何十年も昔の話です」

大きな広間にある、縦長のテーブル席にトワとウィト・ネールだけが残された。乱れた豪華な椅子が沈黙で闇を深くする。

「私は老い先短い老人です。トワ妃殿下…お供いたします」

ウィト・ネールがぼそりと呟きを落とした。

「ノランド！」

トワはウィト・ネールの言葉には反応せず、背後に控えていた軍人の名を叫んだ。壁際に佇んでいた紺色の軍服を来た男が返事をしてトワの背後に立つ。背が高く大柄な軍人は目がぎょろりと大きく、口元は不気味に微笑んでいた。狡猾、という言葉がふさわしい表情。

「ついて来い」

短く告げ、トワが席を立ち軍人を連れて広間を後にした。
無機質な大広間にたった一人残された老人は、力無く椅子に背を凭れて両手で顔を覆った。

◇◇◆◆

茂みの中から裏口の門扉を守る軍人にじっと視線を向ける。ゆっくりと静かに、相手の喉元を睨みつけて『力』を発動させ圧を加えてゆく。加減を間違えると相手を絞め殺してしまうので慎重にしなくてはならない。武装をした軍人がよろりと傾いて、どうと地面に崩れ落ちた。もう一人、門扉を守っていた軍人が驚いて同僚の元へ駆け寄る。気絶して倒れている相手に呼びかけているところへ素早く駆け寄り、無防備な脇腹に剣の鞘でつきを食らわせる。相手は、ぐう、と声を出しばったりと倒れた。
リィンは短く息を吐き出して目の前の扉に深紅の瞳を向ける。ぱきり、と小さな音を立てて扉が開かれ、するりと身体を滑り込ませた。イリアス族の『力』があれば、牢破りなど簡単な事だ。リィンは難なく帝国軍本部に侵入した。

もうこれ以上、じっとなんかしていられない。もう耐えられない。
…もう、良いだろ？

リィンは浅くなりがちな呼吸を整えて暗闇にじっと目を凝らす。

僕には耐えられない。

ラディス。あんたを犠牲にしてまで、他に何を求めろっていうんだ。

それなら他のものなんか全部、いらないんだ…。

薄暗い通路を進み、詰所にいた軍人達も気絶させて壁にかかっていた鍵束を持つ。最下層の牢獄はビーダ石で出来た特別な牢だと聞いた。その牢へと続く暗い階段を下りる。空気が冷えていて壁に手をつくとひやりとして湿っていた。先にぼんやりと光の輪が見え始め、ためらわずその光の中へと突き進んだ。牢を守っていた三人の軍人が突如現れたリィンの姿を見て驚き、一瞬動きが遅れる。リィンは間髪入れずに『力』を放って相手を吹き飛ばした。軍人達が気を失っている事を確認して、牢へと駆け寄り震える手で鍵を掴んで施錠を開く。視界の隅に、壁にもたれかかった彼の姿が見えて心臓が止まりそうになった。

「ラディスッ」

092：命

ラディスの傍にひざまづき、じっと見つめた。血だらけだった。薄茶色の髪も美しい顔も赤黒く汚れていて、身体中に無数の切り傷と打撲の跡。そのどれもが生々しく血を滲ませている。力無く垂れた両手には鎖が巻き付き、右腕の傷口は完全に開いてしまっていた。リィンは震える心を押さえつけて、じっと息を殺す。彼の薄い唇から僅かな呼吸音を聞き、やっと息を継いだ。

「ラディス…」

リィンの指先が震えながら宙をさまよう。彼に触れたいのだが、どこに触れたら良いのか分からない程に痛めつけられていた。す、と頬を撫でると、瞼が痙攣して薄く目が開いた。もう顔を動かす体力も残っていないのだろう。彼の視界に入るように顔を近づける。ラディスの左目は血で赤く濁っていた。

「…俺は、死んだか…？」

「まだだよ、馬鹿」

ひゅう、と音がして、ラディスが僅かに口元を上げた。リィンは彼を包み込むようにふわりと身体を寄せる。ラディスの身体はひどく冷たくて、くたりと力がない。リィンの全身がじんわりと青白く光り出した。

「リィ…ン、よせ…」

硬質な鎖の音が響く。リィンが『命の力』を発動させた事を感じ、

ラディスは力の入らない身体で身じろいだ。

「ラディス、じっとして」

「だ、だめだ…よせ…」

ぐ、とリィンのブラウスをラディスが掴む。

「や…やめてくれ…」

リィンは困惑して彼を見つめた。ラディスは眉根を寄せ目をつぶって、弱々しく首を振っている。

こんなにひどく傷ついて、今にも死にそうだっていうのに…。

「ラディス」

ラディスの頬に両手を添えて顔をぐっと近づけると、彼はうっすらと目を開けた。視点の定まらない瞳。

「ラディス、僕の目を見て」

彼の瞳を真正面から睨みつけるように見つめる。ラディスは苦しそうに喘ぎながらリィンに視線を合わせた。

胸が詰まる。

「ラディス、大丈夫だよ。僕は死なない」

ラディスの口元が動き、何かを言おうとしたが、それは声にならなかった。

「僕は死なないよ。あんただって死なせない」

彼の瞳から、涙がこぼれ落ちる。
もう一度傷だらけの身体を優しく抱いて、リィンは囁いた。

「一緒に生きよう、ラディス。一人になんかしない。あんたを一人になんかさせない。僕と、生きて…」

優しい光が二人を包み込み、じわりと身体が温かくなっていった。
徐々に青白い光は強さを増し、暗い牢獄の隅々までが照らされてゆく。
冷え切って凍りかけていた体内に、その血管の隅々にまで、命の温もりが染み渡るように流れ込んでゆく。今にもその動きを止めようとしていた心臓にまで伝わり、そこからまた全身へと送り出される。大きな温もりが全てを包み、鼓動を促して、弱々しかった彼の身体が少しずつ力を取り戻す。
ラディスは震えながら大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

「ああ…温かいな…」

リィンが伏せていた瞳を開けてラディスを見つめる。彼は目を閉じたまま泣いていた。

ラディス。
あんたはとても強くて、ずっと自分の力で自分の運命を切り開いて生きて来た。自分の思うとおりに、信念を持って生きて来た。批判も賛辞も受け止めて、少しもぶれずにたった一人で歩き続ける。自分以外の相手を護れる強さも持ってる。皆があんたを信頼して、あんたの傍で安心する。まるで太陽だ。それは誰もが憧れるような強

い生き方。だけど、ああ…。

どうしてこんなに可哀そうで、不自由なんだろう。

何て、愛おしい…。

「ラディス、泣かないで…僕がずっと傍にいる…」

リィンは泣いているラディスの頬を拭って、そっと口付けた。

◇◇◇◆

「そうか…ルーベンが捕まったか」

「うん」

壁を背に、ラディスに寄り添うようにしてリィンは身体を休めていた。彼の傷はいまだに生々しいままだったが、体力が回復した事でその鼓動は力強い。彼は片足も折られていた。

ラディスが静かに笑う。

「俺は結局、護ろうとしていた者達に護られていたんだな…」

「うん…」

「…チェムカは、無事か？」

「うん、大丈夫だよ。…チェムカにはお母さんも家族もついてる」

もう夜は明けたのだろうか。この地下にある牢獄には光も音も、何

も届かない。しかしリィンは心から安心していた。隣にラディスがいて、彼の鼓動を聞いているだけで良かった。

もう絶対に、離れるもんか。

「『命の力』って、ビーダ石に反応しないんだね」

リィンが思った事を何気なく口にした。

ああ、そうか…だから父様も母様や皆を癒す事が出来たのか。

不思議な力だ。

「ラディス。『命の力』の研究はしないの？」

「…する気になれない」

「僕が協力するのに…」

ふん、とラディスが鼻で笑った。

「そうか。それならまず裸にして、触診から始めよう」

「…変態」

静かに笑い合う。

「リィン」

「何？」

「あの子守唄、歌ってくれ」

「いやだ。何か不吉だ」

「…じゃあ、少し寝て良いか」

「いやだ」

リィンは彼に抱きついて不機嫌な声を上げる。

「だって…そのまま死んじゃいそうだ、あんた」

ラディスは笑いながらリィンの髪に口付けた。

「もう大丈夫だ。お前が命を分けてくれたろう」

「うん…」

その時、階段から何者かが近づいてくる足音がした。リィンはゆっくりと身体を起こして前方を見据える。姿を現した人物は、倒れている軍人達に驚きつつこちらに顔を向けた。牢の中にいるリィンを見てまた驚きの表情を浮かべる。

「ほう…そうか。これはお前の仕業か。手間が省けた」

そう言って顔を歪めて笑った。薄い青のドレスにストールを肩に羽織り、金の髪を結い上げた女性。口元にほくろのある顔は、一見愛らしいとも言えなくはない。皇族の証である≪黄金の青い目≫。けれど今まで見て来たどの瞳よりも、醜いまでに光が歪み、狂気が滲み出ていた。

これが、トワ。ラディスの全てを奪った女性。

ざわりと鳥肌が立つ。たとえ何であろうと、ラディスを傷つけようとする者は許さない。

もう、許してやるもんか。

後ろに連れていた頑強な軍人がいやらしい笑みを浮かべて剣を引き抜いた。

「何と都合の良い。自らビーダ石の牢獄に入るとは。これならイリアス族も脅威ではないですな」

「ノランド、イリアスなぞ放っておけ。ラディスを殺せ！今すぐだ！！」

「仰せのままに」

リィンが相手を睨みつけながらラディスを背に庇うように前へ出て、自らの剣を抜いた。

「ほう。戦うつもりか。随分と忠実な護衛じゃないか」

「…もうすぐ審議が始まる。こんな事をして許されるわけがない」

「ふん。カイエリオスが居ない今、帝都の頂点はこの私だ！審議など必要ない！

ラディス・ハイゼルと護衛のイリアスは反逆罪とみなし、極刑に処す！この場で刑の執行を行うっ！ノランド大尉、この反逆の徒を斬り捨てよ！」

「反逆の徒はあなただ、トワ妃殿下」

凛とした声が響き、複数の靴音がそれに続く。階段口に立つ人物を見て、トワが慌てたように後ずさりした。

「お、お前っ！何故…何故、ここに！」

金の短髪にルキリアの青い瞳。紺色の軍服に身を包み、全身から凛々しさを漂わせる青年。

毅然とした足取りでゆっくりと近づいてくるその青年は、紛れもなくアルスレイン王子だった。

「私が何も考えていなかったとお思いですか、伯母上」

軍人達がばたばたとなだれ込み、ノランド大尉を拘束し牢の中にいるリィンとラディスを助け出す。

「私のみザイナス国へ向かうのを一日遅らせて途中の町で待機していたのです。まさか≪早馬≫が全て殺されるとは思わなかった。しかしそれも浅はかな計略です。私専用の≪早馬≫が届いていたのですから…。あとでゆっくりとお話をお聞かせ願いましょう。…伯母上をお連れしろ」

「このっ…私に触るな！無礼者！！」

トワは軍人によって取り押さえられ連行されてゆく。恐ろしい程狂気に滲んだ金切り声が、延々と響いていた。

「すまない、ラディス。到着が遅れてしまった。無事か？」

アルスレインは軍人に肩を借りて歩くラディスの腕に手を添えた。
ラディスが苦笑をしながら答える。

「無事に見えるか、これが」

王子はほっと安堵のため息をこぼして、隣に佇むリィンに微笑んだ。

「ひどい有様だが、どうやら無事のようだ。良かった」

こうして事件は終息を迎えた。

０９２：命（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
最終部はまだ少し続きます。
ひどいですね、このシリアスっぷり。そして重ーい長ーい辛ーいの三十苦（笑）
しかしやっと峠を越えて光が差す。
あとはらぶらぶして欲しい。
もしここまで読み進めてくれた読者の方がおりましたら、この身を捧げます。

あ、いらない…。ですよね。

いつも立ち寄ってくださる方々に感謝を。

093：それからの事

「全く悪運の強え奴だ！殺しても死なん奴だ！さすがは俺の親友だ！！」

医師の説明を聞いた後の、ミッドラウの第一声。

彼がベイルナグルに到着したのは一連の事件が決着をみてから、四日後の事だった。レーヌ国での別れ際があまり後味の良いものではなかった為、ミッドラウは急いで仕事を片付けてこの帝都へと馬を走らせた。何だか嫌な予感がして途中でまたレーヌ国に寄り、腕の良い医者を一人連れて来た。その彼の判断は間違いではなかった。何故なら今現在ベイルナグル一のこの病院には、ルキリア国で一、二を争う名医の二人が大怪我をして伏せっている状態にあったからだ。ロンバートは杖をついて歩けるまでには回復していたが、それでも全快にはまだ程遠い。ラディスに至っては三日三晩生死の境をさまよって、この日の明け方にやっと意識を取り戻したのだという。今も混沌とした眠りと覚醒を繰り返していて言葉を交わせるような状態ではないらしい。

ミッドラウはその場にいた医師やロンバート、ベルシェに片手を上げて挨拶し、二階にあるラディスの病室へと足を運んだ。どかどかと盛大に靴音を立てて乱暴に扉を開く。

部屋にはベッドが二組、その間に立っているリィンが驚いた顔でこちらを見つめていた。

「よう！」

大きな笑顔を作り威勢の良い声をかけると、リィンの表情が歪んだ。赤茶の瞳から、何の前触れもなしに大粒の涙がこぼれ落ちる。

「おいおい。俺様に会えたのが泣く程嬉しいか！さては惚れたな？」

「おっ…遅いよっ…」

どうやら全ての事が済んだ後に到着した自分を咎めているらしい。

「そりゃあ仕方ねえだろ、俺も急いだんだがな。まあ医者を連れて来たからそれで勘弁してくれ」

言いながらベッドへ近づいてゆく。左側のベッドにラディスが横になっていた。シーツから顔だけが出ており首元まで包帯が巻かれ、その顔も右側だけが見えている状態で、左側も頭も白い包帯に包まれていた。おそらく全身が包帯でぐるぐる巻きになっているのだろう。

「すげえな！包帯人間だ。子供が見たら泣くぞ」

目の前で泣いているリィンの栗色の頭をがしがしと撫でて笑った。

「よおリィンよ、何で泣いてんだ。こいつは助かったんだぜ？不気味な形をしてるがな」

「で、でもっ…」

俯いて嗚咽をもらし、リィンは腕で涙を拭って言葉を紡ぐ。

「ぼくっ…ラ、ラディスを、護れなかった！」

「何だよそりゃ。護ったろ？だからこいつは生きてる」

リィンは強く首を横に振った。ミッドラウは目の前の小柄なリィンをじっと見下ろす。確かに先程聞いた医師の説明によると、ラディスの怪我は相当ひどい。完治しても左目の視力はぐんと落ち込んだまま戻らないし右腕には麻痺が残る。しかしそれが何だというのだ。失明も切断もせずに済んでいる。左腕があるし右目がある。立って歩けるし頭もイカレちゃいない。うん、正常だ。正常の範囲内だろう。

そこまで考えて、しかし、と思い直す。リィンにとったらそれは辛い宣告だろう。

昔からの付き合いがあるミッドラウは、ラディスが最初から死ぬ気で生きていたのを知っている。

変な言い方ではあるが実際にそうなのだ。

いつでも自分の命をなげうつ覚悟がとうに出来上がっていて、脇目も振らずに生きていた。その覚悟があったればこそ、何があっても動じずにいつでも全力で突き進む事が出来る。それがこの男の強さを支えていたと言っても良い。だからこそ、今回の出来事の後に命拾いをしている時点で、既に信じられない程の奇跡が起こっていると言って良いのだ。

ミッドラウはその太い両腕でリィンを強く抱き締めた。

「ずっと泣くのを我慢してたのか？…いじらしい奴だ」

「僕…ぼくの『力』がもっと使えたら、ぼくの『命の力』がもっと使えたら、ラディスの傷を、もっと治してあげられたかも知れないのにっ…ううっ…」

思わず苦笑する。

「もっともっとって…何言ってっか分かんねえぞ」

そういやさっきベルシェが言っていた。リィンはこの数日間で集中的に『力』を使いすぎたせいで、今は一時的にそれが使えない状態にあるらしい。ミッドラウは以前、リィンが『力』を発動させた後にひどく息切れをしてふらふらになっていたのを思い出した。真っ直ぐで健気な女。どこまでも一途に男を愛し抜く。

「なあリィン…。こいつはな、お前がいたから、死なずに済んだんだぜ」

腕の中からリィンがこちらを見上げた。柔らかそうな膨らみのある唇が震えている。辛そうに眉根を寄せ赤茶の瞳が涙で潤んでいる。ミッドラウは舌打ちをして低く呟いた。

「…たまらん」

素早く華奢な身体を抱き上げて、かぶりつくようにリィンに口付ける。腕の中にある柔らかな身体がびくりと強張り、両手で必死に押し返してきた。逃げ惑うリィンの可愛い舌を絡めとる。

「う…ッ」

次の瞬間、ミッドラウの頭全体に激痛が走った。

「だっ！いってえ！！」

リィンが彼の一つに束ねている黒髪をむんずと掴んで思い切り引っ張ったのだ。

「っててて！リィン、やめろ！ハゲるっ！」

「だったら離せよっ！！」

髪を掴まれているせいで天井を見上げわめきながら、しかしミッドラウはリィンをがっちりと抱き上げて離そうとしない。リィンは宙に浮いた足をばたつかせて抵抗する。

「リィン！俺にしろよ！こんな人でなし、ほっとけ！！」

「何だよ急にっ！あんたには大勢恋人がいるだろ！」

その時、不気味な音が聞こえた。地鳴りのような、低い音。幽霊のうめき声。その音にミッドラウとリィンは動きを止めて同時にベッドを見つめた。あまりの恐ろしい光景に悲鳴を上げそうになる。ベッドに横たわっていた包帯人間が、片手をついて起き上がっていた。ふうふうと肩で息をしている気味の悪い生き物が、絞り出すようにまた呻いた。

「…ミッド…お前、殺すぞ…」

ミッドラウは底抜けに明るい笑顔になって答える。

「よう！死にぞこない！悪ぃが今すぐ死んでくれ」

「ラディス！」

リィンが包帯人間の傍へ駆け寄っていった。

◇◇◇◆

ニコルは料理の仕込みの手を休め、前掛けで拭いながら椅子に腰かけた。普段は針仕事の時にしか掛けない眼鏡をそっと鼻の頭に載せて、テーブルに広げてある手紙の続きを書き始めた。

チェムカ、元気にしてるかい？
セティナさんも小さい弟妹達も、元気にしてるかい？
リエズの町は年中気温が低いから、風邪なんか引いちゃいないか心配だよ。

あんたの所へも報せが行ったと思うけど、ラディス先生の具合が落ち着いてから、すぐに宮殿に呼ばれて審議が開かれてね。その判決が今日決定したんだ。
今回色んな人が裁かれたんだけど、一番刑が重かったのはやっぱりルーベン司教だったよ。医師免許と聖職者の免許の返還と、帝都追放。その側近の三人も追放になってね、信者達と支持者達の集会なんかもこの先当分は禁止になったんだ。今回の事件はルーベン司教と元王妃のトワ妃が共謀して、ロンバート先生とラディス先生の殺害を謀ったものだったと正式に発表になったんだけどね…。
ルキリア皇族で裁かれたのはウィト・ネールという年老いた大臣のたった一人さ。本当は、もっとたくさんの皇族が絡んでいたはずなのにねえ。まあでも、今後もまだ取り調べは続くみたいだよ。何せ国王陛下と元帥が不在の時に起こった事件だからね、国内を混乱させる目的もあったんじゃないかって、帝国政府も帝国軍も、今回ばかりは皇族の人達にまで捜査を広げるつもりでいるらしいんだ。もうガズナイル長官の名前が挙がってるって噂もあるよ。前にリィンがついて行ったゲムの村の視察で起こった事件の事もあるしね。もしかしたらアルスレイン王子が抱えている問題が一気に片付くかも知れないねって、みんなで話しているんだよ。
トワ妃はね、全ての権限を剥奪されて宮殿内でひっそりと暮らす事

になるだろうって言ってたよ。どうやら前から心を病んでいたみたいなんだ…。

ラディス先生の具合だけどね、だいぶ良くなったよ。もう杖をついて歩けるようになったんだから！回復がとっても早いって、ロンバート先生も他のお医者さんもみーんな、びっくりしてんだわ。左目も度の強い眼鏡をかければ大丈夫だし、もう動かせないかも知れないって言われてた右腕も、少しずつだけど動くようになってきてるんだって。クレイが泣いて喜んでねえ、これからの回復次第では医者としてもまたやっていけるかもって言ってるんだ。
先生は歩けるようになった途端に色んな人にお礼をしに回ったし、お見舞いにたくさんの人が来てもくれた。

こっちのみんなは、元気だよ。チェムカ。

診療所には相変わらずたくさん患者さんが来てくれて、クレイの先生っぷりもそれらしくなってきてるよ。ソアもほんと、よくやってる。だけどねえ、この二人、愛想笑いが苦手なもんだから、ちょっと困ってるんだ。護衛のバーツは目を離すとすぐに肉料理ばっかり作ろうとして、あたしゃいっつも怒ってるんだけどね。そうそう、リィンはラディス先生につきっきりだよ。ふふ、想像出来るだろ？

ねえチェムカ、そろそろこっちに戻って来ないかい？
やっぱりあんたがいないと、話相手がいなくて寂しいよ。診療所のみんなも少しつまんなそうよ。患者さんもチェムカの笑顔が見れなくて残念だって言ってる。
うちで作ってる野菜もまたたくさん採れたから、あんた達に食べてもらわないと腐っちまうよ。あんたが止めないもんだから、メリエナとミランがしょっちゅう診療所に遊びに来てる。ラディス先生の左目に日の光があんまり良くないからね、昼間は黒い眼帯をするよ

うになったんだよ。それに今は短く髪を切ってるから、それが格好良いって喜んでるんだよ。面白い子達だねえ。ああ、それからパウラさんが働いてた食堂も手が足りなくて大変だって言ってる。あたしが料理を教えてるみんなだって、セティナさんの作るお芋のお菓子が食べたいって騒ぐんだ。レッジ君のお友達もラディス先生のところへ来てね、みんなしょんぼりしていたよ。レッジ君に会いたいって言ってるよ。

あんた達家族がいなくなって、みんな寂しがってる。

リィンはいっつも、窓の外を見つめてる。あんたがいつ帰ってきても一番に迎えに出られるようにしてるんだって。

それからね、もうすぐラディス先生とリィンはここを発つ事になりそうなんだ。

レーヌ国の女王陛下から書簡が届いたんだ。二人はレーヌ国に行かなきゃいけない。それから世界中をずっと旅して仕事するんだって、ほら、前に先生から聞いた事があったろ？

それがいよいよみたいなんだ。

女王陛下もせっかちな人だよねえ！ラディス先生だって確かに杖ついて歩けるけどさ、まだまだ怪我人だっていうのにねえ！ずっと、ここにいたって良いのにねえ。

多分そう遠くない間に出発になると思うんだ。

それまでには帰ってきておくれ、チェムカ。リィンが会いたがってるよ。

０９４：遠い記憶

心臓の鼓動。規則的に刻む。恐ろしくも愛おしい、旋律。
温かく心地の良い風が頬を撫でる。ゆっくりと瞼を開いた。

「よう、死にたがり」

目の前に美しい青年がいる。こちらをじろりと睨み、朗らかに笑った。栗色の髪に赤茶の瞳。

ああ…。俺は夢を見ている。

「ルキ。今日はな、お前に新しい名をやる」

俺は確かその時にこう言った。

いらないよ、そんなもの。

「いいや、必要だ。お前の名は今日から、ラディスだ。そう名乗れ」

ふん。ダサい名前。

青年はがっくりとうなだれて唸った。

「随分悩んで考えたんだぞ」

大きな手が頭を撫でる。ゆっくりと、優しく。

「お前はルキリア族じゃないよ。イリアス族でもないがな…。そん

なちっぽけな種族の括りを飛び越えた存在だ。そうだろう？お前の目は綺麗な青色をして金の琥珀を持ってる。だが心には燃え上がる紅い炎を宿しているんだ。お前の存在はとても稀有だ。誇りを持てよ」

青年の赤茶の瞳が真っ直ぐにこちらを見つめている。

「なあ、ラディス。だからもう死のうとなんかするなよ。死ぬくらいの覚悟があるんなら、必死で生きろ」

簡単に、言うな。

「ああ。簡単じゃないさ。もっと言うとな、人を育てるのだって簡単じゃないんだぜ。たった一人で生きてると思うなよ」

沈黙が二人を包む。爽やかな風に、栗色の髪がなびいた。

「ラディス」

青年が振り返る。優しい微笑み。

「生きるのだって簡単じゃないが、そう捨てたもんじゃない。俺を見てろよ、必死で生きてみせるから。

いつか、種族の壁なんてなくなる日が来る。俺がその道を開く最初の一人、次はお前だ」

何だよそれは。勝手に決めるな。

青年は声を上げて笑った。

「お前には選択の余地はない。お前自身が諦めた命を、俺が拾ってやったんだぜ?俺の好きに使って良いはずだろう?」

大きな腕に抱き締められ、頬に温かな体温が伝わる。人の温もり。その鼓動。

「ラディス。お前なら出来るよ。お前の存在は、希望だ」

遠ざかってゆく。

まるで自分が大きな鳥にでもなったかのようにひゅうと風に乗り、その場から消えた。

ティルガ…。

これは遠い記憶。全ての始まりを告げた、大事な記憶。

０９５：温かな夜

腕の痛みに目覚め、低く呻いて身体を起こした。夢を見ていたような気がするが判然としない。ゆるりと首を振った。見ると隣にまたリィンが眠っている。

まだ杖が必要な生活をしている為、一階の診察室にあるベッドで寝起きをしている。このベッドは寝室にあるものとは違い一人用なのだが、いつも知らない間にリィンが隣にもぐり込んでいるのだ。そして決まって自分にぴったりと寄り添って眠っている。

包帯に包まれた右腕を庇いつつ、脇のテーブルにある瓶を傾けて、グラスに水を注ぐ。俯いて深く深呼吸を繰り返す。

「…ラディス？」

リィンがむくりと起き上がってそっと腕に触れてきた。

「…寝室で寝ろと言ってるだろう」

本当は、こうやって痛みに苦しんでいる無様な姿を見られたくないのだが。

壁に背を預け左腕でリィンの柔らかな身体を抱き寄せる。

「痛い？」

「少しな」

「あんた、治ってないのに動きすぎなんだよ。…目は？」

眼帯の上を細い指先が優しく触れた。

「もう何ともない。お前は心配しすぎだ。毎晩見張ってなくても、俺は死なんぞ」

「分かんないだろ、そんなの…。ぽっくりいくかも知れない」

ラディスは笑ったが、こちらを睨みつけるように見つめている赤茶の瞳は涙ぐんでいた。

あのなあ、リィン。…人はいつか死ぬんだぜ？

そう言ってやりたいが、もしそんな事を言ったら怒るに違いない。

「お前のお陰だな。てっきり俺は目と腕を失うつもりで覚悟していた。お前があの時、命を削って俺を救ってくれたから、今こうしていられる。感謝してもしきれないな。リィン様様だ」

「…ほんとにそう思ってんのかよ」

「思ってる。もうお前には頭が上がらない。足を向けて寝られない」

ラディスは笑ってグラスを口へ運んだ。

「じゃあ…僕の言う事、何でも聞く？」

冷えた水を飲みながら頷いて返事を返す。怪我が完全に治るまではリハビリを止めろと言われそうだ。

リィンが真っ直ぐにラディスを見上げて、呟いた。

「抱いて」

「ぶっ」

飲んでいた水を吹き出してしまった。
リィンはごほごほと咳き込んでいるラディスの手から、グラスを取り上げてテーブルに置いた。そのまま彼の足の上にちょこんと跨って、きゅっと抱きついてくる。ブラウスの下からリィンの真っ白な太腿がのぞいている。寄り添う華奢な身体から、心臓の鼓動が伝わる。ラディスは左腕でリィンの細い腰を抱いた。

…リィン。お前、分かってるか？俺はこう見えてまだまだ重症の患者だ。そんな激しい運動をしたら、身体がちりぢりに砕けるかもしれないぞ…。
せめてあと数日、猶予が欲しい。

色々言いたい事は山程あったがラディスはその全てを飲み込んだ。リィンの心が分かっていたから、リィンの不安を感じていたから、何も言えなかったのだ。

「リィン」

リィンの瞳から、ほろりと涙が落ちた。

「そんなに泣くな。干からびるぞ」

「だ、誰のせいだよ…！」

「…悪かった」

リィンの柔らかな下唇を優しく食むと、小さく震えて吐息が漏れる。
そのまま深く口付けた。

これはきっと、罰なのだろう。
今にも全身が引きちぎれそうな程の激痛と、今にもとろけてゆきそうな程の甘い感覚。
愛しい女を泣かせた罰だ。
ラディスは左手でリィンのブラウスのボタンを外しながら苦笑をこぼす。
リィン…。お前の罰が、一番こたえる。

「もう、『命の力』を使ったりするなよ?今後一切だ」

「あ、あんたがそんな大怪我するのが、悪いんだろっ」

ほろほろと泣きながらリィンが睨みつけてくる。

「…悪かった」

白く透き通る肩にキスを落とす。綺麗な肌に指を這わせ、口付けて痕を残してゆく。うっすらと色づいてゆく、しなやかな身体。何度見ても、美しいと思う。可愛らしい口元から甘い吐息がもれる。その息使いに煽られて身体がじりじりと燃えてゆく。

またこの腕で、愛しい女を抱けるとは思わなかった。

「ラディス…あ…」

またこの目で、お前を見つめる事が出来るとは思わなかった。
またこの身体で、お前の体温を感じる事が、出来る…。

泣きそうだ。

頭のてっぺんまで突き抜けてゆく激しい痛みに耐えながら、同時にその痛みにすら快感を覚えている自分に驚く。

「くそ…。アブノーマルな趣味に目覚めたらどうしてくれる」

ラディスが低く呟くと、リィンが薄く目を開けて少しぼんやりとした顔で見つめてくる。その表情にまた興奮してしまう。

俺も相当の阿呆だ。

「ん…あ、ラ…ラディス…すき、だ…」

もう、どうにでもなれ。

身体が弾け飛んでも構わない。

ラディスはきつく、リィンを抱き締めた。

◇◇◇◆

「やあ、不肖の息子よ。来たな」

目の前に立つラディスの肩を叩き、ジェイクは笑顔になった。扉を大きく開いて中へ導く。昼下がりの穏やかな太陽の日差しが、室内に差し込んだ。彼は杖をついてゆっくりと足を運ぶ。

「フェーマスさんやエンポリオ君に挨拶は？」

「済ませたよ。大恩人だ。…俺はたくさんの人達に命を救われた。ジェイク、あなたにもだ」

ラディスは少し窮屈そうな態勢になり、左手を差し出て来た。左目は黒い眼帯に隠れているが、彫像のような綺麗な微笑みは相変わらずだ。

「ありがとう。父さん」

「ラディス…」

ジェイクの胸がじんわりと熱くなってゆく。左手で固い握手を交わしながら、ラディスがにやりと笑って言った。

「年を取って随分と涙もろくなった」

慌てて目尻に溜まった涙を拭い、ジェイクは苦笑をこぼす。

「全く、お前と言う奴は」

「ラディス！」

広い階段を小走りに駆け降りて、ユマがその勢いのままラディスに抱きついた。

「てて…痛いぞ、ユマ」

ユマのブラウンの巻き毛がふわりとラディスの頬を撫でる。部屋の奥からやって来た婦人の従者が眼鏡を外して涙を拭い、怒ったような声を上げた。

「ほんとに、もうっ！坊っちゃんは昔っから、旦那様に心配ばっかりかけるんですから！」

「…すまない」

「ほんとよ、ラディス。私の心臓がまた悪くなったら兄さんのせいなんだからね」

ユマが見上げるようにしてラディスを睨みつけてから、可愛らしい笑窪を作って笑顔を向ける。その顔色はとても良く、もう何の危なげなところもない。

「悪かった」

ラディスはそれからちらりとジェイクに目線を寄こし、声をひそめて呟いた。

「どうしてだか俺は最近謝ってばかりだ」

ジェイクは無言で微笑む。皆、彼の姿を見て、その変わらぬ飄々とした態度に触れて、やっと緊張がほぐれて安心しているのだ。心の底から心配していた分、皆が彼に甘えている状態にあるのだろう。それにきちんと彼は応え、大きく受け止めてくれる。

「あら？リィンは？」

ユマがラディスの背後を見やって質問する。

「エンポリオの会社に置いてきた。あとで来るよ」

「今日は一緒にケーキを焼く約束をしているのよ。ふふ。あとでベルシェもソアも来る予定よ！今日は女の子だけでたくさんお喋りす

るんだから」

楽しそうに話すユマに、ラディスはわざとらしく眉を上げる。

「それなら早々に帰った方が良さそうだ」

「はは。そうだな。じゃあ早速話をしよう、ラディス」

ラディスの歩幅に合わせてゆっくりと廊下を歩く。

今後、彼はリィンとともにレーヌ国の女王陛下の元へと旅立つ。おそらくはそこで女帝の部下としての正式な認可を受ける事になるだろう。

「それにしても慌ただしいな。もう少しゆっくり休んでからでも良いだろうに…」

「それは横暴な権力を振るう女帝に是非とも進言してくれ」

「お前ときたらいつも忙しそうだ」

昔からずっと。彼の運命は、一時たりとも彼を休ませようとはしない。

「おかげさまで。まだまだやる事がありそうだ」

ベイルナグルでの引き継ぎは事件が起こる前に全てを彼自身が完了させていたが、ジェイクはこれから先も、彼を支援していきたいと思っているのだ。

ラディスは自分の息子であり、リィンは親友ティルガの大事な娘である。出来る限りの事をしてやりたかった。

ああ、そうだ。リィンにはきちんとお礼を伝えなくてはいけない。前に言っていたとおり、リィンは命をかけて、この息子を護ってくれたのだ。ラディスを必ず護ると言った、あの時のリィンの瞳が忘れられない。きっとこの先もずっと、忘れられない出来事になるだろう…。

「さっきエンポリオの会社でワドレットと会ったんだがな、随分と凛々しくなった。あれならもう大丈夫だろう。あいつは逆境に強い」

「ああ。私も驚いたよ。彼は良くやってる」

ラディスがくくく、と笑ったので、不思議に思い隣を歩く息子を見やった。

「素直に褒めるな。とうとう娘を手放す決心を？」

ジェイクは憮然とした表情を作って腕を組む。

「それとこれとは話が別だ」

「…娘っていうのは無意識に、結婚相手に父親の面影を求めるものだと昔から言う」

「何だい」

「一見優男で物腰も柔らか。だけど人一倍頑固で、いざという時に強さを見せる。似すぎていて怖いくらいだ」

またラディスが低く笑った。ジェイクも笑いながらため息をつく。

「もうこうなったら孫の顔を見るのを楽しみに、長生きする事にしよう」

「それが良い」

とても穏やかな気持ちでジェイクは隣を歩くラディスを眺める。足を引きずりながら杖をつき、左目は眼帯で覆われている。服で隠れてはいるが、おそらく身体中に無数の傷跡が残っているだろう。右腕も麻痺が残り、以前のようにはまだ動かせない。彼の身体はぼろぼろだ。にも拘わらず、この安心感は一体どういう事なのだろうか。欠けている部分なんてなく、完璧な存在感を放っている。

本当に…お前にはかなわないな。

０９６：新しい朝、その先へ

その日の朝も変わらずにニコルは台所に立ち、朝食の準備にかかっていた。隣には慣れた手つきで魚料理の仕上げをしているリィンがいる。ニコルは穏やかな気持ちでそれを見つめて微笑んだ。

「もうリィンは立派な料理人だわね」

「まだまだだよ。ニコルのスープは、まだ習得してない」

「ふふ。あれはニコル秘伝の野菜スープだもの！食べたくなったら帰っておいでな」

「うん」

微笑むリィンを眺めて、まるで娘が遠くに行ってしまうかのような寂しさを覚えた。ラディスとリィンが旅立つ日は、あと五日後に迫っている。近頃のリィンは随分と綺麗になったし、女性らしい柔らかな雰囲気を纏うようになった。きっと美しく清廉な女性に育ってゆくに違いない。

「これならあたしも安心だわ。ラディス先生は食べる事には無頓着だから。料理も驚く程出来ないんだよ？あんなに何でも出来る人なんだけどねえ」

「そうなの？」

「ええ！そりゃあもう、ひどいの何の！」

ニコルは笑って遠い記憶を掘り起こす。この診療所が出来てすぐに、ここの主が募集をしたのは料理人だったのだ。あの時のラディス先生とクレイったら、もう随分若くってぴちぴちしてたわねえ…。

居室の扉が開いて、クレイとソアがぼんやりしながら入ってきた。

「おはよう」

「おはようございます…」

この二人はどこまで似ているのだろう。ニコルはリィンと顔を見合わせて、くすりと笑い合う。朝の苦手な二人は、静かに席について無言で茶を啜っている。まるで老夫婦のような光景だ。

それから熊のような大きな身体をしたバーツがあくびをしながらやって来た。

「おはようございます！おお、良い匂い！ニコルさん、今朝は何ですか」

「まず顔を洗ってらっしゃい」

「僕、ラディスを呼んでくるよ」

その時扉が開いて、すらりとした長身のラディスが姿を現した。その彼を見てニコルが驚いた声を上げる。

「あら！先生！もう杖なくて平気なの？」

「ああ。それだけじゃないぞ」

彼の足取りはしっかりとしていて力強い。居室の中央まですたすたと歩いて来て、そこで立ち止まる。それから難しい顔をして少し俯くと、ゆっくりと右腕が持ち上がっていった。
麻痺が残り動かないだろうと言われていた右腕。昨日までは僅かにしか動かなかった。

「ラディス様…」

クレイが目を大きく見開いて席を立った。ニコルは両手を頬に当てて口を開けたまま、ソアもリィンも呆然とラディスを見つめている。
皆が見守っている間にもラディスの右腕は動きを止めずに持ち上がってゆき、顔の横でぱっと手のひらを開いて見せた。

「やあ、おはよう諸君」

そう言ってラディスは綺麗な笑顔を作る。

「うわあ！すげえや先生っ！あんたぁ不死身だ！！」

バーツが手を叩いて喜んだ。

「な、何という事…。ああ…何という…！」

ふらふらとクレイが近寄ってゆき、その肩を叩いてラディスが言った。

「お前の処置が完璧だったからだぜ。クレイ、お前のおかげだ」

クレイは言葉を継ぐ事が出来ず首を横に振り、ソアが驚いた様子でラディスの右腕を観察する。

「驚嘆ものだ…まさかこれ程短時間でここまでくるとは…。ラディス殿の回復力は尋常ではないな。並の人間のそれを遥かに超えている。…これは是非研究してみたい」

ニコルが隣にいるリィンに顔を向ける。それに気付いてリィンもニコルに笑顔を向けた。

「良かったねえ、リィン…」

ニコルは知っていた。ラディスが過酷なリハビリを一日も休まずに続けていて、それをリィンがずっとサポートしてきていたのを。これは奇跡でも魔法でも何でもなく、ひどく人間的な、血の滲むような努力の結果なのだった。

ニコルには不思議に思えてならない。そんなに辛く大変な事をしてきているのに、この先生はいつも飄々として綺麗な顔で、さらりとやってのけるように見えるのだ。悲壮な部分がまるでない。いつもからりと晴れている。しかしそのせいで、才能に恵まれて何の努力もなく幸せに生きていると勘違いされる事が多い。

…損な性分だわね。

「リィン、支度をしろ」

壁にかかっている黒いマントをとりながらラディスが声をかけた。彼は今眼帯をしておらず、片眼鏡をかけている。リィンのマントを投げて寄こした。

「え？なに…」

リィンはマントを受け取ってきょとんとする。他の皆も同じだった。

「チェムカ達を迎えに行く」

「…先生！」

皆の表情が明るい笑顔に変わる。

ああ…。そういう事だったんだね、先生。
リィンがチェムカのいるリエズの町に行くっていうのを止めたのは、その為だったんだね。
チェムカ達を迎えに行く為に、あんなに必死にリハビリをしていたんだね。
あの優しい人達が自分達を責めないように、安心して帰って来てもらうように、先生自身が迎えに行く事に、意味があったんだね…。

ニコルは前掛けでそっと涙を拭った。

「もう…。先生はほんと、昔っからちっとも変わらない…」

喜んでいる皆の中で、リィンだけがむっつりと怒った表情でいて、声を上げた。

「何であんたっていっつも偉そうなんだよ、ラディス！」

今度はラディスがきょとんとした表情でリィンを見下ろした。

「迎えに行くんじゃなくって、ちゃんと謝って、帰って来てもらうように頼みに行くんだろ！」

「…すまん。その通りだ」

朝のすがすがしい太陽の光に、澄んだ笑い声が染み込んでいった。

◇◇◇◆

玄関口で二人を見送りながら、ソアが口を開いた。

「…ラディス殿にあのような物言いが出来るのは、おそらくリィンだけだな」

「ええ。本当に…。リィンはいつの間にあんなに逞しくなったのでしょう」

クレイが眩しそうに前を見つめて頷く。その隣にいたニコルが、あら、とクレイを見上げて言った。

「逞しいじゃなくって、麗しい、の間違いでしょう？いやあねもう」

三人は穏やかに笑い合う。ニコルは微笑んだまま誰にともなく呟いた。

「あの二人だったらこの先何があっても、心配いらないね」

「ええ…。頼もしい限りです」

「おおーい！早く朝飯にしませんか！先にいただいちゃいますよう！」

バーツの大声がして、三人はゆっくりと居室へと戻って行った。

【最終部・完】

０９６：新しい朝、その先へ（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
これでこの物語は終了します。
それから今月中にも三話分の番外編を更新して完結になりますので、現在は連載中のままにさせていただきます。
中途半端に続いてゆくような終わりにしたかったのです。
人の人生って、そんなもんですよね。めでたしめでたしの後に、また問題が起きるような。
次回の蛇足的番外編は、二人がレーヌ国へ旅立つ前夜を書きます。
ええ、作者的に欲求不満の残るらぶーであまーな話が書きたかっただけなのです。
せっかくＲ１５にしたんだもの！頑張ります。（何を）

最後に、ここまで読んでくださった心優しき方々へ。
どうもありがとうございます。
この物語を読んでいてくれる方がいる、その事が書き続ける者にとって、何よりの力であり励みでありました。

最後の最後まで、お付き合いいただけたら嬉しいです。

０９７：≪番外編≫出発前夜１

出発を翌日に控え、壮行会という名目で町の西側にある酒屋を借り切って、盛大に宴会が開かれた。昼時から開始された宴は、時刻が深くなるにつれて集う面々の顔ぶれも変わっていった。

今はまだ日が落ちたばかりだというのに初めから居た者達は少なく、席を囲む多くの者が酒好きの騒ぎ好きで、普段の酒場の雰囲気と全く変わらないような状態になっていた。

リィンは酒場の端のテーブルにいて、深いため息を落とす。クレイ達診療所の面々もジェイク達もとっくに帰っていて、ここに残っているのは酔いどれの連中ばかりだ。その上リィンは今、むさ苦しい男達に囲まれて腕相撲の相手をさせられている。

「おおし！次は俺だっ！こんな女みてえなひょろっ子に負けるもんかよ！」

どん、と大きな手でテーブルを叩きながら、顔に派手な傷のある男が目の前の席に座った。それから大木のような太い右腕を突き出して、鼻息荒くリィンを睨みつける。

「威勢の良いこった！あとで泣きっ面かくんじゃないぞう！」

リィンの隣にいるバーツが赤ら顔ではやし立てる。顔とは言わず坊主にしている頭まで、赤い。完全に酔っている。それに呼応するかのように周りで見物する男達が手に持っていた酒瓶を掲げて、ややいやいと野次を飛ばした。

「おら、小僧！勝負だ！『力』使うのは反則だからな！」

仕方なく右手を差し出すと、ものすごい勢いで掴まれてぎりぎりと締め上げられる。

「ってえ！」

酒が苦手なリィンにとって、この場の雰囲気には最初からどうにもなじめない。その上どうして自分がこんな熊みたいな大男に手を握り潰されそうにならなきゃいけないのか。リィンはむっとして相手を睨みつける。

「ふん。そんな可愛い顔で睨まれたってこわかねえや！」

リィンは開始の合図とともに右手に力を込めて、渾身の力を振り絞って相手の腕をテーブルに沈めた。どっと歓声が上がる。

「おおお！いいぞ小僧！」

「顔に似合わず怪力だなあ！ほら、賭けに負けた奴はさっさと金を出せ！」

「さっすが、男の中の男ッ！！イリアスの英雄は半端ねえ強さだ！」

リィンはむっつりとしてグラスに入った茶を一気に飲み干した。そうなのだ。イリアス族の英雄と町で噂されるリィンと一度で良いから力比べをしたいと言って、皆がわらわらと集まって来たのだ。その為全員が護衛とか左官とか、男らしい職業に就いている汗臭い者達ばかり。挙句の果てにはその腕相撲で賭けまでする始末。

「じょ、冗談じゃねえ！今のはナシだ！もう一回っ」

「…もうやらない。僕だって疲れるんだ。このゲームはおしまいだよ」

そう告げると、男達から不満の声が上がる。リィンはうんざりしながらずっと先にあるテーブル席をちらりと見やった。そこはこのテーブルとは違い、何だか華やかだ。女性達が周りに座り、集まっている人々もどことなく優雅な物腰。その中央にラディスがいた。今はラディスの隣に歌姫ネルティエが寄り添うようにいて、その反対側にはグレイアが座っている。両手に花。

何なんだ、この差は。

ますます不機嫌になってゆく。ラディスの隣にあのグレイアがいる時点でも腹が立つというのに、自分はむさ苦しい男達に囲まれて、男前だと褒められている。ちっとも嬉しくない。

リィンの視線に気づいたバーツが、にいっと笑って顔を寄せてくる。

「いやあ、気付かなくってすまん。そうだよなあ。リィンだって、綺麗な女の子に囲まれたいわなあ」

最近やって来た護衛のバーツは、リィンが女性であるという事実をまだ知らない。話す機会を逃してしまって、結局そのままだ。もう面倒なので返事をせずに頬杖をついた。

「なあ、どっちが良い？」

「…何」

「歌姫の可愛らしい笑顔と綺麗な白の髪、それに美しい歌声。良いよなあ！しっかし、俺は断然グレイアが好みだ！たまらんよなあ、

あのスタイル…」

ぐへへ、と変な笑い声を上げて鼻の下を伸ばしているバーツ。リィンは頬杖をついて先に広がるその華やかな光景に目を向けた。ラディスは今は眼帯ではなく、左目の視力を補う為の片眼鏡をかけている。上品な鼻筋にぴったりの眼鏡。薄茶色の髪は短く切られていて少し若返ったような気もする。優しく微笑むその表情に、周囲の皆が安心しきってうっとりとラディスを眺めている。

「まったく悔しいが、絵になるよなあ。美女と先生…」

隣にいるバーツの呟きが、いちいちカチンとくる。リィンはふん、と鼻息を荒くしてそっぽを向いた。これ以上見ていたら胸が焼け焦げてしまいそうだった。
だってやっぱり、ネルティエとラディスはお似合いだ。美しい二人。

「うっわ！どろどろした真っ赤な炎！」

大きな声で言いながら、ウィリアムがリィンの肩にがしりと腕を回して笑った。彼は貴族のようにこぎれいな格好をしているのだが、口が悪いし目つきも悪い。

「これ、ジェラシーってやつ？化け物でもやきもち妬くんだな」

「うっ…うるさいな！違うよっ！」

その時、がたん、と椅子が倒れる音がして、ふらりと一人の男が立ち上がり大声を上げた。

「せんせいよお、そりゃ、ねえんじゃねえかあ」

健康的に日焼けをして頑丈そうな身体。ニコルの主人だ。ふらふらとした足取りでラディスのいる席へと近づいてゆく。

「みーんな、あんたの考えに賛成してよう、ずっと一緒にやってきたんじゃねえかあ」

リィンは少しだけ緊張してニコルの主人を見つめ、その場の皆が静まり返って様子を見守っている。主人はよろりとよろけてテーブルに両手をつき、ラディスの顔をのぞきこんだ。

「それなのに、せんせい、みんな置いて出てっちまうのかよお。こんの薄情もんがあ」

今まで大騒ぎしていたのが嘘のように、しんみりとした空気が酒場を包み込んだ。皆が縋るような視線をラディスに向けている。彼は席を立って、静かに語り出した。

「俺は常々思っていた事がある。ここの連中は人が良すぎる。俺は自分の好きなように動いていただけだよ。そのせいでひどく迷惑をかけてきて、申し訳なかったと思っている。こんなに勝手ばかりする自分について来てくれて、本当に感謝しているんだ。今回は命まで救ってもらった。…結局俺一人では全て、どうにもならなかった事ばかりだ。あなたたちのおかげで今も俺はこうしていられる。
本当に、ありがとう」

長身を折り曲げて、ラディスは深々と頭を下げた。皆が彼の声に聞き入って、彼の姿を目に焼き付けようとしているかのように、無言でじっと見つめている。どこからか鼻を啜る音が響いた。

「俺はこれからも、あなた達にもらったこの命を使って、あなた達に恥じぬように、あなた達が誇れるように、生きて行こうと思っている。どれだけ離れて遠くに行こうと、俺の故郷はこのルキリアの帝都、ベイルナグルだ。そして俺の家族は、ここにいるあなた達だ。俺は決してそれを忘れない。…それで勘弁してくれないか」

ラディスはそっとニコルの主人の肩を抱く。主人は彼の真摯な態度に感動して、目を潤ませていた。

「せ、せんせい…俺は忘れないよ、あんたの事ぁ…。この町でしてくれた事ぁ、ずっと忘れねえ！」

「そうだ…。きっと他の町ではまだ治療さえしてもらえない人だってたくさんいるはずじゃないか。きっとここよりもラディス先生を必要としてる場所があるんだよ」

「先生、この町の事は俺達とクレイ先生にまかせてくれ。困ってる人を助けてあげてくれえ」

「せんせい…」

ニコルの主人がラディスに縋るように抱きついた。その感動的な場面で、彼は不敵な笑顔を作る。

「…だから人が良すぎるというんだ。皆簡単に騙されて、俺を許す」

主人は一瞬呆気にとられてから、こんのおお、と大きな声を上げた。

「ゆるさん、ゆるさあん！！この詐欺師ッ！」

どっと笑い声が起こる。酒場はまた穏やかで砕けた雰囲気に包まれた。

それからも宴会は続き、リィンは先程から酒瓶の入った木箱を各テーブルに置いて回るという仕事をこなしていた。こうも長時間宴会が続くと店の人間達も酒を飲むので、必然的に動ける者が店の仕事をする羽目になるのだ。

「おーい、化け物！こっちにも酒頼む！」

遠くのテーブルにウィリアムの赤毛が見えた。片手を大きく振って呼んでいる。リィンは向かっ腹を立てて叫び返した。

「化け物って言うな！自分で取りに来いよ！」

「俺、か弱いからそんな重たい酒瓶持てないもーん！」

げらげらと一斉に笑い声が上がった。

この酔っ払い！心の中で毒づいて、酒瓶を持ってどすどすと歩く。空になった木箱を手に酒場を出て空を見上げると、金色の大きな月が昇っていた。ひんやりとした風が頬を撫でて心地が良い。室内の酒の臭いと喧騒に解放されてほっとしながら木箱を壁に積んで、中身の入った別の木箱をうんしょと持ち上げる。戻ろうとした時、視界の隅に何かが見えた。酒場の裏口に誰かが佇んでいる。リィンは壁を背にして息を殺し、じいっとその人物を見つめた。

そこにいたのはラディスとネルティエだった。

二人を見た途端に緊張して、すぐにその場から離れようとするのだが、身体が動かず目は二人を凝視したまま固まってしまった。

ラディスは背をこちらに向けているので表情は分からないが、ネル

ティエの表情はよく見えた。彼女は盲目の為、リィンには気付いていないだろう。月に照らされて輝く白の髪につぶらな黒い瞳。少し切なげな表情をしているネルティエはとても美しく、リィンは呼吸をするのも忘れて彼女に見入っていた。

突然、歌姫の褐色の頬に透明な涙が伝う。

ネルティエは俯いて力無く首を振り、よろめくようにラディスの胸に寄り添った。リィンの目に彼女の一つ一つの動作が焼き付いてゆく。歌姫は薄紫色の身ごろのゆったりとした服を身にまとっていて、それがとても良く似合っている。ラディスは白のブラウスに黒のベスト、黒の細身のズボンに茶革の長靴といういつもの格好。なのに、まるでおとぎ話に出てくる騎士のように見える。お姫様と騎士。あまりにも綺麗で、幻想的な情景を見ているようだった。

その時。

震えている歌姫の小さな肩を、いたわるようにラディスの手が包んで…。

ラディスが優しくネルティエを抱き締めた。

思わず手が震えて酒瓶の入った木箱を落としそうになり、慌てて持ち直した。かちゃり、と瓶が鳴ったので、リィンは急いでその場から逃げ出した。

心臓がばくばくと張り裂けそうな程鼓動を打ち、耳がわんわんと鳴って訳が分からない。勢い込んで酒場の扉を開き、どん、と木箱を置いて部屋の奥へと駈け出した。

「おう！サンキュー」

リィンは誰も通らない店の奥の倉庫で、両手を胸の前でぎゅうと握り締め、小さく丸まってしゃがみ込んだ。身体中の血液がどくどくと脈打って、破裂してしまうんじゃないかと思うくらいだ。

ああ、どうしよう…。僕に勝ち目なんかない。

リィンの思考はどんどん暗闇に沈んでゆく。考えれば考える程、泥沼にはまる。

相手は世界一と称される程の歌声を持つ、美しく可憐な歌姫。
自分は世間では男性として通るくらいの、ちんくしゃだ。

ぶんぶんと首を振って慌てて打ち消した。そんな風に卑しく比較する自分が情けない。胸が痛くてたまらない。
リィンは今まで男性として性別を装って生きてきた十八年間のおかげで、女性である自分にどうしても自信が持てないでいた。女性としての自分は、ラディスに不釣り合いな気がしてならない。胸もないし言葉使いも粗野だ。その為にすぐ動揺して自信を失くしてしまうのだった。

リィンはぎゅううと小さく丸まったまま、うんうんと唸って、少し泣いた。

０９８：≪番外編≫出発前夜２

しばらくして、リィンは何とか気持ちを落ち着かせて席に戻った。

「どこ行ってたんだい、リィン」

バーツがとろんとした目をリィンに向ける。

「ちょっと、風に当たりに…」

もう恐ろしくてラディスの席に目を向けられなくなってしまった。明日にはベイルナグルを発つ。だからネルティエは泣いてたんだ…これからはすぐに会えなくなるから…。く、苦しい…胸がつかえる。

「ああリィン！僕は悲しいっ！」

突然背後からがばりと抱きつかれた。驚いて後ろを振り返ろうとすると、エンポリオが強引に頬ずりをしてくる。彼は真っ赤な顔をして、完全に酔っ払っていた。

「ちょっ、ちょっとちょっと！何だよっ！」

「リィン、僕はやっぱり君の事を諦めきれないよ…ああ、寂しいっ」

「エ、エンポリオっ！分かったから離れろよ」

バーツや周りの皆が、怪訝な表情でリィンとエンポリオを見つめている。

「良い年した男が、それも貴族が、こんなちびすけに言い寄ってるなんて、世も末だな…」

「エンポリオの奴が変態だってのは、本当だったんだな」

「…まあなあ、確かにリィンは男にしとくのがもったいないくらいに可愛い顔してるし…首だって華奢だし…」

小さな沈黙の後、バーツが恐ろしい程真剣な目をして呟いた。

「やっぱりみんなもそう思うか？俺はな…たまあに、自分が変態なんじゃねえかって疑う時がある」

男達が無言で聞き耳を立てる。

「リィンってな、良い匂いがするんだぜ…手も足も女みてえに細っこいし…。それに、その、何だ…ふ、風呂上がりなんて特にだな、い、色っぽいというか…」

「リィン！キスさせて！」

「だああ！エンポリオ！やめろって！！」

バーツが勢いよく立ち上がり、椅子が転げるのにも構わずにリィンとエンポリオに向かって突進してゆく。

「くそう！俺も一回だけ！」

「お、俺も！キスだけならセーフだよなっ」

「最後の思い出にっ！」

男達が次々とリィンに覆いかぶさっていき、一拍置いて全員がどしんと尻もちをついた。ゆらりと立ち上がったリィンの瞳は深紅に揺れている。

「…この酔っ払い！僕に近づいたら『力』で吹っ飛ばすぞ！」

肩で息をしながら皆を睨みつけるが、酔っ払い達はへらりと笑って聞いちゃいない。

「リィンのいじわる！キスくらい良いじゃないかあ」

しくしくと泣いているエンポリオを引きずって椅子に座らせ、自分も隣の席に腰をかけてため息をつく。そこで刺すような視線を感じて反射的に背後を振り返った。三つ先のテーブル席に座っているラディスと、まともに目が合う。どくん、と心臓が鳴った。彼の隣にネルティエはいない。まだ戻って来ていないのだろうか…。

リィンが考え込んでいる間も、ラディスはずっとリィンを睨むように見つめている。二人の間には距離もあり人も行き来しているのに、ラディスの視線はぶれる事なく、リィンに注がれている。

リィンは徐々に全身の血液が顔に集中してゆくのを感じ、訳が分からず俯いた。

な、何だよ…。

さっき見てしまったのがばれてるんだろうか…。それで怒ってるとか？でも何で。

いや、だから何だって言うんだ…。どうして僕が怒られなきゃならないんだ。だったらもっと、人目につかないところでやって欲しい。

そうだ、僕は何にも悪い事はしてないじゃないか。
…腹が立つ。

リィンは敢然と顔を上げて、ぎろりとラディスを睨み返した。彼は一瞬だけ目を大きくしたが、すぐに青い瞳を細めてじっとリィンを見つめてくる。

…負けるもんか。

まるで野生の猫のように、意を決した睨み合いが続く。息を詰めて、ラディスの整った顔に穴を開けてやろうという勢いで、睨みつける。相手も同じく、一心不乱にこちらを睨んでいる。そのうちにだんだんと周囲の雑音が消えてゆき、視界を横切る人の影さえ見えなくなっていった。しんと辺りが静まって、自分の心臓の音だけが鮮明に耳に届く。この場にラディスと自分だけがいるような錯覚を覚え、彼がすぐ傍にいるような不思議な感覚がリィンを襲った。途端に動悸が早まり、呼吸が浅くなる。

何か、まずい…。もう駄目だ。

そう思った時、一拍早くラディスが視線を逸らした。すっと横を向いて、話しかけてきた女性に笑顔で答えている。リィンは大きく息を吐き出して肩の力を抜いた。そのままぐったりと椅子の背もたれに身を預け、俯く。
勝った…？

赤面しているのが自分でも分かる。嫌なくらいに心臓が高鳴って、何だかくらくらする。睨み合いに負けて先に視線を逸らしたのはラディスのはずなのに、自分の方が動揺していた。彼は既に普段と変わらずに人と会話をしているのだ。

リィンはひどく疲れた気持ちになって、ゆっくりと席を立った。酔いの進んだ宴会の中では、もう皆が好き勝手に盛り上がっているので誰が途中で抜けても分からない。
もう帰ろう…。なるべく気付かれないように気配を殺して酒場の扉を開き、外へ出た。

月を見上げてしばしぼんやりとする。息が震える。何だか泣きそうだ…。

「どこに行くんだ」

どきりとする。ラディスの声だ。振り返れない。

「…もう帰るよ」

「もう夜更けだ。一人じゃ危ない」

「何が！僕は男で、怪力だから！誰が襲って来たりするもんか！」

くすりと笑い声。むっとするリィン。

「随分ひねてる」

「ひ、ひねてないッ！」

「リィン。こっちを向け」

「いやだっ！もう放っといてよ！」

どうして僕に構うんだよ。どうしてそんな風に僕を見るんだよ…。

胸が苦しい。

リィンが彼に構わずに歩き出そうとした時、背後で小さな呻き声がした。はっとして振り返る。ラディスが右腕を押さえ、酒場の壁に寄りかかるようにしてずるずるとその場にしゃがみ込んでゆく。

「ラディス！」

彼の腕は確かにゆっくりとなら動くようにはなった。しかしまだまだ油断は禁物なのだ。リィンは急いでラディスの元へ駆け寄ってひざまづいた。次の瞬間、リィンの腕をがしりと彼の左手が掴む。え、と思った時には既に遅い。すぐ傍にあるラディスの顔が意地悪な笑みを作っていた。

「ちょろいな」

「だ、騙したッ」

ラディスの両腕が逃げようとするリィンの背を包み、そのまま抱き込められてしまった。リィンは彼の右腕が心配で、無理矢理にその腕を解く事も出来ずに俯いた。彼の優しい匂いに包まれる。涙が出そうになるのを必死にこらえて、言った。

「あんたなんか、嫌いだっ」

ラディスがくくく、と笑う。

「そうか？俺の事が好きでたまらない、の間違いだろう？」

リィンは耳まで真っ赤にして叫ぶように声を上げた。

「う…うぬぼれ屋！自意識過剰っ！！」

彼は笑ってリィンを優しく抱き締める。その温もりにけばだった心がやんわりと包まれてゆく。リィンはラディスの胸に額を押しつけて目を閉じた。

「…僕、何かの病気だ、きっと」

「何だそれは」

「だって…ラディスの事考えてると胸がつかえて苦しい。呼吸困難になる」

「…人はそれを、恋の病という」

リィンを抱いている腕にまた力がこもり、二人の身体がきゅうと重なった。リィンは彼の服をぎゅっと掴んで頬を寄せる。

「ラディスが何考えてるか、ちっとも分かんない…」

いつも冷静で全てを見透かしているようで、自分ばかりが右往左往している気がしてならない。こうして傍にいると安心出来るのに、またすぐに不安になる。自分を振り回す彼に腹を立てるのに怒れない。すぐに許してしまう。何だか不公平だ…。

「…リィン、俺は…」

がしゃん、と何かが割れる音が響いた。わあわあと声がして酒場が騒がしい。どたどたと複数の足音が鳴って、誰かが大声でラディス

の名を叫んだ。リィンは何事かとじっと酒場の扉を見つめる。その扉が勢い良く開いてウィリアムが飛び出して来た。

「こんな所にいた！ラディス、今すぐ逃げろっ」

「どうしたの」

リィンが素早く立ち上がってウィリアムに詰め寄る。

「ど、どうしたもこうしたもねえよ！あの歌姫を、ネルティエを振る奴があるか！ラディス、グレイアが本気で怒ってるぞ！」

「え…」

「ラディス！どこだいっ！？あたしの歌姫を泣かせた償いは命で払ってもらうよっ！」

グレイアの大声が響き、ウィリアムはうひゃあ、と肩をすくめる。

「じゃあな、ウィリアム。元気でやれよ」

ラディスは呆然と立ち尽くすリィンを左腕で素早く抱きかかえて、走り出した。その背後から陽気なウィリアムの声。

「じゃあなぁー！さっさと帝都を離れろよぉ！シーカーに殺されっぞお！」

099：≪番外編≫紡ぎ出す、運命

「まだ少し…早かったか」

ラディスは息を切らし、抱えているリィンごとベッドに倒れ込んだ。

「だから自分で歩くって言ったのに。あんた、まだ完全に良くなってないんだからさ…」

リィンは呆れてため息をつく。彼はあの酒場からリィンを抱えてこの診療所へと歩いて帰った。何度も下ろしてくれと言ったのに結局聞いてもらえず、ラディスは意地になって自分を抱えているみたいだった。そんな彼は、いつも冷静で飄々としている彼らしくない。どこか子供じみている。

「変なラディス」

寝そべったまま寝室の天井に向かって小さく呟いた。隣にいるラディスはうつ伏せで、顔だけをリィンに向けてふん、と鼻を鳴らす。

「そう言うな。大事な女も抱えられないんじゃ、情けないだろう」

どきりとする。リィンは複雑な心境になり無言で身体を起こした。またずきりと胸が痛む。

ネルティエのあの涙は、ラディスを想う心そのものだ。

「リィン。余計な事を考えるんじゃないぞ」

「余計じゃ、ないよ…」

確かに自分にはどうする事も出来ない問題だ。しかし考えずにはいられない。
人が人を愛おしいと思う事は素敵だ。だけどそれがいつだって通じ合うとは限らない…。

リィンは俯いて、はあ、と息を吐き出した。

僕はいつの間に、こんなに我がままになってしまったんだろうか。
以前の自分ならば、ラディスの傍にいられるだけで良いと思っていた。彼が自分以外の誰かを好きでいても護衛として傍にいられるなら、それだけで満足出来た。たくさんの事を求めてはいけないと思っていたし、それは贅沢な事だと思っていた。それなのに。
僕はどんどん欲深になって、傲慢になって、嫌な奴になっていく…。

ラディスに触れるのは僕だけであって欲しい。ラディスが触れるのは、僕だけであって欲しい。
僕を、好きでいて欲しい。僕がラディスを求めるように、同じように…。
ラディスの心が、全てが、僕のものであって欲しい。

はっとした。ラディスの右腕がリィンの方へ僅かに揺れながら近づいてくる。
ラディスは右腕を動かす為に全神経を集中させ、真剣な表情をリィンに向けていた。リィンはじっと息を詰めて、懸命に腕を操ろうとする彼を見守る。その長い指先が、髪に触れた。ゆっくりと柔らかく、大切そうにリィンの髪を梳き、そのまま頬へと伝って優しく撫でられる。
リィンの胸にじわりと愛おしさが広がってゆく。

彼の右手はリィンの肩の上で止まった。ラディスが深く息を吐き出して笑う。

「参ったな。まだこれくらいしか動かん」

「ラディス…」

青い瞳がじっとリィンを見つめている。静かな青い海に沈む黄金色の琥珀。眼鏡も眼帯もしていない左目は、少しだけ紫色をしていて、それがまた綺麗な宝石みたいだ。その瞳がおさまっている美しい顔に見入ってしまう。前から思っていた。ラディスの瞳はあのルキリア皇族と同じ≪黄金の青い目≫なのに、不思議と嫌悪感を感じない。綺麗だ、と思う。ずっと見ていたい。

「リィン。俺はお前が好きだ。…口に出して言うのを、今まで抑えていた。あまり言うと歯止めがきかなくなるから」

ベッドの上に座って見つめ合う二人を、ランプの灯が温かく照らしている。

「お前が好きだよ。その栗色の髪も紅い瞳も、大好きだ。頑固で正義感溢れる性格も、自分の事を僕、という口調もたまらない」

リィンの顔がほのかに赤く染まる。それを眺めてラディスは微笑んだ。

「…柔らかい唇も透き通るような白い肌も、細い手足も。…お前は気に入っていないようだが、小ぶりな胸も俺は好きだ。お前の全てが愛おしい」

驚くような事を呟きながら、ラディスがリィンの方へと近づいてくる。リィンは落ち着かない気分で、じりりと後ずさった。

「あ、あんた、何か変だよ…。ほんとにラディス？」

壁際に追い詰められたリィンはおそるおそる彼を見上げる。彫像のような綺麗な顔がゆっくりと迫り、リィンの耳元に唇を寄せて、また囁く。

「本当は、ずっと言いたかった。リィン。お前が好きでたまらない…」

彼の息が耳にかかり、小さく震えてぎゅっと目をつぶった。

「お前の歌声が好きだ。お前の子守唄を聞いていると、疲れが消し飛んでゆくようだった。その声が、掠れるように喘ぐのも好きなんだ。声にならない吐息も良い。だからたまにいじめたくなる。それに…」

「ラディス！もう良いよっ！分かったから…」

リィンが顔を赤くして俯いたまま声を上げた。恥ずかしくてどうにかなってしまいそうだった。
これは一体どういう事だ…。

「あ、あのさ…。酔っ払ってる？」

あまりの豹変ぶりに、そう聞かずにはいられなかった。彼からミントハーブの優しい香りがする。いつもはその匂いに心から安心するのに、どうしてだか心が落ち着かない。どくどくとうるさいくらい

に心臓が高鳴って、自然と呼吸が浅くなってしまう。

「酔ってない」

「…じゃあ、頭でも打った?」

「打ってない。…リィン」

ラディスの指がリィンの顎にかかり、顔を持ち上げられる。すぐ目の前に彼の整った顔が迫る。

「俺は正気だ。少しタガが外れかかっているだけだ」

呆然とするリィンに彼は優しくキスをした。触れ合うだけのキスにも身体が反応してしまう。リィンは恥ずかしさに気を失ってしまいそうになり、目を閉じた。

ああ、くらくらする…。

ラディスの舌がリィンの唇をゆっくりとなぞり、柔らかく噛みつかれ、薄く開いた間からするりと侵入する。

深く口付けられ、リィンは小さく身じろいでラディスの服を掴んだ。

熱い。

一気に理性がぐらつくような、絡みついてリィンを逃さず、全てを奪ってゆこうとするような、濃厚なキスだった。リィンが身を引いて逃げようとすると、一層強く求められ角度を変えて口付けられる。

「…う…ンッ」

息が思うように出来ず彼の胸をばしばしと叩いて抵抗した。やっと

唇が離れ、リィンは肩で息をしながら目の前のラディスを精いっぱい睨みつける。

「…な、何すんだよっ」

「ああ…その目だ…。酒場でお前に殺されるかと思ったぞ。あの場で押し倒してめちゃくちゃにしてやりたかった」

「なっ…」

真っ赤な顔でわなわなと震えているリィンに構わずに、ラディスの指がリィンの服のボタンを外してゆく。

「ちょっ…ラディス？あ、あの…明日も早いし、ねえ…」

何だか今日のラディスは変だ。自分も、変だ。異様に反応してしまう。さっきから背中がぞくぞくとして落ち着かない。少し、怖い。

「俺は牢獄の中で考えていたんだ。もし死なずに生きてここを出る事が出来たら、もうなりふり構わずにお前を食らおうと、心に固く誓いを立てた」

言葉を失うリィンに、彼は色気を含んだ笑みを向けた。

…ちょっと待ってよ。何をそんな勝手な事…。僕の、意思は？

「やっと問題が全て片付いた。帝都の基盤は盤石だしチェムカも戻った。万々歳だ。…そうだろう？」

青い瞳がリィンを射抜く。その瞳に宿る艶やかな光にぞくりと背筋

が粟立った。

「もう逃がさない」彼の目が、そう言っている。
強く熱い視線に貫かれて呼吸をするのさえおぼつかない。

僕は…何かとんでもない勘違いをしていたのかも知れない…。

慌ててラディスの身体を押し返そうとするが、どういうわけか思うように力が入らない。そのまま強引に口付けらる。激しくて熱のこもったキスに意識が溶かされ、身体が痺れてゆく。

「…あっ…ラディ、ス。ま、待って…」

「やっと、お前を抱ける…」

彼の耳を疑うような言葉に、リィンは目を見開いた。

「な、に言って…今までだってさんざん…」

その間にも彼の指先がリィンの肌の上を伝ってゆく。ラディスが端正な眉を寄せて切ない表情でリィンを見つめ、ため息をこぼした。

「リィン…。俺の本気はあんなもんじゃない」

何の事だよ！
そう叫びたかったのに、口からは弱々しく震える息しか吐き出されなかった。
ラディスはリィンの細い首筋に噛みつくようなキスをして、抵抗するリィンをベッドの上へと押し倒した。その行為は乱暴なのに、指先はこれ以上にない程に優しく、リィンの身体を愛おしそうに愛撫

する。
リィンは耳や首元まで真っ赤にして、やけくそになりながら叫んだ。
「このっ…ケダモノッ」
ラディスがリィンの耳朶に柔らかく噛みついて、囁く。
「ああ…そうだ」
熱さに耐え切れずリィンは震えて吐息をこぼした。その口を塞ぐようにまた口付けられ、翻弄される。
「…ん…っ」
ラディスの指先が、唇が、その声が、リィンの心を高ぶらせてゆく。
これ程あからさまに、激しく求められた事は今までなかったように思う。
彼は全身で、リィンが欲しいと叫んでいる。
リィンは浅く息を継いで、涙目で訴えた。
「だ、だめ…待って…」
「リィン…駄目だ。もう待てない…」
真っ白になってゆく思考。もう何も考えられない。
リィンは最後に思った。
ラディスって、こんな奴だったの…。

◇◇◇◆

翌朝、リィンとラディスはベイルナグルの人々に盛大に見送られ、レーヌ国に向けて出発した。
ニコルやチェムカが泣きながら大きく手を振ってくれた光景が、リィンの胸に大事な思い出として刻まれた。
新たな物語の始まり。遠大なる旅の始まり。
これから先の事を考えようとしても、未知のものが多すぎて考えがまとまらない。たくさん危険な目に遭うかもしれないし、命がけの仕事になるだろう事は簡単に想像がつく。それにラディスに恨みを持つ者達だって、残念ながらいなくなった訳ではないのだ。ルーベンとその信者達は既にルキリア国の帝都から離れていたが、今後も命を狙ってくる可能性がないわけではない。不安な要素は考え出したらきりがない。
けれど世界を旅するという事に、胸が高なるのも事実。その先で出会う人達は一体どんな人物なのだろうか。どんな風景が待っているのだろうか。同じイリアス族の人々にもきっとどこかで出会えるはずだ。そして以前と違うのは、自分には帰る場所があるという事。ちゃんと手紙を書いてね、と何度もニコルとチェムカに念を押された。クレイとソアの結婚式には帰って来れるようにしたいと思う。
期待と不安とで弾けそうな胸を押さえて、リィンは力強く馬を駆る。
すぐ目の前にはラディスがいる。

自分にとってのたった一つが揺るがずにいればそれで良い。

ラディスは僕が護る。
僕の『力』は、その為にあるんだ。

【番外編・完】

【紅い月　青の太陽・完】

０９９：≪番外編≫紡ぎ出す、運命（後書き）

紅い月　青の太陽をご覧いただき、ありがとうございました。
この物語はこれで完結します。

最後の最後で彼の本性を垣間見る。

信念を持って生きるというのは、自らに制約と制限を課して生きる事に他ならないと思います。
彼は今後、リィンを溺愛する事でしょう。色んな意味で（笑）

これから二人の物語は第二幕へ。
レーヌの女帝を上司に据えて、世直し行脚の旅へ。舞台は世界。
帝都に残った人々の戦いも続いてゆく事でしょう。

最後に、ここまでお付き合いくださった方々に最大の敬意と感謝を。

一人一人を思い切り抱き締めて回りたいくらいです。

あ、やめてくれ…。ですよね。

一言でも感想落として行ってくださいませぬか。最後のお願い。

【人物紹介・設定資料】

※注釈：ものすごくテキトーな人物紹介・設定資料になっております。

【紅い月　青の太陽】

リィン
ラディスの護衛。苦労体質。頑固で一度決めたら譲らない。怪力。泣き虫直球型。素直。裏表なし。人懐っこく誰にでもタメ口をきこうとする。相手の性別、年齢にさえあまりこだわらない。

ラディス・ハイゼル
医師。開拓者気質。カリスマ。冷静沈着。飄々。料理音痴。自分勝手の上に他人を大いに巻き込んでも堂々としている、強靭な心臓の持ち主。世の中美形は何かと得です。これが現実。

クレイ
ラディスの弟子。心配性。神経質。一途で素直で真面目。多分、ラディスに騙されたのだと思う。開拓者よりも二代目の方が何かと苦労する。可哀そうな人。

ミッドラウ
運び屋。ラディスの友人。豪快。明るい。強い。本能のまま生きる下半身男。女好き。数ある町ごとに恋人がいる。意外とまめ。

エンポリオ・オールゲイト
貴族。ラディスの友人。ひねくれ者。物腰柔らかで中性的。女たら

し。賢いけど限界まで頑張るやり方が分からずに自堕落に生きてました。そんな人って、世の中に多いと思います。

ソア
クレイの許嫁。冷静でそこらの軟弱な男よりも男らしく、凛々しい。堅苦しい口調が特徴。おそらく女性にも人気があるような人。クラスに一人は、そんな子いましたね。

チェムカ・トルメ
診療所の受付嬢。明るい。あやしげな方言を繰り出す。意外と乙女で年相応。

ニコル
診療所の家事全般をこなす使用人。優しい。近所の気のいいおばさんのイメージ。世話好き、若い子好き。

ロンバート・レニツィ
ルキリア国一の大病院の院長。柔和。人の良いきさくなおじさん。愚直。奉仕精神。この人もラディスに騙されたのだと思われる。

シーカー・ラグズウェル
ヤクザ。闇の男。俺様。冷徹怜悧。頭脳明晰。本当はやさぐれ者でさびしがり屋、情熱家らしい。甘党。

ウィリアム
シーカーの部下。ひねくれ者で素直、面倒な性格をしている。平気で人を殺します。賢い。

ネルティエ
盲目の歌姫。負けず嫌いで芯が強い。女の子らしい優しい性格だが、

時折無鉄砲。

グレイア
ネルティエの護衛。ナイスバディの妖艶なお姉さん。野獣。本命はネルティエ。ええ、彼女は両刀です。

アルスレイン王子
ルキリア国の王子。ルキリア帝国軍元帥。苦労性。好青年。自信家。潔癖なところがある。正義という言葉が三度の飯より大好き。人民に尽くしたがっている。

エリナ王女
ルキリア国の王女。勝気。生意気。ザイナス国の大富豪の息子と婚姻予定。顔合わせではまずまずだったよう。男性としてのリィンにほのかに恋心を抱く。最初はラディスでした。美形好き。

フェーマス・モルスディック
貴族。ロンバートの友人。切れ者。意外と熱血漢。仕事しすぎで妻と離婚、娘が一人、たまに面会する程度。哀愁漂う親父。

ジェイク・ハイゼル
ラディスの養父。貿易商を営む。商才に富む。とても優しいおじさま。ラディスとティルガのせいで苦労するのに嫌味一つ言わない良い人。

ユマ・ハイゼル
ジェイクの一人娘。ジェイクと妻エルダとの子。聡明で物腰柔らかな素敵レディ。心臓が弱いが気は強い。

ワドレット

ユマの婚約者。製薬会社の責任者。牧歌的眼鏡顔で気弱なイメージ。尻に敷かれるタイプ。

シャウナルーズ・ルメンディアナ
レーヌ国女王陛下。美女。卓越した先見性と指導力。いかにも王様なイメージと慈愛の女神のイメージを併せ持つ。聡明で見目麗しい若者を侍るのが趣味。

ティルガ
リィンの父。医師。イリアス族の奴隷解放に命を捧げた青年。ラディスの名付け親。反逆の罪を着せられ処刑。

シルヴィ
リィンの母。美しくて強い。イリアス族解放の女神と讃えられる。後に帝国軍によって処刑。

◇◇◇◆

世界。
三つの大国と一つの独立国家から成る。政治は王制。

ルキリア国
ルキリア族が統治する大国。世界一の領土を誇る。建築や商業、全ての流通の中心地。ルキリア皇族の絶対的支配が続く。

レーヌ国
レーヌ族が統治する島国。ルキリア国に属する独立国家。世界一の医学・薬学を誇る。レーヌの大学校は万般の知識を寮制で学ぶ事の出来る一流の公的機関。リリーネ・シルラ信仰の聖地。唯一の女帝が統治する国。人心、物流ともに豊か。

ザイナス国
広大な鉱山地帯を有する大国。商業、流通が盛ん。ルキリア皇族の血縁者が統治。商人の地位が高い。多様な種族が集まっている。

ロガート国
ロガート族が統治する大国。レーヌ国とのみ不可侵協定を結び、商業流通に制限。秘密国家。戦争をしかけて資金を運用。イグルを戦争の兵器にしようと秘密裏に禁忌の研究を進める。

◇◇◆◆

種族。
多様な種族が存在。主要のみ。

イリアス族
百年前にルキリア族によって滅ぼされた種族。十八年前まで奴隷として迫害を受ける。現在は生き残りのみ。少数。高潔なる自由の民。特定の土地を持たず流浪。レーヌ国で生活している者もいる。
赤茶の瞳、白い肌、色素の薄い容姿が特長。争いを好まず物静か。不思議な『力』を持つ。念力に近いイメージ。『力』の発動時は深紅の瞳に変化。その中でも特殊な『命の力』を扱えるのは現在リィン只一人。

ルキリア族
世界一の権力を有する。選民意識が強い。青い瞳と金色の髪が特長。ルキリア皇族とルキリア貴族に分かれる。
ルキリア皇族の正統な血族の証≪黄金の青い目≫青い瞳の中心、瞳孔部分が黄金色。

レーヌ族
思慮深く聡明。多才な素質、才能を持つ人物が多い。緑の瞳に黒髪が特長。

アルム族
世界のほとんどがこのアルム族。多様。混血種。

ロガート族
謎の多い種族。少数。長身。銀の瞳に黒髪が特長。好戦的。

◇◆◆◆

イグル
この物語の名脇役。異形の怪物。ゾンビのイメージ。理性なし本能のみ。元はどこにでもいる動物。野犬型、ヒト型等。イグルから傷を受けたり、その血が体内に入ると感染を起こしイグル化する。繁殖能力はなし。感染のみで拡大。肉食。
紫色の血。身体は腐り、脆くなるが腕力、脚力等の力が増大。凶暴。
一番の好物は人間のはらわた。
イグルから傷を受けても三十分以内に特効薬を処方すると解毒され、一命をとりとめる事が出来る。数日間の発熱の後に完治。特効薬には服用と注射がある。
作中では意外とあっけなくリィンやラディスにやられていますが、一般人なら太刀打ち出来ません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0940i/

紅い月　青の太陽

2011年3月15日18時32分発行